

美沢川流域の遺跡群 XV

——新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

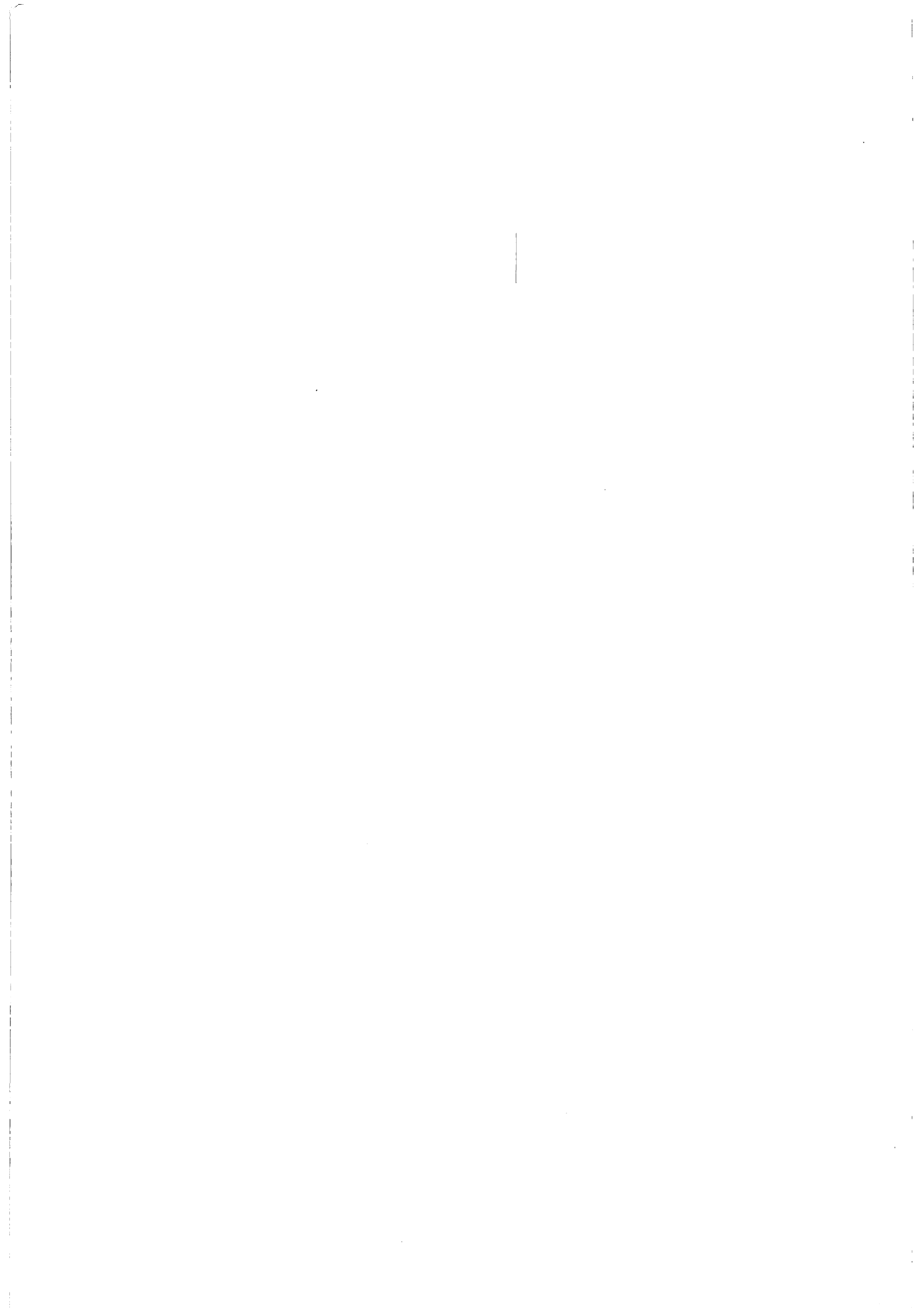
第1分冊

美々 3 遺跡

美々 7 遺跡

美々 8 遺跡

平成2・3年度



美沢川流域の遺跡群 XV

——新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

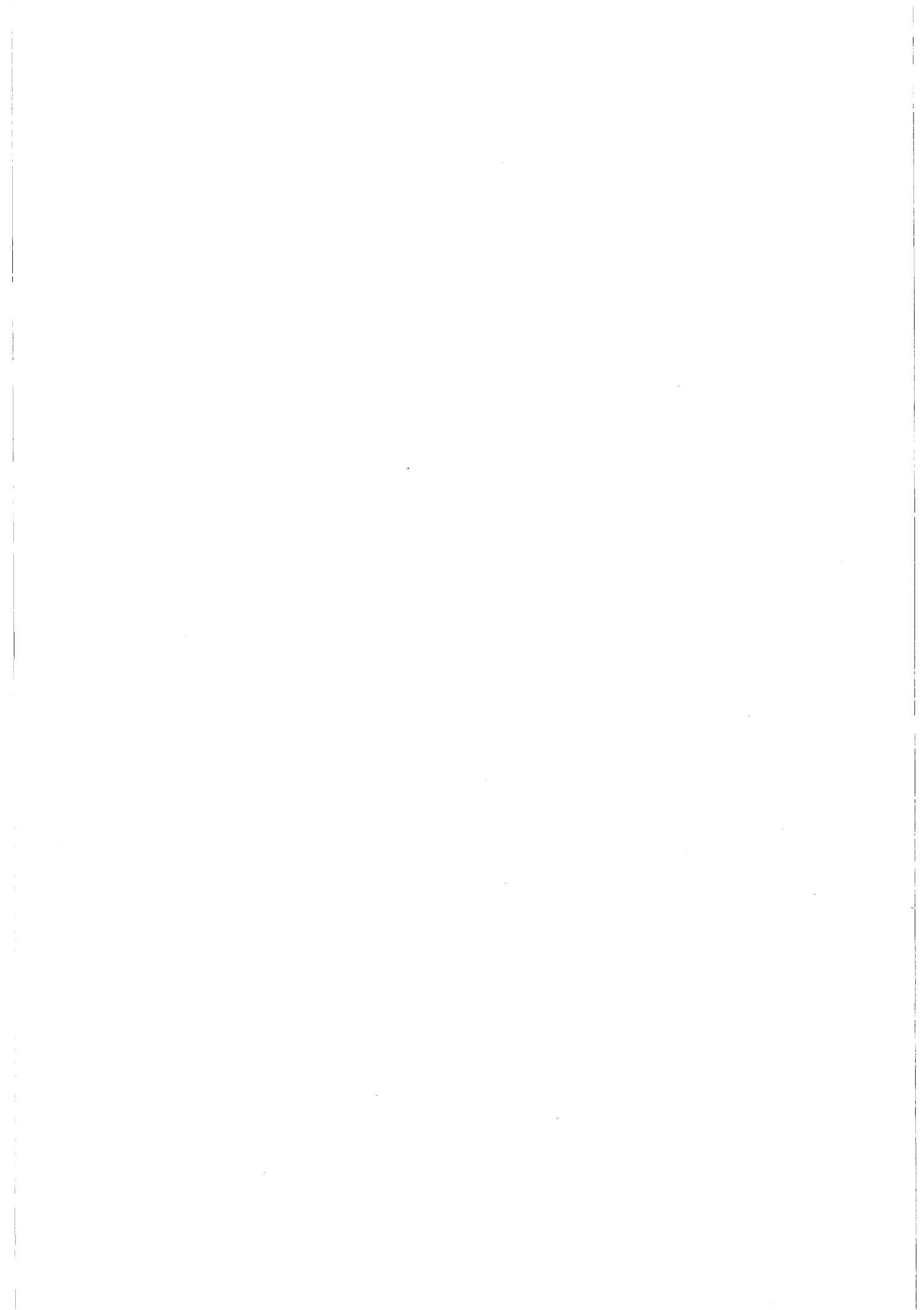
美々 3 遺跡

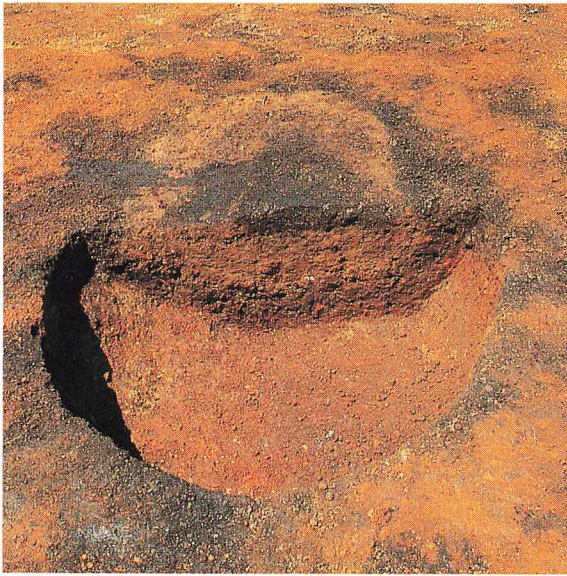
美々 7 遺跡

美々 8 遺跡

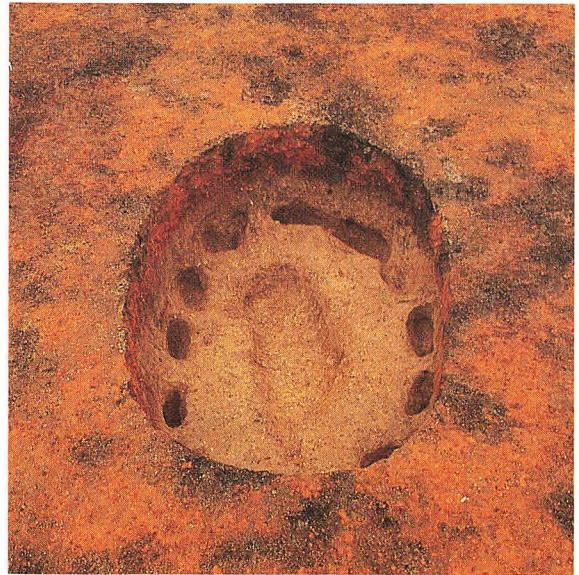
平成 2・3 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





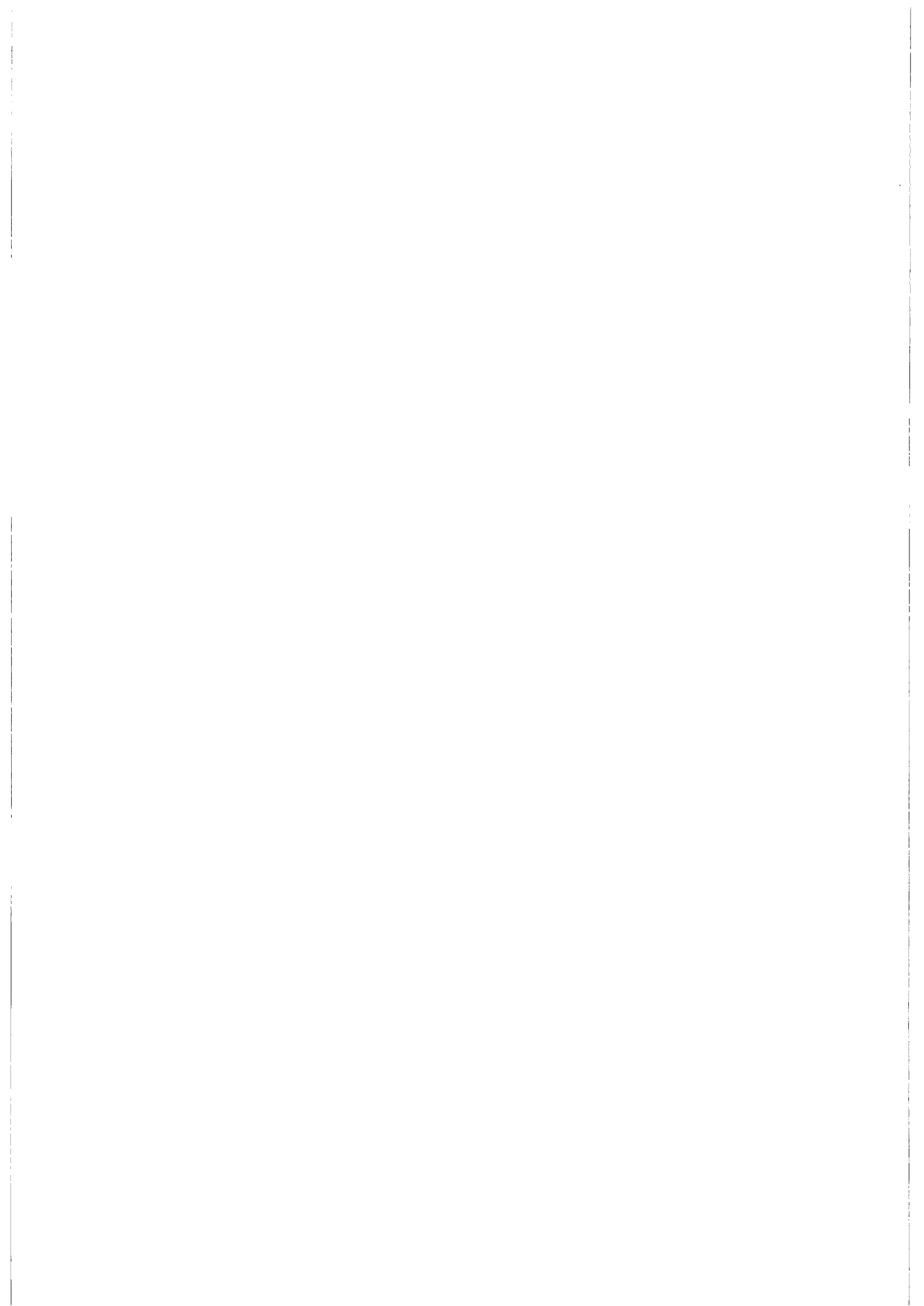
1 美々3遺跡 P-149 セクション E→



2 美々3遺跡 P-149 完掘 E→



3 美々3遺跡 V群b類土器



例 言

1. 本書は、平成2・3年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した新千歳空港建設用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。美々8遺跡低湿部(VI章)については分冊とした。
2. 調査は、平成2年度は調査第2課が、平成3年度は調査第3課が担当した。
3. 本書の作成は、I章：西田茂、II章：工藤研治・皆川洋一・村田大、III章：工藤研治・鈴木信、IV章：西田茂・葛西智義・皆川洋一、V章：西田茂・鈴木信・皆川洋一・村田大、VI章：田口尚・鈴木信・田才雅彦が担当し、全体の編集は千葉英一・西田茂があたった。
4. 屋外での遺構等の写真撮影は、調査員のほかに伊野正之・菊池慈人がおこなった。室内における遺物の写真撮影は、菊池慈人がおこなった。
5. X線透過写真撮影は、北海道工業試験所の相山英明氏の指導のもと田口尚が行なった。
6. 測定、同定、分析等は、つぎの方々に依頼した。

¹⁴C年代：日本大学 小元久仁夫氏(平成2年度)、京都産業大学 山田 治氏(平成3年度)

黒曜石産地・水和層：帯広畜産大学 近藤祐弘氏

動物遺存体：早稲田大学教育学部 金子浩昌氏

人骨：札幌医科大学 百々幸雄氏、大島直行氏

樹種：農林水産省森林総合研究所 平川泰彦氏

金属製品：岩手県立博物館 赤沼英男氏

発火道具：北海道教育大学釧路分校 高嶋幸男氏

7. 石器等の石材鑑定は、調査第2課花岡正光がおこなった。
8. 室内整理作業終了後の出土遺物、諸記録類は、北海道教育委員会が保管する。
9. 調査にあたっては、つぎの機関、人々のご指導、ご協力をいただいた。

文化庁、北海道教育委員会、千歳市教育委員会、札幌市埋蔵文化財センター、奈良国立文化財研究所沢田正昭・肥塚隆保・村上 隆、北海道開拓記念館野村 崇・平川善祥・山田悟郎・小林幸雄・出利葉浩司・手塚 薫、千歳市大谷敏三、千歳市教育委員会田村俊之・高橋 理・豊田宏良、苫小牧市埋蔵文化財センター佐藤一夫・工藤 肇・宮夫靖夫・渡辺俊一・二階堂啓也・赤石慎三・兵藤千秋、恵庭市教育委員会上屋真一・松谷純一・佐藤幾子、札幌市埋蔵文化財センター加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久、北海道文化財研究所小柳リラコ、江別市郷土資料館高橋正勝・直井孝一・園部真幸・野中一宏・稲垣和幸、石狩市教育委員会石橋孝夫・工藤義衛、小樽市教育委員会大島秀俊、小樽市博物館土屋周三・石神 敏、函館市北方民族資料館長谷部一弘・児玉まり、松前町教育委員会久保 泰、上ノ国町教育委員会松崎水穂・斎藤邦典、八雲町教育委員会三浦孝一・柴田信一、門別町教育委員会川内谷修、静内町教育委員会古原敏弘、アイヌ民族博物館豊原熙司・藪中剛司、北海道立北方民族博物館青柳文吉、常呂町教育委員会武田 修、斜里町教育委員会金盛典夫・村田良介・松田 功、標津町教育委員会梶田光明、釧路市立博物館澤 四郎・西 幸隆・松田 猛・石川 朗、青森県教育委員会三宅徹也、青森県立郷土館福田友之、青森県埋蔵文化財調査センター三浦圭介・成田滋彦、野辺地町立歴史民俗資料館駒井知広、八戸市教育委員会小笠原善範、八戸市博物館大野 亨、東北福祉大学芹沢長介、北海道大学吉崎昌一、札幌医科大学石田 肇、早稲田大学菊池徹夫、国立民族学博物館大塚和義、国学院大学小林達雄、天理参考館近江昌司、帯広畜産大学辻秀子、佐々木史朗、岡田路明・萱野志朗・横山英介。

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用い、原則として発掘調査順に番号を付した。

H：住居跡および類似遺構。P：土壙(土墳墓を含む)。F：焼土。TP：Tピット。S：集石。

HP：住居跡に伴う小ピット。HF：住居跡に伴う石組炉、土器囲い炉および地床炉。SP：小ピット。美々8遺跡の0黒層、I黒層、II黒層の遺構の番号呼称にあたっては、それぞれに「0道跡-」「I F-」「I S-」「II P-」などのように検出層を頭記して区別してある。

2. 発掘区方眼の南北線は、西に7度22分38秒偏している。遺構図については、すべての図版に、それぞれ方位・縮尺を示してある。
3. 遺構図の数値は、標高(単位 m)である。
4. 遺構の規模は、『確認面での長軸長/床(底)面での長軸長×確認面での短軸長/床(底)面での短軸長×確認面からの最大深さ(単位 m)』の順で記した。なお一部破壊されているものは現在長を()で示し、不明のものは—を記入している。
5. 石器・石製品、木製品等の大きさについては最大長、最大幅、最大厚の順で記す。
6. 遺物の縮尺は、土器：1/4、土器拓影・礫石器：1/2 または 1/3 または 1/4、剥片石器・土製品・石製品：1/2、木製品：1/3 または 1/5、である。
7. 樹木の種名は、すべて属名で記してある。
8. 砂岩質砥石の粒径区分については、Wentworth 式で記す。
9. 土層名は、下記の略号、略称も併用している。

樽前a降下軽石層：Ta-a層(a)

第0黒色土層：0黒層(0黒または0B)

樽前b降下軽石層：Ta-b層(b)

第I黒色土層：I黒層(I黒またはIB)

有珠山b₁火山灰：Us-b₁層

第II黒色土層：II黒層(II黒またはIIB)

苫小牧火山灰：TM

第III黒色土層：III黒層(III黒またはIIIB)

樽前c₁降下軽石層：Ta-c₁層(c₁)

恵庭aローム層：En-aローム層(En-L)

樽前c₂降下岩片層：Ta-c₂層(c₂)

恵庭a降下軽石層：En-a層(En-P)

樽前d₁降下岩片層：Ta-d₁層(d₁)

支笏軽石流堆積物：Spfl層

樽前d₂降下スコリア層：Ta-d₂層(d₂、粒の明確なスコリアはd₂S・ローム状のスコリアはd₂L)

*火山灰の土層名・略号は、曾屋・佐藤(1980)、北海道火山灰命名委員会(1982)、横山ほか(1973)による。()内はそれをさらに簡略化したものである。

10. 土層の混在状態は、上記の略号などを用いて下記のように表してある。

A+B：AとBはほぼ同量まじる。

A>B：AにBが少量まじる。

A》B：AにBが微量まじる。

11. 土層の色調説明は、『新版標準土色帖』(1988年版)を用いたところもある。

目 次

口絵 (カラー写真)	
例言	
記号などの説明	
I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
4 遺跡の立地と遺物包含層	3
5 調査結果の概要	4
6 遺物の分類	6
II 美々3遺跡第II黒色土層の調査 (平成3年度)	9
1 調査の概要	9
2 縄文時代中・後期の遺構とその遺物	12
(1) 住居跡	12
(2) フラスコ状ピット	20
(3) 土壌	20
(4) Tピット	23
3 縄文時代晩期の遺構とその遺物	24
(1) 住居跡	24
(2) 土墳墓	27
(3) 土壌	28
(4) 土壌出土の遺物	31
(5) 焼土	32
(6) 焼土出土の遺物	38
(7) 動物の足跡	38
4 第I黒色土層から掘り込まれた遺構	39
(1) 土墳墓	39
(2) 土壌	40
5 第II黒色土層出土の遺物	43
(1) 土器	43
(2) 石器等	60
6 まとめ	65
(1) 遺構	65
(2) 土器	66
7 美々3遺跡出土の脊椎動物遺体 金子 浩昌	73
III 美々3遺跡第II黒色土層の調査 (平成2年度)	77
1 第II黒色土層出土の遺物	77
(1) 土器	77
(2) 石器等	77
2 成果と問題点	117
(1) 美々3遺跡における盛土の形成と時期について	117
(2) 遺構について	125
(3) 遺物について	130
IV 美々7遺跡の調査	136

1	調査の概要	136
2	表土層及び第I黒色土層の調査	138
	(1) 表土層の遺構とその遺物	138
	(2) 表土層出土の遺物	143
	(3) Ta-b層の遺構とその遺物	143
	(4) I黒層出土の遺物	144
3	第II黒色土層の遺構とその遺物	148
	(1) 住居跡	148
	(2) 土壙群	152
	(3) 土壙	164
	(4) 自然営力の可能性のある土壙	166
	(5) Tピット	168
	(6) 動物の足跡など	170
4	第II黒色土層出土の遺物	171
	(1) 土器	171
	(2) 石器	180
5	まとめ	197
	(1) アイヌ文化期の墓壇	197
	(2) I黒層出土の土器	197
	(3) II黒層の遺物分布	198
	(4) 縄文時代早期の美々7遺跡	200
V	美々8遺跡の調査	205
1	調査の概要	205
2	表土層の遺構とその遺物	206
	(1) 焼土	206
	(2) 道跡	208
	(3) 溝跡	211
	(4) 土壙	214
3	表土層出土の遺物	214
4	第0・I黒色土層の遺構とその遺物	214
	(1) 建物跡	215
	(2) 焼土	217
	(3) 集石・双礫	217
	(4) 道跡	217
	(5) アイヌ文化期の墓壇	220
5	第0・I黒色土層出土の遺物	227
	(1) 擦文土器集中	227
	(2) 土器・土製品	231
	(3) 石器・石製品・礫	234
	(4) 金属製品	240
	(5) 動物遺存体	240
	(6) ¹⁴ C年代測定結果について	240
6	第II黒色土層の調査	241
	(1) 概要	241
	(2) II黒層の遺構とその遺物	243
	(3) II黒層出土の遺物	266
	(4) 黒曜石製スクレパーの自然科学的手法による分析	281
	(5) まとめ	282
付	千歳市美々3遺跡出土人骨	287
	百々 幸雄・大島 直行	287
	写真図版	289
	II 美々3遺跡第II黒色土層の調査(平成3年度)	291
	III 美々3遺跡第II黒色土層の調査(平成2年度)	316
	IV 美々7遺跡の調査	318
	V 美々8遺跡の調査	352
VI	美々8遺跡低湿部の調査(平成2年)	第2分冊

挿 図 目 次

図 I - 1 遺跡の位置 …………… 2	図 II - 29 P-127 …………… 40
図 I - 2 標準土層模式図 …………… 3	図 II - 30 P-127出土遺物 …………… 41
図 I - 3 美沢川流域の遺跡群の位置と発掘区 の呼称 …………… 5	図 II - 31 土壌と出土遺物 …………… 42
図 I - 4 美沢川流域の遺跡群の分布 … 6	図 II - 32 土器出土分布(点数) …………… 43
図 II - 1 II黒層の発掘調査地区 …………… 9	図 II - 33 遺物出土状況(V群b類土器) …………… 44
図 II - 2 II黒層の遺構位置図 …… 10~11	図 II - 34 包含層出土の土器(1) I群b- 4類、III群b-3類、IV群a類、 IV群b類 …………… 48
図 II - 3 縄文時代中・後期の遺構位置図 …………… 12	図 II - 35 包含層出土の土器(2) V類b類 …………… 49
図 II - 4 H-48と出土遺物 …………… 13	図 II - 36 包含層出土の土器(3) V群b類 …………… 50
図 II - 5 H-53・54と出土遺物 …………… 15	図 II - 37 包含層出土の土器(4) V群b類 …………… 51
図 II - 6 H-49と出土遺物 …………… 16	図 II - 38 包含層出土の土器(5) V群b類 …………… 52
図 II - 7 H-52 …………… 17	図 II - 39 包含層出土の土器(6) V群b類 …………… 53
図 II - 8 H-51 …………… 18	図 II - 40 包含層出土の土器(7) V群b類 …………… 54
図 II - 9 H-51出土遺物 …………… 19	図 II - 41 包含層出土の土器(8) V群b類 …………… 55
図 II - 10 FP-1 …………… 20	図 II - 42 包含層出土の土器(9) V群b類 …………… 56
図 II - 11 P-125 …………… 21	図 II - 43 包含層出土の土器(10) V群b類 …………… 57
図 II - 12 P-130と出土遺物 …………… 21	図 II - 44 包含層出土の土器(11) V群b類 …………… 58
図 II - 13 P-137と出土遺物 …………… 22	図 II - 45 包含層出土の土器(12) V群b類 …………… 59
図 II - 14 P-144 …………… 22	図 II - 46 包含層出土の石器(1) 石鏃・石 槍またはナイフ・つまみ付 ナイフ…………… 62
図 II - 15 TP-2・TP-3 …………… 23	図 II - 47 包含層出土の石器(2) 石錐・ス クレイパー…………… 63
図 II - 16 縄文時代晩期の遺構位置図 … 24	図 II - 48 包含層出土の石器(3) 石斧・た
図 II - 17 H-47と出土遺物 …………… 25	
図 II - 18 H-50 …………… 25	
図 II - 19 H-50出土遺物と遺物出土状況 …………… 26	
図 II - 20 P-149と出土遺物 …………… 27	
図 II - 21 土壌(1) …………… 29	
図 II - 22 土壌(2) …………… 30	
図 II - 23 土壌出土遺物 …………… 31	
図 II - 24 焼土 …………… 33	
図 II - 25 焼土出土動物遺存体重量構成 34	
図 II - 26 焼土群出土遺物 …………… 38	
図 II - 27 動物の足跡 …………… 39	
図 II - 28 I黒層から掘り込まれた 遺構位置図 …………… 39	

	たき石・石皿・砥石・石核……	64	図III-28	盛土の分布	118
図II-49	1. イノシシ右上腕骨体の破片、 2. イノシシ左距骨実測図	74	図III-29	遺物出土分布(1)	120
図III-1	包含層出土の土器 III群b-3類	78	図III-30	遺物出土分布(2)	121
図III-2	剝片石器(1) 石鏃・石槍または ナイフ	79	図III-31	住居跡の変遷(1)	125
図III-3	剝片石器(2) 石槍またはナイフ	80	図III-32	住居跡の変遷(2)	126
図III-4	礫石器(1) 石斧	85	図III-33	焼土・フレーク集中位置図	128
図III-5	礫石器(2) 石斧・石斧未製品	86	図III-34	段階別遺構位置図	130
図III-6	礫石器(3) 石斧未製品	87	図III-35	石斧のグラフ	132
図III-7	礫石器(4) 石斧未製品	88	図III-36	すり石1・2・3出土遺跡	134
図III-8	礫石器(5) 石斧未製品・石斧再 生品	89	図IV-1	美々7遺跡の調査区	137
図III-9	礫石器(6) 石斧未製品の再生 品・石斧転用品・石斧未製品の 転用品	90	図IV-2	表土層及びTa-b層の遺構	139
図III-10	礫石器(7) 石斧等の分布図	91	図IV-3	表土の遺構(1)	140
図III-11	礫石器(8) 石斧未製品分布図 段階別	92	図IV-4	表土の遺構(2)と遺物	141
図III-12	礫石器(9) 石斧フレーク分布図	93	図IV-5	柱穴列	142
図III-13	礫石器(10) 石斧等の接合図	94	図IV-6	P-10と出土遺物	145
図III-14	礫石器(11) たたき石	96	図IV-7	I黒層出土の遺物(1) 石鏃・双 礫・礫	145
図III-15	礫石器(12) たたき石・すり石・ くぼみ石	97	図IV-8	I黒層出土の遺物(2)と出土地点	146
図III-16	礫石器(13) すり石・砥石・台石	98	図IV-9	II黒層の遺構配置	149
図III-17	礫石器(14) たたき石のグラフ	99	図IV-10	H-1と出土遺物	150
図III-18	砥石のグラフ	101	図IV-11	H-2と出土遺物	151
図III-19	礫石器分布図(1)	103	図IV-12	土壌群の遺構配置	152
図III-20	礫石器分布図(2)	104	図IV-13	土壌群と出土遺物(1)	154
図III-21	礫石器接合図(1)	105	図IV-14	土壌群と出土遺物(2)	156
図III-22	礫石器接合図(2)	106	図IV-15	土壌群と出土遺物(3)	157
図III-23	礫グラフ(1)	107	図IV-16	P-37出土足形付土製品	158
図III-24	礫グラフ(2)	108	図IV-17	土壌群と出土遺物(4)	161
図III-25	礫接合図(1)	109	図IV-18	土壌群と出土遺物(5)	162
図III-26	礫接合図(2)	110	図IV-19	土壌と出土遺物(1)	165
図III-27	II黒層上面の地形	118	図IV-20	土壌と出土遺物(2)	167
			図IV-21	Tピットと出土遺物	169
			図IV-22	動物の足跡と炭化物	170
			図IV-23	包含層出土の土器(1) I群b-2~4類	175
			図IV-24	包含層出土の土器(2) I群b-2類	176
			図IV-25	包含層出土の土器(3) I群b-2~4類	177
			図IV-26	包含層出土の土器(4) I群b-4類	178

図IV-27 包含層出土の土器(5) I群b-4類・III群・V群 …… 179	図V-15 0黒層とI黒層上面の遺物分布 …………… 222
図IV-28 包含層出土の石器(1) 石刃鎌・ 石鎌・石槍 …… 184	図V-16 I黒層の遺物分布(上面の遺 物は除く) …… 223
図IV-29 包含層出土の石器(2) 石錐・ つまみ付ナイフ …… 185	図V-17 土器集中-A …… 224
図IV-30 包含層出土の石器(3) つまみ 付ナイフ …… 186	図V-18 土器集中-B …… 224
図IV-31 包含層出土の石器(4) つまみ 付ナイフ・スクレイパー …… 187	図V-19 土器集中-C …… 224
図IV-32 包含層出土の石器(5) スクレ イパー・使用痕、加工痕のある 剥片 …… 188	図V-20 土器・土製品接合図 …… 225
図IV-33 包含層出土の石器(6) 石斧・ たたき石 …… 189	図V-21 土器集中-E …… 227
図IV-34 包含層出土の石器(7) たたき 石・くぼみ石・すり石 …… 190	図V-22 土器集中-D …… 227
図IV-35 包含層出土の石器(8) 砥石・ 台石 …… 191	図V-23 土器集中-F …… 228
図IV-36 包含層出土の石器(9) 加工痕 礫・石核、III黒層の石器、土・ 石製品 …… 192	図V-24 I黒層の土器 …… 229
図IV-37 土器の分布 …… 201	図V-25 I黒層の土器・土製品・ 石器・石製品 …… 230
図IV-38 石刃鎌周辺の遺物、石器の分 布(1) …… 202	図V-26 0黒層・I黒層石器・礫の分布 …………… 233
図IV-39 石器の分布(2) …… 203	図V-27 0・I黒層の金属製品…………… 238
図V-1 表土層の遺構位置図 …… 206	図V-28 地形と遺構分布図 …… 241
図V-2 表土層のF-1・2 …… 207	図V-29 斜面土層断面図 …… 242
図V-3 表土層の道跡-1と溝-1 …… 208	図V-30 IIH-1・2・3・4 …… 244
図V-4 美々8遺跡と札幌本道 …… 209	図V-31 IIH-5 …… 245
図V-5 表土層の道跡-2 …… 210	図V-32 IIH-6 …… 247
図V-6 表土層の土壌 …… 212	図V-33 IIP-1~6・10 …… 249
図V-7 表土層の遺物 …… 213	図V-34 IIP-7~9・11 …… 251
図V-8 0・I黒層の遺構位置図 …… 214	図V-35 美々8遺跡Tピット配列図 …… 253
図V-9 IH-1 …… 215	図V-36 IITP-5・6 …… 257
図V-10 IF-1~10 …… 216	図V-37 IITP-8・9 …… 258
図V-11 IS-1~4 …… 218	図V-38 IITP-15・11・16 …… 259
図V-12 0・I黒層の道跡-1~5 …… 219	図V-39 IITP-10・3・4 …… 260
図V-13 IP-1 …… 220	図V-40 IITP-2・13 …… 261
図V-14 IP-1出土遺物 …… 221	図V-41 IITP-7・14・1 …… 262
	図V-42 IITP-12 …… 263
	図V-43 焼土IIF-1・2・3・4 …… 264
	図V-44 動物の足跡 …… 265
	図V-45 土器(1) I群b-4類 …… 267
	図V-46 土器(2) I群b-3類・I群 b-4類…………… 268
	図V-47 土器(3) I群b-4類 …… 269
	図V-48 土器(4) I群b-4類・IV群c 類 …… 270

図V-49	包含層出土の石器(1) 石刃鏃・ 石鏃類・石槍またはナイフ …	272	図V-54	包含層出土の石器(6) スクレイ パー類・楔形石器・石核・石斧 ……………	277
図V-50	包含層出土の石器(2) 石槍また はナイフ・石錐・つまみ付 ナイフ ……………	273	図V-55	包含層出土の石器(7) たたき 石・すり石・砥石・台石類 …	278
図V-51	包含層出土の石器(3) つまみ付 ナイフ・スクレイパー類 ……	274	図V-56	包含層出土の石器(8) 石錐・ 礫器・石製品……………	279
図V-52	包含層出土の石器(4) スクレイ パー類 ……………	275	図V-57	水和層年代測定試料 ……………	281
図V-53	包含層出土の石器(5) スクレイ パー類・異形石器 ……………	276	図V-58	水和層年代グラフ ……………	281
			図V-59	遺物分布図(1) ……………	283
			図V-60	遺物分布図(2) ……………	284

表 目 次

<p>表 I-1 新千歳空港用地内の埋蔵文化財 包蔵地の調査面積の推移 …… 3</p> <p>表 II-1 土壙一覧 …… 30</p> <p>表 II-2 焼土一覧 …… 34</p> <p>表 II-3 焼土・土壙出土の脊椎動物遺体 …………… 35</p> <p>表 II-4 V群 b 類土器个体数 …… 66</p> <p>表 II-5 包含層出土遺物一覧 …… 67</p> <p>表 II-6 遺構出土遺物一覧 …… 67</p> <p>表 II-7 遺構別出土遺物一覧 …… 68</p> <p>表 II-8 遺構掲載土器一覧 …… 69</p> <p>表 II-9 遺構掲載石器等一覧(1) …… 69</p> <p>表 II-10 遺構掲載石器等一覧(2) …… 69</p> <p>表 II-11 包含層掲載土器一覧(1) …… 70</p> <p>表 II-12 包含層掲載土器一覧(2) …… 70</p> <p>表 II-13 包含層掲載土器一覧(3) …… 70</p> <p>表 II-14 包含層掲載土器一覧(4) …… 71</p> <p>表 II-15 包含層掲載石器一覧 …… 71</p> <p>表 II-16 遺構一覧 …… 72</p> <p>表 III-1 石斧の分類とその基準模式図… 81</p> <p>表 III-2 石斧未製品の分類 …… 82</p> <p>表 III-3 礫接合関係一覧 …… 112</p> <p>表 III-4 掲載遺物一覧 …… 115</p> <p>表 III-5 復元土器一覧 …… 123</p> <p>表 III-6 遺物垂直分布 (1) …… 124</p> <p>表 III-7 遺物垂直分布 (2) …… 124</p> <p>表 III-8 遺物垂直分布 (3) …… 124</p> <p>表 III-9 遺物垂直分布 (4) …… 124</p> <p>表 III-10 遺物垂直分布 (5) …… 124</p> <p>表 III-11 検出面別焼土一覧 …… 128</p> <p>表 III-12 検出別面フレイク集中一覧 … 128</p> <p>表 III-13 すり石 1・2・3 出土遺跡 …… 134</p> <p>表 IV-1 表土層出土遺物一覧 …… 147</p> <p>表 IV-2 遺構出土遺物一覧 …… 147</p> <p>表 IV-3 I 黒層出土遺物一覧 …… 147</p> <p>表 IV-4 遺構出土掲載遺物一覧 …… 147</p> <p>表 IV-5 表土・I 黒層出土掲載遺物一覧</p>	<p>…………… 147</p> <p>表 IV-6 出土遺物一覧 …… 193</p> <p>表 IV-7 遺構出土遺物一覧 …… 193</p> <p>表 IV-8 遺構出土掲載石器一覧(1) …… 193</p> <p>表 IV-8 遺構出土掲載石器一覧(2) …… 194</p> <p>表 IV-9 包含層掲載土器一覧 …… 194</p> <p>表 IV-10 包含層掲載石器一覧(1) …… 195</p> <p>表 IV-10 包含層掲載石器一覧(2) …… 196</p> <p>表 IV-11 東釧路 IV 式土器の取り上げ回数 による文様出現率 …… 204</p> <p>表 IV-12-1(1) 土器・剝片の取り上げ回数 による出土率 (b-66区) …… 204</p> <p>表 IV-12-1(2) 土器・剝片の取り上げ回数 による出土率 (b-67区) …… 204</p> <p>表 IV-12-1(3) 土器・剝片の取り上げ回数 による出土率 (I-67区) …… 204</p> <p>表 IV-13 石器の取り上げ回数による 出土数 …… 204</p> <p>表 V-1 表土層 F-2 炭化材一覧 … 207</p> <p>表 V-2 表土層遺構一覧 …… 211</p> <p>表 V-3 表土層掲載遺物一覧 …… 211</p> <p>表 V-4 表土層焼土一覧 …… 216</p> <p>表 V-5 IS-1 の礫一覧 …… 218</p> <p>表 V-6 IS-2 ~ 4 の礫一覧 …… 218</p> <p>表 V-7 I 黒層の土器・土製品観察表(1) …………… 231</p> <p>表 V-8 I 黒層の土器・土製品観察表(2) …………… 232</p> <p>表 V-9 I 黒層掲載石器一覧 …… 232</p> <p>表 V-10 礫の長/幅・厚/幅グラフ …… 234</p> <p>表 V-11 礫の長/幅・厚/幅グラフ …… 235</p> <p>表 V-12 礫のヒストグラフ …… 236</p> <p>表 V-13 礫の形態別集計表 …… 236</p> <p>表 V-14 0・I 黒層掲載金属製品一覧 … 237</p> <p>表 V-15 動物遺存体一覧 …… 239</p> <p>表 V-16 出土遺物一覧 …… 239</p> <p>表 V-17 Tピット一覧 …… 256</p>
---	--

表V-18	Tピット列一覧	256	表V-22	II黒層出土遺物一覧	284
表V-19	黒曜石スクレイパーの水和層年代	281	表V-23	遺構出土遺物一覧(1)	284
表V-20	黒曜石の化学組成 (%)	281	表V-24	遺構出土遺物一覧(2)	285
表V-21	黒曜石の K_2O/Al_2O_3 (%), CaO/ K_2O および TiO_2/K_2O	281	表V-25	II黒層出土掲載土器一覧	285
			表V-26	II黒層出土掲載石器一覧	285

写 真 図 版

II 美々3遺跡第II黑色土層の調査(平成3年度)

図版II-1-1	斜面作業風景 SE→	291
図版II-1-2	H-49 完掘 SW→	
図版II-2-3	H-54 完掘 S→	292
図版II-2-4	H-48 遺物出土状況 NW→	
図版II-2-5	H-52 完掘 S→	
図版II-2-6	P-137 完掘 E→	
図版II-2-7	P-137 セクション W→	
図版II-3-8	H-48・49・51、P-130・137出土遺物	293
図版II-4-9	H-51 完掘 S→	294
図版II-4-10	一括土器出土状況 N→	
図版II-4-11	H-51 復元土器 ①	
図版II-4-12	H-51 復元土器 ②	
図版II-5-13	フラスコ状ピット(FP-1) 完掘 SW→	295
図版II-5-14	TP-2 完掘 SSW→	
図版II-5-15	TP-3 完掘 SW→	
図版II-6-16	台地包含層遺物出土状況 E→	296
図版II-6-17	H-50 焼土・遺物検出状況 S→	
図版II-6-18	晩期H出土遺物	
図版II-7-19	P-149 完掘(1) N→	297
図版II-7-20	P-149 完掘(2) W→	
図版II-7-21	P-149 人骨(1)出土状況 SE→	
図版II-7-22	P-149 人骨(2)出土状況 SE→	
図版II-7-23	P-149 出土遺物	
図版II-8-24	P-145~147 完掘 NW→	298
図版II-8-25	土壌出土遺物	
図版II-9-26	F-123~127 検出状況 SW→	299
図版II-9-27	F-128~130 検出状況 N→	
図版II-9-28	焼土群出土遺物	
図版II-10-29	土器集中出土状況(1) W→	300
図版II-10-30	土器集中出土状況(2) NE→	
図版II-11-31	P-127 完掘 E→	301
図版II-11-32	P-127 セクション E→	
図版II-12-33	P-127 石鏝出土状況 E→	302
図版II-12-34	P-127 作業風景	
図版II-13-35	P-127 出土遺物	303
図版II-14-36	P-133~136 完掘 E→	304

図版II-14-37	動物の足跡 W→	
図版II-15	土器(1) III群b-3類 (図II-34-23)	305
	V群b類 (図II-35-1)	
	V群b類 (図II-35-2)	
	V群b類 (図II-35-3)	
	V群b類 (図II-36-4)	
図版II-16	土器(2) V群b類 (図II-36-5)	306
	V群b類 (図II-36-6)	
	V群b類 (図II-37-7)	
	V群b類 (図II-37-8)	
	V群b類 (図II-37-5)	
	V群b類 (図II-37-10)	
図版II-17	土器(3) V群b類 (図II-38-11)	307
	V群b類 (図II-43-57)	
	V群b類 (図II-38-12)	
	V群b類 (図II-38-13)	
	V群b類 (図II-38-14)	
	V群b類 (図II-38-15)	
図版II-18	土器(4) V群b類 (図II-38-16)	308
	V群b類 (図II-40-22)	
	V群b類 (図II-43-80)	
	V群b類 (図II-43-81)	
	V群b類 (図II-39-17)	
	V群b類 (図II-39-18)	
図版II-19	土器(5) V群b類 (図II-39-19)	309
	V群b類 (図II-39-21)	
	V群b類 (図II-39-20)	
	V群b類 (図II-45-112)	
	V群b類 (図II-45-113)	
	V群b類 (図II-45-114)	
図版II-20	土器(6) III群b-3類	310
	III群b-3類	
	IV群a類	
図版II-21	土器(7) V群b類	311
図版II-22	土器(8) V群b類	312
図版II-23	石器 (1) 石鏃・石槍またはナイフ・つまみ付ナイフ	313
図版II-24	石器 (2) 石錐・スクレパー	314
図版II-25	石器 (3) 石斧・たたき石・石皿・砥石・石核	315
III 美々3遺跡第II黒色土層の調査(平成2年度)		
図版III-1	土器 III群b-3類 (図III-1-1)	316

Ⅲ群 b-3 類 (図Ⅲ-1-2)

Ⅲ群 b-3 類 (図Ⅲ-1-3)

Ⅲ群 b-3 類 (図Ⅲ-1-4)

図版Ⅲ-2 礫石器 石斧・石斧未製品・すり石・たなき石 317

Ⅳ 美々7遺跡の調査

図版Ⅳ-1-1 調査前の遺跡遠景 E→ 318

図版Ⅳ-1-2 東斜面・地表面の調査 NE→

図版Ⅳ-2-1 表土層 (T a-a 層上面) の調査 SW→ 319

図版Ⅳ-2-2 P-3 W→

図版Ⅳ-2-3 P-3 出土角材

図版Ⅳ-2-4 P-11 E→

図版Ⅳ-3-1 P-12 SE→ 320

図版Ⅳ-3-2 P-12 出土板

図版Ⅳ-3-3 P-15 E→

図版Ⅳ-3-4 P-16 S→

図版Ⅳ-3-5 P-17 S→

図版Ⅳ-3-6 P-17 出土遺物

図版Ⅳ-4-1 溝跡1 一斗缶出土状況 S→ 321

図版Ⅳ-4-2 溝跡1 セクション S→

図版Ⅳ-4-3 溝跡2 セクション E→

図版Ⅳ-4-4 柱穴列 検出状況 S→

図版Ⅳ-5 表土層遺構出土遺物 322

図版Ⅳ-6-1 P-10 E→ 323

図版Ⅳ-6-2 P-10 出土キセル (雁首)

図版Ⅳ-6-3 P-10 出土キセル (吸口)

図版Ⅳ-6-4 P-10 出土山刀 (タシロ) (柄部X線写真)

図版Ⅳ-6-5 P-10 出土山刀 (タシロ)

図版Ⅳ-7-1 双礫 出土状況 E→ 324

図版Ⅳ-7-2 I 黒層出土土器

図版Ⅳ-7-3 表土層・I 黒層出土遺物

図版Ⅳ-8-1 II 黒層の調査 (平坦面) SW→ 325

図版Ⅳ-8-2 II 黒層の調査 (南斜面) N→

図版Ⅳ-9-1 H-1 完掘 NE→ 326

図版Ⅳ-9-2 H-1 出土遺物

図版Ⅳ-9-3 H-2 完掘 E→

図版Ⅳ-9-4 H-2 出土遺物

図版Ⅳ-10-1 土壌墓群の調査 NW→ 327

図版Ⅳ-10-2 P-30 セクション S→

図版Ⅳ-10-3 P-32 完掘 E→

図版Ⅳ-10-4 P-32 出土遺物

図版IV-11-1	P-31・35 完掘 N→	328
図版IV-11-2	P-31・35 セクション N→	
図版IV-11-3	P-31 出土土器	
図版IV-11-4	P-35 出土土器	
図版IV-12-1	P-33 完掘 S→	329
図版IV-12-2	P-34 出土遺物	
図版IV-12-3	P-34 完掘 E→	
図版IV-13-1	P-37 セクション E→	330
図版IV-13-2	P-37 NW→	
図版IV-14	P-37 出土遺物	331
図版IV-15-1	P-38 完掘 E→	332
図版IV-15-2	P-38 出土遺物	
図版IV-16-1	P-39 完掘 E→	333
図版IV-16-2	P-39 出土石器	
図版IV-16-3	P-42 完掘 S→	
図版IV-17-1	P-40 E→	334
図版IV-17-2	P-40 出土礫	
図版IV-17-3	土壌群 完掘 N→	
図版IV-18-1	P-41 E→	335
図版IV-18-2	P-41 出土土器	
図版IV-18-3	P-36 完掘 E→	
図版IV-18-4	P-36 周辺の土器出土状況 NE→	
図版IV-18-5	P-36 周辺出土土器	
図版IV-18-6	P-29 完掘 S→	
図版IV-19-1	P-21 完掘 E→	336
図版IV-19-2	P-22 完掘 S→	
図版IV-19-3	P-23 完掘 NE→	
図版IV-19-4	P-24 セクション N→	
図版IV-19-5	P-25 完掘 S→	
図版IV-19-6	P-26 完掘 S→	
図版IV-19-7	P-27 完掘 S→	
図版IV-19-8	P-28 完掘 S→	
図版IV-20-1	TP-1 完掘 S→	337
図版IV-20-2	TP-2 完掘 E→	
図版IV-20-3	TP-3 完掘 E→	
図版IV-20-4	石刃鏃出土状況 E→	
図版IV-20-5	炭化くるみ出土状況 E→	
図版IV-20-6	遺物出土状況(1) N→	
図版IV-20-7	遺物出土状況(2) N→	
図版IV-21	土器(1) I群b-2~4類	338

図版IV-22	土器(2)	I群b-2類	339
図版IV-23	土器(3)	I群b-2~4類	340
図版IV-24	土器(4)	I群b-4類	341
図版IV-25-1	土器(5)	I群b-4類・III群・V群	342
図版IV-25-2	底面の圧痕 (I群b-3類)			
図版IV-25-3	接合面の状況 (I群b-4類)			
図版IV-25-4	軸痕のある圧痕 (I群b-4類)			
図版IV-26	石器(1)	石鏃・石槍	343
図版IV-27	石器(2)	石錐・つまみ付ナイフ	344
図版IV-28	石器(3)	つまみ付ナイフ	345
図版IV-29	石器(4)	つまみ付ナイフ・スクレイパー	346
図版IV-30	石器(5)	スクレイパー、U・Rフレイク	347
図版IV-31	石器(6)	石斧・たたき石	348
図版IV-32	石器(7)	たたき石・くぼみ石・すり石	349
図版IV-33	石器(8)	砥石・台石	350
図版IV-34	石器(9)	加工痕礫・石核、土・石製品	351

V 美々8遺跡の調査

図版V-1-1	調査区遠景	S→	352
図版V-1-2	美々7遺跡よりのぞむ調査遠景 W→			
図版V-1-3	調査近景 E→			
図版V-2-1	表土	F-2 セクション	S→ 353
図版V-2-2	表土	F-2 炭化材出土状況	W→	
図版V-2-3	表土	道跡-1	S→	
図版V-2-4	表土	道跡-1	調査状況 NW→	
図版V-2-5	表土	道跡-2	調査状況 S→	
図版V-2-6	表土	道跡-2	調査状況 N→	
図版V-3-1	I H-1	N→	354
図版V-3-2	I F-2	S→		
図版V-3-3	I S-3	N→		
図版V-3-4	0・I	道跡-2~4	E→	
図版V-3-5	0・I	道跡-1	NW→	
図版V-3-6	0・I	道跡-1	セクション S→	
図版V-4-1	I P-1	プラン確認	NE→ 355
図版V-4-2	I P-1	遺物出土状況	SE→	
図版V-4-3	0	黒層 飾座金具出土状況		
図版V-4-4	I	黒層上面 鉄鍋出土状況		
図版V-4-5	I	黒層上面 鉞出土状況		
図版V-4-6	I	黒層上面 鉄斧出土状況		
図版V-5	表土層出土遺物		 356
図版V-6	I P-1	出土遺物	357

図版V-7	I 黒層出土土器(1)	358
図版V-8	I 黒層出土土器(2)	359
図版V-9	I 黒層出土土器・土製品・石器・石製品	360
図版V-10	0・I 黒層出土金属製品	361
図版V-11-1	II 黒層 作業風景 SE→	362
図版V-11-2	II 黒層斜面部分 セクション NW→	
図版V-12-1	II H-1~4 完掘 W→	363
図版V-12-2	II H-5 完掘 S→	
図版V-13-1	II H-6 完掘 S→	364
図版V-13-2	II H-6 セクション SW→	
図版V-14-1	II H-6 出土遺物	365
図版V-14-2	II TP-1・II P-1 完掘(左:II P-1・右:II TP-1) NE→	
図版V-14-3	II P-2 完掘 W→	
図版V-14-4	II P-10 遺物出土状況 E→	
図版V-14-5	II P-10 出土遺物	
図版V-15-1	II P-7 完掘 W→	366
図版V-15-2	II P-9 完掘 W→	
図版V-15-3	II TP-12 完掘 SE→	
図版V-16-1	II TP-3 完掘 N→	367
図版V-16-2	II TP-11 セクション W→	
図版V-16-3	II TP 出土遺物	
図版V-16-4	II 黒層動物の足跡 検出状況 N→	
図版V-17-1	遺物出土状況 NE→	368
図版V-17-2	遺物出土状況 S→	
図版V-17-3	遺物出土状況 SW→	
図版V-17-4	復元土器 I群b-4類	
図版V-17-5	復元土器 I群b-4類	
図版V-17-6	復元土器 I群b-4類	
図版V-18	土器(1) I群b-3類・I群b-4類	369
図版V-19	土器(2) I群b-4類	370
図版V-20	土器(3) I群b-4類	371
図版V-21	土器(4) I群b-4類・IV群c類	372
図版V-22	石器(1) 石刃鏃・石鏃類・石槍またはナイフ	373
図版V-23	石器(2) 石錐・つまみ付ナイフ	374
図版V-24	石器(3) スクレイパー類・異形石器	375
図版V-25	石器(4) スクレイパー類・楔形石器・石核・石斧・たたき石・すり石	376
図版V-26	石器(5) すり石・砥石・台石類・石錐・礫器・石製品	377

I 調査の概要

この調査は、北海道開発局札幌開発建設部が建設をすすめている新千歳空港の用地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査である。

1 調査要項

事業名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：北海道開発局札幌開発建設部

調査期間：平成3年4月12日～平成4年3月27日（発掘調査：5月7日～10月24日）

調査遺跡・所在地・調査面積

遺跡名	道教委登録番号	所在地	面積	発掘期間
美々3遺跡	A-03-98	千歳市美々988-19ほか	2,075 m ²	5月7日～6月13日
美々7遺跡	A-03-95	千歳市美々1,714ほか	2,323 m ²	5月10日～10月24日
美々8遺跡	A-03-94	千歳市美々1,292-133ほか	5,161 m ²	5月7日～10月9日
面積合計			9,559 m ²	

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

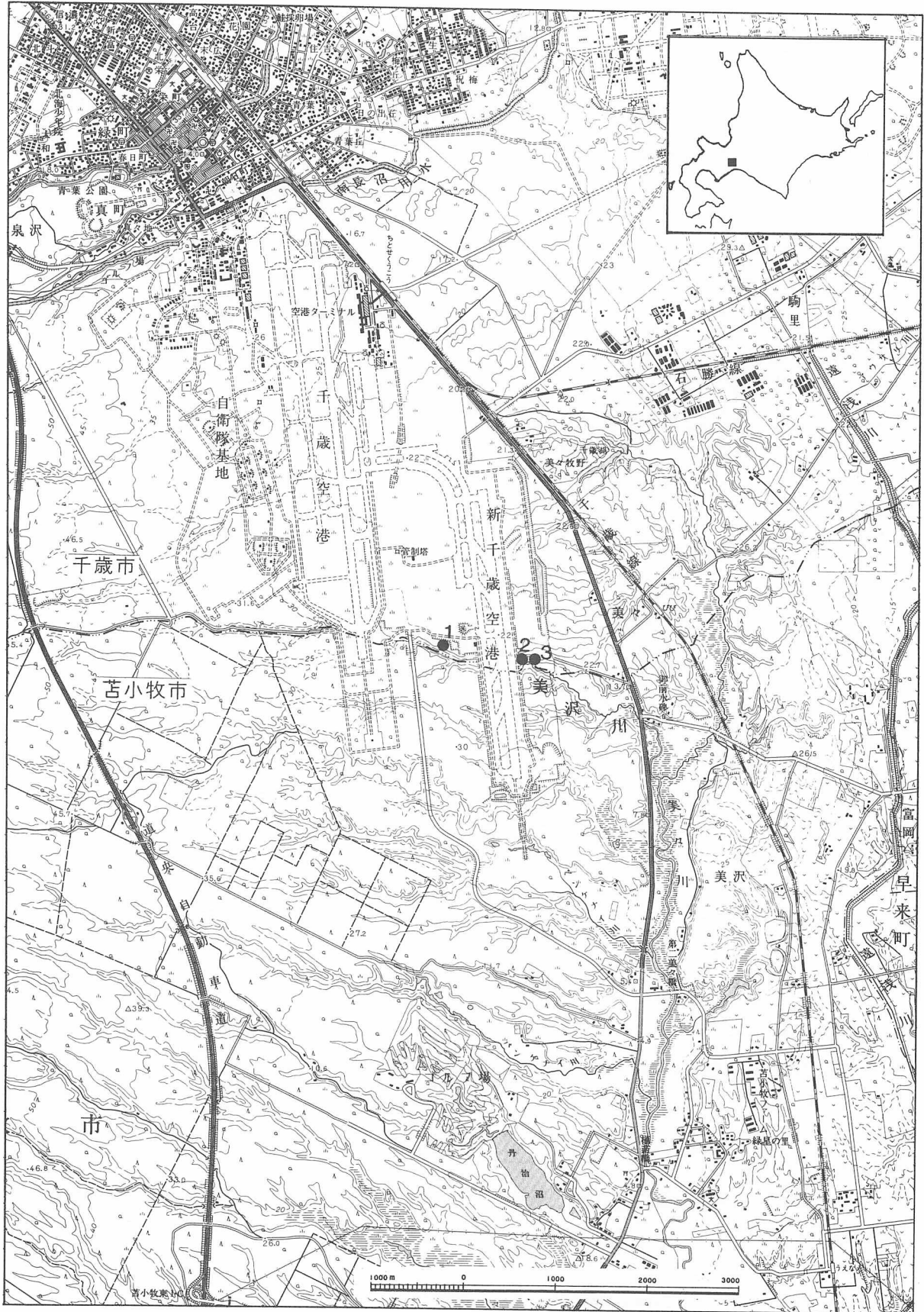
理事長	寺山敏保	専務理事	永田春男
常務理事	中村福彦	業務部長	伊藤庄吉
調査部長	森田知忠		
調査第3課長	千葉英一（美々3遺跡、美々8遺跡発掘担当者）		
主任	西田 茂（美々7遺跡、美々8遺跡発掘担当者）		
〃	工藤研治（美々3遺跡、美々8遺跡発掘担当者）		
〃	田口 尚		
〃	葛西智義（美々7遺跡、美々8遺跡発掘担当者）		
嘱託	皆川洋一		
〃	鈴木 信		
〃	村田 大		

3 調査の経緯

新千歳空港建設にともなう埋蔵文化財調査は、昭和49・50年度に千歳市教育委員会が実施した分布調査に端を発し、発掘調査は昭和51年度から北海道教育委員会によって始められた。のち昭和54年9月からは当埋蔵文化財センターが発掘調査を引継ぎ、毎年実施されてきた。したがって今年度は、発掘調査の第16年次となる。

この間に調査された遺跡は、表I-1に示すとおり計16遺跡、調査面積の延べ25万m²余にのぼり、旧石器時代から近代までのすべての時代に及ぶ遺物が出土し、種々の遺構が検出されている。今後の調査予定地として2万m²ほどが残されている。

今年度の調査は、美々3遺跡の4年度目、美々7遺跡の3年度目、美々8遺跡の7年度目であり、美々8遺跡の低湿部は2年度目である。美々3遺跡の調査は、今年度をもって完了した。



図I-1 遺跡の位置 1:美々3遺跡、2:美々7遺跡、3:美々8遺跡
(この図は、国土地理院発行の5万分の1地形図『千歳』を縮小複製したものである。)

表 I-1 新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地の調査面積の推移 (単位 m²)

遺跡名	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年	61年	62年	63年	元年	2年	3年	計
美々2									10906	5000							10906
美々3											4565			6000	9225	2075	16415
美々4	1160		240		7150			6475	6180	5899							27104
美々5	300		6628	752	8450				6544								22674
美々6			5000		3450												8450
美々7			5000		2400											2323	9723
美々8						11900	3875			1828		11112		4182	215	5161	38228
美々9								5000									5000
美沢1	790	7840	11300		2340												22270
美沢2		10560															10560
美沢3	1750				3480								17464	5478	7150		34382
美沢4				23760													23760
美沢5				6800							660						7460
美沢10											4027						4027
美沢11											1570	5710					7280
美沢13												2185					2185
計	4000	18400	28168	31312	27270	11900	3875	11475	23630	7727	10822	19007	17464	14720	12045	8609	254924

註：美々2遺跡の60年度、美沢3遺跡の元年度のうち940㎡、美々3遺跡の2年度のうち4500㎡、美々3遺跡の3年度のうち950㎡については、II黒層の調査のみで、それぞれ前年度のI黒層調査の面積に計上されているので、面積集計からは除外してある。また、美々8遺跡の2年度調査分のうち45㎡は前年度調査の下位（水付き部分）の調査であるので、同様に面積集計からは除外してある。

4 遺跡の立地と遺物包含層

遺跡の立地

東に流れる美沢川は、南流してウトナイ湖に入る美々川の支流である(図 I-1)。この美沢川の兩岸に多くの遺跡があり、美沢川流域の遺跡群と呼ばれている(図 I-3)。遺跡の名称は、美沢川の北側(千歳市)を美々^{びび}、南側(苫小牧市)を美沢^{みさか}としている(図 I-4)。

遺跡は、川の兩岸標高 25 m ほどの台地部分から川床に向かう傾斜地に広がっている。現在の流路の標高 6 m よりも低い部分から多くの遺物が出土しているところもある。

発掘調査の結果、人類は少なくとも 2 万年ほど前から美沢川周辺の森林地帯に展開していたことが判明している。樽前山を始めとする幾多の火山の噴火に見舞われながらも、人々は営々としてこの地に生活してきた。美沢川の流域は太平洋側から遡航可能なところであり、低平な火山灰の台地を 4 km あまり北へたどると千歳川に達する。この千歳川は日本海側から石狩川をへて遡航しうる河川であり、アイヌ社会においても交通路としてよく利用されていたところである。

自然経済のもとでの生活条件のよさに加えて、日本海側と太平洋側とを結ぶ交通の要衝としての場所柄も、美沢川流域に広大で重層的な遺跡が形成された要因と言えよう。

遺物包含層

美沢川流域の台地部分は図 I-2 に示したように支笏軽石流堆積物(Spfl)を基盤として、その上に火山性堆積物と森林土壌が交互に重なっている。旧石器時代の遺物が確認されたのは、暗褐色火山灰の下にあるローム質土である。さらに恵庭 a ローム層(En-a)からも有舌尖頭器などが出土している。III黒層は縄文時代早期の包含層であり、その上に樽前 d₂ 降下スコリア層(Ta-d₂)と樽前 d₁ 降下岩片層(Ta-d₁)が堆積している。II黒層は縄文時代早期から晩期の包含層で、その上に樽前 c₂ 降下岩片層(Ta-c₂)と樽前

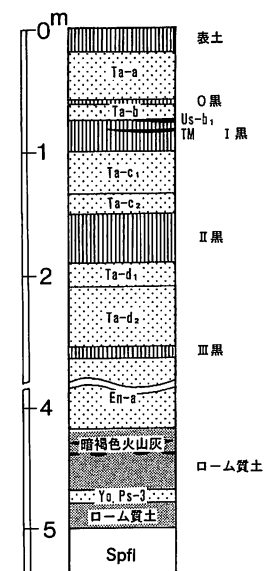


図 I-2
標準土層模式図

c₁ 降下軽石層(Ta-c₁)がある。I 黒層は縄文時代晩期から17世紀中頃までの包含層で、その上に樽前b降下軽石層(Ta-b)と樽前a降下軽石層(Ta-a)がある。

低湿部では、I 黒層の上半部に苫小牧火山灰(TM)、I 黒層の最上部に有珠b₁火山灰(Us-b₁)が明瞭に認められる。樽前b降下軽石層(Ta-b、1667年降下)と樽前a降下軽石層(Ta-a、1739年降下)との間にみられる腐植土は、0黒層と呼んでいる。

なお、今年度の美々8遺跡で、0黒層よりも新しい時期の遺構を検出した。これは、「表土」の遺構として報告してある。

5 調査結果の概要

美々3遺跡 昨年度までの調査地区に続く西側の台地と傾斜地を調査した。縄文時代早期、中期、後期、晩期の遺構・遺物が検出された。早期では東釧路IV式土器が数点出土している。中期後葉の北筒式、ノダップII式、煉瓦台式などの土器は斜面にあり、前年度までの調査で明らかになった集落からはいくぶん離れたところである。後期前葉の住居跡は、余市式土器の時期のものが斜面の上部と下部、入江式土器の時期のものが斜面の下部にある。

晩期の資料は、II黒層のものとI黒層のものとがある。II黒層では、台地平坦部とその縁に墓壇、土壇、焼土がある。土器は縄線文が多用されるもので、中葉の大洞C₂式に並行する時期である。土壇墓(P-149)の平面形は小判形で、2体埋葬である。人骨の残り具合はよくなかったが、それぞれの頭は長軸両端の壁際にあり、体軀が重なっているのが推定できた。

I黒層の墓壇、土壇は斜面にある。墓壇(P-127)の平面形は卵形で、埋葬形態は横臥屈葬、西頭位である。成人男性との所見が得られている頭部の脇には、石鏃190点が検出され、足もとからも2点の石鏃が出土している。晩期後葉と考えられるこの墓壇から出土した石鏃は、すべて黒曜石製である。

美々7遺跡 標高17m～22mの台地平坦部と東及び南斜面を調査した。II黒層からは縄文時代早期、中期～晩期の遺構・遺物が検出された。

早期後葉の住居跡と土壇は、台地平坦面の縁にまとまって検出された。土壇からは足形付土製品や完形土器、石器などが出土しており、墓壇とみなされるものがある。足形付土製品には東釧路IV式土器に特徴的な文様が認められる。土器は、コッタロ式が斜面下方に多く、斜面上方に東釧路IV式が多い。これらの土器に重なるような範囲から石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパーなどが出土している。伴出土器は明らかでないが、石刃鏃が1点出土している。後期の土壇は台地平坦面にある。Tピットは、美々8遺跡のものと列をなすものである。

I黒層からは小形土器が2個体出土している。これにはオホーツク文化の土器に特徴的な縦に並ぶ刺突文が施されている。オホーツク文化の文物分布の南西端になるのではないかと推定される。

樽前a降下軽石層と樽前b降下軽石層との間につくられた土壇墓はアイヌ文化期のものである。長楕円形の壇底から山刀(タシロ)とキセルが出土した。キセルは銅製の吸口と鉄製の雁首とが組になるものである。台地平坦面から南の斜面に降りる踏み分け道は、樽前a降下軽石層と樽前b降下軽石層との間にあった。最近の遺構・遺物として、駐留米軍の演習に関わると考えられる土壇、薬莖なども検出されている。

美々8遺跡 台地平坦部と南西側斜面を調査した。縄文時代早期の住居跡は斜面にある。早期の土壇は散在している。土器は東釧路IV式が多く、これに伴う石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパーがある。また、石刃鏃も1点出土している。Tピットは平面形が細長いものと小判形のものがありそれぞれに列をなしている。縄文時代後期の土器も少量出土している。擦文土器は散点的に検出された。樽前b降下軽石層よりも下から検出された土壇墓はアイヌ文化期のものである。この墓壇の北端肩口には内耳鉄鍋が伏せてあり、壇底には漆椀、小刀(マキリ)、鉄針があった。

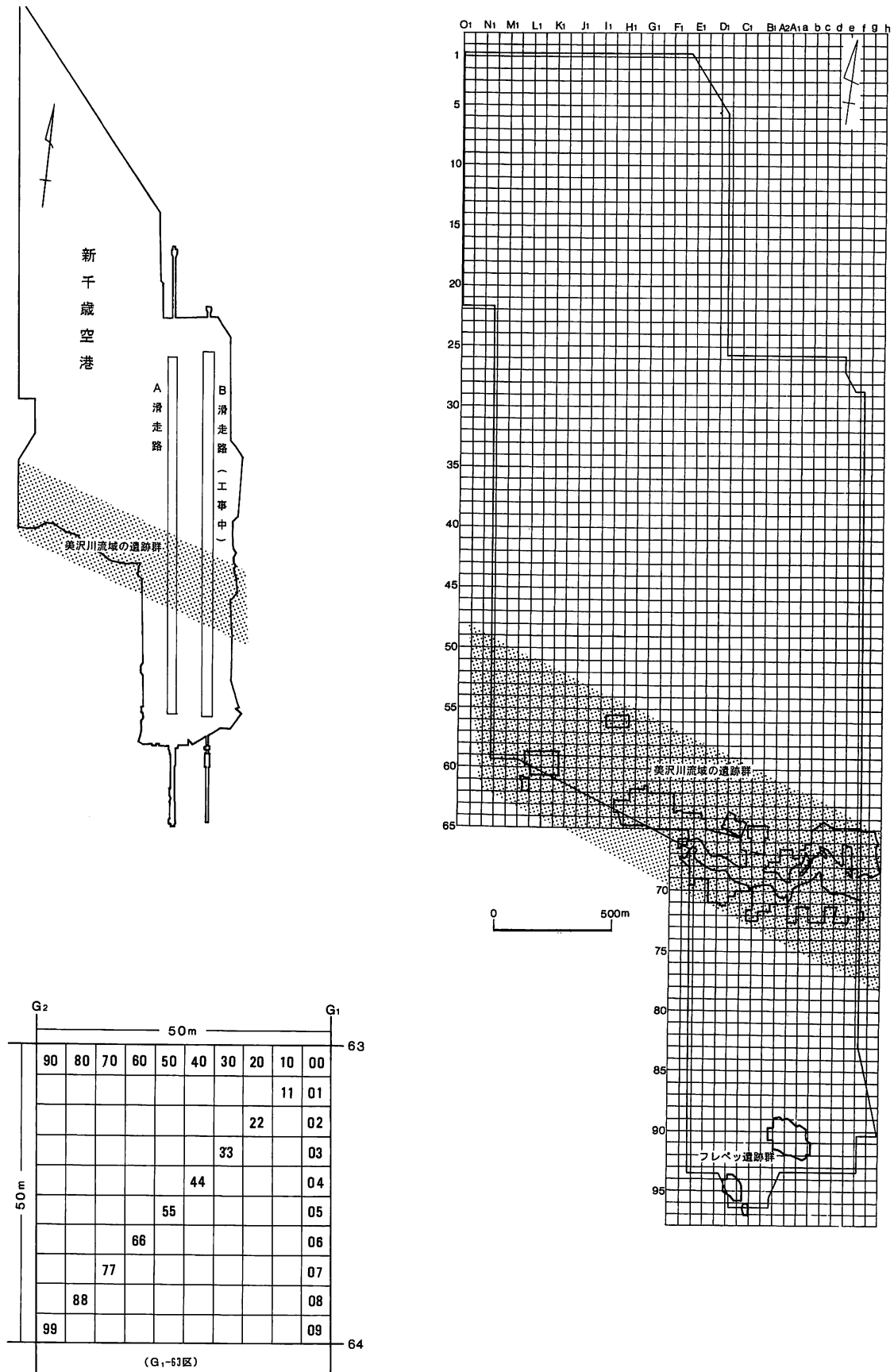


図 I-3 美沢川流域の遺跡群の位置と発掘区の呼称



図 I-4 美沢川流域の遺跡群の分布

I 黒層と 0 黒層および表土層から、断続的ではあるが 7 本の道跡が検出された。このうち表土層の道跡 1 と呼ぶものは、ほかのものが踏み分け道程度の細いものであるに比べて、幅 7 m ほどの大きなものである。車馬の通行可能なことなどから判断して、1800 年代の初期(文化年間)に千歳からビビへの道路開削がなされたという記事に該当するものの一部と考えられる。

美々8 遺跡 (低湿部) 第 2 分冊に報告したものは、平成 2 年度に調査したものである。

現在の流水面よりも低いところから、多量の木製品が出土している。いくつかの降下火山灰によってその所属時期が推定されており、樽前 b 降下軽石層(1667 年降下)から樽前 a 降下軽石層(1739 年降下)までの時期のものが多い。

居住を示すものとしては、家屋の建材と思われるほぞ穴付きの板材や柱材、ヒキリ板、ヒキリギネ、魚突鉤台(マレブ・ニピヒ)、回転離頭銚(キテ)中柄、団子篋(シトペラ)、杓子(カスブ)、漆塗椀(イタンキ)、柄鉤(スワッ)、箸(パスイ)、串(イマニッ)などがある。舟材は、樺(アッサブ)、板綴り舟の側板(イタオマチブ)、シロシを彫り込んだ樗受部(タカマ)がある。0 黒層からは鉄鍋、銅製キセル、ガラス玉、コハク玉、銅銭などが出土している。

多くの木製品とそれらを加工したときの木屑、打ち込まれたままで検出された杭が多数あることから判断すると、当時の流水面は今よりも 2~3 m ほど低くて、この水辺に接して住まいがあったものと考えられる。

I 黒層からは擦文時代の集石 1 か所、少量の擦文土器、続縄文時代恵山期の土器 1 個体などが検出された。この続縄文時代の土器は、完形のまま倒立して出土した。

年代測定値

¹⁴C 測定 美々8 遺跡 表土 F-2 60±80 (BP) KSU-2169 (本文 240 ページ)

¹⁴C 測定 美々8 遺跡 IS-3 現代 KSU-2170 (本文 240 ページ)

黒曜石水和層年代測定 美々8 遺跡 d 66-23-9 II 黒層 No 8 (原産地：置戸) (本文 281 ページ)

測定部位	測定数	水和層厚 $X \pm \sigma (\mu m)$	水和層年代(B.P.年)
A-1	6	3.97±0.11	9,900±500
A-2	7	4.01±0.14	10,100±700
B-1	7	3.93±0.21	9,700±1,000
B-2	6	4.03±0.15	10,200±800
C-1	9	5.19±0.16	16,800±1,000
C-2	7	5.30±0.18	17,600±1,200

6 遺物の分類

土器については昭和 51 年以来、時期ごとの区分を行ってきた。その間若干の変更をみているが、本年度の調査結果と、近年の調査結果を考え合わせ、以下の区分によって表示することとした。石器については器種別の大分類にとどめている。このほか石製品、土製品、陶磁器、ガラス製品、金属製品、木製品・繊維製品、樹皮製品、自然遺物などがある。

(1) 土器

I 群 縄文時代早期に属するもの。本群は大きく二つに分類される。

a 類 貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。

b 類 縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群。これらには東釧路 II 式、東釧路 III 式、コッタロ式、中茶路式、東釧路 IV 式に相当するものがある。

b-1 類：東釧路 II 式・東釧路 III 式に相当するもの。

b-2 類：コッタロ式に相当するもの。

b-3 類：中茶路式に相当するもの。

b-4 類：東釧路IV式に相当するもの。

II群 縄文時代前期に属するもの。本群は大きく二つに分類される。

a 類 縄文の施された丸底、尖底を特色とする土器群。さらに、二者に分類される。

a-1 類：綱文土器に相当するものと、結束のない羽状縄文の施された丸底を特色とするもの。

a-2 類：春日町式、中野式など、縄文の施された尖底を特色とするもの。

b 類 円筒土器下層式、植苗式に相当する土器群。

III群 縄文時代中期に属するもの。本群は大きく二つに分類される。

a 類 円筒土器上層式に相当するもの。

b 類 天神山式・柏木川式、北筒式に相当するもの。さらに、三者に分類される。

b-1 類：天神山式等に相当するもの。

b-2 類：柏木川式等に相当するもの。

b-3 類：北筒式（トコロ6類）・ノダップII式・煉瓦台式に相当するもの。

IV群 縄文時代後期に属するもの。本群は大きく三つに分類される。

a 類 余市式・入江式に相当するもの。

b 類 船泊上層式・手稲式・鮎潤式・エリモB式に相当するもの。

c 類 堂林式・三ツ谷式・御殿山式に相当するもの。

V群 縄文時代晩期に属するもの。本群は大きく三つに分類される。

a 類 大洞B式・上ノ国式に相当するもの。

b 類 大洞C₁・C₂式に相当するもの。

c 類 大洞A・A'式に相当するもの。

VI群 続縄文時代に属するもの。

VII群 擦文時代に属するもの。

(2) 石器・石製品

出土した剥片石器には石鏃、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー類、異形石器(抉入石器)があり、礫石器には石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石錘、砥石、石皿、台石などがある。この他に石核(コア)、剥片(フレイク)、石屑(チップ)、擦切痕のある礫、擦り痕のある礫、自然礫などがある。使用痕、加工痕のある剥片はそれぞれRフレイク、Uフレイクに一括している。石製品には玉類、ミニチュア石斧などがある。

なお表に示した石材は、次のような略号を使用したところもある。

Aga: メノウ Aga-sh: メノウ質頁岩 And: 安山岩 Ba: 玄武岩 Che: チャート Gni: 片麻岩
Gr-Mud: 緑色泥岩 Gr-Sch: 緑色片岩 Mud: 泥岩 Obs: 黒曜石 Per: カンラン岩 Pro: プロ
ピライト Qua: 珪岩 Qua-Sh: 珪質頁岩 Rhy: 流紋岩 Sa: 砂岩 Sch: 片岩 Ser: 蛇紋岩
Sh: 頁岩 Tu: 凝灰岩。

(3) 土製品 足形付土製品、土製円盤、紡錘車がある。

(4) 陶磁器 白磁がある。

(5) ガラス製品 ガラス玉がある。

(6) 金属製品 鉄斧、鉋、鉄鍋、鏝(かすがい)、銅銭、キセル、飾り金具、葉莢などがある。

(7) 木製品・繊維製品 建材、交通・運搬具、生活用具、狩猟・漁撈用具・農耕具などがある。

(8) 自然遺物 獣骨・鳥骨・魚骨・カワシンジュ貝などの動物遺存体、クルミ・スモモ・サルノコシカケ・アシの根茎などの植物遺存体がある。

II 美々3 遺跡 第II黒色土層の調査 (平成3年度)

1 調査の概要

美々3 遺跡は美沢川左岸の台地上及びに斜面に位置し、東側は美々4 遺跡に隣接する。昭和61年度、平成元年度、平成2年度に調査が行われ、今年度で当初予定区域の調査が終了した。

今年度は遺跡西端部の台地上から斜面にかけて2,075 m²を調査した。検出された遺構は住居跡7軒、住居跡様遺構1基、土墳墓2基、フラスコ状ピット1基、土壇23基、Tピット2基、焼土19か所である。このうち土壇墓1基、土壇5基は覆土の堆積状態からI黒層から掘り込まれた遺構と考えられる。このほかII黒層上面で動物の足跡が検出された。出土した遺物には縄文時代早期、中期、後期、晩期のものがあり、土器13,716点、石器7,978点、計21,694点出土した。時期別に概要を示すと以下のとおりである。

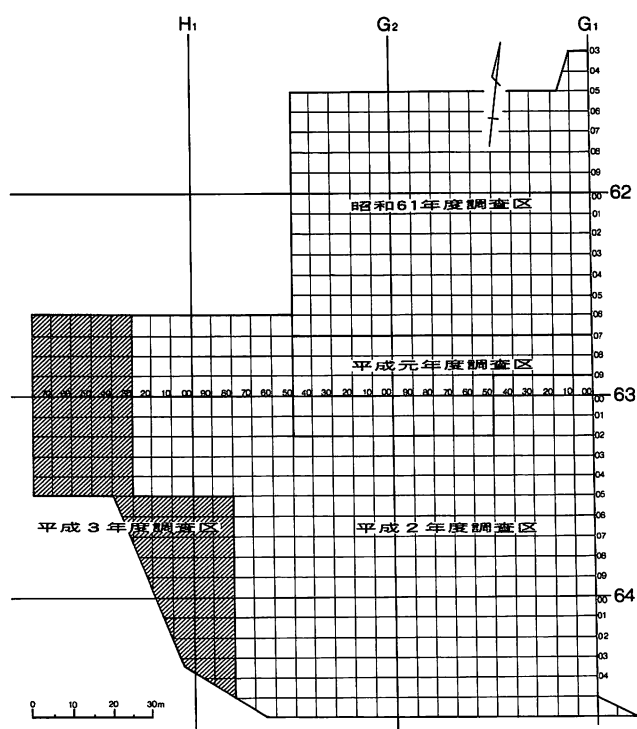
早期の遺物はI群b-4類土器が斜面から少量出土したのみである。遺構はない。

中・後期の遺構は斜面上部と斜面下部で検出された。斜面上部では中期末から後期初頭と考えられる住居跡3軒、フラスコ状ピット1基、IV群a類土器の頃と考えられる住居跡2軒、Tピット2基が検出された。斜面下部ではIV群a類土器(入江式)の時期の住居跡様遺構1基、IV群a類(余市式)土器の頃の土壇3基が検出された。中期の遺物はIII群b-3類土器が出土している。今年度の調査区域は、昨年度までに調査したIII群b-3類土器(北筒式)の主たる分布域から離れているため出土量は少ない。昨年度と同様、ノダップII式や煉瓦台式に近縁の資料も出土している。後期の遺物はIV群a類(余市式、入江式)土器のほかにIV群b類土器が少量出土している。

晩期の資料は今年度の主体となるものである。遺構・遺物は主として台地の縁から台地上にかけて

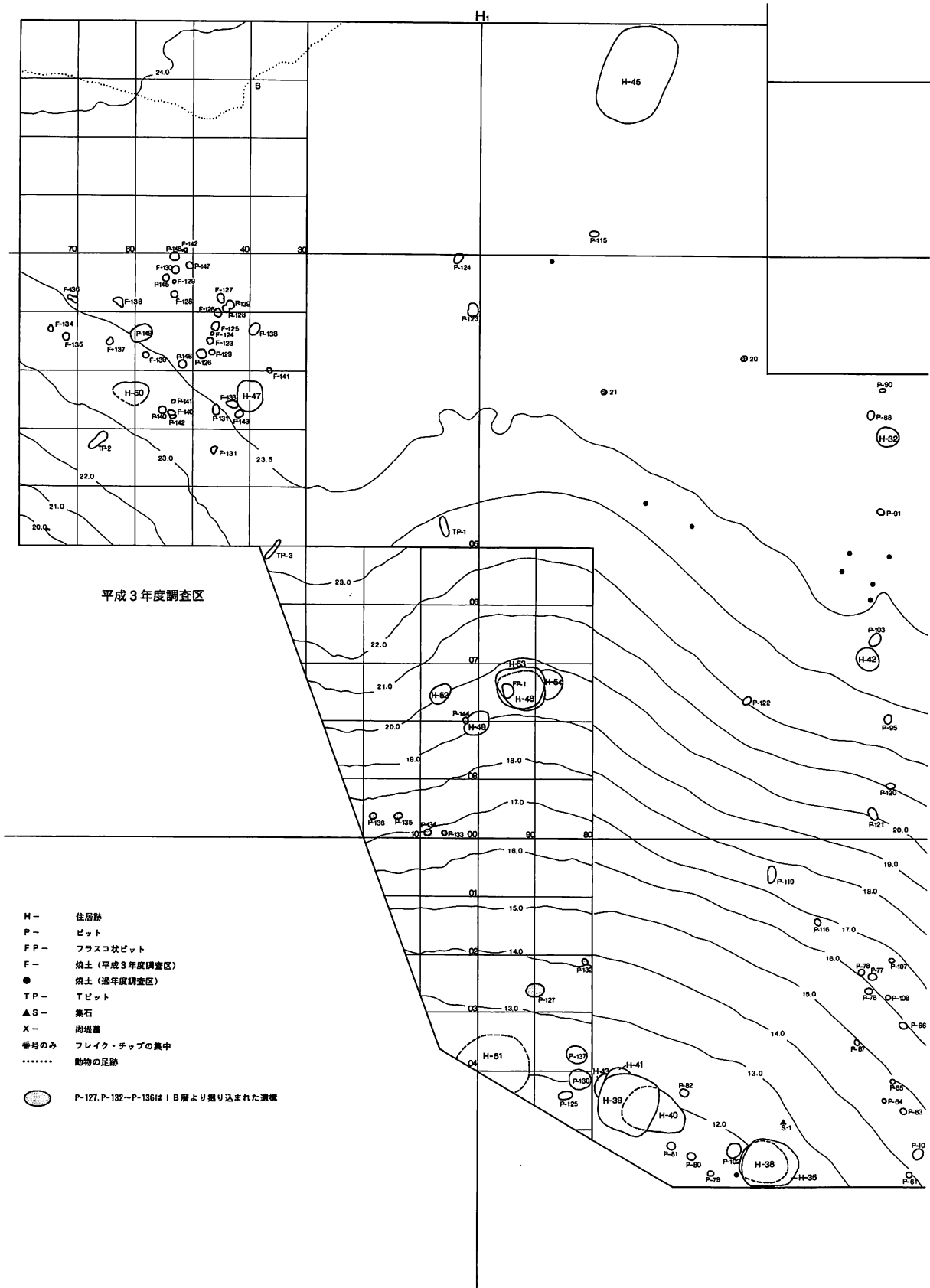
の狭い範囲に分布している。II黒層を2~3cm掘り下げるとV群b類土器が面をなして出土し、その時期の住居跡2軒、土壇墓1基、土壇14基、焼土19か所が検出された。土壇墓は墳底に12か所、柱穴状の小ピットがめぐる合葬墓である。土壇や焼土はいくつかの群をなし、土壇墓の周囲に分布している。焼土には焼骨が多量に含まれており、サケ属の骨を主体として、鳥・獣骨が混在していた。獣骨のなかにはイノシシの骨がある。

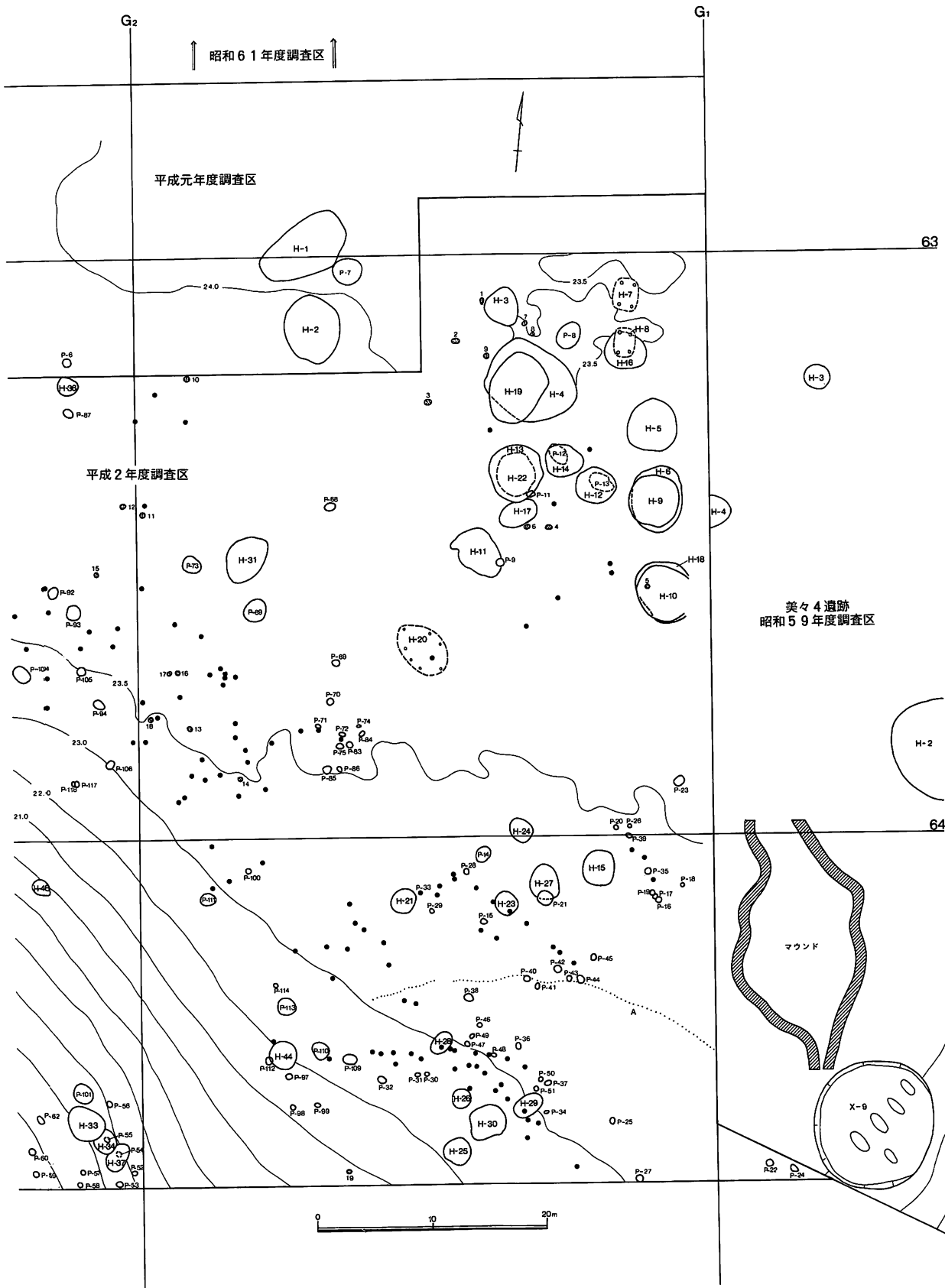
斜面では、I黒層から掘り込まれたV群c類土器の時期と考えられる土壇墓1基、小ピット5基が検出された。土壇墓には石鏃が192点副葬されていた。



図II-1 II黒層の発掘調査地区

II 美々3遺跡第II黒色土層の調査(平成3年度)





図II-2 II黒層の遺構位置図

2 縄文時代中・後期の遺構とその遺物

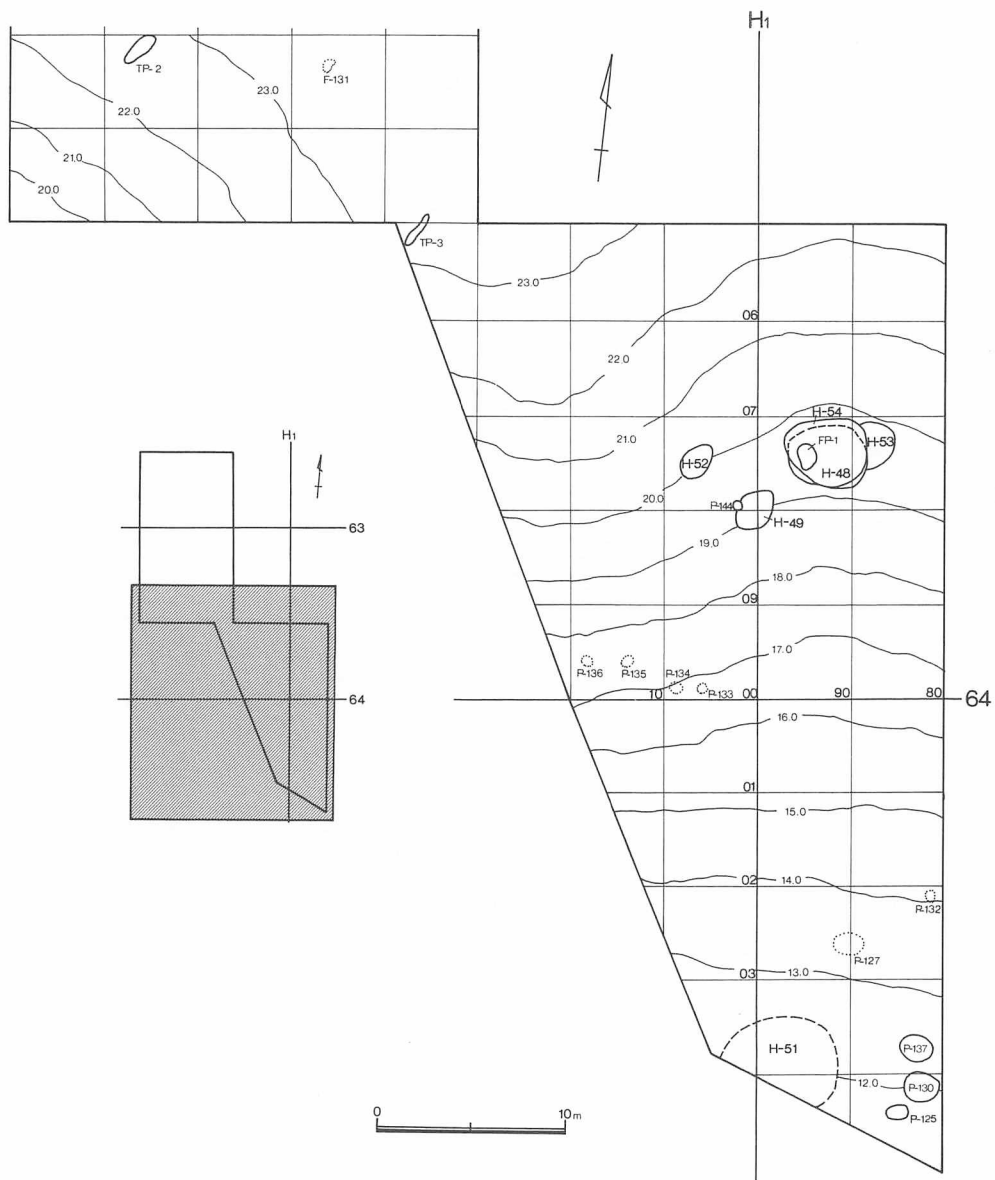
(1) 住居跡

H-48・53・54（図II-4・5、図版II-2-3・4・3-8）

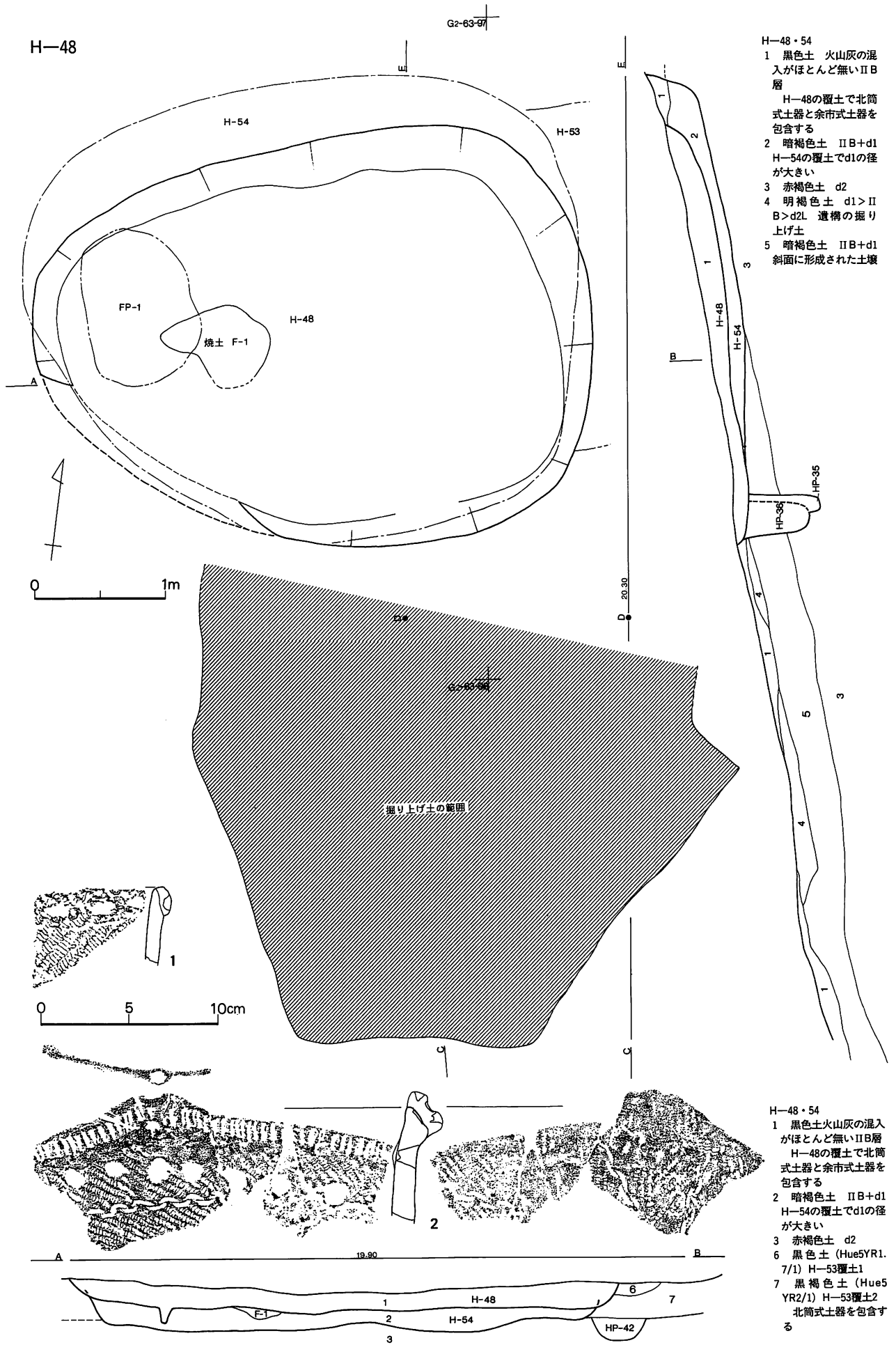
標高19～20mの斜面で、H-48・53・54の三軒の住居跡が検出された。II黒層上面に窪地と掘り上げ土と思われるTa-d₁、Ta-d₂を認め、調査した結果、重複するH-48・54とH-54に切られたH-53とが確認された。H-48・53・54の柱穴は、H-53の一部を除いてどの住居跡に伴うか不明確なため、まとめて図に示した。（図II-5）。柱穴内の土は、いずれも腐植土である。また、H-48の床からはフラスコ状ピット（FP-1、図II-10）が検出されている。斜面下方に認められた掘り上げ土はこれらの遺構から出たものである（図II-4、“掘り上げ土の範囲”）。

これらの住居跡の時期は縄文時代中期後半から後期初頭である。新旧関係は古い順にH-53→H-54→H-48で、FP-1はH-48よりも古くH-54との前後関係は不明である。

斜面には、標準土層と異なる5層と1層が形成されている（図II-4、5層・1層）。5層はTa-d₁と



図II-3 縄文時代中・後期の遺構位置図



図II-4 H-48と出土遺物

II黒腐植土が混じる土層で、Ta-d₂層上に厚く堆積する。これはTa-d₁層とII黒層の下部に相当する。1層は火山灰をほとんど含まない微粒子の腐植土層で5層上に薄く堆積する。これはII黒層の上部に相当する。2枚の土層はともに遺物を含み、土層の境界も漸移的である。5層は地表面が安定せず自然の営力で土壌が下方に移動するような環境下で形成され、1層は安定した環境下で形成された土層と考えられる。これらの土層堆積は、斜面が大きく二つの環境の変化を経ていることを示していると考えられ、似た現象は、美沢川流域の河川に面した他の斜面地形にも認められる(V-5-1「概要」参照)。住居跡は5層を主体とする土層に掘り込まれ(H-53・54)、覆土は1層(H-48)もしくはそれに近い土層(H-53-54)である。これらのことからH-48・53・54は、5層の形成が終わり1層の堆積が始まる時期の、環境変化の過渡期に作られていると考えられる。

H-48(図II-4、図版II-2-4・図版II-3-8)

位置 G₂-63-87・97 規模 4.24/3.74×3.11/2.54×0.28 m

特徴 平面形が卵形の住居跡である。H-54の覆土中に掘り込まれている。掘り込み面は1層中で、覆土も火山灰の混入が少ない微粒子の1層腐植土である。床面は浅く掘り込まれたもので、壁は斜面上側で急に立ち上がり、下側では僅かに立ち上がる。炉(HF-1)は床面の土壌が熱によって赤化したもので、卵形すぼまる方に寄って位置している。

遺物 床と覆土から土器、フレイク、有意の礫が出土している。1は壁際の床面から出土した縄文時代後期初頭の土器の口縁部である。地文は斜行縄文で、口縁の貼付帯上には原体の縄端を用いた刺突文が施されている。これは平成2年度報告のH-40のものと接合した。覆土の土器はすべて北筒式土器で、2は断面三角形の肥厚帯と山形突起を有する口縁部である。突起部の口唇と側面部には竹管状工具による刺突文が施されている。貼付帯上には幅の広いヘラ状工具による押引き文が施され、貼付帯下にはやや密な間隔で円形文が施されている。赤化した土器表裏面には結束縄文が施され、胎土には砂と繊維が混入されている。

なお、床面下からH-48より古いフラスコ状ピット(FP-1、図II-10)が検出されている。

時期 縄文時代後期初頭

H-53(図II-5、図版II-3-8)

位置 G₂-63-87 規模 (1.67)/(1.55)×2.19/2.05×0.27 m

特徴 平面が楕円形と推定される小型の住居跡である。西側のほぼ半分がH-54によって壊されている。掘り込み面は5層中で、覆土は前述の1層を主体とする土層であるが、色調から2枚に分けられる。床面はTa-d₂層に掘り込んだフラットなもので、炉は床面中央部よりやや斜面下側寄りに位置する(F-1)。柱穴は径の小さいものが壁際と中央にある。

遺物 床面から土器、フレイク、チップ、有意の礫、焼土からフレイクが出土している。また、覆土からは土器、フレイクが出土している。床面出土の土器は北筒式で、覆土のものは北筒式と余市式である。1は無文の口縁部で、表裏面には指の整形による凹凸が顕著で、胎土には繊維が混入されている。2は胴部破片で、器面には結束縄文が施されている。両者とも北筒式土器である。

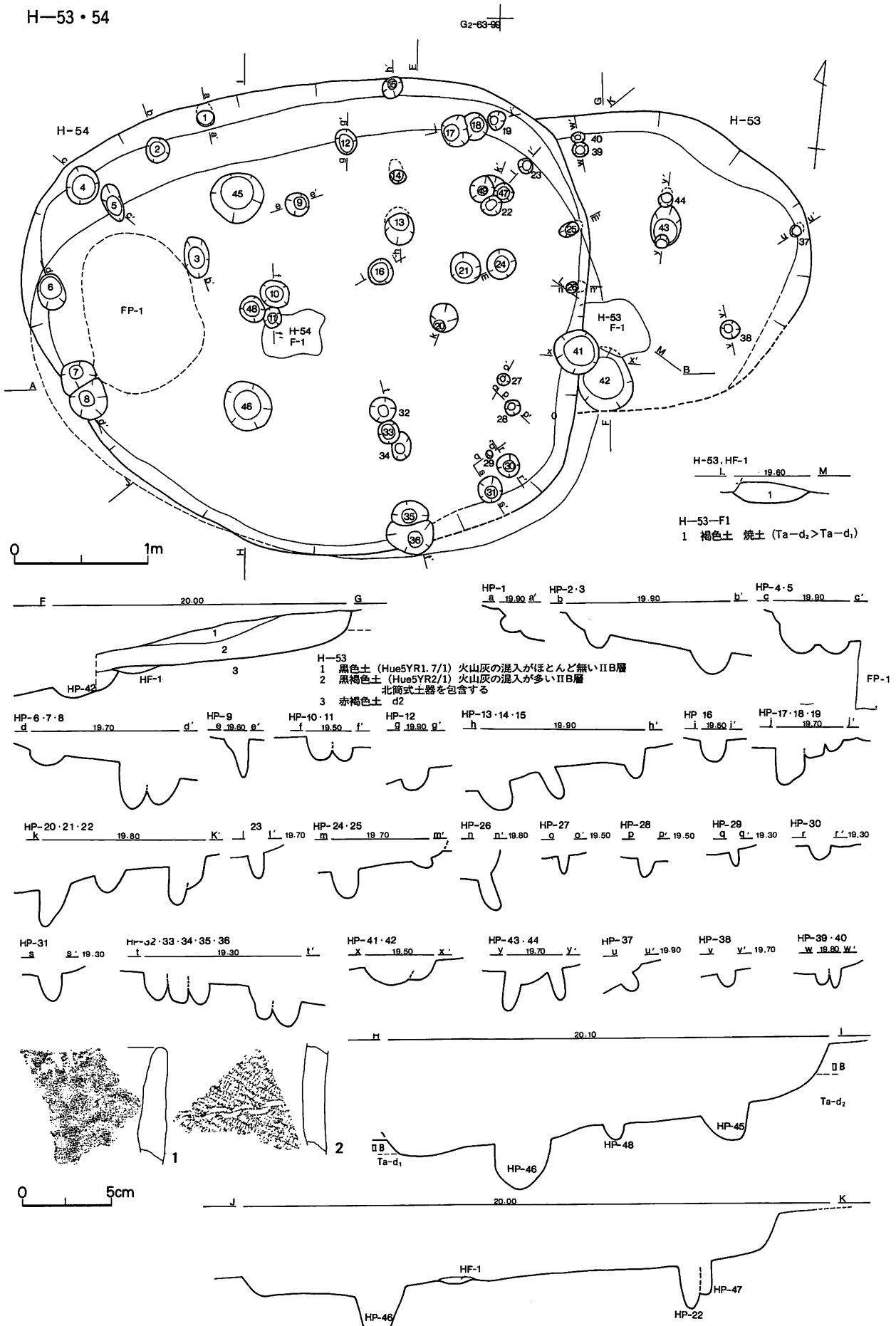
時期 縄文時代中期後半

H-54(図II-5、図版II-2-3・図版II-3-8)

位置 G₂-63-87・97 規模 4.20/3.92×3.48/3.26×0.33 m

特徴 H-48と重複し、H-48より一回り大型の、平面形が卵形を呈する住居跡である。掘り込み面は5層上面で、覆土は1層を主体とするものにTa-d₁が少量混じる腐植土である。H-48はその覆土に掘り込まれている。床面はTa-d₂層に掘り込んだもので、やや傾斜しており斜面下側が低くなってい

H-53・54



図II-5 H-53・54と出土遺物

る。壁は斜面上側では急に立ち上がるが、下側はわずかな立ち上がりである。床面中央部よりやや西側には炉が認められる。柱穴は斜面上側の壁際で検出されたP-1・2・4・5・15・19以外はH-48・H-53のものと判別不可能であった。

遺物 床面から有意の礫、杭穴 HP-34 から石斧片、HP-38 からチップが出土している。

時期 縄文時代中期後半から後期初頭の H-53 より新しく H-48 より古い時期と考えられる。またフラスコ状ピット（FP-1）と重複するが新旧関係はわからなかった。（皆川 洋一）

H-49（図II-6、図版II-1-2）

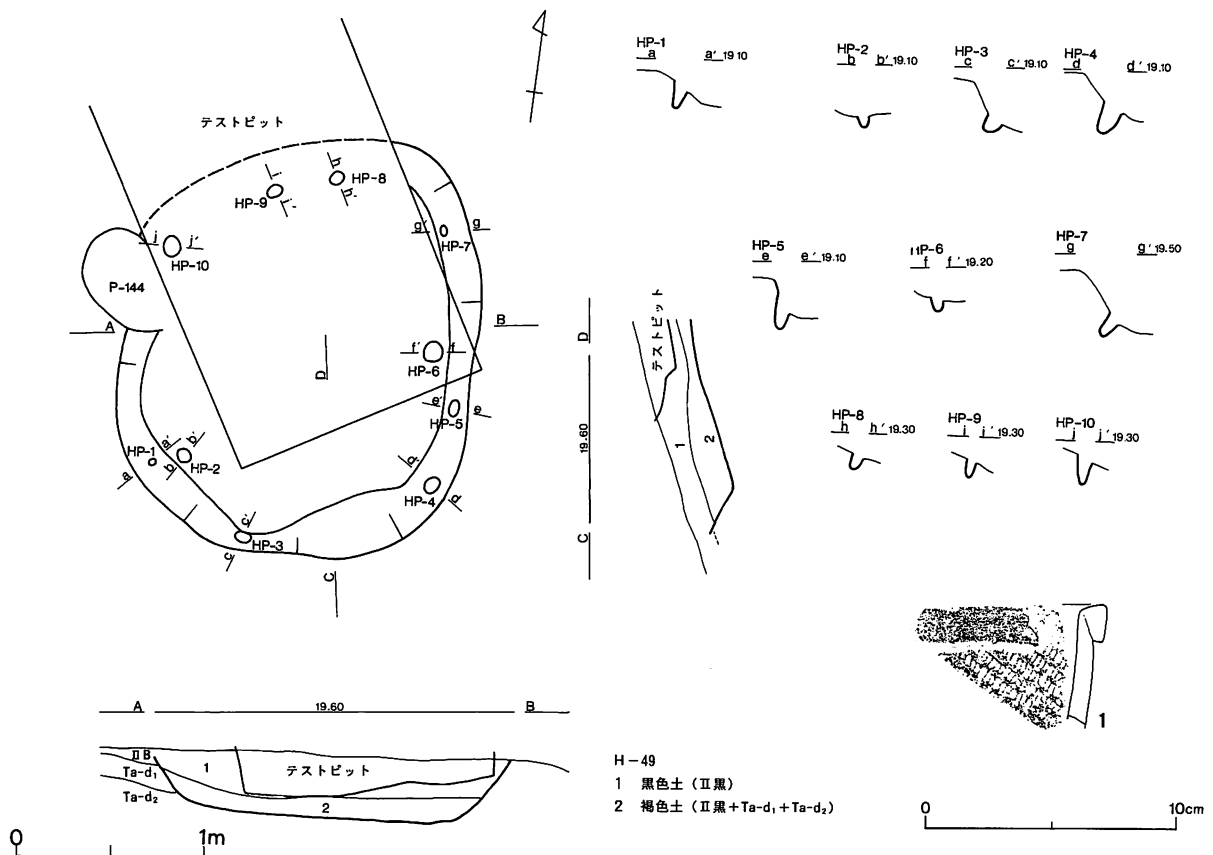
位置 H₁-63-08 **規模** 2.34/1.98×1.88/1.52×0.33 m

特徴 標高 19 m の斜面に位置する。II黒層を 10 cm ほど掘り下げたところで黒色土の落ち込みを検出した。覆土は 2 層に分れ、上部はII黒層上部に堆積しているのと同種の比較的軟らかい粘質の黒色土（覆土 1 層）、下部は Ta-d₁ を多く含む黒褐色土（覆土 2 層）である。掘り込み面はII黒層上部。試掘調査のテストピットによって攪乱されていて北側の壁は確認できなかったが、平面形は長円形と推定される。床は Ta-d₂ 層中につくられ、斜面の傾斜に沿って南側に傾斜している。壁は急角度で立ち上がる。壁際に 10 か所、柱穴と考えられる小ピットがめぐる。炉跡は検出されなかった。北西部では P-144 に切られている。

遺物 覆土 1 層から V 群 b 類土器の小片、覆土 2 層上面から IV 群 a 類土器(1)とフレイク・チップが出土した。1 は口縁に折り返し状の無文の貼付帯をめぐらすものである。貼付帯は体部の縄文施文後につけられている。貼付帯及び口唇はなで調整されている。胎土には小礫が多く含まれている。

時期 覆土の遺物から IV 群 a 類（余市式）の時期と考えられる。（工藤 研治）

H-49



図II-6 H-49と出土遺物

H-52 (図II-7、図版II-2-5)

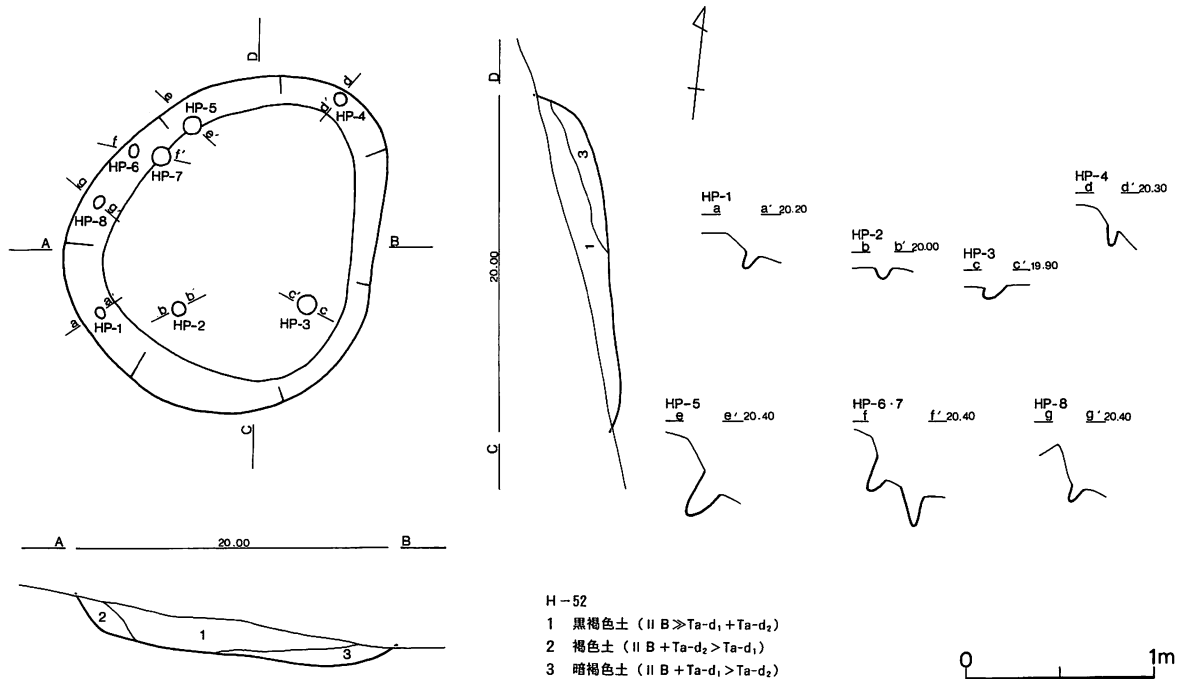
位置 H₁-67-07 規模 1.89/1.49×1.62×1.28 m

特徴 標高 20 m の斜面に位置する。II黒層調査中に黒色土の落ち込みを確認し、トレンチを掘って壁と床面を検出した。当初、規模から判断してやや大形の土壌かと考えていたが、床面を精査したところ柱穴様の小ピットが8か所検出され、住居跡と判断した。床は Ta-d₂ 層中につくられ、南側に傾斜している。壁は緩やかに立ち上がる。炉跡はない。覆土の堆積状態は H-49 とほぼ同じで、上部には軟らかい黒色土、下部にはやや堅い黒褐色土がみられる。

遺物 覆土からフレイク・チップ、礫等が出土している。

時期 覆土の堆積状態、隣接する遺構の時期から判断してIV群 a 類土器の時期と考えられる。

H-52



図II-7 H-52

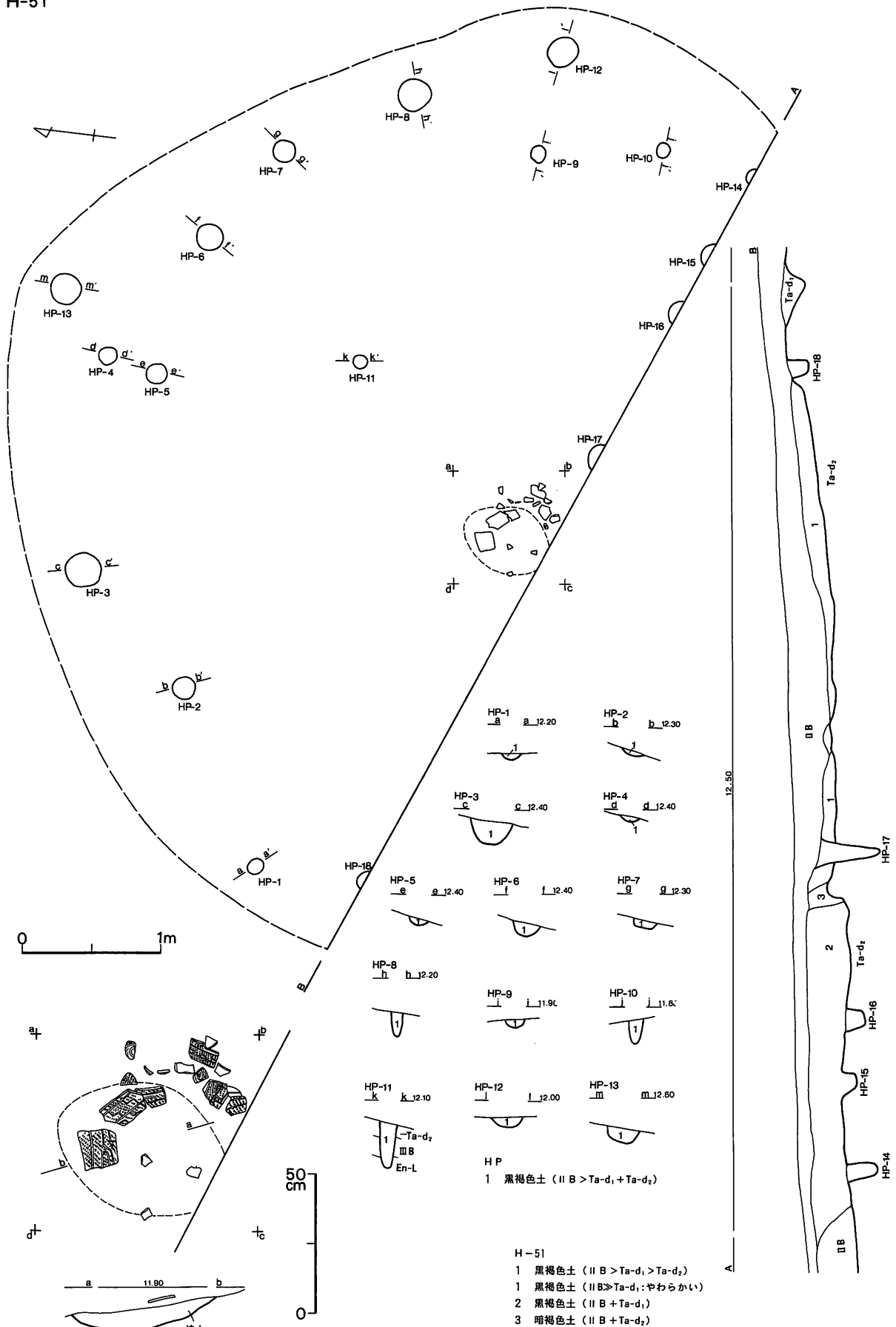
H-51 (図II-8、図版II-4-9)

位置 G₂-64-93・94、H₁-64-03 規模 9.72/-×-/m

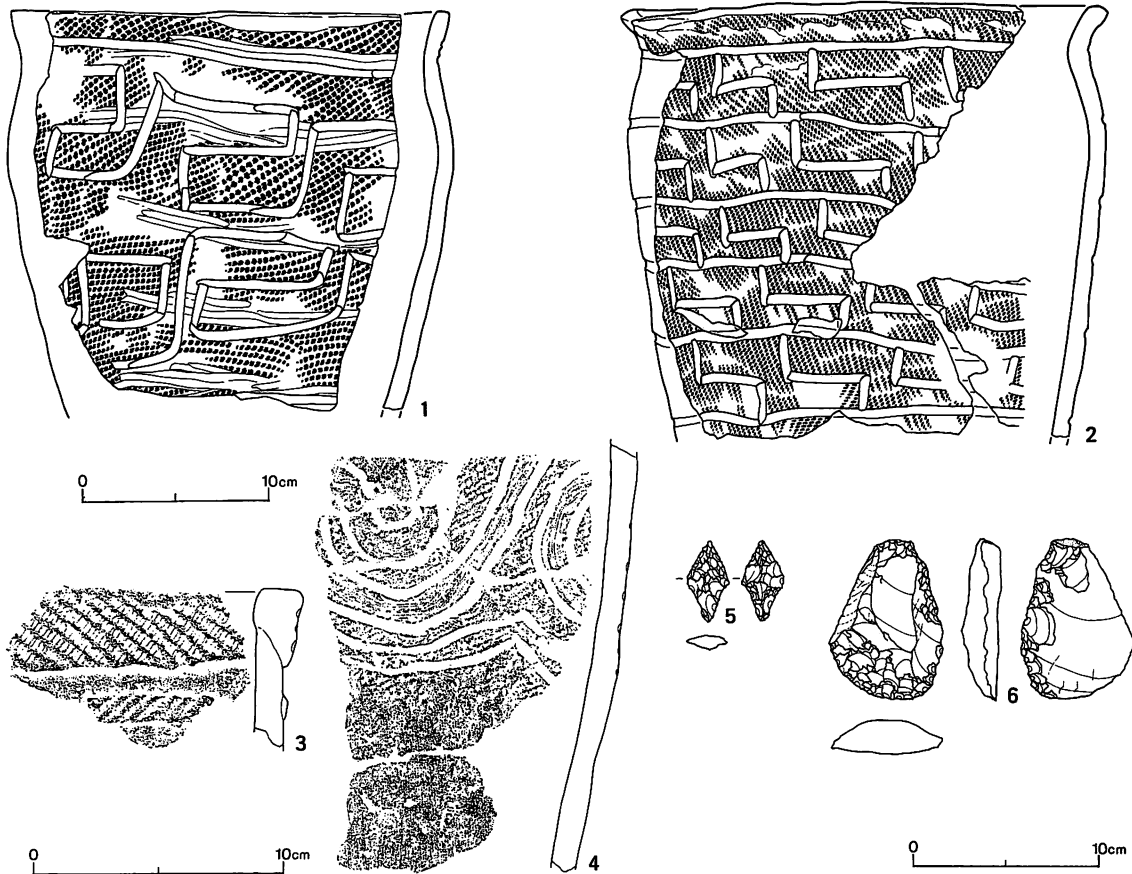
特徴 標高 12 m の緩斜面に位置する。南側は調査区域外となっているので完掘していない。包含層調査中、II黒層上部の軟らかい黒色土が他の区域よりも厚く堆積しているのが認められ、遺構を想定して南北にトレンチを掘ったが確認できなかった。その後、調査区域境界付近のII黒層中でIV群 a 類土器が3個体分まとまって出土し、その下面で焼土が検出された。焼土の周囲を Ta-d₂ 層上面まで掘り下げると、柱穴状の小ピットが18か所、焼土を囲むように並んでいるのが認められた。

土層断面図に示したように焼土は1層上面の浅い窪地にあり、II黒層上部で認められる軟らかい黒色土に直接覆われている。1層、2層は自然堆積のII黒層に類似するけれども、Ta-d₁ や Ta-d₂ の粒子が多く含まれていて色調が若干異なることから区別したものである。土層の断面にかかっている柱穴状のピットには1層の上部から掘り込まれたものと、それより下位から掘り込まれたものがあり、複数の遺構が重複していた可能性がある。仮にこれらが遺構だとすれば、Ta-d₂ 上面あたりに床をつくる浅い掘り込みの遺構と考えられる。ここでは、1層上面の浅い窪みを利用した生活面を住居跡様の遺

H-51



図II-8 H-51



図II-9 H-51 出土遺物

構と考え、H-51として報告する。平面図には便宜的に柱穴状ピットの外郭を結んだ範囲を示している。

遺物(図II-9) 覆土から石鏃(5)、床面直上からIV群a類土器(1~4)、スクレイパー(6)、フリック・チップが出土している。3はIV群a類の余市式土器。口縁部にあらかじめ広い無文部を設け、その上に幅広の貼付帯をめぐらしている。その下位には細い貼付帯が認められる。幅広の貼付帯には原体を縦方向に、細い貼付帯には原体を横方向に回転した整った縄文が施されている。縄文の原体は0段多条のLRである。口唇及び内面はなで調整されているが、調整は雑で凹凸が残る。1・2・4は焼土の上位から出土した厚手の土器である。いずれも縄文を施した後に沈線で文様が描かれている。1・2は口縁部がやや外反し体部が張る平縁の深鉢である。1は縄文の上にヘラ状もしくは荒い櫛状の工具による浅い条線が数状めぐり、太い沈線で大柄な「雷文」風の文様が2段描かれている。口縁と体下半部にはそれを区画する太い横走沈線がめぐり、体部にはLRLの原体による複節縄文が施される。口唇の断面はやや丸みを帯びた角形で、口唇及び内面は丁寧に調整されている。口唇の角の一部は削り落されている。2は頸部から体下半部にかけて4cmほどの間隔で沈線がめぐり、その間に「L」状文が描かれている。地文はRLの原体による縄文である。口唇はヘラ状工具で平坦に削り取られて断面が角形になる部分と、なで調整だけで丸みを帯びている部分がある。内面は丁寧に調整されている。4は胴部破片である。LRの原体による縄文を施した後、櫛状工具による渦巻き状の文様が描かれ、沈線によって縁取りされている。内面は丁寧に調整されている。5は有茎石鏃。6はスクレイパー。下縁に急角度の刃部が作られている。5・6ともに黒曜石製。

時期 床面直上の遺物からIV群a類(入江式)土器の時期と考えられる。

(工藤 研治)

(2) フラスコ状ピット

FP-1（図II-10、図版II-5-13）

位置 G₂-63-97 規模 1.22/1.41×0.83/1.08×0.44 m

特徴 標高19.0~20.0 mの斜面中腹よりやや上方に位置するフラスコ状ピットである。

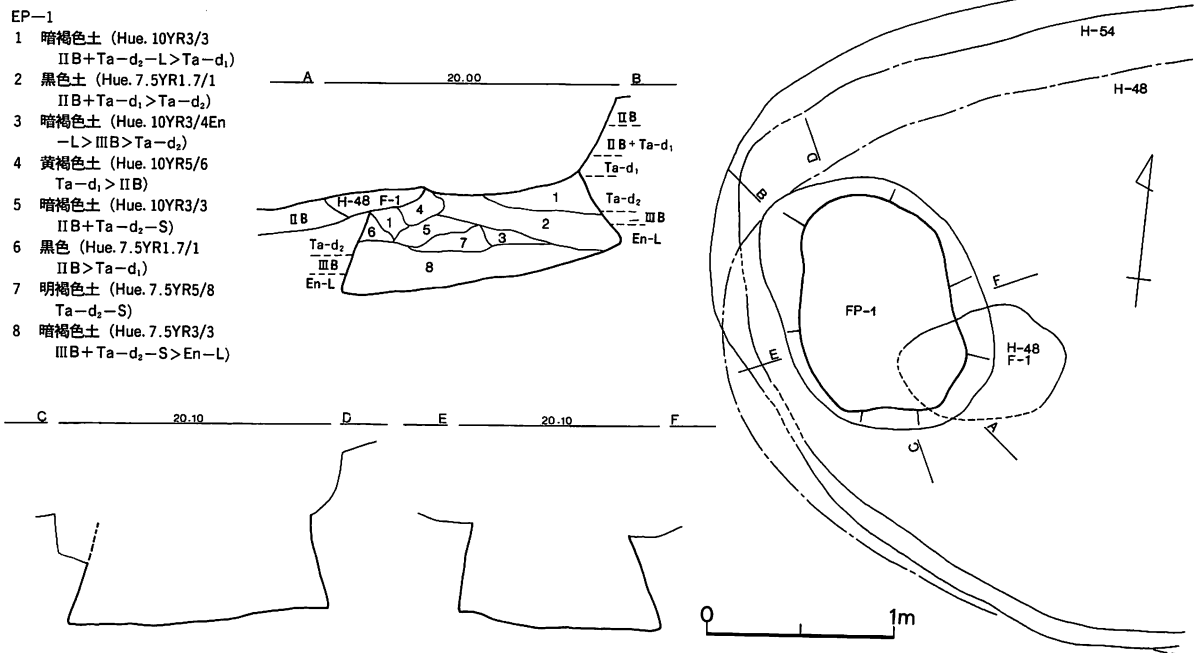
H-48の床面で検出された。確認面と墳底面の平面形は不整楕円形で、フラスコ状ピットとしては比較的小型である。墳底はEn-L層中に作られており、中央でやや窪む以外はほぼフラットである。壁は墳底の全周から鋭角的に立ち上がる。覆土は斜面上側から流れ込んだII黒、Ta-d₁、Ta-d₂である。本遺構はH-48が作られる以前に作られているが、H-54との新旧については不明である。

このフラスコ状ピットは美沢川流域の遺跡群の調査では初めての検出例である。

遺物 覆土中から北筒式土器片とフレイクが出土している。

時期 周囲の遺構の時期と同じ縄文時代中期後半から後期初頭と思われる。（皆川 洋一）

FP-1



図II-10 FP-1

(3) 土壌

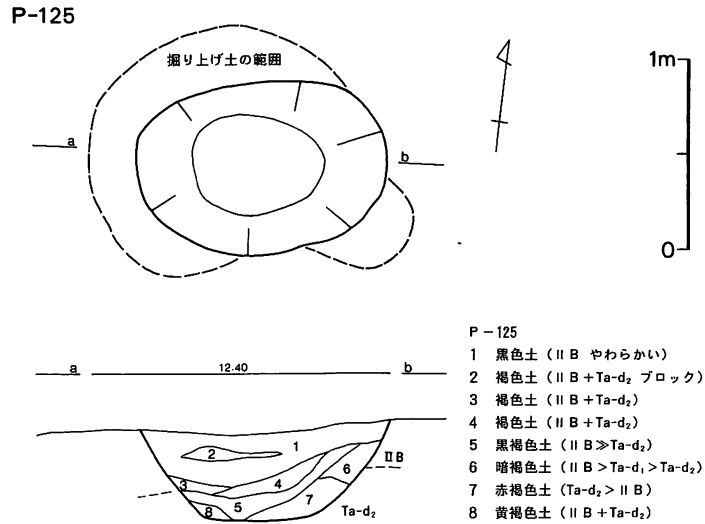
P-125（図II-11）

位置 G₂-64-84 規模 1.32/0.69×0.92/0.54 m

特徴 標高約12 mの暖斜面に位置する。II黒層を5 cmほど掘り下げたところで黒色土の落ち込みを確認した。周囲にはこの遺構の掘り上げ土とみなされるTa-d₂やTa-d₁が認められた。平面形は小判形である。底はTa-d₂層まで掘り込まれていて、壁は緩やかに立ち上がり、断面はすり鉢状になっている。掘り込み面はII黒層の上部である。

遺物 遺物は覆土の上部から礫が1点出土した。

時期 II黒層上部から掘り込まれていること、周囲から出土した遺物、隣接する遺構の時期から、IV群 a 類土器の時期と考えられる。



図II-11 P-125

P-130 (図II-12)

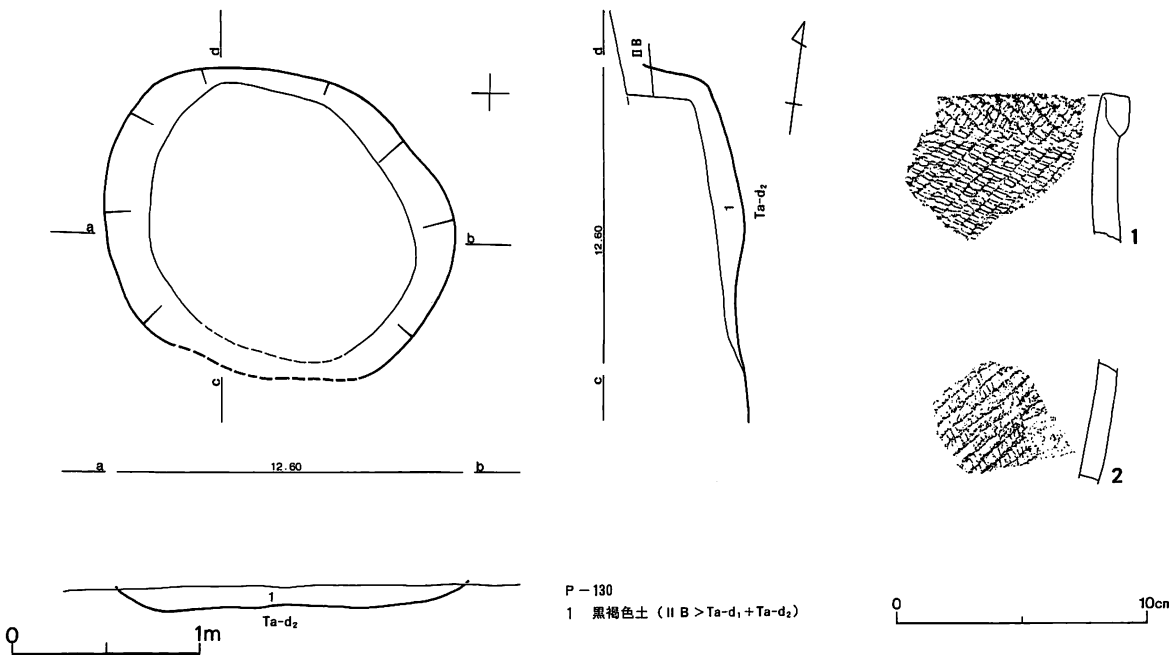
位置 G₂-64-83 規模 1.81/1.50×1.64/-m

特徴 標高約 12 m の緩斜面に位置する。G₂64-84 区を Ta-d₂ 層上面まで掘り下げたところで黒色土の落ち込みを確認した。斜面の下方では壁の立ち上がりを確認することができなかったが、平面形は円形と考えられる。底は Ta-d₂ 層を掘り込んでいて凹凸がある。掘り込み面は II 黒層上部である。

遺物 覆土から IV 群 a 類土器 (1・2)、フレイク・チップが出土した。1 は口縁に貼付帯がめぐるので、器面には縦位、貼付帯上には横位の縄文が施されている。口唇及び内面は丁寧に調整されている。この土器は昨年度 H-43 の床直上から出土したもの (北埋調報 69 図 III-5-1) と同一個体である。2 は 0 段多条の RL の原体による縄文が施されたもので、内面は丁寧に調整されている。

時期 覆土の遺物から IV 群 a 類 (余市式) の時期と考えられる。

P-130



図II-12 P-130と出土遺物

P-137（図II-13）

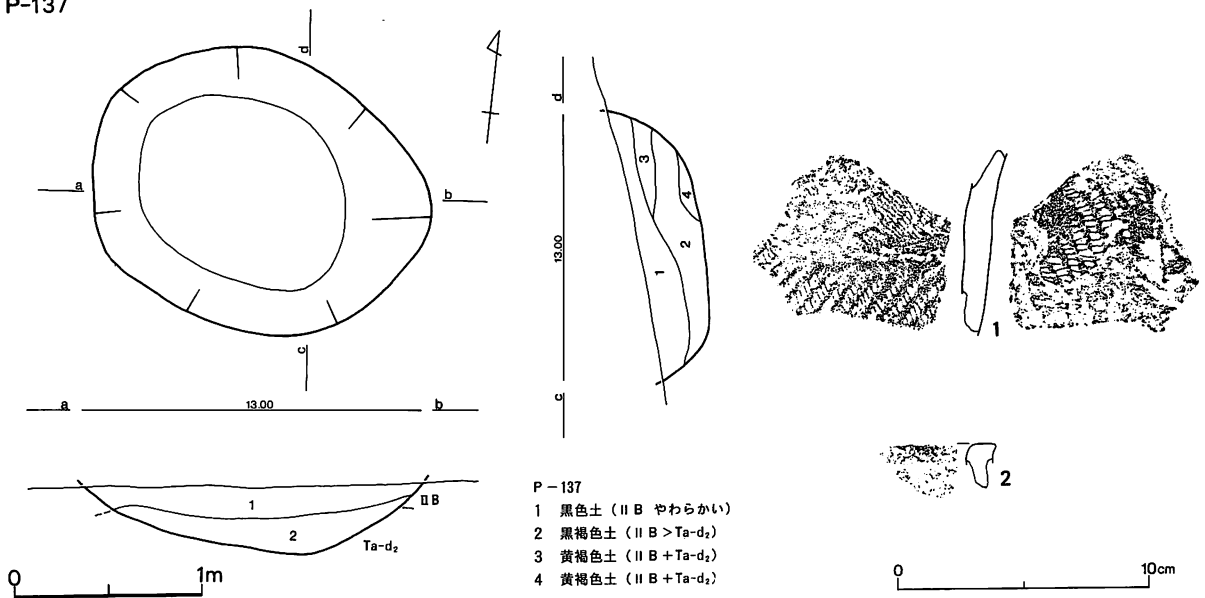
位置 G₂-64-83 規模 1.83/1.15×1.47/0.94 m

特徴 標高 12.5 m の暖斜面に位置する。II黒層を 10 cm ほど掘り下げたところで黒色土の落ち込みを確認した。平面形は不整円形。底は Ta-d₂ 層中にあり、壁はゆるやかに立ち上がる。

遺物 覆土からIII群 b-3 類(1)、IV群 a 類(2)土器、フレイク・チップが出土した。1 は口縁に近い部分で、体部には結節のある 0 段多条の LR の原体による縄文が施されている。内面にも縄文が施されている。胎土には繊維が含まれている。2 は器面が大きく剥落しているが、一部に縄文が認められる。口唇は平坦で丁寧になで調整されている。同一個体と思われる破片が多数出土しているが、小片で器面の剥落が激しい。

時期 覆土の遺物からIV群 a 類土器（余市式）の時期と考えられる。

P-137



図II-13 P-137と出土遺物

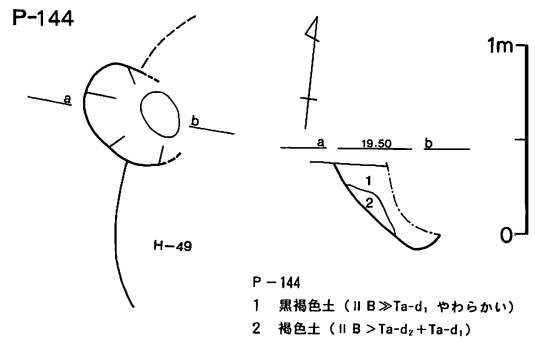
P-144（図II-14）

位置 H₁-63-32・42 規模 -/-×-/-m

特徴 H-49 調査中に検出された。H-49 の北西の壁を切っている。平面形は円形とみなされる。底は Ta-d₂ 層まで掘り込まれ、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

時期 H-49 を切っていること及び周辺の出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

（工藤 研治）



図II-14 P-144

(4) Tピット

TP-2 (図II-15、図版II-5-14)

位置 H₁-63-64 規模 2.10/1.37×0.95/0.31×1.42 m

特徴 台地縁辺部の標高 22.0~23.0 m のコンタに直交する T ピットである。確認面は Ta-d₂ 層上面で、掘り込み面はII黒層中である。平面形は長楕円形を呈し、En-P 層の墳底には杭跡はない。本遺跡で検出された T ピットでは最大である。

時期 不明

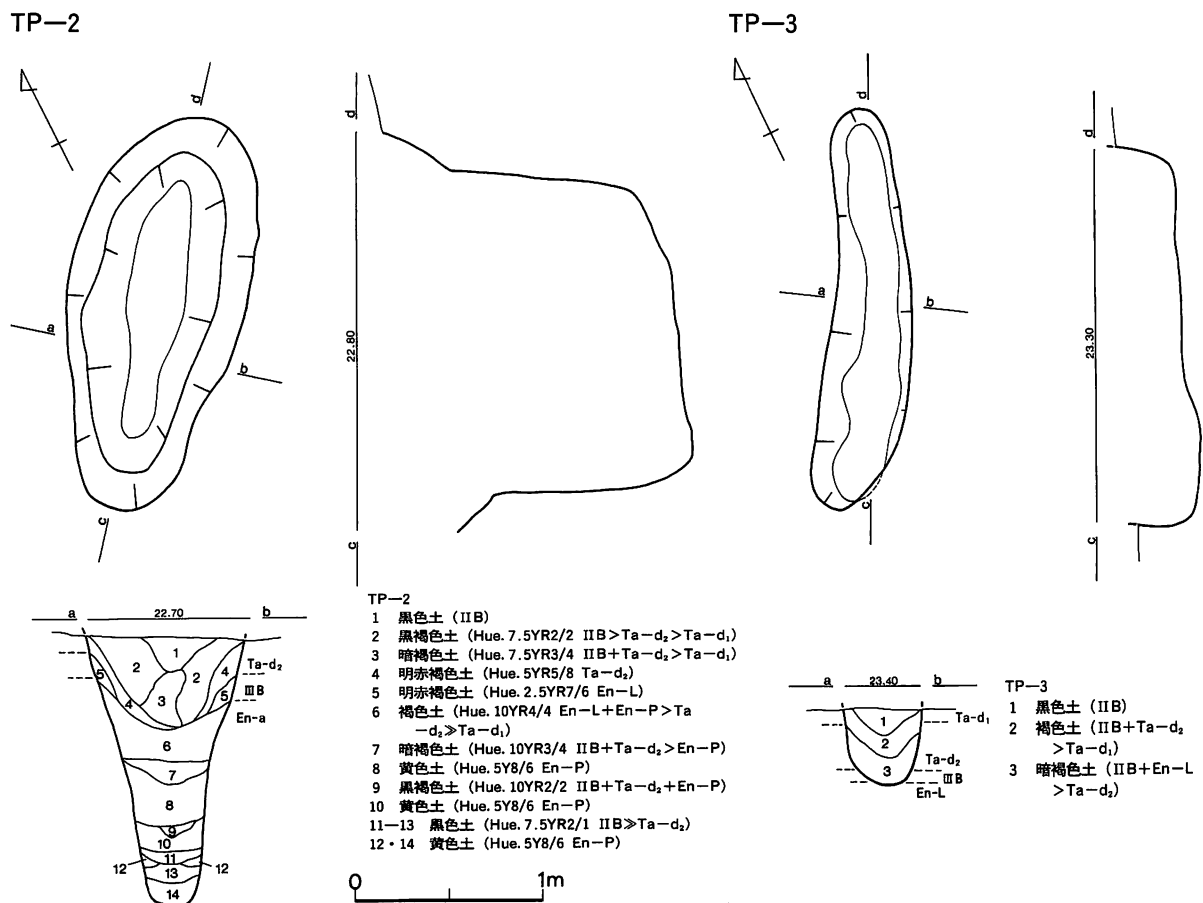
TP-3 (図II-15、図版II-5-15)

位置 H₁-63-35・36 規模 2.11/1.98×0.31/0.18×0.40 m

特徴 台地縁辺部の標高 23.0~24.0 m のコンタに直交する T ピットである。確認面は Ta-d₂ 層上面で、掘り込み面はII黒層中である。平面形は溝形を呈し、掘り込みは浅く、En-P 層の墳底には杭跡はない。昨年度の調査で検出された TP-1 と形態、立地の面で似ていることから、これと列をなすものと考えられる。

時期 不明

(皆川 洋一)



図II-15 TP-2・TP-3

3 縄文時代晩期の遺構とその遺物

(1) 住居跡

H-47（図II-17）

位置 H₁-63-32・42 規模 2.79/2.46×2.47/1.99 m

特徴 標高 23 m の台地の縁に位置する。テストピットの壁で黒色土の落ち込みが認められたので精査した結果、遺構であることがわかった。北東部分はテストピットで攪乱されているが、平面形は隅丸の方形に近いとみなされる。床は Ta-d₂ 層中につくられ、壁は急角度で立ち上がる。壁際には柱穴が 8 か所めぐる。炉跡はない。

遺物 遺物は覆土 1 層から 2 層にかけて多く出土している。覆土から V 群 b 類土器、石鏃片、石錐 (1)、フリイクが出土している。土器は包含層出土のものと接合するものや同一個体のものがあるので別項（II-5）で一括して記載する。1 は石錐。機能部は摩耗している。珪質頁岩製。

時期 覆土の遺物から V 群 b 類土器の時期とみなされる。

（工藤 研治）

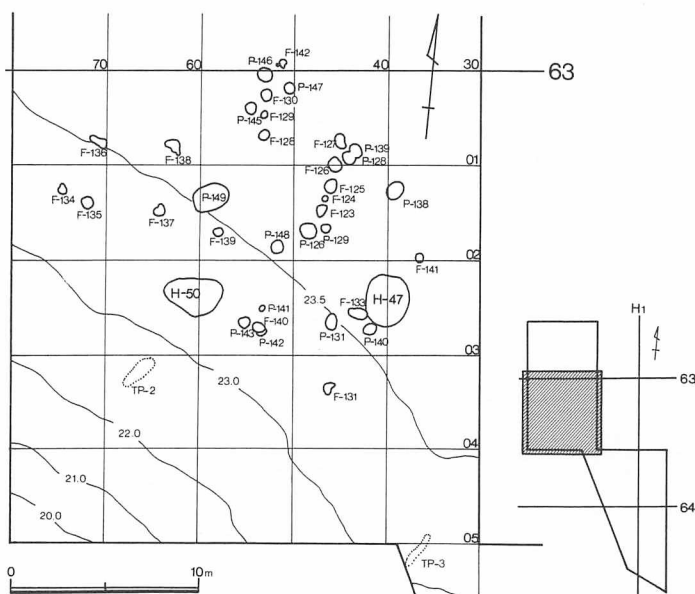
H-50（図II-18・19、図版II-6-1-・18）

位置 H₁-63-33・34 規模 2.49/2.30×1.91/1.86×0.08 m

特徴 標高 23.0～24.0 m の台地縁辺に立地する。平面形が不整形で比較的小型の住居跡である。

II 黒層上面で浅い窪地と骨粉の集中を認め、コンタに直交するトレンチを設定して調査した。床面は II 黒相当層から Ta-d₂ 層にかけて浅く掘り込まれたフラットなもので、炉、土壇（P-1）、柱穴（P-3～7）が検出されている。また、本住居跡に接して土壇（P-2）が検出されている。覆土は廃棄された大量の縄文時代晩期の遺物を含む II 黒（1・2 層）と、骨粉や焼土粒を含む土壇（3 層）である。炉は、窪地中央部の骨粉集中の直下から検出された。焼土層の厚い楕円形のもので、床面のほぼ中央部に位置する。P-1 は台地側の壁際に位置する小型の土壇で、内部には縄文時代晩期の土器と骨粉を含む焼土粒が認められた（図II-19）。P-2 の覆土は P-1 と同じである。柱穴に入っているのは II 黒である。P-1・2 の両土壇は、本住居跡に付属するものであると考えられる。

遺物 床面からは縄文時代晩期の土器片、石鏃片、フリイク、たたき石が出土している。1～5 は床



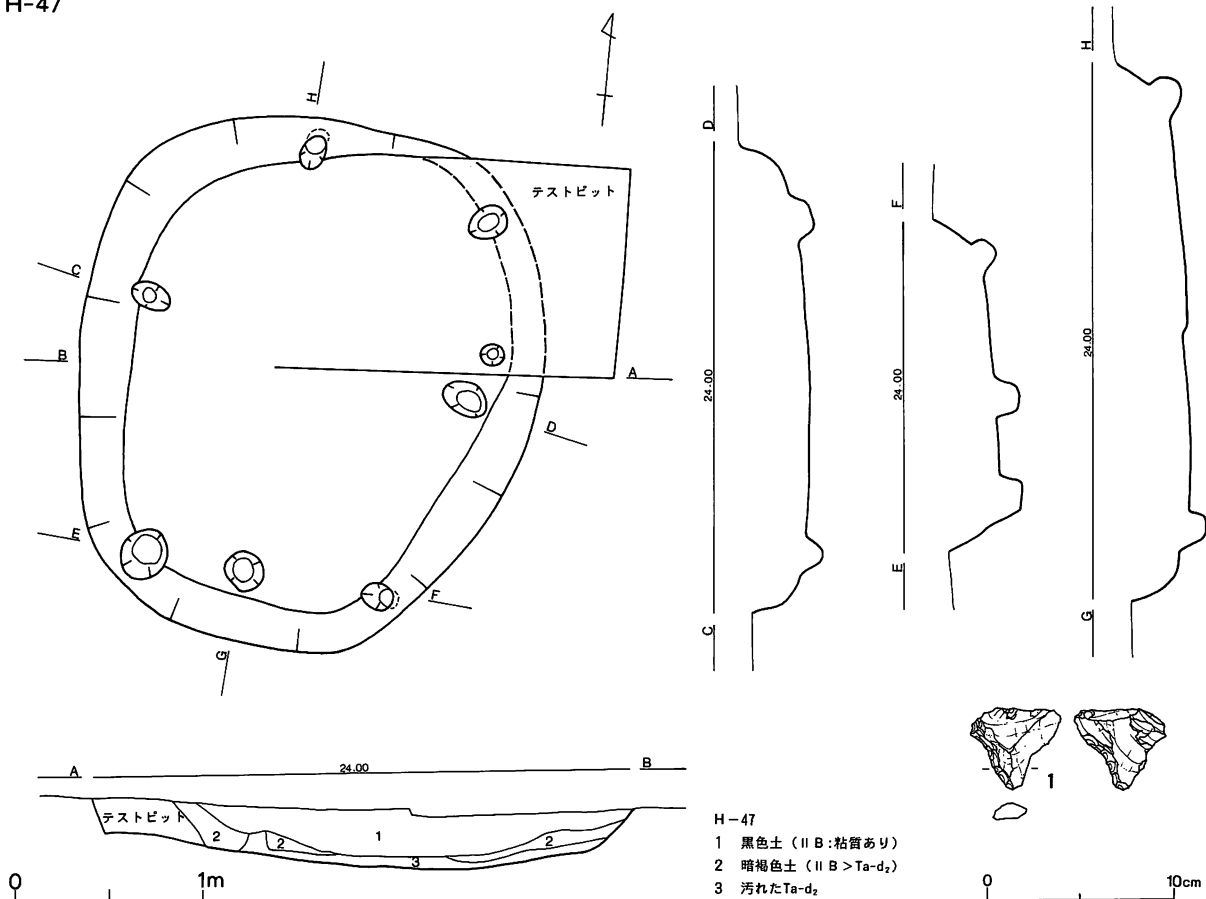
面と覆土と包含層のものと接合した復元個体で、縄文時代晩期中葉のものである。これについては、本遺跡の包含層出土の土器の項でまとめて記載する。（II-5・参照）。6 は緑色泥岩製の石斧をたたき石に転用したものである。炉の焼土中からは魚類と哺乳類の遺存体が検出されている。

時期 縄文時代晩期中葉

（皆川 洋一）

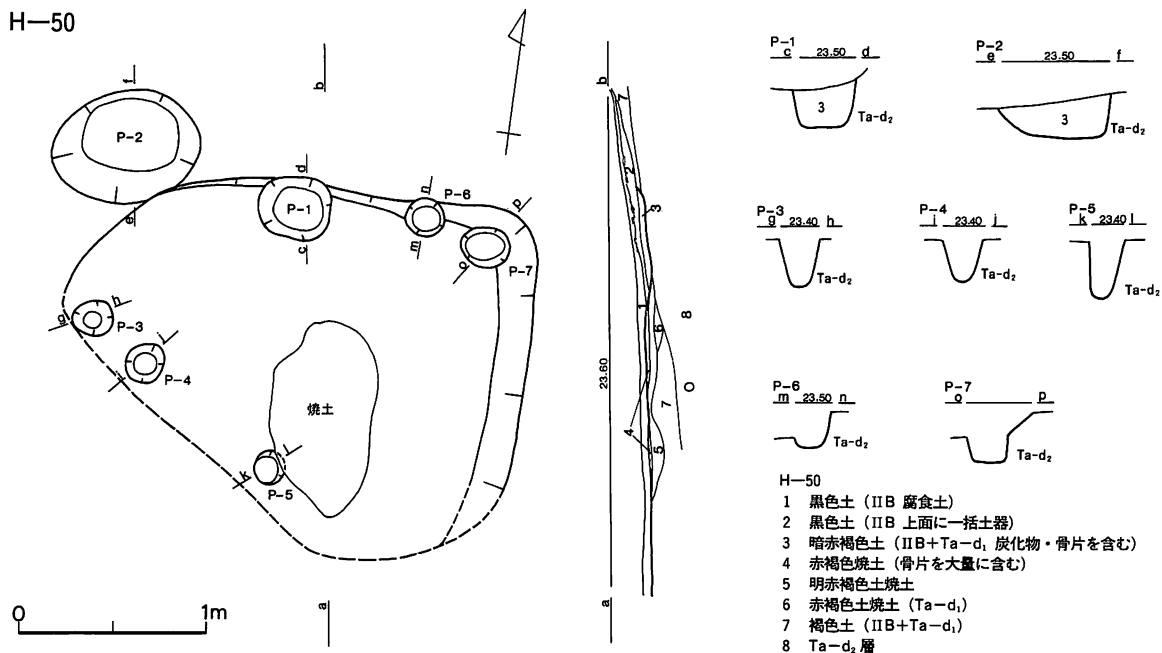
図II-16 縄文時代晩期の遺構位置図

H-47



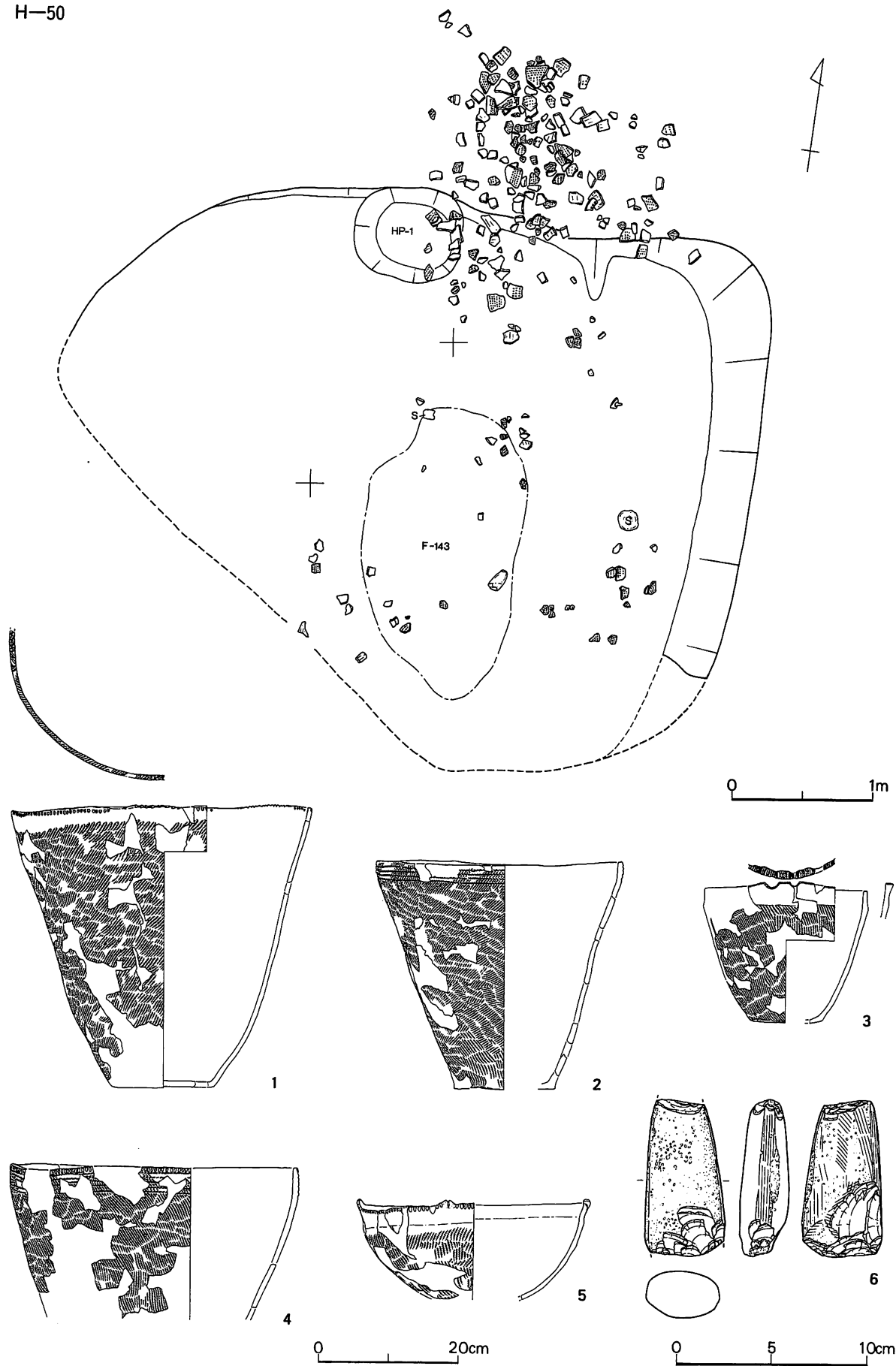
図II-17 H-47と出土遺物

H-50



図II-18 H-50

H-50



図II-19 H-50出土遺物と遺物出土状況

(2) 土壌墓

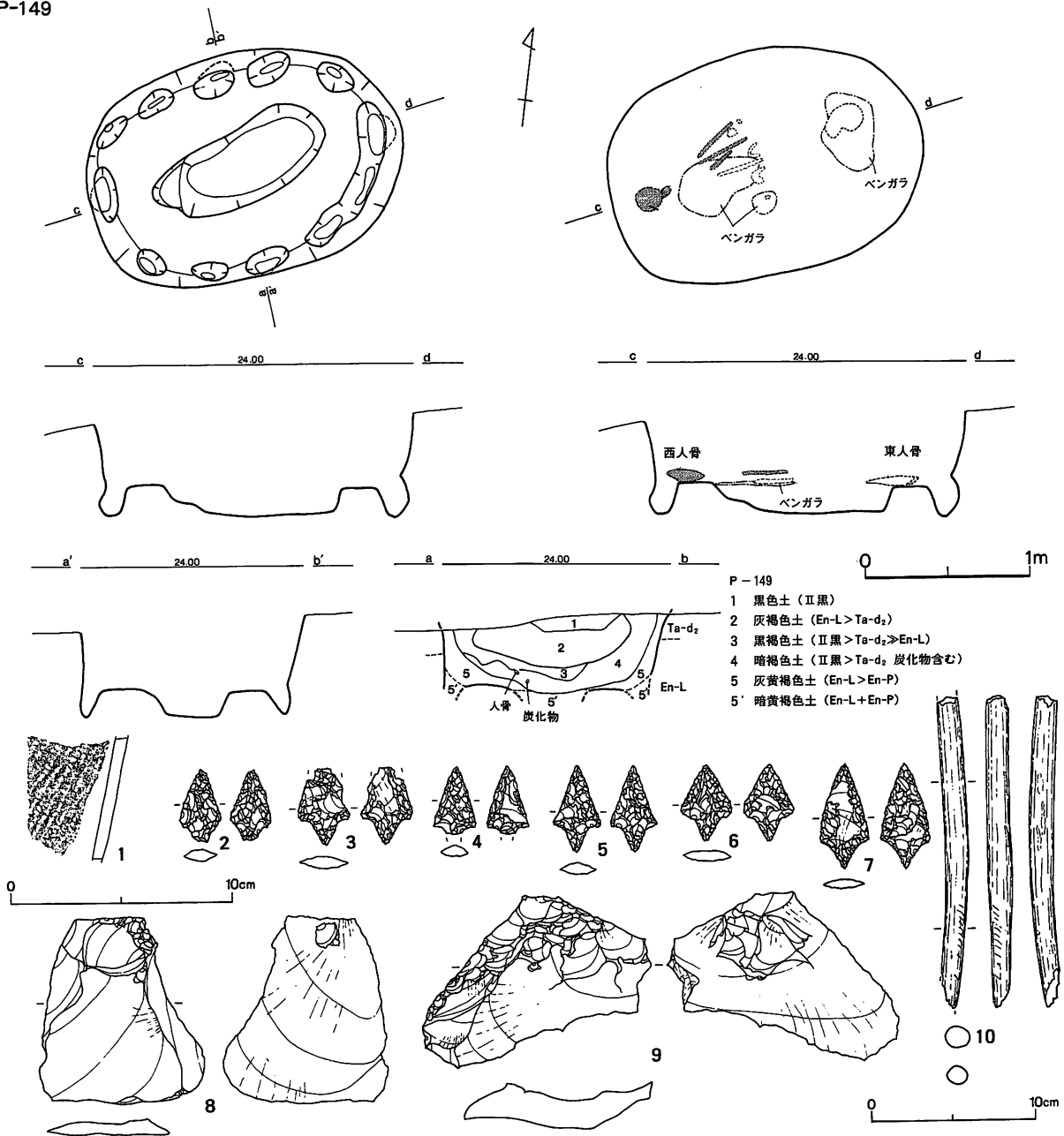
P-149 (図II-20、口絵1、図版II-19~22)

位置 H₁-63-51・61 規模 1.92/1.71×1.34/1.11 m

特徴 標高約 23 m の台地上に位置する。II黒層上面で浅い窪みとして認められた。トレンチを掘って調査したが、土層の堆積状態から風倒木痕と判断し、調査を中断していた。しかし、Ta-d₂層上面まで掘り下げたところ、風倒木痕とは異なる落ち込みと認められたので再調査した結果、合葬墓であることがわかった。覆土は最上部に黒色土(覆土1層)、次いでEn-Lを主とする黄褐色土(覆土2層)、その下部にはTa-d₂をやや多く含む黒褐色土(覆土3・4層)、墳底から壁際にかけてはEn-L主体の黄褐色土(覆土5層)が認められ、土の色を区別して埋め戻されている。(口絵1)

平面形は小判形。長軸方向はN-Eで、ほぼ東-西である。掘り込み面はII黒層上部と推定される。

P-149



図II-20 P-149と出土遺物

墳底はEn-L層中につくられているが、中央部はさらに15cmほど掘り込まれ、En-P層上部まで達している。墳底の壁際には柱穴状の小ピットが12個めぐる。小ピットの深さは15cm前後であり、内傾している。この壁際にめぐる小ピットと中央部の掘り込み部は人骨取り上げ後検出されたもので、覆土はEn-LにEn-Pが混じる軟らかいくすんだ黄褐色土(覆土5層)である。

墳底では2体分の頭骨と糊状になっている体部の骨が検出された。頭骨は長軸方向の東側と西側の壁際にあり、それぞれ「東人骨」、「西人骨」と呼称している。体部の骨は覆土5層上面と覆土4層中の上下2面で検出されているので、東・西兩人骨は中央部で重なっていると考えられる。この人骨については調査時の状況から、上位から検出されたものを西人骨、下位で検出されたものを東人骨の体部と考えている。東人骨頭部の周囲と5層上面にはベンガラが認められた。

なお、これらの人骨の鑑定結果については別項に記載されている(付)。

遺物 西人骨頭部の上で骨角器(10)、覆土5層上面から4層にかけてV群b類土器(1)、石鏃(2~7)、フレイク(8・9)が出土している。1はV群b類土器の胴部破片LRの原体による条のまばらな縄文が施されている。2~7は石鏃。いずれも有茎凸基である。8・9は大形のフレイク。2~9は黒曜石製。10は骨角器。現存する長さは9.2cm、厚さ0.5cmで断面は丸い。表面は丁寧に加工されている。形状及び出土位置からヘアピンの類かと考えられる。獣骨の緻密な部位を素材としている。

時期 V群b類土器の時期と考えられる。

(工藤 研治)

(3) 土壌(図II-21・22、図版II-8)

晩期の土壌は14か所が検出された。分布はすべて調査区北側の台地上で、標高23.0mと24.0mの間の平坦部に位置する。遺構覆土内および周辺からはV群b類土器とこれに伴う石器等が出土している。平面形は楕円形、円形のものほとんどで、規模は確認面長軸で0.7m前後、深さは検出面から0.3m前後である。

また、4か所の土壌覆土から焼けた獣骨片が検出された、周辺には焼けた動物遺存体を含む焼土群が分布しており、土壌出土の動物遺存体はこれら焼土からの流れ込みと考えられる。焼土内からもV群b類土器とこれに伴う石器等が出土しており、台地上の土壌および焼土群は同時期のものと考えられる。

P-126

II黒層上面で円形の浅い落ち込みを認め、トレンチをいれて確認した。平面形は円形に近い楕円形を呈する。墳底は平坦でIII黒層まで掘り込まれている。1層からは流れ込みと思われるシカやイノシシの焼骨が検出された。2~3層は埋め戻されていて、その形態や覆土の状態から土壌墓の可能性も考えられる。遺物はV群b類の土器とIII群b-3類土器が出土している。

P-128

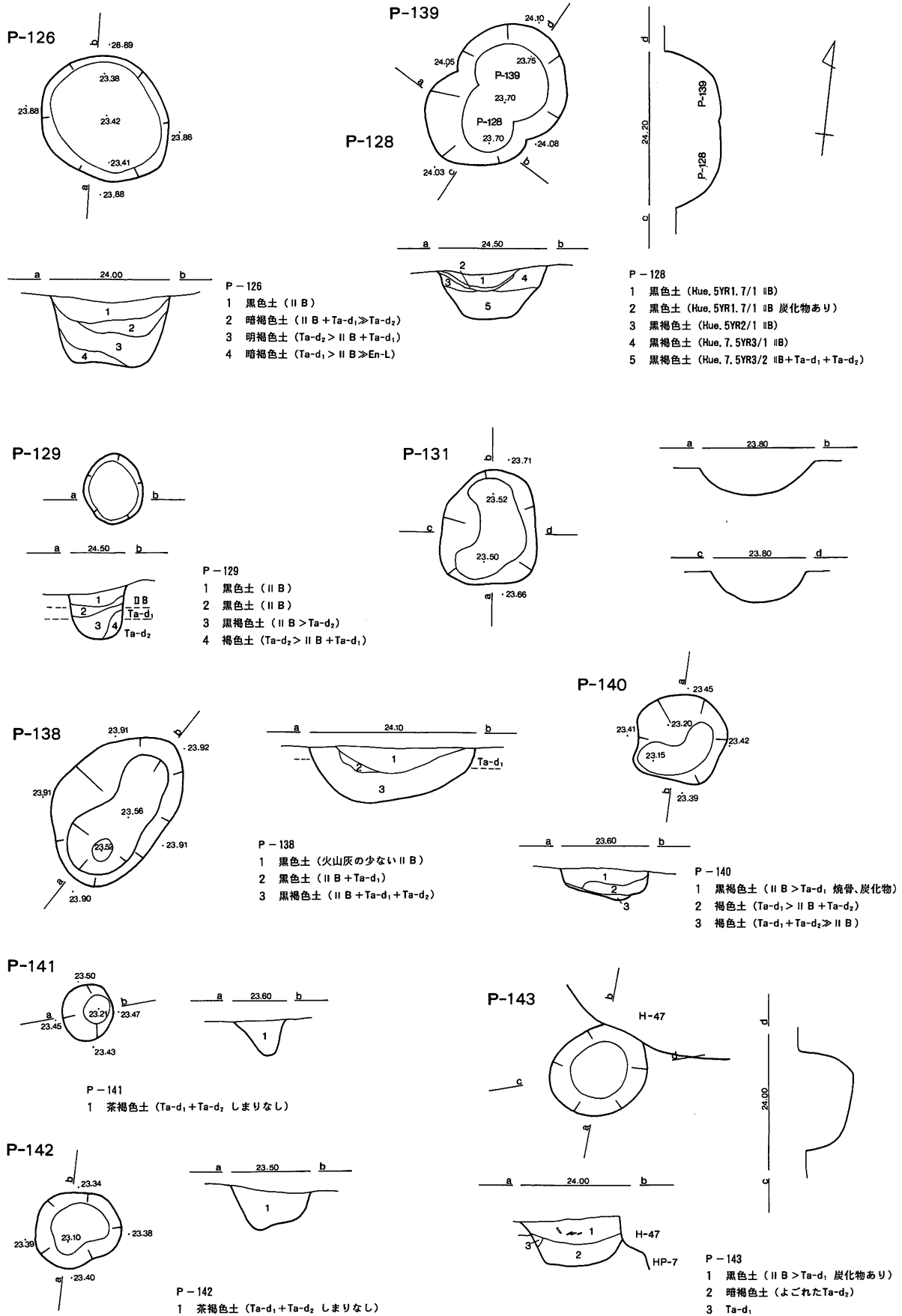
II黒層上面で円形の浅い落ち込みとして確認された。ほぼ円形を呈し、隣接するP-139を切っている。墳底はTa-d₂層を掘り込んでいる。2層では炭化物が多く見られた。遺物はV群b類の土器が出土している。

P-129

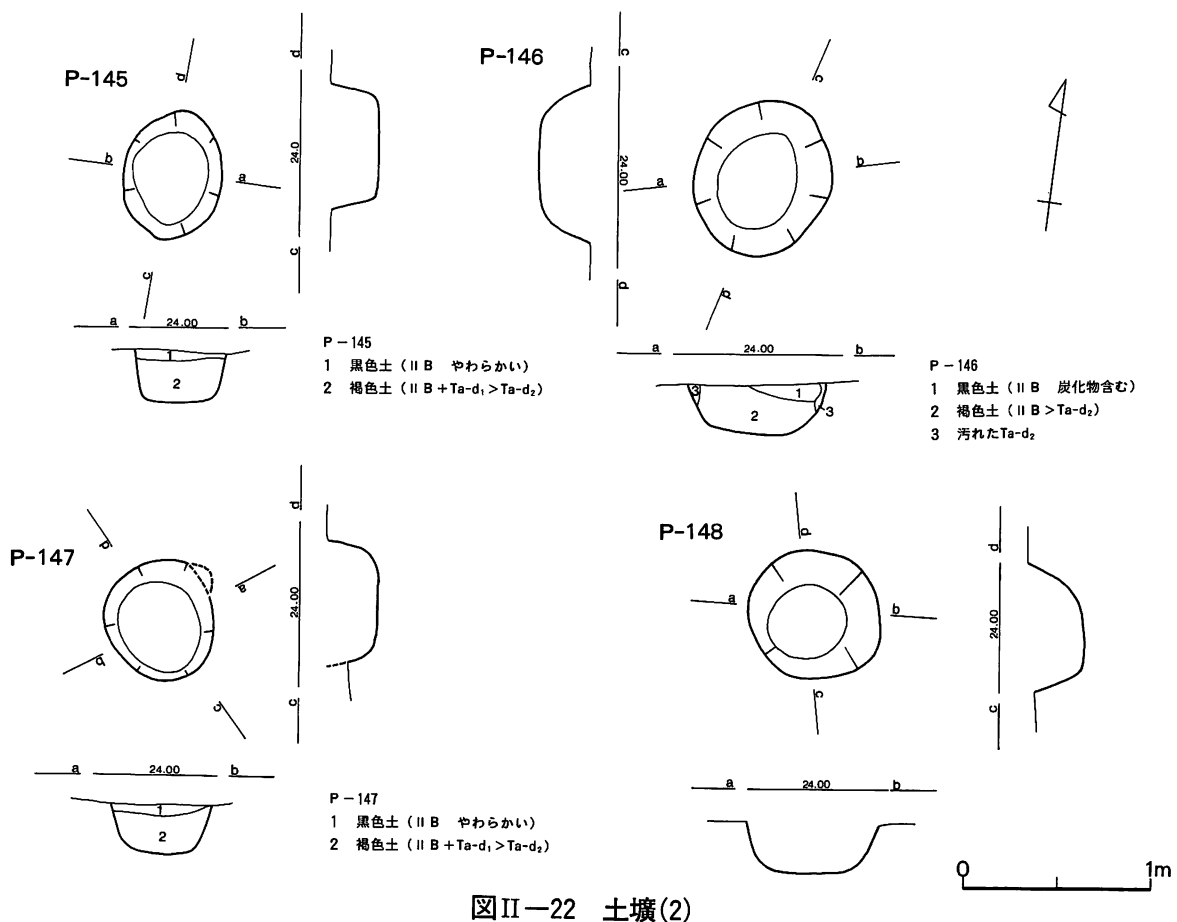
II黒層上面で円形の浅い落ち込みとして確認された。平面形は円形で、墳底はTa-d₂層まで掘り込まれていて、壁はほぼ垂直に立ち上がる。1層からはシカの焼骨が検出されている。遺物は2層から少量の炭化物とともにV群b類の土器が出土している。

P-131

Ta-d₂層上面で確認された。墳底は不整形円形を呈する。覆土は単層でII黒層にTa-d₁・d₂層が少量混



図II-21 土壌(1)



図II-22 土壌(2)

じる。遺物はV群b類土器とスクレイパーが1点出土している。

P-138

Ta-d₂層上面で確認された。平面形は楕円形を呈する。壙底は皿状で、覆土の3層は埋め戻されている。

P-139

Ta-d₂層上面で確認された。平面形は円形で、壙底は平坦である。P-128に切られている。

P-140

Ta-d₂層上面で確認された。平面形は不整形円形を呈し、壙底はでこぼこで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土の1層からはシカの焼骨、炭化物、灰が大量の土器片とともに出土しており、これらは土器

表II-1 土壌一覧

遺構番号	位置	平面形	規		最大深	長軸方向	備	考
			確認面	底面				
P-126	H ₁ -63-41	楕円形	0.99×0.84	0.82×0.70	0.49	N-56°-W	Vb・III d-3、イノシシ(8.99g)・シカ(4.40g)焼骨	
P-128	H ₁ -63-40	円形	0.70×—	0.39×—	0.36	N-52°-W	P-139を切る。Vb	
P-129	H ₁ -63-41	楕円形	0.50×0.42	0.40×0.35	0.33	N-3°-W	Vb、シカ焼骨(0.78g)	
P-131	H ₁ -63-42	不整形円形	0.81×0.71	0.70×0.50	0.23	N-7°-W	Vb、スクレイパー	
P-138	H ₁ -63-31	楕円形	1.16×0.80	0.95×0.47	0.41	N-31°-E		
P-139	H ₁ -63-40	円形	0.82×—	0.54×—	0.38	N-26°-W	P-128に切られる。	
P-140	H ₁ -63-52	不整形円形	0.71×0.68	0.66×0.29	0.21	N-6°-E	Vb、石錐・スクレイパー、シカ焼骨(10.5g)	
P-141	H ₁ -63-52	円形	0.41×0.38	0.20×0.18	0.24	N-18°-E		
P-142	H ₁ -63-52	不整形円形	0.62×0.54	0.41×0.34	0.28	N-69°-F		
P-143	H ₁ -63-42	楕円形	0.72×0.59	0.41×0.37	0.34	N-46°-E		
P-145	H ₁ -63-50	楕円形	0.68×0.53	0.48×0.46	0.27	N-4°-E	Vb、シカ焼骨(0.83g)	
P-146	H ₁ -63-50	楕円形	0.82×0.71	0.67×0.40	0.26	N-12°-E	Vb	
P-147	H ₁ -63-50	円形	0.63×0.59	0.48×0.40	0.26	N-40°-W	Vb	
P-148	H ₁ -63-51	円形	0.73×0.68	0.49×0.49	0.29	N-70°-W	Vb	

(図II-38-7)に入れられて廃棄されたものと考えられる。覆土はすべて埋め戻されている。遺物はV群b類土器と石錐、スクレイパーが各1点出土している。

P-141

Ta-d₂層で確認された。平面形は円形で、壙底はやや東側に偏っている。

P-142

Ta-d₂層で確認された。平面形は不整円形で、壙底には凹凸がある。

P-143

Ta-d₂層上面で確認された。平面形は楕円形で、壙底は平坦である。壁は急角度で立ち上がる。覆土の1層は炭化物を多く含んでいる。

P-145

Ta-d₂層上面で確認された。平面形は楕円形。壙底はIII黒層上面まで掘り込まれている。1層から流れ込みと思われるシカの焼骨が検出されている。覆土からV群b類土器が出土している。

P-146

Ta-d₂層上面で確認された。円形の土壙で、壙底はIII黒層上面まで掘り込まれる。覆土の1層には炭化物が多く含まれる。遺物はV群b類土器と砥石が1点出土している。

P-147

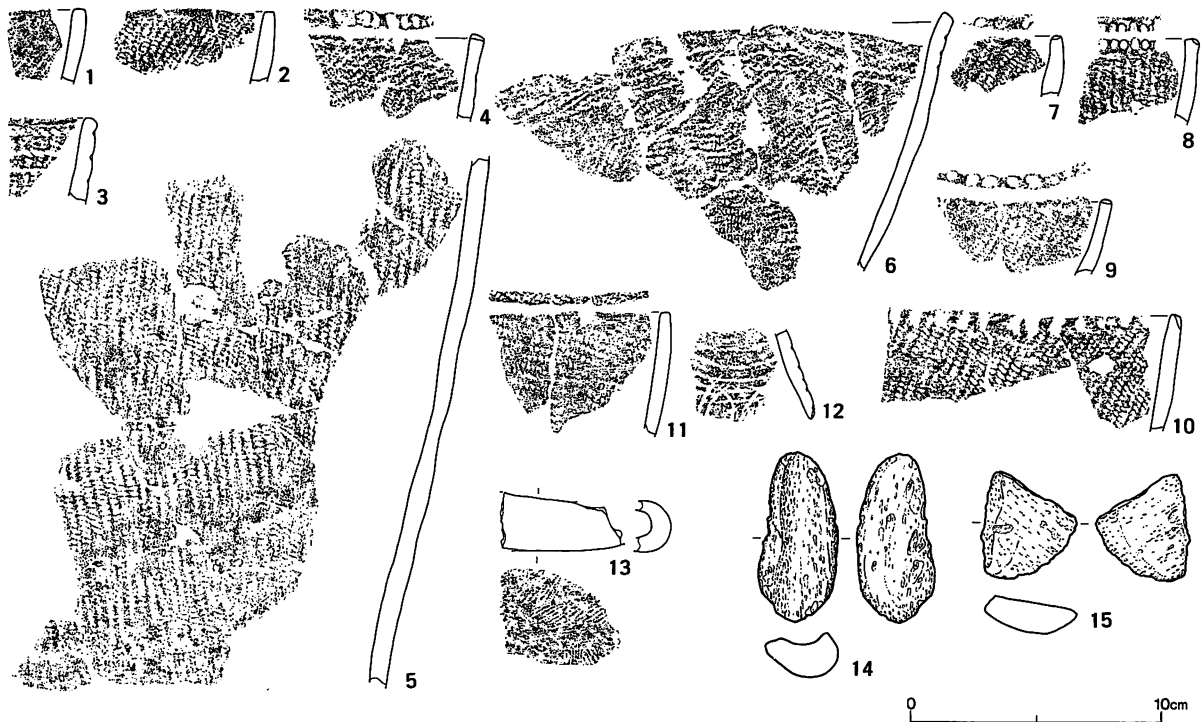
Ta-d₂層上面で確認された。平面形は円形を呈し、壙底はIII黒層上面まで掘り込まれる。遺物はV群b類土器と砥石が1点出土している。

P-148

Ta-d₂層上面で確認された。覆土は単層で、II黒層とTa-d₁層の混合土に少量のTa-d₂層が混じる。遺物はV群b類土器出土している。(村田 大)

(4) 土壙出土の遺物 (図II-23、図版II-8-25)

遺構ごとに掲載遺物の説明をする。各遺構の出土遺物の内訳は別表に示している(表II-7)。



図II-23 土壙出土遺物

土器 掲載した土器はいずれもV群b類に属するものである。

P-126(1) : 1は鉢形もしくは浅鉢形を呈するもので、LRの原体による縄文が浅く施され、口縁部は1cm前後の幅で縄文がなで消されている。口唇及び内面はなで調整されている。

P-129(2) : 2は鉢形もしくは浅鉢形を呈するかと思われるもので、器面にはLRの原体による縄文が浅く施されている。口唇は縄文施文後、なで調整されている。

P-140(3~10) : 3・4は縄線文が施されたもので、深鉢もしくは鉢形を呈するとみなされる。3はLRの原体による縄文を浅く施した後、同じ撚りの縄線文をめぐるせている。口唇はなで調整され、丸みを持つ。4は口縁に低い突起が認められるもので、口唇には棒状工具による刻み目が施されている。器面にはLRの原体による縄文と縄線文が施されている。5は深鉢の胴部片でLRの原体による縄文が施されたものである。6は口縁部がやや外反する鉢形土器で、LRの原体による縄線文が施されている。器面にもLRの原体による縄文が施されている。内面には炭化物が付着している。7~10は鉢形もしくは浅鉢形を呈するとみなされるものである。7・8は同一個体で、口唇には棒状工具による刻み目が施され、器面にはLRの縄文が施されている。9はLRの原体による荒い縄文が施されたもので、口唇の外側の角に棒状工具による刻み目が施されている。10はLRの原体による縄文が浅く施されたもので、口縁には爪による刻み目がめぐる。

P-145(11・12) : 11は鉢形もしくは浅鉢形を呈すると思われるもので、器面にはRLの原体による条のまばらな縄文が浅く施される。口唇にも縄文が施されている。12は台付土器の脚部とみなされるものである。無文地にLRの細い原体による縄線文が数条めぐり、下端には同じ原体を鋸歯状に押捺している。

P-147(13) : 13は注口付土器の注口部あるいは異形土器の把手かと思われるもので、RLの原体による非常に細かい縄文が施されている。(工藤 研治)

石器

P-146(14) : 14は小型の有溝砥石。軽石製。

P-147(15) : 15は石材から有溝砥石の破片と思われる。軽石製。

(5) 焼土(図II-23、図版II-9)

19か所の焼土が確認された。調査区北側の台地上、標高23.0mと24.0mの間の平坦部にすべて位置する。焼土内および周辺からはV群b類土器とこれらに伴うと思われる石器等が出土しており、19か所の焼土は、すべて縄文時代晩期に位置付けられる。これらの焼土にはいくつかのまとまりが見られ、A~Dの4つの群に分けることができる。

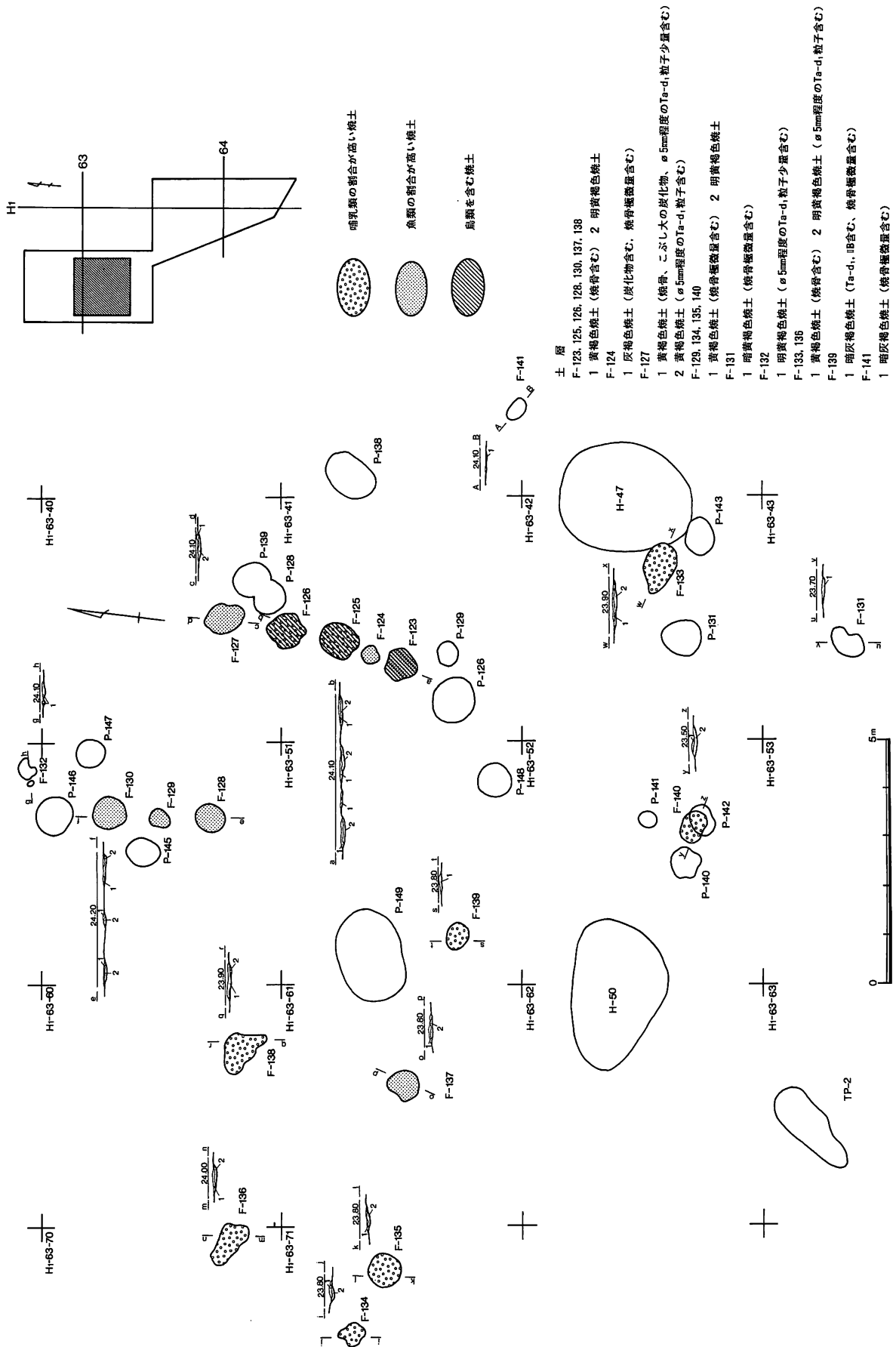
また、ほとんどの焼土中には、土器や石器のほか動物遺存体が含まれる。焼土中の動物遺存体については、これらの種および部位を同定する目的で、焼土をサンプリングし、遺存体を検出した。

この結果、遺存体はすべて焼骨で、488.01g検出された。哺乳類が287.2g(58.9%)で、エゾシカのほかいヌ科のキツネ?・タヌキやイタチ科のエゾクロテンなど中型獣の破片も多く、少量ではあるがイノシシも検出されている。魚類は183.3g(37.5%)で、そのほとんどがサケ類であった。また、カモ類やカケスなど鳥類も一部の焼土で確認された。なお焼土出土の動物遺存体の詳細は一覧表(表II-3)に掲載する。

以下、群別に説明する。

A群(F-123~F-127)

南北に一列に並んで分布する。F-125・126は獣骨の割合が大きく、F-126にはイノシシと思われる



図II-24 焼土

- 土 層
- F-123, 125, 126, 128, 130, 137, 138 1 黄褐色焼土 (焼骨含む) 2 明黄褐色焼土
 - F-124 1 灰褐色焼土 (炭化物含む, 焼骨極微量含む)
 - F-127 1 黄褐色焼土 (焼骨, こぶし大の炭化物, σ 5mm程度のTe-d, 粒子少量含む)
 - F-129, 134, 135, 140 2 黄褐色焼土 (σ 5mm程度のTe-d, 粒子含む)
 - F-129, 134, 135, 140 1 明黄褐色焼土 (焼骨極微量含む) 2 明黄褐色焼土
 - F-131 1 暗黄褐色焼土 (焼骨極微量含む)
 - F-132 1 明黄褐色焼土 (σ 5mm程度のTe-d, 粒子少量含む)
 - F-133, 136 1 黄褐色焼土 (焼骨含む) 2 明黄褐色焼土 (σ 5mm程度のTe-d, 粒子含む)
 - F-139 1 明黄褐色焼土 (Te-d, 1B含む, 焼骨極微量含む)
 - F-141 1 明黄褐色焼土 (焼骨極微量含む)

上腕骨の破片が検出されている。F-123・124・127は魚骨の割合が大きい。F-123・125・126には鳥類も検出された。F-124は動かされたもの。F-125は19か所の焼土中最も遺物が多く土器、石器等454点が出土している。F-127にはこぶし大の炭化物がみられた。動物遺存体の重量が最も大きいのはF-126で74.41gである。

B群（F-128～130・132）

ほぼ南北に並んで分布する。F-132は動物遺存体は検出されなかった。F-128～F-130はいずれも魚類の割合が多いが、F-129は微量でサケ類のみが検出された。

C群（F-134～139）

F-137を除き、すべて獣骨の割合が高い。F-136～F-138が動物遺存体の検出量が多く、順に、22.46g、15.72g、36.76gで、他は、3g以下の微量である。F-139は動かされたものである。

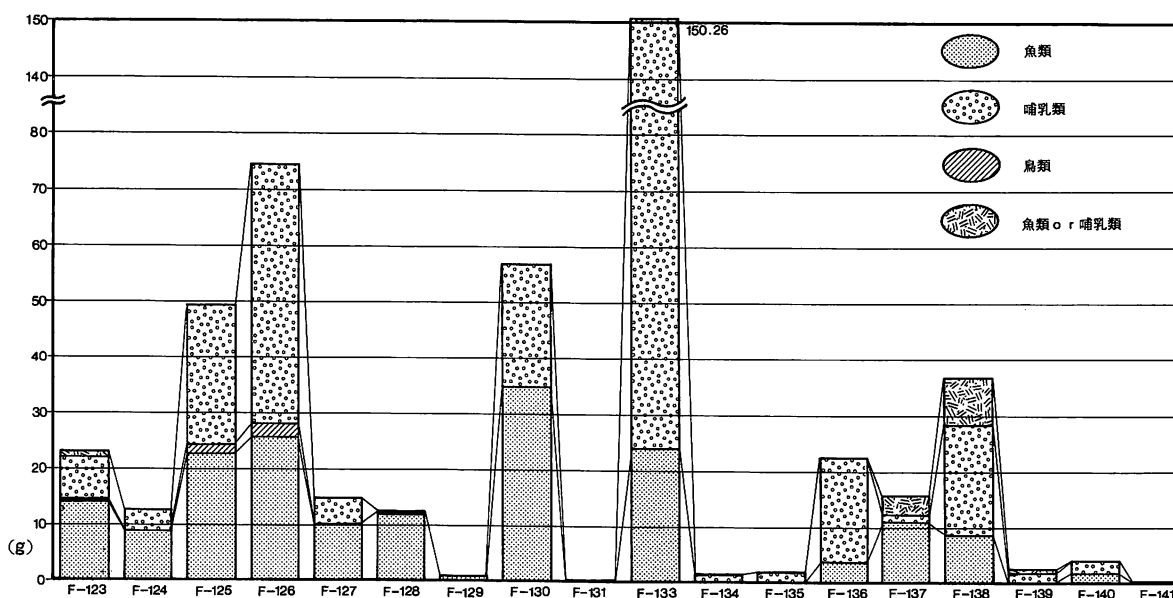
D群（F-131・133・140・141）

それぞれ点在しているが、一群として扱った。F-131・141はともに動かされたもので、焼骨は極微量しか検出されていない。F-133は動物遺存体の検出量が19か所の焼土の中で最も多く、150.26gで獣骨の割合が高い。F-140は魚骨と獣骨の割合がほぼ半々である。

（村田 大）

表II-2 焼土一覧

焼土番号	位置	規模(cm)		備考	焼土番号	位置	規模(cm)		備考
		径	厚さ				径	厚さ	
F-123	H ₁ -63-41	66×65	6	鳥類あり	F-133	H ₁ -63-71	109×67	8	
F-124	H ₁ -63-41	42×36	4		F-134	H ₁ -63-71	58×48	8	
F-125	H ₁ -63-41	81×67	11	鳥類あり	F-135	H ₁ -63-71	68×67	7	
F-126	H ₁ -63-40・41	83×63	8	鳥類あり	F-136	H ₁ -63-70	106×57	8	
F-127	H ₁ -63-40	88×64	6		F-137	H ₁ -63-61	67×58	8	
F-128	H ₁ -63-50	62×60	5		F-138	H ₁ -63-60	104×63	7	
F-129	H ₁ -63-50	43×35	3	サケ類のみ	F-139	H ₁ -63-51	57×45	6	
F-130	H ₁ -63-50	74×68	8		F-140	H ₁ -63-52	65×50	11	
F-131	H ₁ -63-43	74×42	5		F-141	H ₁ -63-31・32	48×32	2	サケ類のみ
F-132	H ₁ -62-59	55×40	6	焼骨なし					



図II-25 焼土出土動物遺存体重量構成

() 内数字は写真II-1・2の掲載番号

表II-3 焼土・土壇出土の脊椎動物遺体

地区 遺構名	魚		鳥		哺乳		その他		総重量 (g)
	重量(g)	種類	重量(g)	種類	重量(g)	種類	重量(g)	種類	
F-123	サケ類	歯	1.01	(7)鳥類右鳥口骨遠位	0.02	大型獣片	7.49	鳥 or 中型獣片	0.99
	サケ類	椎体片	3.55	(1)カモ類A右脛骨片	0.17	中型獣(キツネ・タヌキ)右骨片(関節部)	0.22		
	サケ類	棘片	1.77			(23)中型獣(キツネ・タヌキ)尾椎骨片	0.07		
	サケ類	骨片	6.8						
		骨片	1.06						
計			14.19		0.19		7.78		23.15
F-124	サケ類	歯	0.89			尺骨?	0.24		
	サケ類	椎体	1.96			シカ骨片	2.70		
	サケ類	棘・その他	0.89			(20)キツネ尾椎骨片	0.18		
	サケ類	骨片	5.19			(22)エゾクマレン右大腿骨近位	0.55		
計			8.93				3.67		12.6
F-125	サケ類	歯	1.27	(6.8~14)鳥類趾骨	0.10	(25)中型獣頸椎片	0.54		
	サケ類	椎体	5.43	(15)鳥類趾骨片遠位	0.07	(24)中型獣左大腿骨遠位	0.60		
	サケ類	棘・その他	3.07	(17.18)鳥類骨片	0.52	(19)キツネ左上腕骨遠位骨端片	0.20		
	サケ類	骨片	13.03	鳥類趾骨	0.07	獣骨片	23.57		
				鳥類椎片を含む	0.48				
				(5)カケス左中足骨骨体部破片	0.09				
				(2)カモ類A左上腕骨近位端片	0.09				
				(3)カモ類B左中手骨近位端部片	0.06				
				(4)カモ類B左脛骨近位骨端片	0.04				
				鳥類趾骨	0.06				
計			22.8		1.58		24.91		49.29
F-126	サケ類	歯	2.45	(16)鳥類趾骨片(基節骨片)	0.05	シカ中手? 近位骨端	0.85		
	サケ類	椎体	9.53		2.43	シカ	31.63		
	サケ類	棘・その他	5.92			獣骨片	6.41		
	サケ類	骨片大部分	7.81			(29)イノシシ右腕骨骨体片	7.33		
計			25.71		2.48		46.22		74.41
F-127	サケ類	歯	1.01			シカ骨片	4.47		
	サケ類	椎体	4.61						
	サケ類	骨片	4.72						
計			10.34				4.47		14.81
F-128	サケ類	歯	1.12			シカ骨片	0.23		
	サケ類	椎体	4.60						
	サケ類	骨片	6.53						
	計			12.25			0.23		

II 美々3遺跡第II黒色土層の調査(平成3年度)

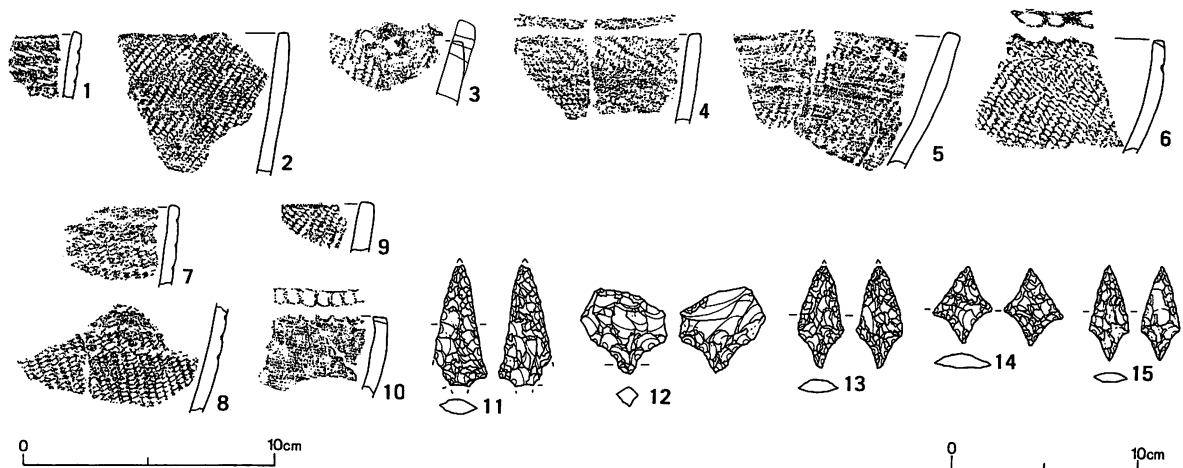
地区 遺跡名	魚		鳥		哺乳類		その他		総重量 (g)	
	種類	重量(g)	種類	重量(g)	種類	重量(g)	種類	重量(g)		
F-129	サケ類	0.04								
	サケ類 歯	0.35								
	サケ類 椎骨片	0.54								
計		0.93							0.93	
F-130	サケ類 歯	3.23								
	サケ類 椎体	12.93								
	サケ類 棘・その他	2.44								
	サケ類 骨と歯	4.25								
	サケ類 骨片	12.14								
計		34.99							56.72	
F-131									0.01	
F-133	サケ類 歯	0.75								
	サケ類 椎体	6.95								
	サケ類 棘・その他	2.54								
	サケ類 骨片	13.90								
	計		24.14							150.26
F-134	サケ類 歯	0.03								
	サケ類 椎体	0.08								
計		0.11							1.6	
F-135	サケ類 歯	0.01								
	サケ類 椎体	0.16								
	計		0.17							2.1
F-136	サケ類 歯	0.85								
	サケ類 椎体	1.9								
	サケ類 骨片	1.2								
	計		3.95							22.46
	サケ類 椎骨片									
	サケ類 骨片									

地区 遺構名	魚		鳥		哺乳		その他		総重量 (g)
	重量(g)	種類	重量(g)	種類	重量(g)	種類	重量(g)	種類	
F-137	1.1	サケ類 歯							
	7.23	サケ類 椎体							
	2.86	サケ類 骨片					1.25	鹿骨片・サケ骨片	3.28
計	11.19						1.25		15.72
F-138	1.74	サケ類 歯							
	5.29	サケ類 椎体					17.73	中型鹿・四肢骨片・多趾(骨端とみられる部分はない)	
	1.76	サケ類 骨片					1.67	鹿・骨片	8.35
計	8.79						0.22	(21)タヌキ左距骨片	36.76
F-139	0.06	サケ類 椎体					1.76	シカ骨片	2.48
F-140	0.31	サケ類 歯					0.86	シカ骨片	
	0.91	サケ類 椎体					1.364	鹿 骨	
	0.62	サケ類 骨片							
計	1.84					2.224			4.064
F-141	0.002	サケ類 歯							
	0.03	サケ類 椎体							
	0.11	サケ類 骨片							
計	0.142								0.142
F-143	0.22	サケ類 歯							
	1.67	サケ類 椎体					2.59	シカ 骨	
	0.85	サケ類 骨片					2.70		
計	2.74					5.29			8.03
P-126							8.99	(30)イノシシ左距骨	
計							4.40	シカ類椎	
P-129							13.39		13.39
P-140							0.78	シカ骨片	0.78
P-145							10.5	シカ骨片	10.5
総計	183.272	魚	4.25	鳥	312.714	哺乳	0.83	シカ骨片	0.83
								その他	13.28
									513.516

(6) 焼土出土の遺物（図II-26、図版II-9-8）

土器(1~10)：F-124(1)、F-125(2)、F-128(3)、F-129(4)、F-130(5)、F-133(6)、F-136(7~9)、F-140(10)から出土したものを掲載した。1~10すべてV群b類土器である。1は深鉢の口縁部でLRの原体による縄線文がめぐるものである。縄線文は地文をなで消した後施されている。2・4は深鉢もしくは鉢形を呈するとみなされるもので、2にはLRの原体、4にはRLの原体による縄文が施されている。4の縄文は原体の回転方向を違えて施文されている。3は舟形を呈すると思われる異形の鉢型土器で、中央部がV字状に削り取られた山形の突起がある。突起の下には貫通孔が2か所認められ、器面にはLRの原体による浅い縄文が施されている。5は浅鉢の口縁部で、LRの原体による浅い縄文が施されたものである。器面は縄文施文後、横方向に軽くなでられている。6は丸みを帯びた浅鉢で口縁部に縄線文が一条めぐる。器面にはLRの原体による密な斜行縄文が施され、口唇には指先による刻み目が付けられている。内面はなで調整されている。7・8は同一固体とみなされるものでRLの原体による縄文を施した後、同じ撚りの縄線文を数段めぐらしている。深鉢形を呈するとみなされる。9はLRの原体による斜行縄文がされたもので、内面は丁寧になで調整されている。鉢形もしくは浅鉢形を呈するものと思われる。10は無文の浅鉢で口唇には棒状工具を押し付けた刻み目が施されている。

石器(11~15)：F-123(11・12)、F-124(13)、F-127(14)、F-139(15)のものを図示した。11・13~15は石鏃。いずれも有茎凸基のものである。12は石錐。機能部が摩耗している。11~14は黒曜石製。15は珪質頁岩製。
(工藤 研治)

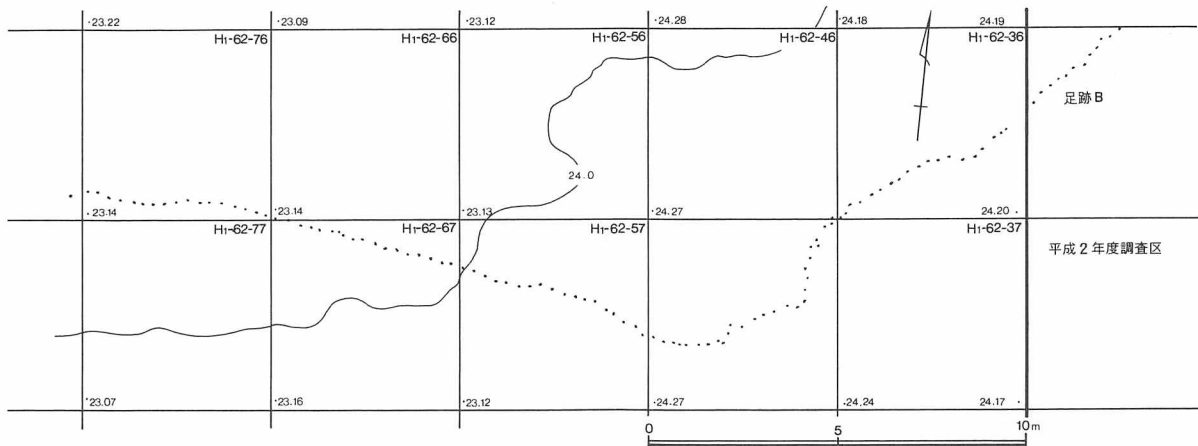


図II-26 焼土群出土遺物

(7) 動物の足跡（図II-27、図版II-14）

調査区北側の台地上で、Ta-c層を除去し、II黒層上面で検出された。径15~20cm、深さ2~3cmの円形または楕円形の浅いくぼみで、25~30cmほどの間隔で続いている。これは平成2年度の調査で報告された足跡(B)から続くもので、標高24mラインを横断する形で東西へ蛇行しながら伸びている。

(村田 大)



図II-27 動物の足跡

4 第 I 黒色土層から掘り込まれた遺構

I 黒層から掘り込まれた遺構は土壇墓 1 基 (P-127)、土壇 5 基 (P-132~136) である。

(1) 土壇墓

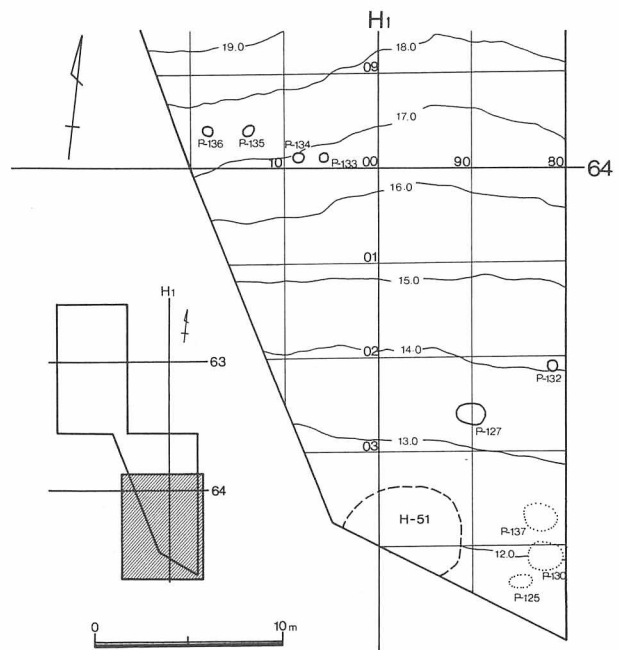
P-127 (図II-29、図版II-11)

位置 G₂-64-82・92 規模 1.49/1.10×1.21/1.00 m

特徴 標高 14 m の緩斜面に位置する。Ta-c 火山灰除去後、II 黒層上面で Ta-c に Ta-d₂ 層が斑状に混じる落ち込みを確認した。覆土は Ta-c、II 黒層と考えられる黒色土、Ta-d₂、En-L が混じり合った状態であった。壇底では人骨が 1 体検出された。覆土には Ta-a や Ta-b が含まれていないことから、Ta-c 層と Ta-b 層の間の I 黒層から掘り込まれたと考えられる。II 黒層上面で確認した平面形は楕円形。壇底は En-L 層まで掘り込まれている。壁は Ta-d₂ 層より下部ではほぼ垂直に掘り下げられているが、II 黒層のあたりから上部は外側に開いている。この土壇墓を構築する際、崩れやすい Ta-c 層の部分を作り鉢状に大きく掘り込んだためと考えられる。確認面から壇底までの深さは約 100 cm であるが、このあたりの Ta-c 層の厚さは 40 cm ほどあるので本来の深さは少なくとも 150 cm 程度と推定される。

人骨は西頭位 (N-77° -E) の横臥屈葬の状態で検出された。骨は頭骨を除いて糊状になっており、輪郭がわかる程度であった。頭部の周囲にはベンガラが痕跡的に認められた。比較的保存状態の良かった頭骨の鑑定の結果、この人骨は成人男性とみられている (付 287 頁)。

遺物 (図II-30) 壇底では頭骨の横で 10×12 cm の範囲に 190 点の石鏃 (3~192) がまともに出て出土した。出土状況から、これらの石



図II-28 I 黒層から掘り込まれた遺構位置図

鏃は矢柄に装着されていたのではなく、袋のようなものに入れられていたと推定される。石鏃は脛骨の付近でも2点（1・2）出土している。このほか、石鏃の集中部と覆土からフレイク・チップが少数出土した。1～192 すべて黒曜石製である。1～83 は有茎凸基、129～174 は尖基、84～128 は有茎凸基と尖基の中間的形態のものである。159～192 は幅広で剝離が大きく、製作途中のものかと思われる。

時期 昨年度のI黒層調査では、この区域からV群c類土器が出土している。縄文時代以降の土器は出土していない。掘り込みの層位、周辺の出土遺構及び墳底の遺物から縄文時代晩期末葉のV群c類土器の時期とみなされる。

(2) 土壇 (図II-31)

標高14m～18mの斜面に位置する。P-133～P-135は列をなしている。これらのピットはII黒層上面でTa-cが落ち込んだ状態で検出された。平面形はほぼ円形。底Ta-d₂層まで掘り込まれている。覆土上部にはTa-c、下部にはTa-cを含む褐色土が認められる。覆土中にTa-bが含まれていないことと、覆土下部の土層にもTa-cが含まれていることからI黒層から掘り込まれた遺構と判断した。この種の土壇は昨年度の調査でも多数検出されている。いずれもV群c類土器の時期かとみなされる。

P-132

位置 G₂-64-82 規模 0.75/0.51×0.72/0.52 m

遺物 覆土からIV群a類土器(1)が出土している。0段多条の原体による斜行縄文が施された胴部の破片である。II黒層のものが混入したと考えられる。

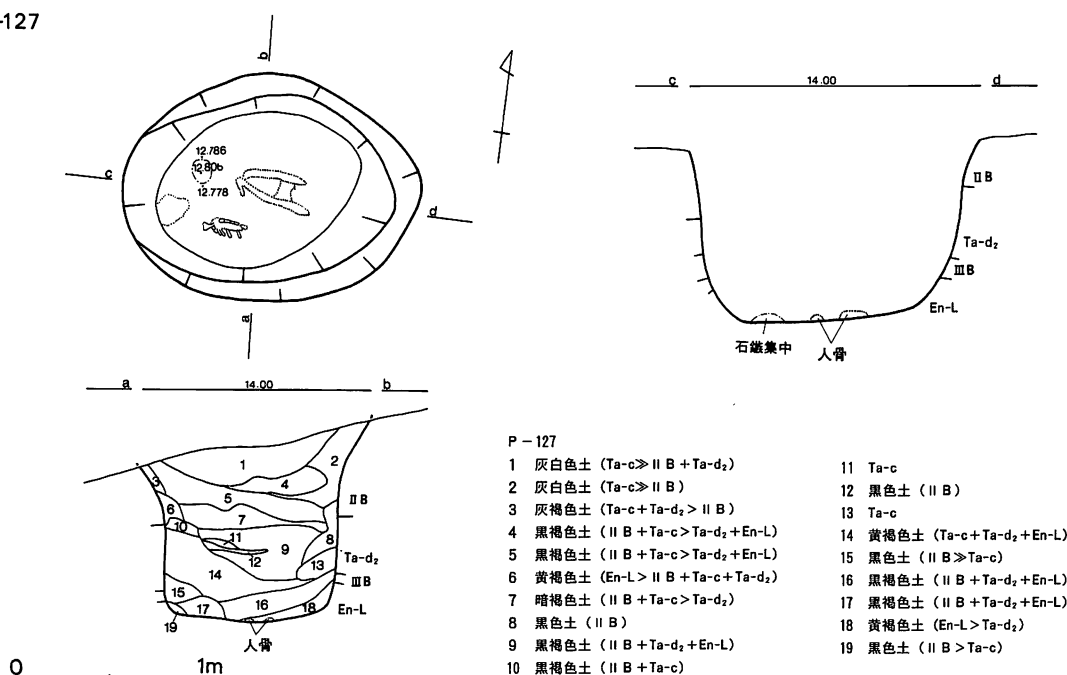
P-133

位置 H₁-63-09 規模 0.72/0.46×0.64/0.40 m

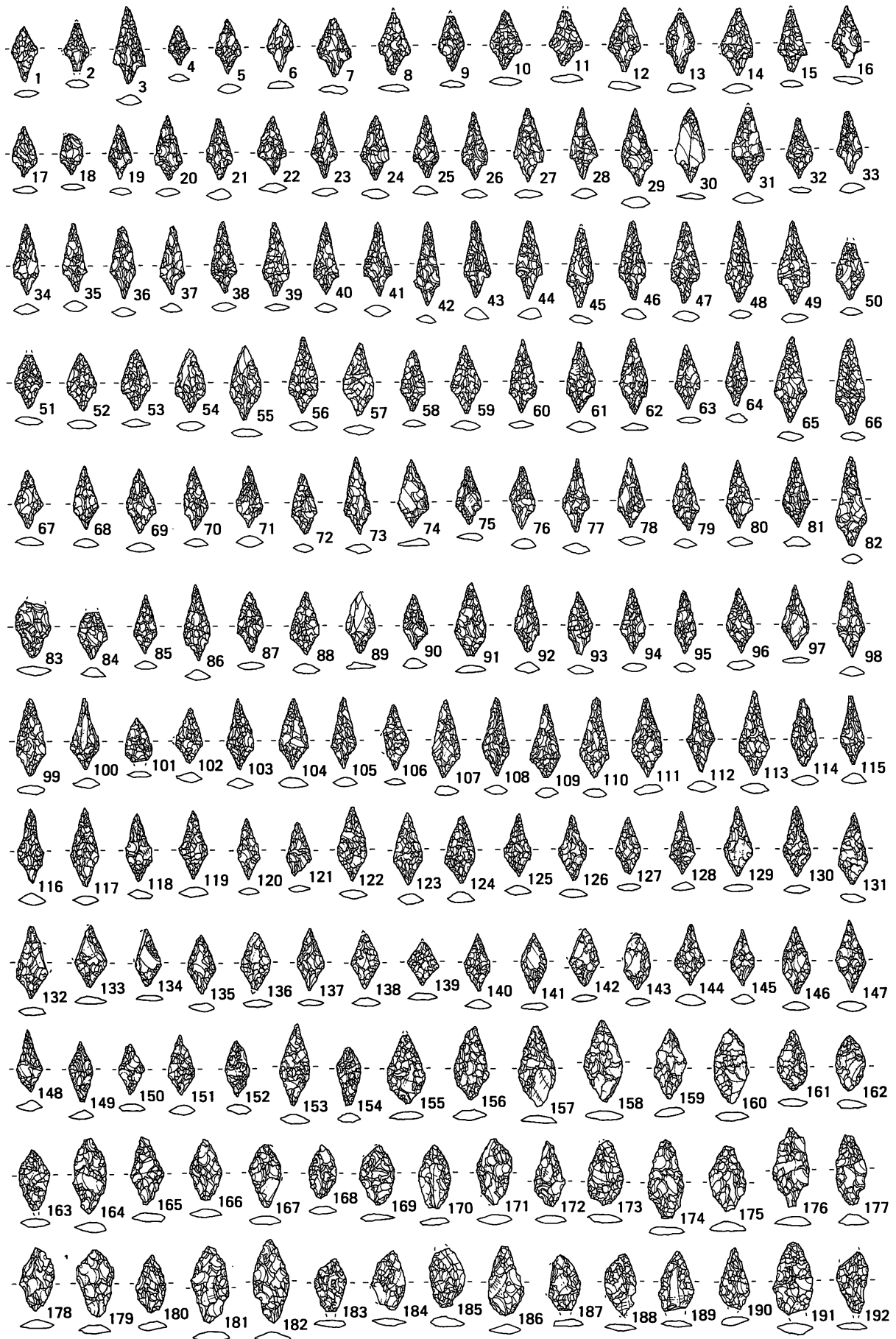
P-134

位置 H₁-63-09 規模 0.71/0.53×0.75/0.48 m

P-127



図II-29 P-127



図II-30 P-127出土遺物

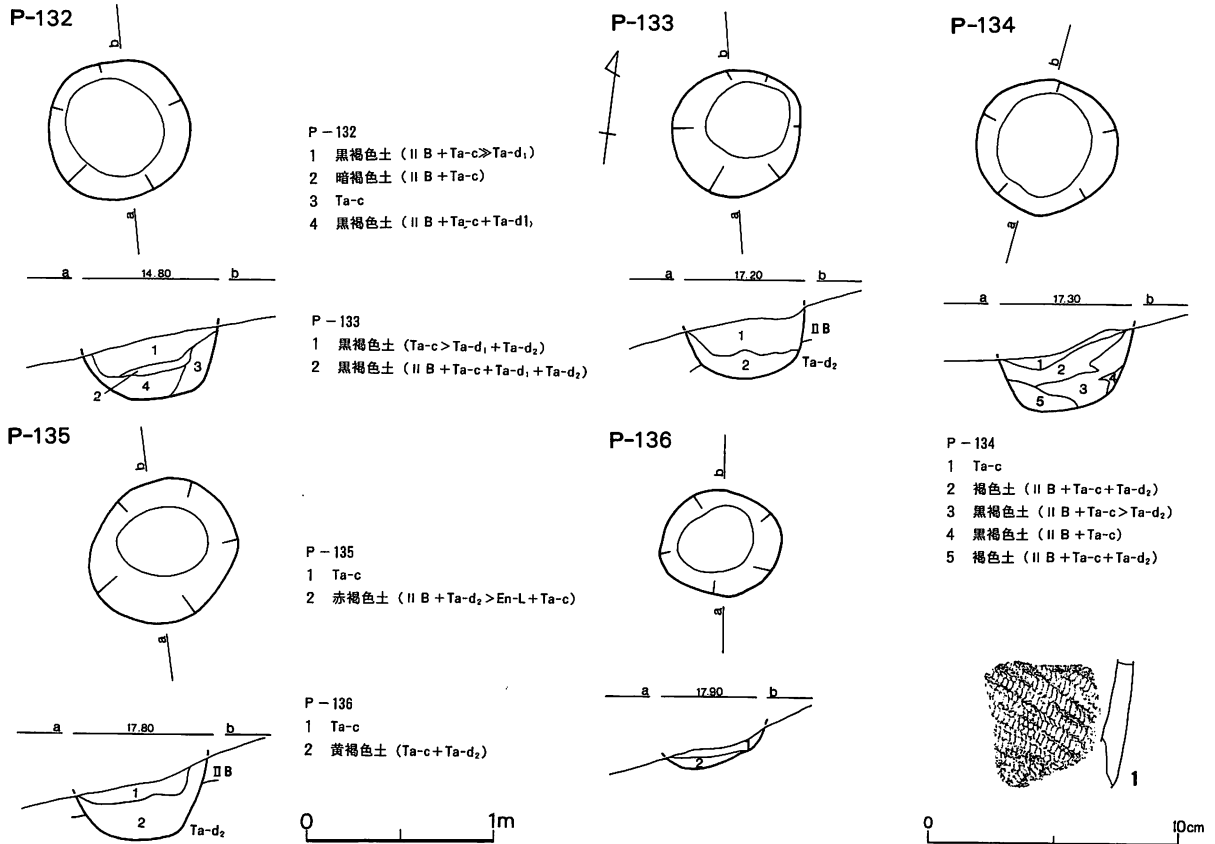
P-135

位置 H₁-63-19 規模 0.81/0.44×0.72/0.40 m

P-136

位置 H₁-63-19 規模 0.66/0.41×0.56/0.33 m

（工藤 研治）



図II-31 土壌と出土遺物

5 第II黒色土層出土の遺物

包含層から出土した遺物は土器 12,294 点、石器等 6,115 点である (表II-5)。

(1) 土器 (図II-34~45、図版II-15~22)

包含層から出土した土器にはI群、III群、IV群、V群に属するものがあり、V群b類が最も多い。

I群b-4類 (図II-34-1)

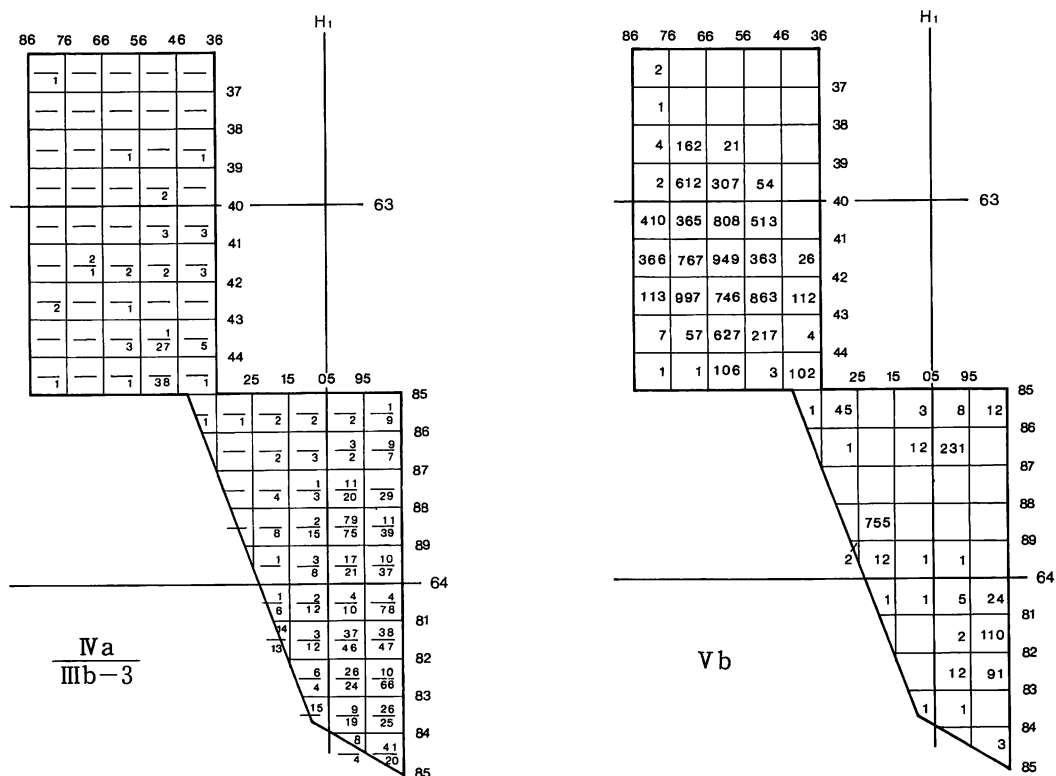
主に斜面から出土した。出土量は少なく、すべて同一個体に属するとみられる。1は体部の小片である。自縄自巻きの原体によるとみられる縄文が施されている。

III群b-3類 (図II-34-2~37)

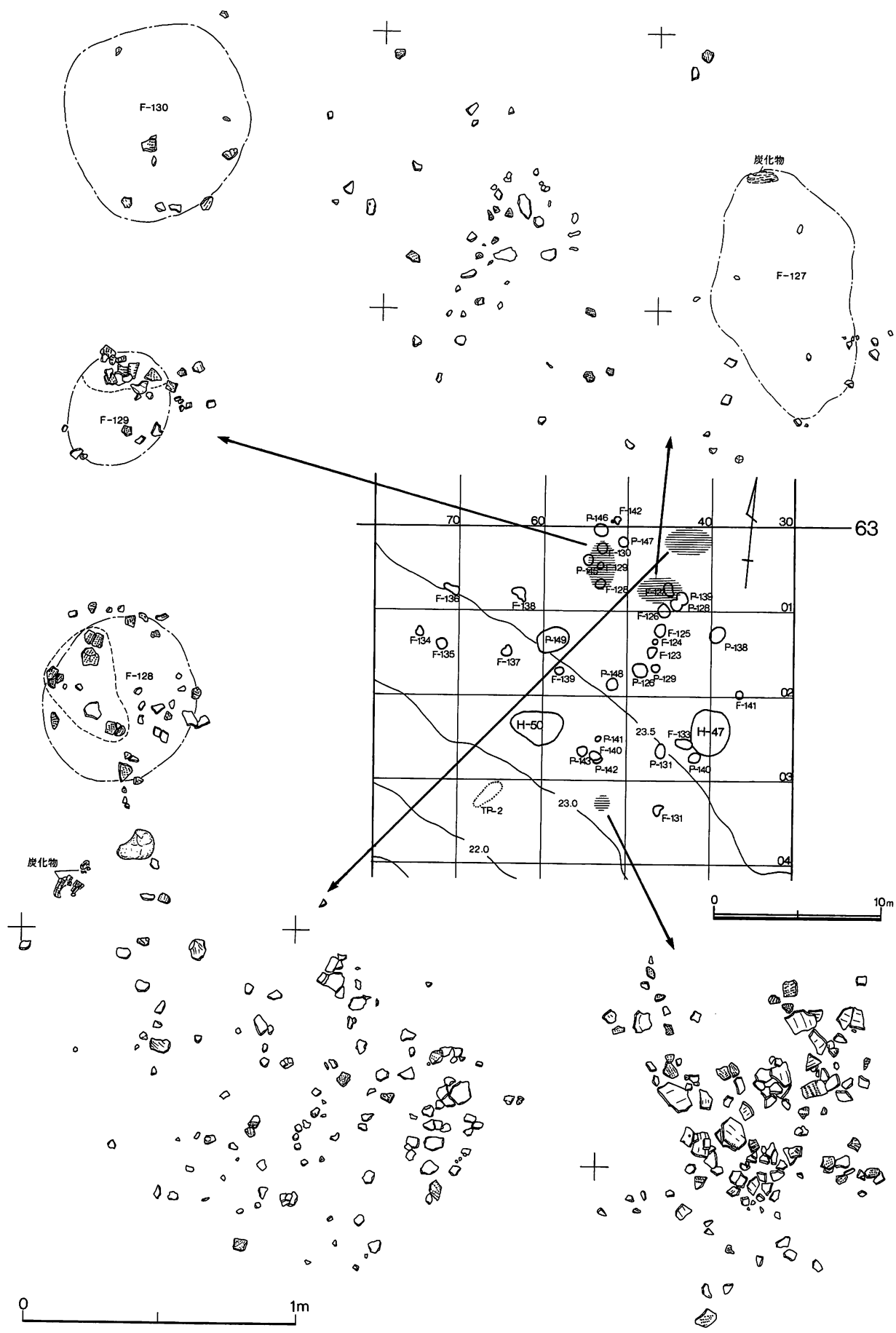
台地上から斜面にかけて出土している。この時期の遺跡の主体部から離れているため、出土量は少ない。昨年度はA類からH類に区分して記載されているので、比較の便宜上これに従う。今年度の調査では、器面に貼付帯が施されているA類、無文のG類は出土していない。なお、用語についても昨年度、一昨年度の報告にならうこととし、頸部にめぐらされた円形刺突文は円形文と略す。

B類 (2・3)：体部に押し引き文が施されるものである。2は半截竹管状の工具による深い押し引き文が施されたもので、押し引き文の交点には円形の刺突文が施されている。3は幅のせまいへら状の工具によって押し引き文が深く施されたものである。

C類 (4~9)：口唇と口縁に施文されるものである。4は半截竹管状工具の丸い部分で押し引き文が施されたものである。内面にも縄文が施されている。器面にはベンガラかと思われる赤色顔料が付着している。5~8は肥厚帯がなく、口唇断面が丸みを帯びているもので、半截竹管状工具によって押し引き文風の刺突文が施されている。口縁部には小さめの円形文がみられる。III群b-2類の施文手法に通づるものがある。6~8は内面に瘤が形成されていない。8には無節の縄文が施されている。9は肥厚帯を



図II-32 土器出土分布 (点数)



図II-33 遺物出土状況 (V群b類土器)

もつもので、半截竹管状工具による押し引き文風の刺突文が施されている。

D類(10・11)：口唇に施文されるものである。10には半截竹管状工具による浅い刺突文が斜めに施されている。口唇に近い部分には小さめの円形文が浅く施されている。11はヘラ状工具によって刺突文が施されたものである。

E類(12～15)：口縁部に施文されるものである。12・13・15はヘラ状工具による押し引き文、14は半截竹管状の工具による刺突文が施されたものである。12・15は同一個体である。

F類(16～19)：縄文のみのものである。16～18には内面にも縄文が施されている。19にはまばらな縄文が施され、円形文が認められない。

上記のいずれに属するか不明の胴部破片がある(20～22)。20は縄文地に細い撚糸文が施されたもの。21は縄文地に細い沈線文が施されたもの。22は縄文と撚糸文が施されたものである。沈線文が施されたものはIII群b-2類に多く見いだすことができ、そのなごりかとみなされる。

H類(23～37)：ノダップII式、煉瓦台式に近縁のものである。24は口縁部に短刻線文が施されたもので、口唇には半截竹管状工具による押し引き文風の刺突文がみられる。III群b-2類のなごりとみられる。23は昨年度報告資料(北埋調報69 図III-163-411)と接合したもので、同一個体は平成元年度調査区からも出土している。(北埋調報62 図IV-21-170)。口縁部がやや外反する深鉢形を呈し、口縁部と体部に貼付帯がめぐる。上位の貼付帯には器面の相対する位置に2か所、瘤を貼り付け、瘤には縦の貫通孔をあけている。器面の剥れから、下位の貼付帯にも上位の瘤に対応する位置に、瘤があったとみられる。上位の貼付帯の下位には5～6cmの間隔で半截竹管状工具による「L」字状の押し引き文が施されている。この押し引き文の縦軸の右側には径2mmほどの円形刺突文が2個施されている。貼付帯上には右斜めからの刺突文が深く施されている。上位の貼付帯より上はヘラによってなで調整されている。体部には複節の縄文が施されている。25は口縁部に縄線文が施されたものである。縄線文はLR、体部の縄文はRLの原体によるものである。縄線文の上位は縄文施文後なで調整され、無文となっている。26・27は同一個体である。口縁部には低い隆起帯があり、隆起帯の下縁と体部の縄文の境は縄線文で区画され、その間は無文となっている。地の縄文と下位の縄線文は、RL、上位の縄線文はLRの原体によるものである。28・29は縄文が施されたものである。30・31は貼付帯が施された胴部破片である。30の貼付帯上には短刻線文が、31の貼付帯には小さな円形の刺突文がそれぞれ施されている。23～31はノダップII式の頃のものである。32～34は斜行縄文が施されたものである。32・34は昨年度報告した資料(北埋調報69 図III-164-464・476)と同一個体である。35は口縁部に幅のせまい隆起帯があり、隆起帯の上半はRL、下半はLRの原体による羽状縄文が施されている。36は隆起帯をもつ胴部破片である。隆起帯にはRL、体部にはLRの原体による縄文が施され、羽状縄文になっている。37は縄文が施された底部である。32～37は煉瓦台式の頃のものである。

IV群a類(図II-34-38～47)

主に斜面から出土している(図II-32)。38はH-48床面出土資料と接合したもので、昨年度H-40床面直上の焼土から出土した資料(図III-123-1)と同一個体である。器面にLRとRLの原体による羽状縄文を施した後、口縁部と体部に貼付帯をめぐらす。上位の貼付帯には羽状縄文、下位の貼付帯には斜行縄文が施され、さらに縄端によって短刻線文が施される。この土器は煉瓦台式の特色を示すものであるが、本来の煉瓦台式の手法とは異なるので本類に含められているものである。39・40は同一個体とみなされる。39は口縁部にあらかじめ無文地が形成され、その上に口縁に沿う幅のせまい貼付帯が施されたものである。貼付帯には横位に施文された縄文が施されている。口唇は磨かれている。40には低い隆起帯がめぐり、縦位に施文された縄文が施されている。40・42は昨年度H-40から出土し

た資料(北埋調報 69 図III-123-8)と同一個体である。口縁部に貼付帯がめぐり、RLの原体による縄文が施されている。縄文は器面では縦位、貼付帯上では横位に施文されている。43は口縁部に貼付帯がめぐるものである。44~46は薄手のもので、口縁部と体部に貼付帯が施されている。44は体部にも貼付帯にも横位に施文された縄文が施されている。45は縄文施文後、なで調整して無文部をつくり、その上に貼付帯をめぐらす。46の縄文は体部には縦位、貼付帯には横位に施文される。47・48は貼付帯のある胴部破片である。体部と貼付帯の縄文はLRとRLの原体を使い分けていて、いずれも原体を横位に回転して施文している。

IV群b類(図II-34-48)

斜面からごくわずかに出土した。48は縄文地に太い棒状工具による横走沈線が施されたもので、文様帯の上端には刻み目がめぐる。

V群b類(図II-35-1~46-118)

今年度の出土土器のなかで最も多いものである。主にH₁63区の台地から台地の縁にかけてまとまって出土し、遺構出土のものと接合する例が多い。台地から出土したものは出土状態からみてほぼ同時期のものと考えられ、在地の土器に亀ヶ岡系の土器が少量伴っている。斜面ではこれよりやや新しいとみなされる資料が出土しているが、出土量は少ない。土器の接合関係は別表に示している(表II-13・14)。まず、在地の土器について器種別に記載し、最後に亀ヶ岡系の土器について一括して記載する。出土資料のうち、個体識別可能なものの大部分を図示している。

深鉢(1~14・25~56)：個体数が最も多いものである。復元された資料のなかでは高さ40cm前後の大形のもの(1・3)、30cm前後の中形のもの(4・5)、20cm前後の小形のもの(11・12・14)がある。底部は平底が多く、丸底ぎみの平底や、あげ底もみられる。内面は概して丁寧になで調整されている。文様は口縁部に縄線文を数条めぐらすものが一般的で、他に刺突文が施されたもの、縄文だけのものがある。縄文はLRの原体によるものが多い。深鉢については文様構成から便宜的にA類からD類にわけて記載する。

A類(1・25・26)：口縁部に刺突文が施されるものである。1は大形の深鉢である。口縁部にあらかじめ無文部を設け、口縁直下の内外面には棒状工具を下から突き上げた刺突文が20cm単位で施されていて、10cmほどの間隔をあけて器面をめぐらさる。器面に刺突文が施されている部分の口唇には縄文が施され、無文の部分には交差する刻み目が施されている。体部には斜行縄文が施されている。25は口縁部に幅のせまい無文部を設け、下から突き上げた深い刺突文が施されたものである。口唇には交差する刻み目が施されている。26はRLの原体による縄文が施されたもので、縄文地に半截した棒状工具を下から突き上げて施した刺突文が3条めぐらさる。口唇には交差する刻み目が施されている。

B類(2~7・27~50)：縄線文が施されるものである。深鉢のなかでは最も多い。縄線文は原体を深く押捺して施されたものが、多くみられ、縄線文と体部の縄文は同じ撚りの原体を用いている。縄線文の施文手法から二者に細分される。

B-1類(2~7・11・27・28・30~47・50)：縄文地に施文されるものである。口唇には交差する深い刻み目が施されたもの、大柄な刻み目が施されたもの、縄文が施されたもの、無文のものがある。2、27・28は口唇に交差する刻み目が施されたものである。2は中形の深鉢で、体上半部には斜行縄文、体下半部には縦走ぎみの縄文が施される。28には浅い縄線文が施される。3・30~32には口唇に刻み目が施されたものである。3は大形の深鉢で、H₁63-53区でまとまって出土した。口縁部にRLRの原体を押捺した縄線文が施され、体部には複説縄文が施される。口縁部には縦の沈線文が施される部分がある。体下半部には補修孔が多数認められる。口唇にはヘラ状工具による刻み目が施される。内面に

は炭化物が付着している。30の口唇には指頭を右斜めから押し付けた刻み目が施されている。38は口縁がやや内傾するもので、口唇は外側に傾き、断面は尖る。体部にはRLRの原体による浅い複節縄文が施され、口唇には指頭による刻み目が施されている。32は縄線文施文後、口唇に棒状工具による刻み目が施される。4・6・33~36は口唇に縄文が施されたものである。4・5は中形の深鉢で、斜行縄文の施されたものである。6には縦走ぎみの縄文が施される。33は体部にRLの原体による条のまばらな縄文が施されたものである。口唇の角には棒状工具による刻み目が施される。34~36は体部に斜行縄文が施されたものである。7・11・37~47は口唇が無文のものである。7は大形の深鉢。体部にはRLの原体による斜行縄文が施され、口唇の外側の角には棒状工具を下から突き上げた刻み目がめぐる。体上半には補修孔が認められる。器内外面には赤色顔料が付着している。口唇及び内面は丁寧に調整されている。11は口縁部が内傾する小形の深鉢。体部にはRLの原体による整った縦向縄文が施され、器面は全体に赤褐色を呈する。45・46は縦向縄文、41~44は斜行縄文が施されたものである。39はRLの原体による縦走ぎみの縄文が施されたもので、補修孔かともみられる貫通孔が認められる。47は口縁部に一段Rの原体による縄線文がめぐるもので、体部にはLRの原体による縄文が施されている。今年度出土資料中、地文と縄線文の原体の撚りが異なる唯一の例である。50は渦巻き状の縄線文が施されるもので、口唇の角には刻み目がめぐる。器面には赤色顔料が付着している。この土器は前掲7と器面調整や胎土・焼成が非常に良く似たものである。

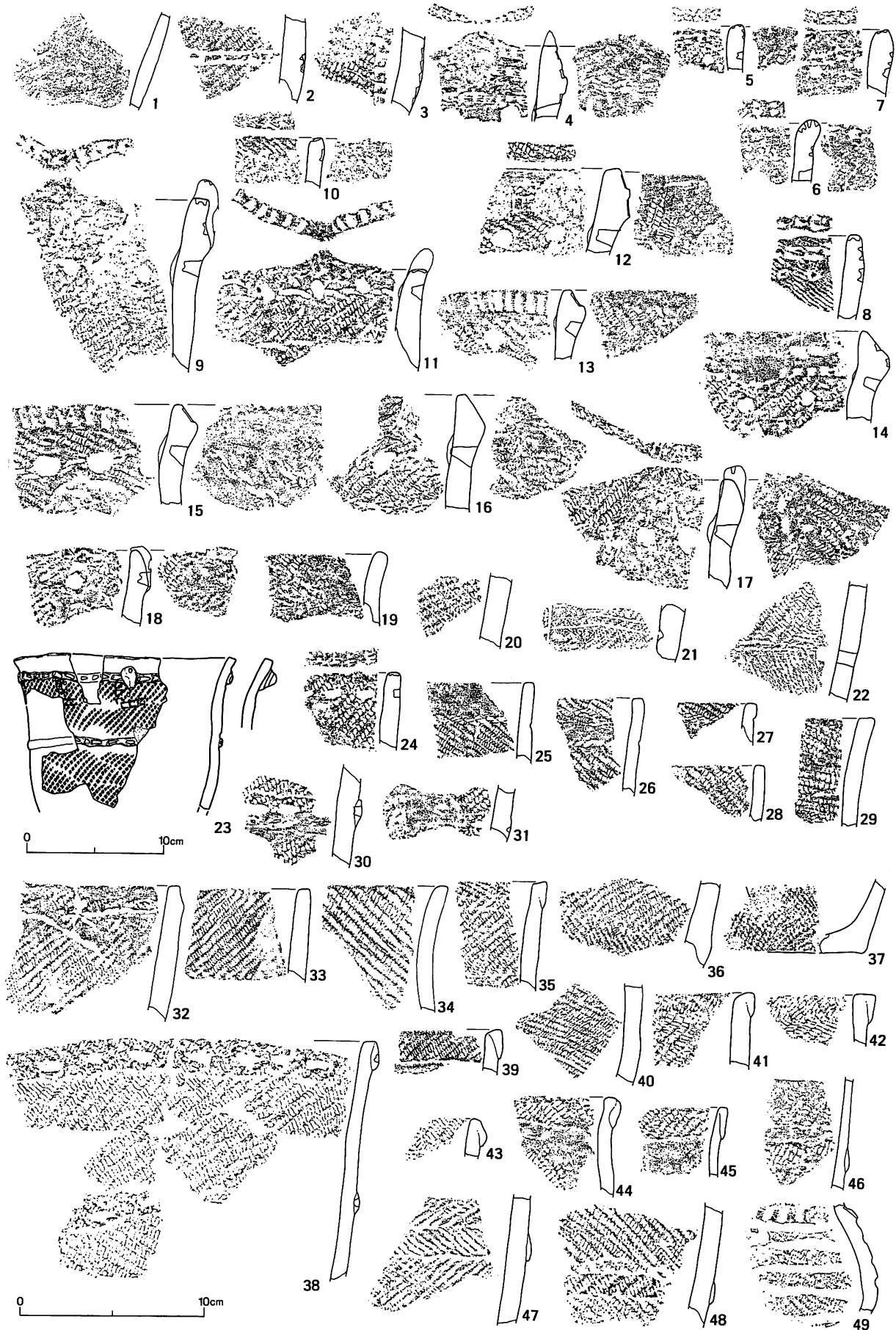
B-2類(29・48・49)：無文部に縄線文が施されるものである。29は口縁直下に縄線文が一条めぐり、その下位の無文地に縄線文が鋸歯状に施されたものである。口唇には斜めの深い刻み目が施される。48には口縁部にRLの原体による縄線文が3条めぐり、さらに斜めに押捺された3条の縄線文が施される。49はLRの原体によって施文されたものである。

C類(8~13・51)：縄文が施されたものである。8は口唇が尖り、口唇の外側に刻み目が施されている。10は細身のものである。10・11の口唇には棒状工具を押し付けた刻み目が施される。12は小形の深鉢で、底部は丸底ぎみである。口唇には縄文が施される。13は縦行縄文が施されたものである。55は斜行縄文が施されたもので口唇にも縄文がみられる。11は口縁部がやや内傾する小形の深鉢で、底は丸底ぎみである。口縁部には大きな山形の突起が1か所付いている。体部と底部にはRLの原体による整った縄文が施される。口縁部には縄文施文後、なで調整によって無文部が作られ、体部と口縁部の境には段がついている。口唇には細い棒状工具による刻み目が施されている。

D類(52)：沈線文が施されたものである。52は口縁部に大きな山形の突起をもつものである。突起の部分はU字形の隆帯で区画され、隆帯と突起の上には刺突文が施される。体部にはLRの原体による浅い縄文が施されている。口縁部の縄文はなで消されて、その上に浅い沈線文が5条めぐり、横走沈線の下位には細かい波状の沈線がめぐり、その下位には沈線で弧状の文様が描かれる。口唇には撚り紐を押捺している。この土器は斜面から出土したもので、台地上から出土した資料より新しい特色をもつものである。

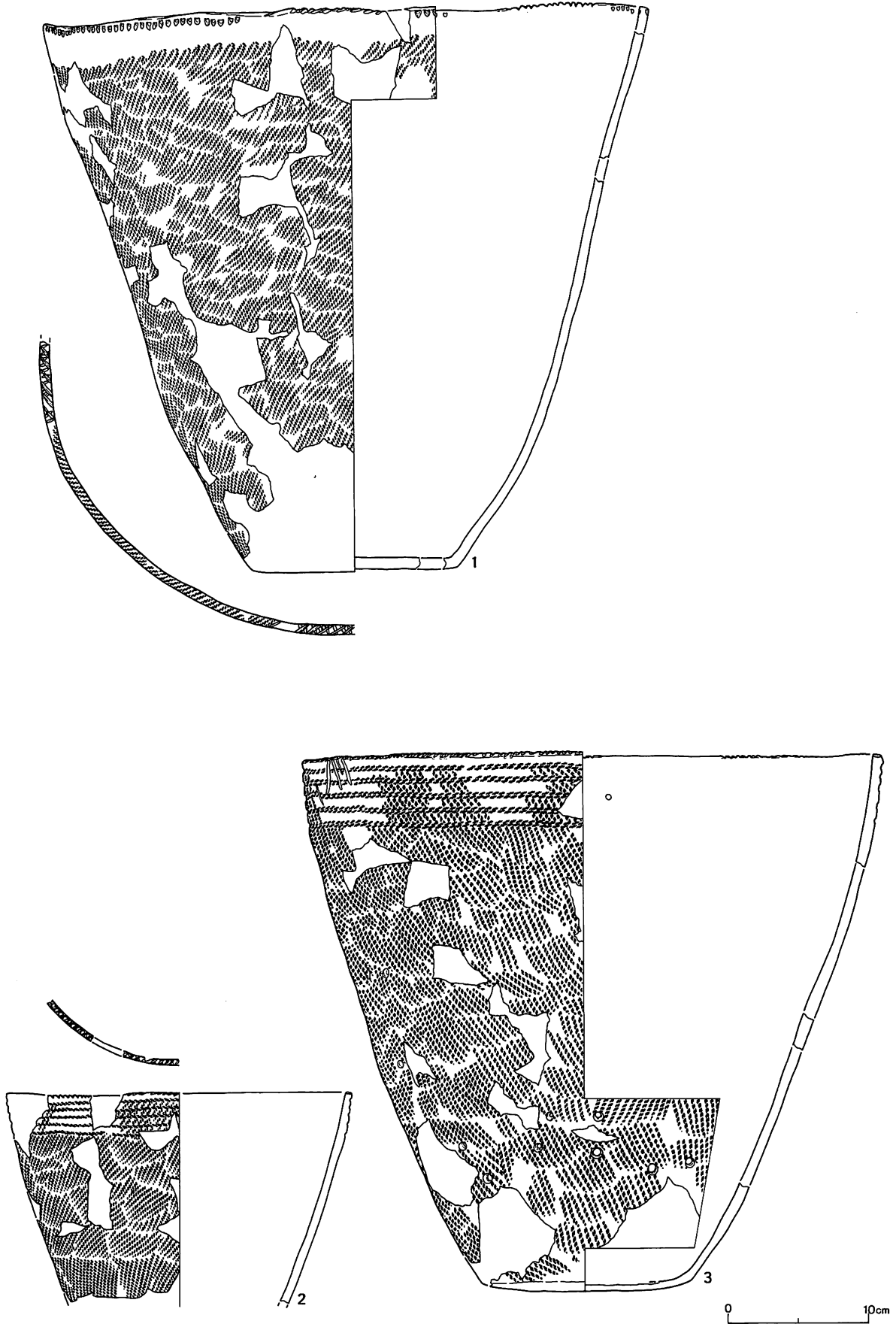
このほか、体下半部が接合した資料がある(53~56)。いずれも縄文が施されたものである。

鉢(12・13・57~79)：鉢形土器には肩の張るもの、体部が張るもの、体部に丸みをもつもの、直線的に立ち上がるものがある。12は体部にやや丸みをもつ平底の鉢である。口縁には2個一組の小突起が1か所、小さな山形の突起が1か所認められる。体部にはRLの原体による縦走ぎみの縄文が施され、口縁にはその上に沈線文が1条めぐり、口唇の角には棒状工具による刻み目が施される。口縁部の内側には1cmほどの幅でなで調整され、段になっている。13は口縁部が外に開き肩が強く張るあげ底の鉢である。口縁には2個一組の山形突起が4か所付けられている。口縁部から肩部にかけて丁寧に

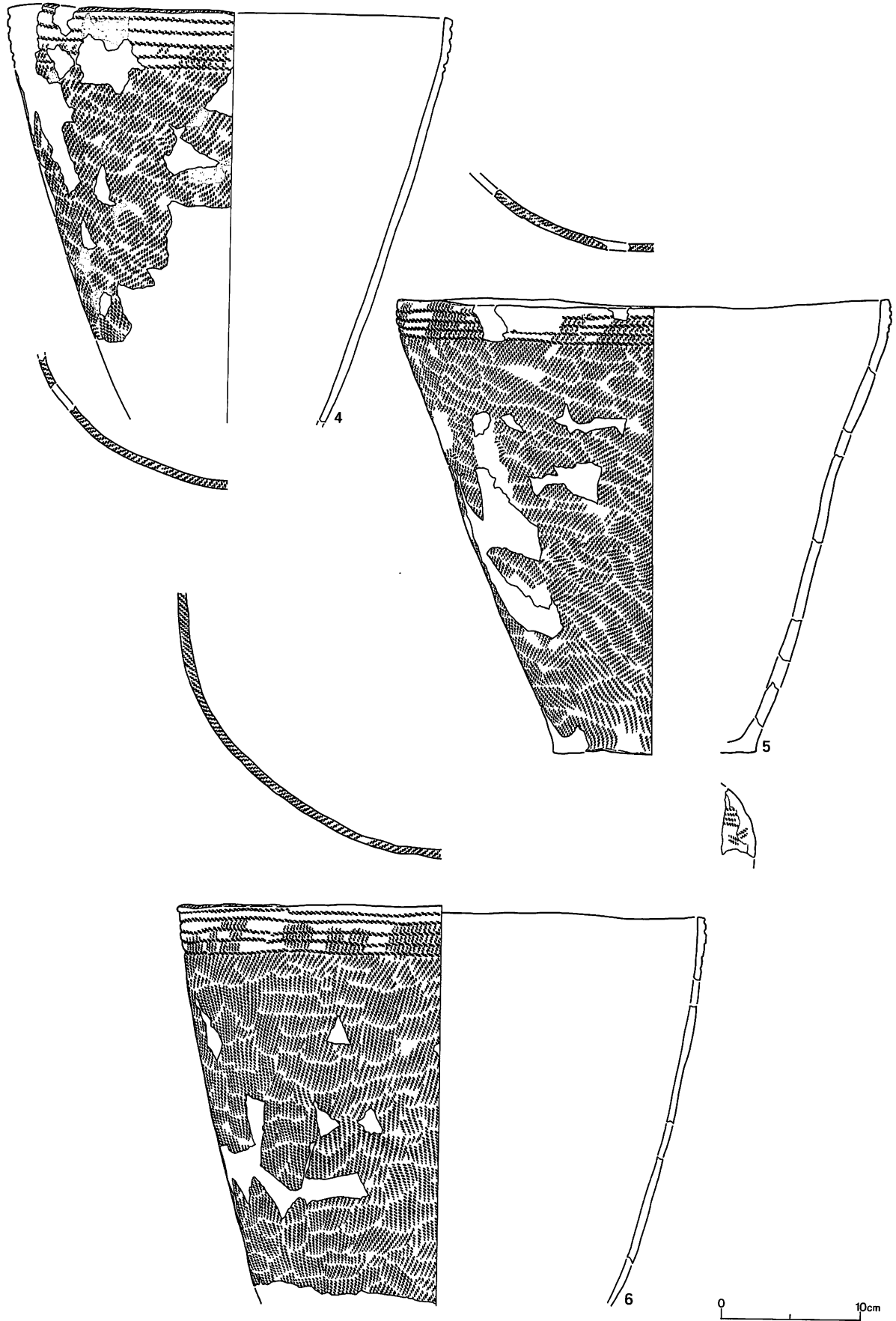


図II-34 包含層出土の土器(1)

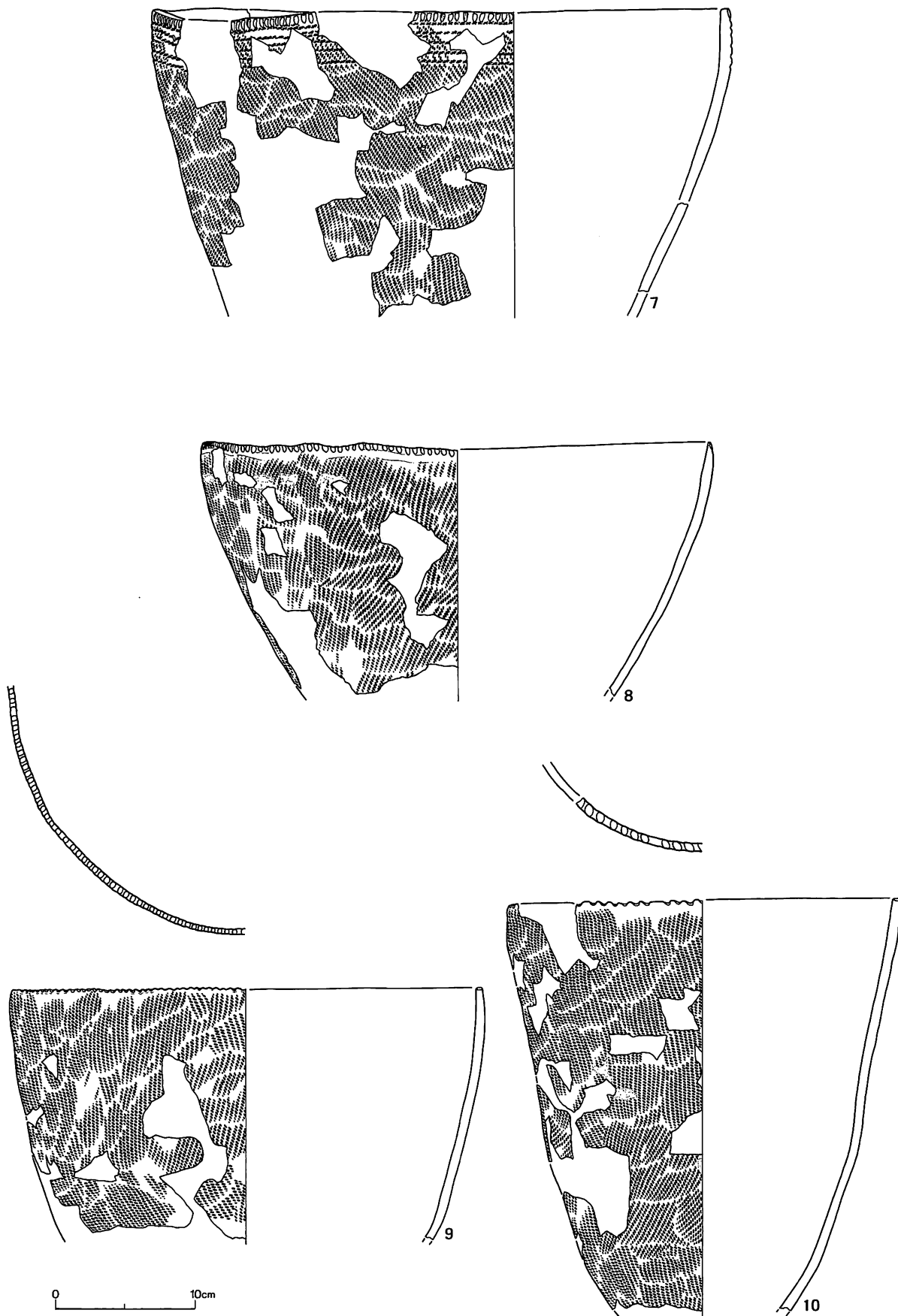
I群b-4類、III群b-3類、
IV群a類、IV群b類



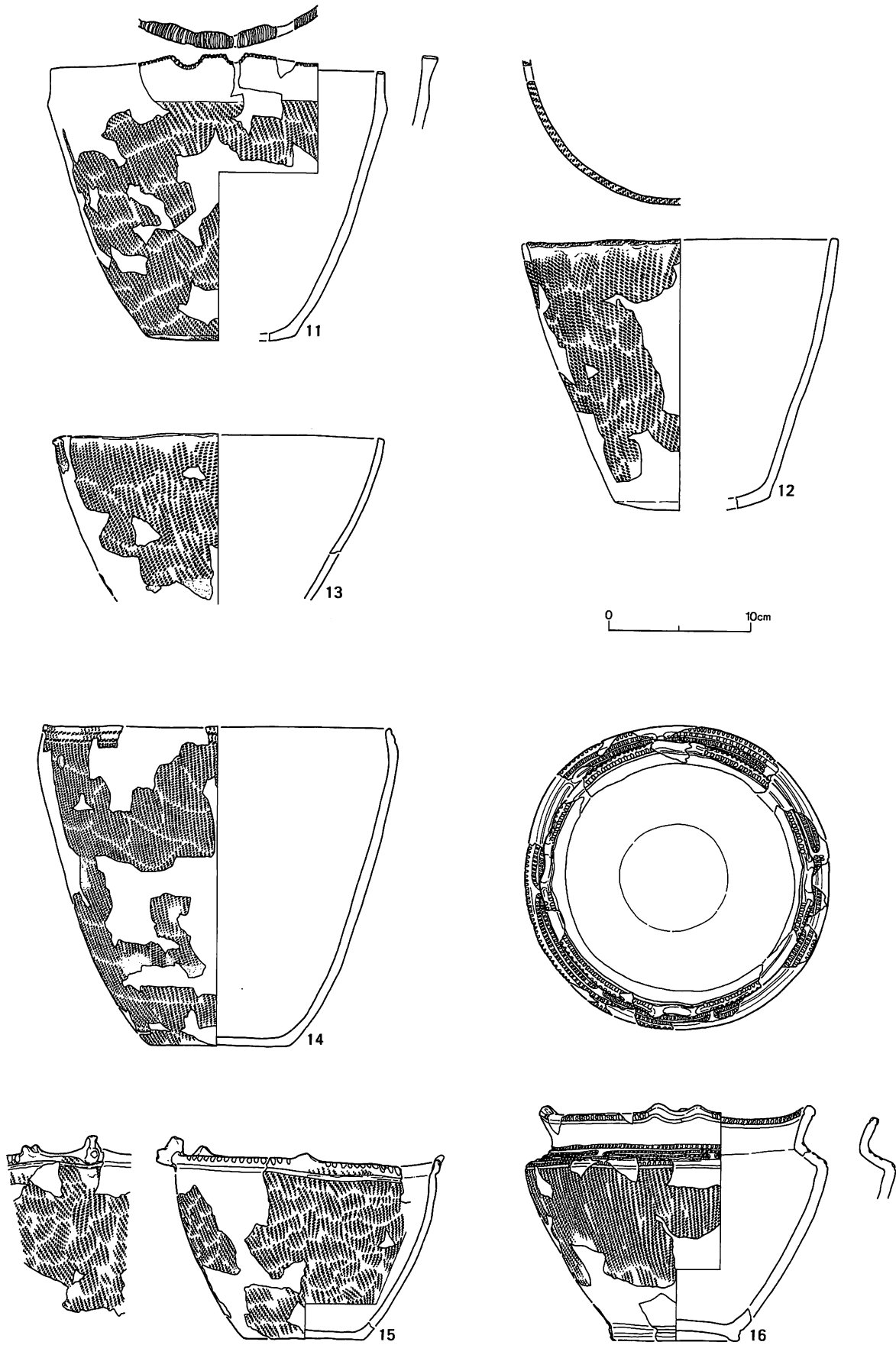
図II-35 包含層出土の土器(2) V群b類



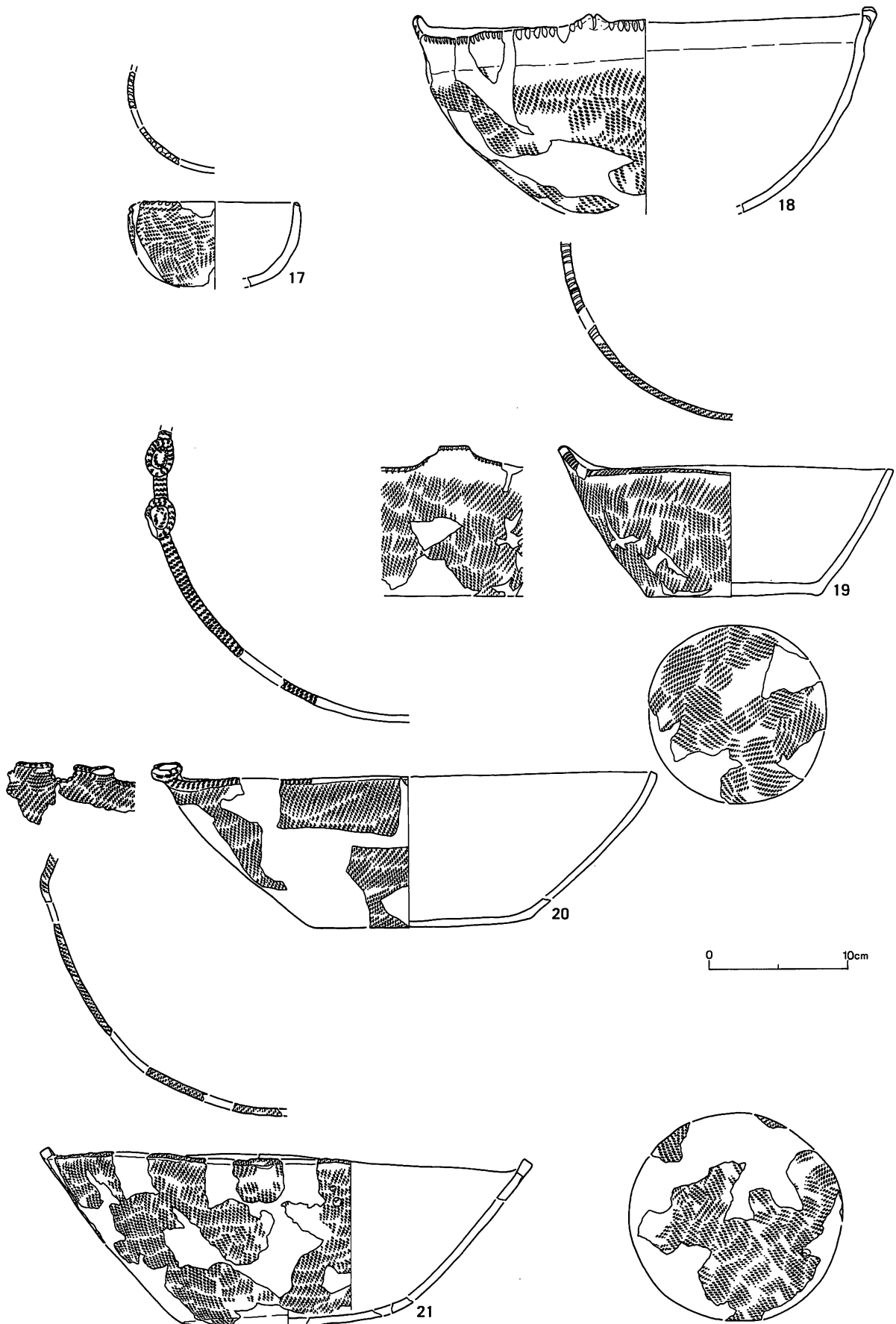
図II-36 包含層出土の土器(3) V群b類



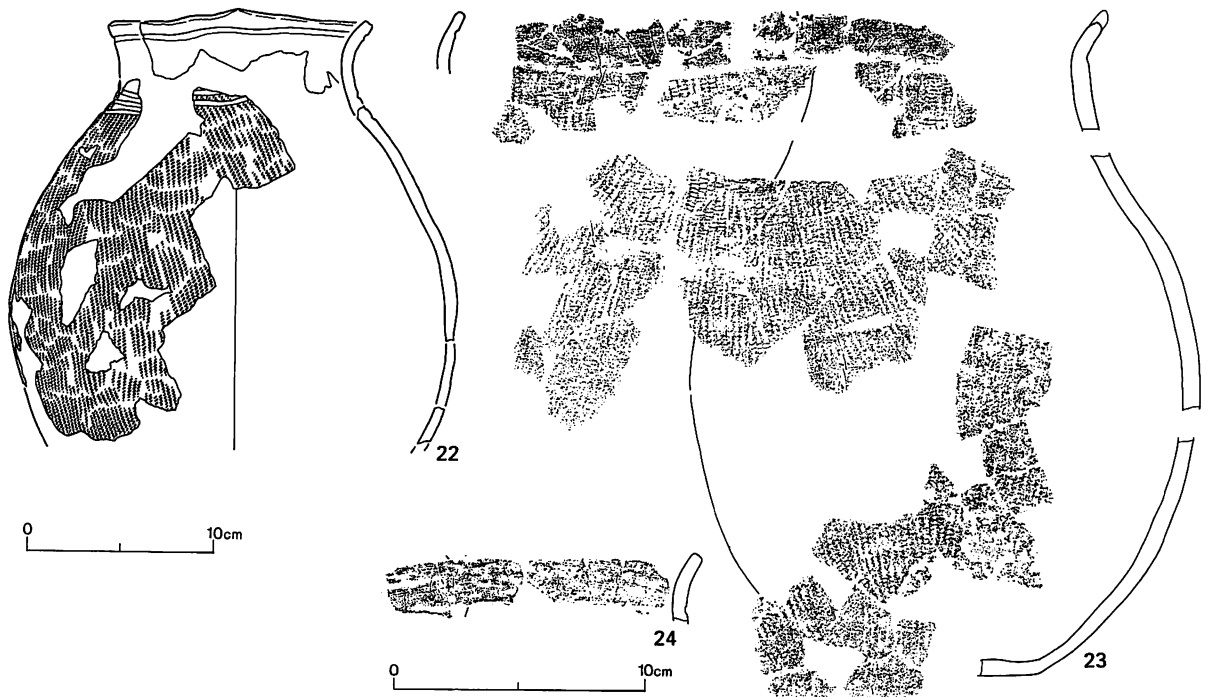
図II-37 包含層出土の土器(4) V群b類



図II-38 包含層出土の土器(5) V群b類

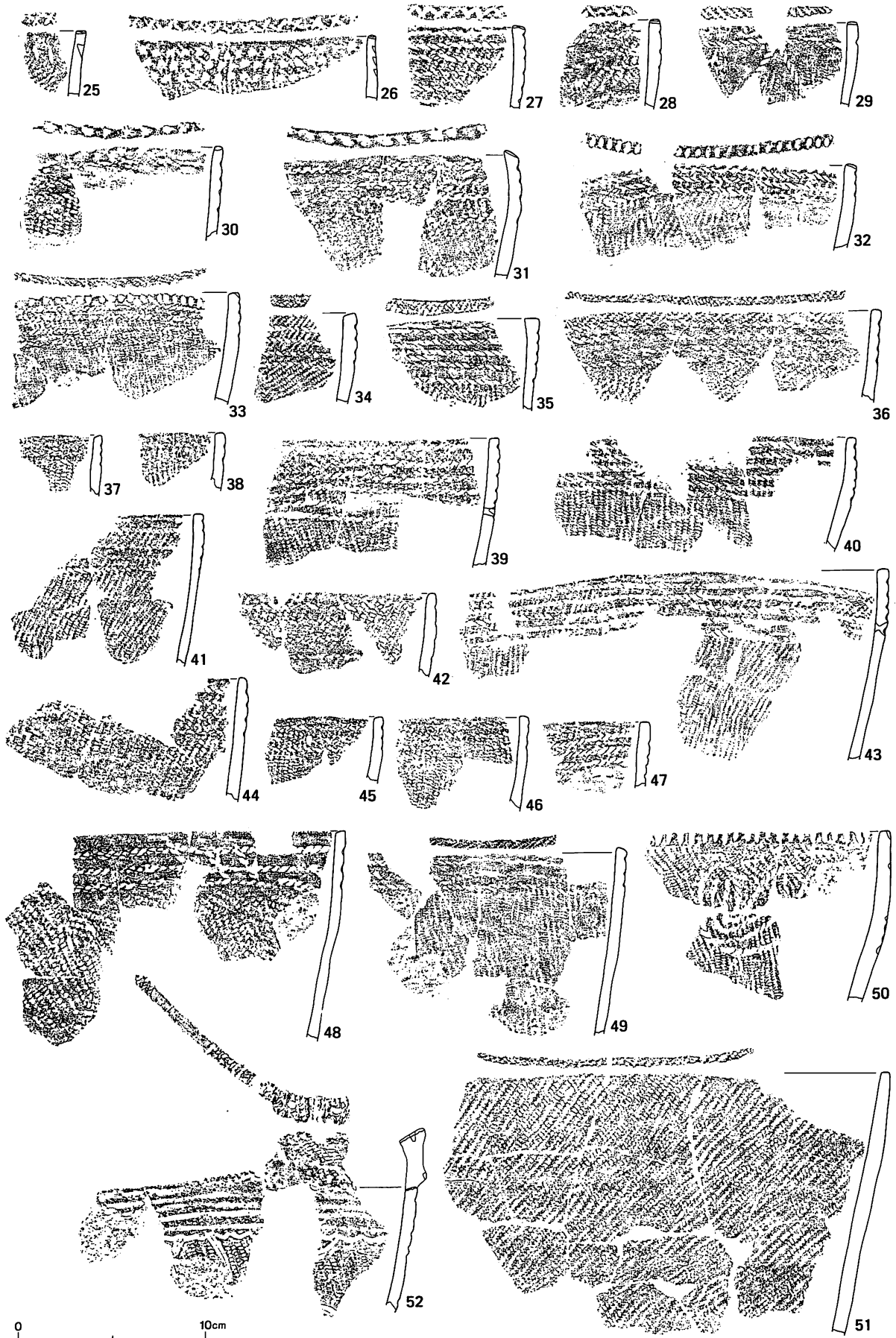


図II-39 包含層出土の土器(6) V群b類

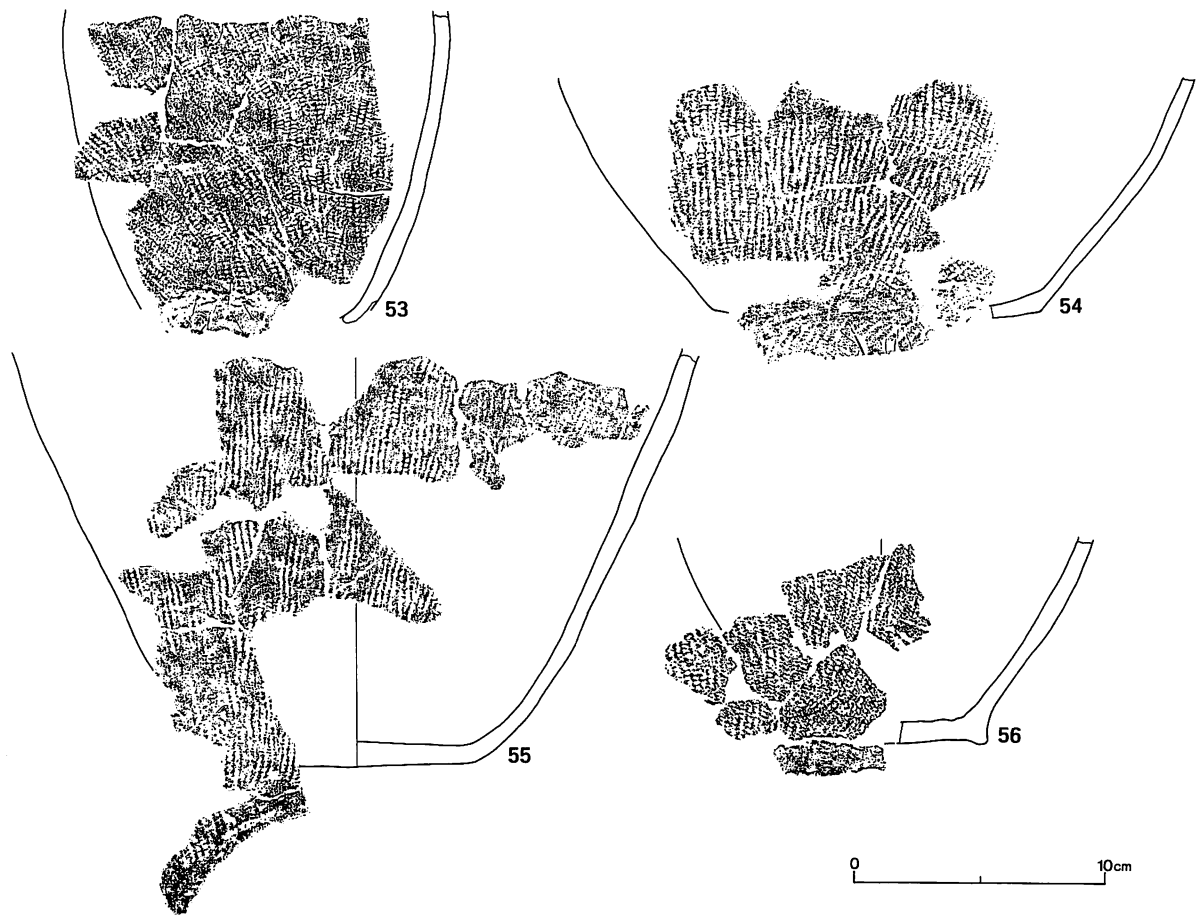


図II-40 包含層出土の土器(7) V群b類

で調整した後、肩部には細い棒状の工具を右斜めに付いた刺突列で文様が描かれる。口縁直下、肩部と体部の境及び底部には浅い沈線がそれぞれ1条めぐり、体部にはRLの原体による縦走縄文が施される。口唇の内側と外側の角には肩部のものと同一原体による刺突文が施される。口縁部の内面にも浅い沈線が1条めぐり。この資料は典型的な亀ヶ岡系の鉢形土器の器形を模倣したものであるが、胎土には細砂粒を多く含み、器面は赤褐色を呈する。57は口縁が外に開き、肩が張るもので、肩部から体部にかけてやや丸みをもつ。口縁には大きな山形突起が1か所ある。突起には2個の貫通孔があり、突起の頂部には刻み目が施される。体部に縄文を施した後、肩部から口縁にかけてなで調整し、肩部には細い沈線を数条めぐらす。58は口縁部に低い突起があり、突起の上には刻み目が施されている。59はRLの原体による縄文が施されたもので、口縁部では1~2cmの幅でなで消されている。60はミニチュアの鉢である。口縁部では縄文をなで消している。口唇には細い竹管状工具を左斜め上から突いた刺突文が施される。底部は丸底ぎみの平底で、底面にも縄文が施される。61は体部が張るもので、縦走縄文が施されている。62の口縁部はなで調整されていて段がついている。63はRLの原体による斜行縄文が施されたもので、口縁部はなで調整されて段がつく。口縁直下と体部の縄文の境には沈線文が施される。口唇にはへら状工具による刻み目が施される。64は0段多条LRの細い原体による縄線文が施されるものである。体部にも同じ原体で縦向縄文と斜行縄文が施されている。深鉢の可能性もあるが便宜的にここに含めている。65~79は小片のため器形を明らかにできないが、鉢もしくは浅鉢と考えられるものを含んでいる。65~78は縄文が施されたもの。79は無文。浅鉢(17~21、80~100)器形を知り得るものなかでは、丸底で体部が丸みをもつもの、平底で口径が大きいものがある。浅鉢には80・81のように体部から口縁部にかけて外に開き、高さの割りに口径が小さいものも含んでいる。80は口縁部がやや内湾するもので、口縁部に山形の突起がある。突起の上面は平坦で、縄文施文後に撚り紐圧痕文が施されている。器面には0段多条のLRの原体による縦向ぎみの縄文が施される。口縁部には縄文の上から施された沈線文が2条めぐり、それを縦に区切る短い沈線が認められる。口

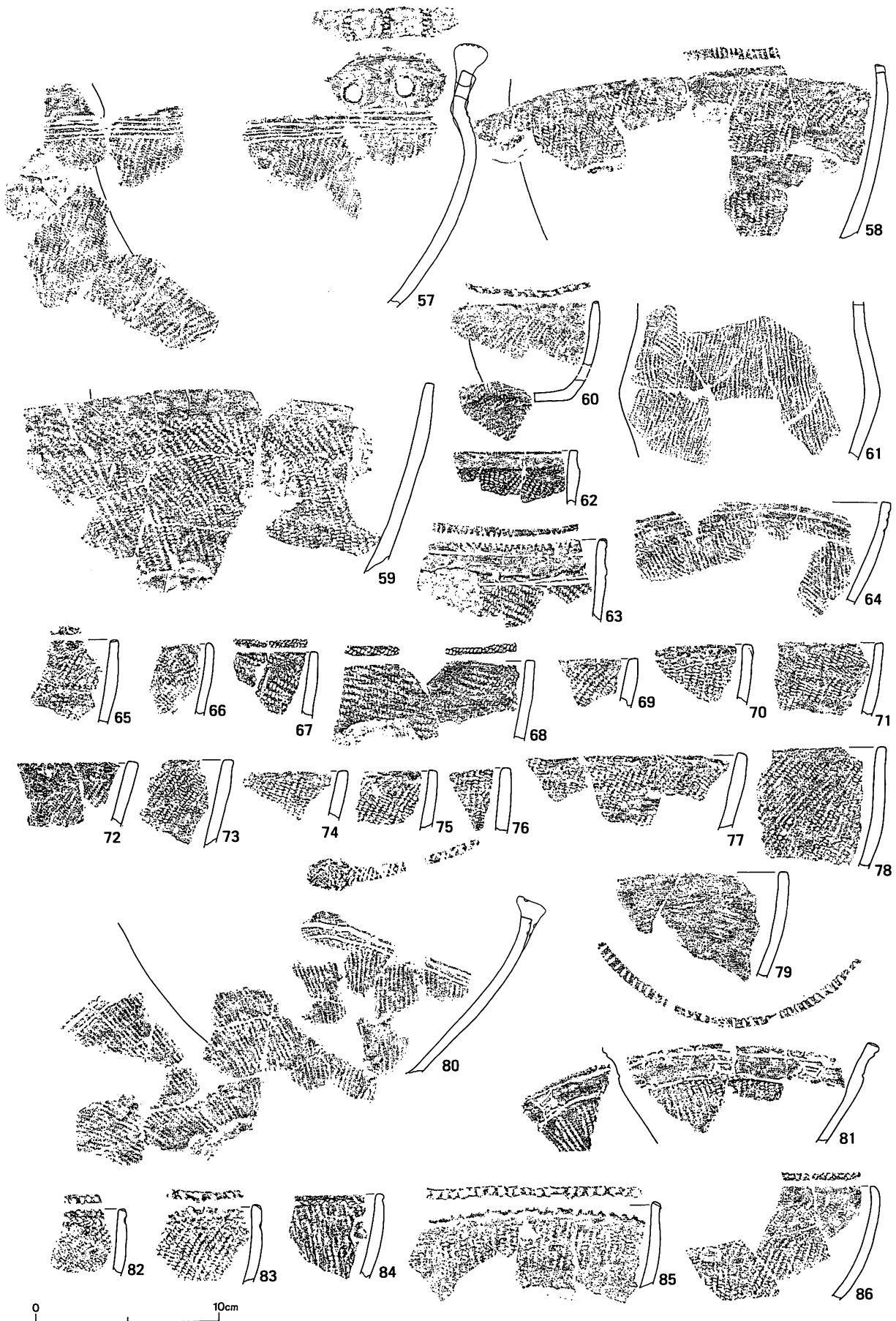


図II-41 包含層出土の土器(8) V群b類

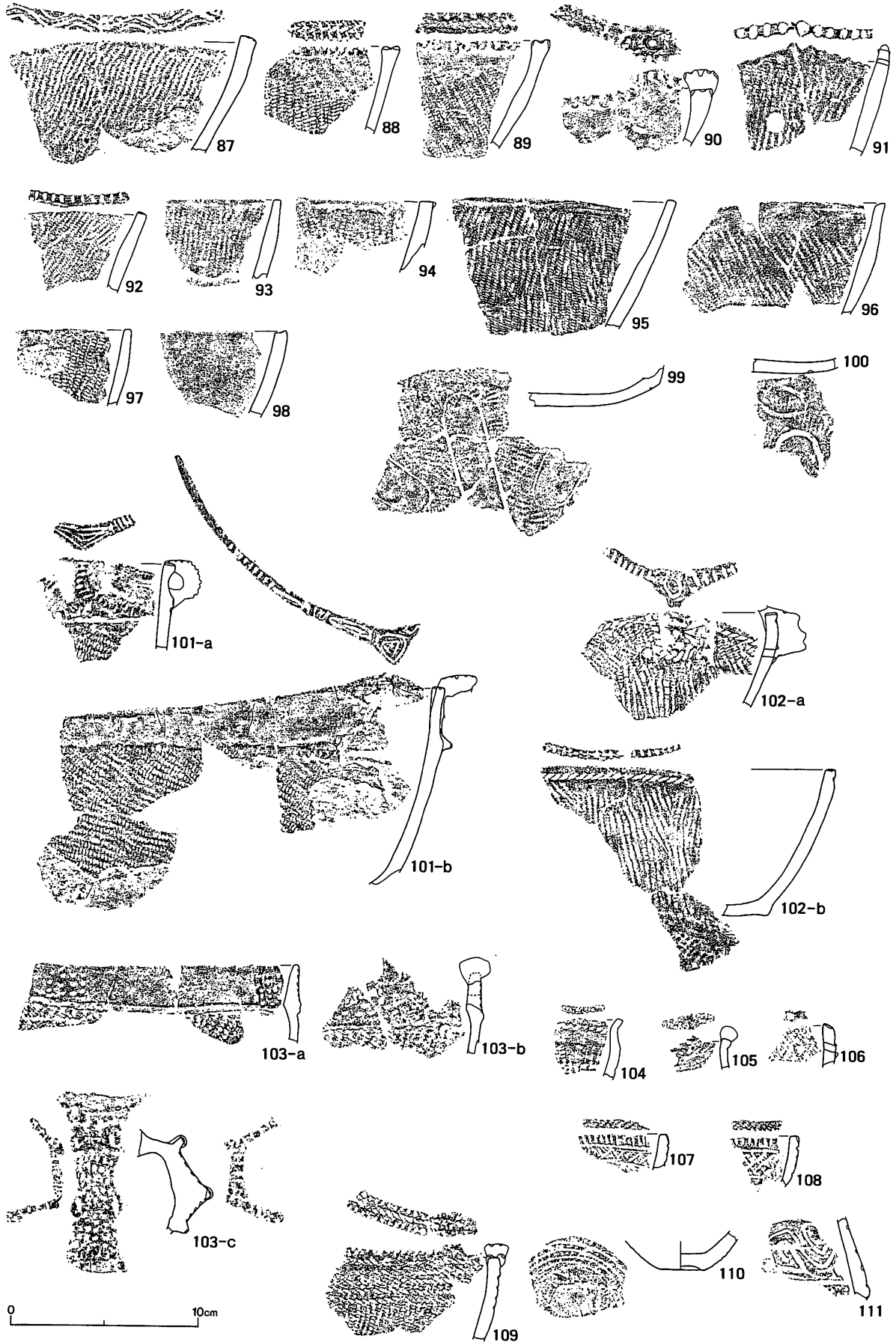


図II-42 包含層出土の土器(9) V群b類

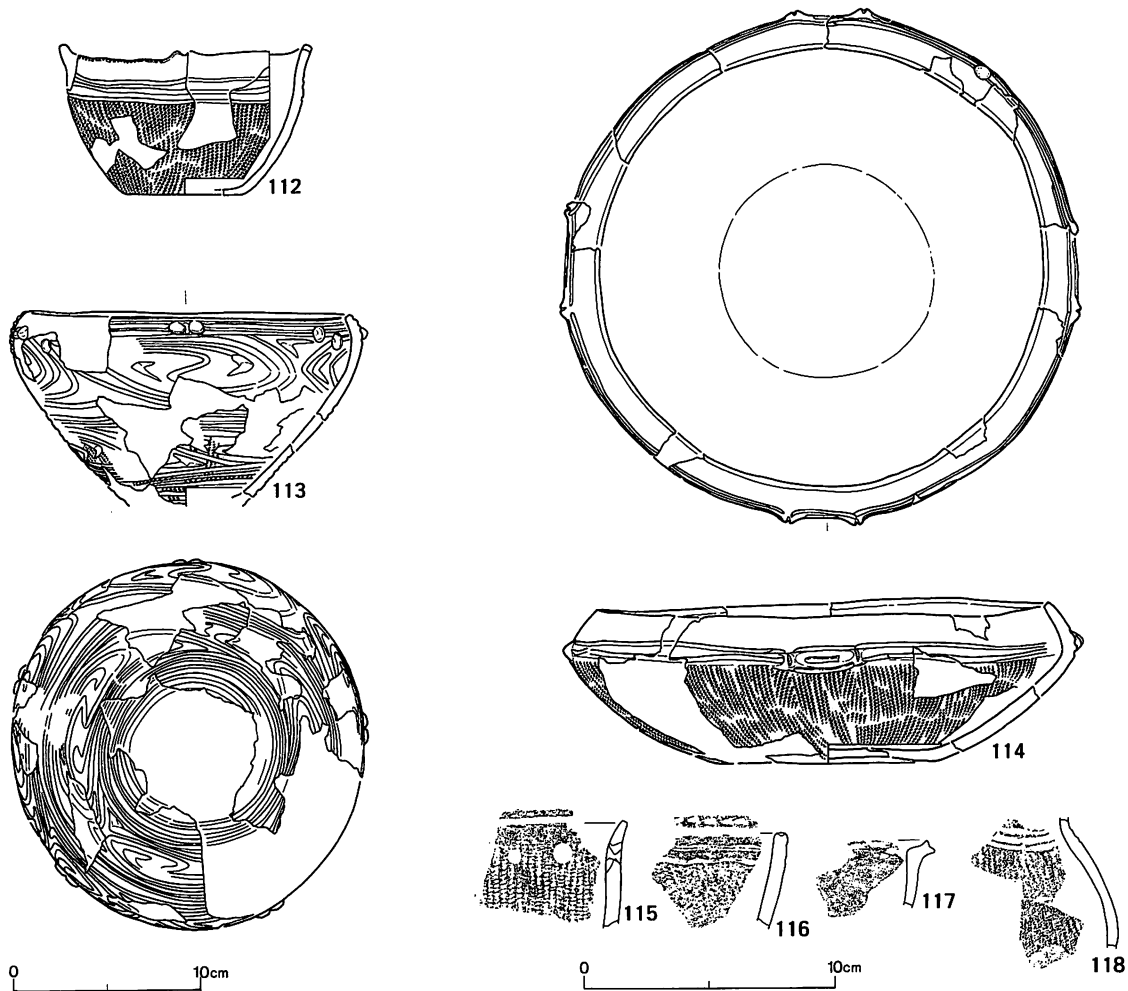
唇には交差する刻み目が施される。81は口縁部が外反するものである。口縁部には幅2cmほどの無文部が設けられ、体部との境には段がつく。無文部の上下は沈線で区画され、その間に5cmほどの間隔に沈線で文様が描かれている。体部にはRLの原体による縦走縄文が施される。器面の剥れから口縁部には突起がついていた可能性がある。17・18は丸底のものである。17は小形のもので、体上部にはRLの原体による横走縄文、下半には縦走縄文が施される。口縁部には縄線文が1条めぐる。口唇には棒状工具を押捺した刻み目が施される。18は口縁部に山形の小突起がつくもので、口縁は幅3cmほどで調整され、無文となっている。無文部と体部の境には段がついている。体部には口縁の無文部形成後、縦向きみの縄文が施されている。82～86も丸底の浅鉢とみなされるものである。82～84は口縁部に縄線文が1条めぐるものである。82の口唇には棒状工具による刻み目、83の口唇には指頭によるかとみられる刻み目が施される。84の口唇は丁寧になで調整されている。85は体部にRLの原体による縦向縄文が施されたもので、口唇には内面調整後に棒状工具による刻み目が施され、口縁がめくれている。86は縄文施文後、口縁がなで調整されている。19～21は平底のものである。19は口縁部に山形の突起をもつもので、ややあげ底になっている。体部には縦向きみの縄文が施される。底面にも縄文がある。突起の上面や突起に近い部分の口唇には刻み目、他の部分には縄文が施される。口唇に施文されている文様から、突起は1か所とみられる。20は口縁部に2個一組の突起が1か所つくもので、口縁はやや内湾している。突起の上面や突起に近い口唇には撚り紐を押捺した刻み目が施される。21は口縁部に山形の突起が2か所つくもので、体部には縦走縄文が施されている。縄文は底面にもみられる。口唇には縄文が施される。87～97は浅鉢の口縁部破片である。内面は横位のなで調整が顕著で、



図II-43 包含層出土の土器(10) V群b類



図II-44 包含層出土の土器(11) V群b類



図II-45 包含層出土の土器(12) V群b類

口縁部は内湾ぎみに立ち上がるものが多い。88~90はRLの原体による縄文が施されたもの。97は無文。他にはLRの原体による縄文が施される。87の口唇には波状の沈線文が施される。88・89は口唇に撚り紐圧痕文が1条めぐり、その両側の口唇の角には縄端による刺突文が施されている。90は89と同一個体で口縁部に突起がついている。突起の上面の中央には刺突文があり、これを囲む撚り紐圧痕文が施される。90・92は口唇に棒状工具による刻み目が施されたもので、91には山形の突起がみられる。99・100は底面に文様があるもので、いずれも縄文地に沈線で文様が描かれている。

壺(22~24)：22・23は体部と口縁部が直接接合しないけれども、ほぼ器形を復元できるもので、なで肩で、最大径は体中央部にある。いずれも胎土に細砂粒を多く含み、器面は赤褐色を呈する。22は口縁部に低い山形の突起がある。頸部には無文帯があり、上下を浅い沈線文で区画している。体部にはRLの原体による縦向縄文が施される。23は口縁部に山形の小突起が4か所つくともみられるもので、突起上は棒状工具によって刻まれている。口縁部はやや外反し、幅のせまい無文帯がある。無文帯の下位には浅い沈線文がめぐり、体部にはRLの原体による縦走縄文が施される。24は口縁部が外反するもので、無文地の下位に浅い沈線文が認められる。

異形土器(101~111)：上記いずれの器種にも含まれない特殊なものである。小片のため器形の定かでないものも便宜的に含めている。101・102は上面観が楕円形に近い舟形土器に類するものである。101は口縁部に無文帯があり、2か所に把手がついている。無文部と体部の境には段が形成され、体部

にはRLの原体による斜行縄文が施される。口唇には沈線で文様が描かれている。102は口縁部に小さい把手があり、把手は縄線文でU字形に囲まれ、その両側には貫通孔が施される。口縁には縄線文が1条めぐり、口唇には棒状工具による刻み目が施される。把手にも太い刻み目がある。103は体部に丸みをもつ鉢形を呈するものとみられるもので、口縁部に小突起があり、体部には大きな把手がつくとみなされる。口縁部にはあらかじめ無文帯を設け、細い棒状工具を器面下方から突き上げた刺突列が5~8cmの間隔を開けて、4条単位で垂下する。無文部の下位には浅い沈線がめぐり、体部にはLRの原体による縄文が施される。大きな把手には口縁部と同様の刺突列と刻み目がみられる。内面は丁寧に調整され、段が形成されている。104は口縁部が外反するもので、口縁には無文地に縄線文が施されている。体部には縄文が施され、さらに縄線文がめぐり、105は口縁部に小突起がついたもので、縄線文が認められる。106は貫通孔のある小片である。107・108は同一個体で、沈線文が施されている。109は口縁部に4条の縄線文が施されたもので、口唇には88と同種の文様がつけられている。体部の曲率から舟形に近いものとみられる。110は沈線文が施された小形の土器の底部で、底面には小さな凹みがある。111は台付き土器の脚部とみられ、無文地に沈線で文様が描かれている。

亀ヶ岡系の土器(112~118)

出土した資料を全て図示した。いずれも丁寧に器面調整されている。112・113は鉢形土器である。112は口縁部がやや外反する小形の平底土器で、口縁部には山形の小突起が4か所つく。小突起の頂部は棒状の工具で刻まれている。口縁部の無文部には沈線文がめぐり、体部にはRLの原体による縦向縄文が施される。114は口縁部が内湾するもので、口縁には2個一組の小突起が5か所つくとみられる。口縁、体中央部及び底部に近い部分には横走沈線がめぐり、その間に沈線で文様が描かれている。底部付近にはRLの原体による細かい縄文が認められる。体部上半部は磨かれている。114は口縁部が内側に屈曲する背の低い浅鉢である。屈曲部には2個一組の小突起が4か所つき、その間を沈線で連結している。口縁部はヘラ磨きされ、体部にはRLの原体による縦向縄文が施される。116は口縁部に浅い沈線文が2条めぐり、体部にはLRの原体による縄文が施される。117・118は小形の壺形土器の小片である。115は口縁部がやや外反するもので、体部にはRLの原体による縦向縄文が施される。口唇には縄文が施され、内面にはヘラ磨きされている。この資料は斜面から出土したもので他より新しいものとみなされる。

(工藤 研治)

(2) 石器等(図II-46~48、図版II 23~25)

本年度の調査で出土した石器等は6,115点である。器種別の点数は表II-5に示してある。石材は特に記載のない限り黒曜石である。

石鏃(1~30)

1・2は無茎凹基鏃。同一石材とみられる透明度の高い黒曜石製。3は有茎凹基鏃で、側縁はふくらみをもっている。茎部は欠損している。4は有茎の平基鏃。5~28は、有茎凸基鏃であるが、6は基部と先端のみに簡単な加工を施したもの。8・24は鏃身が湾曲している。13は剝離面を大きく残し、鏃身側縁がふくらみをもっている。4~19はその大半が調査区の北側台地上から出土しており、これらはV群b類土器に伴うとみなされる。20~23は細身で茎が長くなる。29・30は不明瞭な基部をもつものである。

石槍またはナイフ(31~45)

石槍の中でも、特に小型のものでは石鏃との分類が困難なものも見られたが、ここではその形態、器厚、重量を参考に便宜的に石槍として分類した。

31~39は体部の形状が三角形で側縁が直線的であるもの。茎部は幅広で長く、ある程度の厚みをもつ

ている。36は折れた先端部を再生したものである。40はやや膨らみをもった側縁と棒状の基部をもつもので、器厚は厚い。41は体部が長く、かえしが明瞭で器厚は薄い。42はかえしが明瞭ではないもの。43は基部が明瞭ではないもの。44は40と同じ形態で大型のもの。45は頁岩製で両面加工のもの。形態は全体にやや湾曲した木葉形で、ナイフの機能を有していたと思われる。

つまみ付ナイフ(46)

斜形のもので刃部の加工は顕著ではない。全体に著しい風化を受けている。

石錐(47~52)

47・48は厚い剥片を利用したもの。47は2か所の機能部をもち、石材はメノウである。49~51は剥片の一部を利用し機能部を作出しているもの。50はメノウ製でつまみ部をもつ。51は頁岩製。52は片岩製の磨製石斧の薄片を利用し機能部を作出したもの。

スクレイパー(53~63)

53~62は周辺加工のもの。53はローリングによる磨滅痕のある剥片を利用し、ノッチが施されている。54は一部に原石面を残す。55は一側縁に直線的な刃部を作出している。56は内湾する刃部をもつ。流紋岩製。57~59は腹面に加工が施されたもの(inverse retouch)で、57・58は両面がポジティブ面の剥片を利用している。石材は57が珪質頁岩。58・59は玄武岩である。59・60は尖頭部をもつもの(convergent)。61は両面加工のもので、一部欠損している。62は板状の原石を利用しており、刃部にノッチをもつ。63は珪質頁岩製のエンドスクレイパー。

石斧(64~73)

64~67は打ち欠きによる整形後、刃部を研磨したもの。65~67は側縁も研磨されている。68・69は打ち欠き後、ベッキングによる整形を施し、研磨している。70~73は全体を研磨している。72・73は欠損している。石材は64・68が千枚岩、65が粘板岩、66・67・69~71が緑色泥岩である。

たたき石(74~77)

ここでは、素材の端部などに敲打痕のあるもの、擦るなどの作業によって生じたと推定される磨痕、擦痕をもつもの、敲打などにより凹みを生じたものを一括してたたき石とした。

74・75は棒状のもので、74は側面に擦痕がある。76は三角柱状の礫を利用したもので、両端にたたき痕がある。77は両端にたたき痕が見られ、側縁が研磨されている。一面に凹みがある。75が砂岩製のほかはすべて緑色泥岩製である。

石皿(78)

78は溶結凝灰岩製。両面使用され大半が欠損している。

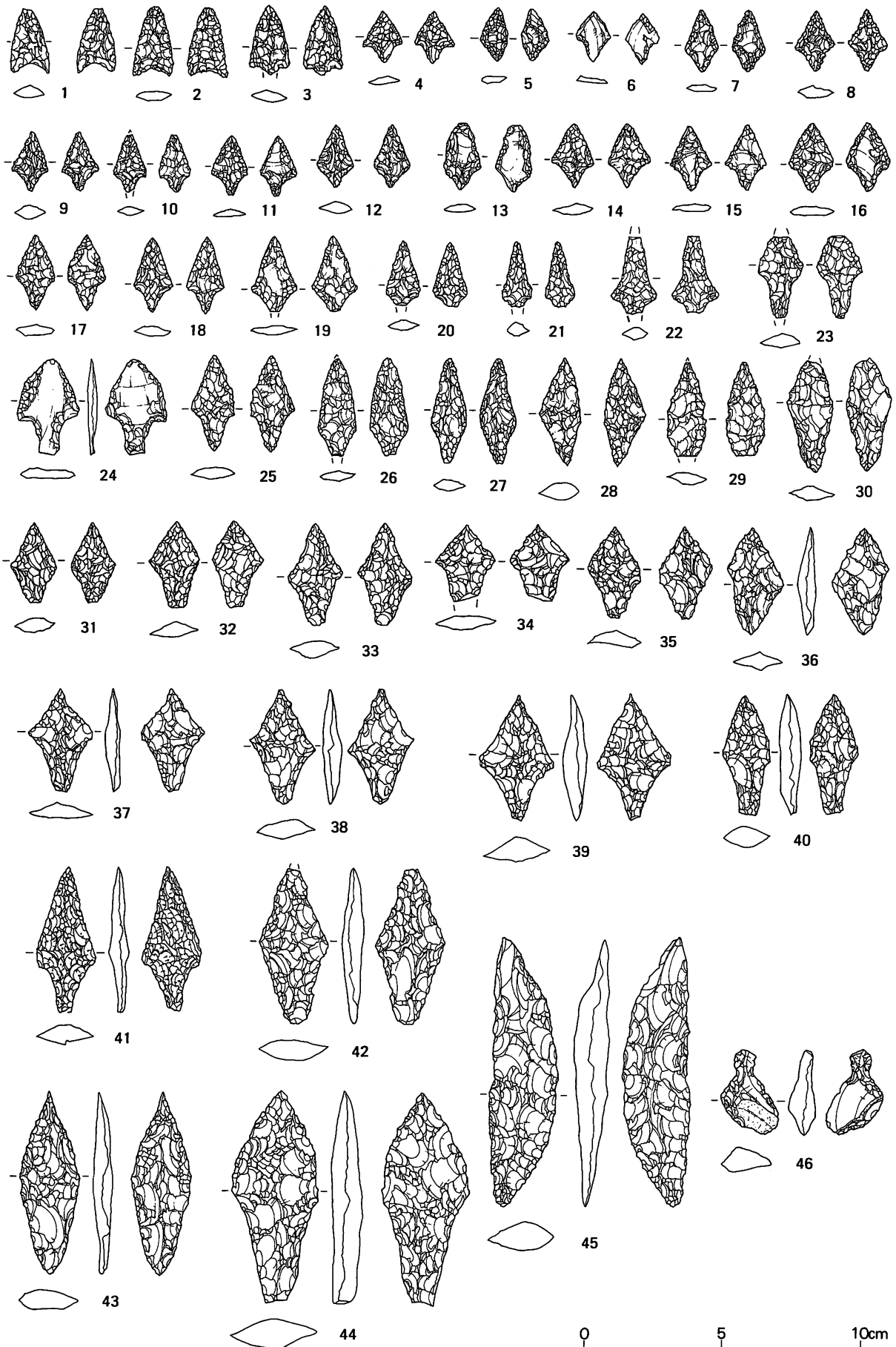
砥石(79)

79は角柱状を呈しており、四面使用されている。砂岩製。

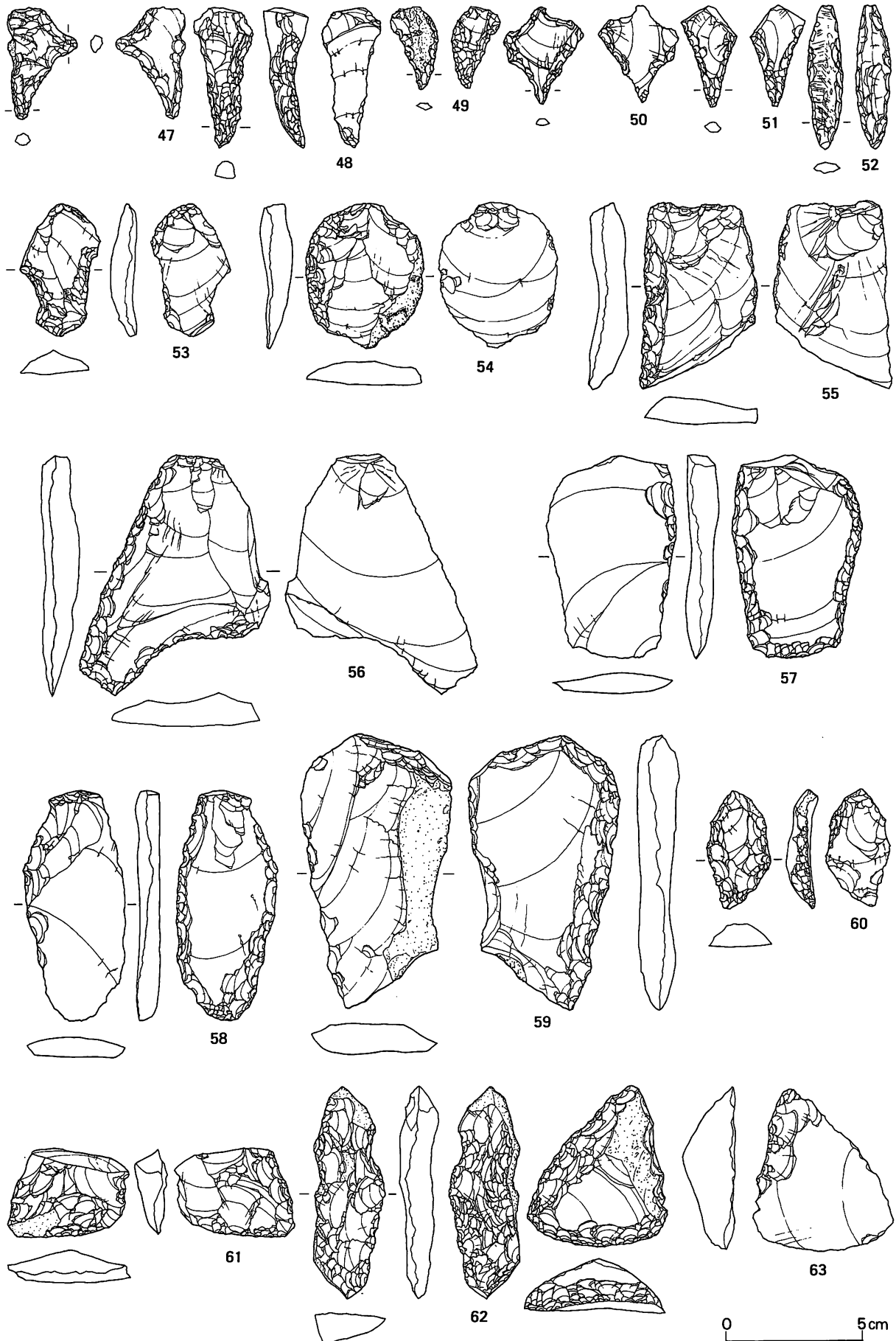
石核(80)

80は剥片を素材としたもので、主要剝離面を打面としている。

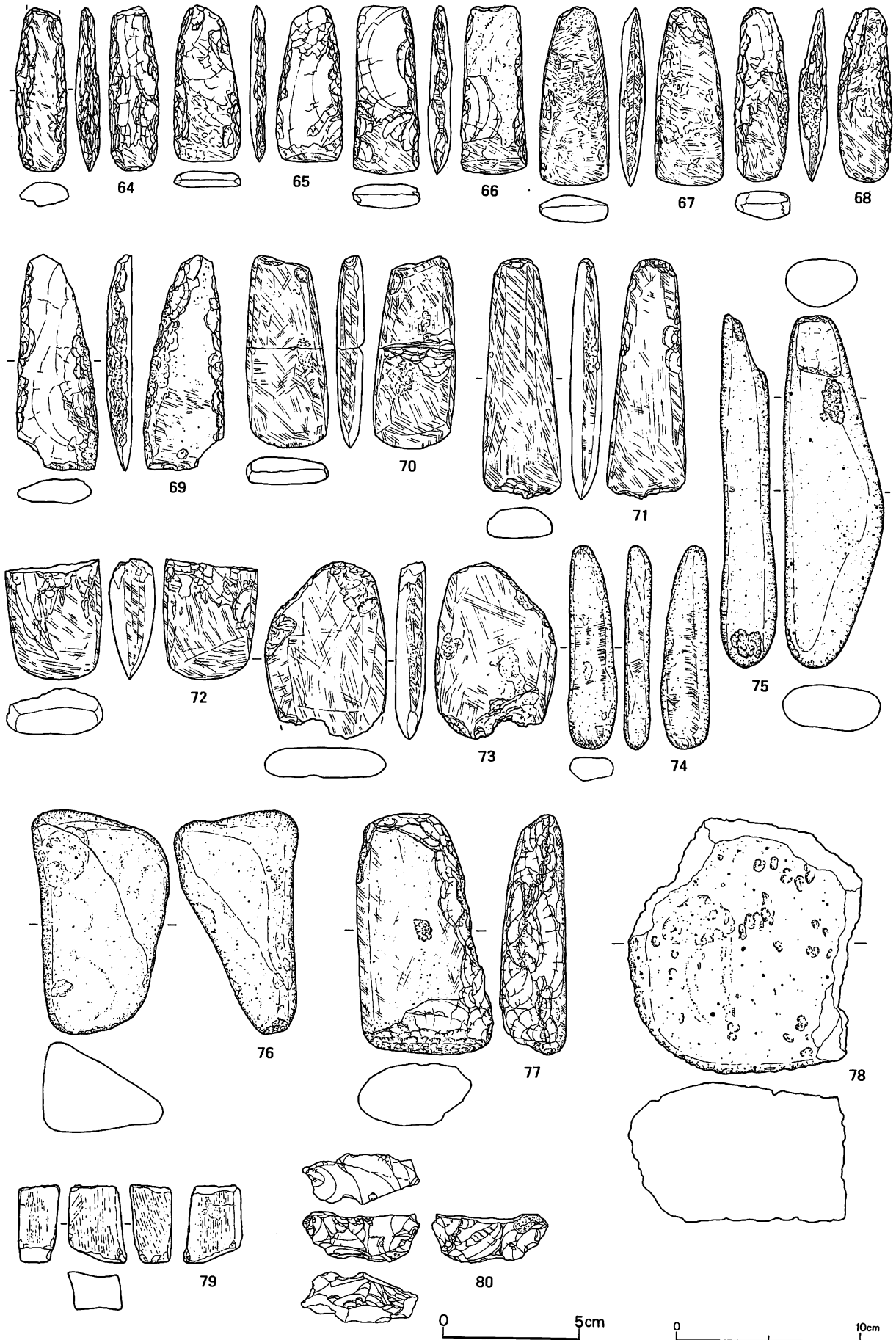
(村田 大)



図II-46 包含層出土の石器(1) 石鏃・石槍またはナイフ・つまみ付ナイフ



図II-47 包含層出土の石器(2) 石錐・スクレイパー



図II-48 包含層出土の石器(3) 石斧・たつき石・石皿・砥石・石核

6 まとめ

(1) 遺構

中期・後期

斜面上部では住居跡3軒(H-48・53・54)、フラスコ状ピット1基(FP-1)が重複して検出された。H-54とH-48は卵形に近い平面形を呈するものであり、縄文時代中期末頃の道南地方の竪穴に類似する。3軒の住居跡は切り合い関係から古い順にH-53→H-54→H-48と確認され、フラスコ状ピットはH-48より古いという結果が得られている。このうち最も新しいH-48の床面では、昨年度H-40床面の焼土から出土した資料(北埋調報69 図III-123-1)と同一個体の土器(図II-4-1)が1点出土している。この土器は煉瓦台式の特色を示すものであるが、貼付帯の施文手法が本来の煉瓦台式とは異なることからIV群a類の初頭と考えられた資料である(北埋調報69)。H-53の床面ではIII群b-3類土器の小片が1点出土している。これらの土器が竪穴の時期を示すものとすれば中期末から後期初頭にかけて構築されたと考えられる。住居跡やフラスコ状ピットは切り合いの状態や立地から、あまり時間差がないものと思われる。昨年度はG₁63区の台地上でIII群b-3類(北筒式)土器の時期の住居跡群、G₂64区の斜面下部でIV群a類(余市式)土器の時期の住居跡が検出されており、H-48等はその間をつなぐ時期のものかと考えられる。フラスコ状ピットは美沢川流域で初めての例である。斜面上部では、このほかにIV群a類土器の時期のと考えられる小竪穴が2軒(H-49・52)検出されている。

斜面下部ではIV群a類(余市式)土器の頃と考えられる土壇3基(P-125・130・137)、IV群a類(入江式)土器の時期の住居跡様遺構(H-51)1基が検出された。土壇は出土遺物や位置から判断すると、昨年度調査されたH-39やH-40に関連するものと思われる。H-51は浅い窪地を利用した簡単な小屋がけの施設と推定される。土層の観察によれば、この場所では複数の遺構が重複していた可能性がある。この時期の遺構は美沢川流域では初めてである。他遺跡でも住居の調査例は少ない。木古内町新道4遺跡では住居跡が2例知られている(北埋調報52)。

晩期

台地の縁から台地上にかけては、晩期中葉V群b類土器の時期の住居跡2軒(H-47・50)、土壇墓1基(P-149)、土壇13基、焼土19か所が狭い範囲に集中していた。

土壇墓は壇底の中央部が一段深く掘り込まれ、壁際には12か所の小ピットがめぐる特異な形状を呈するものである。壁際にめぐる小ピット列から「上屋」があったと推定される。壇底では「西人骨」、「東人骨」と呼称した2体の人骨が確認されている。頭骨は土壇墓長軸方向の西の壁際と東の壁際にある。覆土の堆積状態や遺体の位置から判断すると、①土壇を掘って遺体を安置し、上屋を設ける②一定期間を経た後、上屋を撤去する③壇底の掘り込み部分、壁際の小ピットを黄褐色土(覆土5層)で埋め、壁にも黄褐色土(覆土5層)を貼る④遺体を置いて黒褐色土(覆土3・4層)で覆い、その上位に黄褐色土(覆土2層)、さらに黒色土(覆土1層)と土の色を区別して埋めもどすという埋葬の過程が推定される。類似する形態のものには千歳市ママチ遺跡で調査された縄文時代晩期後葉のBP-16が^{註1}ある(北埋調報36)。壇底に複数の小ピットのある例については、後藤寿一氏によって小屋が造られた可能性が指摘されているが(後藤 1935)、積極的に上屋の存在を推定できる例はこれまでになかったものである。

土壇や焼土はいくつかの群をなし、土壇墓を囲むように分布している。土壇墓と重複するものはなく、意図的に土壇墓を避けているかのようである。台地上の遺構は出土遺物や遺物の出土状態から時間的に接近したものと考えられるので、土壇や焼土のなかにはP-149の葬送儀礼に関連するものがある

ると考えられる。

焼土には焼骨が多く含まれていた。焼骨はサケ属の骨が主体であり、それに鳥・獣骨が混じっている。焼骨のなかには成獣のイノシシの骨がある。

(2) 土器

早期

斜面中腹でI群b-4類土器が少量出土している。

中期

III群b-3類（北筒式）土器が台地上から斜面にかけて出土している。今年度の調査区域は、この時期の遺跡の主体部から離れているため、出土量は少ない。昨年度と同様ノダップII式や煉瓦台式に近縁の資料も出土している。ノダップII式に近縁の土器のなかには、昨年度及び一昨年度調査区域から出土したものと接合する例がある（図II-35-23、表II-11）。次章で述べているように、G₁63区、G₁64区の台地上では北筒式土器の時期に大規模な土の移動があり、今年度の調査区域にもその影響があったと考えられる。

後期

IV群a類（余市式、入江式）土器、IV群b類土器が出土している。昨年度の調査ではG₂64区の斜面下部で検出された住居跡の切り合い関係や遺物の出土状態から、余市式土器の変遷が把握された。口縁部の貼付帯が幅の狭いものから幅の広いものへ変遷し、その後に貼付帯が多数施され口唇に縄文のあるものと口縁部に一条の貼付帯のみのものが位置づけられる。また、昨年度は煉瓦台式の特色を示す資料が多く出土しており、IV群a類の初頭と考えられている（北埋調報69）。今年度の調査では煉瓦台式の特色を残すもの、口縁部に幅の狭い貼付帯が施されるもの、口縁部に幅の広い貼付帯が施されたものが出土している。H-51では入江式土器が3個体分出土した。美沢川流域では、これまで断片的な資料しか知られていなかったものである。

晩期

台地の縁から台地上にかけての狭い範囲でV群b類土器がまとまって出土している（図II-43）。分布範囲はこの時期の遺構の分布域と一致する。台地上でまとまって出土した資料は在地系の土器を主体とし、道南部の亀ヶ岡式系の土器を少量伴っている。亀ヶ岡式系の土器は大洞C₂式に相当するものである。これらの土器は分布の状態からごく限られた時間のなかで使用されたと判断される。

在地系の土器には深鉢、鉢、浅鉢、壺、異形土器があり、台付土器の脚部も出土している。亀ヶ岡式系の土器には鉢、浅鉢、壺があるけれども、深鉢はない。下表には包含層出土の掲載資料から推定した器種別の個体数を示した^{註2}（表II-4）。

表II-4 V群b類土器個体数（包含層出土掲載資料）

	深 鉢	鉢	鉢 ?	浅 鉢	壺	異 形	計
在 地 系	64	10	15	23	3	8	123
亀ヶ岡系		3		1	2		6
計	64	13	15	24	5	8	129

在地系の土器では深鉢が最も多く、全体の半数近くを占める。次いで、浅鉢、鉢がそれぞれ約2割を占め、残りが異形土器と壺である。深鉢は平底あるいは丸底ぎみの平底を呈し、口径と底径の差が大きく、口縁部が大きく開くものが多い。口縁部には縄線文が施されるものが圧倒的に多く、ほかに刺突文が施されるもの、縄文のみのものがある。縄線文や体部の縄文はLRの施文原体を用いるものが

多い。浅鉢には丸底のものと平底のものがあり、口縁部に装飾文様が施されるものは少ない。壺は体中央部に最大径のあるなで肩のものである。

これらの土器は、当地域における大洞 C₂ 式の時期の組成を示す良好な資料であり、「美々3式」として他と区別しておきたい。美々3式は空知地方の東三川Ⅲ式(野村 1969)の主要部分に相当するものであり、石狩地方においては石狩町志美第4遺跡の資料(石橋他 1979)より新しく、平成2年度に美々3遺跡 G₁63・64 区の台地で出土した V 群 b 類土器に先行すると考えられる。

なお、掲載した資料のうち、図 II-41-52、図 II-45-115 の 2 点はより新しい特色をもつものであり、美々3式には含めない。(工藤 研治)

註

- 1 壙底には 4 か所の小ピットがあり、中央部が一段掘り込まれている。ただし、ママチ遺跡の例は埋めもどされた形跡がなく、II 黒層上面で深く窪んだ状態で検出されており、周囲には掘り上げ土とみられる En-L 火山灰が厚く堆積している。
- 2 個体数は口縁部から推定した数量である。識別できる個体の大部分を図示しているの、包含層出土の掲載資料から組成の概要を知ることができる。遺構出土の掲載資料と図示できなかった小片を加えると 160~170 個体になると推定される。なお、包含層出土資料のうち、52 と 115 は集計から除外している。

引用参考文献

- 石橋 孝夫 他 1979 「7. 第 4 遺跡」『SHIBISIUSU II』石狩町教育委員会
 後藤 寿一 1935 「石狩国江別町に於ける堅穴様墳墓について」『考古学雑誌』25-5
 野村 崇 1969 「由仁町東三川遺跡」『北海道由仁町の先史遺跡』由仁町教育委員会
 北海道埋蔵文化財センター 1987 『千歳市 ママチ遺跡Ⅲ』 北埋調報 36
 // 1988 『木古内町 新道 4 遺跡』 北埋調報 52
 // 1991 『美沢川流域の遺跡群 XIV』 北埋調報 69

表 II-5 包含層出土遺物一覧

名 称	数	量	名 称	数	量	名 称	数	量
土器 I 群 b-4 類		22	つまみ付ナイフ		1	R フレイク		6
III 群 b-3 類		800	スクレイパー		24	フレイク・チップ		5,661
IV 群 a 類		396	石 斧		20	礫△		23
IV 群 b 類		2	石斧剥片		74	礫・礫片		73
V 群 b 類		11,074	たたき石		16	原 石		4
土 器 計		12,294	砥 石		3	石器等 計		6,115
石 鏃		82	台 石		7	総 計		18,409
石槍またはナイフ		16	コ ア		11			
石 錐		7	U フレイク		87			

表 II-6 遺構出土遺物一覧

名 称	数 量		名 称	数 量		名 称	数 量	
	覆 土	床 面		覆 土	床 面		覆 土	床 面
土器 III 群 b-3 類	25	1	スクレイパー	3	1	フレイク・チップ	1,585	34
IV 群 a 類	146	53	たたき石		1	礫△	3	2
V 群 b 類	1,196	1	石斧剥片	2		礫・礫片	11	
土 器 計	1,367	55	有溝砥石	2		石器等 計	1,624	239
石 鏃	13	195	U フレイク	1	6	総 計	2,991	294
石 錐	3		R フレイク	1			3,285	

表II-7 遺構別出土遺物一覧

遺構番号	名 称	数 量		遺構番号	名 称	数 量		遺構番号	名 称	数 量	
		覆 土	床 面			覆 土	床 面			覆 土	床 面
H-47	土器 Vb	71		P-130	土器 IVa	11		F-127	計	24	
	計	71			計	11			土器 Vb	38	
	石 鏃	1			フレイク・チップ	2			計	38	
	石 錐	1		計	2		石 鏃		1		
	u フレイク	1		P-131	土器 Vb	54			フレイク・チップ	15	
フレイク・チップ	11		計		54		礫・礫片	2			
計	14		スクレイパー		1		計	18			
H-48	土器 IIIb-3	12		フレイク・チップ	2		F-128	土器 Vb	69		
	IVa		1	計	3			計	69		
	計	12	1	P-132	土器 IVa	1			石斧フレイク	1	
	フレイク・チップ	1		計	1		フレイク・チップ	25			
H-49	土器 IVa	4		P-137	土器 IIIb-3	1		計	26		
	Vb	2			IVa	129		F-129	土器 Vb	37	
	計	6		計	130		計	37			
	フレイク・チップ	2		P-137	フレイク・チップ	4		F-130	土器 Vb	70	
計	2		礫・礫片		1		計		70		
計	2		計		5		フレイク・チップ		73		
H-50	土器 Vb	34		P-140	土器 Vb	253			礫・礫片	2	
	計	34			計	253			計	75	
	石 鏃	1			石 錐	1		F-131	土器 Vb	7	
	石 斧	1		スクレイパー	1		計		7		
	フレイク・チップ	59		フレイク・チップ	29		フレイク・チップ		10		
礫・礫片	1		計	32		F-132	フレイク・チップ	10			
計	67		P-145	土器 Vb	36			フレイク・チップ	72		
H-51	土器 IVa			52	計		36		F-133	土器 Vb	21
	計			52	P-146	土器 Vb	29			計	21
	石 鏃	1		計		29		フレイク・チップ		48	
H-51	スクレパー		1	フレイク・チップ	1		F-134	計	48		
	フレイク・チップ		2	砥 石	1			土器 Vb	8		
H-53	計	1	3	計	2			計	8		
	土器 IIIb-3	10	1	P-147	土器 Vb	14		フレイク・チップ	5		
	IVa	1			計	14		計	5		
	計	11	1		砥 石	1		F-135	土器 Vb	7	
フレイク・チップ	2	3	計	1		計	7				
礫 [△]		1	P-148	土器 Vb	11		フレイク・チップ		134		
計	2	4		計	11		礫・礫片	1			
H-54	石斧フレイク	1		P-149	土器 Vb	4		計	135		
	フレイク・チップ	2			計	4		F-136	土器 Vb	78	
	礫 [△]		1		石 鏃	5	3		計	78	
計	3	1	フレイク	1	1	フレイク・チップ	33				
FP-1	土器 IIIb-3	1		礫 [△]	1		計	33			
	計	1		計	7	4	F-137	土器 Vb	21		
	フレイク・チップ	1		F-123	土器 Vb	41			計	21	
計	1		計		41			フレイク・チップ	66		
P-125	礫 [△]	1			石 鏃	1		計	66		
	計	1		石 錐	1		F-138	土器 Vb	81		
P-126	土器 IIIb-3	1		フレイク・チップ	94			計	81		
	Vb	61		計	96			フレイク・チップ	153		
	計	62		F-124	土器 Vb	43		礫・礫片	1		
フレイク・チップ	5		計		43		計	154			
計	5		石 鏃		1		F-139	土器 Vb	17		
P-127	石 鏃		192	フレイク・チップ	45			計	17		
	u フレイク		6	計	46			石 鏃	1		
	フレイク・チップ	2	26	F-125	土器 Vb	18		フレイク・チップ	77		
計	2	224	計		18		計	78			
P-128	土器 Vb	36		スクレイパー	1		F-140	土器 Vb	13		
	計	36		フレイク・チップ	436			計	13		
	フレイク・チップ	1		計	436			R フレイク	1		
P-129	礫・礫片	2		F-126	土器 Vb	9		フレイク・チップ	154		
	計	3			計	9		計	155		
P-129	土器 Vb	13		石 鏃	1		F-142	土器 Vb	1		
	計	13		フレイク・チップ	23			計	1		

表II-8 遺構掲載土器一覽

遺構番号	図番号	分類	層位	遺構番号	図番号	分類	層位	遺構番号	図番号	分類	層位	
H-48	1	IVa	床	P-126	1	Vb	覆土	P-145	12	Vb	覆土	
	2	IIIb-3	覆土		2	"	"	"	P-147	13	Vb	覆土
H-49	1	IVa	覆土	P-130	1	IVa	覆土	P-149	1	Vb	覆土	
H-50	1	Vb	覆土		2	"	"	"	F-124	1	Vb	
	2	"	"	F-132	1	IVa	覆土	F-125	2	Vb		
	3	"	"	P-140	3	Vb	覆土	F-128	3	Vb	覆土	
	4	"	"		4	"	"	"	F-129	4	Vb	覆土
	5	"	"		5	"	"	"	F-130	5	Vb	覆土
H-51	1	IVa	床直上	6	"	"	"	F-133	6	Vb	覆土	
	2	"	"	P-140	7	Vb	覆土	F-136	7	Vb		
	3	"	"		8	"	"	"	8	"		
	4	"	"		9	"	"	"	9	"		
			10		"	"	"	F-140	10	Vb		
H-53	1	IIIb-3	覆土	P-145	11	Vb	覆土					
	2	"	"									

表II-9 遺構掲載石器等一覽 (1)

遺構番号	図番号	名称	層位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質	遺構番号	図番号	名称	層位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質	
H-47	1	石 錐	覆土	2.1×2.3×0.6	2.5	メノウ	P-149	6	石 鏃	覆土	2.3×1.5×0.3	0.8	黒曜石	
H-50	6	たたき石 炉跡		8.3×4.3×2.6	142.3	緑色泥岩		7	"	"	3.1×1.5×0.3	0.8	"	
H-51	5	石 鏃	床直上	2.1×1.1×0.4	0.6	黒曜石		8	フレイク	"	5.7×4.9×0.5	13.7	"	
	6	スタレバー	"			"		9	"	"	7.1×3.5×1.0	28.0	"	
P-146	14	有溝砥石	覆土	6.2×2.9×1.5	5.7	軽石		10	骨角器	"	(9.2)×0.6×0.5	(2.9)	獣骨	
P-147	15	有溝砥石片	覆土	(3.7)×(3.7)×(1.3)	(5.1)	軽石	F-123	11	石 鏃		(3.2)×1.2×0.5	(1.5)	黒曜石	
P-149	2	石 鏃	覆土	(2.2)×1.3×4.3	(1.0)	黒曜石		12	石 錐		2.1×2.2×0.6	2.6	珪質頁岩	
	3	"	"	(2.3)×1.6×0.4	(1.0)	"		F-124	13	石 鏃		2.7×1.2×0.4	1.0	黒曜石
	4	"	"	(2.0)×1.2×0.4	(0.6)	頁岩		F-127	14	石 鏃		2.0×1.6×0.4	0.7	"
	5	"	"	2.6×1.4×0.3	0.7	黒曜石		F-139	15	石 鏃		2.5×1.1×0.3	0.5	"

表II-10 遺構掲載石器等一覽 (2) P-127墳底出土の石鏃 全て黒曜石製

図番	大きさ(cm)	重さ(g)	図番	大きさ(cm)	重さ(g)	図番	大きさ(cm)	重さ(g)	図番	大きさ(cm)	重さ(g)
1	1.9×0.9×0.3	0.3	30	2.7×1.2×0.2	0.5	59	2.5×1.1×0.3	0.7	88	2.2×1.0×0.4	0.6
2	(1.7)×(0.9)×0.3	(0.3)	31	2.7×1.2×0.4	0.8	60	2.7×1.1×0.3	0.6	89	(2.2)×(1.0)×0.2	(0.4)
3	2.8×1.2×0.3	0.8	32	2.1×1.0×0.3	0.3	61	2.5×1.1×0.3	0.6	90	2.0×0.9×0.3	0.4
4	1.4×0.8×0.2	0.2	33	2.3×1.0×0.3	0.5	62	2.7×1.1×0.3	0.7	91	2.6×1.1×0.2	0.5
5	2.0×1.0×0.3	0.4	34	2.5×1.0×0.4	0.6	63	2.3×1.0×0.3	0.5	92	2.4×1.0×0.4	0.6
6	1.9×1.0×0.3	0.4	35	2.4×1.0×0.4	0.5	64	2.3×0.8×0.3	0.4	93	2.3×1.0×0.3	0.5
7	2.1×1.3×0.2	0.5	36	2.6×1.0×0.3	0.6	65	3.0×1.2×0.3	0.7	94	2.3×1.0×0.3	0.4
8	2.2×1.1×0.3	0.4	37	2.5×1.0×0.4	0.6	66	3.1×1.1×0.3	0.7	95	2.3×0.9×0.3	0.4
9	(2.0)×1.0×0.3	(0.4)	38	2.5×1.0×0.3	0.6	67	2.1×1.1×0.3	0.5	96	2.3×1.1×0.3	0.6
10	2.1×1.1×0.3	0.5	39	2.6×1.0×0.3	0.6	68	2.2×1.0×0.4	0.4	97	2.3×1.0×0.2	0.4
11	(1.9)×1.2×0.3	(0.5)	40	2.6×1.0×0.4	0.6	69	2.3×1.1×0.3	0.6	98	2.7×1.0×0.3	0.6
12	2.3×1.2×0.3	0.5	41	2.6×1.0×0.4	0.7	70	2.3×1.0×0.3	0.5	99	2.8×1.1×0.3	0.6
13	(2.2)×1.0×0.3	(0.6)	42	2.9×1.0×0.3	0.5	71	2.2×1.0×0.4	0.6	100	2.5×1.1×0.4	0.7
14	(2.4)×(1.2)×0.4	(0.7)	43	2.7×1.0×0.5	0.9	72	2.1×1.0×0.3	0.5	101	(1.5)×1.0×0.2	(0.3)
15	(2.2)×1.0×0.2	(0.4)	44	2.7×1.0×0.3	0.7	73	2.8×1.1×0.3	0.6	102	2.0×0.9×0.4	0.4
16	2.2×1.1×0.2	0.4	45	2.8×1.0×0.3	0.6	74	2.4×1.2×0.3	0.5	103	2.5×1.0×0.4	0.6
17	1.9×1.0×0.3	0.3	46	2.9×1.0×0.4	0.8	75	2.0×1.0×0.2	0.3	104	2.5×1.1×0.3	0.7
18	(1.5)×(0.9)×0.2	(0.2)	47	2.9×1.0×0.4	0.8	76	2.3×1.0×0.4	0.5	105	2.5×1.0×0.3	0.6
19	1.9×0.9×0.2	0.3	48	2.9×1.0×0.3	0.6	77	2.7×1.0×0.3	0.6	106	2.3×(0.8)×0.2	(0.4)
20	2.4×1.0×0.3	0.5	49	2.9×1.2×0.3	0.8	78	2.5×1.0×0.3	0.5	107	2.8×1.0×0.3	0.6
21	2.2×1.1×0.3	0.6	50	(2.0)×1.0×0.3	(0.4)	79	2.4×1.0×0.3	0.6	108	2.8×1.0×0.3	0.6
22	2.1×1.1×0.3	0.6	51	(1.9)×1.0×0.3	(0.4)	80	2.4×1.0×0.3	0.5	109	2.6×1.1×0.4	0.6
23	2.4×1.0×0.3	0.4	52	2.0×1.0×0.3	0.5	81	2.4×1.0×0.4	0.6	110	2.8×1.1×0.3	0.7
24	2.4×1.1×0.3	0.6	53	2.2×1.0×0.3	0.5	82	3.1×1.1×0.3	0.8	111	2.8×1.2×0.3	0.8
25	2.3×1.0×0.3	0.5	54	2.3×1.1×0.3	0.6	83	(2.0)×1.2×0.3	(0.7)	112	2.8×1.1×0.4	0.8
26	2.5×1.0×0.3	0.5	55	2.6×1.1×0.3	0.8	84	(1.7)×1.0×0.3	(0.5)	113	3.0×1.1×0.4	0.9
27	2.7×1.1×0.3	0.6	56	2.7×1.1×0.3	0.7	85	2.1×1.0×0.3	0.4	114	2.4×1.0×3.0	0.6
28	2.6×1.1×0.4	0.6	57	2.6×1.1×0.3	0.7	86	2.7×1.1×0.4	0.7	115	2.4×1.0×0.4	0.6
29	2.8×1.2×0.4	0.8	58	2.2×0.9×0.3	0.4	87	2.1×1.0×0.3	0.4	116	2.7×1.0×0.4	0.7

II 美々3遺跡第II黒色土層の調査(平成3年度)

図番	大きさ(cm)	重さ(g)	図番	大きさ(cm)	重さ(g)	図番	大きさ(cm)	重さ(g)	図番	大きさ(cm)	重さ(g)
117	2.8×1.0×0.3	0.7	136	2.0×1.0×0.3	0.5	155	(2.5)×1.4×0.3	(0.8)	174	2.8×1.4×0.3	1.0
118	2.4×1.0×0.3	0.5	137	2.3×1.1×0.3	0.4	156	2.7×1.3×0.3	1.0	175	2.4×1.4×0.3	1.0
119	2.5×1.1×0.4	0.6	138	(2.0)×1.0×0.3	(0.5)	157	2.9×1.4×0.3	0.8	176	2.9×1.4×0.3	1.0
120	2.2×0.9×0.3	0.4	139	(1.5)×1.1×0.2	(0.3)	158	2.9×1.4×0.4	1.3	177	2.5×1.1×0.3	0.9
121	2.0×1.0×0.3	0.4	140	2.1×1.0×0.3	0.5	159	2.5×1.2×0.3	0.7	178	2.3×1.3×0.3	0.8
122	2.7×1.1×0.3	0.7	141	2.2×1.0×0.2	0.4	160	2.7×1.3×0.3	1.0	179	2.4×1.4×0.4	1.0
123	2.6×1.1×0.4	0.8	142	(2.1)×(1.1)×0.2	(0.4)	161	2.2×1.1×0.3	0.5	180	2.1×1.1×0.4	0.6
124	2.4×1.1×0.4	0.8	143	(2.0)×(1.0)×0.3	(0.4)	162	2.0×1.1×0.3	0.6	181	1.8×1.4×0.3	1.0
125	2.3×1.1×0.4	0.6	144	2.2×1.1×0.4	0.6	163	2.2×1.1×0.3	0.6	182	3.0×1.4×0.4	1.2
126	2.4×1.1×0.3	0.6	145	2.0×1.0×0.4	0.5	164	2.7×1.3×0.3	0.9	183	(1.9)×11.5×2.5	0.5
127	2.0×0.9×2.7	0.3	146	2.4×1.1×0.4	0.7	165	2.5×1.3×0.3	0.7	184	(2.1)×(1.2)×0.3	(0.6)
128	2.3×1.0×0.3	0.5	147	2.6×1.2×0.4	0.8	166	2.2×1.2×0.3	0.7	185	(2.1)×1.3×0.4	(0.9)
129	2.3×1.0×0.3	0.5	148	2.3×1.0×0.4	0.6	167	2.3×1.2×0.3	0.8	186	2.6×1.4×0.4	1.0
130	2.6×1.0×0.3	0.5	149	2.2×1.0×0.3	0.4	168	2.0×1.2×0.3	0.6	187	2.0×1.2×0.3	0.6
131	2.6×1.1×0.3	0.6	150	1.8×1.0×0.2	0.3	169	2.1×1.3×0.3	0.6	188	2.2×1.1×0.3	0.6
132	2.7×(1.2)×0.3	(0.7)	151	2.1×1.1×0.4	0.6	170	2.3×1.2×0.3	0.6	189	2.1×1.3×1.9	0.6
133	(2.2)×(1.1)×0.3	(0.5)	152	2.0×0.9×0.4	0.4	171	2.4×1.4×0.3	0.8	190	2.2×1.1×0.3	0.6
134	2.0×1.0×0.3	0.4	153	2.9×1.1×0.3	0.8	172	2.4×1.1×0.2	0.6	191	(2.7)×1.4×0.4	(1.2)
135	2.1×1.0×0.3	0.4	154	2.1×0.9×0.4	0.5	173	(2.3)×1.3×0.3	0.9	192	(2.2)×1.1×0.2	(0.6)

表II-11 包含層掲載土器一覧(1) III群b-3類

※ II黒層中の掘り下げ回数(III-2-(1)参照)

図番	発掘区	層位	点数	図番	発掘区	層位	点数	図番	発掘区	層位	点数
23	H-14	フク土	1	87	G ₂ -63-03	5	1	15	88	3	1
	G ₁ -62-49	II黒 2*	1			3	1				
	G ₁ -63-86	3	1			4	1				
	87	上面	1			1	2				

表II-12 包含層掲載土器一覧(2) I群b-4類、III群b-3類、IV群a類、b類

図番	発掘区	図番	発掘区	図番	発掘区	図番	発掘区	図番	発掘区	図番	発掘区
1	G ₂ -63-96	10	G ₂ -64-90	19	G ₂ -64-80	29	G ₂ -63-97	38	H-48-8	46	G ₂ -64-91
2	G ₂ -63-87	11	H ₁ -63-44	20	G ₂ -63-88	30	G ₂ -64-81	〃	G ₂ -63-88・98	47	G ₂ -64-90
3	G ₂ -64-80	12	H ₁ -64-31	21	G ₂ -64-84	31	H ₁ -64-11	39	G ₂ -64-82	48	G ₂ -63-98
4	G ₂ -63-98	13	G ₂ -63-98	22	G ₂ -64-84	32	G ₂ -63-98	40	G ₂ -64-83	49	G ₂ -64-93
5	G ₂ -63-98	14	G ₂ -63-93	24	G ₂ -64-93	33	G ₂ -63-89	41	G ₂ -64-81		
6	G ₂ -63-95	15	G ₂ -63-98	25	H ₁ -63-15	34	G ₂ -63-89	42	G ₂ -64-83		
7	G ₂ -63-99	16	G ₂ -63-85	26	G ₂ -63-88	35	G ₂ -64-80	43	G ₂ -64-84		
8	G ₂ -64-81	17	G ₂ -64-94	27	G ₂ -63-88	36	G ₂ -63-98	44	H ₁ -63-09		
9	G ₂ -63-98	18	G ₂ -64-82	28	G ₂ -63-98	37	H ₁ -64-11	45	H ₁ -64-11		

表II-13 包含層掲載土器一覧(3) V群b類

図番	発掘区	点数	図番	発掘区	点数	図番	発掘区	点数
1	P-128	1	4	H ₁ -63-52	6	7	H-47	1
	F-123	1		-53	45		H ₁ -63-42	11
	F-127	4		-54	1		-43	14
	H ₁ -63-40	50		-64	4		-50	1
	-41	36	5	F-124	2	-52	33	
	-50	1		H ₁ -63-40	1	-54	2	
	-52	11		-41	3	-61	3	
	-61	4		-43	1	8	F-128	1
	-62	62		-51	17		H ₁ -63-40	94
	2	F-138		1	-52	57	-62	2
H ₁ -63-60		12	-53	2	9	P-126	2	
-61		12	6	H ₁ -63-26		1	-129	1
3	H ₁ -63-43	1		-61		3	-145	13
	-53	116		-62		143	F-123	1
4	H ₁ -63-31	1		7		P-126	2	-124
	-42	17			P-129	2	-136	2
	-43	5	P-131		4	H ₁ -63-40	1	
	-51	1	P-140		22	-41	5	

図番	発掘区	点数	図番	発掘区	点数	図番	発掘区	点数
9	H ₁ -63-42	1	13	H ₁ -63-51	11	21	H ₁ -63-60	1
	-50	22		-53	1		-61	25
	-51	2	14	F-143	11		-62	4
	-52	1		H ₁ -63-52	3		-70	34
	-60	3	-62	44	-71		4	
	-61	2	15	H ₁ -63-50	2		-72	7
	-70	11		-51	51		22	H ₁ -62-58
-71	2	-61		2	-59	49		
10	P-147	1	16	H ₁ -63-42	36	-67		32
	P-148	3		-51	3	-68		1
	F-128	1		-52	1	-69		4
	-129	3	17	F-136	2	H ₁ -63-51	1	
	H ₁ -63-50	33		H ₁ -63-61	1	112	P-128	7
	-51	8	-71	2	F-126		1	
	-52	1	18	F-128	6		H ₁ -63-40	9
11	P-140	8		-129	6		-41	3
	H ₁ -63-42	8		H ₁ -63-33	1		-51	1
	-43	28		-42	8	113	P-145	1
	-50	3		-43	2		H ₁ -63-31	1
	-52	12		-50	2		-42	1
	12	F-128		1	-51		20	-43
		-139	1	-52	19		-50	6
H ₁ -63-40		10	-53	5	-51	5		
-41		1	-54	1	-54	1		
-51		9	-59	3	-60	12		
-52		1	19	H ₁ -63-40	28	-61	4	
13		P-123		4	20	P-131	2	114
	-124	1	-140	3		H ₁ -63-42	34	
	-126	4	H-47	9		-43	3	
	-129	1	H ₂ -63-32	40		-51	1	
	H ₁ -63-41	5	-41	1		-52	3	
	-42	6	-42	11		-71	1	
	-50	1	-52	1				

表II-14 包含層掲載土器一覽 (4) V群b類

図番	発掘区	図番	発掘区	図番	発掘区	図番	発掘区	図番	発掘区	図番	発掘区
23	H ₁ -62-59・66	41	H ₁ -63-41・50	55	F-143	65	H ₁ -63-62	83	H ₁ -63-42	101-b	H ₁ -63-52・62
	68		51		H-50		66		H ₁ -63-51		84
24	H ₁ -63-50	42	H ₁ -63-62・63	56	H ₁ -63-51・61	67	H ₁ -63-51	85	H ₁ -63-40	102-b	P-148
	H ₁ -63-61		43		H ₁ -63-53・62		62		H ₁ -63-50		86
25	H ₁ -63-61	43	H ₁ -63-53・62	57	P-126	69	H ₁ -63-70	87	H ₁ -63-50	103-a	H ₁ -62-59
26	H ₁ -63・42・43	63	H ₁ -63-43・53		63		H ₁ -63-50		70		H ₁ -63-50
27	H ₁ -63-21	44	H ₁ -63-41	59	F-123・124	71	H ₁ -63-71	89	H ₁ -63-60	103-b	F-130
28	H ₁ -63-52	45	H ₁ -63-52・53		125		125		72		H ₁ -63-60
29	H ₁ -63-61・72	46	H ₁ -63-50	60	H ₁ -63-41・42	73	H ₁ -63-62	91	H ₁ -63-40	103-c	P-145
30	P-140	47	H ₁ -63-61		51・52		51・52		74		H ₁ -63-41
31	P-145	48	H ₁ -63-41	58	H ₁ -63-52・53	75	H ₁ -63-51	93	H ₁ -63-50・52	105	H ₁ -63-72
32	H ₁ -63-50	49	H ₁ -63-42・44		62		62		76		H ₁ -62-59
	H ₁ -63-41・52		53	53	59	H ₁ -63-51・52	77	H ₁ -62-59	95	H ₁ -62-59	107
33	H ₁ -63-71	50	H ₁ -63-52・53	61	F-143	78	H ₁ -62-57	96	F-138	108	H ₁ -63-72
34	H ₁ -63-51	51	H ₁ -63-40・42		62		H ₁ -63-62		79		H ₁ -63-70・71
35	H ₁ -63-52	52	H ₁ -63-25	62	H ₁ -63-61・62	80	P-128	97	H ₁ -63-51	110	H ₁ -63-51
36	H ₁ -63-34	53	P-146・147		62		H ₁ -63-52・53		81		H ₁ -63-33・41
37	H ₁ -63-43	54	H ₁ -63-64	63	H ₁ -63-43・52	82	42	99	H ₁ -63-62・71	115	G ₂ -64-80
38	H ₁ -63-62	54	H ₁ -63-27・51		53・62		53・62		81		F-137
39	H ₁ -63-51	61	H ₁ -63-41・50	64	P-129	82	H ₁ -63-61・71	100	H ₁ -63-43	117	H ₁ -63-53
40	H ₁ -62-49	61									H ₁ -63-42

表II-15 包含層掲載石器一覽

図番	名 称	発掘区	大きさ (cm)	重さ (g)	材 質	図番	名 称	発掘区	大きさ (cm)	重さ (g)	材 質
1	石 鏃	G ₂ -64-91	(0.2)×1.4×0.5	(1.1)	黒 曜 石	5	石 鏃	H ₁ -63-70	1.9×9.5×0.3	0.4	黒 曜 石
2	"	H ₁ -64-03	2.5×1.4×0.4	1.0	"	6	"	G ₂ -64-84	1.8×1.2×0.3	0.4	"
3	"	G ₂ -64-93	(2.3)×1.5×0.4	(1.0)	"	7	"	H ₁ -63-71	2.2×1.8×0.3	0.6	"
4	"	H ₁ -63-42	1.8×1.4×0.3	0.4	"	8	"	H ₁ -63-42	2.2×1.5×0.5	0.8	"

II 美々3遺跡第II黒色土層の調査(平成3年度)

図番	名 称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材 質	図番	名 称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材 質
9	石 鏃	H ₁ -63-06	2.1×1.3×0.6	0.8	黒 曜 石	45	石槍またはナイフ	G ₂ -63-88	9.6×2.4×1.1	22.5	頁 岩
10	"	H ₁ -63-60	2.1×1.6×0.4	0.6	"	46	つまみ付ナイフ	H ₁ -62-39	3.1×1.7×9.5	3.5	黒 曜 石
11	"	H ₁ -63-71	2.1×1.3×0.3	0.6	"	47	石 鏃	H ₁ -63-15	2.5×4.0×1.4	8.7	メ ノ ウ
12	"	G ₂ -64-84	2.2×1.3×0.4	0.8	"	48	"	G ₂ -63-97	5.1×2.1×1.6	9.4	黒 曜 石
13	"	H ₁ -63-61	2.4×1.3×0.4	0.8	"	49	"	G ₂ -64-94	2.9×1.6×0.3	1.4	"
14	"	H ₁ -63-54	2.3×1.5×0.4	0.9	"	50	"	H ₁ -63-43	3.5×2.9×0.5	2.9	メ ノ ウ
15	"	H ₁ -63-71	2.3×1.5×0.2	0.6	流紋岩?	51	"	H ₁ -63-51	3.6×2.0×5.5	3.0	頁 岩
16	"	H ₁ -63-52	2.4×1.6×0.3	0.9	黒 曜 石	52	"	G ₂ -63-88	5.1×1.3×0.5	3.6	片 岩
17	"	H ₁ -63-43	2.6×1.3×0.4	1.0	"	53	スクレイパー	H ₁ -64-10	4.7×2.9×0.9	9.0	黒 曜 石
18	"	H ₁ -63-72	2.7×1.4×0.4	0.9	"	54	"	H ₁ -62-38	5.5×4.4×1.2	20.5	"
19	"	H ₁ -63-42	2.6×1.6×0.4	1.0	"	55	"	G ₂ -64-93	6.6×4.1×9.5	33.6	"
20	"	H ₁ -63-52	(2.3)×1.2×0.5	(0.8)	"	56	"	H ₁ -63-42	9.2×5.7×1.2	55.8	流紋岩
21	"	H ₁ -63-51	(2.3)×1.1×0.5	(0.9)	"	57	"	H ₁ -63-61	7.9×4.7×1.1	42.3	珪質頁岩
22	"	H ₁ -63-52	(2.7)×1.7×0.5	(1.4)	"	58	"	H ₁ -63-70	8.2×3.7×0.7	35.0	玄武岩
23	"	G ₂ -64-80	2.9×1.6×0.6	1.7	"	59	"	H ₁ -63-50	9.8×5.5×1.4	84.6	"
24	"	H ₁ -62-49	3.4×2.3×0.4	2.6	"	60	"	G ₂ -64-83	4.3×2.3×0.8	7.9	黒 曜 石
25	"	G ₂ -64-83	3.4×1.6×0.4	1.5	"	61	"	H ₁ -63-41	3.3×4.1×1.1	14.6	"
26	"	H ₁ -63-64	3.5×1.4×0.4	1.5	"	62	"	H ₁ -63-42	7.6×2.6×1.3	21.1	"
27	"	H ₁ -63-34	3.8×1.3×0.5	1.8	"	63	"	H ₁ -63-71	6.3×4.7×1.9	46.9	珪質頁岩
28	"	G ₂ -64-84	3.8×1.6×0.6	2.2	"	64	石 斧	G ₂ -64-84	8.7×2.7×1.3	45.6	千枚岩
29	"	G ₂ -64-83	(0.3)×1.4×0.5	(2.0)	"	65	"	G ₂ -63-87	8.4×3.6×0.9	41.5	粘板岩
30	"	H ₁ -62-59	4.0×1.6×0.7	2.6	燐灰岩?	66	"	G ₂ -63-87	9.0×3.6×1.2	58.7	緑色泥岩
31	石槍またはナイフ	H ₁ -63-34	2.8×1.6×0.5	1.5	黒 曜 石	67	"	H ₁ -63-44	9.4×3.8×1.3	77.1	"
32	"	H ₁ -63-34	(3.1)×1.8×0.5	(1.9)	"	68	"	G ₂ -63-86	9.2×2.9×1.5	57.3	千枚岩
33	"	H ₁ -63-34	3.6×2.0×0.7	2.9	"	69	"	G ₂ -63-88	11.7×4.4×1.4	96.2	緑色泥岩
34	"	G ₂ -64-83	(2.7)×2.2×0.6	(2.2)	"	70	"	G ₂ -64-93	10.3×4.4×1.5	118.9	"
35	"	G ₂ -64-84	3.2×1.9×0.5	2.0	"	71	"	G ₂ -63-87	12.8×4.2×1.7	145.3	"
36	"	G ₂ -64-90	3.7×2.1×0.6	3.0	"	72	"	G ₂ -64-94	(6.1)×5.1×2.3	(107.0)	片 岩
37	"	H ₁ -64-11	3.6×2.3×0.5	2.4	"	73	"	H ₁ -63-89	9.2×6.5×1.6	166.4	片岩?
38	"	H ₁ -62-48	4.0×2.5×0.7	3.9	"	74	た た き 石	G ₂ -64-93	10.8×2.5×1.3	67.9	緑色泥岩
39	"	G ₂ -63-87	4.5×2.7×0.8	4.7	"	75	"	H ₁ -63-60	18.9×5.4×3.0	407.5	砂 岩
40	"	H ₁ -63-35	4.3×1.8×0.8	4.6	"	76	"	H ₁ -63-09	12.2×6.9×6.3	710.0	緑色泥岩
41	"	H ₁ -64-01	5.1×2.2×7.5	4.4	"	77	"	G ₂ -64-94	13.1×7.2×3.7	530.0	"
42	"	G ₂ -63-98	5.5×2.7×0.9	8.6	"	78	台 石	H ₁ -63-09	(13.4×12.8)×7.8	(1650.0)	溶結燐灰岩
43	"	G ₂ -64-84	7.5×3.3×1.0	21.4	"	79	砥 石	G ₂ -63-88	(4.2)×3.1×2.3	(40.9)	砂 岩
44	"	H ₁ -64-01	5.1×2.2×7.5	4.4	"	80	石 核	H ₁ -63-52	1.8×4.2×1.9	11.6	黒 曜 石

表II-16 遺構一覽

遺構番号	位 置	平 面 形	規 模 (m)		最大深	長軸方向	備 考
			確 認 面	底 面			
TP-2	H ₁ -63-63	溝 状	2.10×0.95	1.37×0.31	1.42	N-30°-E	
TP-3	H ₁ -63-35	溝 状	2.11×0.31	1.98×0.18	0.40	N-33°-E	
FP-1	G ₂ -63-97	楕 円 形	1.22×0.83	1.41×1.08	0.45	N-52°-W	
H-47	H ₁ -63-32-42	楕 円 形	2.79×2.47	2.46×1.99	0.32	N-8°-E	
H-48	G ₂ -63-87-97	卵 形	4.24×3.11	3.74×2.54	0.28	N-83°-E	
H-49	H ₁ -63-08	不整楕円形	2.34×—	—×—	0.35	N-31°-E	
H-50	H ₁ -63-33-34	不 整 形	2.49×(1.91)	2.30×(1.86)	0.08	N-76°-W	
H-51	G ₂ -64-93-94 H ₁ -64-03	楕 円 形	6.72×—	—×—	0.36	N-54°-W	
H-52	H ₁ -67-07	卵 形	1.89×1.62	1.49×1.28	0.19	N-45°-E	
H-53	G ₂ -63-87	楕 円 形	(2.82×2.17)	(2.50×2.03)	0.27	N-79°-E	
H-54	G ₂ -63-87-97	卵 形	4.20×3.48	3.92×3.26	0.33	N-87°-E	
P-125	G ₂ -64-84	楕 円 形	1.32×0.92	0.69×0.54	0.47	N-7°-W	
P-127	G ₂ -64-82-92	楕 円 形	1.49×1.21	1.10×1.00	0.94	N-77°-E	
P-130	G ₂ -64-84	楕 円 形	1.81×1.64	1.50×—	0.13	N-66°-W	
P-132	G ₂ -64-82	円 形	0.75×0.72	0.51×0.52	0.35	N-7°-E	
P-133	H ₁ -63-09	円 形	0.72×0.64	0.46×0.40	0.33	N-56°-E	
P-134	H ₁ -63-09	円 形	0.71×0.75	0.53×0.48	0.44	N-3°-E	
P-135	H ₁ -63-19	楕 円 形	0.81×0.72	0.44×0.40	0.30	N-45°-E	
P-136	H ₁ -63-19	楕 円 形	0.66×0.56	0.41×0.33	0.11	N-72°-E	
P-137	G ₂ -64-83	楕 円 形	1.83×1.47	1.15×0.94	0.36	N-6°-W	
P-144	H ₁ -63-32-42	不 明	—×—	—×—	0.44	N-68°-W	
P-149	H ₁ -63-51-61	楕 円 形	1.92×1.34	1.71×1.11	0.59	N-68°-E	

7 美々3 遺跡出土の脊椎動物遺体

金子 浩 昌

A. 硬骨魚綱 Osteichthyes

サケ目 Salmoniformes

サケ科 Salmonidae

サケ属 *Oncorhynchus* sp.

歯と椎体、その他断片となった各部位の骨が、多量に検出されている(写真II-1)。歯と椎体以外は、特定の部位を標本として確認することはできなかった。

B. 鳥 綱 Aves

ガンカモ目 Anseriformes

ガンカモ科 Anatidae

カモ類 A *Anas*? sp.

F-123 から右脛骨近位部片が検出されている(写真II-1-1)。

脛骨外側に付く腓骨との関節面が残る。その直ぐ脇に栄養孔がみられる。中型のカモの大きさである。

F-125 から左上腕骨の近位端片が検出されている(写真II-1-2)。

小断片であるが、残存部の形状からカモ類と思われる。中型のカモである。

カモ類 B

F-125 から左中手骨近端部片が検出された(写真II-1-3)。

本標本はコガモ程度の大きさのカモの中手指である。コガモとは少し形状を異にするように思う。

F-125 から左脛骨の近位骨端の小片が検出された(写真II-1-4)。

コガモ程度の大きさであり、形態的にも似る。

スズメ目 Passeriformes

カラス科 Corvidae

カケス *Garrulus glandarius*

F-125 から左中足骨の骨体部破片が検出された(写真II-1-5)。

近・遠両端を欠く。骨体の大きさ、幅、後面の特徴はカケスに一致する。

C. 哺乳綱 Mammalia

食肉目 Canivora

イヌ科 Canidae

キツネ? *Vulpes vulpes*?

F-125 から左上腕骨の遠位骨端の断片が検出された(写真II-2-19)。

滑車上孔がみえる。大きさからキツネではないかと思われる。

F-124 から尾椎骨片が検出された(写真II-2-20)。

尾椎骨片は遠位端を欠く。大きさからキツネ位の獣が推定される。

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

F-138 で左距骨片が検出された(写真II-2-21)。

イヌ科の形態であり、大きさからタヌキではないかと推定する。

イタチ科 Mustelidae

エゾクロテン *Martes zibellina brachyurus*

F-124 で右大腿骨が検出された(写真II-2-22)。

骨体の中央より近位端寄りの破片である。テンと同大のものである。

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa*

イノシシ距骨実測図(実大)(図II-49-1・2)

F-126 から右上腕骨体の破片が検出された(図II-26-1:写真II-2-29)。

シカに比べてやや腕曲する度合いが強く、イノシシではないかと思われる。

P-126 の覆土から左距骨が検出された(図II-49-2:写真II-2-30)。

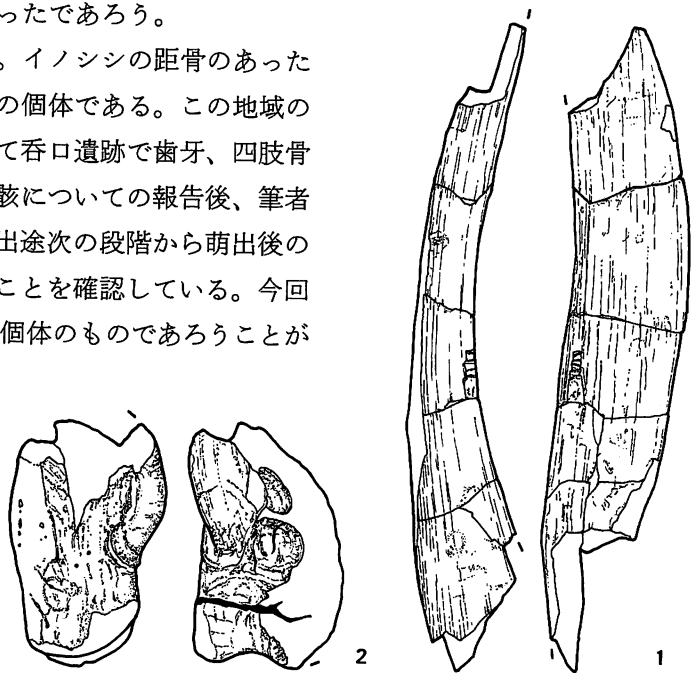
関節の滑車部の一部が欠損するが、ほぼ原形をみる事ができる。形状はイノシシの形をよくみせている。

まとめ

美々3遺跡において検出された焼骨は縄文時代晩期大洞C2期に属し、サケ属の骨を主体として、それに鳥・獣骨が混在していた。骨はすべて強く火を受け、原形を留めている標本はごく一部であった。多量に検出できたサケ属の骨についても、椎体や歯などで総量を知るのみである。しかし、当時大量の漁獲があったことを推測させるのに充分であろう。

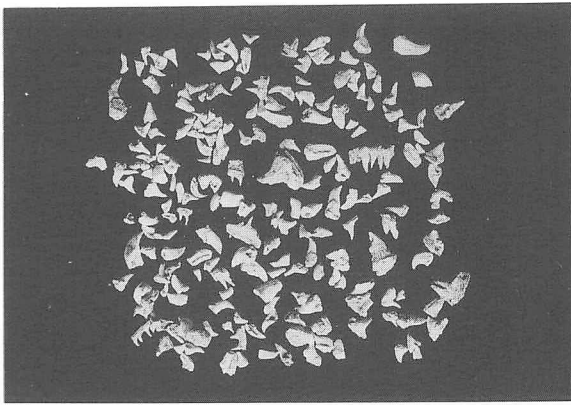
鳥・獣については、これも断片が多く、鳥・獣の区別も必ずしも容易ではなかった。しかし、幾つかの標本では種類をほぼ確定することができた。カモ類を主とする鳥は、この近くへの飛来が考えられる。山野にはカケスが群れをつくっていた。カケスは網でも捕り易い鳥であり、食料として多少の足しにはなったであろう。

獣骨の保存は少なく、詳細は知り得ない。イノシシの距骨のあったことは注目される。骨の性状からみて成獣の個体である。この地域の石器時代遺跡でのイノシシの出土は、かつて呑口遺跡で歯牙、四肢骨の出土したことがある。このイノシシの遺骸についての報告後、筆者は別にその歯牙を詳しく調査し、M3が萌出途次の段階から萌出後の段階つまり2才から3才以後の個体の多いことを確認している。今回美々3遺跡で出土した距骨も、こうした成獣個体のものであろうことが考えられる。

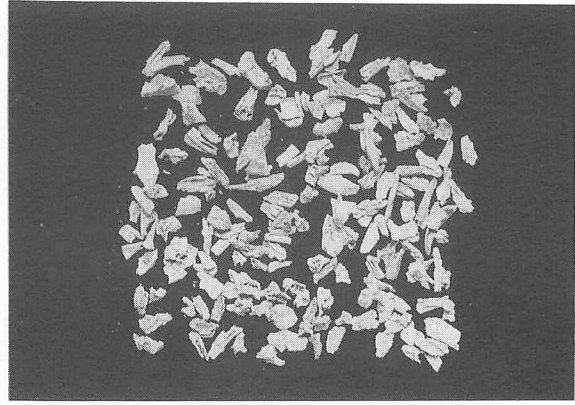


図II-49 1. イノシシ右上腕骨体の破片(実大)
2. イノシシ左距骨実測図(実大)

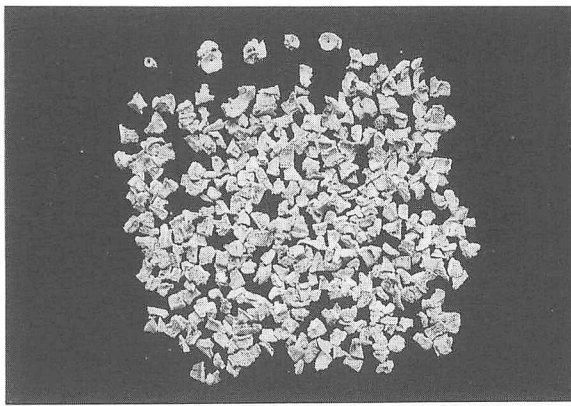
A 硬骨魚綱



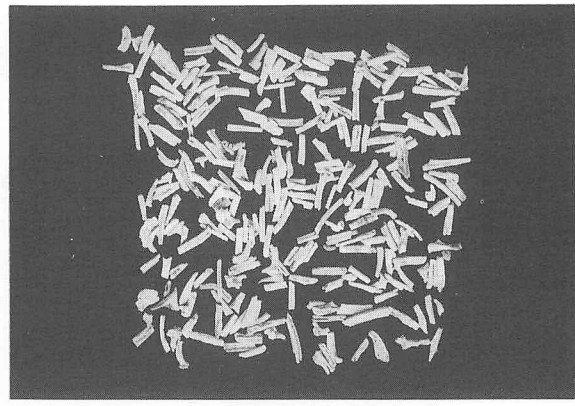
サケ類歯



サケ類骨片(頭骨を含む)

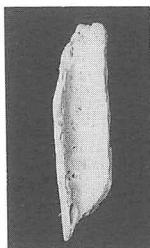


サケ類 椎体骨片

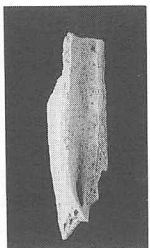


サケ類骨片(棘を含む)

B 鳥綱(×1.5)



1a



1b



2a



2b



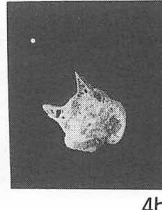
3a



3b



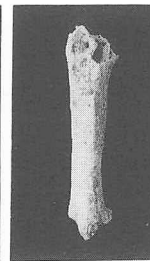
4a



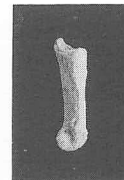
4b



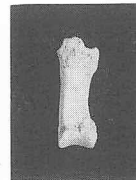
5a



5b



6a



6b



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



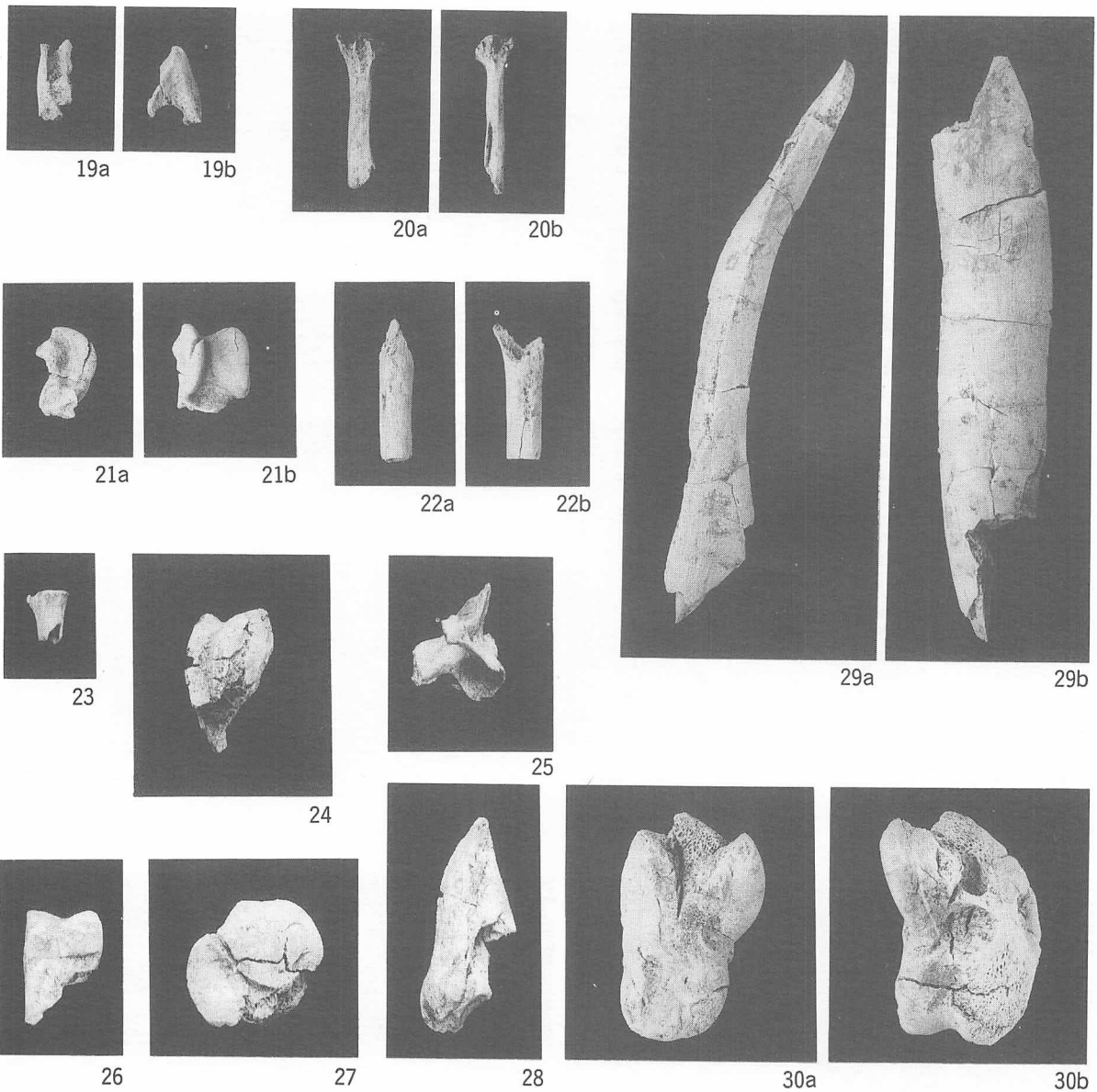
17



18

写真II-1

C 哺乳綱(×1)



掲載番号	遺構名	名称	掲載番号	遺構名	名称
1	F-123	カモ類A右脛骨骨体片	16	F-126	鳥類趾骨片(基節骨片)
2	F-125	カモ類A左上腕骨近位端片	17	F-125	鳥骨片
3	F-125	カモ類B左中手骨近端部片	18	F-125	鳥骨片
4	F-125	カモ類B左脛骨近位骨端片	19	F-125	キツネ左上腕骨遠位骨端片
5	F-125	カケス左中足骨骨体部破片	20	F-124	キツネ尾椎骨片
6	F-125	鳥類趾骨	21	F-138	タヌキ左距骨片
7	F-123	鳥類右鳥口骨遠位	22	F-124	エゾクロテン右大腿骨近位
8	F-125	鳥類趾骨	23	F-123	中型獣(キツネ or タヌキ)尾椎骨片
9	F-125	鳥類趾骨	24	F-125	中型獣左大腿骨遠位
10	F-125	鳥類趾骨	25	F-125	中型獣環椎片
11	F-125	鳥類趾骨	26	F-133	シカ基節骨遠位骨端
12	F-125	鳥類趾骨	27	F-133	シカ中手 or 中足遠位骨端
13	F-125	鳥類趾骨	28	F-133	シカ末節骨
14	F-125	鳥類趾骨	29	F-126	イノシシ右上腕骨骨体片
15	F-125	鳥類趾骨片遠位	30	P-126	イノシシ左距骨

写真II-2

III 美々3 遺跡第II黒色土層の調査 (平成2年度)

平成2年度の調査ではG₁63区、G₁64区の台地上でIII群b-3類土器の時期の住居跡群と多量の遺物が出土し、美沢川流域においてこの時期の中心的な遺跡であることが確認された。G₂64区の斜面下部ではIV群a類土器の時期の住居跡が検出され、遺構の切り合い関係や遺物の出土状況から余市式土器の変遷が把握された。また、台地上ではV群b類土器が焼土を伴ってまとまって出土した。

個々の遺構や土器についてはすでに報告したとおりである(北埋調報69)。ここでは、III群b-3類土器の時期の石器等を中心に報告することとし、土器についても補足的に資料を掲載する。

1 第II黒色土層出土の遺物(図III-1~16)

(1) 土器(図III-1-1~4)

1~4はIII群b-3類土器である。昨年度の分類に従えば、1はE類、2・3はF類に相当する。4はH類のうちノダップII式に近縁のものである。1は体上半部が接合したもので、口縁部がやや外反し、胴部にふくらみをもつ。口縁部には半截竹管状の工具による押し文が2条施され、その下位に円形文がめぐり、口唇及び内面はなで調整され、内面の瘤は痕跡程度にしか認められない。体部には結束のある羽状縄文が施される。2は底部近くまで復元できたものである口縁部には断面三角形の肥厚帯をもち、小突起が認められる。肥厚帯の下位には円形文がめぐり、内面に瘤を形成している。体部には結束羽状縄文が施されている。施文原体は2種用いられ、0段多条のLRの原体と1段2条のRLの原体の結束、1段2条のLRとRLの原体の結束が認められる。縄文は口縁部の内面にも施されている。3は口縁部に肥厚帯をもつもので、小突起が付けられている。肥厚帯の下に円形文が施されており、内面の瘤が顕著である。体部、口唇及び内面には結束羽状縄文が施されている。体部の縄文は、2と同様の組合わせの2組の原体により施文されている。4は胴部がふくらみ、口縁部に向かってすぼまる器形を呈する。口縁部にはあらかじめ無文部が設けられ、口縁部と体部の境は隆起帯で区画されている。隆起帯上から体部にかけてはLRの原体による縄文が施されている。口縁部、口唇及び内面は丁寧になで調整されている。

(2) 石器等(図III-2~16)

A 剥片石器(図III-2・3)

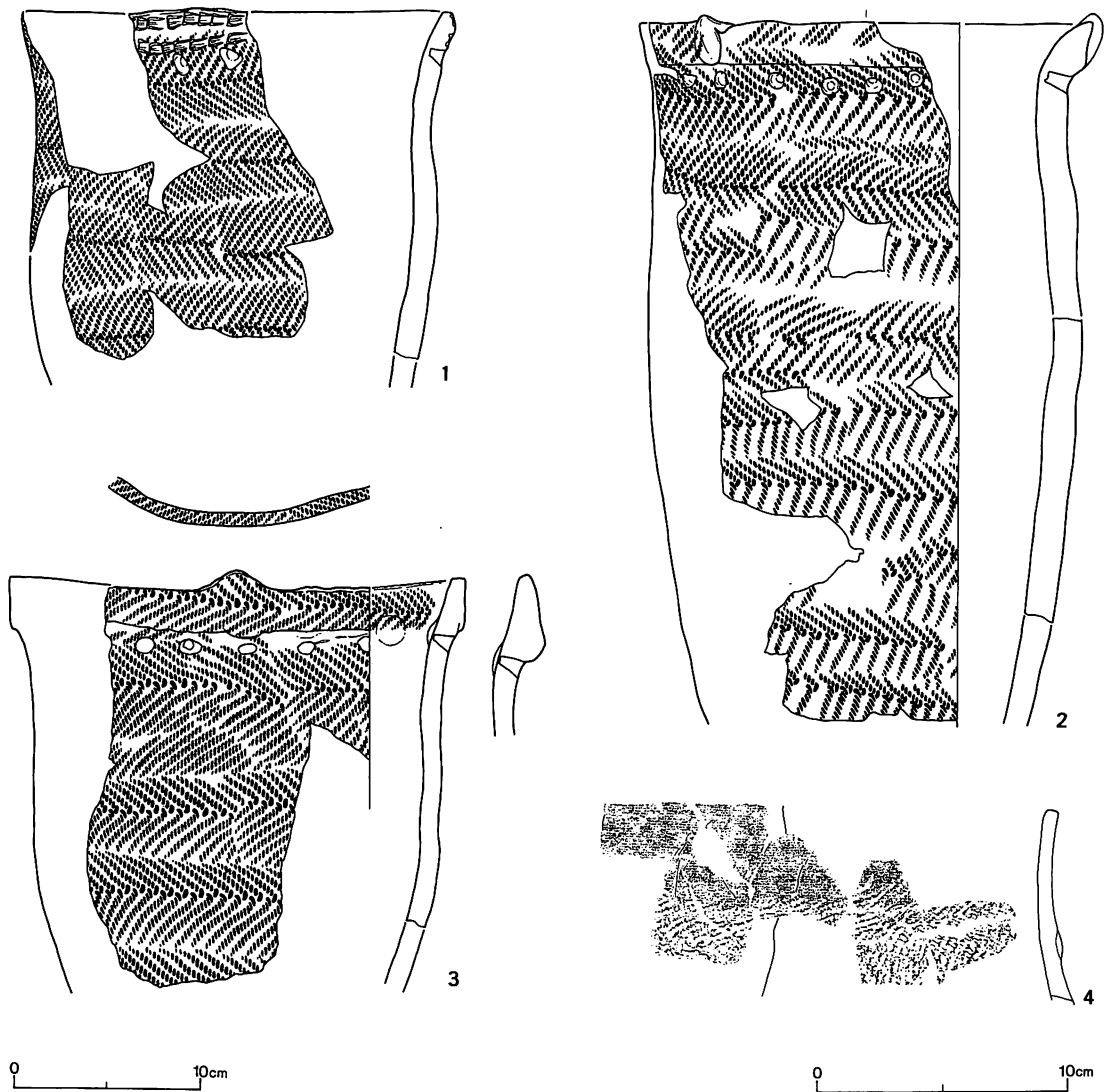
石鏃(1~6)

1~5は有茎凸基、6は木葉形に近いものである。いずれも黒曜石製。

石槍またはナイフ(7~55)

7~23はかえしの明瞭なもので、このうち20~23は細身である。24~37はかえしが不明瞭なもの。38~42は五角形を呈するもの。43~46は基部が尖り、菱形を呈するもの。47~50は木葉形もしくは柳葉形を呈するものである。これらにはそれぞれ大小があり、小さなものには石鏃と区別することが困難なものがある。ここでは、長さ、重量を参考とし、形態を考慮して便宜的に区分した。51~55はG₁63-77区のII黒層下部で出土したもので、20×20cmほどの範囲にまとまっていた。出土状況は昨年度報告したP-91の例(図III-95 北埋調報69)に類似する。51~53はかえしが不明瞭なもので、いずれも個々の剥離が大きめである。54は厚みのある剥片の背面に加工が施されたもの。55もやや厚い剥片の主要剥離面側が全面加工されたものである。これら5点は製作途中のものかと考えられる。材質は50が頁岩、他は黒曜石である。

(工藤 研治)



図III-1 包含層出土の土器 III群b-3類

B 礫石器 (図III-4~12、図版III-2)

平成2年度調査の包含層から出土した礫石器には、石斧、石斧未製品、石斧再生・転用品、石斧未製品の再生品・転用品、たたき石、くぼみ石、すり石、砥石、台石等があった。

礫石器の時期は包含層中の共伴する土器^{註1)}により縄文時代中期後葉・後期前葉・晩期中葉の時期がそのほとんどを占める。今回は土器との共伴関係が明瞭な中期後葉から後期前葉の礫石器を報告する。なお、礫石器の分類については再編成を行った。

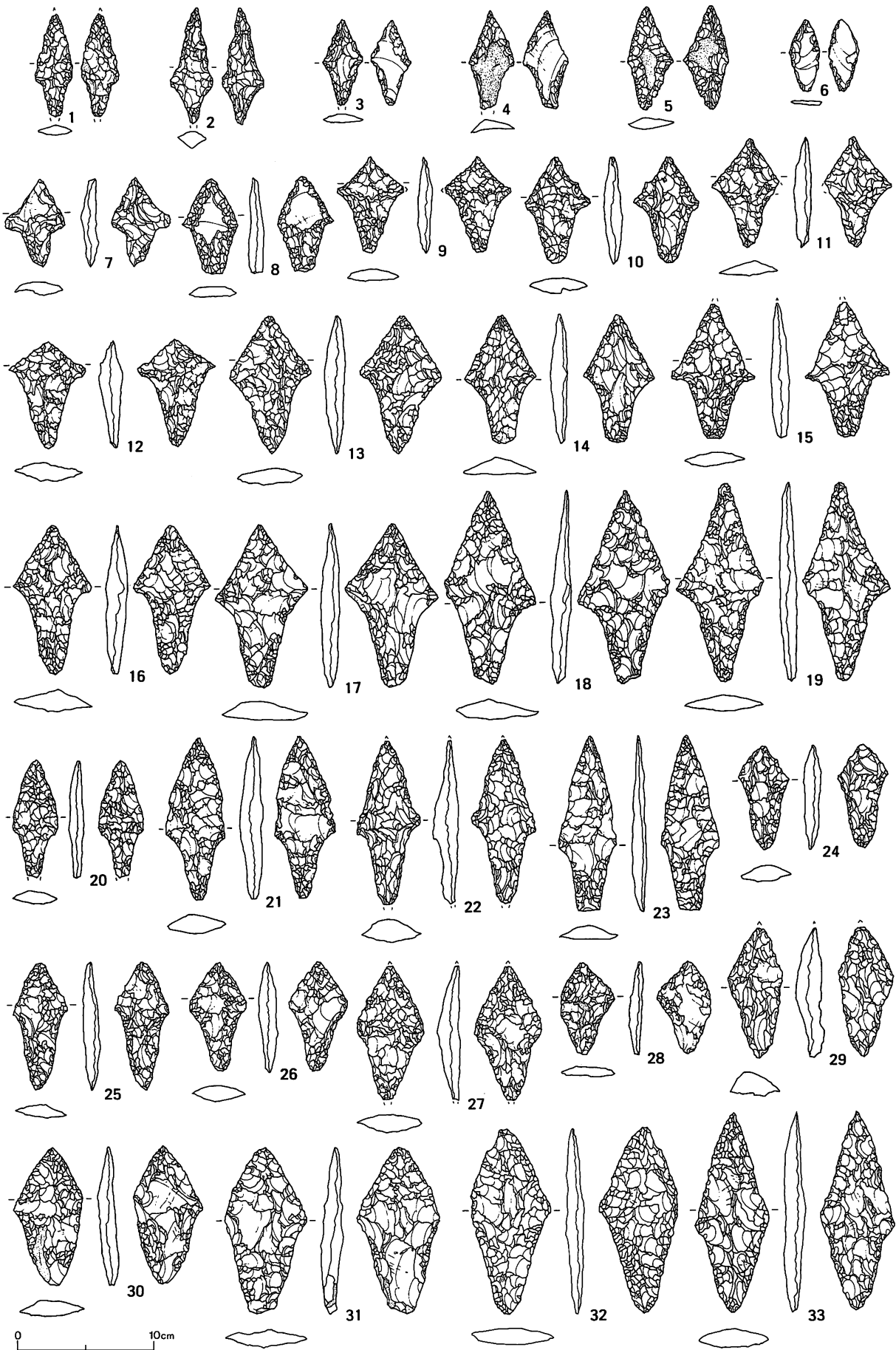
石斧 (1~26)：用語については佐原真(1977)に準拠した。

1) 主面の前後について

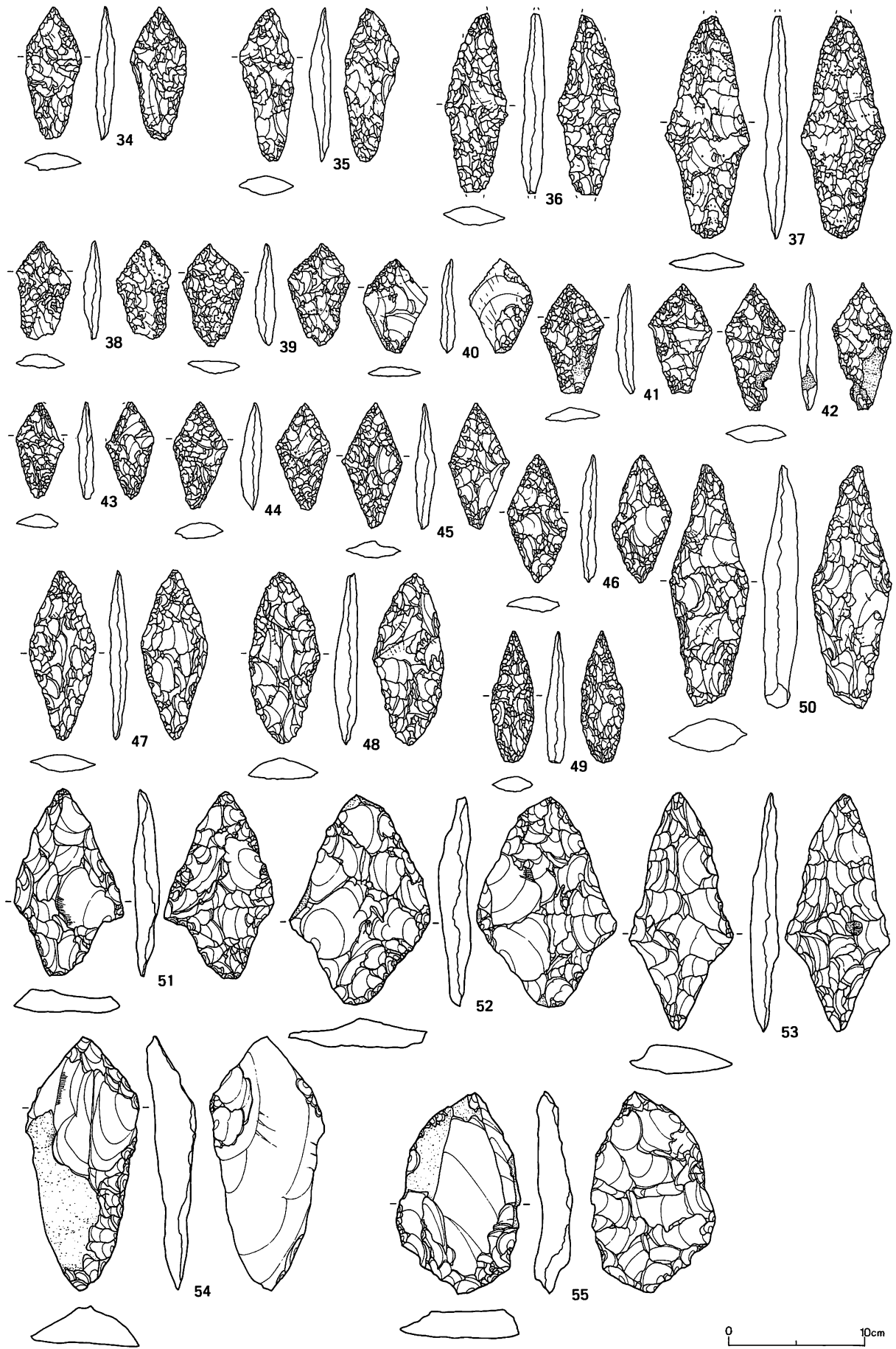
刃縁に長い条線痕が着かない主面、刃縁を刃部側正面から見て離れている方の主面、平らで光沢のある主面を前主面とした。

2) 平面形について (表III-1)

イ.側縁形：A・C・Dは刃部側から全長の1/2位の範囲における側縁と刃縁の両端を結んだ直線との角度による分類。Bは刃部側から全長の1/3位の範囲における側縁と刃縁の両端を結んだ直線と



図III-2 剝片石器(1) 石鏃・石槍またはナイフ



図III-3 剥片石器(2) 石槍またはナイフ

の角度による分類。

A(90°で交わるもの)：刃部巾が基部最大巾と同じ。

B(90°で交わるもの)：刃部巾が基部最大巾と同じ、AとDの中間形態。

C(90°以上で交わるもの)：刃部巾が基部最大巾より狭い。

D(85°以下で交わるもの)：刃部巾が基部最大巾より広い。

ロ.刃縁形：刃部幅にたいする刃縁の弦高が刃部幅の12%以上の長さになるものを曲刃。12%以下未満を直刃とし、曲刃の表記は、側縁形表記のアルファベットの右肩にダッシュを付ける。

3) 断面形について

イ.基部の扁平率：基部中央における扁平率(厚/幅の値)を4段階に分類した。なお表記は、側縁形表記の後にローマ数字で表した。

IV(柱状)： ≥ 0.66 、III(厚手)：0.65~0.5、II(扁平)：0.49~0.33、I(超扁平)： ≤ 0.32 、

ロ.主面形：表記は、断面形表記のローマ数字表した右下にアラビア数字で表した。

1：両主面とも平面 2：片主面が平面でもう片主面が凸形 3：両主面とも凸形

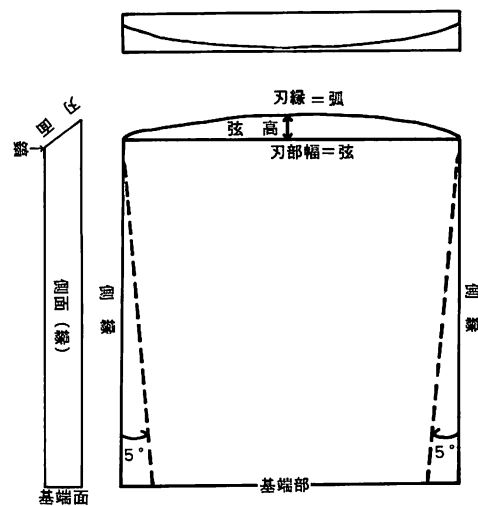
A I₁型：1。A II₂型：2。A' I₂型：7。A' II₁型：6・8。A II₂型：3。A' II₃型：5。A' III₂型：4。前主面に錆があるものは3・4・7。錆がないものは1・2・5・6・8。側面が1つの平面で構成されているものは1・3・6。側面が曲面で構成されているものは8。側面が多面で構成されているものは2・7。後主面側刃縁に中軸線と平行した条線痕が着くものは1・2・8。

4は後主面が転磨した礫面、前主面は節理面、側縁は剝離面で構成されている。基端部は欠失している。5は両主面・側面は敲打された曲面で構成されている。7は両主面が転磨した礫面。

B I₁型：15・19。B I₂型：17。B I₃型：21。B II₂型：20・22。B II₃型：16。B' I₁型：18。前主面に錆があるものは19~21。錆がないものは15~18・22。側面が1つの平面で構成されているものは17~20・22。側面が曲面で構成されているもの21。側面を持たないもの15・16。

表III-1 石斧の分類とその基準模式図

扁平率	I 超扁平	II 扁平	III 厚手	IV 柱状
断面形	~ (1:3)	(1:3) ~ (1:2)	(1:2) ~ (2:3)	(2:3) ~ (1:1)
平面形	□	□	□	□
□	AI	AII		
⌒	A'I	A'II	A'III	A'IV
□	BI	BII		
⌒		B'II		
⌒		CICII	CII	CIII CIV
⌒	C'I	C'II	C'III	C'IV
□	DI			
⌒	D'I	D'II	D'III	



白抜き部分は当該資料

18は基端部が欠失している。19・20は曲面で構成された基端面をもつ。21は基部全体があまり研磨されず転礫面を残す。

C II₃型: 10。C' I₁型: 9・11。C' II₂型: 12。C' III₂型: 13。C' III₃型: 14。前主面に鑄があるものは11・12。鑄がないものは10・9・13・14。側面が1つの平面で構成されているものは9・11。側面が曲面で構成されているものは12・13・14。側面が多面で構成されているものは10。

9は両主面が節理面。11・12は基端部が欠失している。14は後主面は丁寧に研磨され、前主面は剝離面に若干の研磨がみられる。後主面側刃縁には中軸線と平行した条線痕が着く。

D I₁型: 24。D I₂型: 23。D' I₁型: 25。D' I₃型: 26。前主面に鑄があるものは24・23。鑄がないものは23・25・26。23は曲面で構成された基端面を持つ、また被熱して変色・剝落(トーン部分)を起こしている。24・25・26は基端部が欠失している。26は側面が1つの平面で構成されており、後主面側刃縁には中軸線と平行した条線痕が着く。

石斧未製品 (27~45)

1) 調整について: 段階の表示についてはその遺物に施された最終段階を表した。

I 段階: 原石

II 段階: 剝離調整

II₁ は側縁調整

II₂ は端部(基端・刃部)調整

III 段階: 敲打調整

III₁ は側縁調整

III₂ は主面調整 III₃ は基端・刃部調整

IV 段階: 研磨調整(刃部以外について)

2) 素材について

イ. 素材の形態について表記は、調整段階表記の後にアルファベットの大きい文字で表した。

A: 大型の転礫を割ったもので、剝離面や節理面で構成された面を持つ割礫を素材とするもの。

B: 小型の転礫をそのまま素材とするもの。

C: 剝片を素材とするもの(再利用も含む)。

ロ. 断面の扁平率について: 中央部分における扁平率(厚/幅の値)を4段階に分類した。なお表記は、調整段階表記の後にアルファベットの小さい文字で表した。

a(柱状): ≥ 0.66 、 b(厚手): $0.65 \sim 0.5$ 、 c(扁平): $0.49 \sim 0.33$ 、 d(超扁平): ≤ 0.32 、

27はII₂Bd、刃部調整時に折れる。28はII₁Bc、刃部に近い側縁が薄く剥げ過ぎている。29はII₁Bd、素材が薄いので側縁側には交互剝離を行っている。30はII₂Bd、片面にのみ刃部剝離調整を行っている。

表III-2 石斧未製品の分類

白ヌキ部分は当該資料

調整段階	素材の 形状	扁平率			
		d ~ (1:3)	c (1:3) ~ (1:2)	b (1:2) ~ (2:3)	a (2:3) ~ (1:1)
割	I				
	1				
	2				
礫	1				
	2				
	3				
A	IV				
	1				
	2				
転	1				
	2				
	3				
礫	1				
	2				
	3				
B	IV				
	1				
	2				
剝	1				
	2				
	3				
片	1				
	2				
	3				
C	IV				
	1				
	2				

31はIII₁Bd、素材段階で整った側面をしていたのでII段階を経ず、III段階の調整を行っている。32はII₂~III₁Aa、側面と主面との角を調整したさいに折れた。33はII₂Ac。34はIII₁Ab、主面の一方は両を持つ転礫面、もう一方は新鮮な節理面、棒状の転礫を半割した素材のようである。35はIII₂Aa。36はIV Ab、立体的な主面の方を丁寧に敲打している。両側面が多面となるように研磨されている。37はII₁Bd、菱形の素材の長い対角線の方を石斧の長さをいかすように素材の短い対角線上の角を落そうとした。38はII₂Ad節理が発達した素材のため側縁剝離調整の最中に破損したものと思われ

る。接合した剝片は、破損した素材の厚さを減じて再生したさいに生み出されたもの。39はII₂Ac、片面側の刃部付近にはI段階で付された研磨が存在する。このことは素材形態Aの一部については初めの段階である程度丁寧な調整を行い、石斧の形に近づけて搬入されているものがあることを示している。

40はIII₃Aa、大型未製品が刃部調整中(②)に破損し、中型未製品に再生しようとして失敗したものの。①はII段階の基部調整剝片。接合した剝片・破片は、破損した素材の厚さを減じて再生(③~⑨)したさいに生み出されたものである。③・⑤は側縁側から、④・⑦は刃部側から素材の厚さを減じる。⑧は③~⑦の再生で、全体の厚さに対して刃部側の厚さが極端に薄くなりすぎたので適した厚みのあるところで折取ったものである。⑨は素材の厚さを減じようとして失敗したものである。

41はIII₃Ac、大型未製品が側縁調整中(②)に破損し、中型未製品に再生しようとして失敗したものの。①はII段階の側縁調整剝片。接合した剝片・破片は、破損した素材の厚さを減じて再生(③~⑧)したさいに生み出された。③・⑤~⑦基部側側縁調整、③で中型未製品の最大幅を決め、④でその厚さと幅に合う長さを決めた。⑧は基部側側縁調整中に失敗したものの。

42はII₂Ac、大型未製品が側縁調整中(①)に破損し、さらに破損して薄くなった部分に厚さを合わせようとして失敗したものの(②)。43はII₂Ac、刃部作出でできた剝片と接合する。44はII₂Ac、側縁側調整の際に失敗したものの。45はII₁Bd、側縁側調整の際に失敗したものの。

石斧再生品(46~55)

46・47は折れたD I型石斧の刃部側に剝離調整を行って小型石斧に再生したものの。48・49は石斧の剝落片に側縁調整を加えて小型石斧に再生したものの。49は刃部が研ぎ出されていない未製品。51はC¹ II型石斧が中軸にたいして斜めに折れた刃部側破片で、その刃部幅を折れ面に対して平行になるように打ち欠いて狭くして、小型石斧に再生したものの。50・54は折れた石斧の基部側にある折れ面に刃部を再作出しようとした再生途中品。52はA¹ II~III型石斧が節理面で裂けて厚みを減じたもので、その節理面側に刃部を再作出したものの。53はC III型石斧の後主面側刃部を再作出しようとした再生途中品。55は折れたB¹ II型石斧の基部側に刃部を再作出したもので、刃部は研磨されず剝離面をそのままにして使用されている。トーン部分は熱を受けて変色したところ。

石斧未製品の再生品(56・57)

このうち再生途中で失敗したものは先述した石斧未製品の中で説明してある(40~41)。56はII₂Bcが折れたもので刃部予定側破片を再生しようとし、その長さに応じて厚さを減じたもの。57はII₂Bcが折れたもので基部予定側破片を再生しようとしたもの。

石斧破片の利用品(58~64)

58・59・62は石斧製作で生じたフレークを石錐として利用したものの。60~62・64は石斧に破片を利用したもので石錐の基部に石斧の研磨面が残存する。63は石斧の厚さを減じて再生しようとした過程で生じたフレークを石錐に転用したものの。58~64の石質はいずれも片岩である。

石斧転用品(65~67)

65~67は石斧の基部側の折れ面をたたき石として転用したものの。

石斧未製品の転用品(68・69)

68はIII₂Abが折れたもので基部予定側破片の折れ面をたたき石として転用したものの。69はII₁Bbが折れたもので刃部予定側破片の側面をたたき石として転用したものの。

石斧・石斧未製品等の分布図の説明(図III-10~13)

1) 石斧・石斧未製品(図III-10の上段の分布図)

石斧の分布は5m×5mグリッドを単位で見ると、石斧が出土するグリッドにおいては1グリッド内

に1個出土するのが標準的な傾向である。住居跡などの遺構がある台地の縁辺に沿って帯状に分布しており、焼土のあるグリッド G₁64-62(4個)、G₁63-99(5個)、G₁64-53(5個)、G₁64-71(6個)には特に多い傾向が見られる。

石斧未製品の分布は、出土するグリッドにおいては1グリッドに1~2個出土するのが標準的な傾向である。住居跡などの遺構がある台地の縁辺に沿って帯状に分布しており、焼土のあるグリッド G₁63-96(4個)、G₂63-26(4個)、G₁64-60(6個)、G₁64-61(5個)、G₁64-52・53・54(4個)には特に多い傾向が見られる。また石斧の分布と異なって、北東の住居跡が集中する部分のグリッド G₁63-24(94個)、G₁63-36(10個)には特に多い傾向が見られる。

2) 石斧・石斧未製品の再生・転用品 (図III-10 の下段の分布図)

石斧再生品は、出土するグリッドにおいては1グリッドに1個出土するのが標準的な傾向である。斜面と住居跡などの遺構がある台地の縁辺に沿って分布する。石斧転用品も同じような傾向であるが北東の住居跡の集中する部分にも分布している。石斧未製品の再生・転用品は石斧再生品・転用品と同じ分布傾向であるがやや広く分布している。

3) 石斧未製品の調整段階別分布図 (図III-11)

この分布図は石斧未製品の調整段階を各グリッド別に表したものであり、調整段階の記号は石斧未製品の説明で使用したものと同一のものである。

原石 (I段階) は斜面と台地の縁辺と G₁63-17・27 に分布する。

剝離調整段階のもの (II段階) は、他の段階の未製品の数よりも非常に多い。とりわけII-2は多く、この調整段階での失敗が多かったことを示している。分布は台地の縁辺と北東の住居跡の集中する部分のほかには、石斧未製品の掲載 32 や未掲載 1 が接合するグリッドを含む北西部とに広がる。

敲打調整段階のもの (III段階) はほぼ剝離調整段階のものと同じ分布を示すが、III-1は台地の縁辺のみに分布する。研磨調整段階のもの (IV段階) は1点のみが出土している。

各段階は互いに重複することなく分布している。また段階の調整部位ごとでは、I段階とII-1は1ヵ所 (G₁63-97)、II-1とII-2は3ヵ所 (G₁63-59・G₁64-60・94)、III-2とIII-3は1ヵ所 (G₁64-93) が同一グリッドから出土している。このように石斧未製品本体は1ヵ所 (1グリッドの範囲内) での連続した製作過程を示す分布は見られなかったが、G₁62-07を原点とした10m×10mグリッドをあてはめると64ラインから南の台地縁辺部には各段階を含んだ集中を見ることができる。

4) 石斧剝片の調整段階別分布図 (図III-12)

この分類の対象とした剝片は十分に背面を観察できる資料でなければならなかったため、2cm方眼に剝片を正置してその枠より大きいものについて観察を行った。

I段階：背面が礫面・節理面であるもの。

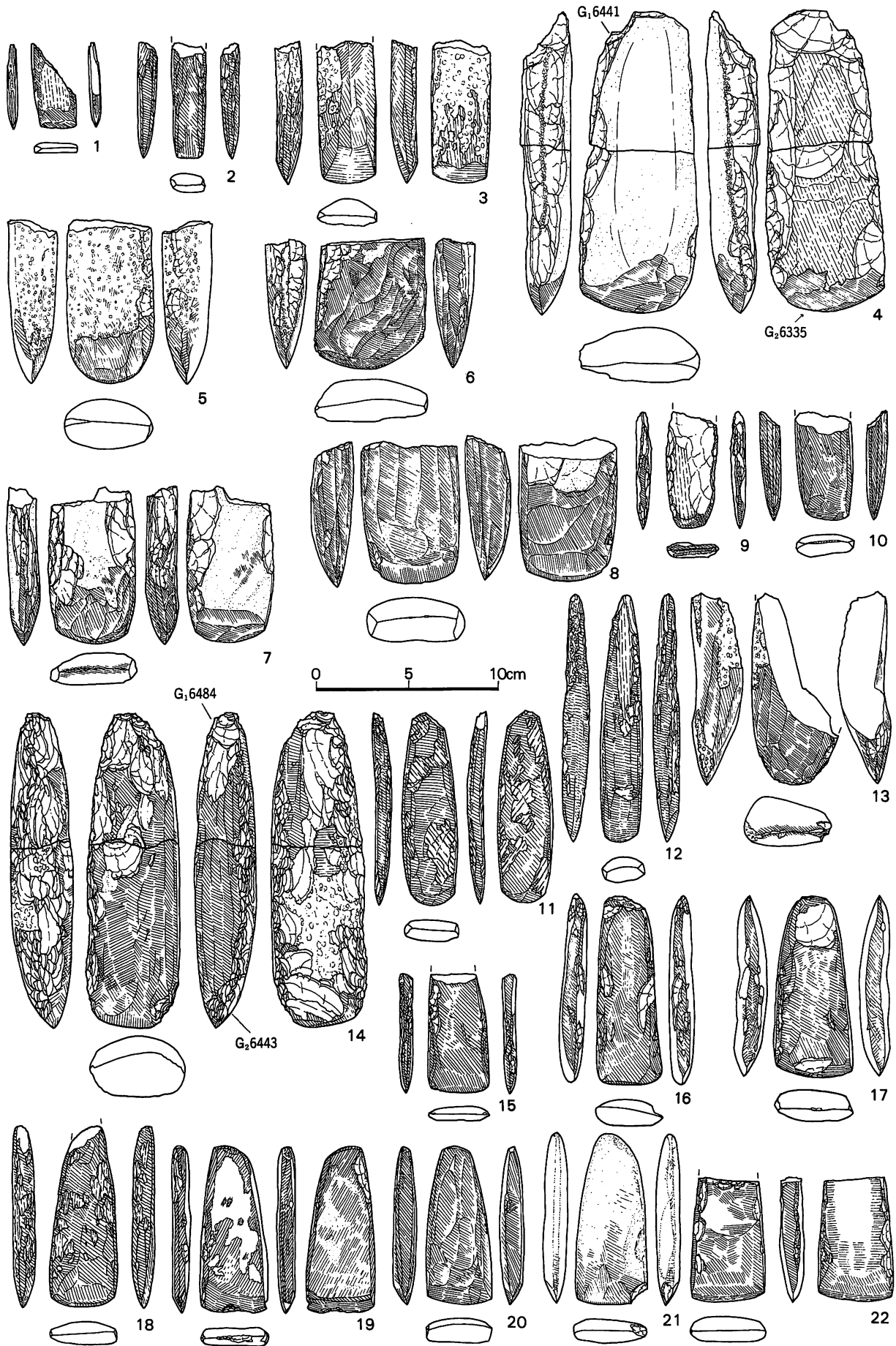
II段階：背面が剝離面であるもの。

III段階：背面が敲打面であるもの。

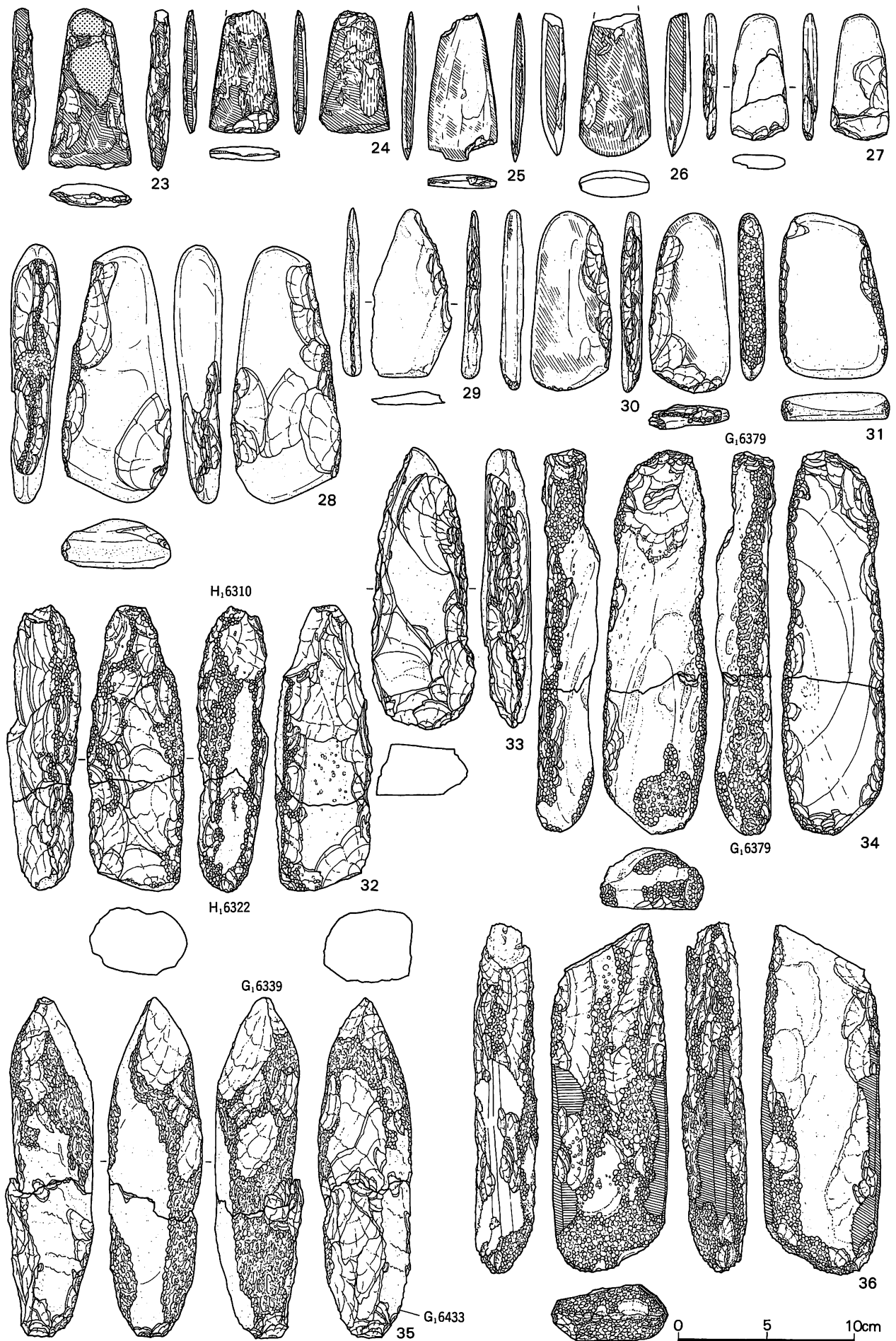
IV段階：背面が研磨調整面であるもの (石斧製作の中でも再生と転用の作業から出たもの)。

分布は台地の縁辺と北東の住居跡の集中する部分に広がり、各段階は互いに重複しあいながら分布しており、製作と製品の再生・転用がほぼ同じ場所で行われていたことを示している。なかでも G₁62-39には各段階の最多数が出土している。

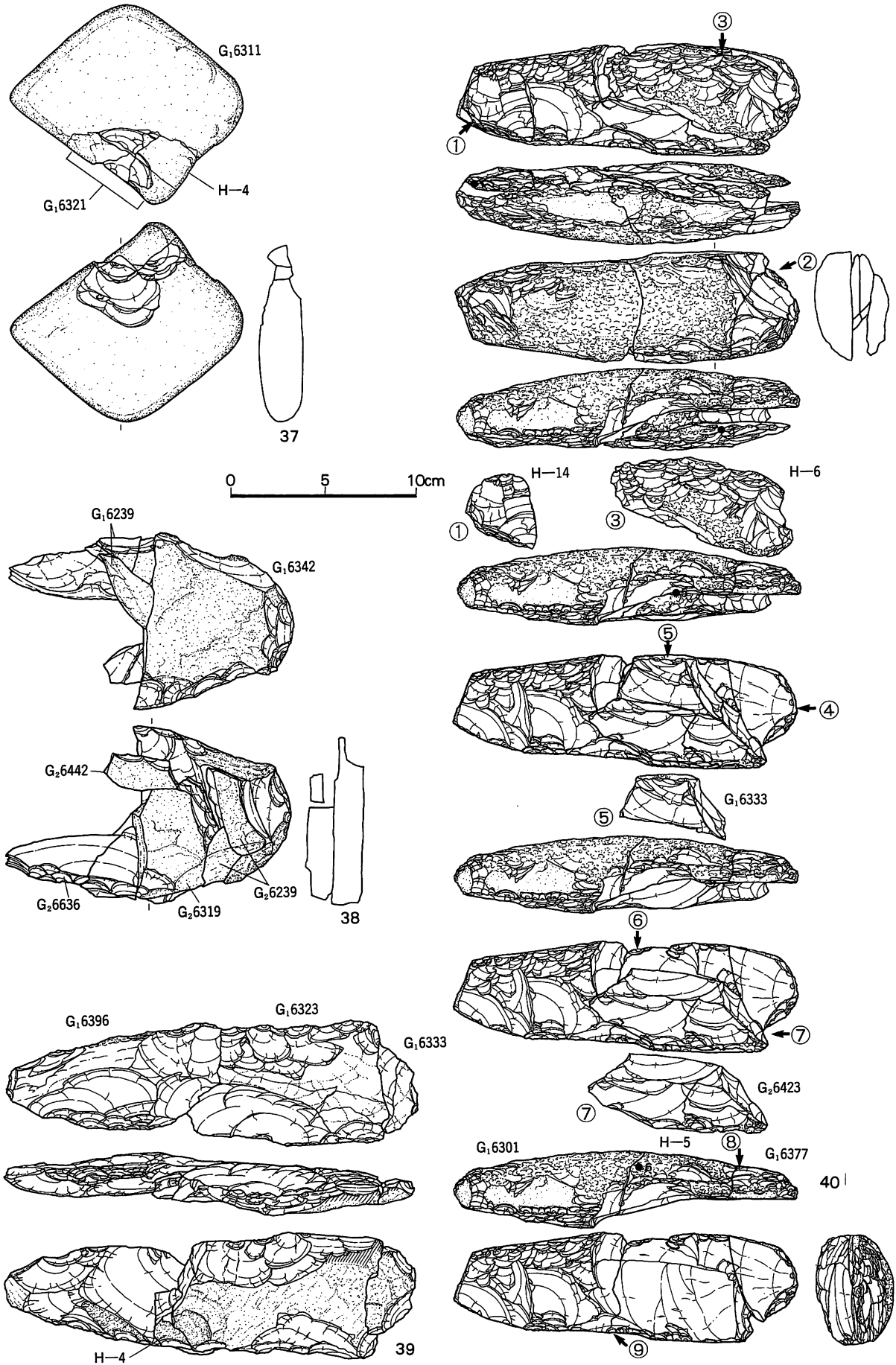
各段階ごとの石斧剝片の分布は同じ段階の未製品の分布とはほぼ一致する。いっぽう各段階内の部位別調整という詳細なレベルでみていくと対応するものとしなないものがでてくる。例えば、北東の住居跡の集中する部分についてはII-2段階の未製品が一致しているのみで、ほかには明瞭な対応関係は



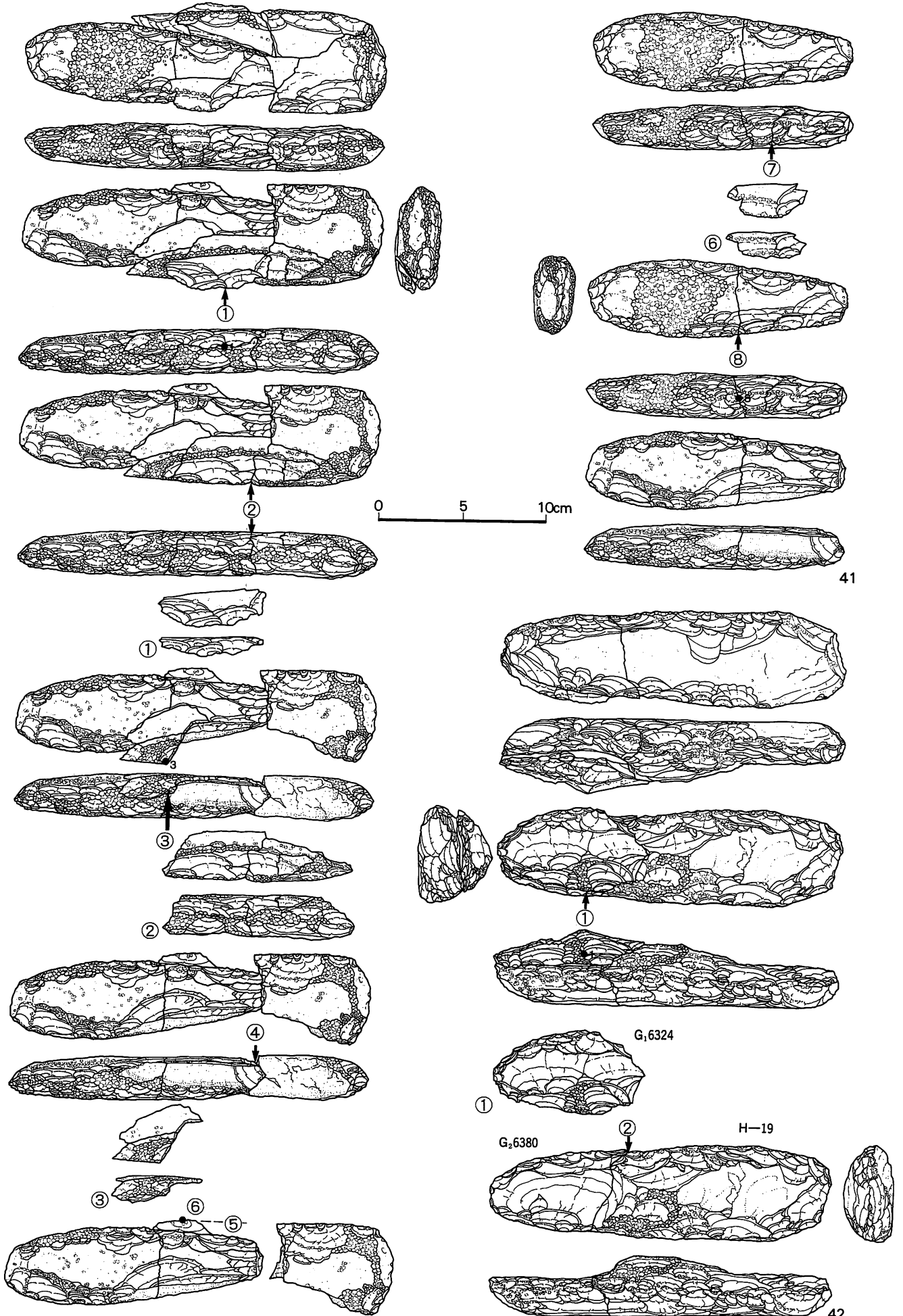
図III-4 礫石器(1) 石斧



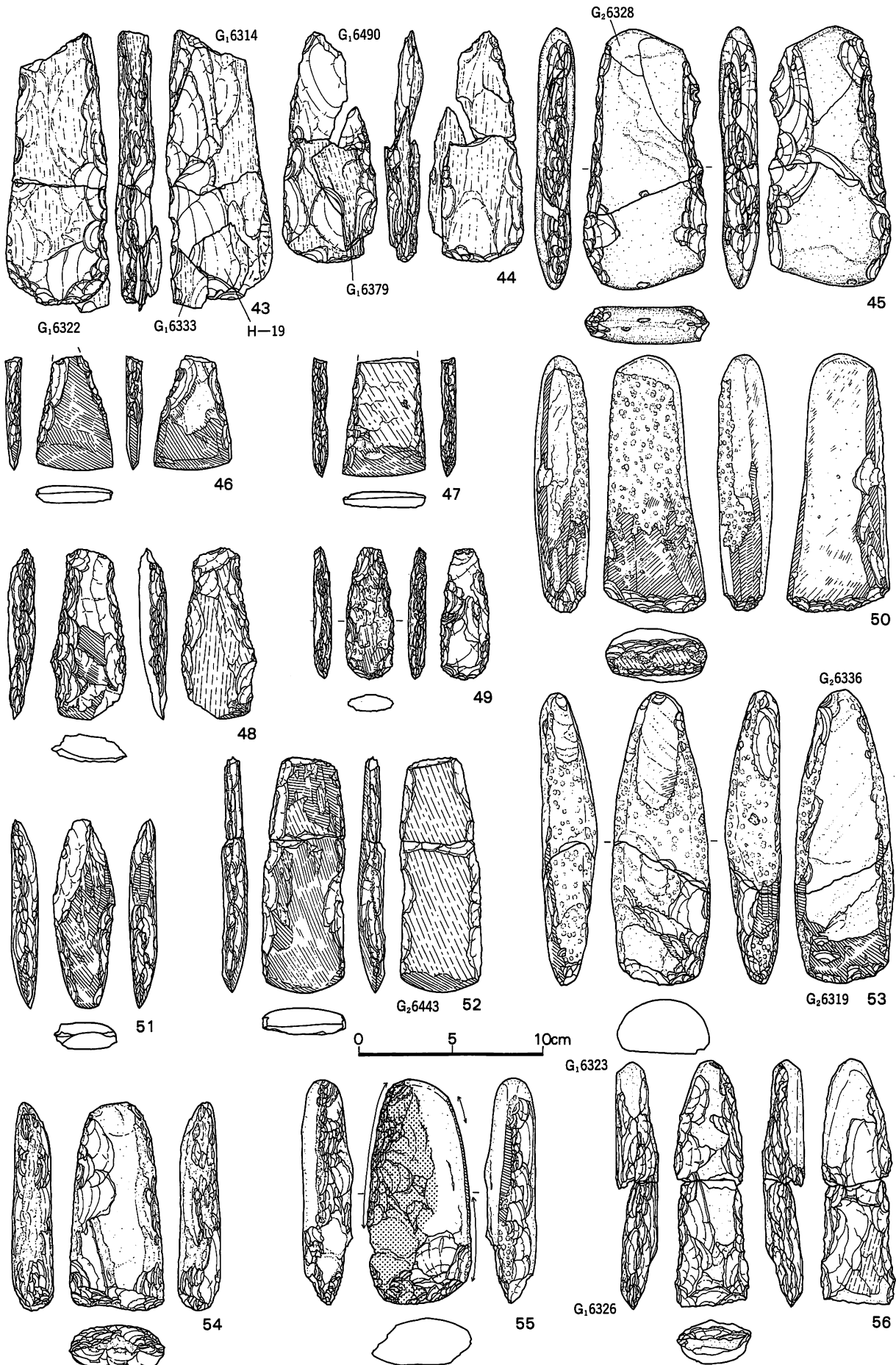
図III-5 礫石器(2) 石斧・石斧未製品



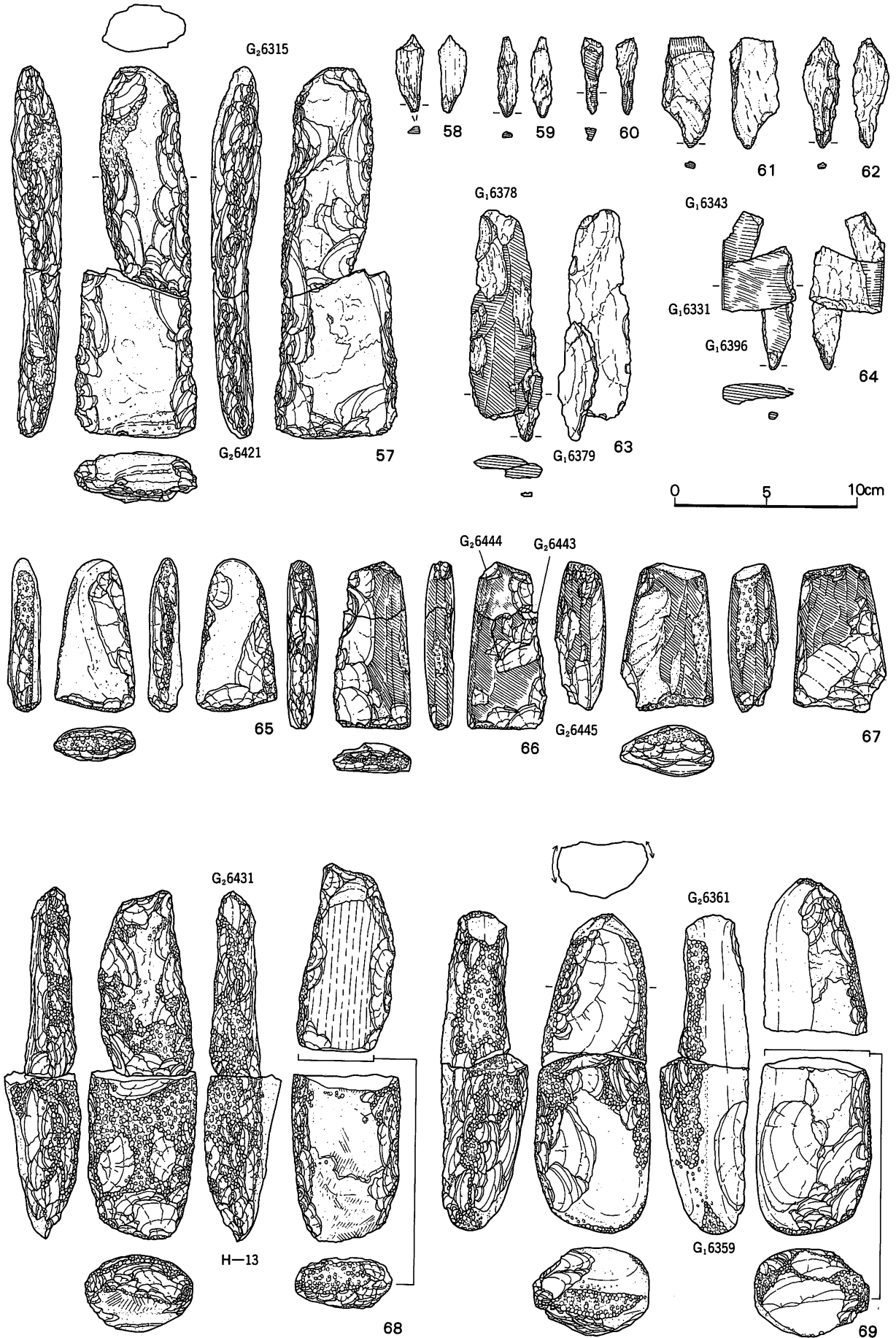
図III-6 礫石器(3) 石斧未製品



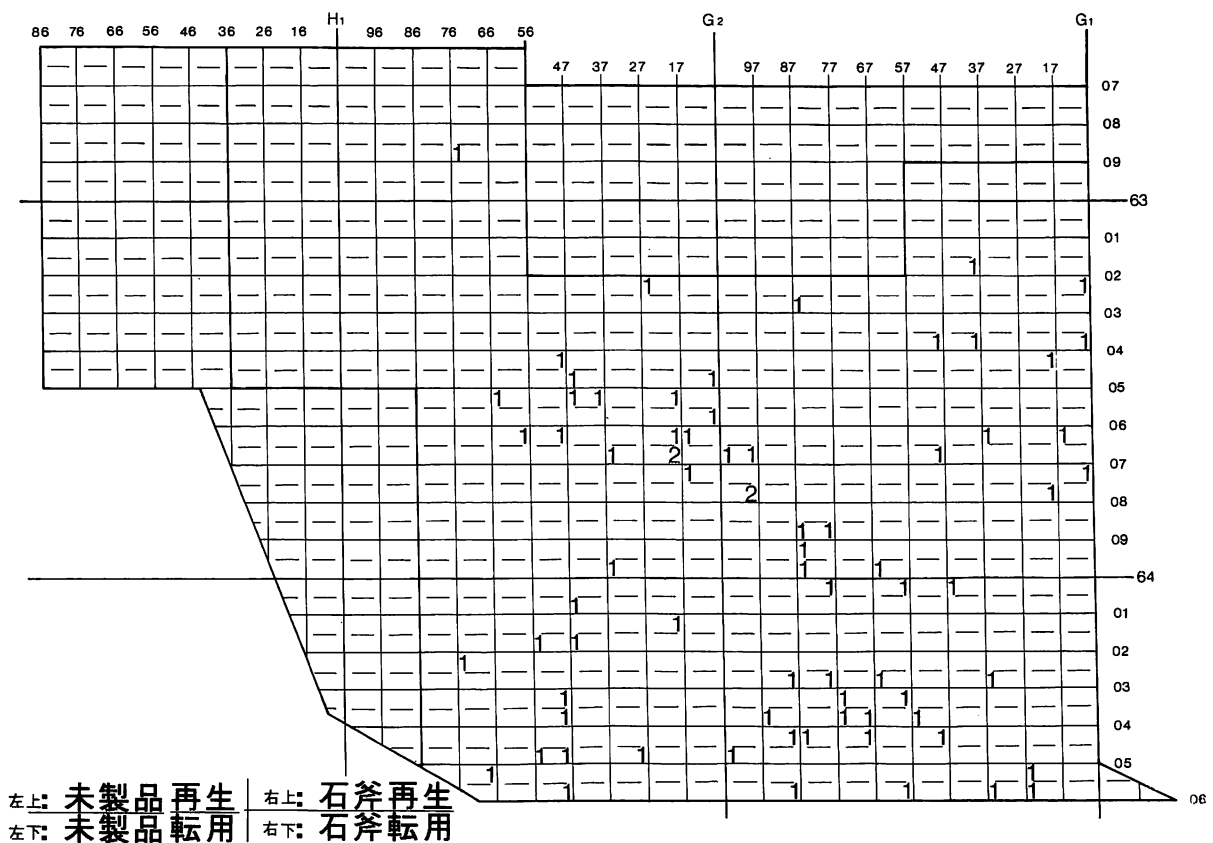
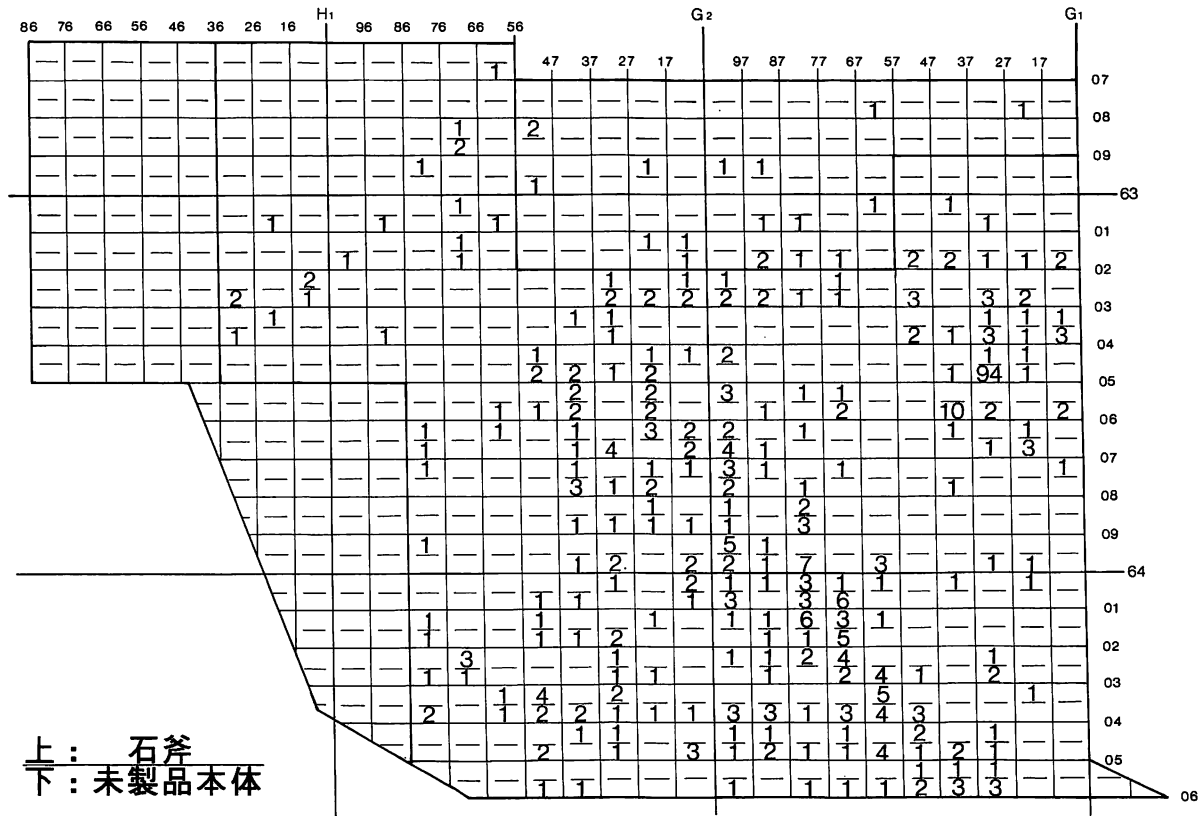
図III-7 礫石器(4) 石斧未製品



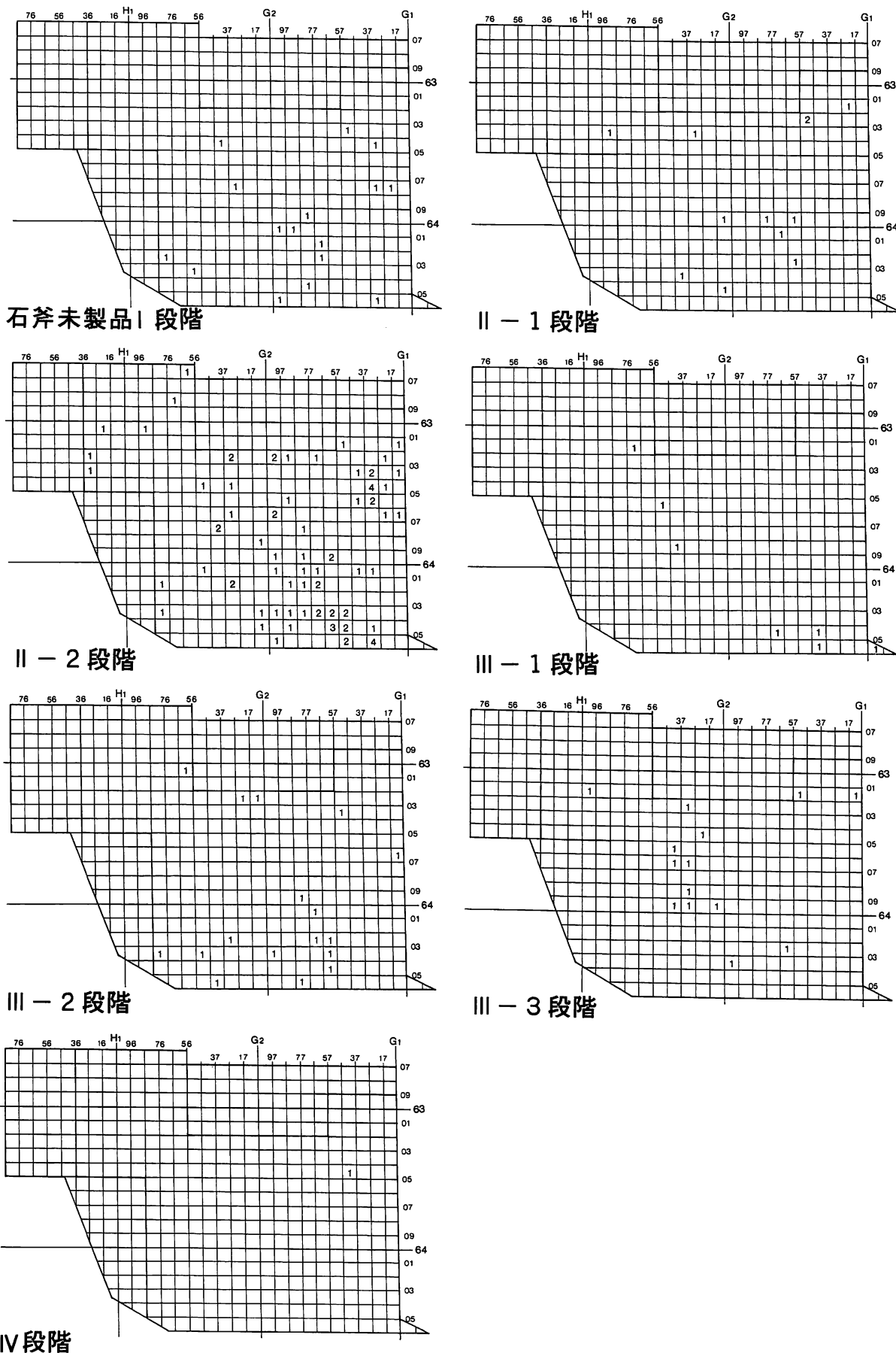
図III-8 礫石器(5) 石斧未製品・石斧再生品



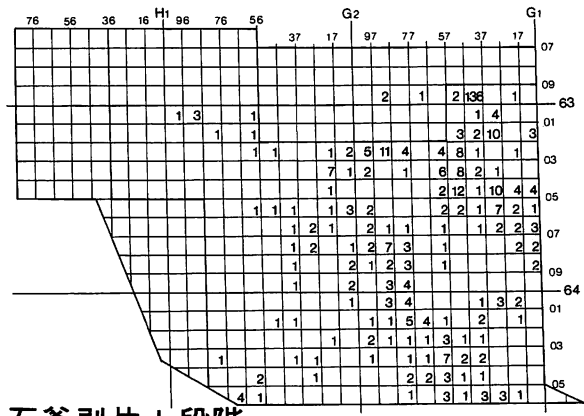
図III-9 礫石器(6) 石斧未製品の再生品・石斧転用品・石斧未製品の転用品



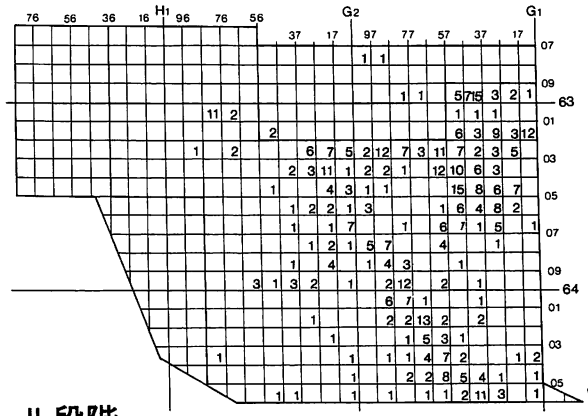
図III-10 礫石器(7) 石斧等の分布図



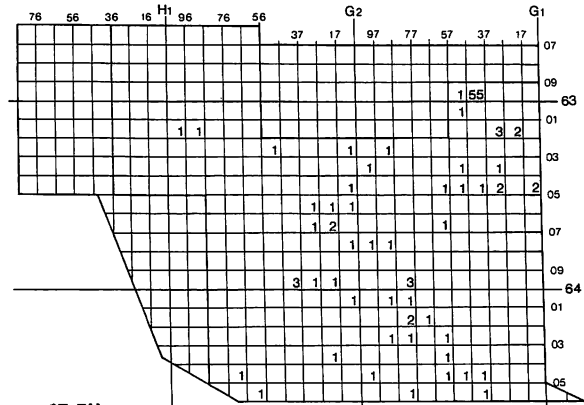
図III-11 礫石器(8) 石斧未製品分布図 段階別



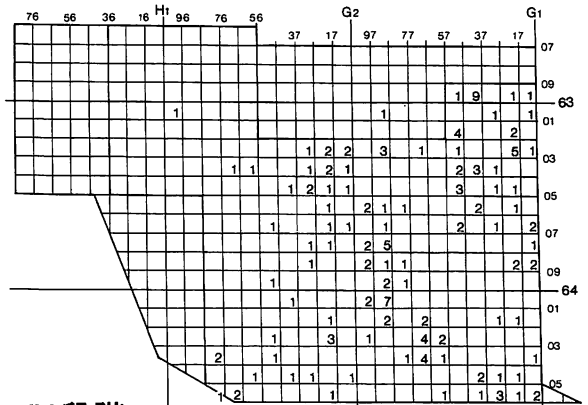
石斧剥片 I 段階



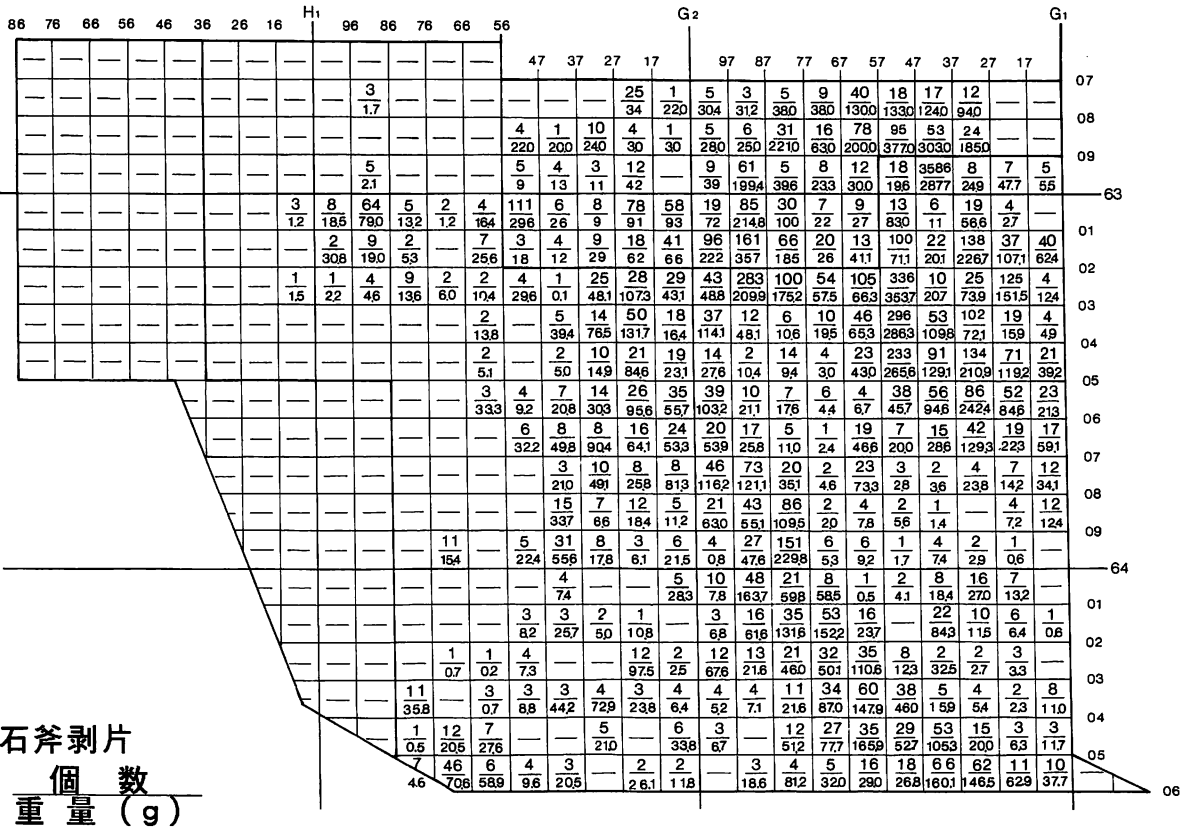
II 段階



III 段階

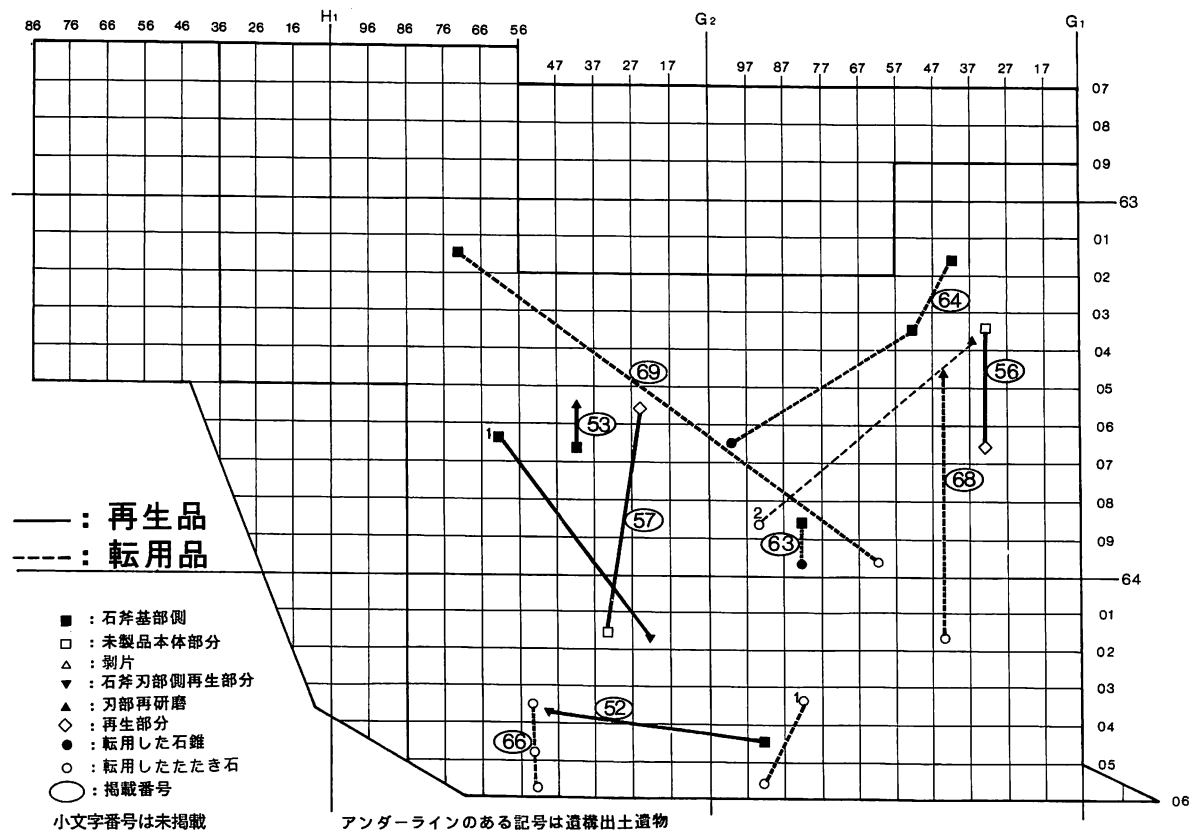
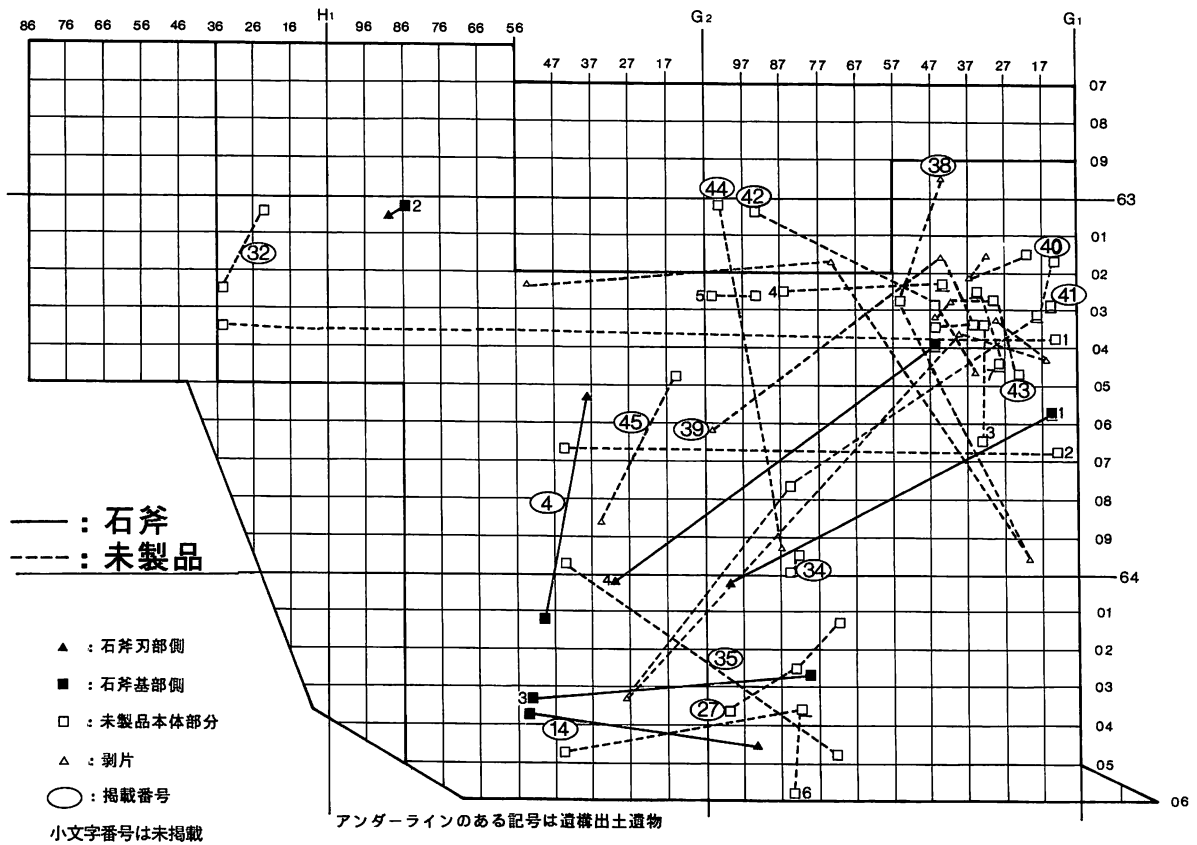


IV 段階



石斧剥片
個数
重量 (g)

図III-12 礫石器(9) 石斧フレイク分布図



図III-13 礫石器(10) 石斧等の接合図

見られない。このことはII-2段階において再生不能なくらい破損したものの多くは剥片と一緒に廃棄されたことを示している。一方、他の段階のものはそれぞれ本体が持ち出されている可能性がある。

G₁62-39には各段階の剥片が存在するのに石斧未製品はない。このことは石斧製作中に失敗をしなかったのか、再生・転用をする場所が異なっていたのか、剥片のみを廃棄したのかが考えられる。

石斧・石斧未製品等の接合図の説明(図III-13)

1) 石斧(図III-13の上段の接合図の実線)

未掲載1(B I₁)は48 m離れて接合した。基部側はH-10覆土の黒土上層から出土した(平成2年度報告済、図III-27・3)。両主面は加熱による剝落が見られる。剝落の後に2個に折れ分散した。未掲載2(D' II₃)は2個に折れ分散したもので2.5 m離れて接合した(平成2年度報告済、図III-42・1)。未掲載3は37 m離れて接合した。未掲載4(A' III₃)は53 m離れて接合した。基部側はH-13炉跡から出土した(平成2年度報告済、図III-37・13)。

4は2個に折れ分散したもので29 m離れて接合した。14は2個に折れ分散したもので30 m離れて接合した。

2) 石斧未製品(図III-13の上段の接合図の破線)

未掲載1(III₃Aa)は110 m離れて接合した。H₁63-23出土の方が基部予定側(平成2年度報告済、図III-178・85)。未掲載2(III₁Bb)は65 m離れて接合した。いずれも基部予定側でG₂63-36出土の方が基部予定側。未掲載3(II₂Bb)は16 m離れて接合した。いずれも基部予定側でG₁63-26出土の方が基部予定側。未掲載4(III₃Aa)は側縁敲打調整中に折れたもので21 m離れて接合した。片方はH-19覆土の黒土層から出土した(平成2年度報告済、図III-15・15)。未掲載5(II₁Bb)は加熱されており、その後に2個に折れたもので4 m離れて接合した。未掲載6(III₁Bb)は刃部調整に失敗し、再生しようとして折れたもの。再生した刃部予定側(G₁64-75出土)⇒折れ面から剝離した側縁部の破片(H-44)⇒基部予定側(G₂64-34)の順に動いている。動いた距離は9 m+29 m。未掲載7(III₃Aa)はいずれも基部予定側でH-12⇒H-4の順に10 m動いている。

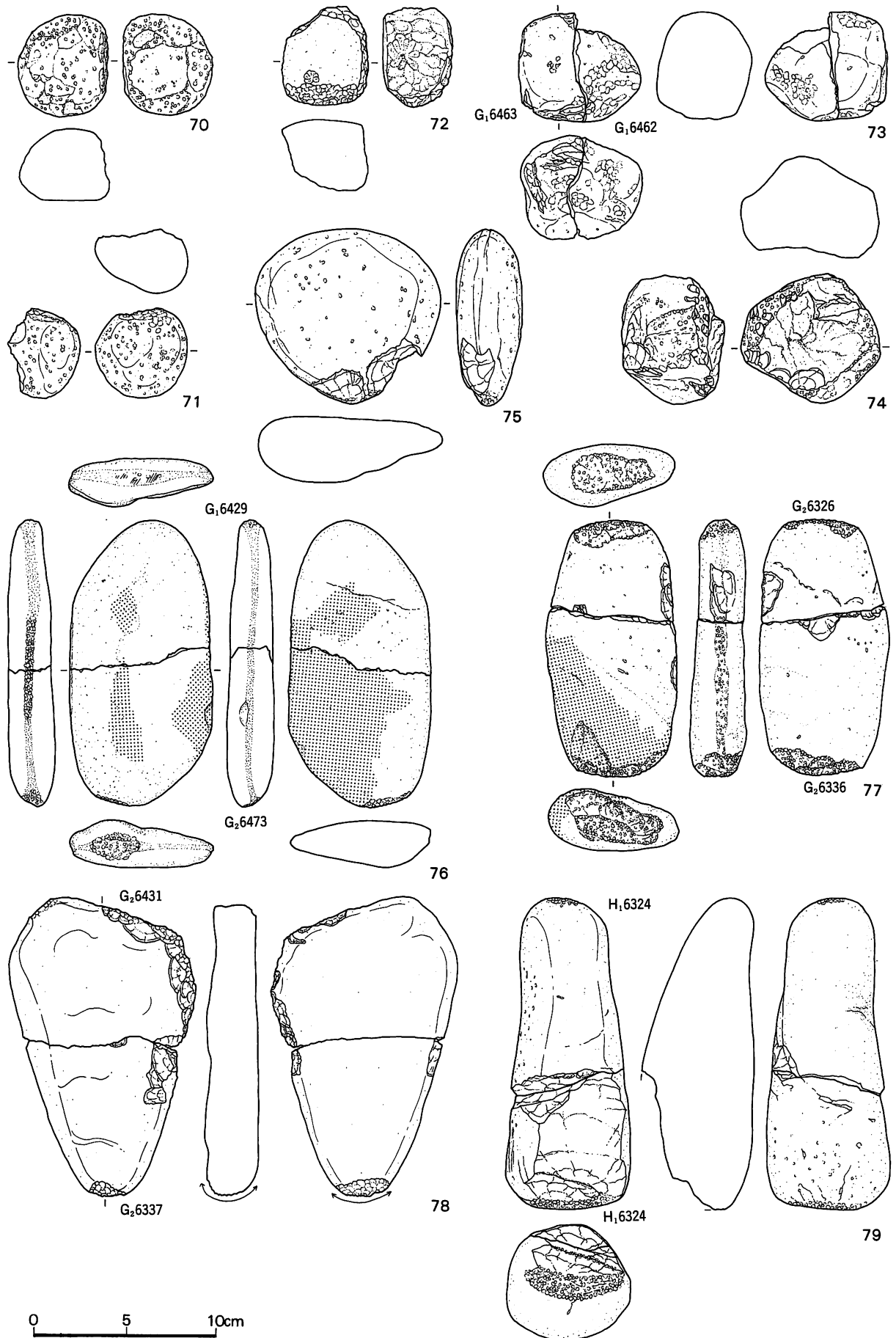
27はG₁64-93⇒G₁64-72⇒G₁64-61の順に動いている。動いた距離は10 m+7 m。32は11 m離れて接合した。34は2 m離れて接合した。35は44 m離れて接合した。37はG₁63-21⇒H-4⇒G₁63-11の順に動いている。動いた距離は4 m+9 m。38はG₁62-39⇒G₁63-42⇒G₁63-19⇒G₁63-61⇒G₂63-42の順に動いている。動いた距離は12 m+39 m+47 m+40 m。39はG₁63-96⇒H-4⇒G₁63-33⇒G₁63-23の順に動いている。動いた距離は38 m+9 m+5 m。40はH-14⇒H-6⇒G₁63-33⇒G₂63-23⇒G₁63-77⇒H-5⇒G₁63-01の順に動いている。動いた距離は7 m+13 m+64 m+35 m+44 m+7 m。40は遺構内接合。42はG₁63-24⇒H-19⇔G₁63-33の順に動いている。動いた距離は10 m+27 m。43はG₁63-33⇒H-19⇒G₁63-22⇔G₁63-14の順に動いている。動いた距離は3 m+6 m+10 m。44はG₁63-79⇒G₁64-90の順に動いている。動いた距離は45 m。45はG₂64-04⇒G₂63-28の順に動いている。動いた距離は21 m。

3) 石斧再生品(図III-13の下段の接合図の実線)

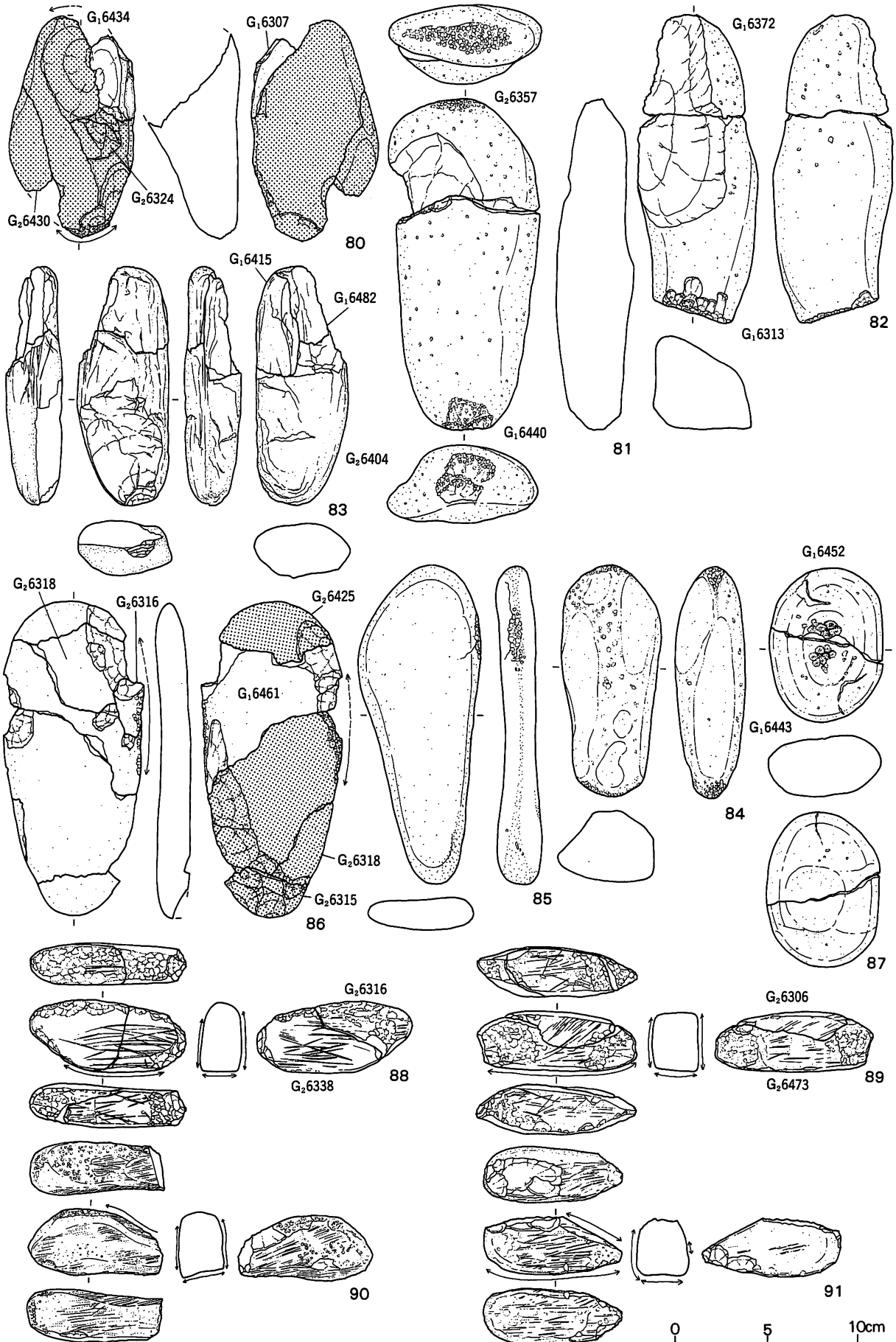
未掲載1(C' III₂)は2個に折れ分散したもので33 m離れて接合した(平成2年度報告済、図III-178・75)。52は2個に折れ分散したもので29 m離れて接合した。53は2個に折れ分散したもので5.5 m離れて接合した。56はG₁63-23⇒G₁63-26の順に動いている。動いた距離は15 m。57はG₂64-21⇒G₂63-15の順に動いている。動いた距離は29 m。

4) 石斧転用品(図III-13の下段の接合図の破線)

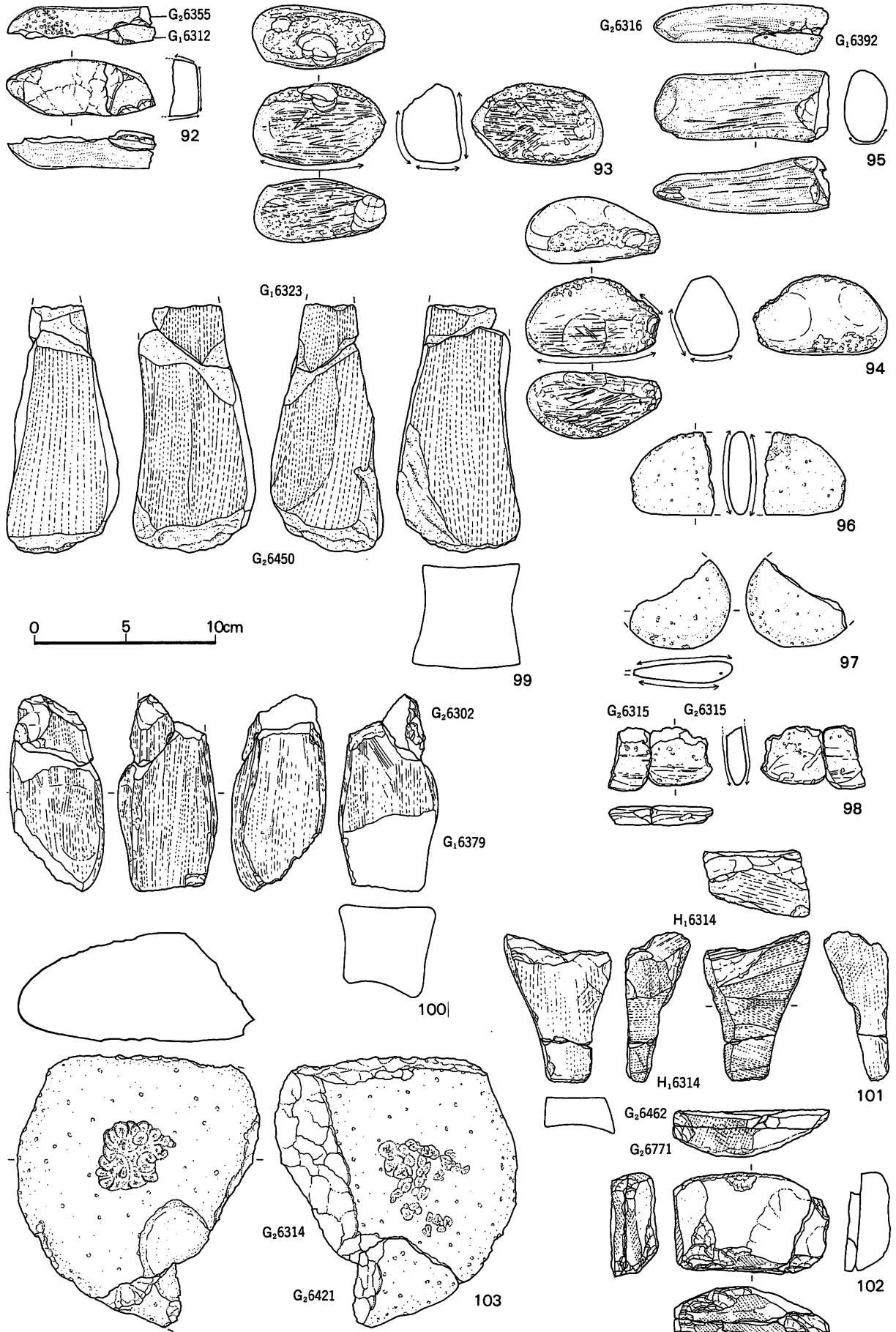
未掲載1は基部転用のたたき石。2個に折れ分散したもので12 m離れて接合した。未掲載2(C' IV₃)



図III-14 礫石器(11) たたき石



図III-15 礫石器(12) たたき石・すり石・くぼみ石



図III-16 礫石器(13) すり石・砥石・台石

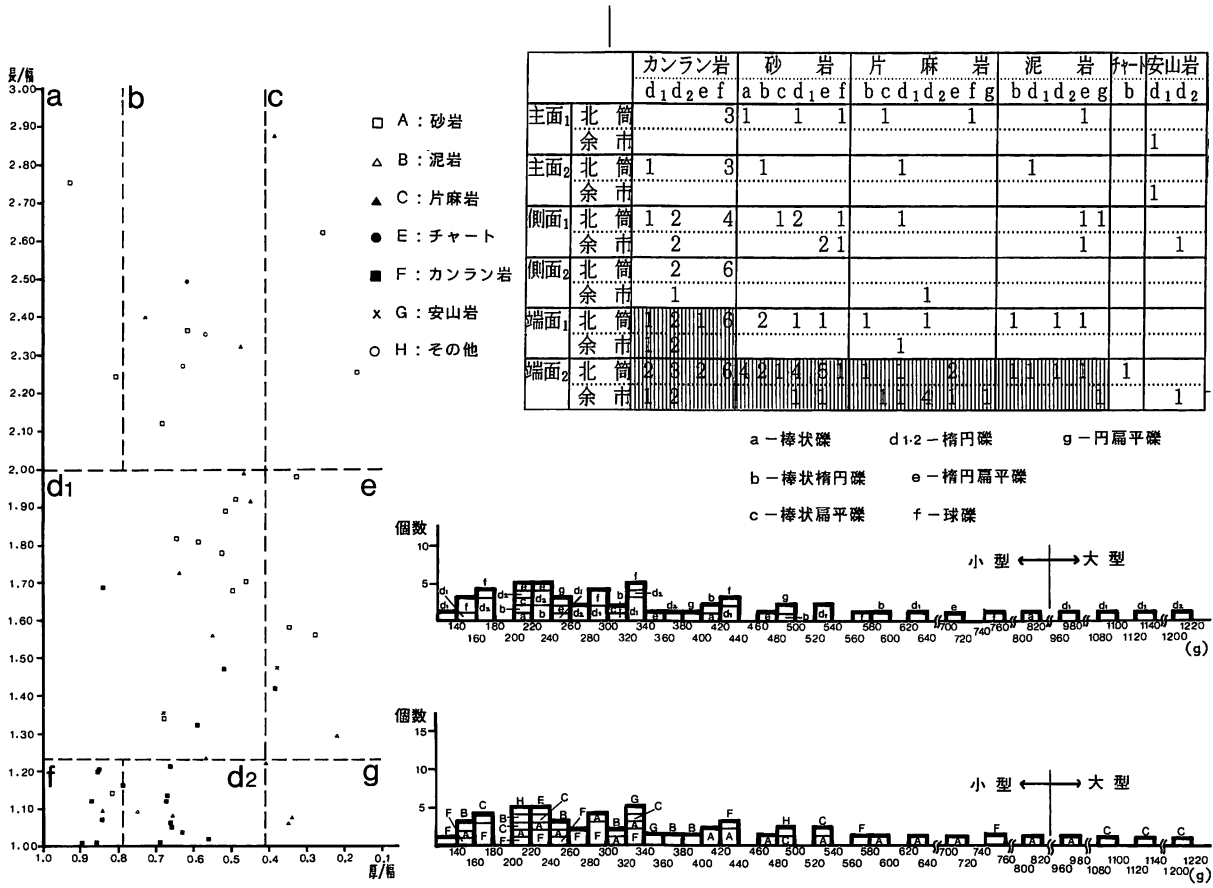
は2個に折れ分散したもので32m離れて接合した。

63はG₁63-78 ⇒ G₁63-79の順に動いている。動いた距離は5m。64はG₁63-96 ⇒ G₁63-31 ⇒ G₁63-43の順に動いている。動いた距離は28m+10m。66はG₂64-43 ⇒ G₂64-44 ⇒ G₂64-45の順に動いている。動いた距離は6m+5m。68はH-13 ⇒ G₂64-31の順に動いている。動いた距離は29m。69はG₂63-61 ⇒ G₁63-59の順に動いている。動いた距離は69m。

たたき石 (70~84)

1) 形態分類について たたき石の形態は岩質別に図III-23の左側のグラフで表した。グラフの縦軸は長さ/幅で平面形を表し、横軸は厚さ/幅で断面形を表す。よって、縦軸の値が大きくなると平面形は棒状に近くなり、横軸の値が小さくなると断面形は扁平に近くなる。従って、グラフ中の破線で区画された領域は形態の違いを表している。形態の名称は、初めに平面形状、次に断面形状を表す。なお、略号としてアルファベットを付した。

- a: 棒状礫(79): 一つの端部を使用。砂岩。
- b: 棒状礫楕円礫(80~84): 両端を使用している。80・82は砂岩、81は片麻岩、83はチャート、84は泥岩。トーンは被熱した部分。
- c: 棒状扁平礫(85・86): 85は一つの端部と側縁を使用。86は一つの端部を使用。全て砂岩。トーンは被熱した部分。
- d₁: 楕円礫(図版中に当該遺物なし)。
- d₂: 楕円礫(71・74): 71はカンラン岩の球礫を半割し断面をそのままにして他を全面使用している。74は綠色泥岩、両主面を除いて全面使用している。
- e: 楕円扁平礫(76・77・78): 76・78は一つの端部と側縁を使用。77は一つの端部と側縁を使用後



図III-17 礫石器(14) たたき石のグラフ

に折れ、大きな破片の方の折れ面を調整し再生している。すべて砂岩。トーンは被熱した部分。
 f：球礫(70・72・73)：1つの主面を除いた他を全面使用している。70・73はカンラン岩、72は砂岩。
 g：円扁平礫(75)：片麻岩の一つの側縁を使用している。

カンラン岩のたたき石は主に $f \cdot d_2$ の形態を持っており、断面形に多様性がある。泥岩のたたき石は $d_2 \cdot d_1 \cdot b \cdot e \cdot g$ の形態を持っている。片麻岩のたたき石は $d_2 \cdot d_1 \cdot b \cdot c \cdot g$ の形態を持っており、平面形に多様性がある。砂岩のたたき石は $d_2 \cdot g$ を除いた全ての形態を持っている。

2) 重量について たたき石の形態ごとの重量は図III-23の右側中段のグラフで表した。たたき石の重量は120～1220gの範囲に分布している。重量分布の中で20g以上の欠落を生じている階級は12ヶ所ある。この欠落のうち820～960gの間が140gで最大となることから960g以上を大型のたたき石とし、820g以下を小型のたたき石と分類した。

大型のたたき石には $d_1(3) \cdot d_2(1)$ の形態があり、小型のたたき石には $d_1(12) \cdot d_2(10) \cdot f(9) \cdot b(7) \cdot e(6) \cdot g(3) \cdot c(2)$ がある。大型・小型両方に共通して多数を占める形態は $d_1 \cdot d_2$ である。大型のたたき石は形態が2種類と少なく、いっぽう、小型のたたき石は全ての形態が存在し、その重量分布のピーク部分(200～340g)においても全ての形態が存在している。以上のことからいえることは、重量に関係なく $d_1 \cdot d_2$ を優先的にたたき石として選択しているが、小型のたたき石の場合は $d_1 \cdot d_2$ を優先しつつも多様な形態を選択している。

たたき石の岩質ごとの重量は図III-23の右側下段のグラフで表した。大型と小型の分類は右側中段のグラフの基準になった。大型のたたき石における岩質は片麻岩が主体となる。小型のたたき石においてはつぎの特徴が見られる。カンラン岩は340g以下の各階級において第一位の個体数を占める。泥岩は400g以下の階級にのみ分布する。砂岩は400g以上の階級において第一位の個体数を占める。このように400g以下には多様な岩質が存在し、400g以上には少数の岩質が存在する。

以上のことをまとめると、重量に関係なく $d_1 \cdot d_2$ を優先的にたたき石として選択している。しかしながら820g以下の小型のたたき石の場合には $d_1 \cdot d_2$ を優先しつつも多様な形態を選択しており、さらにそのなかでも400g以下になると石質は多様になる。

3) 使用部位について このような特徴を持ったたたき石の使用されているのかをみてみよう。図III-23の右側上段の表に表した。この表は縦罫が岩質ごとの形態で、横罫が使用部位と時期を示している。また、使用部位名はたたき石を平面に置いて安定する方の面を「主面₂」、長軸上で尖っている方を「端面₂」とし、右側の側縁(面)を「側面₂」として展開して仮りに付した。

使用部位の集計については1個体に2ヶ所以上ある場合は各部位に割り振っている。なお、ここに使われているたたき石は形態のわかるものについては完形でなくともデータとして扱っている。

カンラン岩は各形態を通じて主面以外をよく使用し、なかでも端面をよく使用する。 $f \cdot d_2$ は主面以外を特によく使用する。砂岩は各形態を通じて尖った端面をよく使用し側面も使用する。 $d_1 \cdot e$ は尖った端面を特によく使用する。片麻岩は各形態を通じて尖った端面をよく使用する。 d_2 は尖った端面を特によく使用する。 d_1 は使用部位の限定が見られない。泥岩は各形態を通じて尖った端面をよく使用する。 e は使用部位の限定が見られない。

くぼみ石(87)：主面を持ち、打撃痕が集中するもの
 砂岩の楕円礫の片主面を使用面とする。

すり石(88～98)：使用面が凸または平らになるもの

1) 形態分類について

A：側面形が紡錘形、棒形。使用痕には敲打痕と長軸方向に付く条痕がある。

A 1 : 4 断面が平面で構成され、側面形は紡錘形。

A 2 : 側断面が 2 つの凸曲面で構成され、側面形は紡錘形・楕円形。

A 3 : 断面が凸曲面で構成され、側面形は棒形。

B : 平面形は円形で断面形は扁平な紡錘形。

A 1 : 88・89・92。88・92 は凝灰岩。89 は流紋岩。

A 2 : 90・91・93・94。90・91 は側面形が紡錘形で底面が若干波打っている。いずれも流紋岩。93・94 は側面形が楕円形。これらは 88~92 と異なり、各面にあまり手が加わらず礫の面影を残している。いずれも流紋岩。

A 3 : 95。流紋岩で、礫の形をそのままにしてひとつの側面を除く 3 面を使用している。

B : 96~98 は。98 は割れたものを再生しているので接合面の角が落ちてる。いずれも凝灰岩。

砥石 (99~102) : 使用面が凹になるものをすり石と区別した。

1) 形態分類について 形態は図III-24 左のグラフに示している。グラフの横軸は厚さ／幅で断面形を表す。縦罫には使用面の数を示している。

A1 : 4 面使用で断面形が正方形 (厚さ／幅の値が 0.85 以上)。平面形は方形

A2 : 4 面使用で断面形が方形 (厚さ／幅の値が 0.85 以下)。平面形は方形

B : 両面使用で断面形が長方形 (厚さ／幅の値が 0.4 以下)
平面形は方形(B₁) 平面形は不整形(B₂)

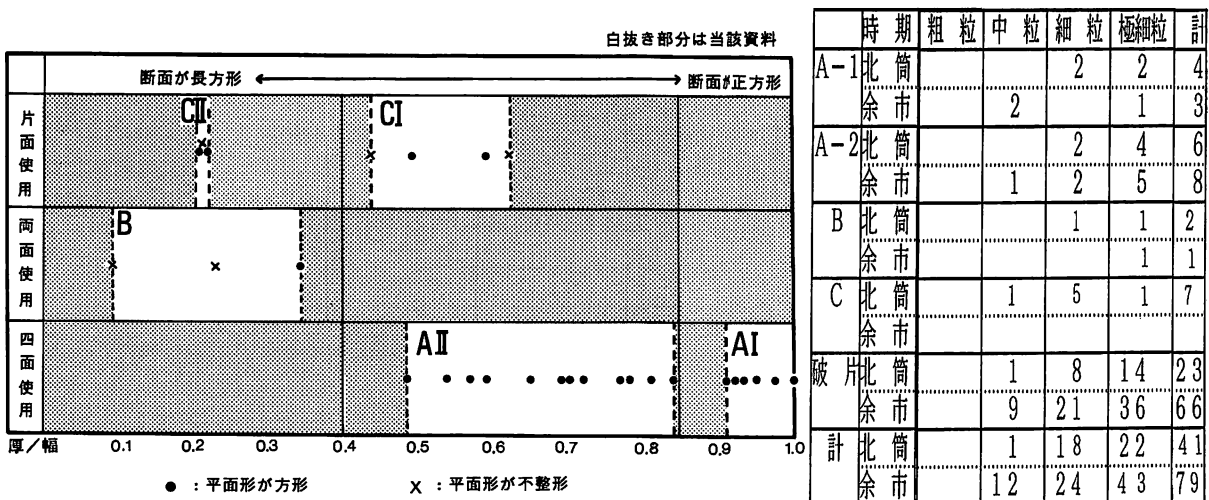
C1 : 片面使用で断面形が方形 (厚さ／幅の値が 0.85~0.4)
平面形は方形(C 1₁) 平面形は不整形(C 1₂)

C2 : 片面使用で断面形が長方形 (厚さ／幅の値が 0.4 以下)
平面形は方形(C 2₁) 平面形は不整形(C 2₂)

2) 粒度 中粒・細粒・極細粒の 3 段階があった。図III-24 右の表に各形態の粒度を示している。各形態とも細粒・極細粒が多く中粒少なく、砥石全体の粒度別の比率はだいたい中粒：細粒：極細粒=1：4：7 である。また形態ごとにとみると、C は細粒が目だって多いようだ。以上のように、形態ごとに粒度の違いはあまり見られず中粒・細粒・極細粒の順で数が増える傾向が見られる。

3) 固結度 折れ面において観察した。ただし完形資料の場合には表面についての観察となるため風化・被熱などの条件が加わっている。

1 : あまり固結していない (触ると剝落する)。



図III-18 砥石のグラフ

2: やや固結している(爪で搔くと剥落する)。

3: よく固結している(爪で搔いても剥落しない)。

99はA1で一つの面が凸形になる。中粒、固結度3。100はA1、細粒、固結度2。101はA2、極細粒、固結度2。

台石(103)

安山岩の扁平楕円礫を分割した一部を利用したもので、両面に打撃痕が見られる。

礫石器の分布図・接合図の説明(図III-19~22)

1) 礫石器の分布(図III-19・22)

砥石は住居跡が集中する北東部と南西部と斜面縁辺とに多く分布し、A I・IIは北東部と斜面縁辺に多く分布している。たたき石は住居跡が集中する北東部の周縁と南西部の斜面縁辺に多く分布している。すり石は中央部の斜面縁辺に多く分布している。石鋸とくぼみ石と石錘は散点的に分布しており特に傾向は見だしがたい。

2) 北筒期の礫石器の接合関係(図III-21)

この時期は煉瓦台式とノダップII式に並行するトコロ6類の時期の礫石器の接合資料である。

たたき石: 未掲載1は一端部を使用する砂岩の楕円扁平礫で3個以上に割れ、その内2点が61m離れて接合した。73は3個以上に割れ、その内2点が3.5m離れて接合した。76は2個に割れ分散したもので7m離れて接合した。79は2個に割れ分散したもので0.5m離れて接合した。80はG₂64-30⇒G₁63-07⇒G₁63-24⇒G₁64-34の順に動いている。動いた距離は67m+16m+36m。81は3個以上に割れ、その内2点が42.5m離れて接合した。83は3個以上に割れ、G₁64-15⇒G₁64-82⇒G₁64-60の順に動いている。動いた距離は38m+17m。

すり石: 未掲載1は4個以上に割れ、その内2点が17.5m離れて接合した。未掲載2は3個以上に割れ、その内2点が0.5m離れて接合した(平成2年度報告済、図III-179・107)。未掲載3は5個以上に割れ、その内2点が0.5m離れて接合した。88は2個に割れ、13.5m離れて接合した。95は3個以上に割れ、G₁64-92⇒G₂63-96の順に動いている。動いた距離は31m。98は6個以上に割れ、G₂63-15のなかで動いている。動いた距離は0.5m。

砥石: 未掲載1(A I)・未掲載6(A II₂)・未掲載10(C I₂)・101(A I)は同一グリット内で接合している。各距離はおおよそ0.5m。未掲載4(A II)は3個以上に割れ、その内2点が29m離れて接合した。未掲載5(C I)はG₁64-21内で7点出土し、6m離れてG₁63-30から1点出土している。未掲載6(C II₂)は3個以上に割れ、G₁64-90⇒G₁64-44⇒G₁64-43の順に動いている。動いた距離は29m+2m(平成2年度報告済、図III-180・115)。99は4個以上に割れ、G₁63-23⇒G₁64-34⇒G₁64-50の順に動いている。動いた距離は61m+8m。

くぼみ石: 87は2個に割れ5m離れて接合する。

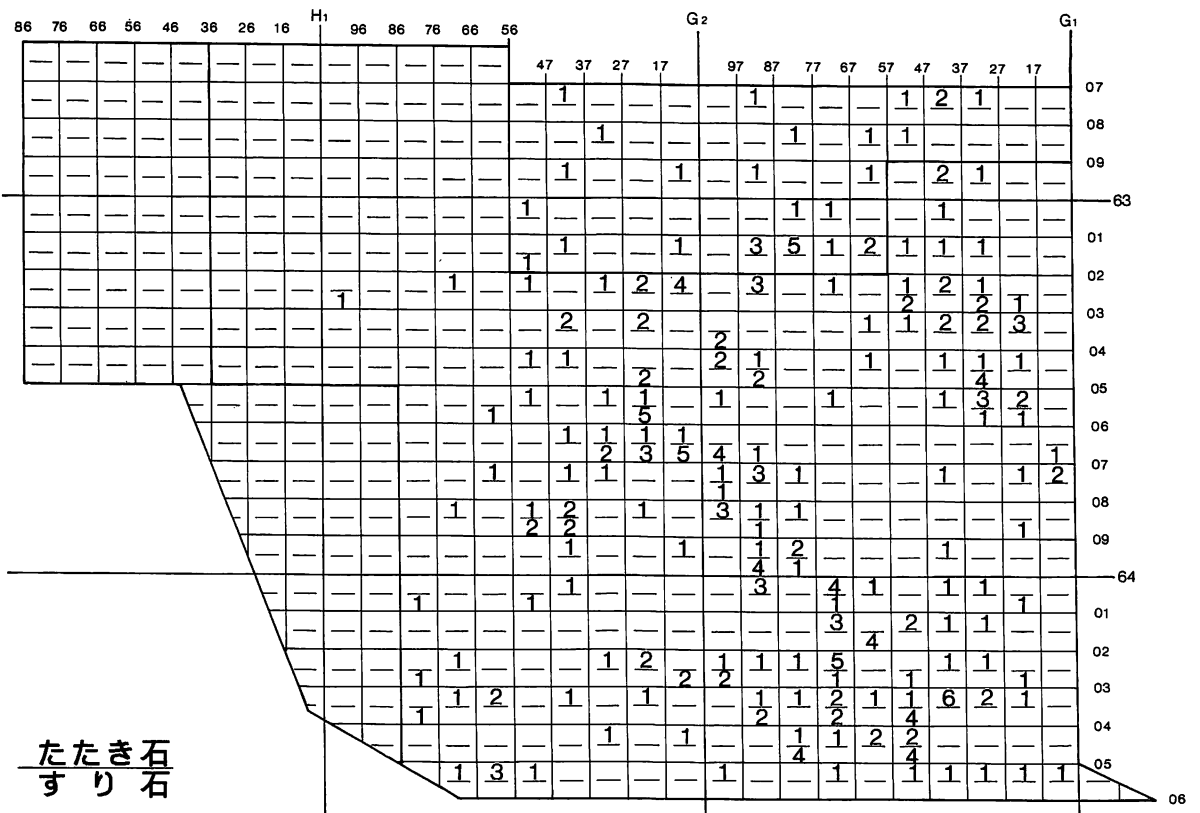
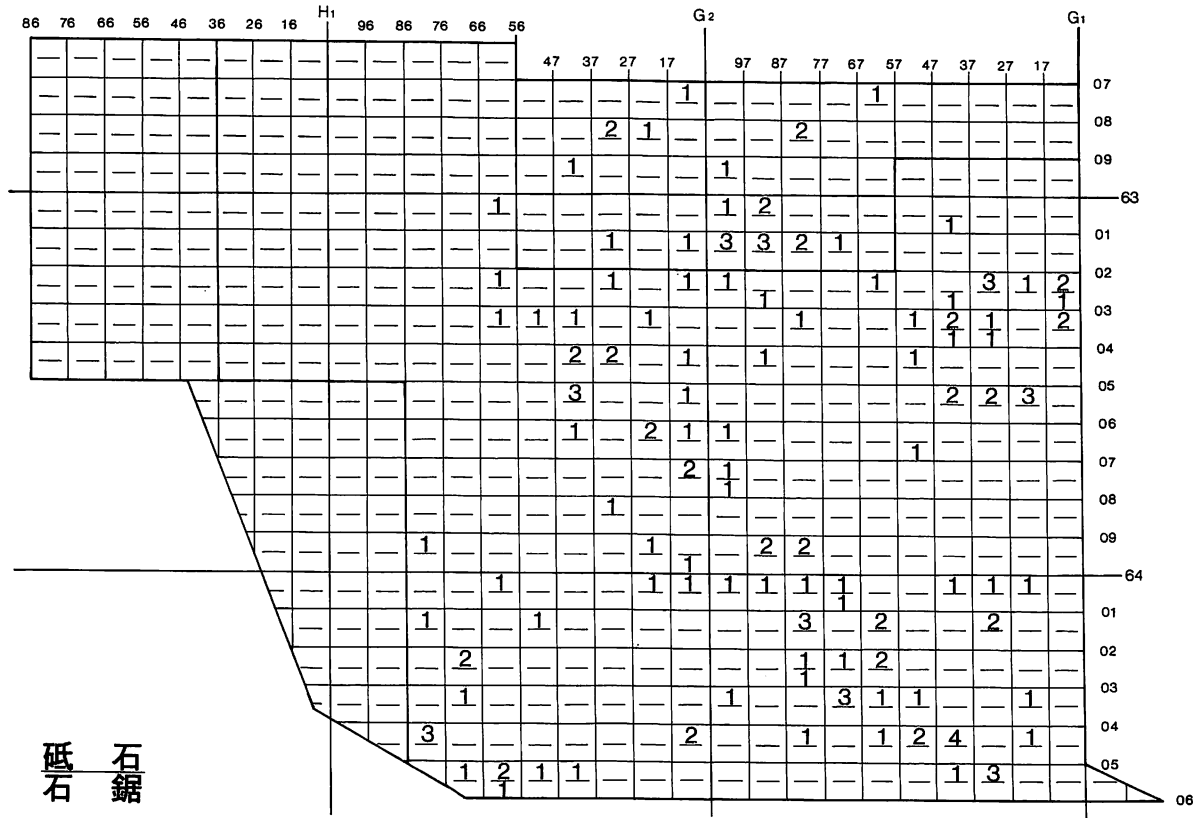
3) 余市期の礫石器の接合関係(図III-22)

この時期は煉瓦台式より後で余市式(小野幌・伊達山式)までの時期の礫石器の接合資料である。

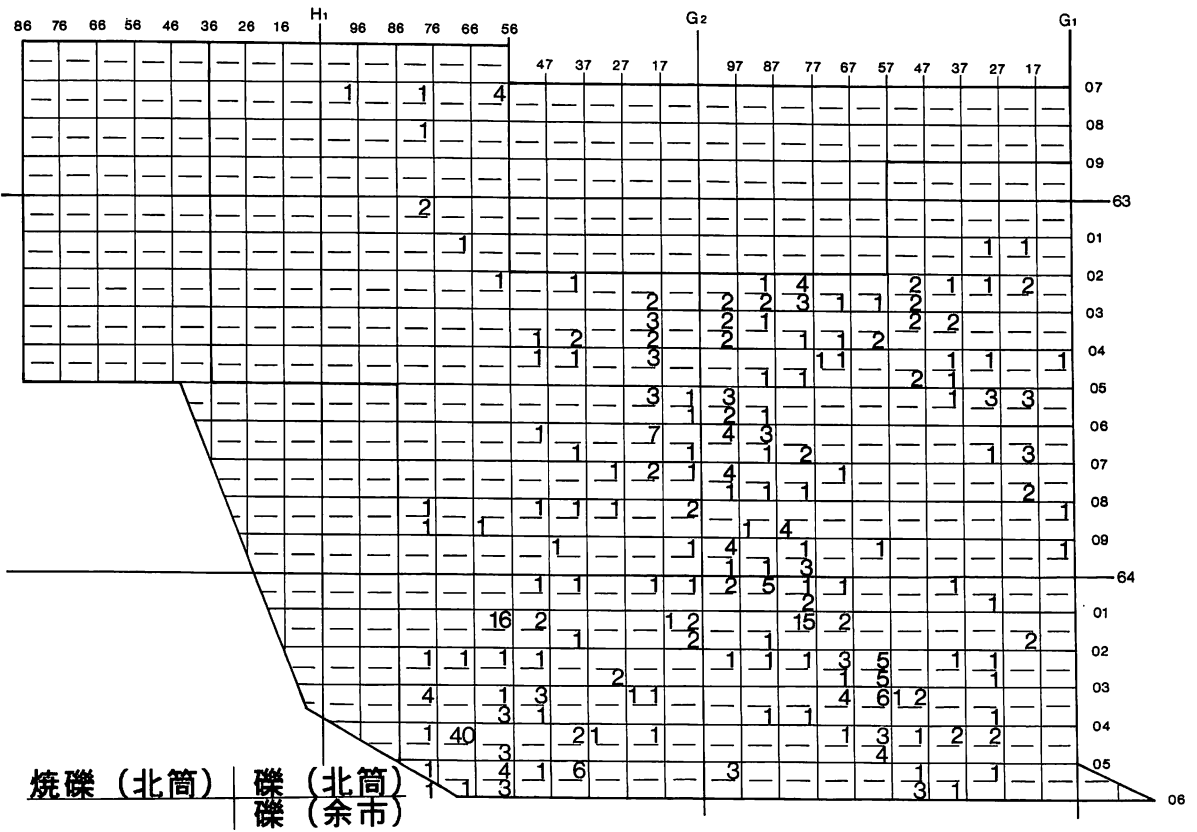
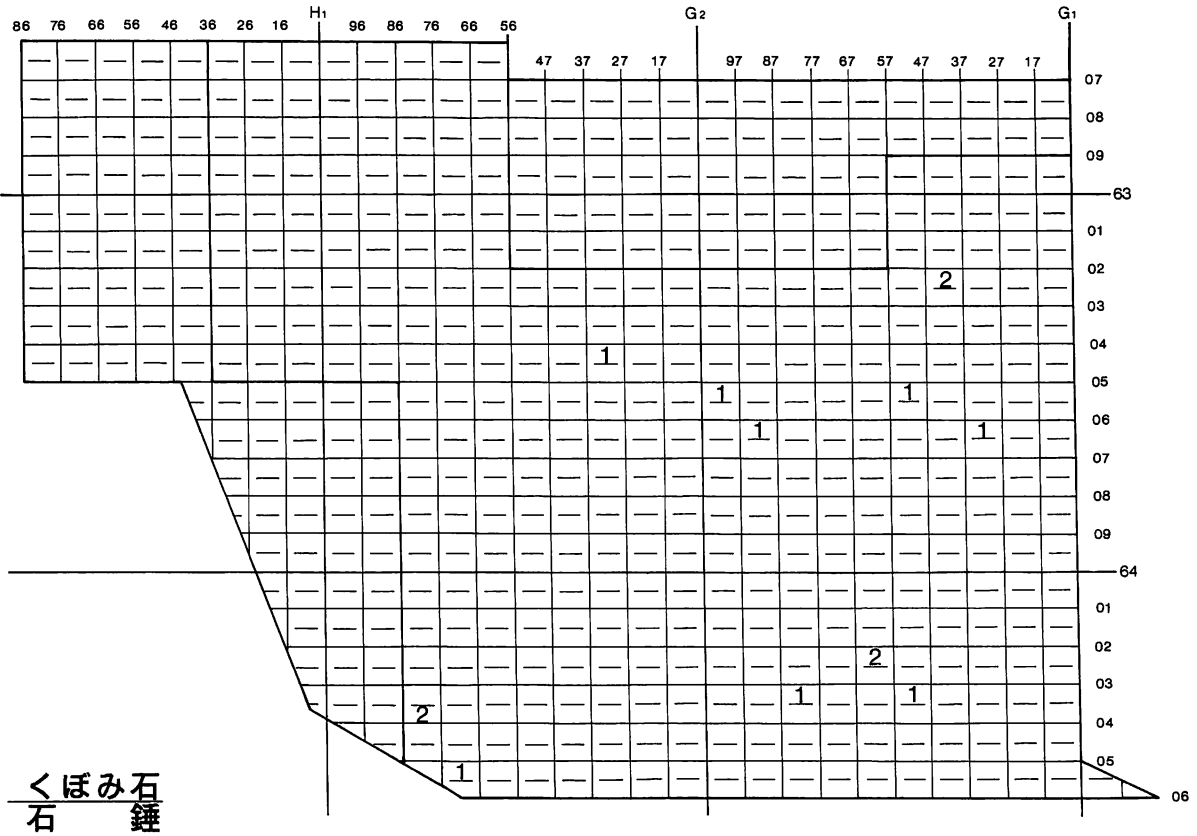
たたき石: 未掲載3は一端部を使用する片麻岩の棒状円扁平礫で10個以上に割れ、G₁63-85⇒G₂63-22⇒G₂63-02⇒G₂63-15⇒G₂63-25の順に動いている。動いた距離は23m+10m+14m+4m。77は2個に割れ3m離れて接合する。78は2個に割れ29m離れて接合する。82は2個に割れ29m離れて接合する。

すり石: 89は2個に割れ48m離れて接合する。92は5個以上に割れ71m離れて接合する。

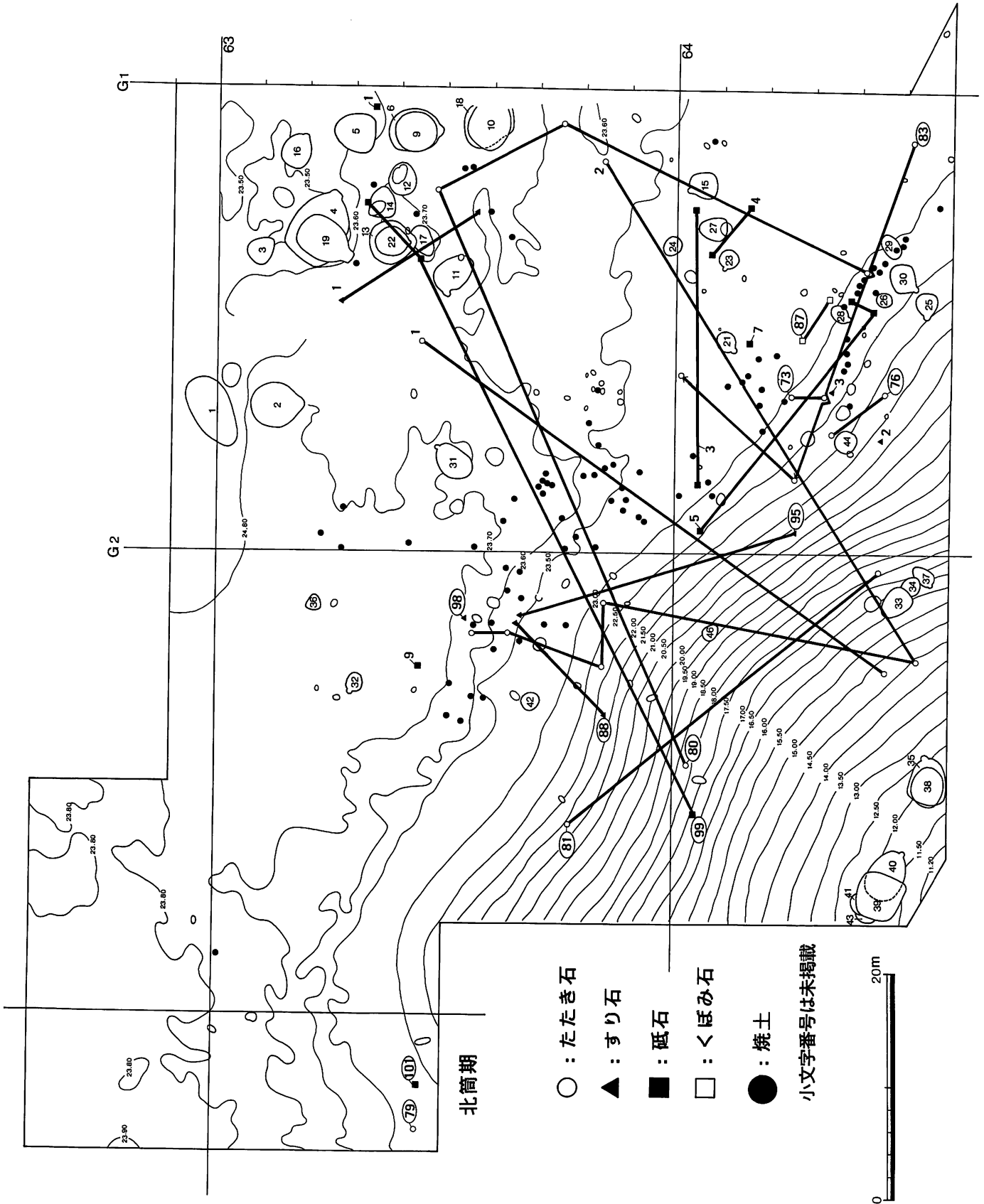
砥石: 未掲載2(B₁)は2個以上に割れ15m離れて接合する(平成2年度報告済、図III-180・118)。



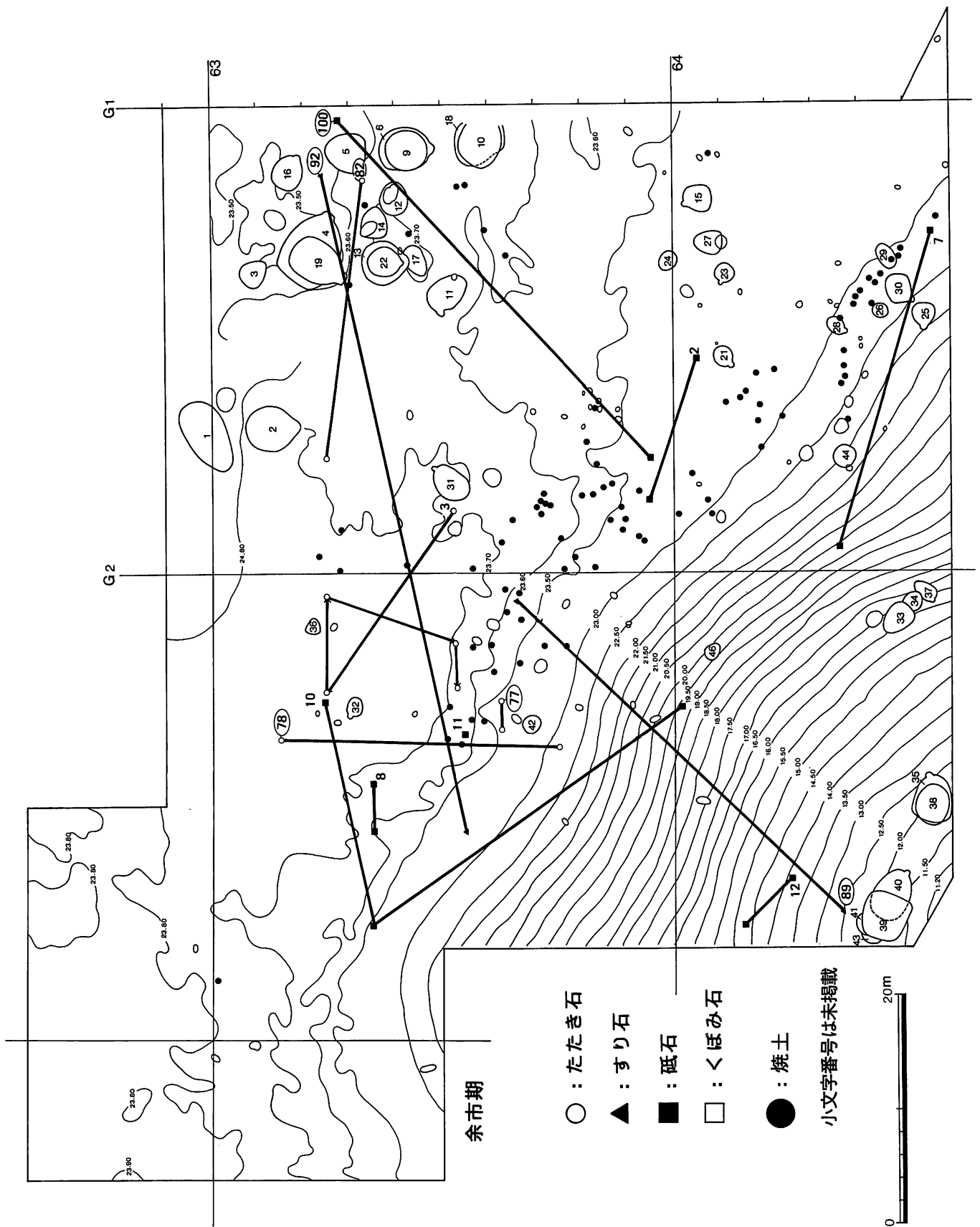
図III-19 礫石器分布図(1)



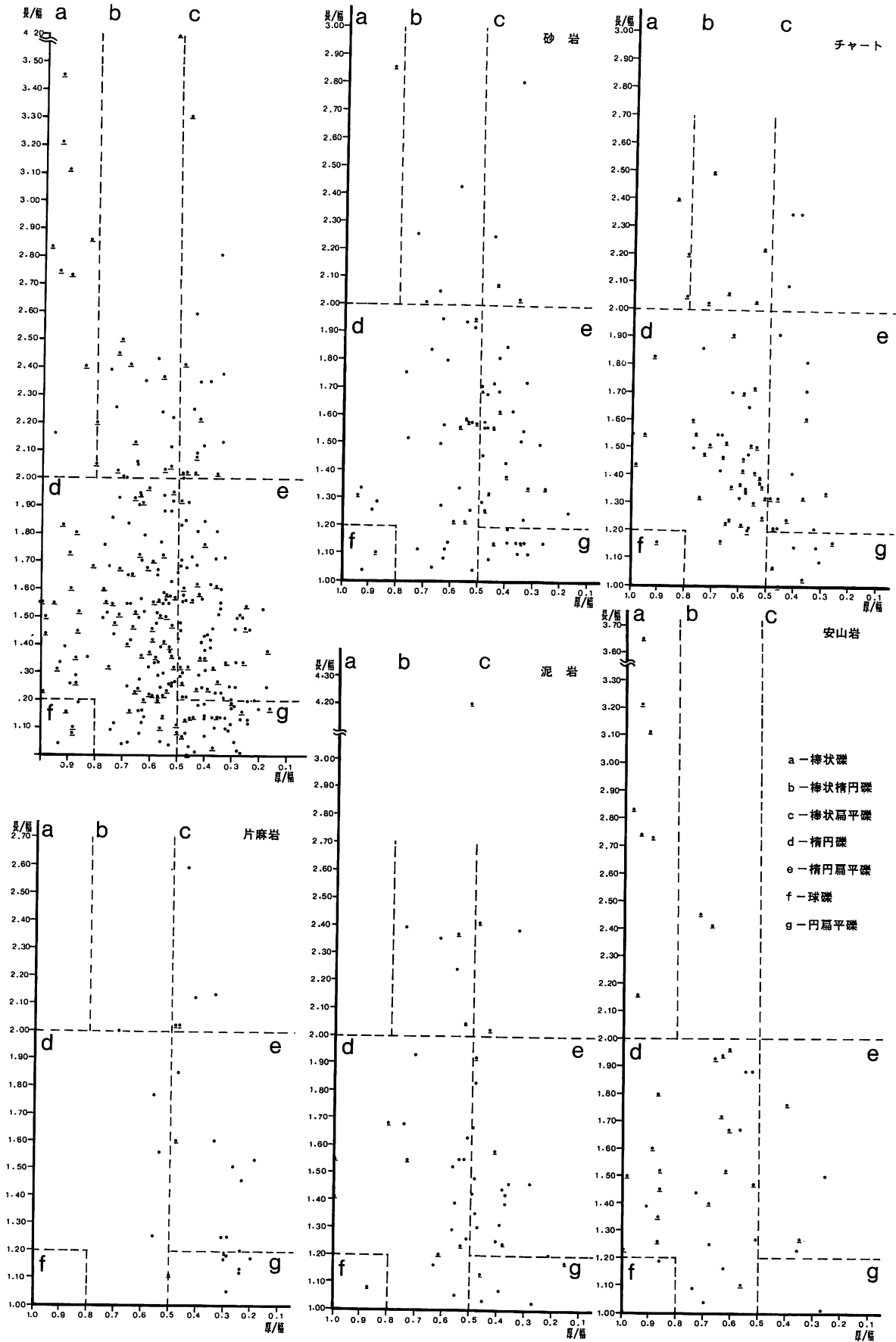
図III-20 磔石器分布図(2)



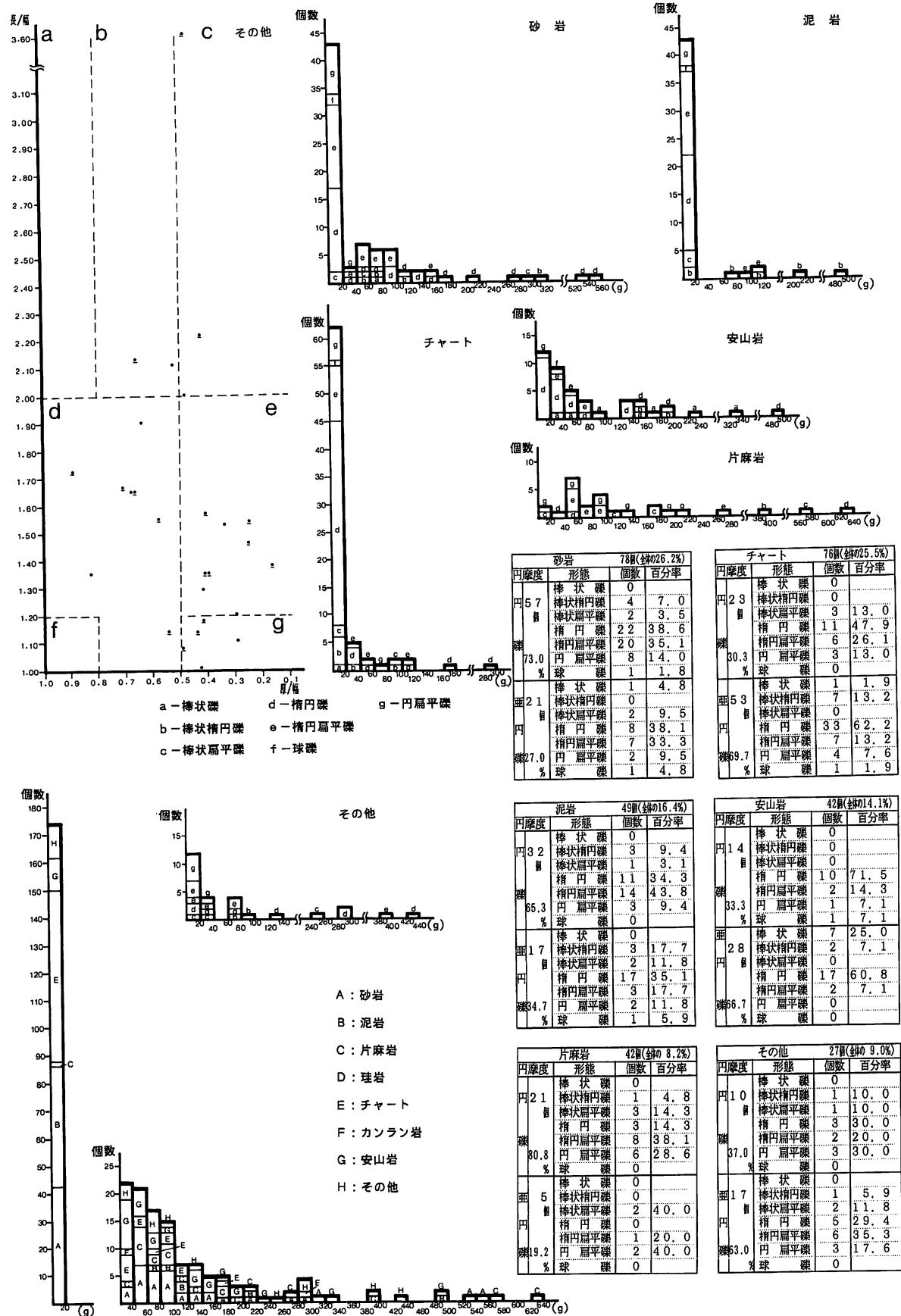
図三-21 礫石器集合同図 (1)



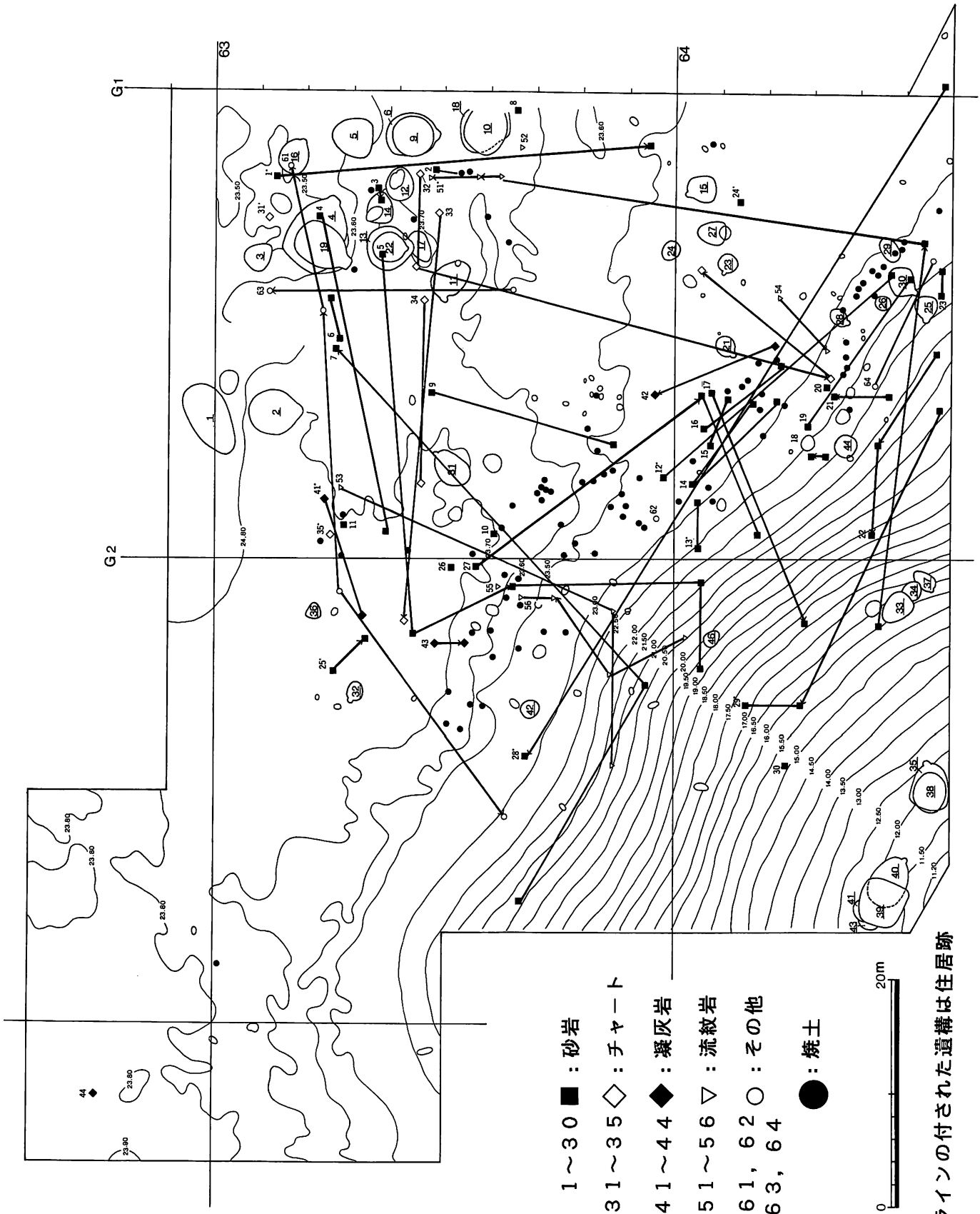
図三-22 礫石器接合図 (2)



図III-23 礫グラフ (1)

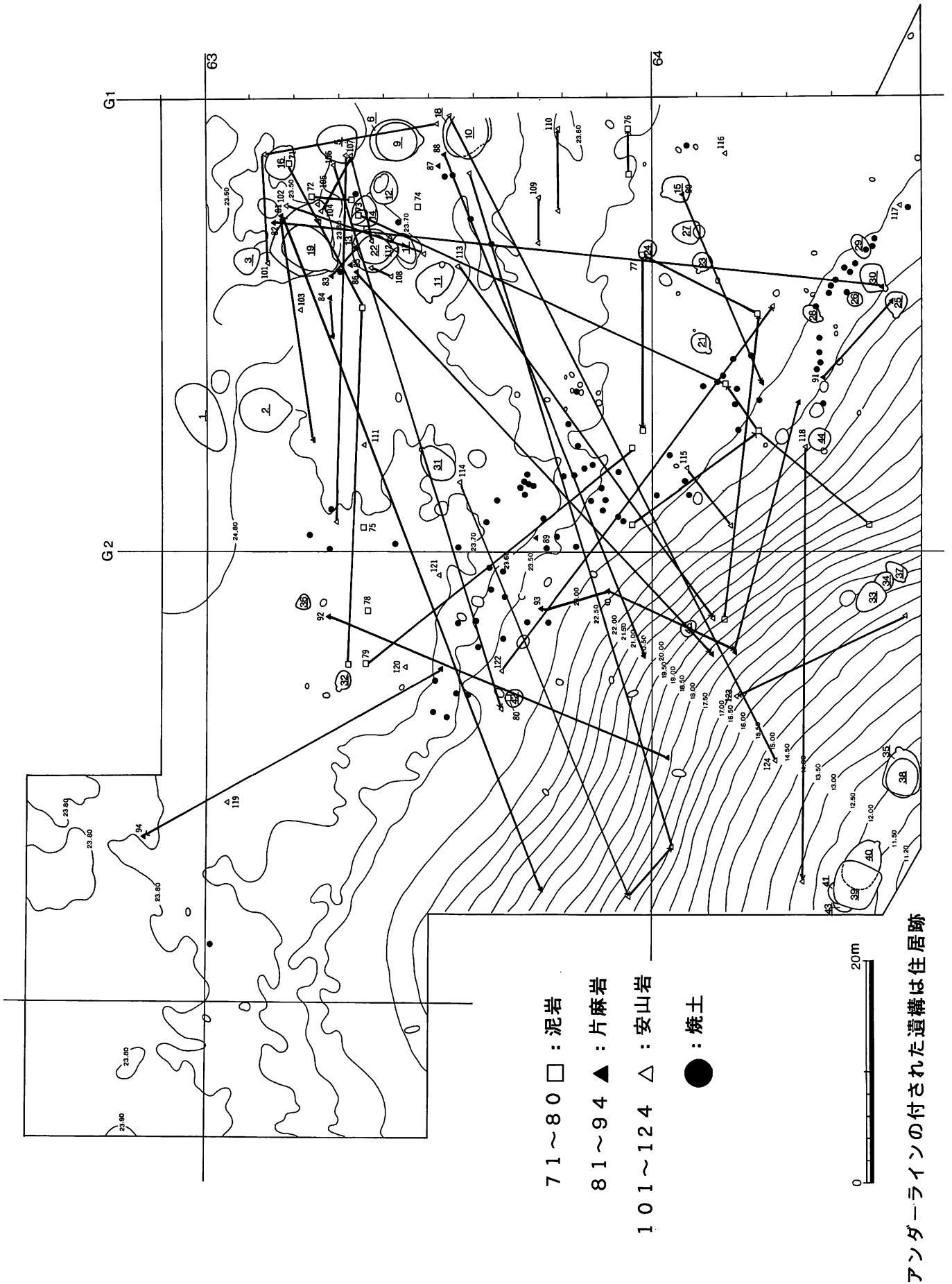


図III-24 礫グラフ (2)



図三-25 礎接合図(1)

アンダーラインの付された遺構は住居跡



図III-26 礎接合図(2)

未掲載 7(B₁) は2個以上に割れ 30 m 離れて接合する。未掲載 8(B₂) は2個に割れ 5 m 離れて接合する。未掲載 10(A II) は G₂63-22 内で7点出土し、24 m 離れて G₁63-73 から1点出土し、39 m 離れて G₂64-11 から1点出土した。未掲載 11(A II) 同一グリット内で接合している。未掲載 12(A II) は2個以上に割れ 7 m 離れて接合する。

C 礫 (図III-23~26)

搬入礫 (図III-23, 24)

図III-25 のグラフはII黒層出土の完形の礫についての形態を岩質別に示した。縦軸は長さ/幅で平面を表し、横軸は厚さ/幅で断面形を表す。よって、縦軸の値が大きくなると平面形は棒状に近くなり、横軸の値が小さくなると断面形は扁平に近くなる。従って、グラフの破線で区画された領域は形態の違いを表している。形態の名称は、初めに平面形の名、次に断面形の名を付け、それらを組み合わせることで礫の名称が立体的になるようにし、略号としてアルファベットを付した。

礫全体の特徴は横軸値 0.5 付近に集中し、主に d・e・g の領域に分布する。垂角礫 (図中のアンダーラインを付したドット) についても同様なことがいえる。

砂岩は全ての形態が存在する。その中で主に横軸値 0.7~0.3、縦軸値 1.0~1.95 に広がりを持ち、主に楕円礫(38.5%)・楕円扁平礫(34.6%) によって構成されている。チャートは全ての形態が存在する。その中で主に横軸値 0.7~0.3、縦軸値 1.0~1.9 に広がりを持ち、楕円礫が 57.9% を占め、砂岩と較べると一つの形態が卓越している。泥岩は a を除いた全ての形態が存在する。その中で主に横軸値 0.65~0.35、縦軸値 1.0~2.05 に広がりを持ち、砂岩とチャートに比べると横に狭く縦に広い広がりを持ち、主に楕円礫(57.1%)・楕円扁平礫(34.6%) によって構成されている。片麻岩は a・b・f を除いた形態が存在する。主に楕円扁平礫(54.6%)・円扁平礫(30.8%) によって構成されている。安山岩は c を除いた全ての形態が存在する。その中で主に横軸値 1.0~0.5、縦軸値 1.0~2.0 に広がりを持ち、主に楕円礫が 64.3% を占め一つの形態が卓越している。

砂岩・泥岩は楕円礫と楕円扁平礫が多く、チャート・安山岩は楕円礫が多い。片麻岩は楕円扁平礫と円扁平礫が多く前4種の礫と形態を異にする。

図III-26 右上のグラフは岩質ごとの形態別重量を示した。砂岩の 55.7% は 0~20 g の範囲にある。また、楕円礫が 160 g 以上のものもあるのに対して、楕円扁平礫は 100 g 以下のものがほとんどである。円扁平礫はほとんどが 0~20 g の範囲にある。チャートも砂岩と同じ状況であり 0~20 g の範囲に 81.6% が入ってしまう。泥岩は砂岩と近い状況であるが 0~20 g の範囲に 87.8% が入ってしまう。また、棒状楕円礫は最大 500 g までの範囲まで広く分布している。片麻岩は 40~60 g の範囲にやや集中する傾向が見られる。楕円扁平礫と円扁平礫は同じ重量範囲のものが多い。安山岩は 64.3% が 0~20 g の範囲にあり、砂岩・チャート・泥岩のように極端な集中は見られない。

チャート・泥岩・砂岩は 0~20 g の範囲の重量が選択されている。とりわけ砂岩・チャートについては著しく偏って選択されている。いっぽう片麻岩はやや重い 40~60 g の範囲の重量が選択されている。

以上より形態と重量の関係は、砂岩・チャート・安山岩・片麻岩のように、代表的な形態が全重量に分散しているにもかかわらず特定の重量が選択されているものについては、選択の基準が重量にあること示している。泥岩の楕円礫・楕円扁平礫や砂岩・チャート・泥岩の円扁平礫については特定の形態が特定の重量範囲で選択されているので、どちらが選択の基準になっているのかは速断できない。

礫の円磨度は図III-26 右下の表に示した。砂岩は全体の 73.0% を円礫が占める。円礫と同じ形態の垂角礫も出土しており、円磨度の同異に関わらず形態は一樣である。泥岩も砂岩と同じ状況を示す。片麻岩は円礫が 80.1% を占め等しい円磨度で一樣な形態の礫が出土している。チャートは全体の 69.7%

が垂円礫を占める。垂円礫に見られた棒状礫と棒状楕円礫が円礫に見られない。砂岩や泥岩とは違い、円磨度が異なると形態も異なる。安山岩もチャートと同じ状況を示す。

円磨度の相違は礫の採取地点（例えば、河川の上流・中流・下流・海浜という単一の円磨状況が起こりうる地点）の相違でもある。砂岩・泥岩のように異なる採取地点で一様な形態が選択されるものや、チャート・安山岩のように異なる採取地点で異なる形態が選択されるものがある。そのいっぽうで、片麻岩のように同じ採取地点で一様な形態が選択されるものがある。

形態と重量と採取地点の関係をまとめるとつぎのとおりになる。チャート・安山岩は0～20gの重量が主に必要であったため、異なる採取地点で形態に関わらず選択された。片麻岩は40～60gの重量が主に必要であったため、同じ採取地点で一様な形態が選択された。砂岩は0～20gの重量が主に必要であったため、異なる採取地点で一様な形態が選択された。砂岩については形態が選択のさいになんらかの影響を及ぼしている可能性がある。泥岩は異なる採取地点で一様な形態が選択されているため、砂岩と同様に形態が選択のさいになんらかの影響を及ぼしている可能性がある。

礫の接合関係（図III-25・26、表III-3）

表III-3の見方は次のとおりである。「No.」は図III-25・26中の接合線の一端に付された番号に等しい。「破片数」は接合したものや同一個体の数を表す。「割面数」とは礫を接合しおえて残存している割面の数で、復元された礫が完形に近くなれば数は減少して行く。例えば完形個体の「割面数」は「0」となる。「打ち割りの順番」についてはつぎのとおりである。丸付きの番号は割った前後関係を表す。例えば「②」が付いた破片は2回目に打ち割ったさいに生み出されたことを示している。下付き番号は割面から観察した破片の数を示しており、「₁～₃」は3個の破片が生み出されたことを示している。番号の順番のきめかたは大きな破片を「₁」として、番号が多くなるにつれて破片は小さくなるようにした。なお下付き番号は割面から観察したもので実際に接合した数とは異なる場合がある。「打ち割りの順番」の欄をみただけでは、割った回数と各回数における破片の数しかわからない。そこで次に「出土地区」の欄には、検出された破片が各段階のどの破片と接合したのかわかるように接合関係を示した。カッコ内は破片の出土地区を示している。カッコ内の「+」は接合関係を表しカッコ外の「×」は同一地区における個体数を表す。波線のアンダーラインは被熱した個体を表す。「接合または最短距離」についてはつぎのとおりである。カッコ内の数字は同じ打ち割り回数における接合距離を表し、カッコのない数字は個体間の最短距離を表す。また異なる打ち割り回数における接合距離の合計や最短距離との合計には「+」を用いて示した。「時期」についてはノダップII式～煉瓦台式並行のトコロ6類を「北筒」と表記した。ノダップII式または煉瓦台式並行のトコロ6類については「北筒」という表記のあとにカッコ内に当該する並行型式を表記した。

岩質別の接合関係の特徴は次のとおりである。砂岩の接合資料は主に台地縁辺と斜面に多く見られる。12・14・15・16・19・22・23・27・28・29は台地の縁辺に沿って接合する。5・13・17・18・21・27は斜面の上下で接合する。4・6は台地上で東西方向に接合する。1・9は台地上で南北方向に接合する。焼けた礫の接合は台地の縁辺に沿って多く見られる。

チャートの接合資料は台地上にみられる。33・34は台地上で東西方向に接合する。凝灰岩の接合資料は台地上にみられる。流紋岩の接合資料は台地上と台地縁辺とを結んだ南北方向が多くみられる。

片麻岩の接合資料は、台地上の住居跡が密集する北東部と台地上と台地縁辺とを結んだ東西方向と多くみられる。83～85・87は北東部で接合する。81・82・86・88・90・92は台地上と台地縁辺とを結んで東西方向に接合する。

安山岩の接合資料は、台地上の住居跡が密集する北東部と台地上と台地縁辺とを結んだ東西方向と

に多くみられる。また、台地上のG₁64ライン付近の遺構の疎らな部分にも接合関係が見られる。101～108・112は北東部で接合する。106・113・114・124は台地上と台地縁辺とを結んだ東西方向に接合する。109・110・116・117台地上G₁64ライン付近の遺構の疎らな部分で接合する。

時期ごとの接合関係の特徴は次のとおりである。ノダップII式並行期の礫は、33・107・171が住居跡が密集する北東部と台地北半とで東西方向に接合する。2・18・82が北東部と台地北半とで南北方向に接合する。19・21・54・91・115が住居跡が密集する台地南東部の縁辺で接合する。2・6・31・51が北東部で接合する。76・77・87・90・109台地上G₁64ライン付近の遺構の疎らな部分で接合する。

煉瓦台式並行期の礫は、5・81・88・106は住居跡が密集する北東部と台地北半とで東西方向に接合する。83・108・112が北東部で接合する。

余市式期の礫は106・113は住居跡が密集する北東部と台地縁辺とで東西方向に接合する。12・28・115が台地の縁辺で接合する。84・103が北東部で接合する。

ノダップII式並行期においては、住居跡が密集する北東部内と台地南東部内でそれぞれ近距離の接合例が多く、住居跡の覆土と包含層(揚げ土)の例が多い。また2つの住居跡密集部の間で比較的遠距離の接合例が多い。煉瓦台式並行期においては、住居跡が密集する北東部内近距離の接合例が多く、住居跡の覆土と包含層の例が多い。また北東部と台地北半とで東西方向に遠距離の接合例が多い。

近距離の接合例の多くは住居の揚げ土がその周囲に捨てられるという土の移動によって生じた結果である。いっぽう、遠距離の接合例は同時期の遺構の周辺を目指して接合している。たとえば、ノダップII式並行期において住居跡が南北に長い分布を示すと接合関係も南北方向になり、煉瓦台式並行期において住居跡が東西に長い分布を示すと接合関係も東西方向になる。具体的な原因は不詳であるが土の移動によるものだとすれば、2・5・7・32・73・77・114のような例は、ある計画的な意図を持って連続的にしかも遠距離を動かされた土に偶然含まれていたことになるので、他の人為を考える必要が有る。

註

- 1) II黒層とTa-d₁の調査は1グリッドごとに包含層を3～5cmずつ掘り下げ、その掘り下げ回数ごとに遺物を取り上げた。そして、その取り上げ単位にはそれぞれ「II黒層1回目」、「II黒層2回目」……「Ta-d₁1回目」という呼称を与えた。なお、G₁63-00～40-01～06の範囲ではノダップII式期と煉瓦台式期の住居の掘り揚げ土が25～35cmの厚さで堆積している。これらはII黒層と分層して「揚げ土」という呼称を与えた。そして、その取り上げ単位にもそれぞれ「揚げ土1回目」と呼ぶことにした。G₁64-30～50-03～05の範囲についても「揚げ土」は分層を行った。

このようにして1グリッドの各掘り下げ回数ごとの土器と礫石器を検討し、全グリッドについてこれを行った。

引用・参考文献

- 佐原 真(1977)「石斧論」『考古論集 松崎寿和先生六十三歳記念論文集』
 佐原 真(1982)「石斧再論」『古文化論集(上) 森貞次郎博士古稀記念論文集』
 木村剛朗(1970・71)「縄文時代石器における機能上の実験(2)・(3)」『考古学ジャーナル 50・54』

(鈴木 信)

表III-4 掲載遺物一覽

土 器				図 番	名 称	発掘区	大きさ (cm)	重さ (g)	材質				
図 番	発掘区	層 位	点 数										
1	G ₁ -64-43	II黒 3	2	33	石槍またはナイフ	G ₁ -64-01	7.2×2.8×0.7	10.2	obs				
	" "	" 5	1	34	"	G ₁ -64-35	4.8×2.0×0.6	4.5	"				
	" "	d ₁ 直上	1	35	"	G ₁ -64-25	5.4×2.0×0.8	6.1	"				
	" 44	II黒 2	1	36	"	G ₂ -63-22	6.4×2.2×0.7	8.8	"				
	" "	" 3	3	37	"	G ₁ -63-23	7.9×3.0×0.8	13.2	"				
	" "	" 4	1	38	"	G ₁ -64-54	3.5×1.9×0.6	3.2	"				
	" "	" 4	1	39	"	G ₁ -64-43	3.6×2.2×0.6	3.9	"				
	" "	" 4	3	40	"	G ₂ -63-13	3.3×2.3×0.5	2.6	"				
	" "	d ₁ 直上	1	41	"	G ₁ -64-35	3.8×2.2×0.6	3.5	"				
	" "	"	"	"	42	"	G ₁ -64-35	4.5×2.3×0.6	4.6	"			
2	G ₂ -63-13	II黒 2	1	43	"	G ₂ -63-05	3.4×1.7×0.5	2.2	"				
	" "	" 3	1	44	"	G ₁ -64-80	3.8×1.9×0.8	4.0	"				
	" "	d ₁ 直上	1	45	"	G ₁ -64-45	4.4×2.1×0.6	3.7	"				
	" 15	II黒 3	2	46	"	G ₁ -63-97	4.5×2.7×0.5	4.1	"				
	" 23	" 3	1	47	"	G ₂ -64-70	6.1×2.4×0.6	7.2	"				
	" 24	" 3	2	48	"	G ₁ -64-35	6.1×2.5×0.8	10.5	"				
	" 33	" 3	1	49	"	G ₂ -63-33	4.6×1.5×0.6	3.5	"				
	" 33	木 根 跡	3	50	"	G ₂ -63-06	8.6×2.9×1.3	26.1	頁 岩				
	3	G ₁ -64-25	2	1	51	"	G ₁ -63-77	6.7×4.0×0.9	18.5	obs			
		" "	掘上土下	9	52	"	G ₁ -63-77	7.4×5.0×1.2	33.5	"			
" "		"	"	53	"	G ₁ -63-77	8.5×3.7×1.0	21.4	"				
4	H-18	覆土 上層	1	54	"	G ₁ -63-77	9.0×4.0×1.3	38.7	"				
	G ₁ -63-15	II黒 3	4	55	"	G ₁ -63-77	7.2×4.5×1.0	38.1	"				
	" 36	" 3	1										
礫 石 器													
図 番	名 称	発掘区	層 位	大きさ (mm)	重さ (g)	材質	図 番	名 称	発掘区	層 位	大きさ (mm)	重さ (g)	材質
1	石 鏃	G ₂ -63-15	IIB-1	(45.0)×23.0×55.0	(7.6)	Gr-Sch	1	石 斧	G ₁ 63-94	IIB-1	(45.0)×23.0×55.0	(7.6)	Gr-Sch
2	"	G ₂ -63-12	IIB-2	(61.1)×18.9×10.0	(19.2)	"	2	"	95	IIB-2	(61.1)×18.9×10.0	(19.2)	"
3	"	G ₁ -64-53	d ₁	(75.9)×32.2×14.5	(59.8)	Sch	3	"	G ₁ 64-70	d ₁	(75.9)×32.2×14.5	(59.8)	Sch
4	"	G ₂ -64-64	IIB-2	161.0×65.0×29.0	455.0	Gr-Mud	4	"	G ₂ 64-41	IIB-2	161.0×65.0×29.0	455.0	Gr-Mud
5	"	G ₁ -64-23	IIB-1	(92.5)×49.0×27.0	(198.8)	"	5	"	G ₂ 63-60	IIB-1	(92.5)×49.0×27.0	(198.8)	"
6	"	G ₁ -64-25	IIB-3	(69.0)×61.0×23.0	(143.1)	"	6	"	G ₁ 63-97	IIB-3	(69.0)×61.0×23.0	(143.1)	"
7	石槍またはナイフ	G ₁ -64-62	IIB-1	(84.0)×47.0×17.0	(115.8)	Sch	7	"	G ₂ 63-06	IIB-1	(84.0)×47.0×17.0	(115.8)	Sch
8	"	G ₁ -64-34	" 1	(71.4)×49.3×19.0	(168)	"	8	"	G ₂ 63-39	" 1	(71.4)×49.3×19.0	(168)	"
9	"	G ₂ -63-25	IIB-4	(52.0)×27.5×7.5	(20.9)	"	9	"	G ₁ 64-70	IIB-4	(52.0)×27.5×7.5	(20.9)	"
10	"	G ₁ -63-96	IIB-3	(57.9)×31.0×11.4	(29.0)	Gr-Mud	10	"	G ₁ 63-94	IIB-3	(57.9)×31.0×11.4	(29.0)	Gr-Mud
11	"	G ₂ -63-17	d ₁	102.1×29.0×10.9	46.6	Sch	11	"	G ₁ 64-21	d ₁	102.1×29.0×10.9	46.6	Sch
12	"	G ₂ -63-34	IIB-1	(131.5)×23.0×13.5	(62.6)	"	12	"	G ₂ 63-46	IIB-1	(131.5)×23.0×13.5	(62.6)	"
13	"	G ₁ -63-96	d ₁	(102.0)×47.0×26.0	(106.5)	Gr-Mud	13	"	" -73	d ₁	(102.0)×47.0×26.0	(106.5)	Gr-Mud
14	"	G ₂ -63-37	IIB-2	168.2×51.0×33.0	475.6	Sch	14	"	G ₂ 64-43	IIB-2	168.2×51.0×33.0	475.6	Sch
15	"	G ₂ -63-44	IIB d ₁ 直上	(64.0)×33.0×7.0	(27.1)	Gr-Mud	15	"	" 25	IIB d ₁ 直上	(64.0)×33.0×7.0	(27.1)	Gr-Mud
16	"	G ₂ -63-13	IIB-7	101.0×35.0×13.5	75.5	Gr-Sch	16	"	G ₂ 64-65	IIB-7	101.0×35.0×13.5	75.5	Gr-Sch
17	"	G ₁ -63-25	" 4	96.0×43.0×16.0	98.9	Gr-Mud	17	"	H ₁ 62-06	" 4	96.0×43.0×16.0	98.9	Gr-Mud
18	"	G ₁ -63-79	" 3	97.2×36.4×12.4	72.6	Sch	18	"	G ₁ 64-13	" 3	97.2×36.4×12.4	72.6	Sch
19	"	G ₁ -63-79	" 4	90.0×36.5×10.0	58.0	Gr-Mud	19	"	" 70	" 4	90.0×36.5×10.0	58.0	Gr-Mud
20	"	G ₁ -63-69	" 2	85.0×35.0×13.0	63.9	"	20	"	G ₁ 63-88	" 2	85.0×35.0×13.0	63.9	"
21	"	G ₂ -63-22	" 4	92.0×39.0×12.0	75.0	"	21	"	G ₁ 64-71	" 4	92.0×39.0×12.0	75.0	"
22	"	G ₂ -64-71	" 3	(62.5)×33.9×12.3	(63.0)	"	22	"	G ₁ 63-07	" 3	(62.5)×33.9×12.3	(63.0)	"
23	"	G ₂ -63-02	" 2	89.0×45.0×13.0	69.5	"	23	"	G ₁ 64-43	" 2	89.0×45.0×13.0	69.5	"
24	"	G ₂ -63-06	" 2	67.4×38.7×8.0	31.2	Sch	24	"	" "	" 2	67.4×38.7×8.0	31.2	Sch
25	"	G ₂ -63-26	IIB 上 面	81.0×38.5×70.0	28.6	Gr-Mud	25	"	G ₂ 63-07	IIB 上 面	81.0×38.5×70.0	28.6	Gr-Mud
26	"	G ₂ -63-03	IIB-3	(78.0)×39.5×14.0	(75.8)	"	26	"	G ₁ 64-24	IIB-3	(78.0)×39.5×14.0	(75.8)	"
27	"	G ₂ -63-33	IIB	69.0×31.0×8.0	24.0	"	27	石 斧 石 製	G ₁ 64-61	IIB	69.0×31.0×8.0	24.0	"
28	"	G ₂ -63-15	"	142.0×61.0×27.0	310.0	"	28	"	G ₂ 64-40	"	142.0×61.0×27.0	310.0	"
29	"	G ₂ -63-56	IIB-3	93.0×44.5×11.0	42.5	"	29	"	" 71	IIB-3	93.0×44.5×11.0	42.5	"
30	"	G ₁ -63-25	" "	99.0×45.0×13.0	90.0	"	30	"	G ₁ 64-70	" "	99.0×45.0×13.0	90.0	"
31	"	G ₁ -64-53	" 2	92.0×60.0×14.0	164.3	"	31	"	G ₂ 63-45	" 2	92.0×60.0×14.0	164.3	"

III 美々3遺跡第II黒色土層の調査 (平成2年度)

図番	名称	発掘区	層位	大きさ(mm)	重さ(g)	材質	図番	名称	発掘区	層位	大きさ(mm)	重さ(g)	材質
32	石製 斧製品	H,63-10	II B-1	158.0×54.0×41.0	503.0	Gr-Mud	67	"	G,63-97	"	79.0×50.5×27.0	150.0	Gv-Mud
	"	" 22	" "				68	"	G,64-31	II B-3	189.0×58.0×41.0	526.5	
33	"	G,63-99	" 2	155.0×56.9×23.0	339.0	"		"	H-13	覆土			
34	"	G,63-79-(2)	II B-4	212.0×57.3×33.5	597.0	Gr-Mud	69	"	G,63-61	II B	171.5×62.0×47.8	676.7	
35	"	G,64-64	II B-2	190.0×53.0×55.0	630.0	"		"	G,63-59	II B-上			
	"	G,63-39	" "				70	たたき石	" 98	II B-2	55.9×48.0×38.0	170.0	Per
36	"	G,63-34	d ₁		660.0	"	71	"	" 65	d ₁	51.2×48.2×32.0	119.0	"
37	"	H-4	覆土	123.1×(104.7)×21.9	(357.4)	"	72	"	G,64-61	II B-4	49.9×45.9×36.2	146.0	Sa
	"	G,63-11	II B-1				73	"	" 62	" "	65.9×58.0×49.8	284.9	Per
	"	" 21-(3)	" "					"	" 63	" "			
38	"	G,62-39-(6)	" 3	(152.7)×92.4×30.3	(378.2)	"	74	"	G,63-79	d ₁	73.4×67.6×51.0	379.0	"
	"	G,63-19	" "				75	"	" 82	II B-5	99.4×92.8×31.9	485.5	Gni
	"	" 42	" "				76	"	G,64-64	II B-4	153.0×77.0×25.0	479.6	Sa
	"	" 61	" "					"	G,64-73	"			
	"	G,64-42	" "				77	"	G,63-26	II B-1	135.0×71.0×33.0	425.0	"
39	未製品の 再生品	H-4	覆土	(216.5)×56.4×26.2	(388.3)	"		"	" 36	II B			
	"	G,63-23	II B-2				78	"	" 37	II B-2	162.9×97.9×35.6	700.0	"
	"	" 33	" "					"	G,64-31	" "			
40	"	H-5	覆土	183.5×59.1×44.0		"	79	"	H,63-24-(2)	風倒	166.5×65.0×61.0	885.0	"
	"	H-6	"				80	"	G,64-34	II B-3	(116.8)×70.0×52.1	(399.4)	"
	"	G,63-01	II B-3					"	G,64-30	"			
	"	" 33	"					"	G,63-07	II B-2			
	"	G,64-23	"					"	" 24	"			
41	"	H-5-(7)	覆土			"	81	"	G,63-57-(2)	II B II B-1	175.0×80.0×42.0	830.0	Gmi
42	"	H-19	"			"		"	G,64-04	II B-3			
	"	G,63-24	II B-3				82	"	G,63-72	"	162.8×(68.5)×45.9	(500.6)	Sa
	"	G,63-80	"					"	" 13	"			
43	石製 斧製品	H-19	覆土	147.0×54.5×17.4	199.7	Gr-Sch	83	"	G,64-15	II B-2	126.5×49.0×29.0	501.0	Che
	"	G,63-22	II B-3					"	" 82	" "			
	"	" 14	"					"	" 60	" "			
	"	" 33	"				84	"	G,63-35-110	II B-3	122.9×51.2×37.3	306.0	Sa
44	"	" 79	"	122.6×49.4×16.3	97.7	"	85	"	G,64-74	II B-2	169.1×64.6×17.1	307.0	"
	"	G,64-90	"				86	"	G,63-16	II B-1	166.6×75.0×19.4	338.8	"
45	"	G,63-28	"	138.8×66.5×20.3	283.1	Gr-Mud		"	18-(3)	"			
	"	G,64-04-②	"			"		"	15	"			
46	石製 斧製品	G,64-53	d ₁ 直上	51.0×41.0×8.5	33.8	"		"	G,64-25	II B-3			
47	"	" 62	II B-3	62.9×44.5×8.0	33.7	Gr-Sch		"	G,64-61	"			
48	"	G,64-70	II B-4	91.0×40.5×14.0	59.0	Gr-Mud	87	くぼみ石	" -52	II B-2	82.0×60.5×31.9	235.0	"
49	"	G,63-06	"	69.5×26.2×9.0	24.8	Sch		"	" 43	" "			
50	"	" 55	"	137.0×55.0×29.0	320.4	Gr-Mud	88	すり石	G,63-38	" "	84.2×36.8×22.0	84.5	Tu
51	"	G,64-64	"	100.0×33.1×14.0	64.6	Sch		"	" 16	" "			
52	"	G,64-43	"	124.0×45.0×14.0	122.0	"	89	"	G,63-06	II B-2	81.9×31.1×26.0	85.5	Rhy
53	"	G,63-36	"	155.2×53.0×29.4	366.0	Gr-Mud		"	G,64-73	" "			
	"	" 35	"				90	"	" 02	II B-3	73.0×35.0×25.0	90.0	"
54	"	G,64-20	"	11.5×51.0×22.4	201.5	"	91	"	G,64-41	" "	74.0×31.0×29.8	82.9	"
55	"	G,63-31	揚上土面	120.5×55.8×27.4	69.5	"	92	"	G,63-12-(2)	" 2	80.0×30.0×15.0	50.0	"
56	未製品の 再生品	" 23	II B-3	133.0×39.0×22.0	139.5	Gv-Sch		"	G,63-55	II B-3			
	"	" 26	II B-上			"	93	"	" 48	II B-1	71.0×43.8×33.8	125.3	"
57	"	G,63-15	II B-4	198.0×65.4×24.6	415.6	Gr-Mud	94	"	G,63-88	" 2	71.3×32.5×41.7	115.4	"
	"	G,64-21	"			"	95	"	" 92	II B-3	94.5×38.0×23.0	125.0	"
58	石製 斧製品	G,63-05	II B-3	41.0×13.7×4.8	4.0	Sch		"	G,63-16	"			
59	"	G,64-55	"	42.6×10.0×4.2	2.1	"	96	"	G,64-40	II B-2	(42.6)×13.1×43.5	(28.1)	Tu
60	"	G,63-33	"	40.1×10.9×7.5	3.8	"	97	"	" 3	"	10.0	(20.0)	"
61	"	G,64-63	"	53.3×25.3×5.9	12.8	"	98	"	G,63-15-(2)	II B-1 II B	(56.6)×9.7×(30.5)	(18.1)	Sa
62	"	" 82	"	59.0×19.5×4.2	5.9	"	99	砥石	G,63-23	II B	(132.0)×66.0×61.0	(525.0)	"
63	"	G,63-78	II B-4	63.0×21.8×6.5	70.2	"		"	G,64-50	II B-杭			
	"	" 97	"				100	"	G,63-79-(2)	II B II B-4	(105.0)×53.7×50.6	(298.4)	"
64	"	" 43	"	35.7×15.1×4.3	24.6	"		"	G,63-02	揚上土面			
	"	" 31	"				101	"	H,63-14-(3)	II B-2	(79.8)×57.2×34.8	(95.8)	"
	"	" 96	"				102	"	G,64-62-(2)	II B-3	(84.0)×55.6×25.0	(127.9)	"
65	石製 斧製品	G,64-25	II B-3	82.0×43.0×18.0	81.7	Mud		"	" 71	"			
66	"	G,64-45	"	89.5×42.0×15.6	100.0	Gr-Mud	103	台石	" 21	"	—×—×58.9	(151.8)	And
	"	" 44	"					"	G,63-14	"			
	"	" 43	"					"					

2 成果と問題点

(1) 美々3 遺跡における盛土の形成と時期について

はじめに

平成2年度の調査では、Ta-c 火山灰除去後、G₁63 区北東部の台地上で広範囲に微高地が認められ、そこから台地の縁にかけて浅い窪地が広がっていた。窪地の部分はII黒層が薄く、上部には縄文時代晩期のV群b類土器が焼土を伴って分布していた。微高地ではII黒層が厚く、北筒式土器の時期の遺物が多量に出土した。この微高地は、隣接する美々4 遺跡で構成され、人為的に形成されたと報告されている「マウンド」（北埋調報 24）に類似しており、美々3 遺跡においても大規模な土の移動が推測された（北埋調報 69）。

その後、資料を検討した結果、II黒層の厚さや遺物の分布から、北筒式土器の時期に大規模な土の移動があったことがわかったので概要を報告するものである。

盛土の認定

II黒層上面の地形図を分析したところ、当初から知られていたG₁63 区の微高地や浅い窪地のほかに、台地の縁にも帯状に延びる微高地が認められた。微高地は窪地を囲むように分布し、美々4 遺跡のマウンドに連なるように延びていた（図III-27）。

II黒層上面とTa-d₂ 層上面の標高からII黒層の厚さを算出したところ^{註1)}窪地では25 cm 未満、部分的に20 cm 未満、その周囲の微高地では30 cm 以上、部分的に50 cm 以上を越えるところもあった。これを「等厚線」で表わすと厚さ25 cm 未満の区域が20 m×50 m の範囲で北西から南東に延び、その周囲には厚さ30 cm 以上の区域が20 m～30 m の幅で認められた（図III-28）。

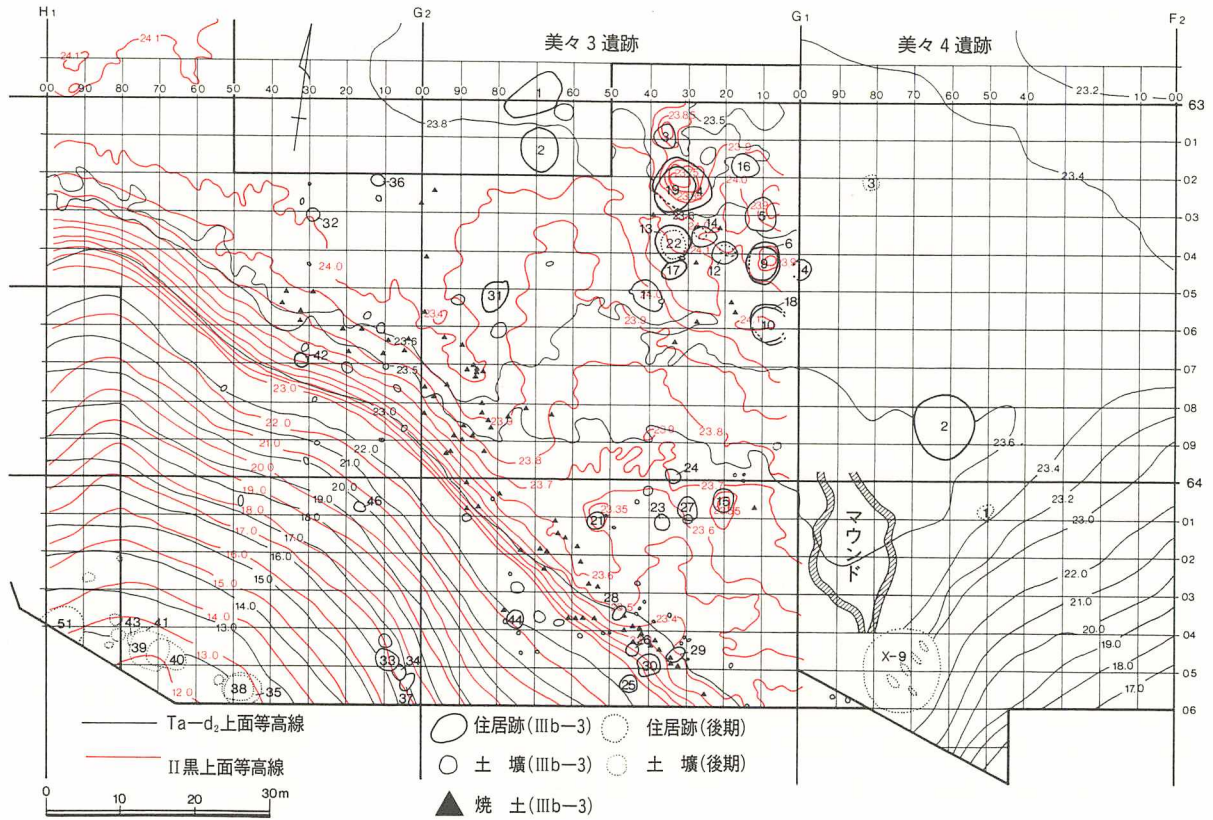
微高地では、II黒層4回目^{註2)}5回目、Ta-d₁ 層直上といったII黒層の下部で北筒式土器の時期の焼土群やフレイク・チップ集中が検出され、この時期の主要な生活面を形成している。また、微高地には北筒式土器の時期の遺物が集中しており、G₁63-87、G₁63-88、G₁63-97 区のように焼土等の検出面より上位に遺物出土量のピークがある（表III-6・7・8）。復元土器2・6をみると、焼土の検出面より上位から出土したものが窪地をはさんで接合しており（表III-5）、生活面より上位から出土した遺物が大きく動いていることを示している。

これらのことから、生活面を覆って微高地を形成するほどの遺物の移動、すなわち、土の移動が想定される。台地上ではTa-d₂ 層上面の地形がほぼ平坦であること、II黒層中では水成層等の自然作用による土層が認められないことから、微高地や窪地は人為的に形成されたとみなされる。美々4 遺跡のマウンドは位置から判断して、この人為的な微高地の一部を構成するものと考えられる。土の移動の影響が少ないH₁62、H₁63 区の台地上では25 cm 前後の厚さでII黒層が分布しており、これを基準にすると厚さ30 cm 以上の微高地は盛土区域、25 cm 未満の窪地は土取り区域と考えてよいだろう。

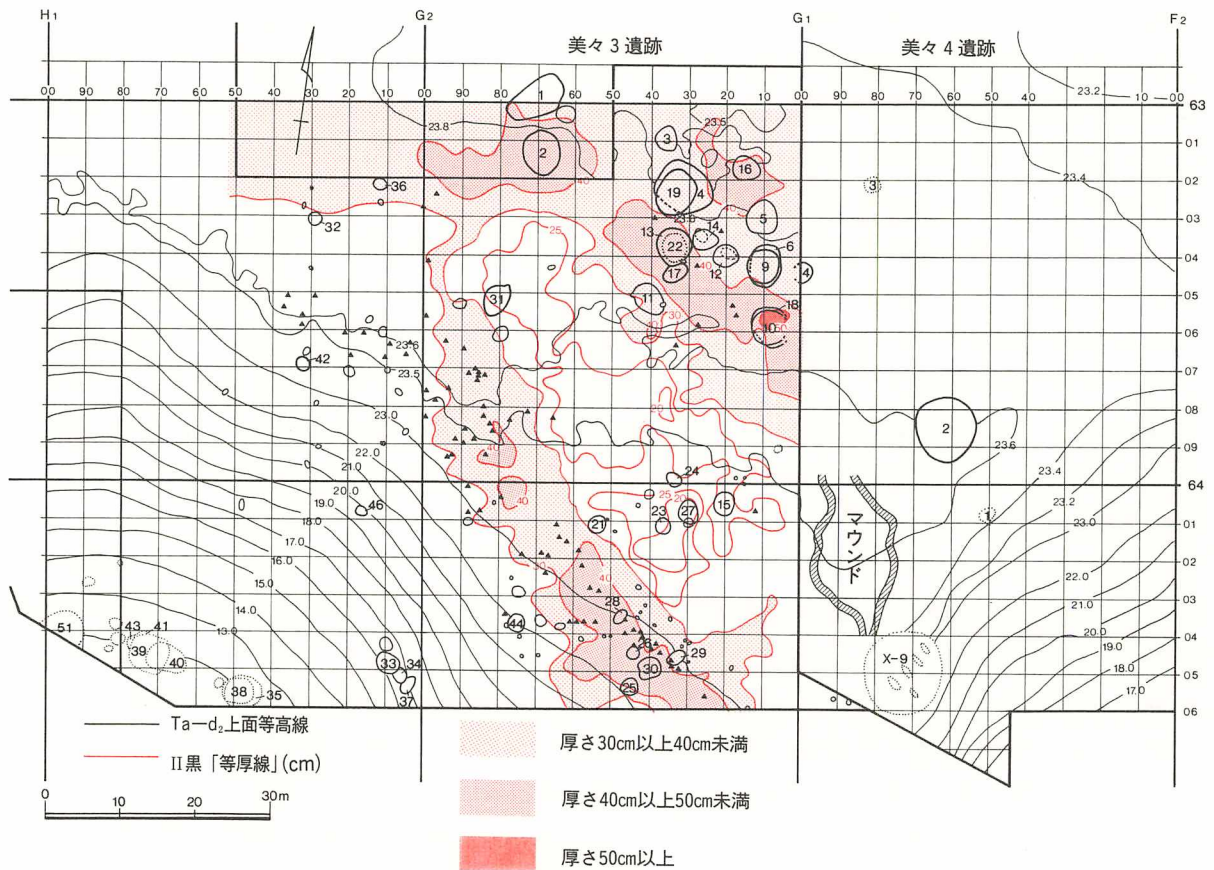
盛土形成の時期

人為的な盛土と認められた微高地を分布範囲から便宜的に二者にわけ、窪地の北東側に位置するものを「盛土A」、窪地南西側の台地の縁に位置するものを「盛土B」と記載し、遺構・遺物との関係から盛土の形成時期をみていく。

盛土AではH-1・2・3・19・5・6-9・11・13-22・14・17など北筒式土器の時期の遺構がまとまって検出されている。これらの遺構のうちH-1・3・4-19・5・6-9はII黒層上面で窪んでいたもので、（図III-27）、II黒層上部から掘り込まれていることや堅穴埋没後に盛土された形跡がないことから、盛土を切って構築されたと判断される。H-2・11・13-22・14・17は隣接する遺構の掘り上げによって埋められているので明瞭な窪みを残していないが、掘り込み面からTa-d₂ 層まで30 cm 以上の厚さがあり、



図III-27 II黒層上面の地形



図III-28 盛土の分布

先の基準に従えば盛土形成後に構築されたと考えられる。また、盛土 A ではII黒層下部に北筒式土器の時期の焼土があり、盛土に覆われている。

盛土 B の分布区域ではII黒層の下部で北筒式土器の時期の焼土群が検出され、この時期の生活面が盛土で覆われている。

したがって、盛土は北筒式土器の時期に形成されたことが明らかである。後述するように、遺物の分布から判断すると、それは煉瓦台式土器に並行する時期と考えられる。

遺構の変遷と土器の新旧関係について

まず、遺構の変遷について主に盛土との切り合い関係からみていく。

大地の奥の盛土 A に分布する住居跡は長径 3~6 m 以上の卵形プランを呈するものが主体であり、床面にはしっかりとした炉をもち、この時期の道南系の堅穴の特色を示すものである。盛土 A では住居跡の多くが盛土を切って構築されている。

G₁-64 区の台地の縁の盛土 B から土取り区域の窪地にかけては、H-15・21・23・25~30 等、径 2~3 m 前後の小堅穴が分布する小堅穴には床面に焼土をもつものはない。

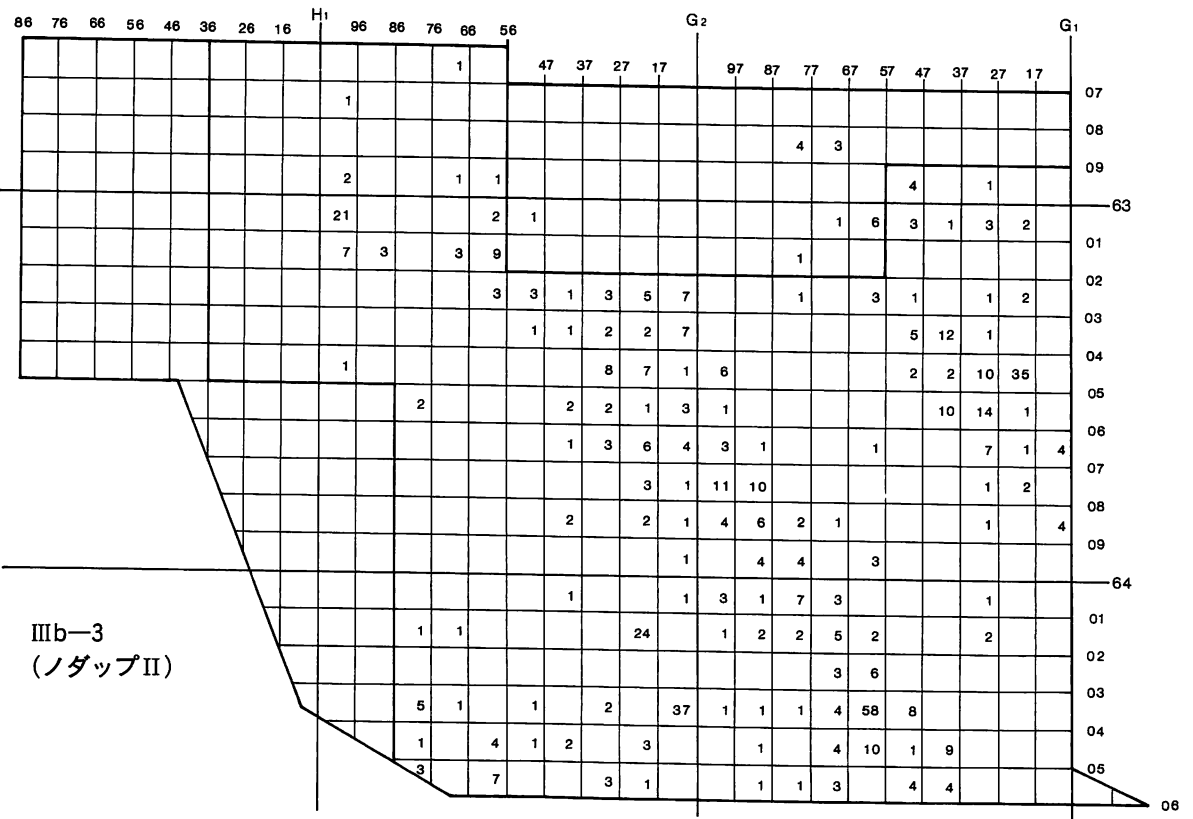
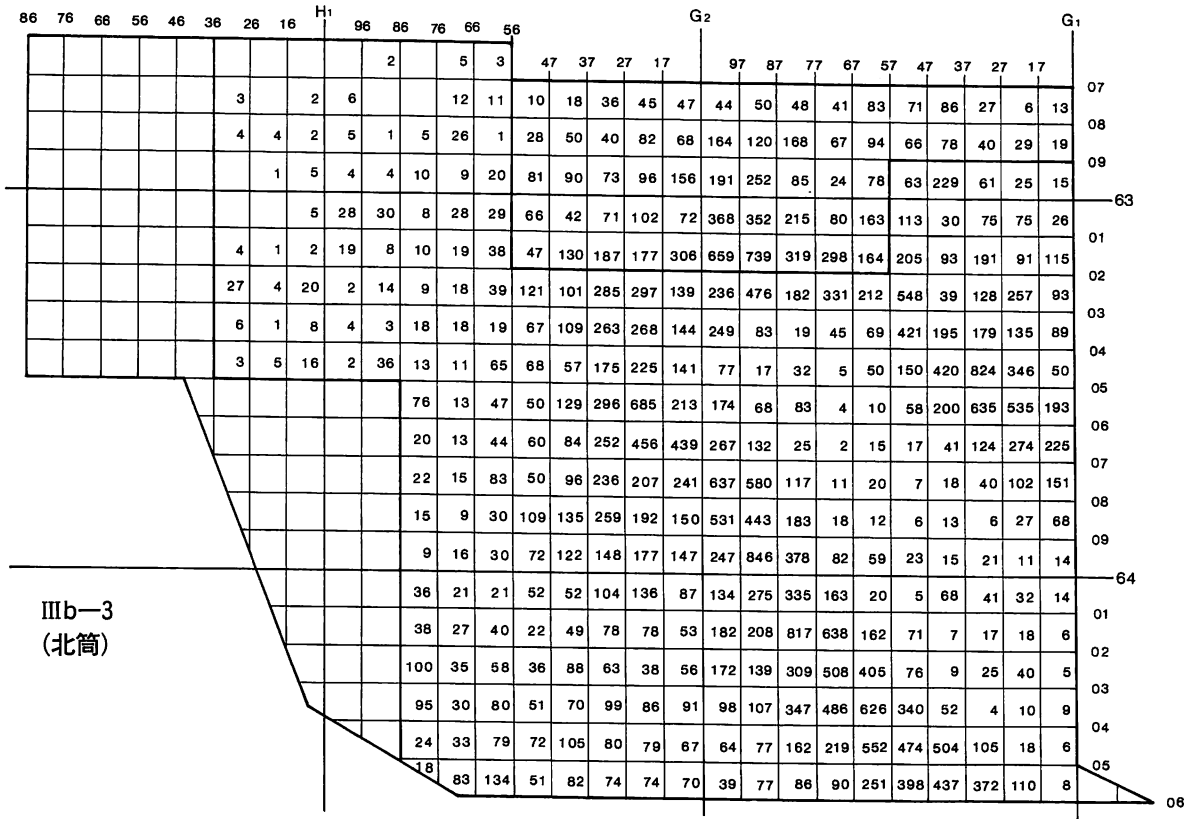
盛土 B にある H-25・26・28・29・30 は、盛土 A の住居跡のようにII黒層上面で窪んでいたものはない。H-29 はII黒層下部で検出されたものである。覆土中には盛土 B に分布する焼土群の一部である F-46・47・48 があり、盛土に覆われていることが明らかである。H-28 もII黒層下部で検出されたものであり、盛土に覆われていると考えられる。H-25・26・30 は一連の焼土群の検出面より上位から掘り込まれた遺構であるが、掘り込み面と推定される面から Ta-d₂ 層上面までの土の厚さは 30 cm 以下である。この区域ではII黒層の厚さが 40 cm 以上あるので、なお 10 cm 以上の厚さの土に覆われていると考えられる。

窪地には H-15・21・23・24・27 がある。窪地は土取り区域と考えられ、北筒式土器の時期の遺構が少ない区域であるにもかかわらず(図III-29・30)、H-23^{註3)} では覆土からこの時期の遺物が多く出土している。このことは、土取りの際、遺物が遺構の窪みに入りこんだか、あるいは土取り以前に埋まっていたことを示すと考えられる。H-24・27 は Ta-d₁ 層近くで検出されたものであり、ある程度埋没した後には削平されたのであろう。H-15・^{註4)} 21 はII黒層上面でやや窪んだ状態で検出されたものであり(図III-27)、土の移動後に構築されたようにみえるが、前後関係は判断できなかった。

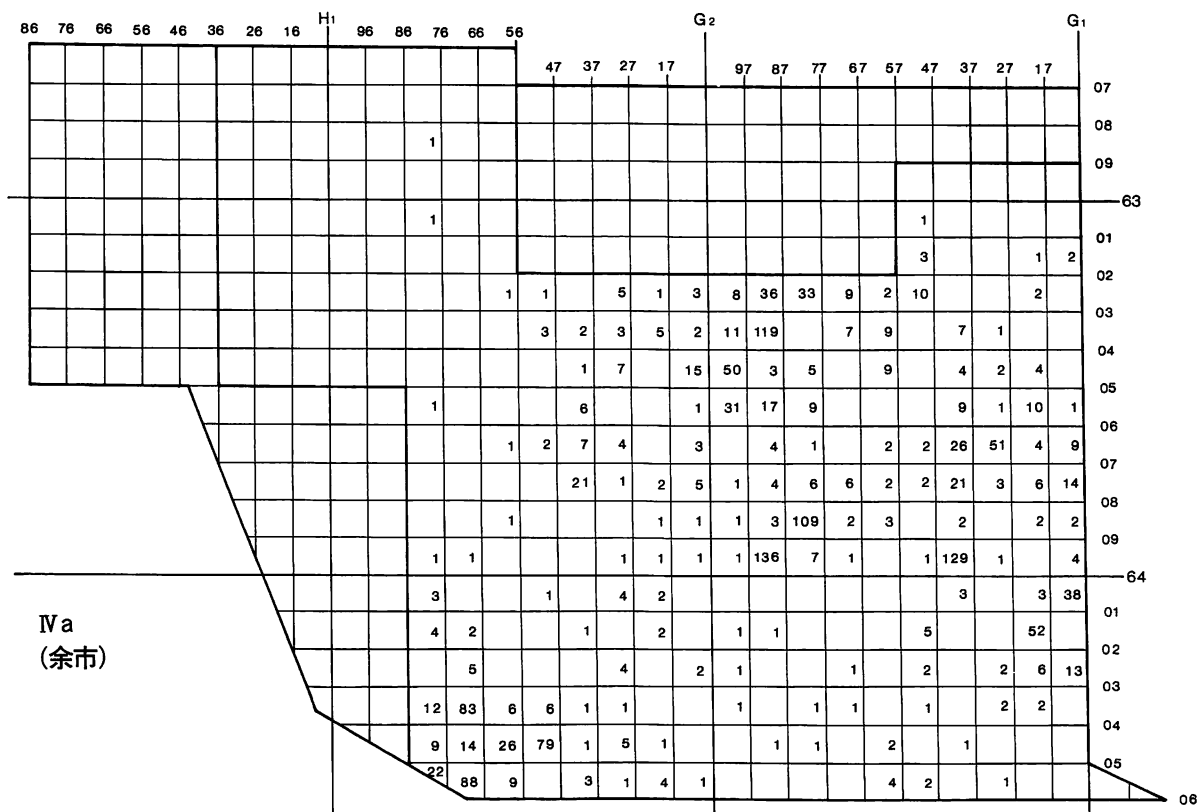
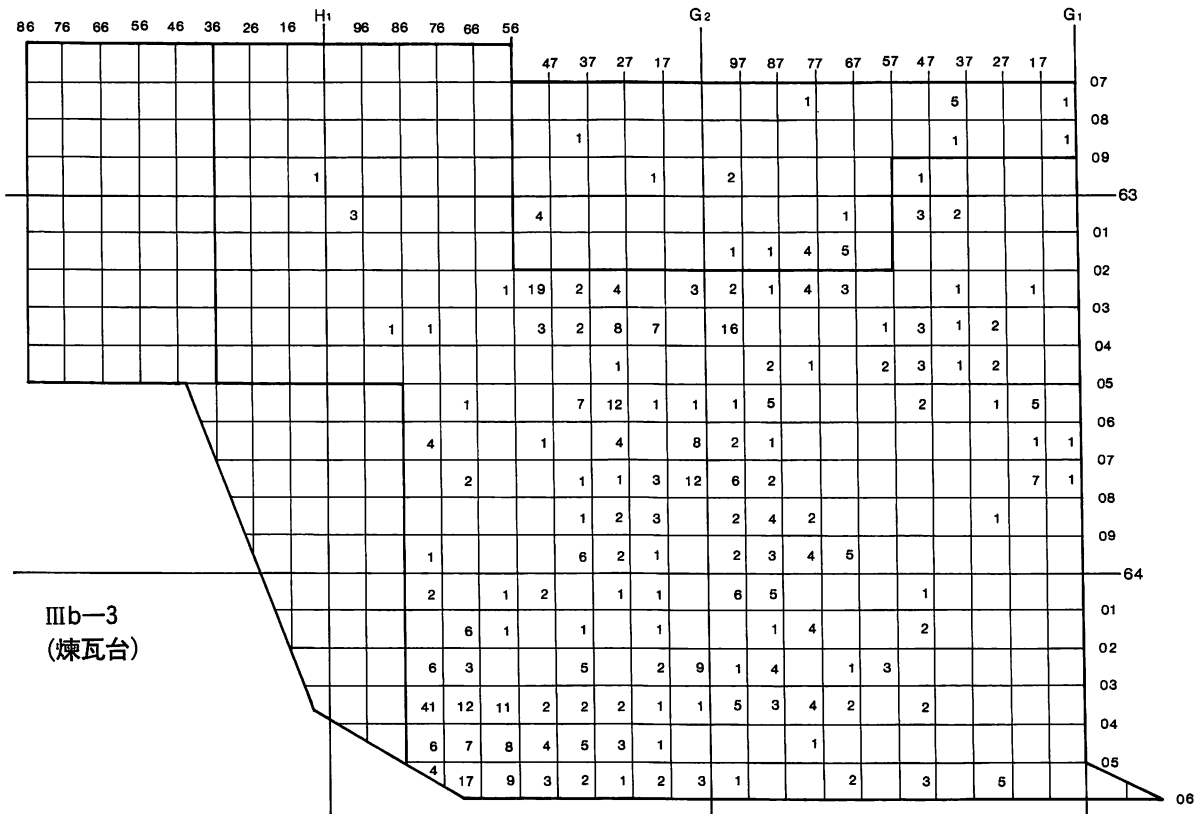
以上のことから、台地の縁に分布する小堅穴の多くは盛土形成前につくられたものであり、台地の奥の盛土 A を切って構築されている住居跡より古いと考えられる。美々3 遺跡においては、台地の縁に焼土群や小堅穴が分布する時期があり、その後、土の移動に伴って盛土が形成され、台地の奥に道南系の堅穴住居が構築されたという変遷が想定される。

次に、土器の編年関係について、遺物の分布からみていく。ここで取り上げるのは北筒式、ノダップII式(松下編 1974)に近縁のもの、煉瓦台式(大場、蛸子 1965)に近縁のもの、余市式^{註5)}の四者である。北筒式土器は盛土区域に集中し、ノダップII式や煉瓦台式に近縁の資料もほぼ同様の傾向を示している(図III-29・30)。余市式土器は盛土区域にも土取り区域にも分布することから、土の移動後に廃棄されたことが明らかである(図III-30)。このことから、盛土区域に集中する遺物は盛土形成時に移動したもの、土取り区域やその周囲に分布する遺物は盛土形成後のものという前後関係が推定される。この観点からノダップII式と煉瓦台式に近縁の資料について分布を検討しよう。ノダップII式に近縁の土器の分布はほぼ盛土区域に限定されている。復元土器1(表III-5)や平成3年度調査区でも出土した資料(図II-35-23)のように盛土 A、盛土 B から出土したものが接合しており(表II-11)、上記の分布状態と考え合せると、土の移動に伴って盛土 A、B にわかれているのが明らかである。こ

III 美々3 遺跡第II黒色土層の調査 (平成2年度)



図III-29 遺物出土分布(1) (点数)



図III-30 遺物出土分布(2) (点数)

れに比べて、煉瓦台式に近縁のものはやや拡散した分布傾向を示しており(図III-30)、G₁63区から出土した資料の垂直分布をみると、煉瓦台式に近縁の土器のほうが上位に出土量のピークがある(表III-9)。煉瓦台式に近縁の土器には、復元土器9(表III-5)のように主にII黒層上面やII黒層の上部で出土し、土の移動に伴って分散した土器とは異なる分布傾向を示すものがある一方、盛土AにあるH-13の掘り上げ土の下位から出土したものもあり(表III-9)、盛土形成時に移動したものと、盛土形成後に廃棄されたものの二者があると考えられる。このことから、煉瓦台式に近縁の土器はノダップII式に近縁の土器よりも後出のものであるといえよう。

このように、遺物の分布から、ノダップII式や煉瓦台式に近縁の土器は北筒式土器にほぼ並行し^{註6)}余市式よりも古く位置付けられること、ノダップII式に近縁のものは煉瓦台式に近縁のものより古いことがいえる。

また、これまでみてきたところから、盛土形成以前に構築された小堅穴に伴ったり、盛土形成時に移動した北筒式土器は、盛土Aを切っている遺構に伴うものよりも古いということが明らかである^{註7)}古いほうの北筒式土器は主にノダップII式に並行し、一部煉瓦台式におよぶものがあるとみなされ、盛土Aを切っている遺構に伴う北筒式は煉瓦台式に並行すると考えることができる。昨年度報告した資料のうち、たとえば復元土器2・6(表III-5)、H-23(図III-59-7)、H-29(図III-75-1)から出土したものは、出土状態からみて美々3遺跡における古いグループの北筒式土器と考えられる。盛土Aを切っている遺構に伴う良好な資料は少ないけれども^{註8)}煉瓦台式に並行する可能性が高いものとしてはH-19の床面から出土した土器(北埋調報69)があげられよう。このほか、盛土Bから出土した資料の大部分は盛土形成時に移動したものと考えられる。(表III-10)。

まとめ

以上のとおり、美々3遺跡においては北筒式土器の時期、それも煉瓦台式土器に並行する時期に大規模な土の移動に伴う盛土が形成され、美々4遺跡のマウンドと一連のものであることを述べた。

これに関連して、遺構については焼土群や小堅穴から道南系の卵形プランの堅穴住居へと変遷し、生活の場が台地の縁から台地の奥へ移動したことが想定された。前者は主にノダップII式に並行する時期、後者は煉瓦台式に並行する時期である。土器の編年については、遺物の分布から、北筒式、ノダップII式に近縁のもの、煉瓦台式に近縁のもの、余市式の関係が推定され、従来の編年観(大沼1981)を補強する結果となった。また、北筒式土器についてはノダップII式に並行するものと煉瓦台式に並行する可能性のあるものを例示した。これらの事柄については、他の遺跡との比較を含めてさらに検討を要するものである。今後の課題としたい。

盛土形成の意義については触れることができなかったけれども、生活空間の移動と遺構の変遷から考えると、土の移動によってそれまでの生活面を覆い尽くしたり、削平したりすることは一種の破壊行為とみなされ、土の移動の前後では大きな断絶があったと考えざるを得ない。

(工藤 研治)

註

- 1) Ta-d₂層上面の地形をみるとG₁63、G₁64区の台地上にはほぼ平坦な面が広がっていること、II黒層上面はTa-c火山灰に厚く覆われて後世の攪乱が認められないことから、微高地や窪地はII黒層で形成された地形と考えられる。したがって、これらの地形の変化はII黒層の厚さの違いで表わすことができる。II黒層上面とTa-d₂層上面の標高差から得られる数値はTa-d₁層の分も含むものであるが、ここでは便宜的にII黒層の厚さとして使用する。
- 2) II黒層の調査に当たっては、調査区ごとに3cm～5cmずつ掘り下げ、遺構の検出面や遺物が出土した面をII黒1回目、2回目、3回目、……Ta-d₁直上と区分している。
- 3) H-23の床面と覆土から北筒式土器が66点、ノダップII式に近縁の土器が55点出土している。昨年度報告した遺物点数(表III-18 北埋調報69)と異なるが、遺物台帳からあらためて集計したものである。

- 4) 復元土器2はH-15床面近くの覆土5層から出土したものとH-2掘り上げ土の上位、下位、H-4あるいはH-19掘り上げ土の下位及び盛土A、盛土B等から出土したものが接合しており(表II-5)、盛土形成時に移動した土器とみなされる。復元土器2が仮にH-15に伴うものであれば、H-15は少なくとも盛土Aに位置するH-2やH-4あるいはH-19よりも古く考えられる。
- 5) 台地上から出土した余市式土器は、昨年度の報告書に掲載されているように口縁部と体部に薄い貼付帯が施されるものである(図III-167-10~12 北埋調報69)。
- 6) 登別市千歳4遺跡では、5号住居跡床面近くで北筒式土器とノダップII式が共伴するとみなされる状態で出土している(北埋調報1)。
- 7) 盛土Aを切っている遺構のうち、H-13については、床面からやや上位で検出された炉跡に使用されていた土器(図III-35-49 北埋調報69)からノダップII式の頃と想定していた。しかし、この土器は盛土Bから出土したものと同一個体であり(図III-164-456 北埋調報69)、土の移動に伴って分散した土器と考えられるので、H-13の時期を表わすものではない。
- 8) 盛土Aのように盛土を切って遺構が構築されている場合、覆土中には古い時期の遺物構が多数混入すると考えられる。H-13のように遺物が再利用されることもあり、遺構出土の資料を扱うに当たっては、慎重に吟味する必要がある。

表III-5 復元土器一覽

IIIb-3 (北埋調報69 掲載分)

番号	図番	発掘区	層位	点数	番号	図番	発掘区	層位	点数	番号	図番	発掘区	層位	点数	
1	図III 149-1	G ₁ -63-12	II黒	2	図III 149-5	G ₂ -62-57	II里	1	6	図III 149-7	G ₁ -64-71		4	2	
		-14	"	2		-58	" 上面	1			G ₂ -63-16		4	1	
		-14	"	3		-68	"	3			27		3	1	
		-14	"	4		-78	"	1			35		1	1	
		-14	風倒 No.1	7		G ₂ -63-36	"	2			G ₂ -64-00		3	3	
		-14	No.2	24		-40	"	1							
		-40	掘上土下	1		-42	"	1							
		G ₁ -64-52	II黒	2		-42	"	2							
		G ₁ -63-22	"	2		-43	" 上面	1							
						-43	"	1							
2	図III 149-2	P-7	覆土	1	5	-43	"	2	8	図III 165-479	H-2	覆土3,4一括	1		
		H-2	"	5		-49	" 上面	1			"	" 4一括	1		
		"	覆土	3		-50	"	1			G ₁ -62-99	II黒、上面	1		
		H-15	覆土	5		-52	" 上面	2			G ₁ -63-71	"	4		
		G ₁ -63-42	覆土	2		-52	"	1			-77	d ₁	1		
		-42	H-4又はH-19掘り上げ土の下	2		-52	"	2			-80	II黒 上面	1		
		-43	II黒	1		-53	"	1			G ₁ -64-71	"	1		
		-53	"	1		-53	"	2			G ₁ -62-38	" 上面	1		
		-53	"	2		-53	"	2			-38	"	1		
		-62	" 上面	1		-54	"	3			G ₂ -63-02	"	1		
		-62	"	1		-60	" 上面	2			-13	"	1		
		-62	"	2		-60	"	1			-17	"	1		
		-62	"	2		-61	" 上面	1			-25	" 上面	1		
		-62	H-2掘上土下	1		-61	"	1			-25	"	1		
		-71	II黒 上面	2		-61	"	3			-32	" 上面	1		
		-71	"	1		-62	"	1			-39	"	1		
		-72	"	2		-62	"	2			-42	" 上面	12		
		-72	"	3		-63	"	1			-42	"	1		
		-72	"	1		-63	"	2			-42	"	2		
						-70	"	2			-73	" 上面	1		
3	図III 149-3	G ₁ -63-83	掘上土上面	28											
		85	"	1											
4	図III 149-4	H-13	覆土	2	6	図III 149-6	G ₁ -63-24	II黒	3	11					
		"	"	1			-25	"	2						
		"	覆土	3			-53	"	2						
		"	覆土2上面	3			-62	"	3						
		"	床 上面	20			-80	"	2						
		"	床 直上	3			-87	"	3						
		H-14	覆土	6			-87	"	4						
		"	"	1			-88	"	2						
		"	"	1			-88	"	3						
		H-22	床	1			-88	"	4						
		G ₁ -63-23	II黒	5			-88	"	5						
		" -24	"	1			-99	"	3						
		" -33	"	1			G ₁ -64-53	"	2						
" -33	"	2													

表III-6 遺物垂直分布 (1)

G₁-63-87

出土面	IIIb-3	IVa	Vb	フレイク・チップ	石斧剥片	備 考
II黒1回目	42		1	213	4	
2回目	115	1	4	339	14	
3回目	186	3		353	6	
4回目	148			548	14	
5回目	55			333	12	F-70・77~81
6回目	27			138	3	

表III-7 遺物垂直分布 (2)

G₁-63-88

出土面	IIIb-3	IVa	Vb	フレイク・チップ	石斧剥片	備 考
II黒1回目	19		2	82	2	
2回目	69		1	181	5	
3回目	136	2		249	10	
4回目	78	2		256	10	
5回目	102	1		276	8	F-70~76
6回目	22			78	1	

表III-8 遺物垂直分布 (3)

G₁-63-97

出土面	IIIb-3	IVa	Vb	フレイク・チップ	石斧剥片	備 考
II黒1回目	65			204	8	
2回目	85			224	2	
3回目	254	1		429	5	
4回目	7			674	15	
5回目				4	4	F-86・87・88、FC-16・17
6回目	3			132	1	

表III-9 遺物垂直分布 (4)

ノダップII式・煉瓦台式 G₁-63

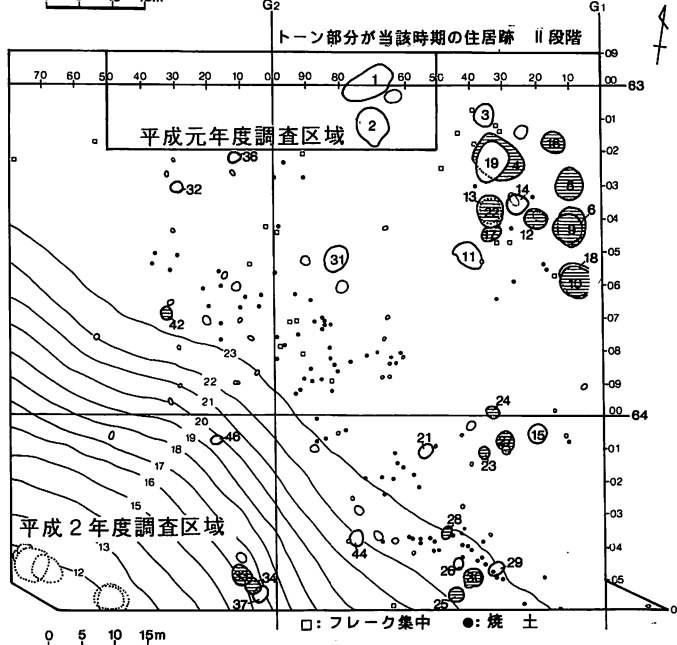
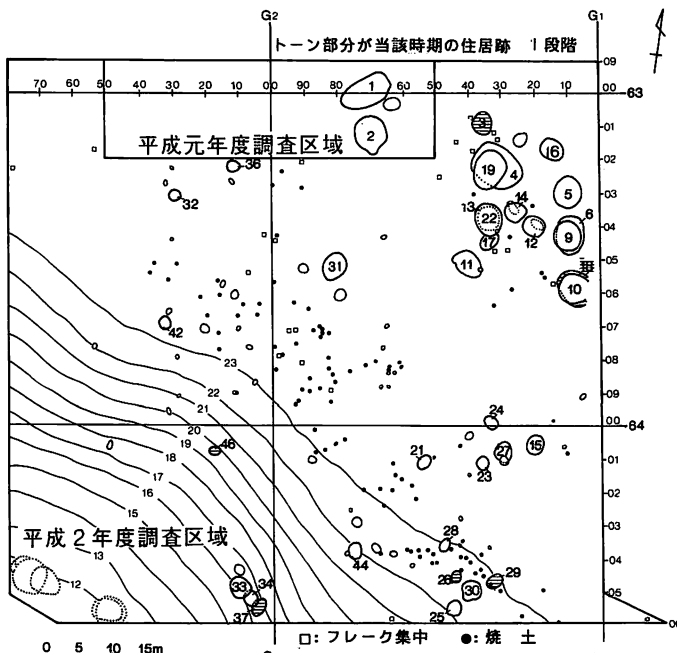
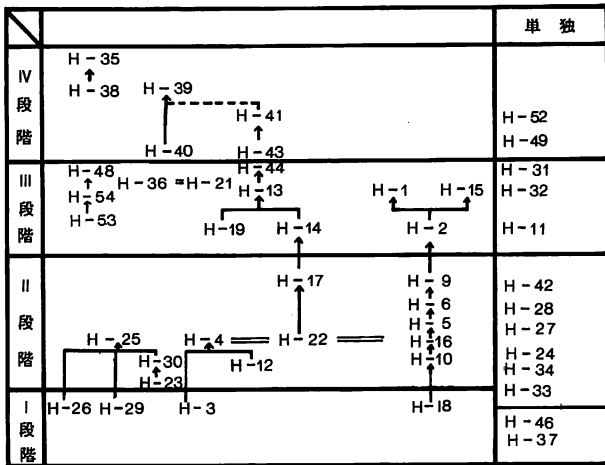
出土面	II黒 1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	備 考
ノダップII	18	29	38	27	5	1	盛土A 遺構掘上土下7点
煉 瓦 台	31	24	31	13	1	3	H-13 掘上土下7点

表III-10 遺物垂直分布 (5)

北筒式

盛土B (北埋調報69掲載分)

出土面	掲 載 番 号
II黒1回目	8、130、175、199、218、219、241、354、385、406、430、439、445
2回目	9、63、126、152、185、205、208、293、371、404、438、441
3回目	44、66、69、122、129、150、215、227、228、233、267、279、302、308、317、322、339、343、373、407、408、416
4回目	50、125、134、178、198、224、226、273、276、303、311、324、358、359、370、431、435、447
5回目	196、305
6回目	290、297
d ₁ 直上	234、392、437



図III-31 住居跡の変遷(1)

(2) 遺構について

1) 住居 (図III-31・32の左側)

平成2年度に発掘された住居跡は中期後葉～末のものが34軒、後期初頭のものが6軒であった。また、平成3年度に発掘された住居跡は中期末のものが3軒(H-48・53・54)、後期初頭のものが2軒(H-49・52)であった。

住居跡の新旧関係は 黒上面の凹み、住居跡どうしの切りあい、住居跡と住居構築時の揚げ土(排土)との切りあい、住居構築時の揚げ土の掛け合い、住居跡出土の遺物、住居跡出土の遺物の接合関係とその埋没層位から確認できた。また住居跡出土の遺物から住居跡の新旧関係を4段階に分類した。

II黒上面の凹みから新しい時期のものと確認できた住居跡^{註1)} H-1、H-4 ⇒ 19、H-21、H-15、H-6 ⇒ 9、H-5、H-10^{註2)}

住居跡どうしの切りあいから新旧が確認できた住居跡、H-18 ⇒ 10、H-6 ⇒ 9、H-22 ⇒ 13、H-4 ⇒ 19、H-53 ⇒ 54 ⇒ 48、H-43 ⇒ 41 ⇒ 39、H-40 ⇒ 39、H-38 ⇒ 35、H-37 ⇒ 33 ⇒ 34。

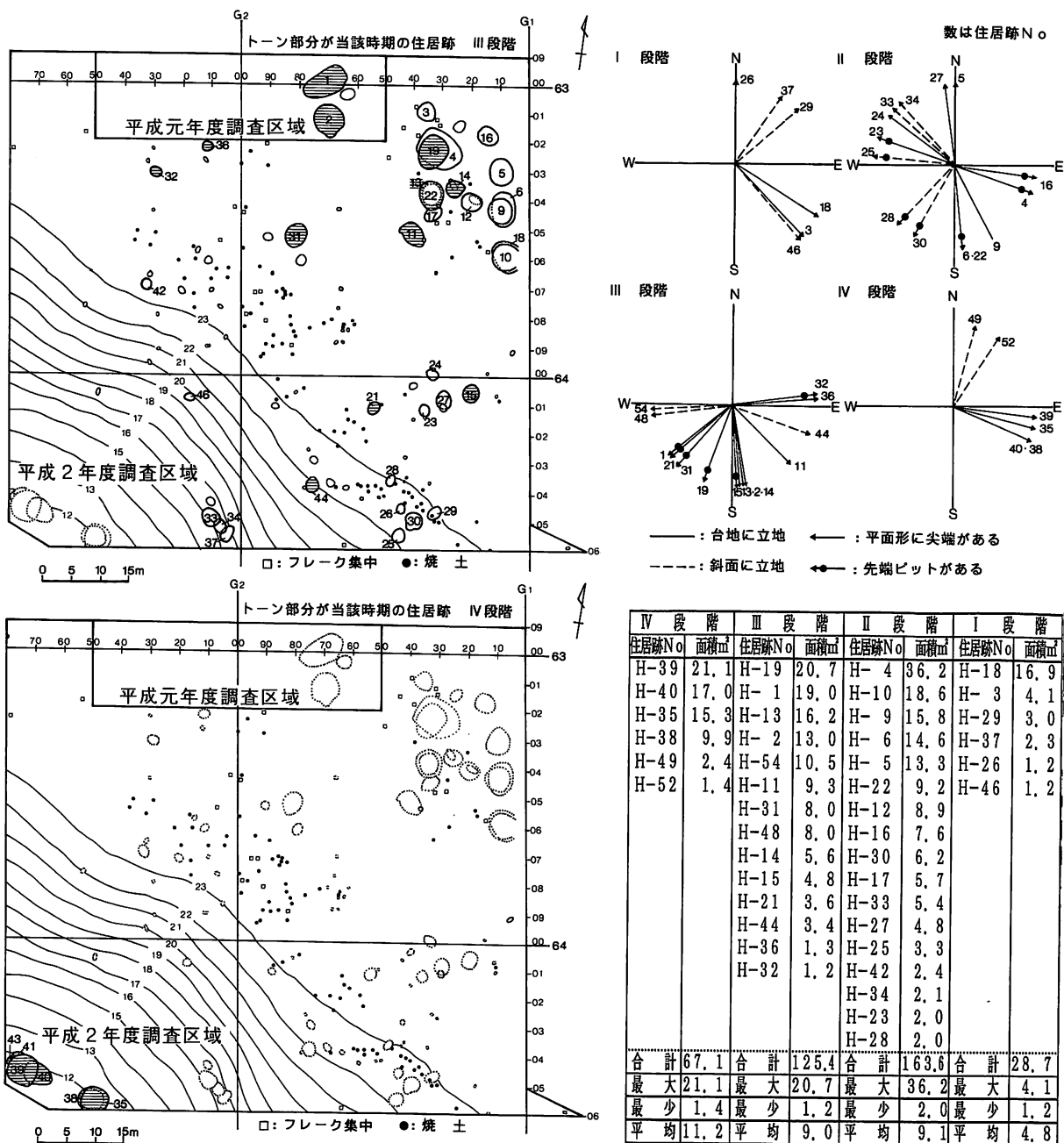
住居跡と住居構築時の揚げ土(排土)との切りあいから新旧が確認できた住居跡、H-5 ⇒ H-6、H-4 ⇒ 16、H-18 ⇒ 6。

住居構築時の揚げ土(排土)の掛け合いから新旧が確認できた住居跡、H-2 ⇒ 1^{註3)} H-3 ⇒ 4、H-16 ⇒ 5、H-12 ⇒ 6、H-4^{註4)} ⇒ 13、H-25 ⇒ 26・30。

住居跡出土の遺物の接合関係とその住居跡内における層位から新旧が確認できた住居跡、H-3 ⇒ 1・4・5・14、H-4=16、H-4 ⇒ 19、H-12 ⇒ 4、H-22 ⇒ 19、H-14 ⇒ 13 ⇒ 44^{註5)} H-13・19 ⇒ 2 ⇒ 15^{註6)} H-23 ⇒ 30、H-21=36、H-48=40?

個別の住居跡出土の遺物については昨年度に報告済みである。その結果をもとに住居跡の時期を4段階に分けて図III-31上段の横野に示した。住居跡の時期差は土器の分類でいうとI段階～III段階はIII b-3、IV段階はIV a 前半の二つに大きく分かれる。そして、この二つの時期はさらにI段階はトコロ6類の古いものを含む時期のもの、II段階はノダツプII式に並行する時期のもの、III段階は煉瓦台式に並行する時期のもの、IV段階は余市式(小野幌・伊達山式)の時期のものに細分される。

次に段階ごとの平面形の特徴を述べる。I段階は長楕円形が多数を占める。他には隅丸方形(H-18)と隅丸三角形(H-3)が各1軒ずつ存在する。II段階は楕円形(H-10・12・23・24・28)、隅丸三角形(H-25)、隅丸方形(H-30)、ほかには新しく卵形の基部が直線的になった形(H-4・6・16・22・27・33)、卵形(H-5)が出現する。III段階は楕円形(H-21・44)、基部が直線的になった卵形(H-1・19)、卵形(H-2・11・14・36・48・54)、長軸が短く、先端部がやや丸を帯びた卵形(H-13・32・15)。4段階は卵形(H-40・49・52)、隅丸台形(H-35・38・39)。



図III-32 住居跡の変遷(2)

図III-32 右下段の図は段階別の床面積を示している。I 段階は平均床面積が 4.8 m^2 と小型の住居跡で占められている。II 段階は最大と最小の差が一番大きい。平均は 9.1 m^2 で III 段階に近い数値を示す。III 段階は最大の数値が IV 段階のそれに近い。IV 段階は小型の住居跡が少ないこともあって平均値は高めになっている。

図III-32 右上段の図は段階別の長軸方向の変遷を示している。長軸方向は各段階を通じて住居跡の立地に規制されることなく偏差を持っており、かつ各段階のなかで偏差は群を形成している。なお、群の分類は見た目には方向の違いがわかる $1/4$ 直角以上を基準として採用した。そして隣合う長軸の振れ角が $1/4$ 直角以下のものをひとまとまりの群と認定した。

I 段階は H-26・29・37 (I-1) と H-46・18・3 (I-2) とが 2 群を形成する。II 段階は H-28・30 (II-1) と H-23・25・24・34・33 (II-2) と H-4・16 (II-3) と H-5・27 (II-4) と H-22・6・9 (II-5) が 5 群を形成している。III 段階は H-1・19・21・31 (III-1) と H-48・54 (III-2) と H-2・13・14・15 (III-3) と H-32・36 (III-4) とが 3 群を形成している。IV 段階は H-40・38・39・35 (IV-1) と H-49・52 (IV-2) とが 2 群を形成する。これらの群は前述してきた新旧関係より、I-1 \Rightarrow I-2 \Rightarrow II-1 \Rightarrow II-2 \Rightarrow II-3・4・5 \Rightarrow III-1 \Rightarrow III-2 \Rightarrow III-3・4 \Rightarrow IV-1・2 へと時間的経過を経つつ長軸の方向も変化させていく。このことは、軸方向の変化が時間的な推移を表しており、土器による区分の 4 段階以上に、より細かな小段階を示している。

住居跡の内部構造の中で特徴的なのは炉の有無である。I 段階の中においては、6 軒の住居跡のなかで H-18 (全体の 16.6%) だけが地床炉を持っている。II 段階の中においては、17 軒の住居跡のなかで H-4・6 (全体の 11.1%) だけが地床炉を持っている。III 段階の中においては、14 軒の住居跡のなかで H-2・13・19・21・48・54 (全体の 35.7%) が炉を持っている。H-2 が円形の石囲い炉。H-13 が円形の土器・石囲い炉。H-19 が方形の石囲い炉。H-48・54 が方形の地床炉。IV 段階の中においては、6 軒の住居跡のなかで H-40 (全体の 16.6%) だけが方形の土器囲い炉を持っている。

以上述べてきたことを段階別にまとめてみる。I 段階は小型で長楕円形の住居跡が南東斜面に分布している。やや大きな H-3・18 は小型のものと離れて台地の北東部に点在している。II 段階は前段階の平面形を持つ住居跡に加えて、新しく大型で卵形の基部が直線的になった平面形を持つ住居跡が出現して代表的な形となる。住居跡の分布は、古い平面形を持つものが南東部斜面と台地南東部に、新しい平面形を持つものが台地北東部に位置して南北に分布を広げる。III 段階は前段階とほぼ同じ分布を呈している。新しい傾向としては台地北東部東側から台地中央にかけて東西に分布を広げる。大型の住居跡は卵形の基部が直線的になった形と卵形で占められている。小型の住居跡の平面形も卵形が多くなる。また、この段階に初めて住居跡の炉に方形のものや土器・石囲い炉が現れる。IV 段階は斜面と斜面下に分布を変えて、従来の分布域とまったく異なった傾向を示す。小型の住居跡の平面形は従来の長楕円形から卵形へと転換する。

また各段階に共通した特徴がある。ひとつの段階において、初めや終わりの小段階では同一方向であるにもかかわらず平面形が異なるのに対して、中間の小段階では同一方向である同一平面形であることがほとんどである。ひとつの段階の中の初めや終わりの小段階には前段階の平面形が少数残存する傾向が見られるということである。このことより、中間の小段階は住居の形が定形化している状態を示し、初めや終わりの小段階は形が変化しつつある状態を示しているといえる。

2) 土壌 (図III-33 下段)

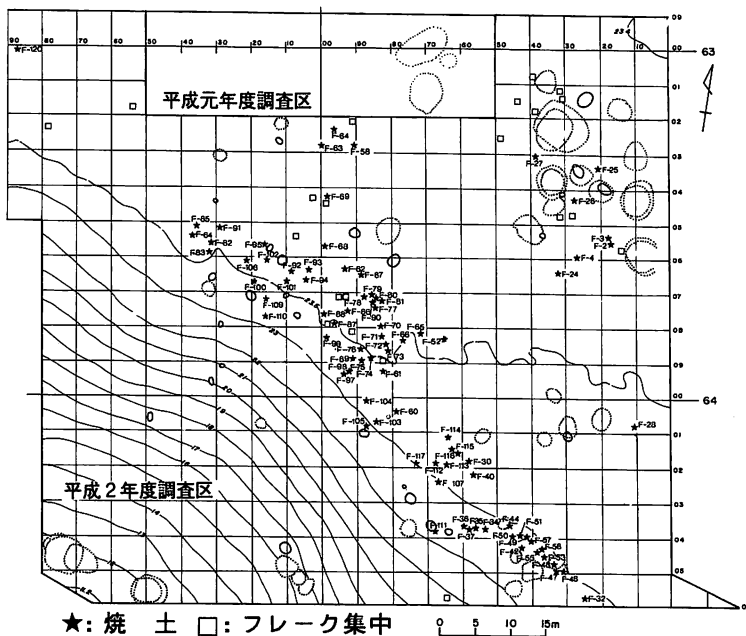
土壌は台地北東部と台地中央部と斜面の 3 カ所に分布の集中がある。土器の接合関係より、P-30 が II-2、P-73・87 が II-5、P-8 が I ~ II、P-7 が III-3 と一部時期が限定できる。土壌の性格は判然とし

ない、覆土からの遺物は非常に数少なく、また遺物は一般に包含層から数多く出土していることを考えあわせると、ゴミ捨て穴以外に用途が考えられる。

3) 焼土 (図III-33 上段・表III-11)

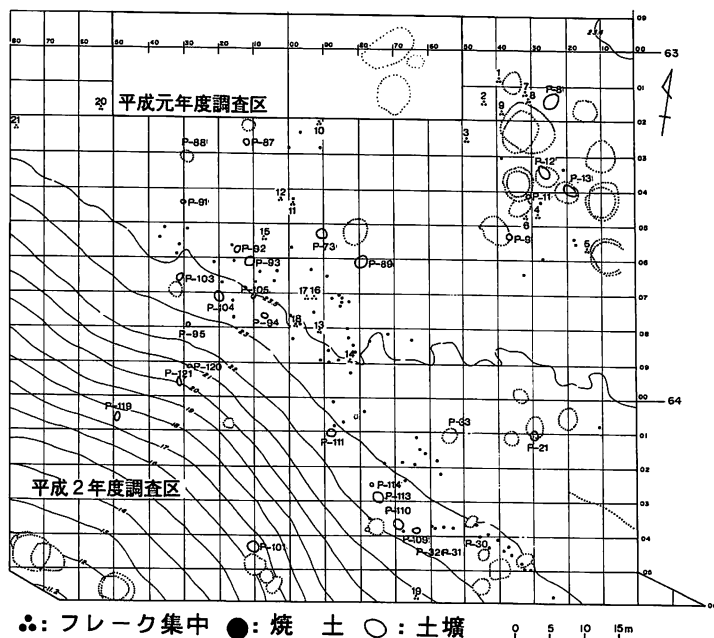
土壌と異なって焼土どうしがより近接して明瞭な群を形成する。その分布はおもに台地の縁辺に集中し土壌の分布と異なる。これらは検出面ごとに分布の特性を持っており、同一検出面内においては規模・断面形において群が分かれる。

各検出面の焼土の時期はI~III段階の土器が被熱を受けていることより土器の時期と同じと考えられる。F-48(2回目検出)がH-29(I-1)の上位にあることや、F-44(3回目検出)がH-28(II段階)の上位に有ることよりII段階以降の時期に構築されたことになる。いっぽう、2・3回目に検出された焼土より下位には4・5回目とD₁直上に検出された焼土が存在する。4・5回目は重複部分が存在して分



表III-11 検出面別焼土一覧

検出面	群	遺構番号	平面積 (m ²)
2 目 目		34, 48, 52,	0.10
3 目	A	42, 44	0.07
	B	61, 103, 104	0.31
	C	106, 110	0.15
4 目	A	30, 60, 112-116	0.18
	B	63, 66	---
	C	67, 68, 69, 88, 97, 98, 99,	0.13
	D	58, (63?), 64, 65	---
	E	95, 100, 102	0.23
5 目	A	62, 70-81, 86, 87, 89, 90	0.22
		107, 117	
D ₁ 直 上	A	30, 32, 36, 37, 40, 46, 47, 49, (50?), 53, 55, 56, 57	0.19
	B	97, 98, 99,	0.09
	C	82-85, 91-94, 100, 101, 105, 109	0.26
	D	2, 3, 4, 24, 26, 25, 27 28	0.39



表III-12 検出面別フレイク集中一覧

検出面	群	遺構番号	遺物点数
掘 土 上 面 目	A	1. 2. 3. 7 8. 9	5 4 4 4
	B	4. 5. 6	5 8 1 2
2 目 目	C	10, 11, 12, 15	4 7 7 1
5 目 目	D	16. 17. 18	2 3 0
2目 3目 7	群 を い ち ま し	20	4 8 8
		19	2 8 8
		13. 14. 21	556, 20, 7711

図III-33 焼土・フレーク集中位置図

布の傾向が類似していることから時期が近接していることを示している。D₁直上に検出された焼土は層準からみても一番古くなる。以上より、2・3回目に検出された焼土はⅢ段階、4・5回目に検出された焼土はⅡ段階、D₁直上に検出された焼土はⅠ段階の時期に構築されたと推定できる。

D₁直上に検出された焼土は台地の縁辺・台地北東部に集中し、D群が大型で掘り込みを持つ焼土で構成されている。Ⅰ段階の焼土は台地の縁辺と台地北東部に焼土同志が対峙するように台地の縁辺と台地北東部に分布する。4回目に検出された焼土は台地の縁辺とG₂ラインに沿って台地にも分布する。3つの群を形成している。5回目に検出された焼土はG₁63・87・88・96・98に集中している。これらⅡ段階の焼土は住居跡と対峙するように台地の縁辺からG₂ラインに沿って台地に分布する。2回目に検出された焼土は群を形成せず散点的に分布する。3回目に検出された焼土は3つの群を形成し、B群が大型で掘り込みを持つ焼土で構成されている。これらⅢ段階の焼土は台地の縁辺に分布する。

また焼土の形態については前年度の報告書に詳述しているので触れないが、遺物の点数と種類数や掘り込みの有無から、断面が凹形で大型のものは定置的な屋外炉のようなもの、断面凸形で小型のものは一時的で焚火のようなものであると述べた。断面が凹形で大型のものは、Ⅰ段階の焼土36ヵ所中に11ヵ所(F-27・36・47・49・57・82~85・91・100)、Ⅱ段階の焼土40ヵ所中に8ヵ所(F-70・73・90・107・117・95・100・115)、Ⅲ段階の焼土10ヵ所中に4ヵ所(F-48・61・103・104)存在する。

段階ごとの焼土の数はⅠ・Ⅱ段階ではほぼ同じ数であるのにならして、Ⅲ段階に入ると激減する。いっぽう、焼土と密接な関係を持つはずの住居跡の数はⅠ段階で数少なく、Ⅱ・Ⅲ段階ではほぼ同じ数であり明瞭な対応関係にはなさそうである。ところが、炉を備える住居跡の数の増減には明瞭な対応関係がみえてくる。この住居跡の数はⅠ・Ⅱ段階ではほぼ同じ数であるのにならして、Ⅲ段階に入ると激増する。このことは焼土と住居内の炉が同じ機能を果たしていたことを示している。断面が凹形で大型は定置的な屋外炉のようなものは焼土全体と同じ傾向を示すが、その増減はより緩やかであり、焼土とは少し異なった機能が有るものとおもわれる。

4) フレーク集中

フレーク集中は土壌や焼土の分布と異なり台地上にのみ分布する。以下検出面ごとに特徴を述べる。揚げ土上面(2回目に相当する)に検出されたフレーク集中は2つの群を形成している。この揚げ土は3段階の住居跡から排出されたものであり、フレーク集中9の土器がH-19の土器と接合していることからⅢ段階の時期に形成されたものといえる。2回目に検出されたフレーク集中は1つの群を形成している。時期は揚げ土上面に検出されたフレーク集中と同じである。またこの群の付近には石槍未製品を埋納してあったP-91がある。5回目に検出されたフレーク集中は1つの群を形成している。この群の付近には焼土群が近接しているのが特徴である。直接時期を示すものはないが4・5回目に検出された焼土はⅡ段階であることから同じ時期に形成されたとと思われる。

5) 空白地域⁷⁾と遺構の位置

住居跡の集中する北東部を除くG₁63大グリッドは大部分が遺構の構築されていない空白地で占められており、くわえてⅠ~Ⅲ段階にかけての遺物の分布が稀薄である。空白地域はⅠ~Ⅲ段階にかけて形を変えながら存続し、台地上に住居跡が存在しないⅣ段階においては遺物の分布に空白地域が存在しないことからⅣ段階にはいつて消滅したものと考えられる。

Ⅰ段階においては、Ⅰ-1に南東部の台地縁辺に住居跡が集中し、Ⅰ-2になると北東部の台地上に移動する。それによって焼土なども移動したと十分考えられるので、同時期の遺構によって囲まれた閉鎖的な空白域が存在していたかは不明であるが、焼土群AとBCまたはDとBCに関しては同時期に存在していた可能性が高く、群の間には空白域が存在する。

II段階においても、I段階と同じように同時期の遺構によって囲まれた閉鎖的な空白域が存在していたかは不明であるが、II-3・4・5の住居跡が集中する北東部の台地と焼土群B・C・D・Eとの間に空白域が存在する。

III段階においては、初めて同時期の遺構によって囲まれた閉鎖的な空白域が存在するようになる。G₁とG₂ライン、63-06と64ラインに囲まれた東西に長い空白域である。

このように空白域は初めからある企画に基づいて設けられていたものではなく世代を重ねた結果成立したものと考えた方が良いでしょう。しかし、各世代を通じて空白域が存在していたことは、なんらかの意図があったことを示している。たとえば、異なった用途の遺構は距離を置くという配置の結果生じたのか、集会・作業などのために空間が必要だったのか、などが考えられる。

(3) 遺物について

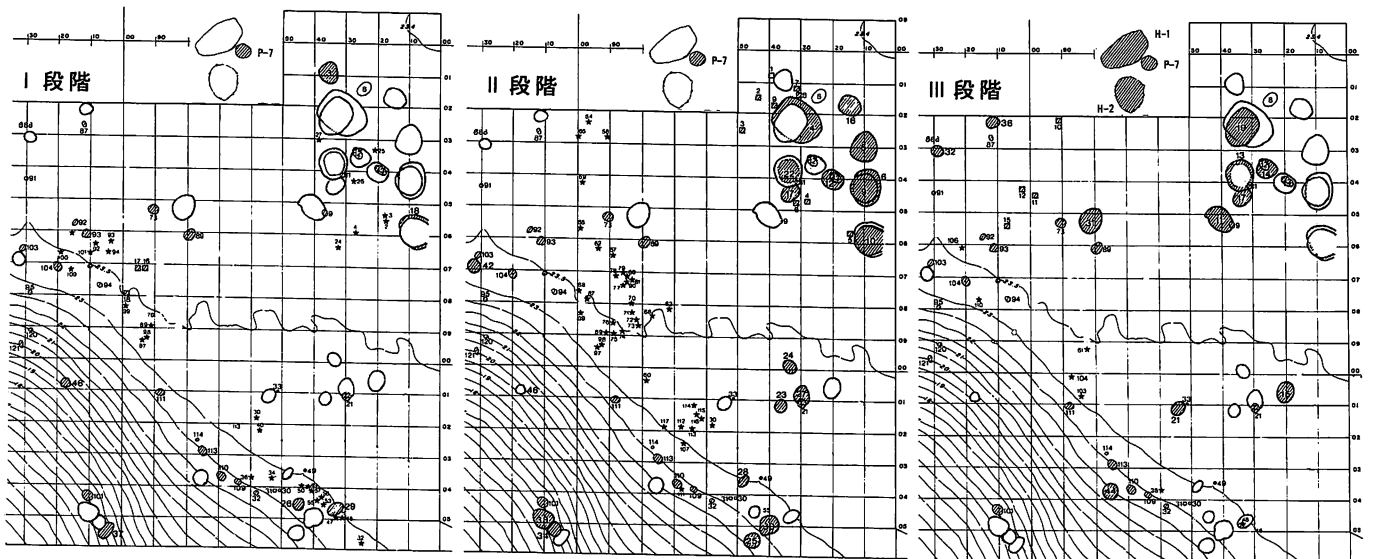
1) 石斧(図III-35)

細分類についての時間的変遷を述べる前に石斧の大きさについて述べ、機能を推定する一助とし、分類のまとめとする。遺跡から出土する石斧はほとんど破損しており、付帯した情報から石斧の全貌を直接することはなかなか難しい。そこで刃部側の破片資料と完形資料の共通する特定の部位を比較することによって破片資料の大きさを推定することにした。

図III-35の上段の2つのグラフは完形石斧の大きさを全長と断面形態で表したものであり、全長の長短と断面形態と重量の多少が正の相関関係を持っていることがうかがえる。右のグラフのイの領域には全長が19cm以上、断面形がIV・III、重量が493~722gの大型石斧が存在する。左側のグラフの口の領域には全長13.4~16.8cm、断面形がIV・III・II・I、重量が209~366gの中型石斧が存在する。ハの領域には全長13.5cm前後、断面形がI、重量が100~134gの小型石斧が存在する。ニの領域には全長11.1~6.8cm、断面形がII・I、重量が99~29gの超小型石斧が存在する。

大型石斧はA・Cの平面形を持つ。中型石斧はA・CとAの平面形を持つ。小型石斧はBの平面形を持つ。超小型石斧はA・B・C・DとB・Dの平面形を持つ。

全長と断面形態と重量とが正の相関関係を持っており平面形も関わることはわかった。この要素の中で刃部側の破片資料と完形資料の共通するものは断面形態である。しかし断面形態を比較しても相似の関係に有るか否かを述べたにすぎない。重量が大きくなると断面形が方形または円形に近づくということは断面積が変化している可能性が有るといことが考えられる。



図III-34 段階別遺構位置図

完形資料の場合断面積という要素は必ず備わっているものであるが、破片資料の場合はそうではないことが多い。断面積という要素に近似して刃部側破片資料に備わっている要素とは、やはり断面積の一種であろう。刃部側破片資料には必ず刃部が存在し、刃面が終息して基部に移り変わる部分がある。これは完形資料にも存在する。そこが両者に共通している部位であり、この断面積が比較の要点となる。そこでまず、完形資料についてのグラフ(図III-35 の中段のグラフ)をつくり、刃部側破片資料の刃面終息部における断面積と比較することにした。縦軸には上段の2つのグラフと同じに全長を示し、横軸には断面積と刃面終息部における断面積を示した。

断面積と刃面終息部における断面積の差は、大型石斧においては差は見られない。中型石斧においては、刃面終息部における断面積が平均 0.8 cm^2 ずくない。小型石斧においては、刃面終息部における断面積が平均 0.6 cm^2 ずくない。超小型石斧においては、刃面終息部における断面積が平均 0.3 cm^2 ずくない。いずれの石斧においても刃面終息部における断面積が少なく出ているが各領域がおおきく重なりあうほどの数値の変動はなく、断面積を刃面終息部における断面積の代用の要素とするにたりることが示されている。

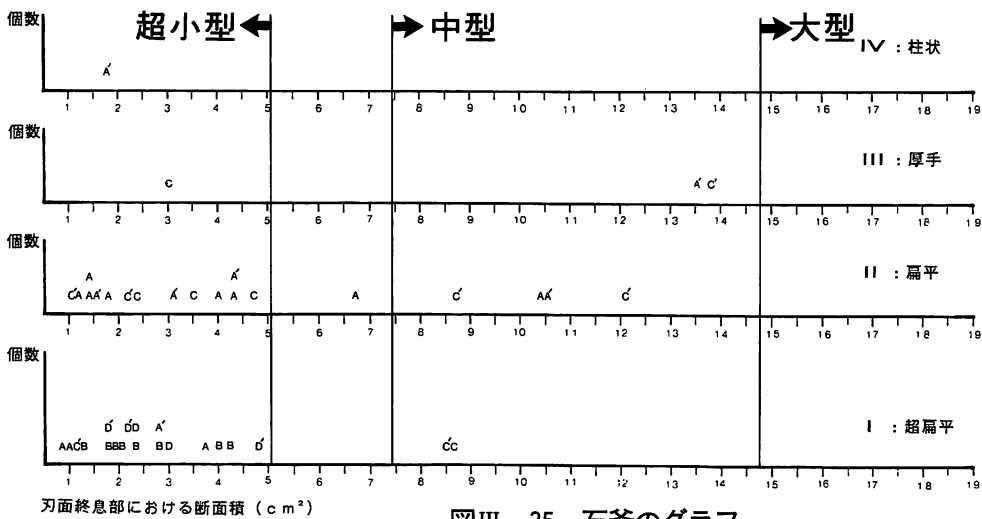
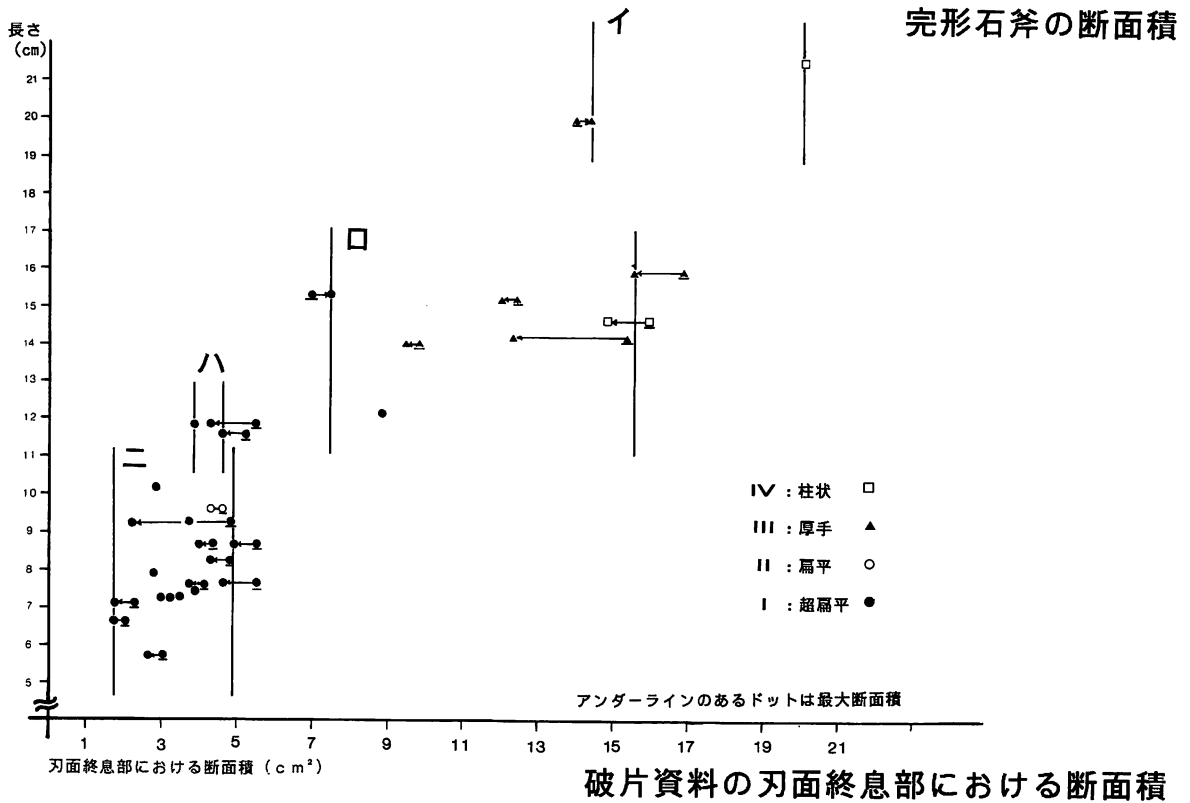
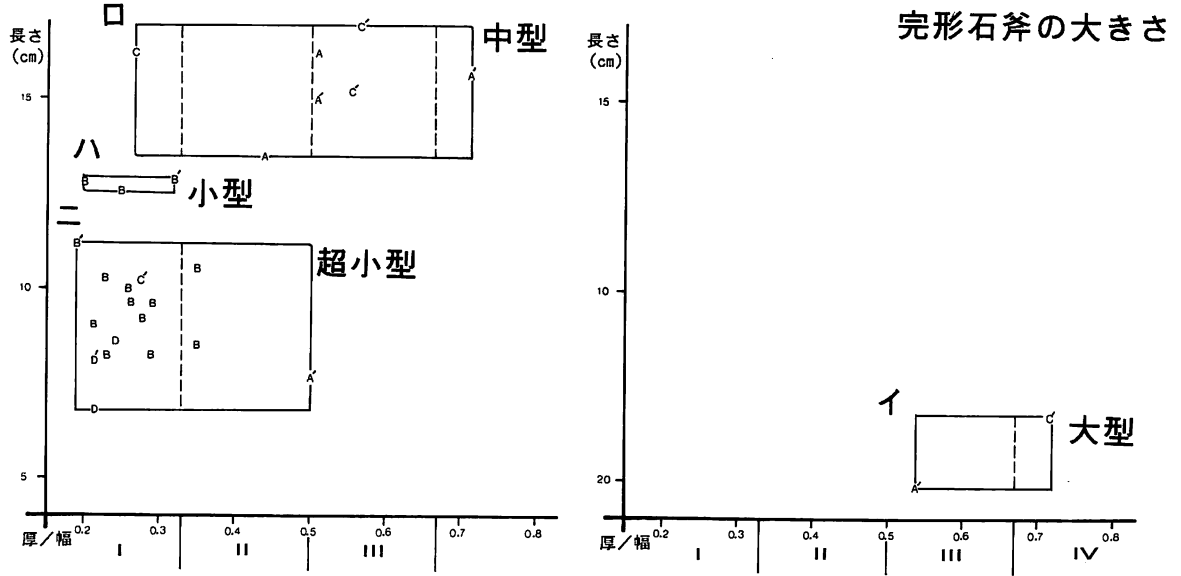
大型石斧の刃面終息部における断面積は $14.8 \sim 19.9 \text{ cm}^2$ 。中型石斧の刃面終息部における断面積は $7.4 \sim 15.5 \text{ cm}^2$ 。小型石斧の刃面終息部における断面積は $3.8 \sim 4.6 \text{ cm}^2$ 。超小型石斧の刃面終息部における断面積は $1.8 \sim 5.1 \text{ cm}^2$ で小型石斧の値を包含してしまう。従って刃面終息部における断面積をみた場合、小型石斧と超小型石斧との区別は困難である。

次に刃部側破片資料の刃面終息部における断面積のグラフ(図III-35 の中段のグラフ)を見てみよう。刃部側破片資料には大型石斧が存在しない。中型石斧の刃部側破片資料は完形のものと同じく断面形態 III・II・I、 $A' \cdot C'$ と A の平面形を持つことがわかる。小型石斧は完形の場合と同じに超小型石斧の領域に包含されてしまう。超小型石斧の領域には同じ面積を持ちながら断面形態が異なり、かつ平面形も異なるものが存在する。それらは断面形態が I、 $B' \cdot D'$ と B・D の平面形とを持つ石斧である。このことは完形資料の超小型石斧において $B' \cdot D'$ と B・D の平面形とを持つものが断面形態 I の領域に偏っていることに類似している。以上のように刃部側破片資料は刃面終息部における断面積を用いると完形資料と同じ様相が見て取れた。

結果をまとめると、大型石斧は断面形態 IV・III、平面形 $A' \cdot C'$ を持つ。中型石斧は平面形 $A' \cdot C'$ と A を持つ。小型石斧は断面形態 I、平面形 B を持つ。超小型石斧は断面形態 II・I、平面形 $A' \cdot B' \cdot C' \cdot D'$ と B・D を持ち、断面形態 I には平面形 $B' \cdot D'$ と B・D が多く存在する。

さて、これらの機能について述べる。大型石斧の数が少なくもっと重い個体もあるかもしれないが、未製品の中に敲打調整がほぼ終わった段階で A IV₃ になるであろうもの(昨年度掲載図III-178 の 85)の重量が 847 g であるので、大型石斧が本遺跡における最大級の石斧であろう。このことより、大型石斧は伐採石斧として使用されていた可能性が高い。小型石斧・超小型石斧はその重量から見て加工石斧として使用されていたのであろう。超扁平の中でも刃部が広い $B' \cdot D' \cdot B \cdot D$ とそれよりやや厚みがあり刃部が狭い $A' \cdot C' \cdot A \cdot C$ とでは使用方が異なっていたかもしれない。また刃部が狭い $A' \cdot C' \cdot A \cdot C$ については石のみ状の石斧が存在することから、石のみ状の石斧と同じ機能は考えがたいので刃部が広い $B' \cdot D' \cdot B \cdot D$ と石のみ状の石斧の中間の機能を想定するのが適当と考える。中型石斧については大型石斧と小型石斧・超小型石斧との中間の機能を想定するのが適当と考える。

細分類ごとの時間的変遷である。ノダップ II 式並行期・煉瓦台式並行期(トコロ 6 類)～小野幌・伊達山式(余市式)にかけては、石斧の規格と形態が大きく変化することなく続いているようである。大型石斧や中型石斧においては終始 A・C の平面形が存続している。ただし中型石斧においては煉瓦台



図III-35 石斧のグラフ

式並行期の頃になるといくぶんか A の平面形を持つものが多くなるようだ。小型石斧・超小型石斧においては終始 B・D が多く、A・C の平面形も少量ながら存続している。小野幌・伊達山式の頃になると B にくらべて D が多くなっていく。また B・D ともに錆が不明瞭となり、側面の調整が丁寧な一つの平面や曲面で構成されることが多くなる。特に D にはこの傾向が顕著である。

2) 未製品と石斧製作

石斧製作で特徴的なことを列挙してみよう。まず、製作の早い段階 (II₁) にはすでに最終的に出来上がる石斧の規格を考慮して素材を選んでいること。そのために未製品の断面形と全長には均一性が見られる。特に大型の素材には顕著に見られる。この規格性は原石の段階からあてはめられていた可能性を示す資料がある。たとえば 39 はすでに研磨が一部施された状態で美々3 遺跡へ搬入されたものであろう。ほかには 34、この未製品はすでに一部分が敲打されて持ち込まれている。

破損した未製品には II 段階のものも多く、かつ断面の扁平率が b の厚手以上のものが多かった。このことは大型で、柱状の断面形を持つ石斧を作ることは失敗が多かったということを示している。

再生転用品が多く、再生転用の種類も多岐にわたる。石斧製作址として特徴的なのが未製品の失敗したものを再生することである。

3) たたき石

形態 f のたたき石は岩質がカンラン岩・砂岩・片麻岩とに限られ、全面または全周を使用面としている特徴的なたたき石である。また中でも、カンラン岩質の形態 f のたたき石は北筒式期に限定されたものである。

4) すり石

A1・2・3 のすり石については、従来色々な名称が与えられてきた。第一に実用的な石器として「砥石」(札幌市 S267、268 遺跡 1977)、「砥石 C タイプ」(苫小牧市厚真 7 遺跡 1987)、「たたき石」(千歳市美々3 遺跡 1988)、「すり石 A1・2・3」(千歳市美々3 遺跡 1990)。第二に石製品として「動物形石製品」(恵庭市ユカンボシ E8 遺跡 1989) 等の名称が併存する。本報告においては、使用面の形が砥石と異なり、長軸方向に付く条痕が有ることから実用的な石器と考え、なおかつ使用面のちがいがら砥石と分離して「すり石 A1・2・3」の名称を使うことにした。

この遺跡において、A1・2・B はノダップ II 式並行期から出現し余市式(小野幌・伊達山式)期までの間存続し続ける。A3 についてはノダップ II 式並行期から出現することは H-26 から出土して確実であるが、他のすり石と同じように煉瓦台式並行期以降も存続しつづけたかは不明である。

管見によれば、このすり石はおもに道央低地帯に出土例を見かける。北限は今年度北海道埋蔵文化財センターが調査した中川郡音威子府村、咲来 2 遺跡(1992)であり、南限は苫小牧市、厚真 7 遺跡である。東限は上川郡清水町共栄 2 遺跡(1991)であり日高山脈を越えて分布している。時期については遺構出土のものによると札幌市 S267、268 遺跡・1 号竪穴住居跡、恵庭市柏木川 11 遺跡・HP-4、6(1990)、恵庭市ユカンボシ E8 遺跡・HP-2、千歳市美々3 遺跡 H-26 であり、いずれもトコロ 6 類と伴出することから中期後葉を中心とした時期が考えられる。なお、上限・下限を決定する上で参考となる例として次のものがあげられる。厚真 7 遺跡では包含層から出土しており、包含層からは柏木川式、トコロ 6 類、タブコブ式土器が出土しているのでこの例は上限と下限とのどちらかをしめす例となる可能性を有している。また上川郡清水町共栄 2 遺跡でも包含層から出土しており、包含層からは北筒 IV 式土器が出土しているのでこの例は下限をしめす例となる可能性を有している。

用途に関しては、岩質が流紋岩、凝灰岩、珪藻土質泥岩、泥岩、安山岩と多岐に及ぶので岩質が用途とあまり関わりがない石器であり、被加工物に対して角度の変化を持たせることができるよう

な細部の調整に適した形態を有している石器のようである。そういったことで砥石とは異なる用途があるようである。

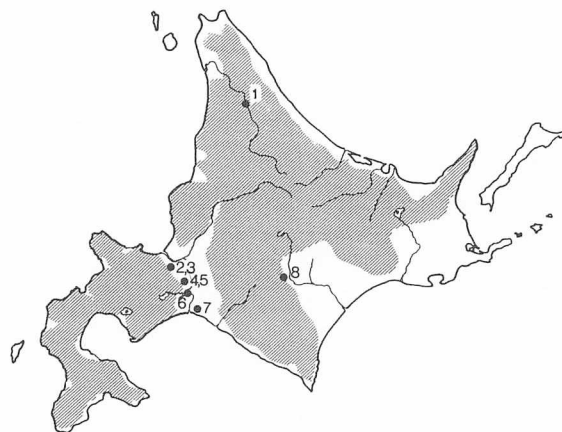
5) 砥石

A1・2はともに北筒・余市式期を通じて一般的に出土している。B・Cは包含層において北筒式期の出土例を見ないが余市式期に入ると見かけるようになる。なお、Cについては北筒式期の遺構からは少数ながら出土している。岩質は全て砂岩であり、極細粒・細粒・中粒砂岩の3種類の粒径が出土している。この粒径は宮下健司(1983)によると、仕上砥・仕上砥～中砥・中砥に対応するようである。美々3遺跡においては粗砥が存在しないことになる。粗砥を補うものが存在しないので、やはり極細粒・細粒・中粒砂岩の3種類の粒径で全工程を行っていたと思われる。このことを示唆することとして、固結度の違いが考えられる。詳しいデータは取っていないが、固結度が弱ければ砂粒が剥落して研磨はかどらず、その逆は少々砂粒が細かくても強い圧力で研磨できるであろう。(鈴木 信)

註

- 1) H-3もII黒層上面において凹みの状態で確認されたが、覆土上面には焼土があり再利用されているのでH-3自体が新しく凹んでいたわけではない。
- 2) 「Ta-cを除去したところG₁63-16周辺に若干のくぼ地が認められたため…」平成2年度報告P.71。G₁63-16周辺とあるが報告者に確認したところ、グリッドのことをいうのではなく、ポイントのことをさしているということである。
- 3) 「遺構の覆土上面には、H-1の掘り上げ土と考えられる、Ta-d火山灰がII黒層上面に広がっていた。」平成元年度報告P.174。また、この掘り上げ土は平成2年度調査区のG₁63-62・72・73・82・92にも広がっていた。
- 4) H-19の揚げ土はG₁63-41・2側に排土されており、H-4の揚げ土はG₁63-23・33側に排土されている。
- 5) 平成2年度報告P.89では住居跡の前後関係が「H-22⇒H-13⇒H-44⇒H-14」となっているが、「H-22⇒H-13・H-14⇒H-13⇒H-44」の誤りである。
- 6) 図III-1-2はその他にH-19覆土やG₁63-48・73、G₁64-10等と住居跡の揚げ土以外にも広く接合関係を持つ。揚げ土の資料については取り上げた時点ではその帰属が不明瞭であったので遺物台帳でもそのことには触れていない。平成元年度報告P.174の記述に従ってH-1の揚げ土に帰属させるのが適当と考える。
- 7) 空白域におけるII黒層の堆積は非常に薄くなっている。この薄い堆積は台地縁辺に向かって徐々に厚くなり、斜面ではより厚くなる。このような傾向は台地縁辺に沿って一般的に見られる状況である。例えば、G₂-30ラインにそって北から南へ見てゆくと理解できる。H-36の土層断面ではII黒層の厚さが4cm(プランを2回目に検出しているので+5cm)、Ta-d₁が12cm。H-36の土層断面ではII黒層の厚さが4cm(プランを2回目に検出しているので+5cm)、Ta-d₁が12cm。P-91層断面ではII黒層の厚さが18cm。H-42の土層断面ではII黒層の厚さが18cm(プランを2回目に検出しているので+5cm)となっている。

また、図III-28の「土取区域」の土量は72.83cm²であり「盛土地区」の土量と一致しない。しかもH-21・H-15出土の石器は周囲のG₁63-48、G₁64-10・51出土の石器と接合しており土が移動していないことを示している。



図III-36 すり石1・2・3出土遺跡

表III-13 すり石1・2・3出土遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺構の種類	伴出した土器
1	咲来 2	中川郡 音威子府村	包含層	北筒式(トコ6類)
2	T151	札幌市 白石区	包含層	北筒式(トコ6類)?
3	S267, 268	札幌市 白石区	1号竪穴住居跡	北筒式(トコ6類)
4	柏木川11	恵庭市 北柏木川	HP-4, 6 包含層	北筒式(トコ6類) 北筒式(トコ6類)?
5	功がのE8	恵庭市 戸磯	HP-2 包含層	北筒式(トコ6類) 北筒式(トコ6類)?
6	美々 3	千歳市 美々	H-26 包含層	北筒式(トコ6類) 北筒式(トコ6類)・余市式
7	厚真 7	苫小牧市 厚真	包含層	柏木川式・タプコプ式
8	共栄 2	上川郡 清水町	包含層	北筒式IV

類似しているという美々4の「マウンド」についてはそれを構成する土が、①：黒褐色土、炭化物と焼骨を含み汚れた土。②：黒褐色土、①より固くしまる。とあるが美々3遺跡の盛土地区にはまったく見られなかった。そして美々4の「マウンド」の性格については「周堤墓や住居跡などの大型遺構の排土が堆積したものと推定している。」とある。そのことについては、「マウンド」の土量が25.38 m³で、X-9の土量が19 m³で、H-2の土量が13 m³でありほぼマウンドの土量に一致する。またマウンドのセクションにX-9の盛土が見られない。これらの排土は運ばれてマウンド状に堆積したのであろう。このマウンドは美々3遺跡の「盛土」とは関わりなく形成されたものである。

したがって、「盛土A」はノダップII・煉瓦台式期の住居跡が排出した「揚げ土」であり、「盛土B」は自然地形と考えるが、「土取区域」からではなく、調査区外に大型の遺構が存在して、その排土が運ばれた可能性は否定できない。

引用・参考文献

- | | | |
|--------------|--------|--|
| 恵庭市教育委員会 | (1989) | 『ユカンボシ E 8 遺跡』 |
| 恵庭市教育委員会 | (1990) | 『柏木川 11 遺跡』 |
| 大沼忠春 | (1981) | 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」
『考古学雑誌』66-4 |
| 大沼忠春 | (1989) | 「北筒式土器様式」『縄文土器大観 1』 |
| 大場利夫 蛭子千代志 | (1965) | 「函館郊外煉瓦台遺跡」『北方文化研究報告』21 |
| 札幌市教育委員会 | (1977) | 「S 267・268 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XIV |
| 札幌市教育委員会 | (1983) | 「T 151 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XXVI |
| 北海道埋蔵文化財センター | (1981) | 「社台 1 遺跡・虎杖浜 4 遺跡・千歳 4 遺跡・富岸遺跡」北埋調報 1 |
| 北海道埋蔵文化財センター | (1986) | 「美々3 遺跡」『美沢川流域の遺跡群』IX 北埋調報 24 |
| 北海道埋蔵文化財センター | (1987) | 「美々3 遺跡」『美沢川流域の遺跡群』X 北埋調報 35 |
| 北海道埋蔵文化財センター | (1990) | 「美々3 遺跡」『美沢川流域の遺跡群』XIII 北埋調報 62 |
| 北海道埋蔵文化財センター | (1991) | 「美々3 遺跡」『美沢川流域の遺跡群』XIV 北埋調報 69 |
| 北海道埋蔵文化財センター | (1991) | 「清水町 上清水 4 遺跡・共栄 2 遺跡・共栄 3 遺跡」北埋調報 70 |
| 北海道埋蔵文化財センター | (1992) | 「音威子府村 咲来 2 遺跡・咲来 3 遺跡」北埋調報 73 |
| 下條信行 | (1985) | 「伐採石斧」『弥生文化の研究 5』 |
| 苫小牧市教育委員会 | (1987) | 「厚真 7 遺跡」『苫小牧東部工業地帯の遺跡群II』 |
| 町田 章 | (1985) | 「木器の生産」『弥生文化の研究 5』 |
| 松下 亘 編 | (1974) | 『西股』北海道第 4 研究会 |
| 宮下健司 | (1983) | 「有孔砥石」『縄文文化の研究 7』 |

IV 美々7 遺跡の調査

1 調査の概要

遺跡は美沢川左岸の標高 23 m の台地上及びそれにつながる斜面に立地している。北東部で美々8 遺跡に接し、東斜面を下ると美々8 遺跡低湿部である。美沢川を挟んだ対岸には、美沢 2、美沢 3 遺跡がある。

昭和 50 年度の分布調査に基づく本遺跡の範囲は 10,610 m²で、後に 660 m²追加された。このうち、西側 7,400 m²については昭和 53・55 年度に調査されており、すでに滑走路となっている。

今年度は台地上平坦部と南斜面及び東斜面の調査を行った。当初の調査予定範囲は b 66-55 区と a 67-06 区を結ぶ線から東南に向かった、標高 20 m のコンタラインまでの 1,000 m²であった。しかし、遺物が範囲外の斜面部分にも広がっていたこと、調査の進行状況により次年度調査予定域の一部をも調査したことから、最終的な調査面積は 2,323 m²となった(図IV-1)。

調査着手前は平坦面が草地で、斜面には低木が多く茂っていた。平坦面では Ta-a 層の露出しているところもあった。また、過年度調査区に接する西側 2 グリッド列は、Ta-c 層下面まで削平されていた。

調査は Ta-a 層上面、Ta-b 層上面、I 黒層、II 黒層の順に行い、東斜面の一部では地表面にみられなくぼみと III 黒層についても調査した。表土、Ta-a 層、Ta-c 層は重機により除去した。

遺構は検出層の違いを考慮して、Ta-a 層上面から I 黒層は P-1~20 まで、II 黒層では P-21 から、検出された順に番号を付していった。P-19、P-20 は欠番である。

Ta-a 層上面：隣接する美々8 遺跡で、Ta-a 層上面の遺構と遺物が確認されており、本遺跡でも同様の遺構や遺物の存在が予想された。このため、当初の調査予定範囲内では地表面に生えていた草木のみを重機で剥ぎ取り、Ta-a 層上面での遺構・遺物確認調査を行った。その結果、昭和期と思われる掘り込みや溝跡および 10 点の遺物が検出された。遺構は I 黒層まで掘り込まれていたことから、I 黒面でも大差なく確認出来るものと考えられた。遺物は現表土と区別しがたい土層から出土したものと重機による火山灰除去の際に採集されたものであった。このため、残りの部分については Ta-a 層上面での調査は行わず、Ta-b 層及び I 黒層で確認された遺構覆土をもって、この段階の掘り込みとした。また、範囲外の斜面には地表から確認できるくぼみがあり、これらの調査も行った。

Ta-a 層上面の遺構は掘り込み(23)、溝跡(2)、柱穴列(1)、トイレ跡(1)、試掘溝(1)である。時期を推定しうるものはすべて、昭和期と考えられるものである。掘り込みとしたものの半数からは葉莢やタバコの包装紙など、駐留米軍に関係すると思われる遺物が出土している。

遺物は金属器など 10 点である。

Ta-b 層上面：Ta-a 層上面と同様、美々8 遺跡の調査結果を参考にして、遺構と遺物の確認調査を行った。ここでは道跡が 1 本検出された。また、I 黒層検出の P-10 も本来はこの面から掘り込まれた遺構と判断された。壙底から山刀(タシロ)とキセルが出土し、江戸時代前半のアイヌの墓と考えられる。出土遺物はなかった。なお、台地上での本層の厚さは 6 cm 以下である。

I 黒層：遺構は検出されなかった。Ta-b 層との境あたりから炭化物が多く出土している。倒木が炭化した状態で、人為的になされた様子は認められない。

遺物は土器や無茎石鏃、剥片、礫の 95 点が出土した。土器は 2 個体分のみで、続縄文時代末葉あるいは擦文時代と思われるものである。文様にオホーツク式土器の影響が感じられる。礫の中には美々

8遺跡にもみられた、2個並列した状態で出土する礫(双礫)や小規模な集中を示すものがある。他に、本来はII黒層に含まれていたと考えられる土器や石器類30点が風倒木根跡から出土した。

II黒層：遺構は住居跡(2)、土壇(23)、Tピット(3)が検出された。

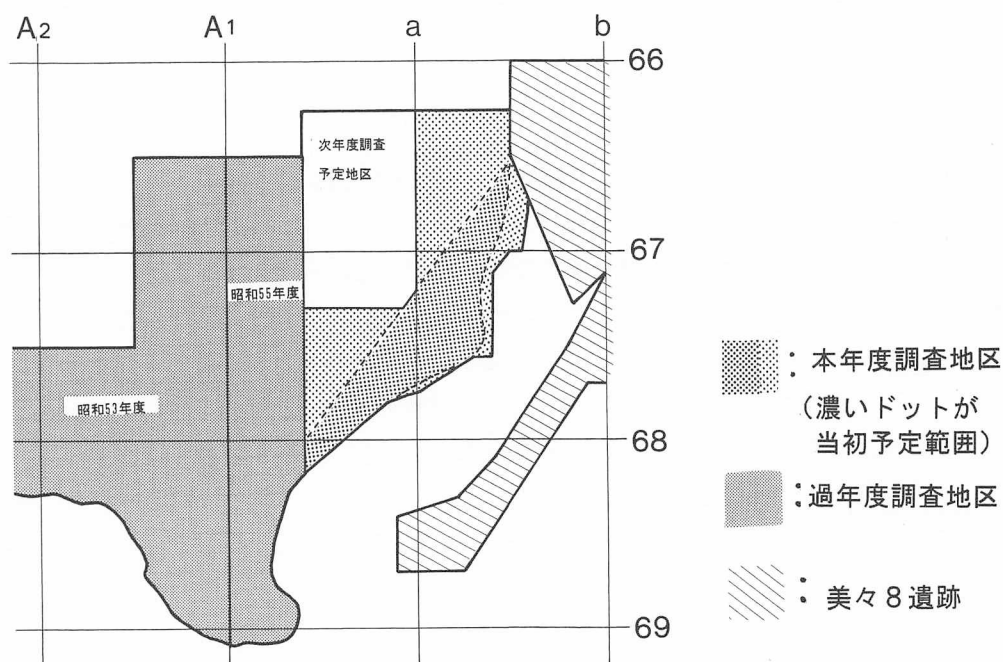
住居跡は縄文時代早期末葉のもので、平面形が楕円形のもの(H-1)と円形のもの(H-2)とがある。

土壇も縄文時代早期末葉と考えられるものが多く、縄文時代後期初頭のものもある。平坦部と斜面の境あたりで多く検出され、とりわけa 67-00区付近に約半数の11基が集中している。ここには、足形付土製品と完形土器とを出土したP-37、石鏃やスクレイパーなどの石器21点を出土したP-38など、墓壇と考えられるものがある。

Tピットはいずれも溝状のタイプである。底面に杭穴はみられなかった。形態や検出面から縄文時代後期のものと考えられる。美々8遺跡(平成元年度)で検出されたTピット列のつづきをなすものである。

遺物は土器片7,717点、石器630点、剥片2,937点、土製品5点、礫205点の計11,494点が出土した。土器の大半は縄文時代早期のコッタロ式や東釧路IV式で、前者は斜面下方に、後者は斜面上方に分布する傾向がある。他には縄文時代中期、晩期のものがみられる。石器には縄文時代に一般的な器種がみられ、縄文時代早期と思われる石鏃やつまみ付ナイフが多い。b 66-96区では、石刃鏃が1点出土した。

III黒層：b 66区東側斜面は美々8遺跡の過年度調査区に接しており、切り面となっていた。ここ(b 66-45区)のIII黒層でスクレイパーが1点出土した。このため、周囲の約150m²を調査したが、他に遺物は出土しなかった。
(葛西智義)



図IV-1 美々7遺跡の調査区

2 表土層及び第I黒色土層の調査

ここでは、概要で述べた Ta-a 層上面、Ta-b 層上面、第I黒色土層で検出された遺構と遺物について説明する。表土層の名称は美々8遺跡に合わせて使用したが、Ta-a 火山灰降下以降と考えられた遺構や遺物がこれに相当する。

(1) 表土層の遺構 (図IV-2~5、図版IV-2~4)

P-1~18

掘り込みは23ヵ所で検出された。このうち、遺物を出土したものと形状に特徴のあるもの、17例を図示した。図示していないものは、長軸や径が1m前後の方形あるいは円形のもので、a 66-09区、a 67-11区、b 66-58・83・84区、b 67-61区に1ヵ所ずつみつまっている。例としてP-7を図示しておく。P-13~15・17・18は地表面でくぼみが確認されていた。

P-1・4・8・14・12・3・18・13は駐留米軍の演習に関係すると思われる葉莢や米国製タバコの包装紙、英字の書かれた小袋などを出土したものである。掘り込みの形状はまちまちであるが、斜面に掘られ、長軸が等高線に平行するものが多い。個々の遺物内容は一覧表に記した。主な遺物は図版に示した。P-18の小袋には商品名と思われる“SILVER TEX”の文字がある。これは他に書かれている文字から判断して、薬剤袋と思われる。P-13の金属筒にはロウ様の凝固物が入っている。

P-15・11・17・2・9は、米軍関係とは言い切れない遺物を出土したものである。P-15にはワイヤーで縛られた2本の丸太が埋められていた。アンカーと思われる。P-11からは大小2種類の缶が2個ずつ出土した。図示したもの(図IV-4-1)が大きな方で、直径8.5cm、高さ11cmである。空気孔が空けられており、液体が入っていたものと思われる。小さなものは直径6.5cm、高さ7cmで、ともに蓋が空いた状態であった。缶はP-1の覆土上面からも出土しており、それは直径6.5cm、高さ8cmである。P-17では、ボルトとそれに伴うワッシャーが出土している。P-2では先端の尖がった角材、9からは丸棒状の木が出土している。後者は混入した自然木かもしれない。P-12でも板が出土している。

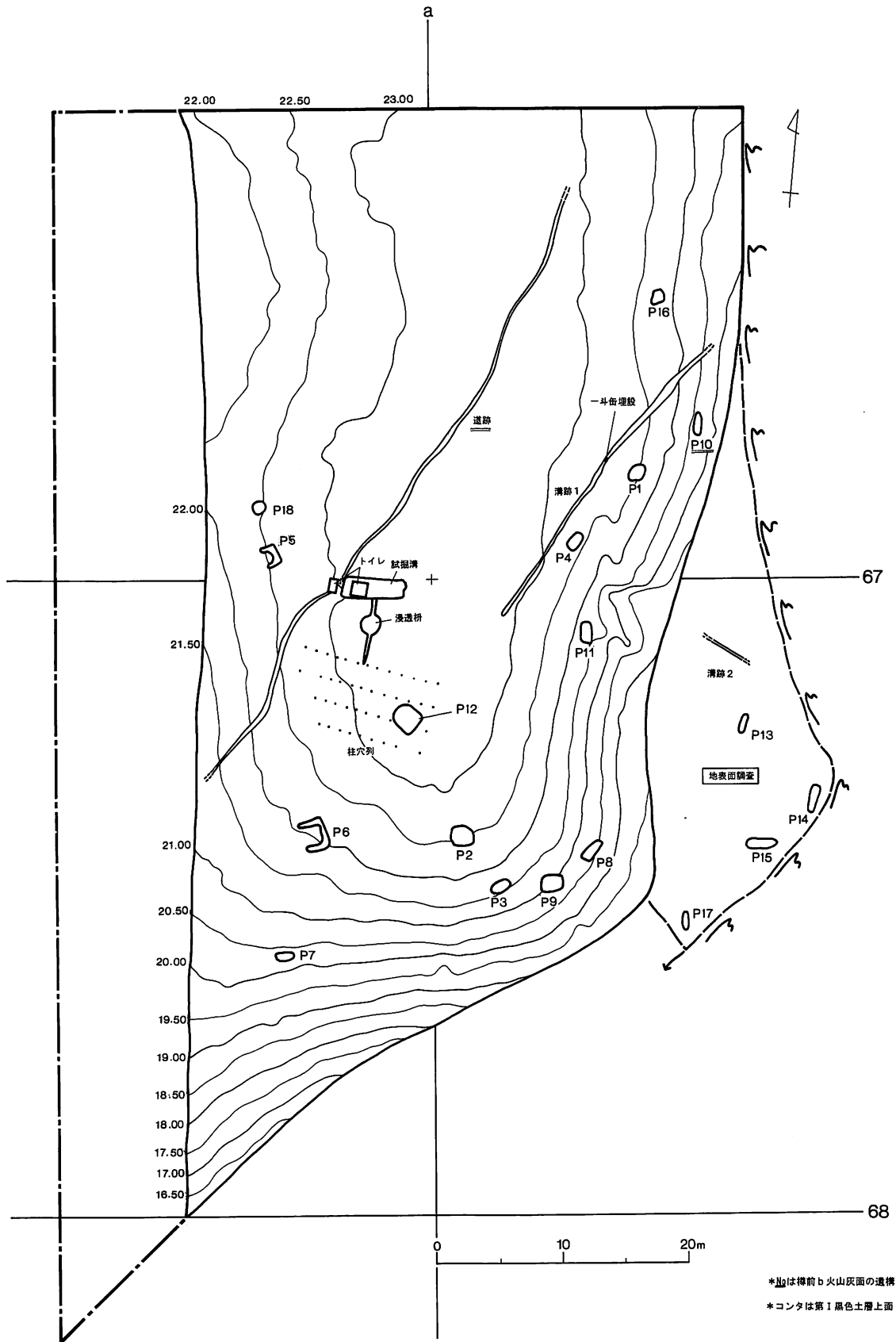
P-16・6・5は掘り込みの形に特徴がある。16は長方形の掘り込みの南側に後から2個の四角形の穴を掘っている。P-5・6はコの字形をしている。

溝跡

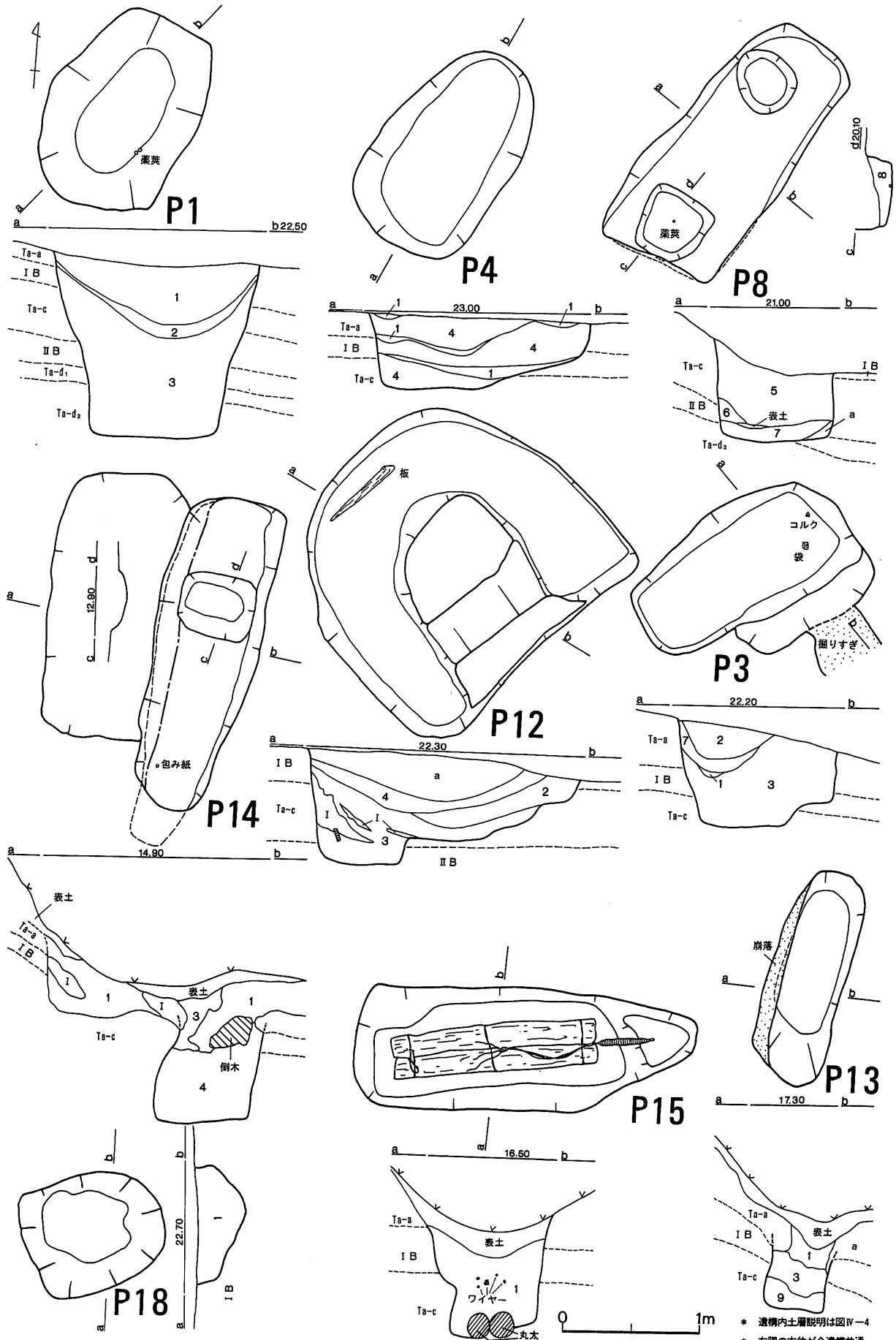
東斜面の上部(溝跡1)と地表面調査区(溝跡2)とで検出されている。

溝跡1は長さ27m分が確認された。深さはTa-a層上面から5~15cmである。平坦面ではTa-a層が薄いことと関連するのか、南に行くほど浅くなる。当初は道跡と考えていたが、深さのあることなどから溝跡とした。覆土は黒色土(表土)とTa-a火山灰の混じった土で、腐食していない植物茎が多く入っていた。ほぼ中央で、Ta-c層中位に達する掘り込みに埋められた一斗缶が出土した。一斗缶は一辺22.5cmの方形、深さ45.5cmの大きさで、薄い鉄板製である。美々8遺跡でもこれと同じような一斗缶を埋設した溝跡が検出されている。用地の境界標なのであろうか。

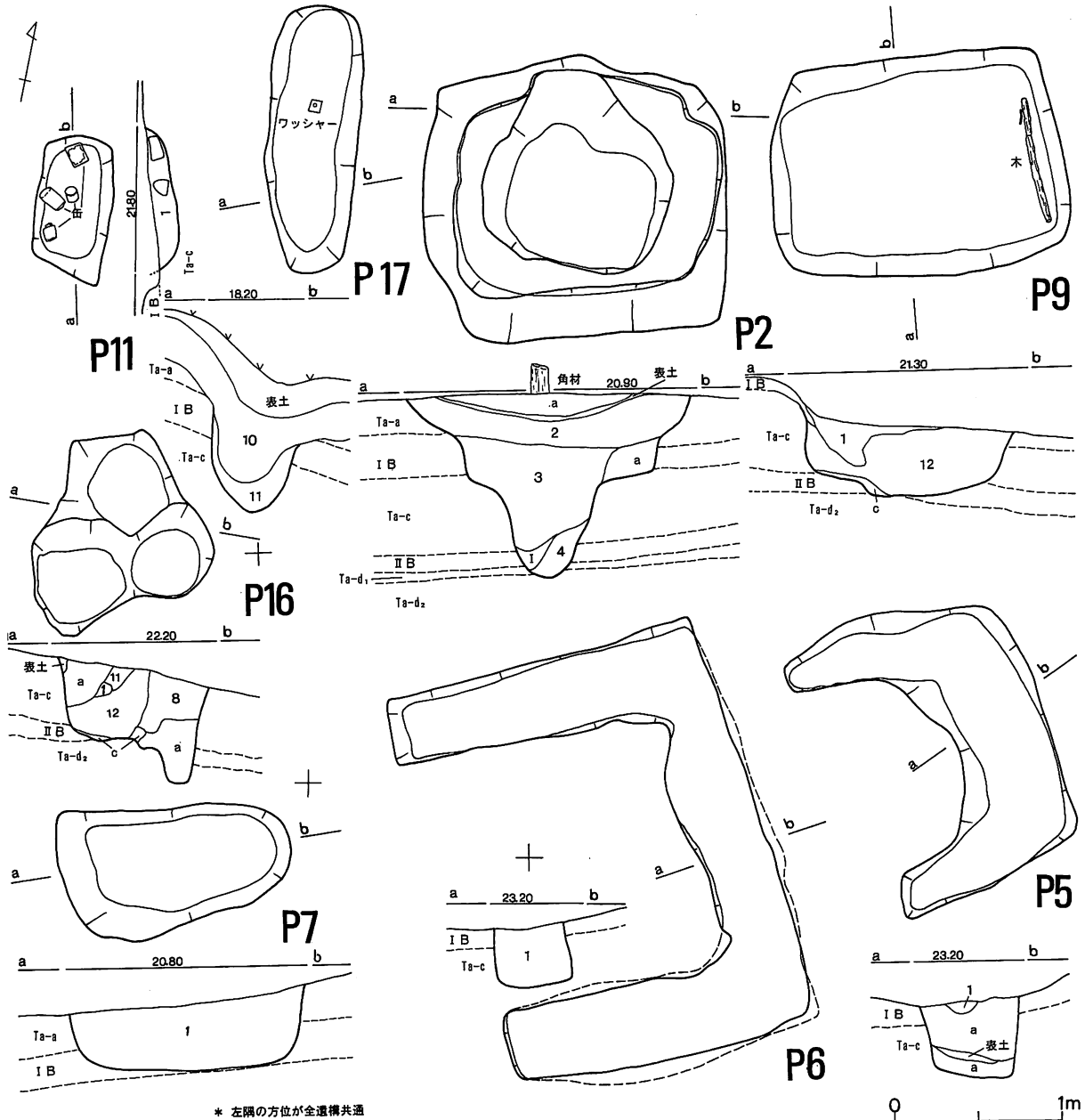
溝跡2は北側にあった土盛りの性格把握のために入れたトレンチによって検出された。東側は浅くなり、西側は排土場の下になっていたため、およそ3m分のみを確認した。トレンチ断面での土層状態が溝跡1に類似していた。



図IV-2 表土層及びTa-b層の遺構



図IV-3 表土の遺構 (1)



* 左隅の方位が全遺構共通



遺構内土層

- a • Ta-a
- I • I B
- c • Ta-c

- | | | |
|------------------------|-----------------------------------|--------------------------|
| 1. 暗褐色土 (表土+Ta-a) | 5. 暗褐色土 (Ta-a+I B+Ta-c+II B+Ta-d) | 9. 黒褐色土 (I B) Ta-c |
| 2. 明黄褐色土 (Ta-a) 表土 | 6. 明黄色火山灰 (Ta-c) Ta-a | 10. 暗褐色土 (Ta-a) 表土 Ta-c |
| 3. 明黄白色火山灰 (Ta-a) 表土 | 7. 暗茶褐色土 (Ta-c) II B | 11. 暗黄褐色土 (Ta-c) I B |
| 4. 暗黄褐色火山灰 (Ta-a+Ta-c) | 8. 暗茶褐色土 (Ta-c+II B+Ta-d) | 12. 暗褐色土 (Ta-a+I B+Ta-c) |



(P11)



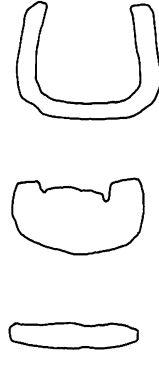
1



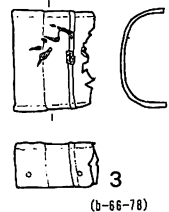
(南斜面)



2



3



(b-66-78)

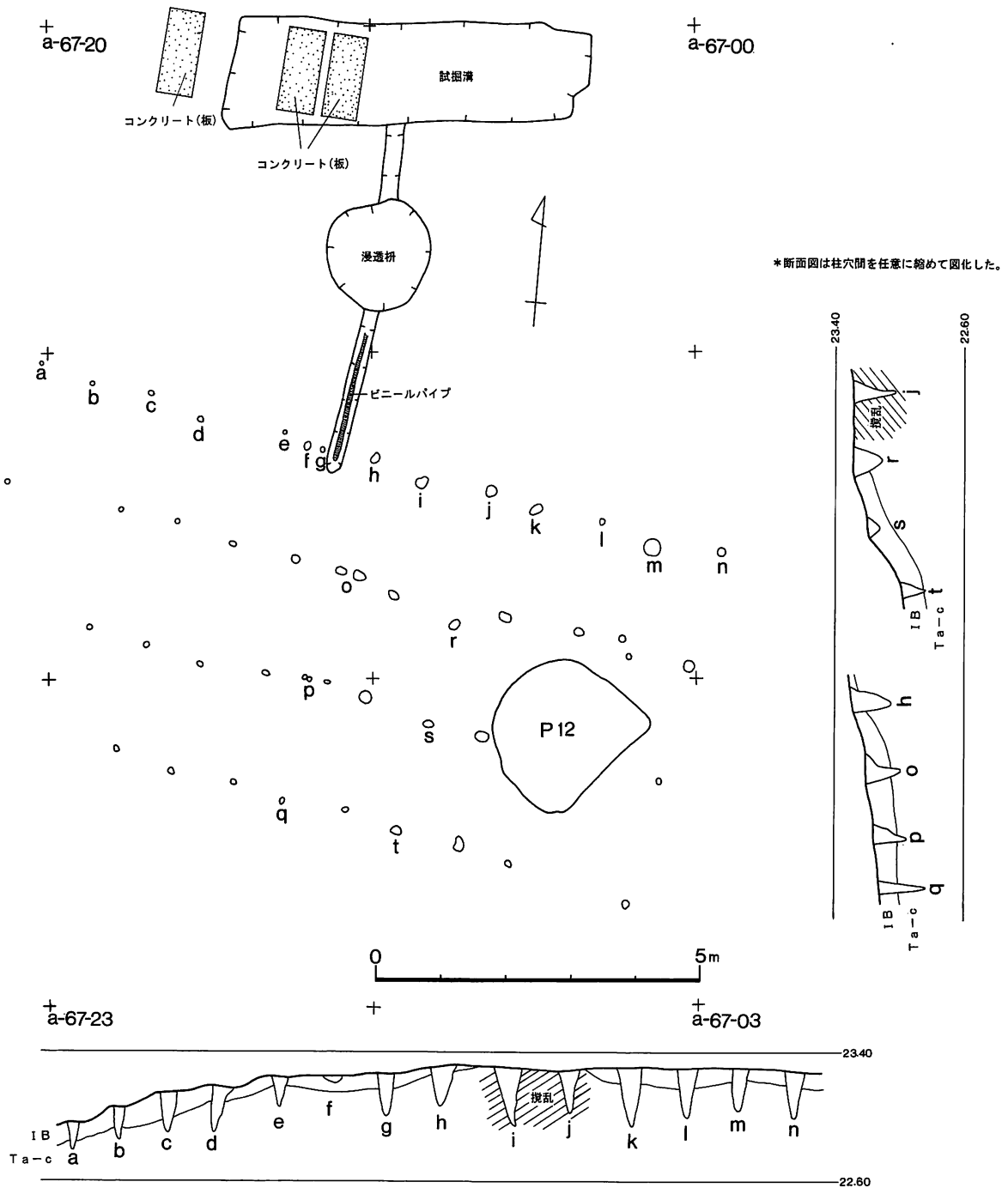
0 5cm

図IV-4 表土の遺構 (2) と遺物

柱穴列

図示した位置に、東西に長く並行する4列の柱穴が検出された。これらの柱穴は断面図に明らかなように、すべて下端がとがっている。しかも穴の堆積土にはTa-a火山灰の崩落がみられることから、この火山灰よりも上から打ち込まれていると判断した。柱穴間の距離を測ると(a・n)のあいだが10.8m、(a・c・e・h・j・l・n)の7点は、それぞれほぼ1.8m間隔になっている。すなわち6間の長さであり、これに直交して3間となる。これらの間にある(b・d・g・i・k・m)の6点は中間点補強のためのものと考えられる。

ビニールパイプの引込み傾斜をみると、この3間×6間の建物の中から、浸透枳に通じている。さら



図IV-5 柱穴列

に、この建物の北 5 m にコンクリート板の底が残るトイレ跡のあったことから、作業用の一時的な建物、いわゆるプレハブ小屋の跡であろうと判断した。柱穴がすべて抜き取られた状態であることは、撤去の様子を物語るものであろう。

いくつかの空中写真から、昭和 51 年春から昭和 52 年初夏の間、この場所が造成されていることが判明した。昭和 52 年以降は、草木の回復がすすむ一方である。したがって、この柱穴列は新空港の建設工事に際しての作業小屋跡と推定される。この推定は、トイレが昭和 50 年の試掘溝の上に乗っていることとも矛盾しない。

試掘溝

a 67-00 区から 10 区にかけて、昭和 50 年に千歳市教育委員会によって行われた試掘（大島 1976）の跡が検出されている。なお、a 67-05 区にも試掘溝のある事が報告されている。同区では I 黒・II 黒層の調査を通じて土層の乱れがみられたが、事前に試掘溝の位置を確認しておかなかったため、範囲を明らかにできなかった。加えて、重機による火山灰除去作業の影響で、上部の土層がずれて試掘溝部分にかぶさってしまっていたと思われることも指摘しておきたい。こうした例は他にも見られ、Ta-a 層上面で掘った P-3 は Ta-b 層上面での再確認の際、ほとんど押し出された Ta-b 層によって覆われていた。Ta-b 層を掘り抜いている P-10 上面でも、斜面上方にあたる土壌西側に Ta-b 層の張り出しがみられた。（西田 茂・葛西智義）

(2) 表土層出土の遺物（図IV-4-2・3、図版IV-7-4）

2・3 ともに出土層が明らかではなく、あるいは Ta-b 層に含まれていた可能性もあるが、ここで扱うことにする。

2 は鉄斧である。重機による南斜面の Ta-a 層除去中に出土した。ソケット断面が角形で、ソケットの折り返しは全周しない。瀬川分類（瀬川 1984）の II 類に相当するものである。ソケット内の刃部側には余分な板を折り込んだと思われるところがある。

3 は銅製の鞘口金具と思われる。b 66-78 区の Ta-c 層除去作業中に、当初発掘予定範囲の壁際から出土した。風倒木の影響を受けたものか、壁上面の土層中から落ちてきたものと考えられる。両側面に 2 個ずつ、小孔がある。一部欠損しているが、図右側の縁に 4ヶ所の切り込みがみられる。表面にわずかに木質部が残っている。

(3) Ta-b 層の遺構とその遺物（図IV-2・6、図版IV-6）

P-10

位置 b-66-67 区 規模 1.86/1.71×0.64/0.5×0.4 m

平面形 長楕円形 長軸方向 南-北

調査 I 黒層で検出された。覆土上面に安定した Ta-a 層があり、その下に Ta-b 降下軽石を含む、埋め戻しと考えられる土が堆積していた。遺構は Ta-b 層を掘り抜いて構築され、埋め戻し後の遺体腐食によるへこみに Ta-a 層が溜っていたと考えられる。Ta-b 層上面で検出できなかったのは、Ta-b 降下軽石のすきまに残っていた Ta-a 火山灰と試掘溝で述べた Ta-b 層の張り出しにより、遺構の輪郭を捕らえきれなかったためである。

底面から山刀（タシロ）とキセルの雁首及び吸口が出土した。遺構形状と Ta-a 層の落ち込みから伸展葬・南頭位と考えられ、山刀（タシロ）は脇腹あたり、キセルは足元の位置から検出されている。

人骨は検出されず、やや黒ずんだ部分（汚れ）がみられた。

遺物 山刀（タシロ）（3）には柄や鞘の木質部が残っている。錆のために刀身部と付着した状態である。茎はX線写真から図化した（図版IV-6-4）。鞘には、樹皮と思われる巻物が2条みられる。茎には目釘穴が2つあり、その内の一つに目釘が残っている。取り上げ後、区（まち）の部分から折れて、刀身部と柄部とに分れてしまった。柄側の折れ口をみると、茎をくるむ錆の浸透した木質部の上に、さらに樹皮と現存する柄表面木質部の二層があるようにみえる。

キセルは鉄製の雁首（1）と銅製の吸口（2）である。材質が異なっているが、出土状態からは一組のキセルと思われる。油返しに湾曲がほとんどなく、古泉分類（古泉 1985 a）の第II類Cに相当する。ラウとの接続部には亀裂があり、膨らんだ状態である。つめ口を壊した可能性がある（馬場 1942）。吸口は肩がみられない、古泉分類の第II類Bである。

時期 Ta-b 降下(1667年)以降に掘り込まれ、Ta-a 降下(1739年)以前に埋まっている。西暦1700年前後の墓壇である。

道跡

Ta-b 面で Ta-a 層の残る、線状の浅い落ち込みとして検出された。この Ta-a 層を除去すると Ta-b 層が5 cm 程度、I 黒層にもぐり込んだ状態であった。北側は b 66-84 区から、南側は a 67-33 区まで確認され、幅は平均30 cm である。トイレ跡には切られている。道跡に関連すると思われる遺物は見つかっていない。

（葛西智義）

(4) I 黒層の遺物（図IV-7・8、図版IV-7）

図示した土器2個体、石鏃3点、礫14点と黒曜石の剝片2点、礫3点が出土している。この他、風倒木の跡から出土し、本来はII黒層に含まれていたと考えられる遺物が30点ある。

分布では多くが発掘区北半からの出土である。主に土器や礫はI黒層上位で、石鏃や剝片は中位から下位で出土している。

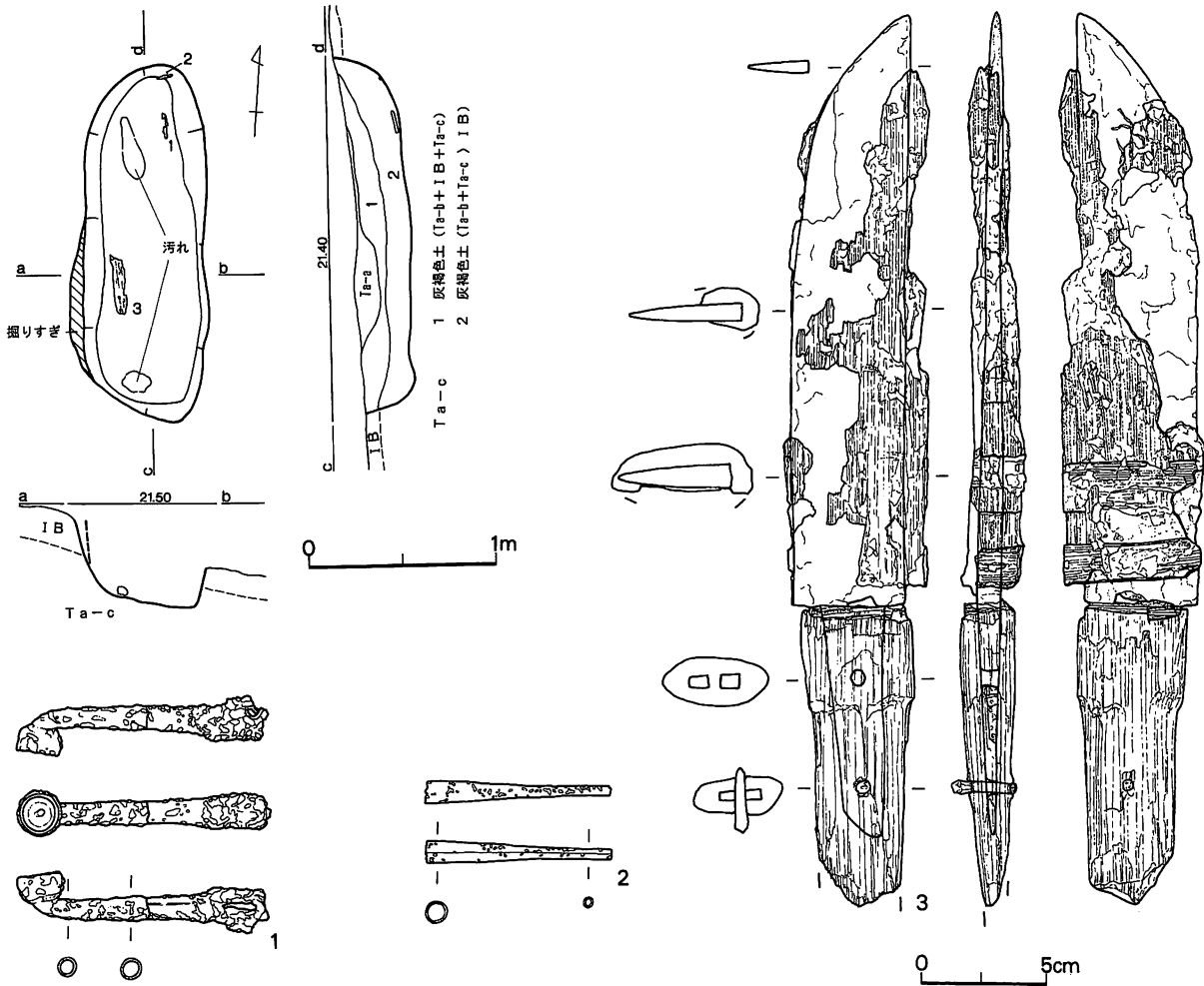
4・5は並んだ状態で出土し、双礫とされるもの（本書205ページ）である。双礫5の縁辺にハガレがみられるが、人為的なものかどうかはわからない。

10~17は他の礫に比べるとまとまりがあり、集中礫とした。風倒木によって形成されたI黒面のへこみと盛り上がったTa-c層との上に乗っていた。

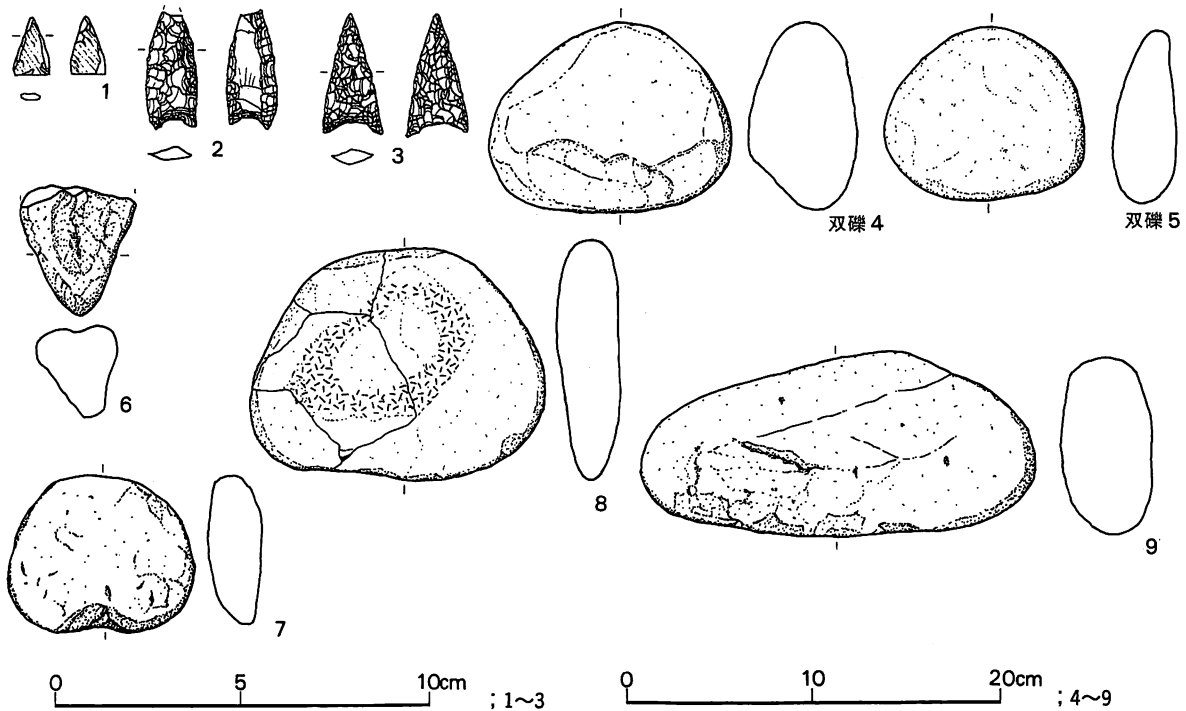
18・19は伴出といえる状態で出土した土器である。ともに、器体に炭化物が付着しており、胎土には小礫の混入が目立つ。18は底部のないほぼ完形、19は口縁部破片である。18にはオホーツク式土器の舟型刻文を思わせる刺突がめぐっている。縦に6~8段施され、下位の刺突が左にずれている列が多い。口唇部は平坦で、外傾している。底部は張り出すようである。器表面には線状のかすかな調整痕がみられる。19には沈線がある。上位5本と下位5本の沈線間に間隔があり、前者は上に行くほど細い沈線となり、後者はこの逆である。櫛状工具を反転させて施文したものと思われる。口唇部は中央がへこんでいる。口縁と沈線との間には横方向の調整痕がみられる。

1~3は石鏃である。1は粘板岩製である。加工がほとんどみられず、三角形の岩片の可能性もある。2・3は黒曜石製の無茎凹基である。縄文時代晩期末葉~統縄文時代にしばしばみられる形態の石鏃である。6~9は礫である。6の図化面には剝落とくぼみがある。礫のいたみか、人為的なものかは不明確である。この礫はI黒層下位から出土している。8の網をかけた部分には煤状の付着物がみられる。

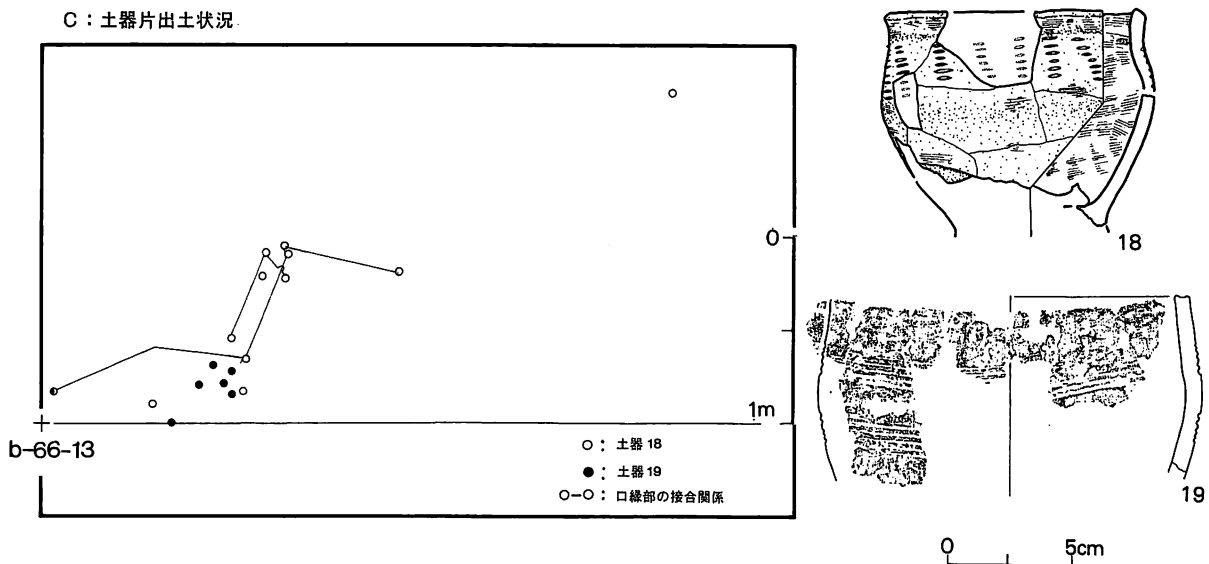
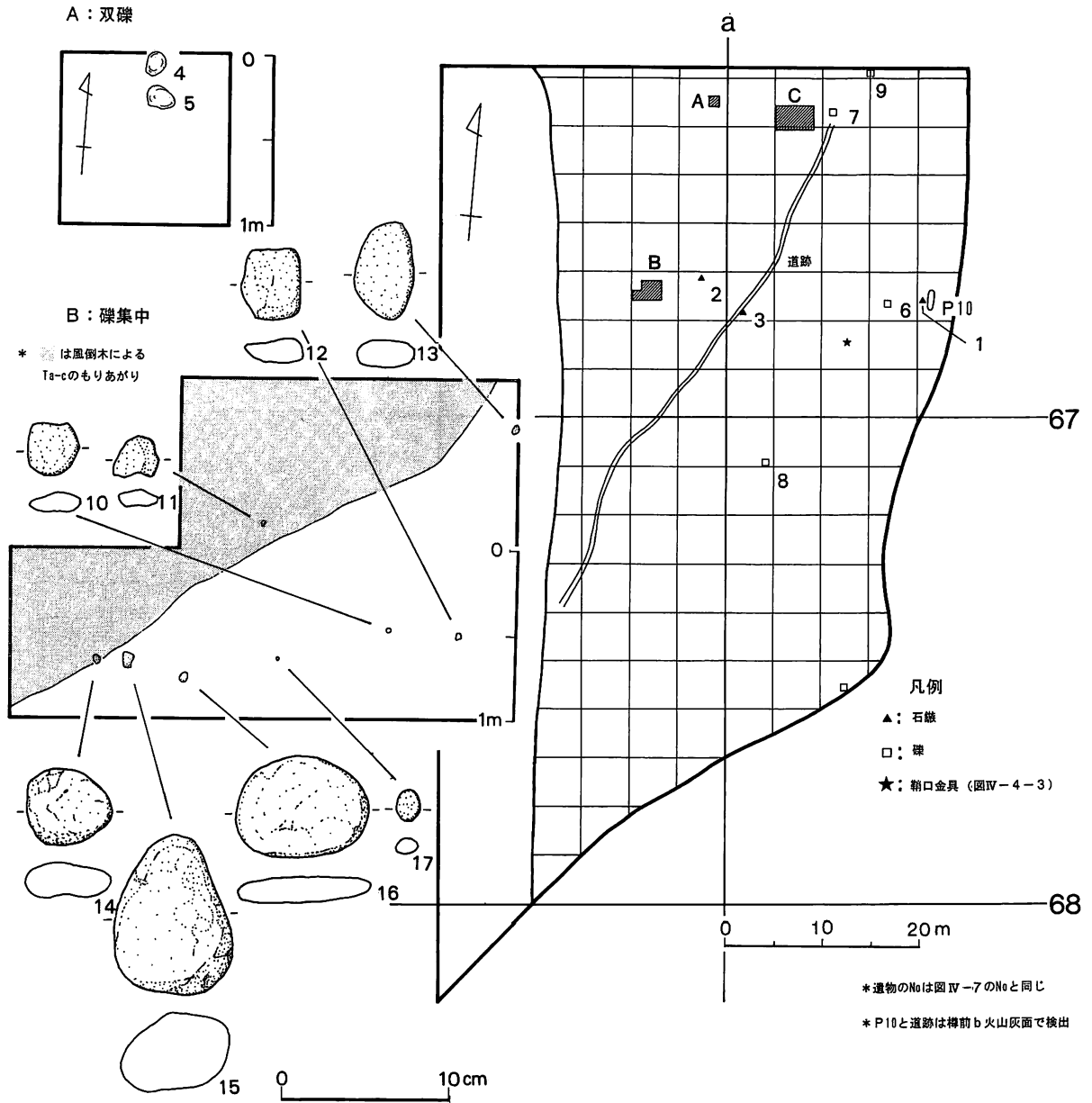
（葛西智義）



図IV-6 P-10 と出土遺物



図IV-7 I黒層出土の遺物(1) 石鏃・双磔・磔



図IV-8 I 黒層出土の遺物 (2) と出土地点

表土層および I 黒層遺物一覧表

表IV-1 表土層出土遺物一覧

名 称	数	名 称	数	名 称	数	名 称	数	名 称	数	名 称	数	名 称	数		
鉄 斧	1	鞘口金具	1	鉄 塊	1	葉 莢	3	煉 瓦 片	1	板	1	ポ リ 栓	1	琥 珀 片	1

表IV-2 遺構出土遺物一覧 (表土層)

遺 構 番 号	名 称	数 量		遺 構 番 号	名 称	数 量		遺 構 番 号	名 称	数 量	
		覆 土	底			覆 土	底			覆 土	底
P-1	葉莢	2	2	P-8	葉莢	2		P-14	計	1	3
	缶破片	8			包み紙(煙草)	1			P-17	鉄製品(ボルト)	1
	缶蓋	6		計	3		〃(ワッシャー)			1	
	コルク栓	2		P-9	木	1		計	1	1	
	紙類	4	1		計	1		P-18	薬剤袋	1	
土器(Ib-2)		1	P-11	缶		4	計		1		
計	22	3		計		4	溝跡1	一斗缶		1	
P-3	小袋		1	P-12	包み紙(煙草)	2			ビニール袋	1	
	コルク栓		2		袋	1		計	1	1	
	角材	1	3	板	1		柱穴列	杭	2		
計	1	3	油脂製品	1		計		2			
P-4	葉莢	14		P-13	ガラスビン	1		トイレ跡	便器片	1	
	缶蓋	2			紙類	1			計	1	
	包み紙(煙草)	1		リップクリーム?	1		試掘溝	鉄片	3		
	紙類	1		計	3			計	3		
計	18		P-14	葉莢	1						
P-5	棒(自然木?)	1			包み紙(煙草)		1				
			1	土器(Ib-2)		2					
P-6	棒		1								
	計		1								

表IV-3 I 黒層出土遺物一覧

名 称	数	名 称	数	名 称	数	名 称	数	名 称	数	名 称	数	名 称	数
土器(Ib-4)	10	土器(VIb)	74	石 鏃	5	スクレイパー	1	剝片(黒曜石)	18	剝片(頁岩)	1	磔	16

表IV-4 遺構出土掘載遺物一覧【Ta-b層】

遺 構	図番号	名 称	層	cm 長さ×幅	cm ×厚さ	g ×重さ	素 材
P-10	IV-6-1	キセル(吸口)	底面	7.3×0.8	0.8×	3.0	銅
		〃(雁首)	〃	5.3×0.8	0.8×	8.0	鉄
		山刀(タシロ)	〃	34.9×5.7	2.4×	346.0	〃

※図IV-6-1の吸口は、赤沼氏による蛍光X線分析の結果では真鍮の可能性もある。

表IV-5 表土・I 黒層出土掘載遺物一覧

図番号	名 称	層	cm 長さ×幅	cm ×厚さ	g ×重さ	石 材
IV-4-1	缶	表土	11.6×8.8	×	126.0	鉄
	鉄 斧	〃	14.2×5.8	5.4×	612.0	〃
	鞘口金具	〃	4.1×3.3	0.2×	21.5	青 銅
7-1	石 鏃	IB	1.5×0.9	0.1×	0.2	粘板岩
	石 鏃	〃	3.1×1.3	0.3×	1.5	黒曜石
-3	石 鏃	〃	3.2×1.6	0.4×	1.4	黒曜石
-4	双 磔	〃	9.9×13.0	5.9×	955.0	砂 岩
-5	双 磔	〃	9.2×10.7	3.4×	494.6	片麻岩
-6	磔	〃	6.8×6.1	4.8×	197.4	砂 岩
-7	磔	〃	8.2×10.0	2.9×	401.1	泥 岩
-8	磔	〃	12.2×15.6	3.5×	985.0	安山岩
-9	磔	〃	9.8×21.1	6.3×	1700.0	橄欖岩
8-10	集 中 磔	〃	2.3×2.3	2.7×	5.8	砂 岩
-11	集 中 磔	〃	1.7×2.0	0.7×	2.8	泥 岩
-12	集 中 磔	〃	3.1×2.6	1.1×	13.5	泥 岩
-13	集 中 磔	〃	4.2×2.7	1.2×	24.1	泥 岩
-14	集 中 磔	〃	3.2×3.8	1.5×	25.8	泥 岩
-15	集 中 磔	〃	6.9×5.1	3.5×	166.5	砂 岩
-16	集 中 磔	〃	4.3×5.8	1.0×	47.8	片麻岩
-17	集 中 磔	〃	1.3×1.0	0.7×	1.2	泥 岩
-18	土 器	〃	(推定高 8.8 cm)			
-19	土 器	〃				

3 第II黒色土層の遺構

28個を遺構として調査した。これらは形態と土層の堆積状態から住居跡(H)、土壙(P)、Tピット(TP)に分け、土壙はさらにb66-99区とb67-90区から集中して検出された11個の[土壙群]、それ以外の[土壙]及び[自然営力の可能性のある土壙]の3つに細分した。これらに[動物の足跡など]を加えて報告する。

(1) **住居跡** 平坦面の東南端、土壙群の両側に2軒検出された。平面形は楕円形(H-1)と円形(H-2)である。時期はI群b-4類期と思われ、ともに炉跡はみられなかった。この時期の住居跡は本遺跡斜面下部(昭和53年度調査部分)と美沢川を挟んだ対岸の美沢3遺跡でも検出されており、炉のみられないものが多いようである。また、過去の美沢川流域の調査では該期の遺物は多く出土するものの、台地上では住居跡が見つかっていなかった。今回の本遺跡及び美々8遺跡の調査によって、台地上にもこの時期の住居跡があることが明らかとなった。

H-1 (図IV-10、図版IV-9)

位置 a-67-02・12 規模 3.46/3.14×2.42/2.18×0.32 m

平面形 楕円形 床面積 5.32 m²

調査 Ta-d₁層上面で、楕円形に広がるII黒層の落ち込みがみられた。長軸方向にトレンチを入れたところ、床面と壁の立上りが確認された。

覆土は上位にII黒層、下位にII黒層とTa-d₁・d₂層の混じった土が堆積していた。壁際のTa-d₁層に似た褐色土(4)や張り出すTa-d₁層の存在から、壁上部での遺構範囲は不明確であった。床面や壁下部はしまりのあるTa-d₂層中であり、比較的容易に範囲を確認できた。

遺物は覆土上位のII黒層と覆土2との境にかけて多く出土した。この出土状態は遺構外のII黒層やTa-d₁層上面のそれに類似しており、覆土が遺構外から連続するものであることを窺わせた。

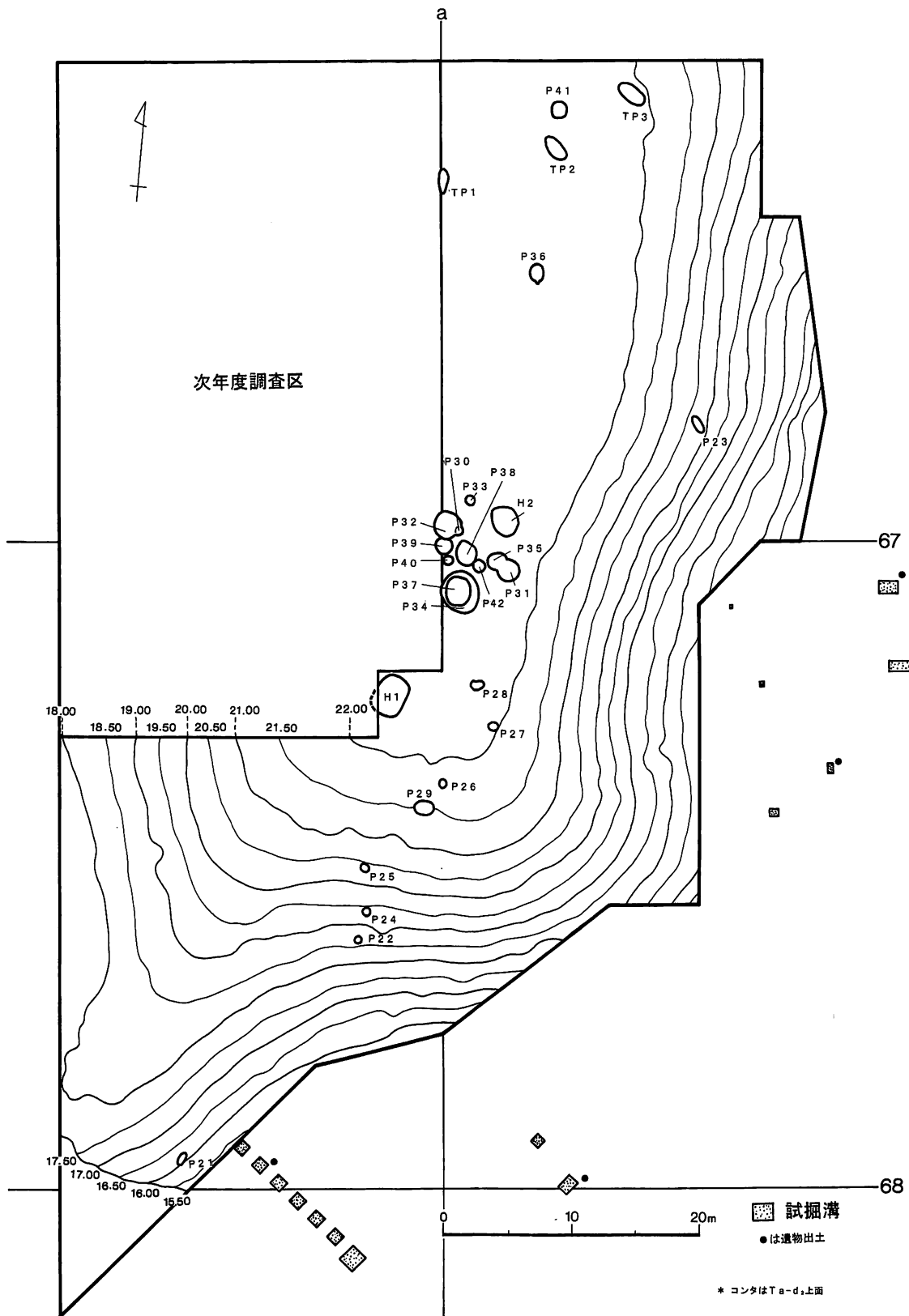
床面の西半に柱穴の可能性のある小円形の落ち込みがみられた。住居跡の一部は次年度調査区にのびており、今回の調査時に段差がつくことを避け、この柱穴様の落ち込みや床面の掘り下げは行っていない。範囲内の調査を終えた後は、柱穴の可能性のあるところに竹串を刺してTa-c火山灰で埋め戻した。

遺物 床面から東釧路IV式(1)とつまみ付ナイフ(9)、Uフレイク(10)、剝片が出土している。1の土器は赤変している。10は両側にえぐりの入る異形石器かもしれない。

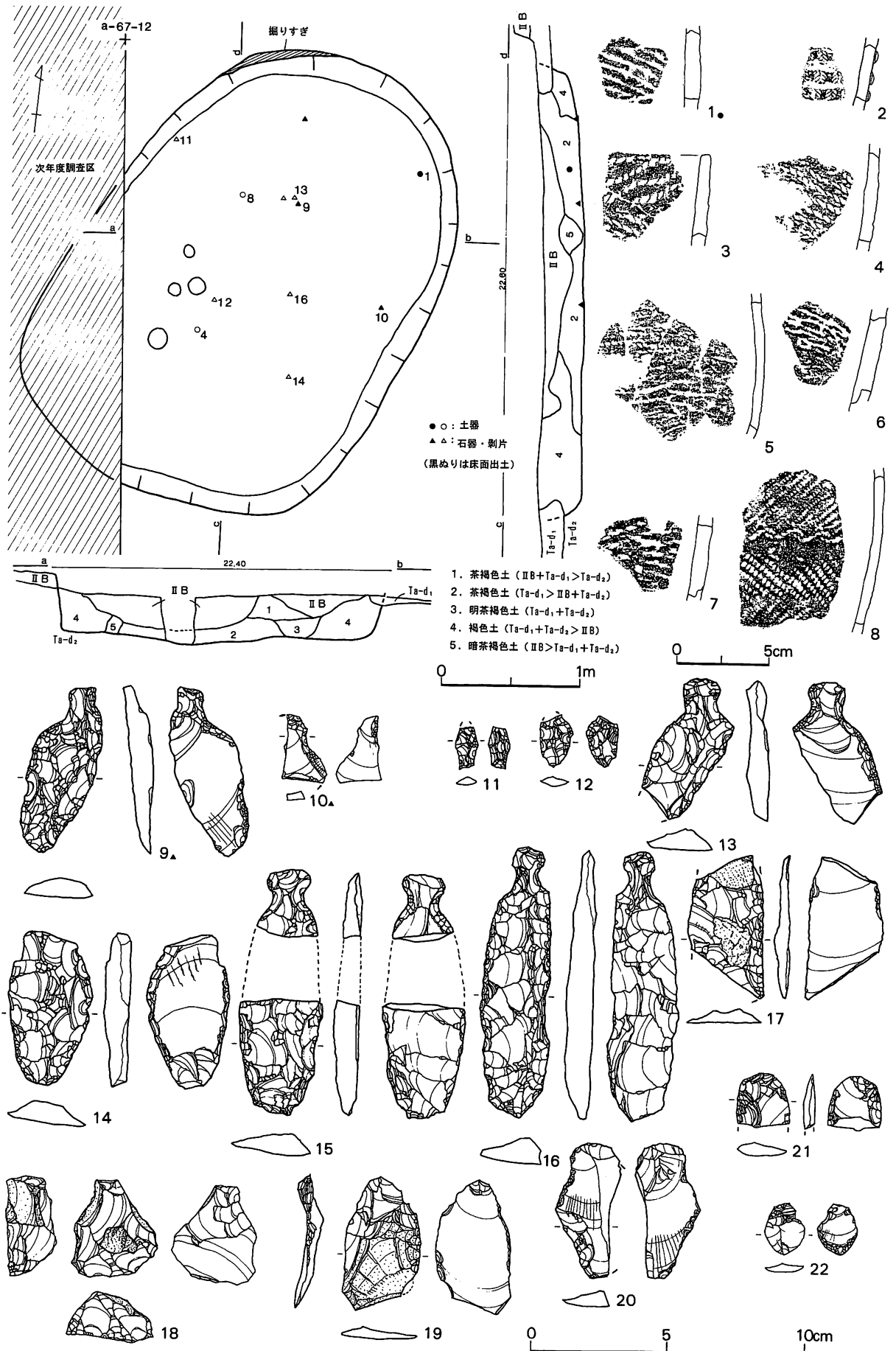
覆土からはコッタロ式(2)や東釧路IV式(3~8)、石鏃(11・12)、つまみ付ナイフ(13~16)、スクレイパー(17・18)、Uフレイク(19・20・22)などが出土している。2・3・21は覆土下位から、他は上位のII黒層や覆土2上面から出土した。15は石質から同一の石器と判断されたもので、つまみ部は上位のII黒層、刃部は覆土下位から出土している。

2は貼付上に組紐圧痕による刻みのある土器で、遺構外にも同一個体がある(図IV-24-14)。3~7は自縄自巻原体による縄文のある土器、8は通常の縄文に綾絡文が加えられた土器である。11は基部にえぐりの入る五角形石鏃、12は未成品と思われる石鏃である。13の刃部と主剝離面側のリタッチは他よりも光沢がある。刃部を再生したものであろう。14はつまみ部が明瞭ではないが、主剝離面側縁にあるリタッチからつまみ付ナイフとした。17は破損したつまみ付ナイフの可能性もある。18は急角度の刃部をもつスクレイパーである。

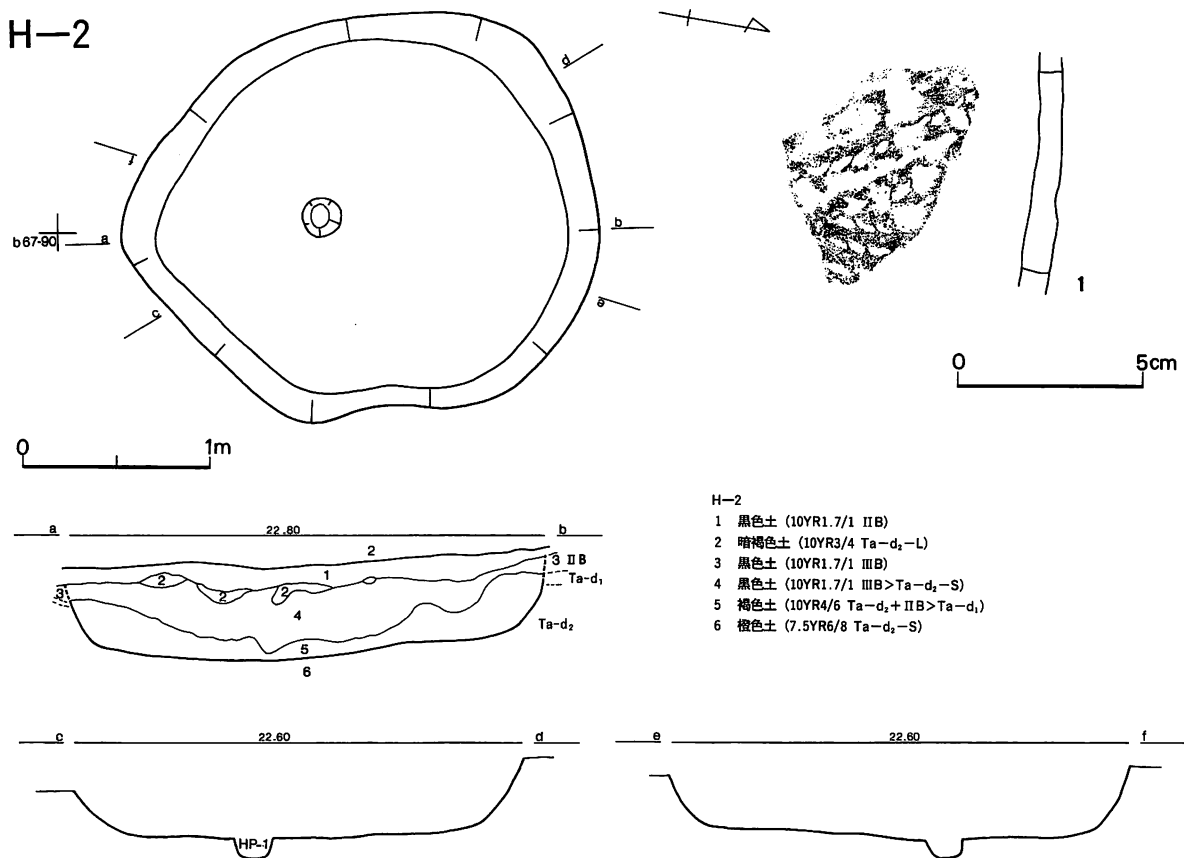
時期 確認状況と床面出土の遺物から縄文時代早期末葉(I群b-4類期)と判断される。



図IV-9 II黒層の遺構配置



図IV-10 H-1と出土遺物



図IV-11 H-2 と出土遺物

H-2 (図IV-11、図版IV-9-3・4)

位置 b-66-89・99 規模 2.51/2.19×2.04/1.81×0.36 m

平面 不整楕円形

調査 標高約 22.0 m の台地縁辺に近い平端部に作られた小型の住居跡である。

床面は Ta-d₂ 中に作られており、炭化物が散点的に認められる。炉はなく、床面中央のやや西側にある径の小さいピット (HP-1) 以外、柱穴に相当するものは認められなかった。覆土は、土質から大きく 2 枚に分けられる。床面直上に入る、Ta-d₁ と Ta-d₂ が混じった 5 層と、その上にレンズ状に堆積した II 黒層相当の 4 層である。前者は、掘り上げ土の流れ込みと考えられる。掘り込み面は、覆土 5 層に II 黒腐植土の混入が少ないことから、Ta-d₁ 層上に II 黒層が形成され始めた面と考えられる。HP-1 の覆土は、II 黒腐植土である。

遺物 覆土 4 層から縄文時代早期末東釧路 IV 式の土器片(1)と黒曜石製のフレイクが出土している。1 は、条の太い原体による羽状縄文が施されたもので、内面には光沢を帯びた炭化物が付着している。胎土には繊維が含まれる。1 は、P-31 の埋め戻しの覆土 4 層出土の土器(2)と接合する。

時期 縄文時代早期末と思われる。なお、遺物の接合関係から、本住居跡は P-31 よりも新しい時期に掘り込まれたと考えられる (図IV-12)。

(葛西智義、皆川洋一)

(2) 土壇群 (図IV-12、図版IV-10-1、図版IV-17-3)

台地縁辺に近い平坦部 (標高約 22.0 m) に、P-30~35・37~40 の 11 基からなる土壇群を検出した。時期は、遺物から縄文時代早期末東釧路式IV式(Ib-4)期と考えられる。ほとんどの土壇は、覆土に埋め戻し土が入ることから墓壇と考えられ、このうち、P-34、35、37、38、39、40 は、副葬品を伴う。特に、P-37 からは、魚骨文の施された土器や石器と共に、大小 2 点の足形付土製品が出土している。各土壇は、覆土の特徴や土壇の配置、切り合いから、時間幅を持って作られていると考えられ、これについては、まとめて述べる。

P-30 (図IV-13、図版IV-10-2)

位置 b-66-99 平面形 円形 規模 0.88/0.52×(0.80)/(0.56)×0.38 m

調査 P-32 を切って作られている小型の土壇である。壇底は、丸味を帯びたもので En-L 層中に作られている。覆土はII黒層腐植土が多く混入する埋め戻し土で、掘り込み面はII黒層中である。

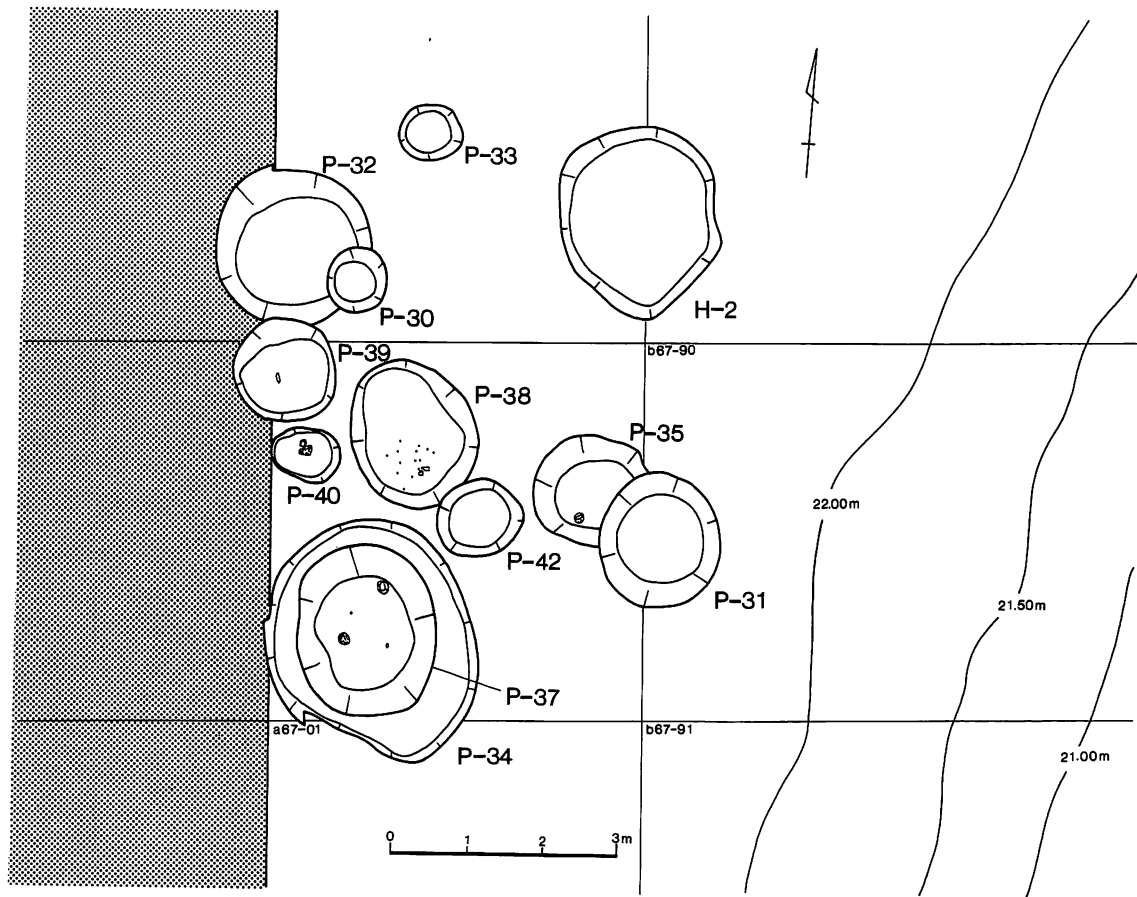
遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式 (Ib-4) 期と考えられる。

P-31 (図IV-13、図版IV-11-1~3)

位置 a-67-00、b 67-90 平面 円形 規模 1.77/1.16×1.61/1.15×0.49 m

調査 P-35 を切って掘り込んでいる比較的大型の土壇である。Ta-d₂ 層上面で En-L を主体とした



図IV-12 土壇群の遺構配置

プランを認め調査した。墳底はIII黒層から En-L 層にかけて作られており、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土は、Ta-d₁、Ta-d₂、III黒、En-L が混じった埋め戻し土である。覆土の色調は、重複する P-35 の覆土と同じであるが、非常に固く締まった P-35 の覆土と比べて P-31 のそれは比較的柔らかい。覆土にII黒腐植土が混じらないことから、掘り込み面は、Ta-d₁ 層上面にII黒層腐植土が形成され始めた面と考えられる。

遺物 埋め戻し土の4層からの縄文時代早期末の東釧路IV式土器片(2)が、3層から黒曜石のフレイクが出土している。2は、条の太い原体による羽状をなす撚糸文風の縄文が施されたものである。これは、H-2の覆土4層から出土したもの(1)と接合する(図IV-11)。

時代 縄文時代早期末東釧路IV式土器 (Ib-4) 期

P-32 (図IV-13、図版IV-10-3・4)

位置 a-66-09、b 66-99 **平面形** 円形 **規模** 2.14/1.64×2.10/1.39×0.51 m

調査 P-39 に壁の一部を切られる大型の土壇である。墳底はIII黒層から En-L 層にかけて作られており、壁はそこから緩やかに立ち上がる。覆土は Ta-d₁、Ta-d₂、III黒、En-L の混じったもので、埋め戻し土である。掘り込み面は、覆土にII黒の腐植土をほとんど含まないことから、Ta-d₁ 層上面にII黒層腐植土が形成され始めた面と考えられる。墳底にみられる径の小さな掘り込みは、II黒腐植土からの木根による攪乱と考られる。

遺物 木根による攪乱から縄文時代早期末東釧路IV式土器 (1・2) とつまみ付ナイフ (3) が出土している。1・2の器面には羽状をなす撚糸文風の縄文が施されている。1は口唇の尖る器壁の薄い口縁部、2は胴部である。3は珪岩製で小型のものである。裏面に剝離を施して刃部を作出している。

時代 縄文時代早期末東釧路IV式 (Ib-4) 期

P-33 (図IV-14、図版IV-12-1)

位置 a-66-09 **平面形** 円形 **規模** 0.82/0.73×0.59/0.56×0.44 m

調査 土壇群の北側に検出された小型の土壇である。墳底はIII黒層に掘り込まれており、壁はそこから急に立ち上がる。覆土はII黒、Ta-d₁ Ta-d₂ の混じったもので、埋め戻し土である。掘り込み面は覆土中には比較的多くのII黒腐植土の混じっていることから、II黒層中である。

遺物 出土していない。

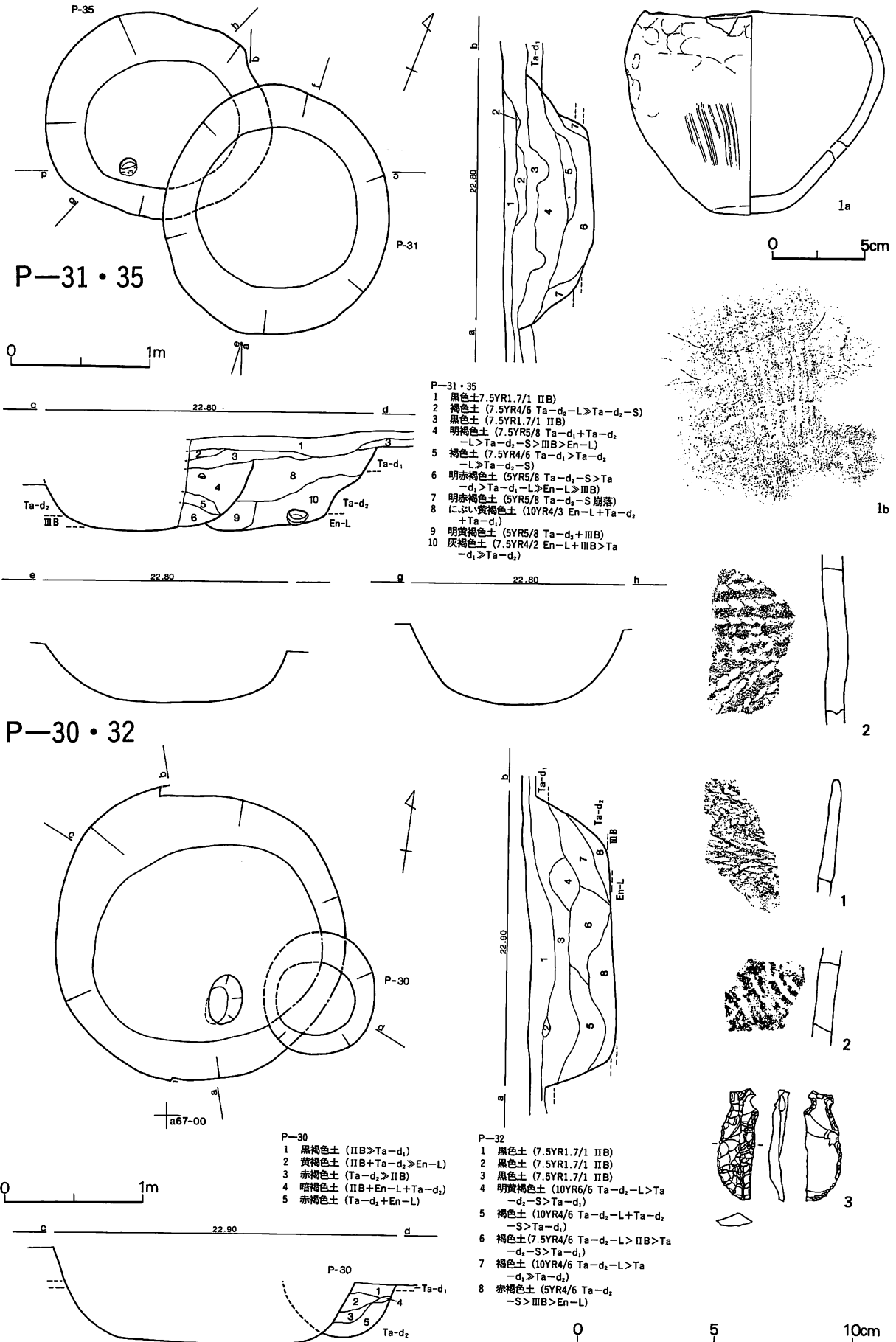
時期 縄文時代早期末東釧路IV式 (Ib-4) 期と考えられる。

P-34 (図IV-14、図版IV-12-2・3)

位置 a-67-00・10、b 67-01 **平面** 楕円形 **規模** 3.33/2.75×3.14/2.57×0.15 m

調査 P-37 の上部を切って作られた、大型で浅い掘り込みの土壇である。墳底は Ta-d₁ 層から Ta-d₂ 層に掘り込んだ浅くフラットなもので、壁はそこから緩やかに立ち上がっている。覆土は P-37 の覆土類似の Ta-d₁、Ta-d₂、III黒、En-L が混じったもので、埋め戻し土である。P-37 の覆土は堅く締まっており、P-34 は柔らかく、この点で両者は異なる。掘り込み面は、覆土にII黒腐植土が混じらないことから、Ta-d₁ 上面と考えられる。

P-34 は、覆土が埋め戻し土で墳底からは遺物が検出されているため、墓壇と見なしたが、図示した様に P-37 とは完全に重複しており、二段に掘り込まれた墓壇の可能性もある。また、形態的には埋め戻しの行なわれた住居跡の可能性もある。



図IV-13 土壌群と出土遺物 (1)

遺物 墳底の中央で石鏃(6)が、覆土3層上面で縄文時代早期末東釧路IV式土器(1~5)が出土している。1・2・4・5は同一個体で、器壁が薄く器面には条の細い羽状をなす捺糸文風の縄文が施されている。胎土には長石、重鉍物と微量の繊維が認められる。4には縄端圧痕文も認められる。3は底部に近い胴部で、器面には自縄自巻の原体による、条が立ち気味の縄文が施されている。これらの、内面には炭化物が付着している。6は基部にえぐり込みがなされる五角形鏃である。裏面には基部に加工が施されているだけで主剝離面がそのまま残っている。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式(Ib-4)期

P-35 (図IV-13、図版IV-1・2・4)

位置 a-67-00・b 67-90 **平面形** 楕円形 **規模** (1.60)/(1.10)×(1.49)/(0.91)×0.49 m

調査 東側の1/3がP-31によって切られる比較的大型の土壌である。墳底はIII黒層からEn-L層に作られており、壁はそこから緩やかに立ち上がる。覆土はTa-d₁、Ta-d₂、III黒、En-Lが一体となったもので、非常に堅く締まった埋め戻し土である。掘り込み面は、覆土にII黒腐植土が混じらないことから、Ta-d₁上面と考えられる。

遺物 墳底直上からは縄文時代早期末東釧路IV式期のものと考えられる小鉢(1)が出土している。口縁が内湾し、口唇は先端が丸みを帯びた尖り気味のもので、器壁は非常に薄い。底部は小径で不安定である。器面には指の整形による凹凸と、底部に近い胴部の一部に条が縦の捺糸文風が施されている。1bはその部分の1/2の拓本である。胎土には石英と重鉍物を含み、焼成は劣悪で非常に脆い。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器(Ib-4)期

P-37 (図IV-15・16、図版IV-13-1・2、図版IV-14)

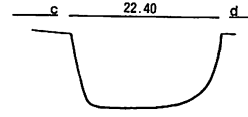
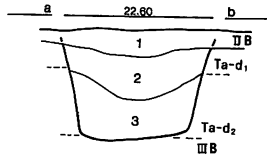
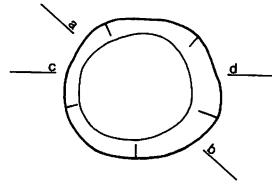
位置 a-67-00・10、a 67-01 **平面** 楕円形 **規模** /2.29/1.50×1.84/1.29/(0.53)m

調査 P-34に壁の上部を切られる大型の土壌である。足形付土製品を含む副葬品が出土した。墳底は、En-L層からEn-P層にかけて作られており、壁はそこから緩やかに立ち上がる。覆土は、III黒、En-Lを主体に、Ta-d₁、Ta-d₂、En-Pが混じるもので、埋め戻し土である。掘り込み面は、覆土中にII黒腐植土が混じらないことから、Ta-d₁層上面と考えられる。遺体の頭位は楕円形をなす平面形の長軸方向と墳底の遺物配置から、南北方向と推定される。覆土は堅く締まったもので、埋め戻し時に、踏み締める等の圧をかけている可能性がある。また、覆土の主体となるIII黒、En-Lはこの遺構から掘り上げられた土量よりも多く、他所から持ち込んでいる可能性がある。

遺物 墳底直上の図示した位置から、副葬された縄文時代早期末東釧路IV式期の土器(1)、石器(3~5)、土製品(6・7)が、覆土の4層中からも、縄文時代早期末の東釧路IV式土器(2)が出土した(図IV-15)。1は全面に魚骨文の施される小型の鉢形土器である。口唇は、先端の丸い、尖り気味のものである。魚骨文は原体にニシンの腹椎骨を用いたもので、押捺文と回転文が、口縁から底部まで交互に施されている。各文様には腹椎骨の後神経関節突起の跡が明瞭にみてとれる。胴下半部から底部にかけての器面には炭化物が付着している。この土器には、胴部中央の粘土接合面にも、器面と同様の魚骨回転文が施されている。(図IV-15、1b、拓本左側上)。接合面から胴下半部にかけて、文様のつながりがスムーズにたどれることから、一度、高さが半分の土器に魚骨文を施し、更に粘土を上乗せして現在の形にしたと考えられる。2には条の太い原体による羽状をなす縄文が施されている。

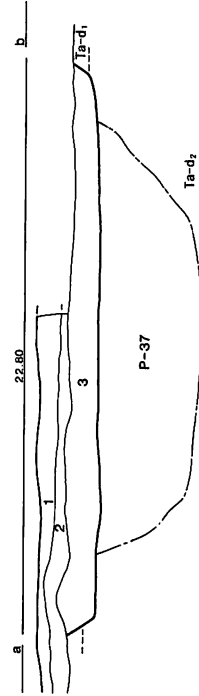
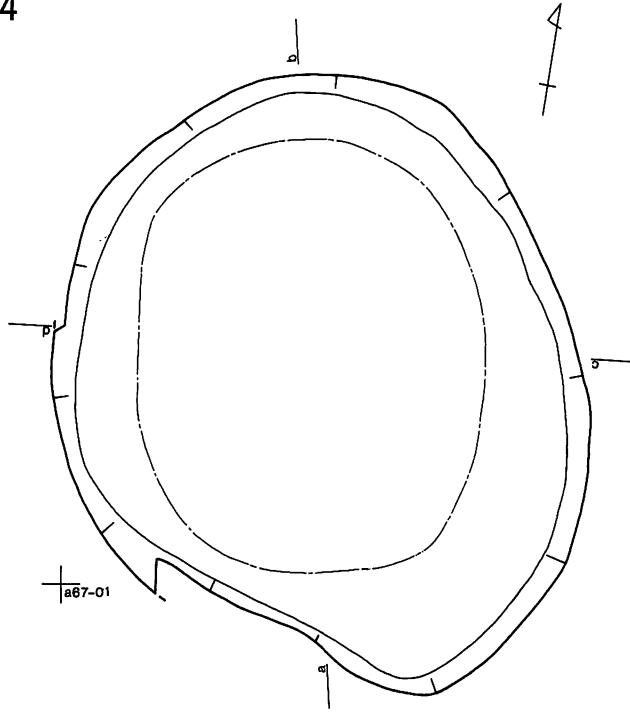
3~5は、左右になる挟りこみが施されるメノウ製の異形石器で、所謂“挟入石器”である。三点は裏面を上にして、重なった状態で出土した。

P-33

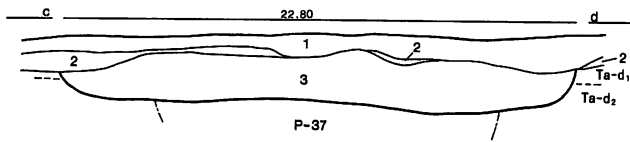


- P-33
- 1 黒色土 (7.5YR1.7/1 II B)
 - 2 暗褐色土 (10YR3/3 II B+Ta-d₁)
>Ta-d₂-L>Ta-d₁S)
 - 3 褐色土 (7.5YR4/4 II B+Ta-d₂-S>Ta-d₁)

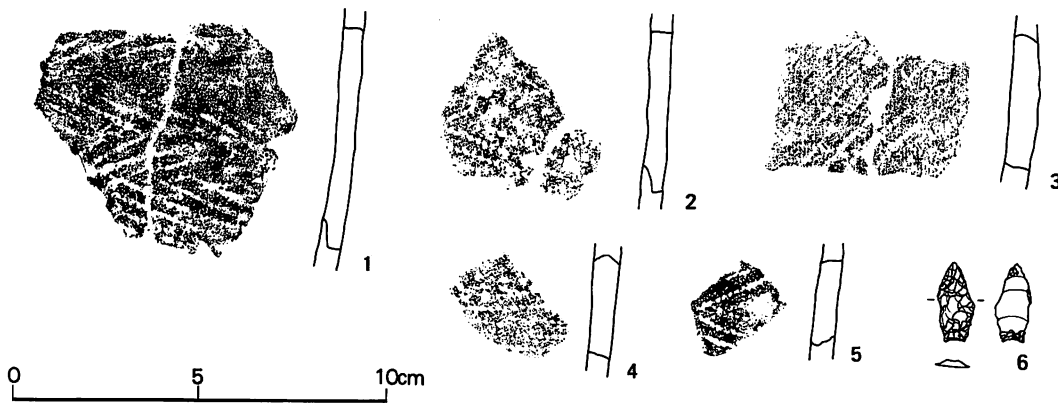
P-34



0 1m

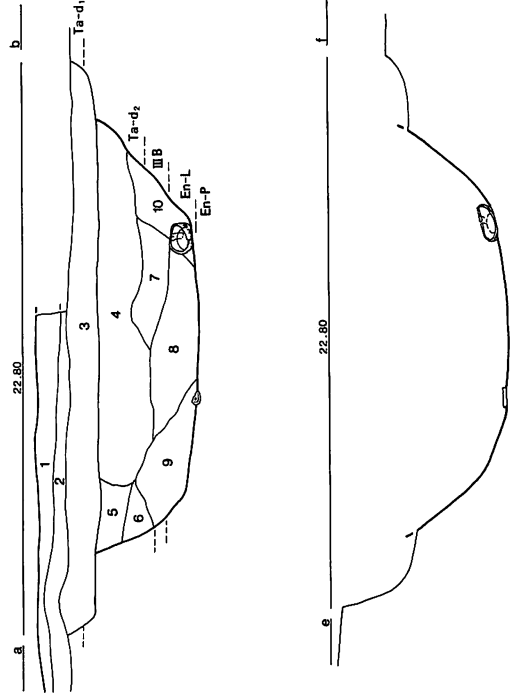
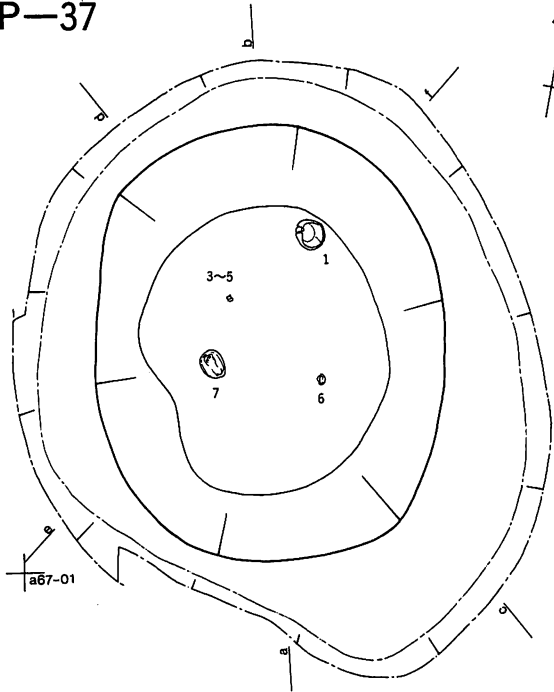


- P-34
- 1 黒色土 (II B)
 - 2 黒色土 (II B 火山灰混入)
 - 3 褐色土 (10YR4/4 En-L+III B>Ta-d₂-S>Ta-d₁)

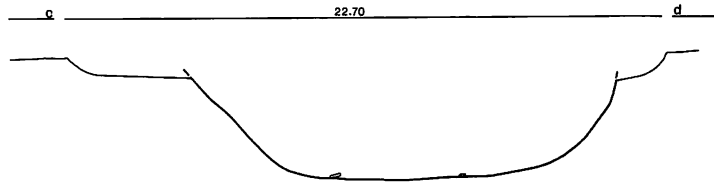


図IV-14 土壌群と出土遺物 (2)

P-37

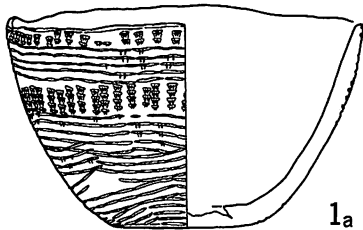


0 1m



P-34・37

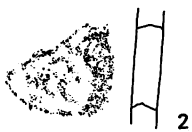
- 1 黑色土 (II B)
- 2 黑色土 (II B 火山灰混入)
- 3 褐色土 (10YR4/4 En-L+III B>Ta-d₂-S>Ta-d₁)
- 4 黄褐色土 (10YR5/6 En-L>Ta-d₂-S>Ta-d₁>En-P)
- 5 明褐色土 (7.5YR5/8 Ta-d₂-S>Ta-d₁-L>Ta-d₁)
- 6 褐色土 (7.5YR4/4 Ta-d₂-S+En-L+III B)
- 7 褐色土 (7.5YR4/4 Ta-d₂-S+En-L+III B)
- 8 にぶい黄褐色土 (10YR4/3 Ta-d₂-S+Ta-d₁+En-L+III B)
- 9 暗褐色土 (10YR3/4 Ta-d₁+Ta-d₂-S>En-L)
- 10 暗褐色土 (10YR3/4 Ta-d₁+Ta-d₂-S>En-L)



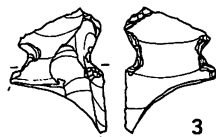
0 5cm



1b



2



3



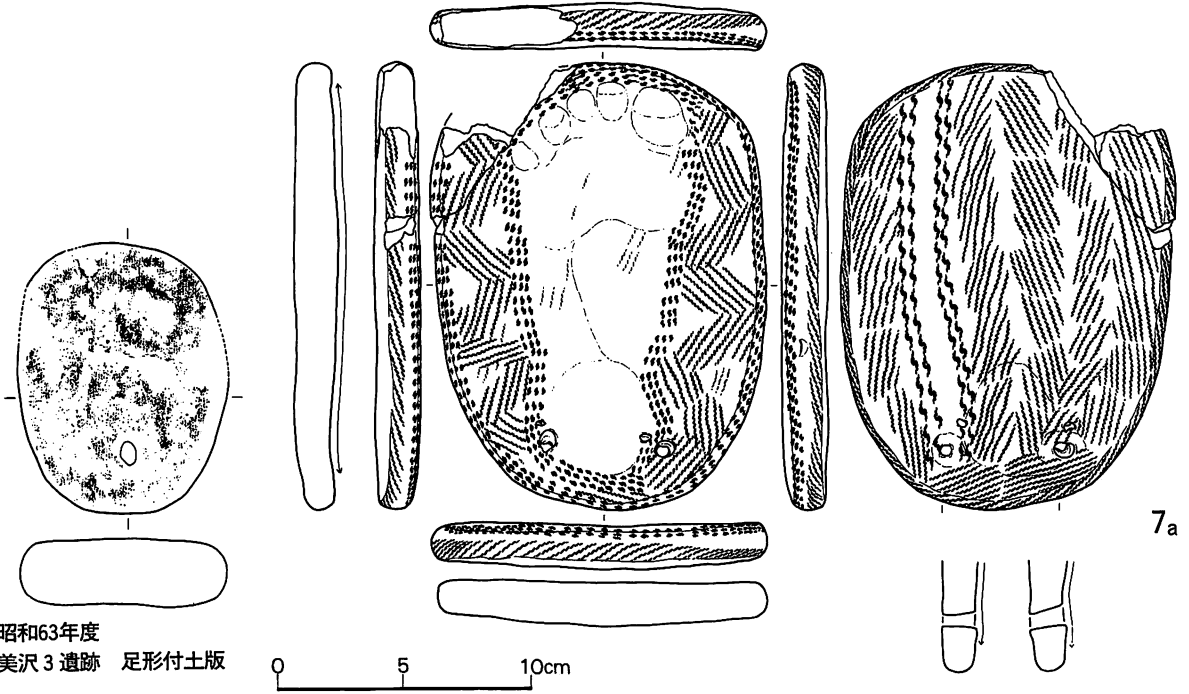
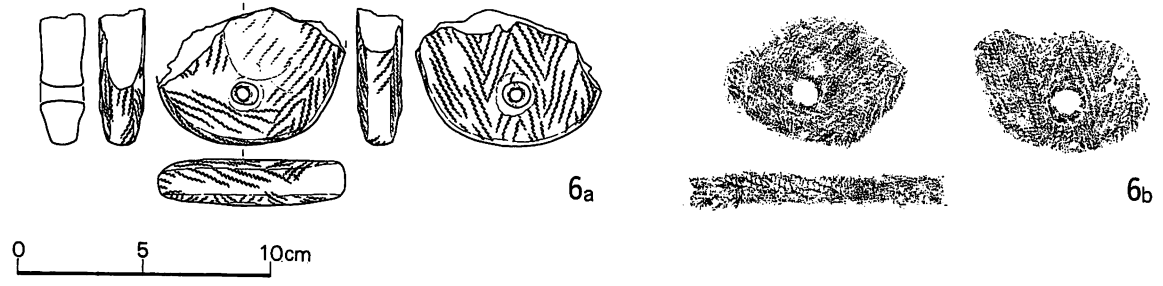
4



5

0 5 10cm

図IV-15 土壌群と出土遺物 (3)



図IV-16 P-37 出土足形付土製品

6・7は縄文時代早期末東釧路IV式土器(Ib-4)期の足形付土製品である(図IV-15、図版IV-14)。それぞれ足形の施される面を下に向けて出土した。これらは墳底の遺体を挟んで左右に埋納したためと推定される。文様の意匠、貫通孔の有無、胎土の点で共通しているが、土製品に施される足形の大きさと、貫通孔の数などの点で異なる。

以下、便宜的に足形のある方を表面、ない方を裏面、足形の爪先側を上部、踵側を下部とする。

6は、破片で出土した。割れ口に摩耗が見られるため、埋納時には既に破損していたと考えられる。

形態：楕円形と推測される。

足形：貫通孔の上方向に、欠失部分へ続く窪みが認められ、そこに施された縄文は、押圧のため潰れて不明瞭になっている。過去に出土した足形付きの土製品には、いずれも足形の踵部分に貫通孔が位置しており、6に関しても踵部分が施文されていると考えられる。大きさから乳幼児の足形と推測される

文様：全面に、縄文時代早期末の東釧路IV式土器(Ib-4)に見られる、条の細い自縄自巻の原体による文様が施されている。表裏面は、RLとLRの2本の原体を使った羽状の文様を構成する撚糸文風の縄文、側面はLRの原体による撚糸文風の縄文である。

貫通孔：縄文が施される前に表面から穿たれたもので、足形との新旧関係は不明である。貫通孔に摩滅は認められない。

胎土：胎土には微量の白色の岩片と橄欖石が混じる。

工程：成形→貫通孔・足形→施文(縄文)の順になされたと考えられる。

7は、従来のもものよりも大型で、2個所の貫通孔を持つ足形付土製品である。図では土製品の表面上部左側が欠失しているが、これは出土時に完形だったものが、取り上げた時に分解して失われてる。

形態：大判形をなしている。

足形：左足を強く押圧したもので、6や過去の4例のものよりは、ある程度成長した者の足形が施されている。爪先から踵までが15.3cm、薬指と小指が開き気味で、発達した土踏まずが認められる。踵の下端部と各指の上端部は強い押によって特に深くなっており、足形の施文方法は歩くように踵から指先へ抜いて押し付けたものと思われる。踵部分は特に強く施文されており、裏面には踵の押圧による凸部が認められる。また、土製品に足形を押し付けた際についたと考えられる製作者の指痕も裏面に認められる。

文様：縄文時代早期末東釧路IV式土器(Ib-4)に見られる、条の細い自縄自巻の原体による縄文や短縄文、綾絡文が施されている。表面は足形の輪郭に沿って自縄自巻LRの原体による短縄文が施され、それ以外には自縄自巻RLとLRの2本の原体による、横位を意識した羽状をなす撚糸文風の縄文が施されている。施文の順序は足形→縄文→短縄文である。また、足形と重複して不明瞭な自縄自巻RLの原体の縄文が見られ、足形より以前に縄文が施されていた可能性がある。裏面は、自縄自巻RLとLRの2本の原体による縦位の羽状をなす撚糸文風の縄文と自縄自巻LRの縄を2ヶ所で連続して結節した原体による縦位の綾絡文が施されている。表面よりの側面には自縄自巻LRの原体の短縄文が、裏面よりの側面には自縄自巻LRの原体の撚糸文風の縄文が施されている。

貫通孔：踵の左右2個所で一对となる貫通孔が、二対穿たれている。上の一对は、足形が施される以前に穿たれているため、穴は潰れてふさがっている。もう一对は足形が施された後に表面から穿たれたもので、表裏面の縄文、短縄文、綾絡文はその後に施されている。貫通孔に摩滅は認められない。

胎土：胎土には微量の白色の岩片と橄欖石が混じる。焼成は良好である。

工程：成形→(縄文)、貫通孔1回目→足形→貫通孔2回目→施文(縄文、短縄文、綾絡文)の順で

なされたと考えられる。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式 (Ib-4) 期

P-38 (図IV-16、図版IV-15-1・2)

位置 a-67-90 **平面形** 楕円形 **規模** 2.03/1.69×1.60/1.29×0.61 m

調査 副葬品の石器が、多量の出土した大型の土壇である。壇底はEn-L層中に作られており、壁は急に立ち上がる。覆土は1・2層がIII黒、En-Lが主体のもので、4~8層がTa-d₁、Ta-d₂、III黒、En-Lの一体となったものである。これらは堅く締まった埋め戻し土である。覆土中に見られるIII黒とEn-Lは、土壇から掘り上げたものよりも量的に多い。そのため、他の地点から搬入された可能性がある。掘り込み面は覆土にII黒の腐植土が見られないことから、Ta-d₁上面と考えられる。

遺物 覆土2層上からは縄文時代早期末東釧路IV式土器(1)が、壇底からは縄文時代早期末の石鏃(2~14)、つまみ付ナイフ(15)、異形石器(16~20)、スクレイパー(21・22)が出土している。石鏃の尖頭部の方向は、図示した様に不規則である。16~22は、壇底の南東側に集中して検出された。

1は、LRの縄を結束した原体による2列の綾絡文と、自縄自巻RLの原体による縄文が施されたものである。2~7は、基部にえぐり込みがなされている黒曜石製の五角形鏃である。破損している8~14に関しても、同じ形態のものと考えられる。15は黒曜石製の小型のつまみ付ナイフである。表面には自然面が残っており、側縁には使用痕が認められる。16~20は黒曜石製の剝片にえぐりの刃部が設けられた異形石器(抉入石器)である。16は右側縁に、17~20は両側縁に左右対になるえぐり込みが施されている。21・22は、頁岩製のスクレイパーである。21は、表面全面と、裏面の両側縁とに加工が施され、下部側縁に、細かい剝離による急角度の刃部が作出されており、光沢が認められる。22は、表面全面に加工が施されるもので、21とは石質が異なる。下部側縁に細かい剝離による急角度の刃部が作出されており、刃部とその裏面の一部には光沢が認められる。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式 (Ib-4) 期

P-39 (図IV-17、図版IV-16-1・2)

位置 a-66-09、b-66-99、a-67-00、b-67-90 **平面** 円形 **規模** 1.35/1.16×1.34/0.91×0.46 m

調査 P-32を切って掘り込んでいる中型の土壇である。壇底はIII黒層からEn-L層中に作られており、壁は急に立ち上がる。覆土は、Ta-d₁、Ta-d₂、III黒が主体の埋め戻し土である。掘り込み面は覆土にII黒層の腐植土が混じらないことから、Ta-d₁層上面と考えられる。

遺物 壇底のほぼ中央で、裏面を上に向けたつまみ付ナイフ(1)が出土した。1は縄文時代早期の頁岩製のもので、表面全体と、裏面の右側縁とつまみ部分に加工が施されている。裏面の右側縁と下側縁の左端に光沢が認められる。

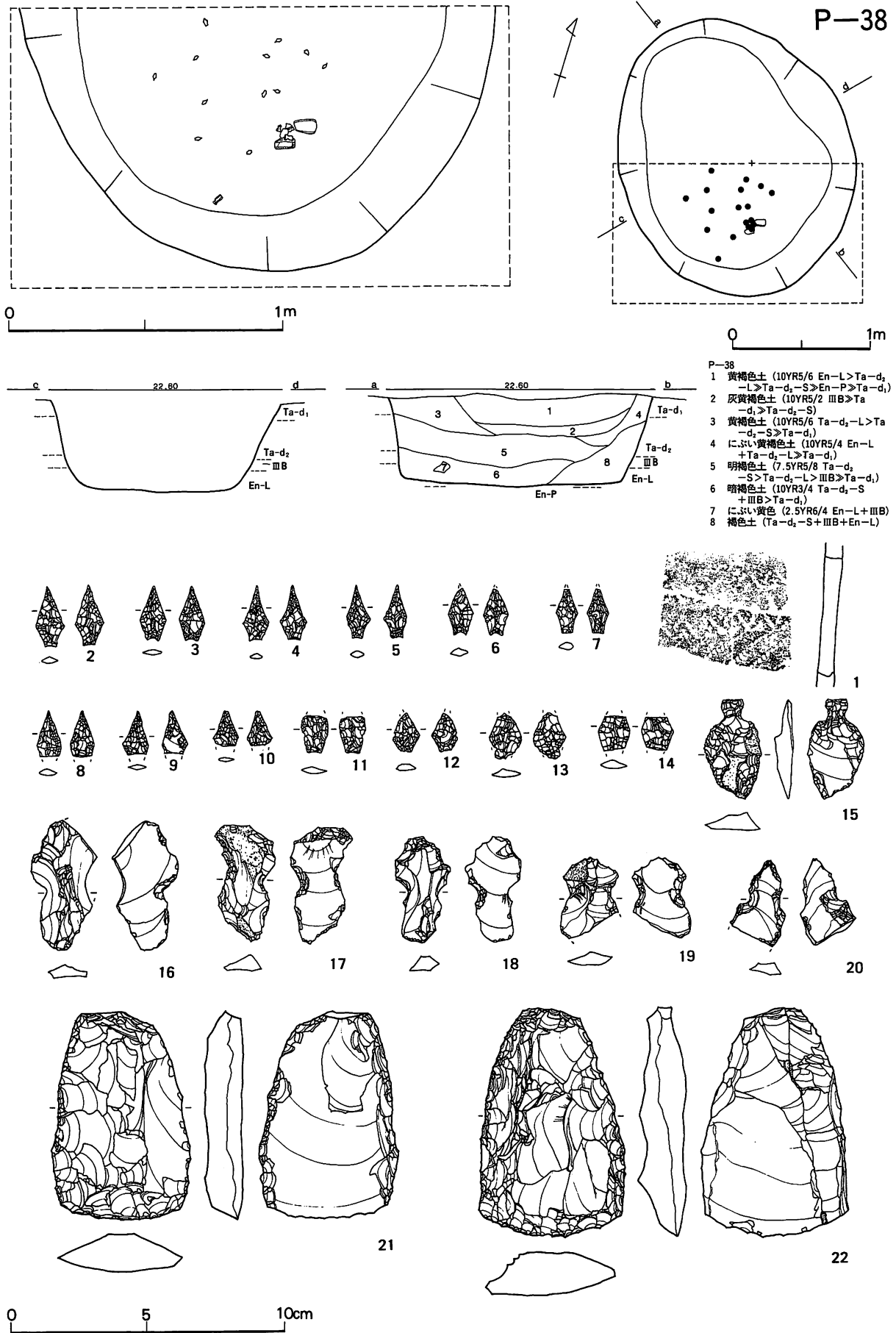
時期 縄文時代早期末東釧路IV式 (Ib-4) 期

P-40 (図IV-17、図版IV-17-1・2)

位置 a-67-90 **平面** 楕円形 **規模** 0.92/0.76×0.67/0.58×0.17 m

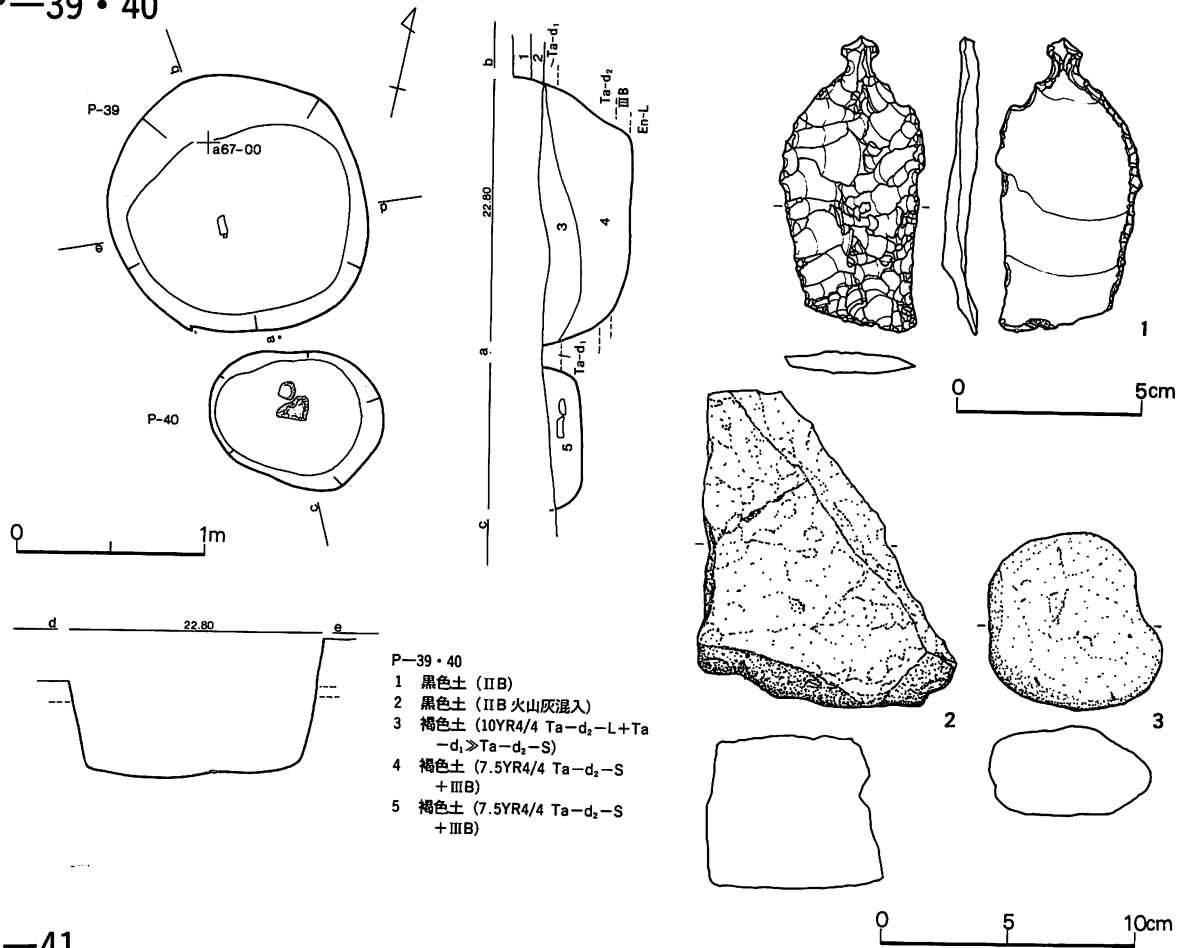
調査 P-39と隣接する小型の土壇である。壇底はTa-d₂層中に作られた浅いもので、壁は急に立ち上がる。覆土はTa-d₁、Ta-d₂が主体の埋め戻し土である。掘り込み面はII黒層中である。

遺物 覆土中から副葬品と考えられる台石片(2)と礫(3)が出土している。2は、溶結凝灰岩製の台石片、3は橄欖岩製の円礫である。



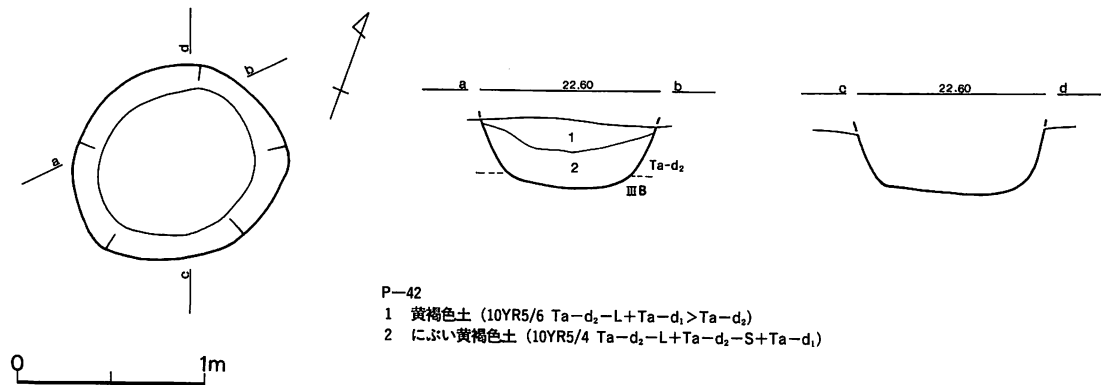
図IV-17 土壌群と出土遺物 (4)

P-39・40



- P-39・40
 1 黒色土 (II B)
 2 黒色土 (II B 火山灰混入)
 3 褐色土 (10YR4/4 Ta-d₂-L+Ta-d₁>Ta-d₂-S)
 4 褐色土 (7.5YR4/4 Ta-d₂-S + III B)
 5 褐色土 (7.5YR4/4 Ta-d₂-S + III B)

P-41



- P-42
 1 黄褐色土 (10YR5/6 Ta-d₂-L+Ta-d₁>Ta-d₂)
 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4 Ta-d₂-L+Ta-d₂-S+Ta-d₁)

図IV-18 土壌群と出土遺物 (5)

時期 縄文時代早期末東釧路IV式 (Ib-4) 期と考えられる。

P-42 (図IV-17、図版IV-16-3)

位置 a-67-90 平面 楕円形 規模 1.13/0.84×1.01/0.73×0.35 m

調査 P-38 を切って掘り込んでいる、比較的小型の土壌である。坑底はIII黒層中に作られたもので、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は Ta-d₁、Ta-d₂ が主体の埋め戻し土である。覆土中にII黒の腐植土が見られず、Ta-d₁ が混じることから、掘り込み面は Ta-d₁ 層上面と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式 (Ib-4) 期と考えられる。

まとめ

足形の施される土製品は、美沢川流域の遺跡群において過去四例が出土しており、昭和63年度の美沢3遺跡では墓壇から出土し、時期は覆土中の遺物から縄文時代早期末とされていた。これらは、いずれも足形だけが施される無文のもので、今回出土の6・7には足形だけでなく縄文時代早期末東釧路IV式土器に特有の自縄自巻原体による羽状をなす撚糸文風の縄文が施され、更に同じ壇底からは魚骨文土器が出土している。これらのことから、足形付土製品は縄文時代早期末東釧路IV式期に伴うもので、本遺跡群以外の道内外から出土する同じ形態の土製品とは、時期的に異なるものであることが判明した。6は美沢3遺跡出土の“足形付土板”と形態が類似しているが、7は非常に大型である。焼成は両方とも過去の土製品よりは良好である。

美々7遺跡の舌状台地先端の平坦部で検出された土壇群は、縄文時代早期末東釧路IV式土器 (Ib-4) 期の所謂“墓域”に作られた墓壇群と考えられる。以下、それについて述べる。

土壇群の土壇は、規模や覆土の特徴、配置、切り合い等から、1～3のグループに分けられる。

1. P-35・37・38：比較的大型の土壇で、覆土は非常に堅くしまった埋め戻し土である。覆土中にはII黒腐植土が混じらない。副葬品の遺物を伴い、これ以外の土壇に切られる傾向にある。覆土が堅いのは、埋葬後の埋め戻し時に堅く踏み締める等の方法により、圧がかけられたためと考えられる。また、覆土中のIII黒やEn-Lは、掘り上げた以上の土量で埋め戻しがなされていると考えられ、他の地点から搬入してきている可能性がある。これらのことは、所謂“葬制”に関連すると推定される。

2. P-31・32・34：大型の土壇で、覆土は、II黒腐植土を含まず、柔らかい。1.のグループを切って掘り込んでいるが、3.のグループには切られる傾向がある。

3. P-30・33・39・40・42：中型～大型の土壇で、覆土にII黒腐植土を多く含む。1・2グループの狭間に、且つ、それらを切って作られる傾向にある、副葬品の遺物を、伴うものと伴わないものがある。

これらのグループは、土壇覆土に含まれるII黒腐植土の量や、各土壇の配置、切り合いから古い順に1→2→3と推移したと考えられる。

これらのことから、土壇群の土壇は、三段階の変化を経て作られた墓壇と推定される。時間と共に、大型から中型・小型化、葬制の簡略化、副葬品の簡素化の方向に変化したと考えられる。反面、これらの変化を経ても、同じ場所に墓壇を作っており、土壇群が位置する空間が“墓域”として認知されていたとも考えられる。

(皆川 洋一)

(3) 土壌

P-29、P-36、P-41の3基である。P-29と41は覆土(埋土)や形状から墓墳の可能性はある。P-36は今回の調査で1個のみ検出された縄文時代後期の土壌である。P-36のおよそ3m北東からは縄文時代後期初頭の土器(タブコブ式)と石錘を含む5個の礫が出土した。これらもP-36に含めて報告する。

P-29 (図IV-19、図版IV-18)

位置 a-67-04 平面形 楕円形 規模 1.52/1.11×1.05/0.77×0.46 m

調査 Ta-d₁層面から土層色調の明るい部分が見られたが、この時点では遺構と決めがたい形状であった。Ta-d₂面まで掘り下げた時点で、乾燥が早く灰褐色になる範囲が略円形に確認された。

覆土は埋め戻しと思われる。上部の明褐色土(1)には比較的しまりがあり、下半の暗茶褐色土(3)にはしまりがない。遺物は出土しなかった。

時期 確認面と周囲の遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

P-41 (図IV-19、図版IV-18)

位置 b-66-83 平面形 円形 規模 1.43/1.22×1.26/1.06×0.35 m

調査 Ta-d₁層面で、ほぼ円形の黒色土の広がりとして確認された。覆土はII黒層であり、その下はTa-d₁・d₂と黒褐色土の混じる土である。掘り込みはTa-d₁・d₂層とIII黒層とを抜いて、En-1層に達している。

遺物 覆土からコッタロ式(1)と東釧路IV式(2~4)が出土している。1・2は確認面であるII黒層から、3・4は覆土(埋土)の中ほどから検出された。

時期 周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期末葉と考えられる。

P-36 (図IV-19、図版IV-18)

位置 b-66-85 平面形 楕円形 規模 1.50/1.26×1.07/0.70×0.17 m

調査 Ta-d₁層面で、II黒層の落ち込みとして確認された。覆土はII黒層にTa-d₁・d₂の混じる土である。その多少によって4層に分けたが、漸移的である。南側に黒褐色土(3)で埋まった楕円形の小さな落ち込みがある。

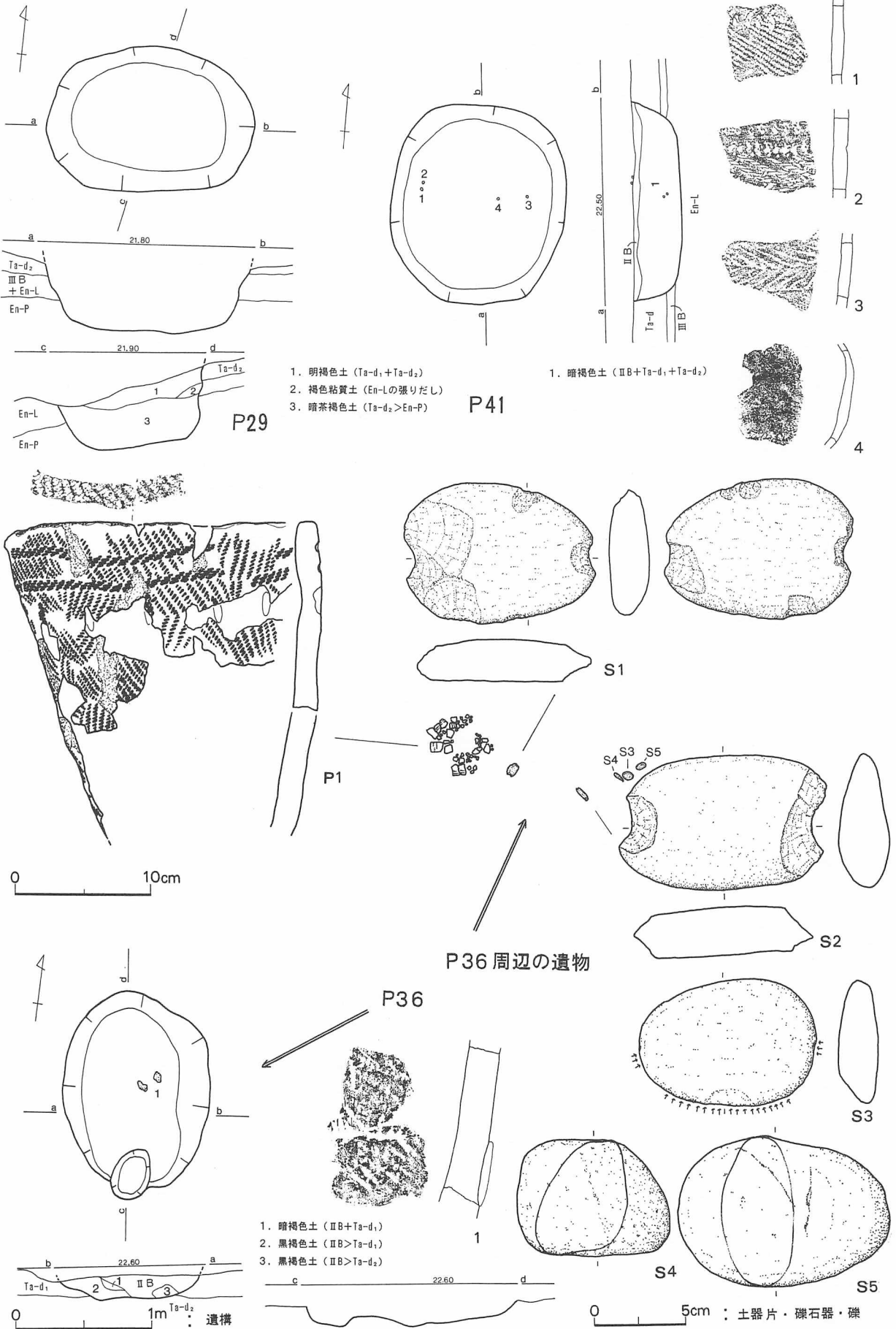
遺物 覆土からタブコブ式土器(1)と剝片が出土している。タブコブ式土器(1)はII黒層と黒褐色土(2)との境から2片で出土したが、後に接合された。厚手の土器で、幅の広い貼付帯がある。縄文は浅く、節が不明瞭である。

P1、S1~5は周辺のTa-d₁層上面から出土したものである。S1~5のレベルはほぼ同じで、これらの上面とP1のレベルもほぼ同じである。S1~5下面は10~15cm低くなる。

P1はタブコブ式土器である。器体上部の半分が潰れた状態で出土した。荒い縄文地に2条の縄線文があり、その下位には縦の縄圧痕がある。内面は凹凸を残したナデ調整が行われている。

S1・S2は長軸両端を打ち欠いた石錘である。S1では短軸方向にも打ち欠きがある。S2は熱を受けたのか、礫面が赤変している。S3は長軸両縁につぶれが見られ、たたき石とした。図の下辺は荒れた状態である。S4・S5は加工痕、使用痕の認められない礫である。

時期 出土遺物(1)から縄文時代後期と考えられる。P1は縄文時代後期の土器がここにしか見られないことから、P-36に関連するものと思われる。石錘もここでしか出土していない。縄文時代早期から前期によく見られるものであり、拾われてきた可能性が考えられる。(西田 茂・葛西智義)



図IV-19 土壌と出土遺物 (1)

(4) 自然営力の可能性のある土壌 (図IV-20、図版IV-19)

人為的な土壌としたい要素が感じられ、今後の検討を要すると思われるものである。それらはP-21・24~28で、覆土の硬い点に特徴がある。Ta-d₂面で覆土の乾燥が早いため、円形に白く浮かび上がった状態で確認された。

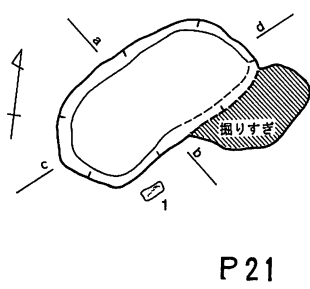
P-21は判断の遅れから土層図を取らなかった。底面はEn-I層中である。遺構南側のTa-d₂層上面からすり石(1)が出土している。P-24~27は規模や平面形、底面となる土層などがよく似ている。遺物はP-24覆土から東釧路IV式土器(1)、P-27覆土から剥片が出土している。P-28は皿状の落ち込みで、底面はTa-d₂層中にある。

これらには斜面に並ぶような配列と覆土が硬くしまっている点に共通性がある。後者は覆土の大半がTa-d₁であることに起因すると思われる。覆土が硬いと記載された遺構の例は美沢3遺跡にみられるが、以下の点に疑問が残る。

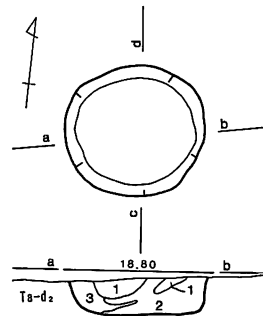
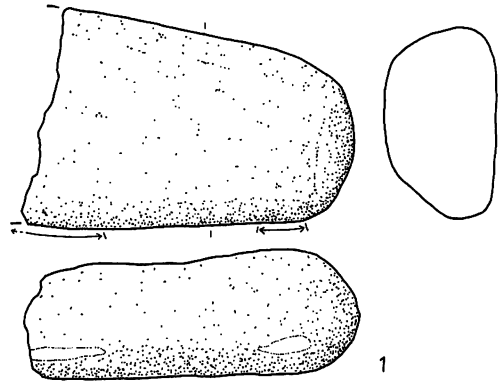
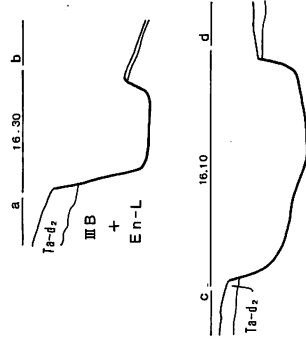
1. 覆土の状況から埋め戻された遺構とは考えがたいこと。Ta-d₁層によって自然埋没したとすると、同層の上面を中心とする縄文時代早期の遺物との関係が問題となる。
2. 美沢3遺跡と異なり、遺構内から遺物を出土する例がほとんど見られないこと。
3. 今回の調査ではTa-d₁層を安定した層として把握できなかったこと。凹凸があったり、見られないところもある。
4. 底面はIII黒層上面にあるものが多いこと。そうしたものはそれが底面であるのか、Ta-d₂層との境であるのかが不明確である。また、立枯れた木があるとすれば、その痕跡は木の根の入りやすいTa-d₂層までになると思われること。

P-22・23は自然営力と考えているものであるが、参考として掲載した。P-22はTa-d₂面で検出された。茶褐色土(1)のまわりに黒褐色土(3)がドーナツ状となっていた。セクションでは3がもぐり込んだ状態であり、小規模な風倒木跡と考えられる。同様の例が東斜面にも2例見られた。P-23は溝状の落ち込みで、これも数例認められた。東斜面に位置し、斜面に直行する方向のものが多かった。以下、検出区と形状をまとめて記載する。(葛西智義)

P-21				
位置	a-67-49	平面形 楕円形	規模	1.15/1.02×0.57/0.42×0.35 m
P-22				
位置	a-67-26	平面形 円形	規模	0.75/0.64×0.68/0.55×0.19 m
P-23				
位置	b-66-58・b-66-68	平面形 楕円形	規模	1.58/1.10×0.66/0.36×0.34 m
P-24				
位置	a-67-15	平面形 円形	規模	0.82/0.62×0.76/0.56×0.29 m
P-25				
位置	a-67-14・15	平面形 円形	規模	0.98/0.82×0.84/0.57×0.20 m
P-26				
位置	a-67-03・b-67-93	平面形 円形	規模	0.92/0.77×0.80/0.69×0.20 m
P-27				
位置	b-67-92	平面形 円形	規模	0.92/0.76×0.84/0.71×0.18 m
P-28				
位置	b-67-92	平面形 楕円形	規模	1.22/0.92×0.87/0.61×0.24 m

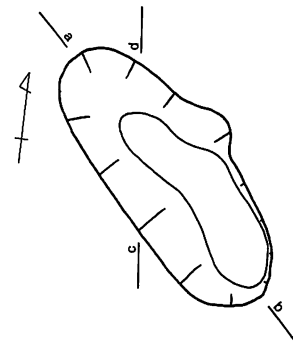


P21



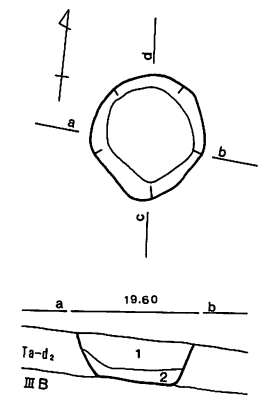
P22

1. 茶褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1$)
2. 暗茶褐色土 ($III B > Ta-d_1 + Ta-d_2$, 土にしまりが無い)
3. 黒褐色土 (炭化物を含む III B)



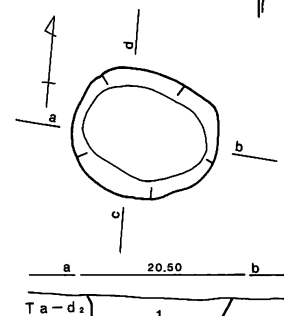
P23

1. 黒褐色土 ($III B > Ta-d_1 + Ta-d_2$, 炭化物を多く含む)



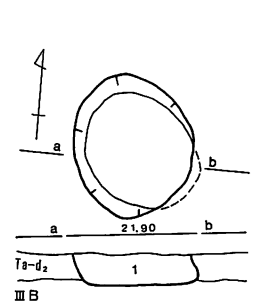
1. 暗褐色土 ($Ta-d_1 + Ta-d_2$, 固くしまっている)
2. 褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1$)

P24



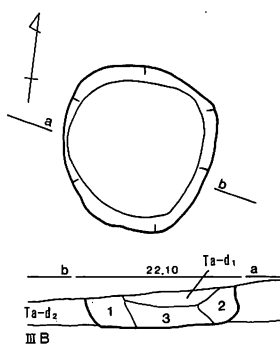
P25

1. 褐色土 ($Ta-d_1 > Ta-d_2$, 固くしまっている)



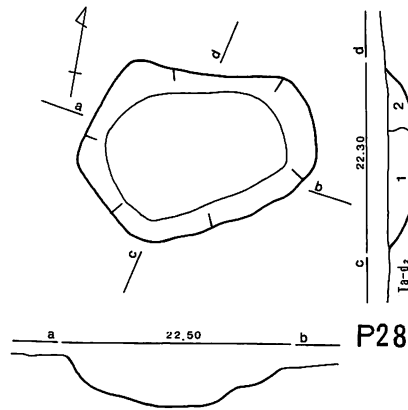
1. 褐色土 ($Ta-d_1 > Ta-d_2 > En-P$, 固くしまっている)

P26



P27

1. 赤褐色土 ($Ta-d_1 + Ta-d_2$)
2. 褐色土 ($Ta-d_1 > Ta-d_2$)
3. 明黄褐色土 ($Ta-d_1 > Ta-d_2 + En-P$)



P28

1. 暗褐色土 ($Ta-d_1 > Ta-d_2$)
2. 褐色土 ($Ta-d_1 + Ta-d_2$)

0 1m : 遺構

0 5cm : 遺物

図IV-20 土壌と出土遺物 (2)

(5) Tピット

平坦面北端部で、ほぼ等間隔に3個検出された。美々8遺跡(平成元年度)で検出されているTピットと列をなすもので、次年度調査区にも延びていくことが予想される。より西側の昭和55年度調査区では検出されていないことから、次年度調査区内に止まるものであろう。

TP-1 (図IV-21、図版IV-20-1)

位置 b-66-94 平面形 長楕円形 規模 1.90/1.72×0.64/0.31×1.48 m

調査 Ta-d₁層面で、長円形の黒色土の広がりとして、確認された。西側が次年度調査区に延びていたことから、調査範囲を必要に応じて拡張した。長軸方向に残した土層観察用の壁がTピットの端をかすめるものとなってしまい、適切な土層図を記録できなかった。覆土はTP-2・3同様、下位が崩落土、上位が自然堆積と考えられるものであった。

断面a-bのa側が次年度調査区で、II黒層最上面である。b側がTピット確認面で、aとは20cmのレベル差がある。遺構の掘り込み面はII黒層最上面から20cmの間にあることになろう。長軸断面c-dでは、南側でオーバーハングしているところがある。

遺物 覆土上位のII黒層から東釧路IV式土器(1・2)と剥片が出土している。

時期 この種の溝状Tピットは縄文時代後期と考えられることが多い。掘り込み面の推定ではII黒層上半の時期である。出土数の多いコッタロ式や東釧路IV式はTa-d₁層を中心に、II黒層上部から出土することもある。しかし、8mばかり離れたb66-85区では、P-36やそれに含めた縄文時代後期の土器(P1・タブコブ式)がTa-d₁層上面で検出されている。従来通り、縄文時代後期のものとするのが妥当と思われる。

TP-2 (図IV-21、図版IV-20-2)

位置 b-66-83・84 平面形 長楕円形 規模 2.19/1.67×1.15/0.24×1.40 m

調査 Ta-d₁層上面で、長円形の黒色土の広がりとして、確認された。TP-1同様の検出状況であり、Tピットであることが予想された。このため、土層の埋積状態を明瞭に観察できるよう、短軸方向に人が十分に動けるトレンチを入れて調査した。土層断面に示されたように、底面に黒色土(II黒層)混じりの土があり、その上に繰返し、側壁からの崩落土が堆積している。北側の立上りがいくぶんオーバーハングしているが、これが構築時からのものかどうかは明らかにできなかった。

遺物 覆土上部のII黒層からUフレイク(1)と剥片が出土している。1は白色小球類の見られる、赤井川産とされる黒曜石である。片面に礫皮面を残し、側縁に微細な剝離痕がある。

時期 TP-1と列をなすと考えられることから、それと同期、縄文時代後期のものと思われる。

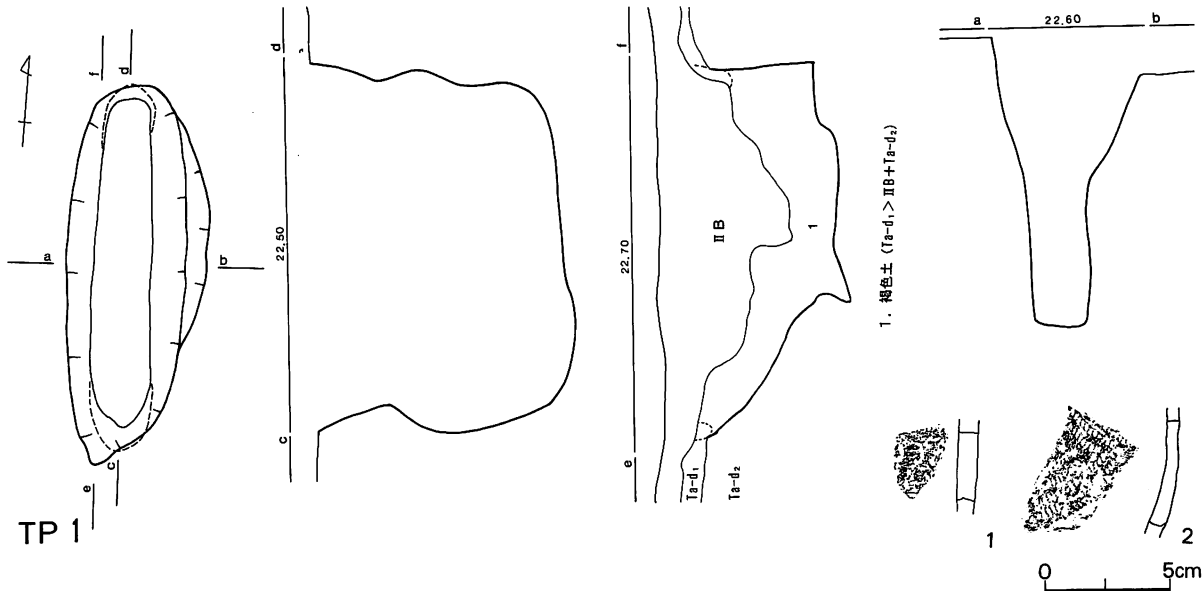
TP-3 (図IV-21、図版IV-20-3)

位置 b-66-62・63、b-66-72・73 平面形 長楕円形 規模 2.32/1.80×1.11/0.42×1.52 m

調査 TP-1・2の検出により、これに続くTピットの存在が予想された。このため、II黒層中で、より黒味の強いII黒層の落ち込みとして確認された。TP-2同様、短軸方向にトレンチを設けて調査した。土層の埋積状態はTP-2とほぼ同じである。底面には水分の多く含まれた黒色土があり、その後、壁の崩落により大半が埋まっている。土層断面図に見られる遺構下部の膨らみは崩落の結果であろう。TP-2同様、北側の立上りがオーバーハングしている。

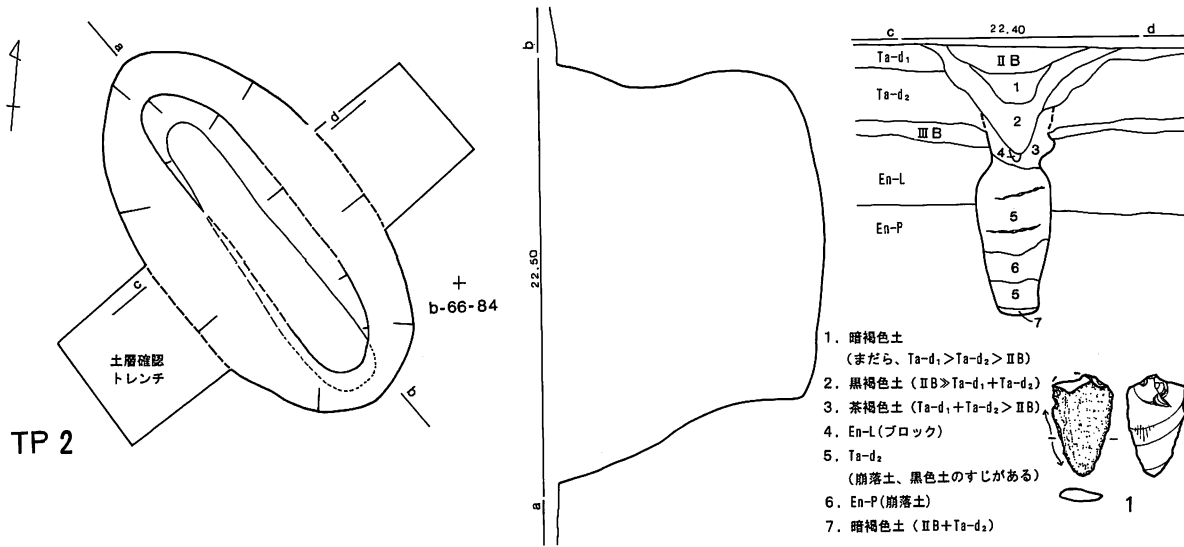
遺物 覆土上部のII黒層からUフレイク(1)が出土している。

時期 TP-1・2と同じく、縄文時代後期のものと思われる。(西田 茂・葛西智義)



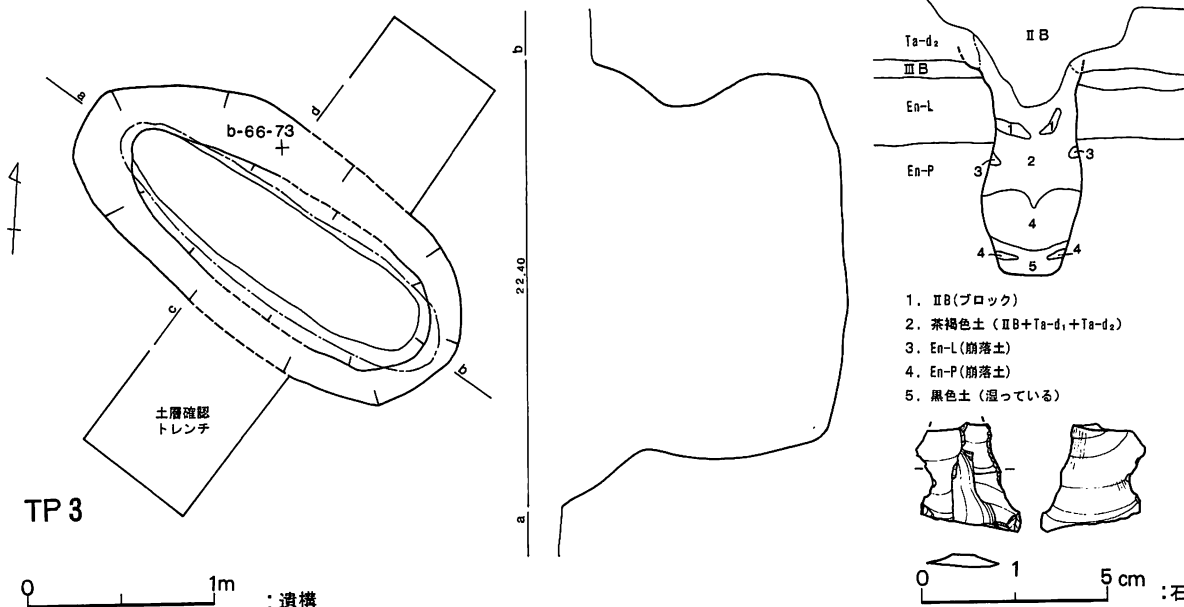
1. 褐色土 (Ia-d₁ > II B + Ia-d₂)

TP 1



1. 暗褐色土 (まだら、Ia-d₁ > Ia-d₂ > II B)
2. 黒褐色土 (II B > Ia-d₁ + Ia-d₂)
3. 茶褐色土 (Ia-d₁ + Ia-d₂ > II B)
4. En-L (ブロック)
5. Ia-d₂ (崩落土、黒色土のすじがある)
6. En-P (崩落土)
7. 暗褐色土 (II B + Ia-d₂)

TP 2



1. II B (ブロック)
2. 茶褐色土 (II B + Ia-d₁ + Ia-d₂)
3. En-L (崩落土)
4. En-P (崩落土)
5. 黒色土 (混っている)

TP 3

0 1m : 遺構

0 5cm : 石器

図IV-21 Tピットと出土遺物

(6) 動物の足跡など

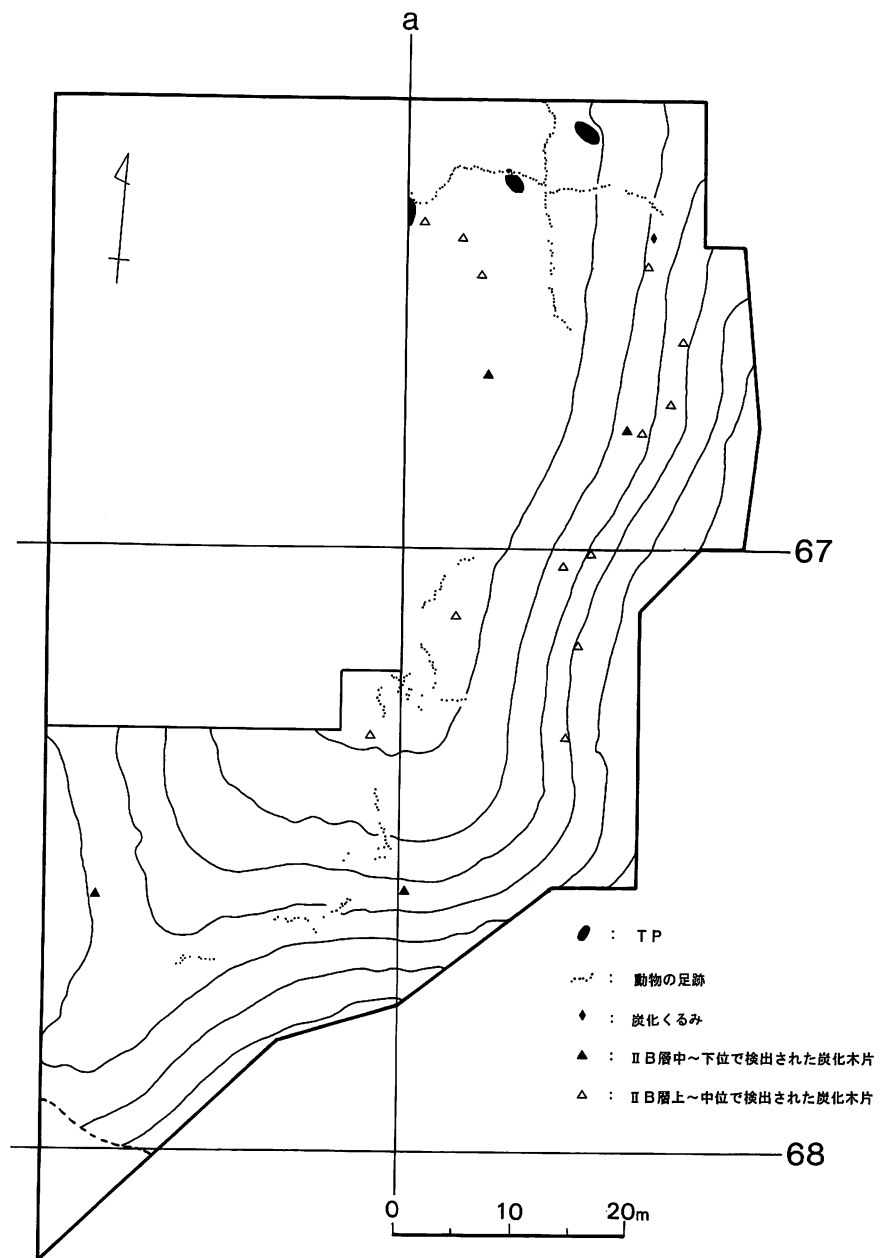
ここでは動物の足跡や炭化物といった人的遺物と直接関連しない、いわば遺跡環境に関わる事柄について触れる。合わせて、土層状態などに関する知見も記載する。

II黒層最上面では動物の足跡が検出された。いくぶんハート形を呈するものが多かった。配列では、平坦面北側を縦横に歩いているものと南斜面の傾斜に沿っているものがある。試みとして、後に検出されたTピットの位置を重ねて見ると、その上を通っているものがあった。

II黒層最上面では、他に浅いくぼみがいくつか見られた。簡単なスケッチを残して、後に遺構と重ねて見たが、一致するものはなかった。今回検出された遺構のなかでは新しい時期のものと思われるTピットも最上面では埋まりきっている状態であった。また、b 67区の南半、台地がいくぶん南東に張り出すところ(図IV-9)は黒色土の発達が弱く、Ta-c層直下から茶褐色土となっていた。植生が東斜面や南斜面と異なっ

ていたと思われる。このあたりは遺構、遺物ともに稀薄であるが、それとの関係は明確でない。

炭化物は十数ヵ所から出土している。板状や角塊状の小片が多く、茎や枝が蒸し焼きになったと思われるものもある。人為的な影響が感じられるものはなかった。b 66-54区のII黒層下位では炭化したクルミが出土した(図版IV-20-5)。よく土圧に耐えたと思われるほど、フカフカで崩れやすい残存状態であった。なお、II黒層上～中位の炭化物は調査区北半に片寄っている。上述したb 67区の土層状態に関係すると思われる。(葛西智義)



図IV-22 動物の足跡と炭化物

4 第II黒色土層の遺物

(1) 土器

7,439点が出土している。時期では縄文早期後葉、中期、晩期のものがある。大半を占める縄文早期（I群）の土器にはコッタロ式（Ib-2類）、中茶路式（Ib-3類）、東釧路IV式（Ib-4類）がみられる。中期（III群）の土器は縄文のみの破片で、他時期のものも含んでいるかもしれない。晩期（V群）の土器も縄文のみの1個体である。これらの土器の分布状況は「まとめ」の項で述べる。なお、文様の記載で使用した“短縄文”は羽賀氏の理解に従い（羽賀 1976）、圧痕の長さから絡条体をいくぶん回転していると思われるものである。自縄自巻原体による縄文（北埋文 1989・III-5-(2)）と絡条体回転による撚糸文との識別は、1本の条に幅の違いがある場合や条の走行が曲線的なものを自縄自巻原体による縄文、条の幅が均一で直線的に走るものを撚糸文とした。これは前者の軸は柔らかく、文様に変化を与えやすいのに対し、後者の軸は硬く、それが少ないと想定しての事である。確実な識別法ではないが、大半の資料に軸痕はみられず、このように区別した。また、自縄自巻原体による縄文は“自縄自巻縄文”と略称した。この種の縄文と一般的な2段の縄による縄文を区別するときは、後者を“通常の縄文”と呼んでいる。

I群b-2類土器（図IV-23～25-1～3・8～54、図版IV-21-1～3、図版IV-22）

コッタロ式に相当する土器である。2,014点出土した。美沢3遺跡の分類（昭和63年度）に従えば東釧路III式としうるものもあるが、一部の文様や出土状況から区別しがたいものがあり、本類に含めている。整理段階では、小破片や文様の不明瞭なものを除いた1,200点を対象に個体識別を試みた。その結果、83個体分の土器と帰属の明らかでない破片約300点とに分けられた。

器形は復元された3個体ではいくぶん胴部に膨らみのある深鉢形となる。破片でもこれ以外の器形と思われるものは見られなかった。口唇断面には平坦なものや丸みをもつもの、切り出し形のものなどがある。口唇の刻みはおよそ8割のものにみられる。刻みは絡条体圧痕と思われるものを含めて、縄によるものが多い。隆帯上のそれとあわせて、以下、特に記載のないものは縄による刻みである。底部は全例張り出すもので、その半数に短縄文が施文されている。

文様は縄文のみの破片が多いが、これを除くと絡条体圧痕文（短縄文を含む）、縄端圧痕文、組紐圧痕文の順に多くみられる。地文の縄文には斜行縄文と羽状縄文とがあり、後者には結束1種によるものがある。稀な例として、条痕のあるものと無文のものとがそれぞれ1例ずつある。

1～3は復元されたものである。接合していない破片は文様から部位を想定した。いずれも底部の張り出す深鉢で、器体には隆帯がめぐっている。

1は無節の結束1種羽状縄文を地文としている。器体上部には、中に絡条体圧痕文の施された2本1組の縦の隆帯がある。器体をめぐる隆帯上の刻みと圧痕も絡条体によるものと思われるが、縦に並ぶものと異なり、節がはっきりしない。縦の隆帯は残存部から器体4ヶ所に配置されていると思われる。

2は斜行縄文地で、条方向の変わる場所に縄端圧痕を加えている。隆帯の断面は三角で、絡条体圧痕による刻みがある。口唇にも刻みが付いている。

3には2個1対の台形突起がある。欠損により端部が明らかではないが、残存部分で幅13cmある。文様は羽状縄文地に隆帯をめぐらせている。隆帯は2本1組で5列器体をめぐり、台形突起内にもう1列追加されている。隆帯に挟まれた最上段のところには、弧状の隆帯が上下に向きをかえながら施文されている。弧状の隆帯には剝落部やズレがあるが、突起下で∩（上向）、突起間ではU（下向）である。口唇と隆帯上には棒状工具による刻みがある。

8～54 は破片で、主な文様によって分類、配列した。

a：縄線文のあるもの（8・9）

8は太い原体による羽状縄文地の土器である。口唇に厚みがあり、断面丸形である。口縁は無文地で、縦の縄圧痕がある。8bの下端には横方向の圧痕もみられる。9は弧状の縄圧痕のある土器で、東釧路IV式の可能性もある。

b：組紐圧痕文のあるもの（10～15）

10・13・15では絡条体圧痕が、12では縄端圧痕が複合施文されている。15には隆帯もある。

c：口縁直下に短縄文のあるもの（16）

口縁直下、無文地部分に短縄文がある。

d：絡条体圧痕のあるもの（17～26）

19・26は縄端圧痕かもしれない。25は破片中央に自縄自巻縄文がある。圧痕も同じ原体を使用しているようである。自縄自巻縄文は東釧路IV式に特徴的な文様であるが、器厚と文様配列から本類とした。この他の絡条体圧痕は角軸である。圧痕内に節が確認されるのは23のみで、17や18には繊維痕がみられる。22は縄を交差させて巻いた絡条体の圧痕である。23は角をおしつけているため、軸痕が残っている。26は突起部で、27と同一個体かもしれない。口唇に縄圧痕がある。

e：隆帯のあるもの（27～42）

27～33は口縁部、34～42は胴部破片である。口縁部例では、いずれにも口縁直下をめぐる隆帯がみられる。29は器体上半に縄を交差させて巻いた絡条体の圧痕文、中位に撚糸文、下位に条が不明瞭で、撚糸文か縄文かが明らかでない地文がある。それぞれは隆帯によって区画される。撚糸文施文部を境に隆帯や口唇にみられる刻みが異なり、上位では棒状工具、下位では縄が原体となっている。33の口唇の刻みは円形をなすもので、内部に繊維痕を思わせるしわが残っている。35には縦方向の隆帯がある。37には隆帯にそって竹管状工具による刺突が加えられている。隆帯上の刻みも同じ原体によるものと思われる。41の隆帯は指によって押さえられている。この土器の地文は撚糸文のようで、中茶路式に近いものと思われる。

f：縄端圧痕のあるもの（43・44）

43の地は無節の縄文で、口唇に刻みがある。

g：縄文のみのもの（45～48）

45・48は本類のなかでは乱れた印象を受ける縄文であるが、周囲にコッタロ式が多く出土していることから本類とした。46bでは1段の縄を折り返してできる端部の圧痕がみられる。

h：特異な文様のもの（49・50）

49には縦の条痕がある。50は無文の土器である。下端に張り出しがみられ、浅いへこみがある。表面の剝落した土器の可能性もある。

i：底部（51～54）

54を除いて、底部周囲に短縄文や絡条体圧痕がある。54の底面には縄の痕がある。

I群 b-3 類土器（図IV-23-4、図IV-25-55～62、図版IV-23）

中茶路式に相当する土器である。295点出土している。個体は識別困難な破片を除くと、図示した8個体とそれらに属さない微隆起線に撚糸文のある破片1点はそのすべてである。

4は無節の縄文地に綾絡文のみみられる土器である。上部に一見しただけでは口縁と見間違えるような

接合面（輪積み跡）が残っている。これは東釧路Ⅳ式とした土器にしばしばみられる特徴である。平底であることから本類にしたが、東釧路Ⅳ式に近いものと思われる。55～60は微隆起線のあるもので、微隆起線間に撚糸文または短縄文の施されるもの（56・57・59）と絡条体圧痕文の施されるもの（58・60）とがある。55の内面には縄の圧痕がある。56の口唇断面には平坦なところと丸みを帯びるところとがある。59では縦に垂下する微隆起線の右側に、軸痕の残る絡条体圧痕がみられる。61・62は底部である。61と同一個体と思われる底部破片には内側を指で凹ませた痕がある（図版Ⅳ-25-1）。62の底面には縄の痕がある。

I 群 b-4 類土器（図Ⅳ-23-5～7、図Ⅳ-25～27・63～122、図版Ⅳ-21、図版Ⅳ-23～25）

東釧路Ⅳ式に相当する土器である。5,078点が出土した。コッタロ式同様に個体識別を試みたが、破片量や文様、特に胴部文様にバラエティーがないことから困難な作業となった。小片を除く3,300点を対象として、200個体強の土器と帰属の判らない破片約1,000点に分けられた。コッタロ式のおよそ3倍の個体数と言えようか。土器量に関することとして、底部破片が少ない。底部破片や底部のある個体の割合がコッタロ式の10%程度に対し、本類では1%ほどである。この数字はコッタロ式との器形の違い、本類が底部の小さな深鉢である事を反映しているようである。間接的には、土器の破損状態に大きな違いがないことも示唆している。口縁部破片の比率はコッタロ式、本類ともに約20%の割合であった。

器形は一般的な東釧路Ⅳ式にみられる小さな平底、あるいは丸底風の深鉢と推定される。これ以外の器形を呈すると思われる破片は出土していない。口唇は丸みをもつものと平らなものとがあり、その1割弱に刻みがある。波状口縁をなすと思われる口縁部破片はよくみられる。

文様は自縄自巻縄文（あるいは撚糸文）が多い。口縁部破片で6割、胴部破片では9割が自縄自巻縄文のみのみられる破片である。先述した撚糸文との区分でいけば、明らかに撚糸文としうるものはほとんどみられなかった。他の文様には絡条体や縄端などの圧痕文、綾絡文、縄線文などがある。縄線文は少数である。圧痕文と綾絡文の比率は口縁部ではほぼ半々、胴部では圧痕文：10に対して綾絡文：1である。縄による文様以外は、沈線のあるものと竹管状工具による刺突のあるものが1例ずつと少ない。

本類の特徴として、撫でられた接合面（輪積み痕）や胎土に繊維の混入した跡がみられることを挙げられる。前者は粘土帯の積み上げるところを山形に撫で付けているもので、文様の切れ目が見えなければ口縁と見間違える状態である（図版Ⅳ-25-3）。本類の中でも例数は多くないが、他類の土器にはまったくといえるほど見られない様相である。

本類は主な文様によって、以下のように分類、配列した。

a：微隆起線のあるもの（63）

痕跡的なもので、破片左側で失われている。偶発的なものかもしれない。地文は自縄自巻縄文である。

b：綾絡文のみられるもの（6・64～67）

6は想定復元されたものである。口縁は摩滅しており、かすかな痕跡と同一個体の破片から2列1組の綾絡文が3段めぐっていると判断した。64～67も2列1組となるもので、縛り方のゆるいもの（64）ときついもの（65・66）とがある。67は通常の縄文地である。

c：自縄自巻縄文あるいは撚糸文のみのもの（5・68～76）

68と69の口縁最上部には、隣りあう条の節方向が異なる縄文がみられる。撚りの異なる縄を

2本揃え、途中で折り返して自巻きしていった原体によるものと考えている。72の口唇には地文と同じ原体と思われる圧痕がある。73～75は節がまのびしているものである。この種のものには条が直線的に進んでおり、撚糸文と思われる。73の口唇には縄圧痕がある。76は条の太いものである。節の傾きは通常の縄文に近い。

d：絡条体や縄端による圧痕のあるもの（77～92・94～100・108・109）

種々の圧痕がみられる。地文同様の自縄自巻原体を使用した圧痕が多いと思われるが、明らかではないものもある。自縄自巻原体を器面に押しつけたと思われるものには77・80・83～86・91・94などがある。80には軸痕が残っている（図版IV-25-4）。91は節の明らかな圧痕と節の見えない圧痕が交互に付いている。後者の原体は縄以外の可能性がある。

押しつけた自縄自巻原体を回転していると思われるものが79である。自縄自巻原体といいきれないが、同様の施文手法をとるものに85bや95・96がある。横長の圧痕の上（85b・95）や下（96）に軸痕と思われる浅い圧痕がみられる。前者は圧痕がつながることから回転、後者は圧痕が離れることから、原体をずらして押しつけていったものと思われる。92もこれらの仲間であろう。綾絡文の間にわずかに弧状を描く縄圧痕が残されている。

縄端圧痕と思われるものが78・81・82・87～90である。87の口縁直下の圧痕は79と同じ手法によるものである。

胴部や底部にみられる圧痕は浅く、不明瞭なものが多い。原体の細・太はあるが、97・98・100・109は85bに近いもの、99は縄端圧痕と思われる。108では角軸の縁と思われる痕がみられる。

79・83・92には内面にも自縄自巻縄文（79・83）や縄圧痕（92）が施文されている。

e：竹管状工具による刺突のみみられるもの（93）

1例のみ出土した。突起部の破片で、下方からの刺突文がみられる。

f：縄文のみがみられるもの（101～104）

101・102は斜行縄文、103・104は羽状縄文である。104は菱形の文様構成となっている。

g：沈線がみられるもの（107）

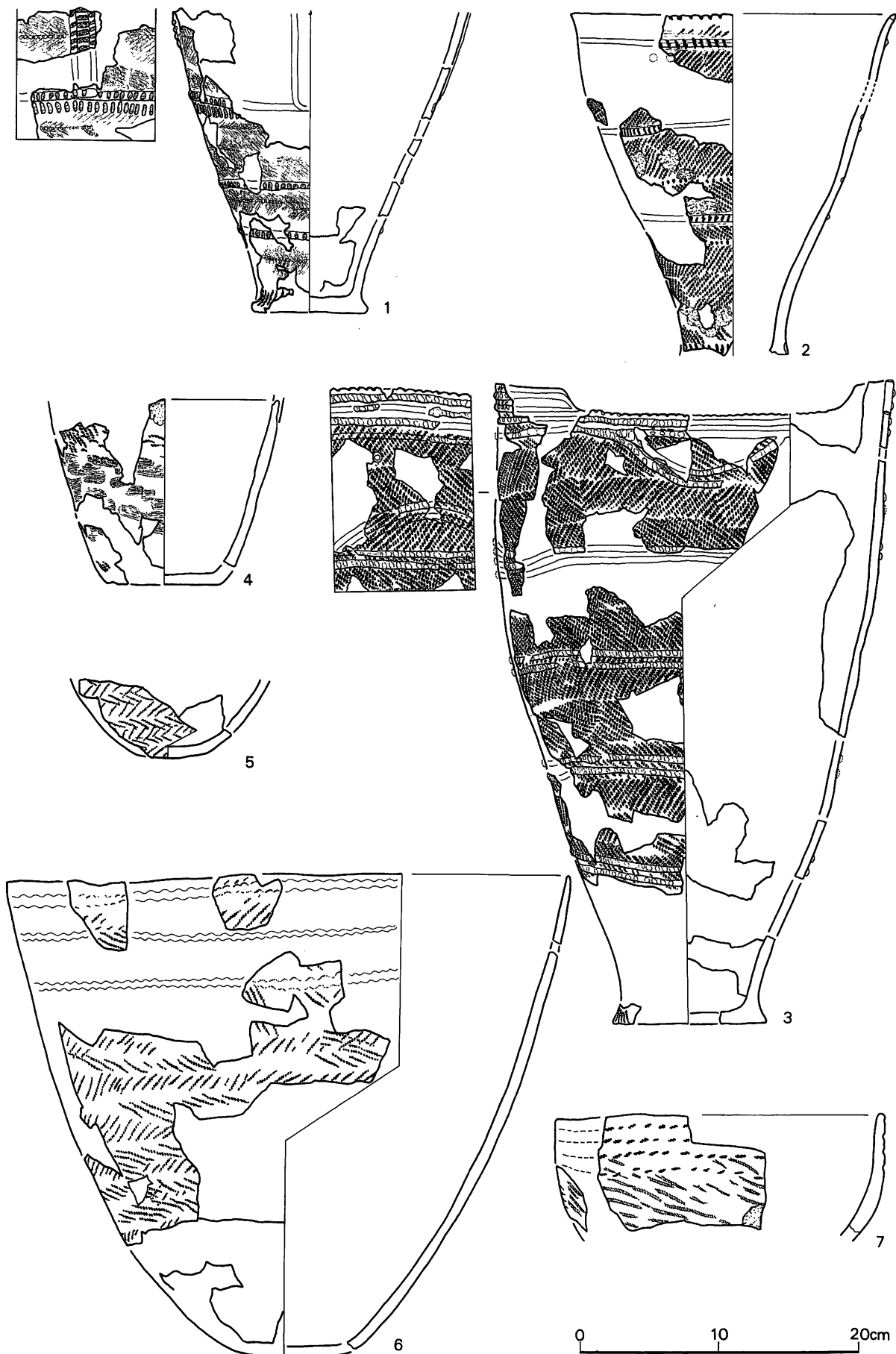
1例のみ出土した。小片で、沈線の配列などはわからない。

i：縄線文のあるもの（105・106・110～115）

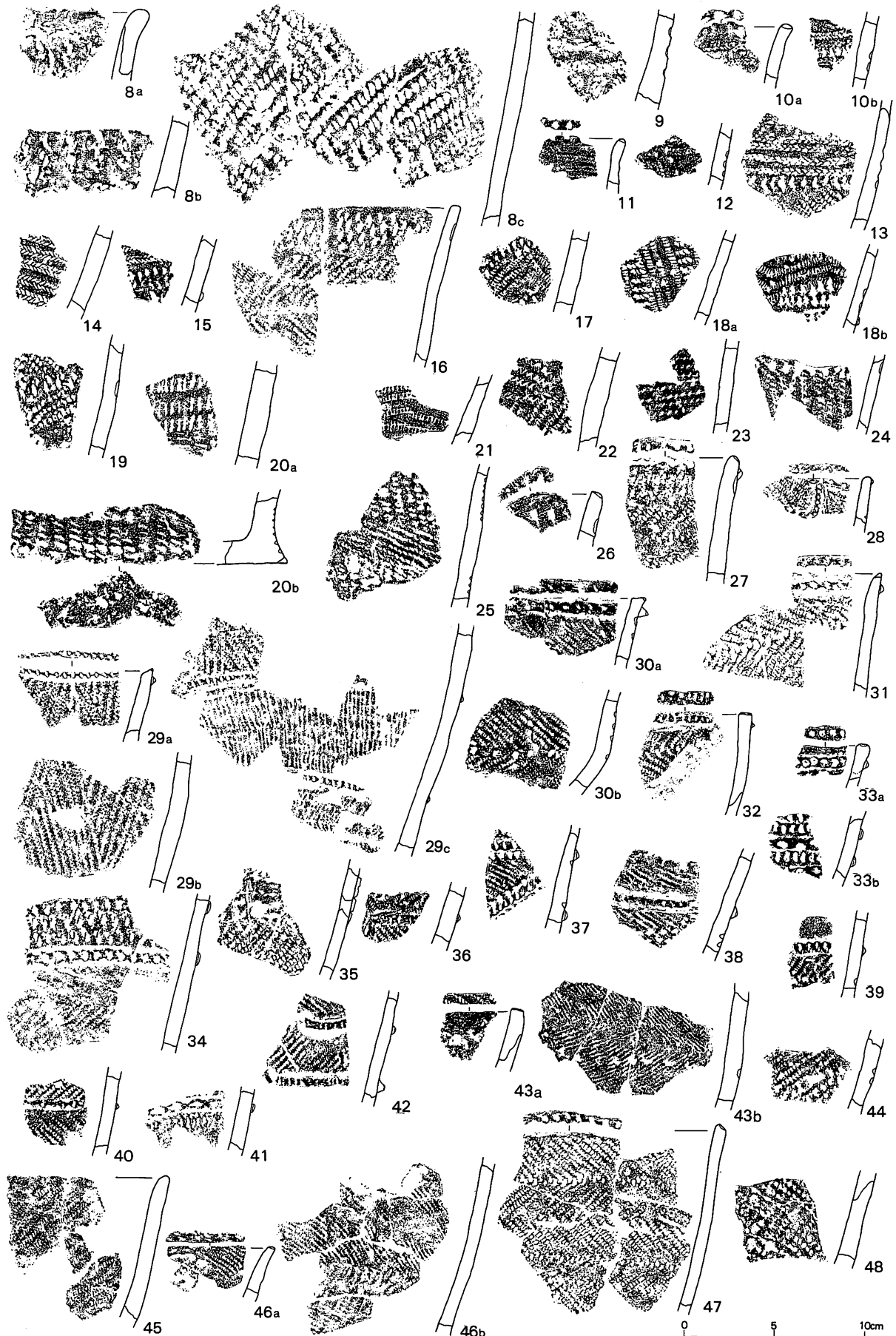
105・106には撚りの異なる縄の圧痕がある。105は自縄自巻縄文の羽状部分の可能性もある。110～114は同一原体による縄線文で、節の傾きがゆるいもの（110・113・114）と通常の縄線文同様のもの（111・115）とがある。前者の原体は自縄自巻原体と考えられる。110の胴部(b)と底部(c)の地文には自縄自巻縄文と思われるところがある。111は破片下部に見られる圧痕を縄線文としたが、撚糸文の可能性もある。破片上部には楕円形で節の見えない圧痕もある。112に縄線文は見られないが、110と同一個体の可能性があり、図示した。115の口唇には刻みがある。

h：縄を2本並列して巻いた自縄自巻縄文あるいは撚糸文のあるもの（7・116～122）

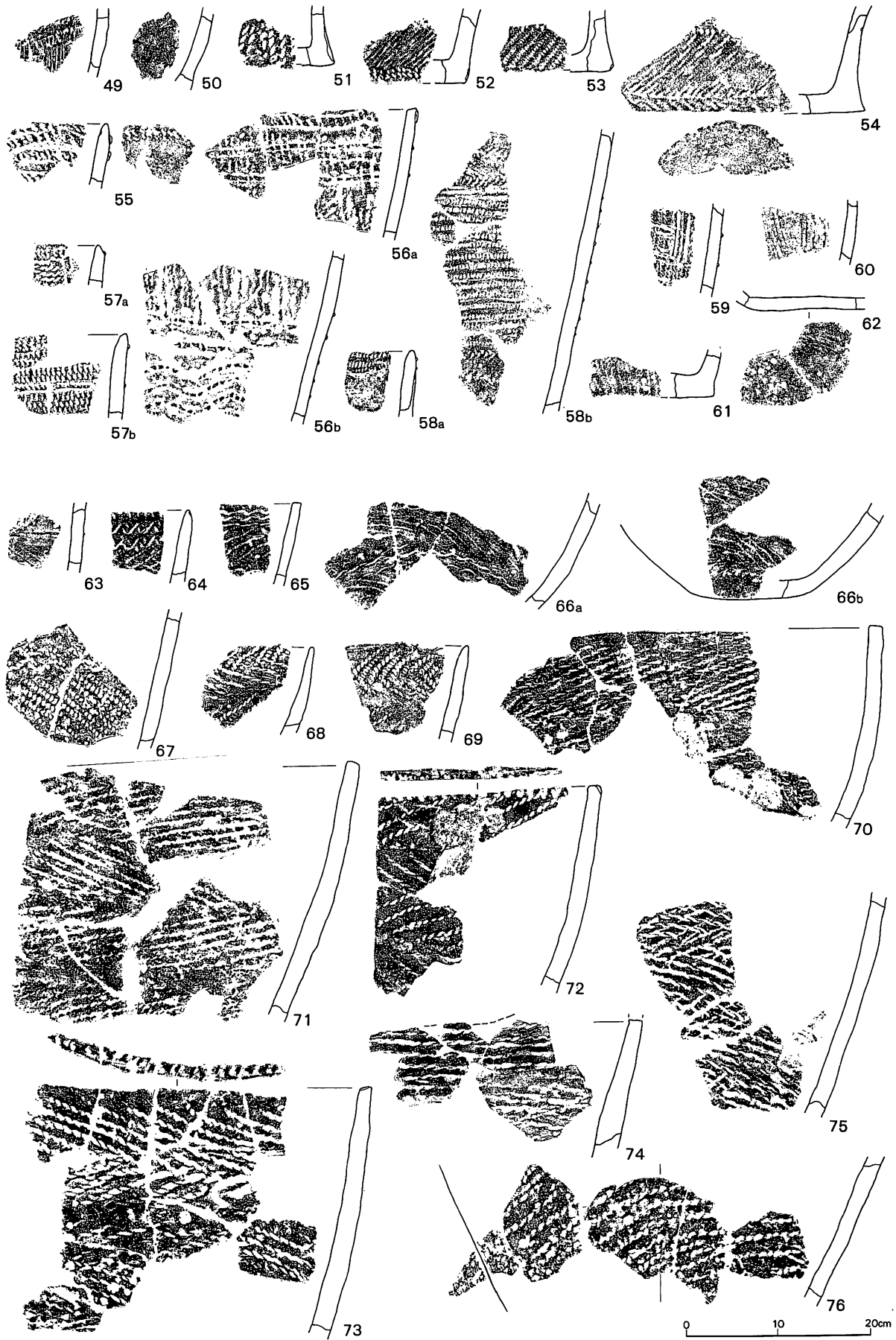
並列して走る条がみられるものである。いずれも条の中の節が同じ方向に傾いており、撚りの同じ縄を2本揃えて軸に巻いたものである。先述した区分にそえば、7・117・118・121が自縄自巻縄文、119・120・122が撚糸文と思われる。116はどちらとも言いがたい。この土器は他に比べて、条間が密である。118では縦位に、7・120には横位に押しつけたと思われる縄圧痕が口縁にある。



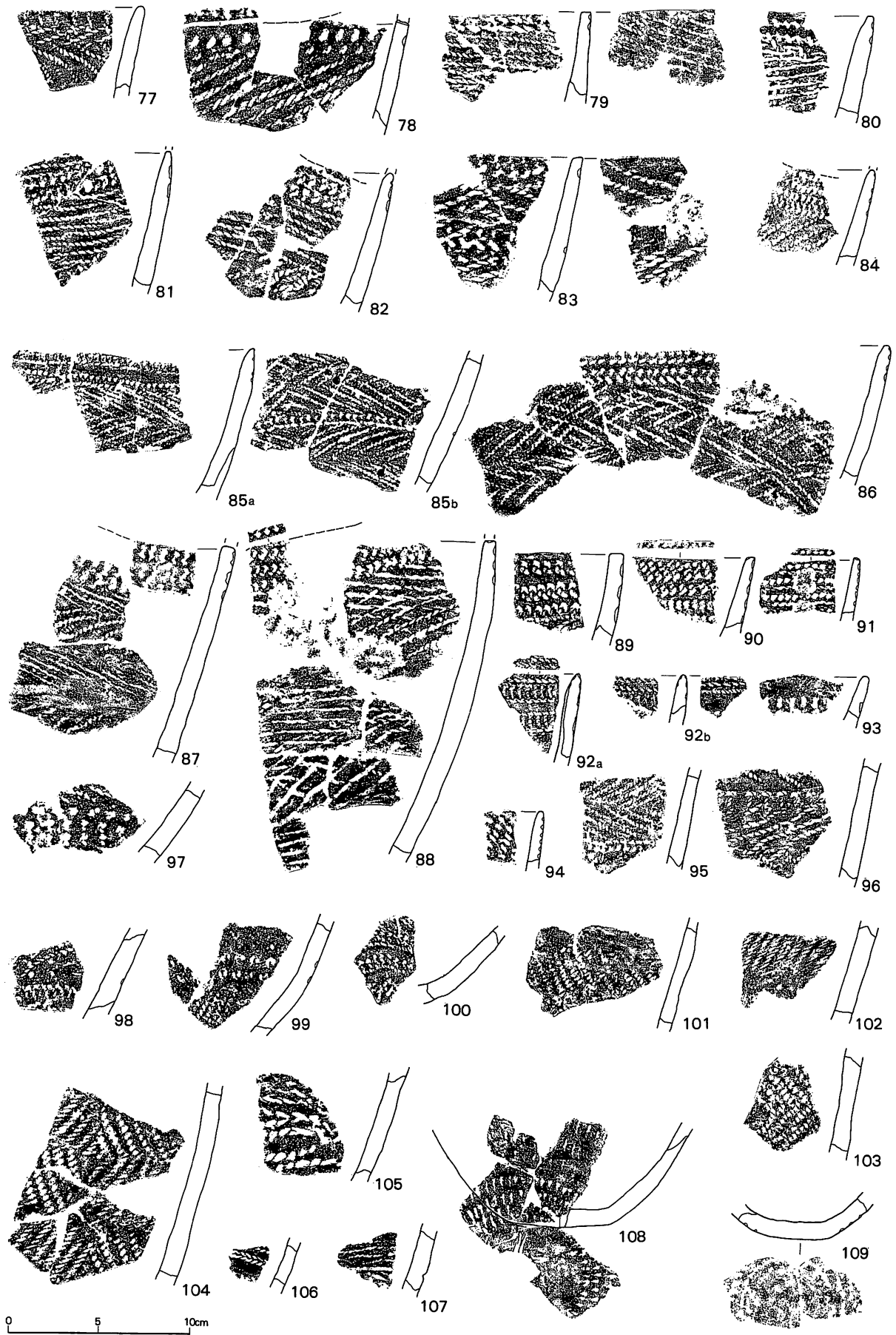
図IV-23 包含層出土の土器 (1) I群b-2~4類



図IV-24 包含層出土の土器(2) I群b-2類



図IV-25 包含層出土の土器(3) I群b-2~4類



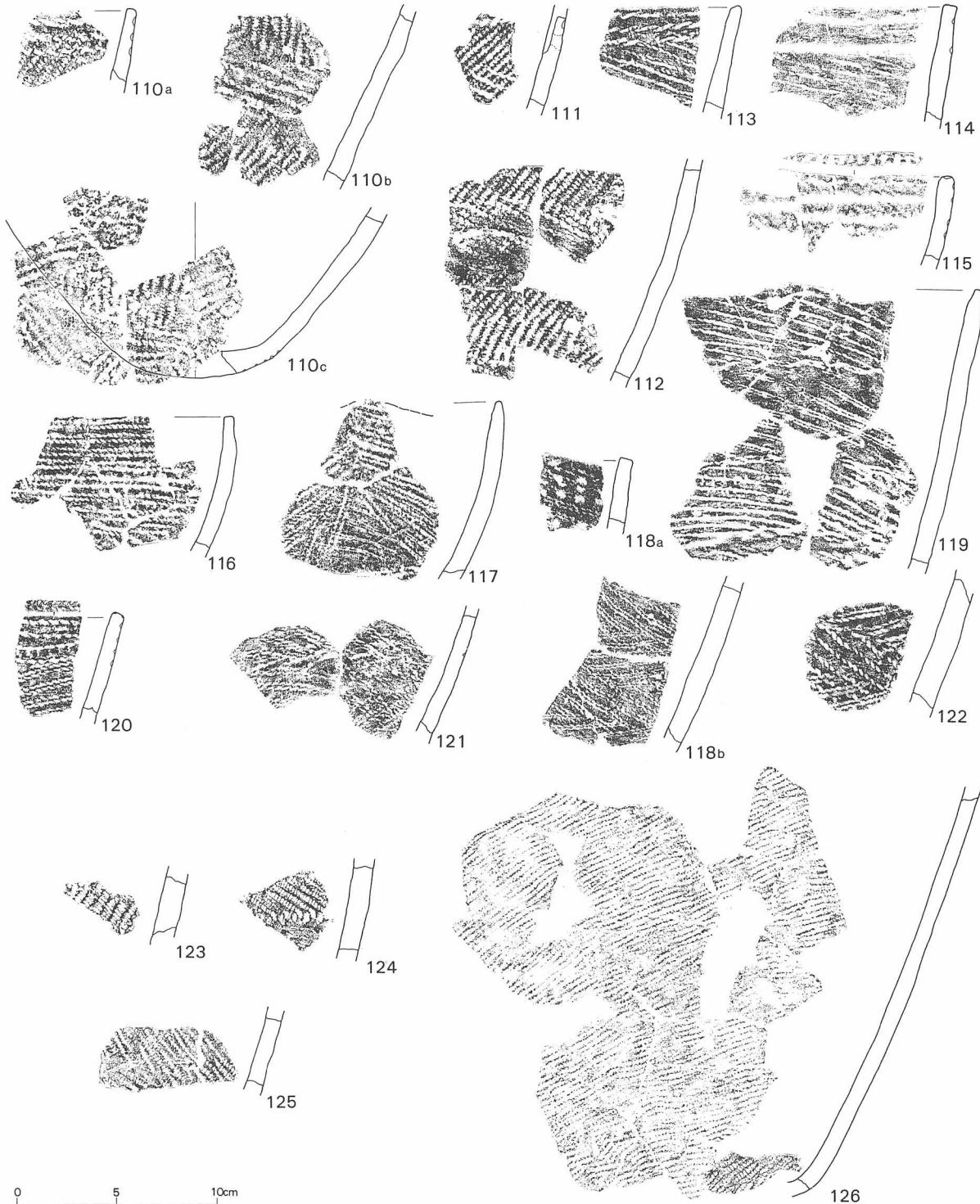
図IV-26 包含層出土の土器 (4) I群b-4類

III群土器 (図IV-27-123~125、図版IV-25)

縄文のみの破片 10 点を文様や内面調整の状態から本類とした。123・124 は 0 段多条の原体による縄文で、内面がなめらかに調整されている。124 は結束 1 種羽状縄文である。125 の内面には細かなすじ状の調整痕がある。今回出土した早期の土器にみられない調整痕であり、本群とした。

V群土器 (図IV-27-126、図版IV-25)

126 の 1 個体分が出土した。丸底気味であることから晩期中葉の土器と思われる。(葛西智義)



図IV-27 包含層出土の土器 (5) I群 b-4類・III群・V群

(2) 石器

582点出土している。一般的な器種ごとに大別し、さらに細分したものもある。それぞれの分布は土器同様、「まとめ」で述べる。ここでは石材について、少し触れる。石材の鑑定は現場では葛西が行い、不明なものについて調査2課花岡の鑑定、教示を受けた。この際、現場で珪岩としていたもののほとんどがメノウやチャートであることがわかった。特に剥片石器となっているものにはメノウが多く、原石と考えられる礫にはチャートが多い。これはチャート礫中に含まれているメノウ部分を特に石器に用いたためと思われる。ただ、こうした礫を打ち欠いた剥片になると分類の困難なものが多くなり、すべてチャートとして集計した。一覧表の石器石材にはメノウが多くみられるのに対し、剥片や礫ではチャートのみとなっているのはこのためである。

石鏃 (図IV-28-1~82、図版IV-26)

125点出土した。石材は黒曜石が多く(121点)、頁岩が3点、メノウが1点ある。

a: 石刃鏃 (1) 1点

先端がわずかに欠損している。凹基をなす基部と腹部周辺のみ加工がみられる。基部の剥離は腹部側から急角度に入っている。周辺の遺物を含めた出土状況図を「まとめ」に掲げている。

b: 菱形鏃 (2~37) 49点

木葉形や菱形を呈するもので、五角形のものも含めている。

2~9は長身鏃とされているものである。側縁に明瞭な角がつかず、基部は平基か、円基となるものが多い。10~18は長さは短いものの、同様の特徴をもっている。12・13は茎部に幅があり、ずんぐりした形状である。15は受熱している。18はこのタイプの中では厚みがあり、有茎鏃にもしうる。

19~34は五角形を呈するものである。

35~37は基部の尖るものである。35は基部の剥離が新しく、再利用品と思われる。36・37はともに主剥離面を残し、左右非対象形である。未成品かもしれない。

c: 無茎鏃 (43~76) 34点

43~66が平基のもの、67~76が凹基のものである。

d: 有茎鏃 (77~82) 6点

79が平基の他は凸基である。78の身部は周辺加工のみであるが、基部は丹念に作り出されている。82は花十勝とされる黒曜石製である。

e: 欠損品および未成品と思われるもの (38~42) 35点

38はb類の、39はd類の欠損品と思われる。40~42は未成品としたものである。

石槍 (図IV-28-83~92、図版IV-26)

16点出土し、すべて黒曜石製である。木葉形(83・87・88)、有茎凸基(84~86)、無茎(89)のものがみられ、他は欠損品(90~92)である。89の基部は原石面で、厚みがある。

石錐 (図IV-29-93~98、図版IV-27)

6点出土した。全例図示している。石材は96が頁岩、他は黒曜石である。93は棒状の錐と思われる。94・98は剥片の端部に機能部を作り出したものである。95はつまみ付ナイフの欠損品を利用したものと思われる。96と97には頭部につまみ部がある。後者の錐部側縁には槌状剥離が入っている。

つまみ付ナイフ (図IV-29~31-99~145、図版IV-27~29)

93点出土している。石材は頁岩が多く(64点)、メノウやチャートが15点、黒曜石が14点ある。

簡単な周辺加工によって作られているもの(d)とそうではないもの(a~c)とに大きく分け、後者はつまみ部より下の形状によって、さらに細分した。

- a: つまみ部より下が方形や長方形を呈し、下辺と呼べる縁辺をもつもの(99~119) 32点
99・100・102~107には主剝離面右辺に打面調整のための剝離がある。下辺に類似した剝離がみられるものもある(108・109・112・115)。101は両面加工のもの、108は本類では唯一、黒曜石製のものである。109はメノウ製で、刃部といえる剝離列がみられない。非実用的なものと思われる。断面の厚みが他と異なり、左寄りにある。
- b: つまみ部より下が楕円形となるもの(121~131・135) 21点
121~126の主剝離面には打面調整のための剝離がみられる。127の主剝離面にある剝離は、剝片の厚みをとる目的と思われる。135は両面加工である。
- c: つまみ部より下が尖り、逆三角形となるもの(136~140) 6点
136はドットを打った面と打っていない面との色が異なっており、再加工品であろう。139では主剝離面の両辺に剝離がめぐっている。140は細長く湾曲する両面加工のナイフである。
- d: 周辺加工のみで作られているもの(132・133・141~145) 8点
145は鋸歯状の縁辺となっている。異形石器といえるものかもしれない。
- e: 分類困難な欠損品(120・134) 26点
スクレイパー(図IV-31・32-146~181、図版IV-29・30)
71点出土している。石材は黒曜石が多く(45点)、頁岩が21点、メノウやチャートが5点ある。
- a: 篋状石器といえるもの(147~152) 6点
全点図示している。147はメノウ製、148~152は頁岩製である。152は両面加工である。
- b: 刃部が縁辺の過半をめぐり、ほぼ円形を呈するもの(153~155) 4点
ラウンド・スクレイパーを想定して分類した。c類の多くのものより刃部の角度がなだらかであるが、区別が難しいものもある。155は側面観が湾曲している。
- c: エンド・スクレイパーといえるもの(156~166) 19点
156~158は縦長剝片の下端に刃部を設けたもの、159~166は小円礫素材を利用したと思われるものである。後者のすべてに原石面が認められる。162は腹面に広い原石面が残っている。162~164では、背面に大きな剝離がある。165・166は厚みのある塊状の剝片を利用している。
- d: 縦長剝片を素材とし、刃部が側縁に形成されるもの(167~172・174~180) 18点
刃部が両側縁にあるもの(169~171)と一側縁のみにみられるもの(167・168・172・174~180)とがある。180の主剝離面には、つまみ付ナイフにみられた打面調整剝離に類似した剝離がある。主剝離面左辺にある点がつまみ付ナイフと異なっている。
- e: 横長剝片を素材とするもの(181) 4点
181は主剝離面に刃部が設けられている。
- f: 再利用品や分類困難な欠損品(146・173) 20点
146はつまみ付ナイフ・c類の可能性はある。両面加工である。173はつまみ付ナイフの再利用品と思われる。ドットを打った面がつまみ付ナイフの整形面で、ドットのない剝離面と色調が異なっている。

使用痕、加工痕のある剝片(図IV-32-182~197、図版IV-30)

123点出土している。黒曜石が多く(98点)、頁岩が23点、メノウが2点ある。

- a: 使用痕のある剝片(182~191) 53点

剥片に微細な剥離のみられるものである。剥離が部分的で角度がないことからスクレイパーと区別した。188～190は折れ面に微細な剥離がある。

b：加工痕のある剥片（192～197） 70点

器種の推定できない欠損品や意図の不明瞭な剥離のあるもの（192～197）である。

石斧（図IV-33-198～208、図版IV-31）

27点出土した。石材は蛇紋岩が15点、泥岩が10点、片岩が2点である。石材ごとに配列した。

198～204が蛇紋岩製のものである。198は頭部も磨かれて刃部様になっている。201～203には擦り切り痕が残っている。201は加工痕礫とすべきかも知れない。204では両側縁に潰されているところがある。その位置から装柄に関係するものと思われる。

205は片岩製のものである。頭部が磨かれて刃部様である。

206～208は泥岩製のものである。206・207には素材の礫面が残っている。後者は接合部を境に色が異なっている。208は上下端ともに断面が尖っており、刃部的である。より幅のあるほうを刃部として図化した。

たたき石（図IV-33・34-209～213、図版IV-31・32）

11点出土した。石材には砂岩（4点）、片麻岩（3点）、安山岩（2点）、橄欖岩（1点）、アプライト（1点）がみられる。素材礫には扁平な円形あるいは楕円形礫（209～211 8点）、厚みのある円礫（212・213 2点）、棒状礫（1点）がある。扁平なものには、使用痕が長軸に平行する側縁に認められるもの（209・210）と全縁に認められるもの（211）とがある。図化していないものでは側縁の一部に限られるものもある。211の腹・背部にはすられた痕がある。209の背部にはいくぶん荒れたところがある。213の使用痕は不明瞭で、荒れた礫面の可能性もある。

くぼみ石（図IV-34-214～218、図版IV-32）

7点出土した。石材には砂岩（3点）、溶結凝灰岩（2点）、安山岩（1点）、片麻岩（1点）がみられる。素材礫では棒状礫（216）や扁平楕円礫（217ほか 3点）を用いるものと破片を利用しているもの（214・215・218）とがある。くぼみの残る面は217と218が2面、他は1面である。218の右図にあるくぼみの内壁は滑らかで、擦られたもしくは擦れた結果によると思われる。

すり石（図IV 34-219～225、図版IV-32）

16点出土した。石材には砂岩（7点）、安山岩（6点）、片麻岩（2点）、泥岩（1点）がある。素材礫には扁平礫（220・221ほか 3点）や楕円礫（219ほか 2点）、断面が三角形となる礫（222～225ほか 8点）がみられ、破片が3点ある。使用によるものか、素材の性質かが明らかではないが、220や222・223の礫面は滑らかである。

砥石（図IV-35-226～231、図版IV-33）

14点出土し、すべて砂岩を用いている。226や227のような板状片が多い。228は楕円礫片に滑らかな面がみられるものである。石鋸かもしれない。229～231は砥面が凹んでいる。229・230には凸面をなすところもある。231の頭部は打ち欠かかされている。使用により凹んだ砥面と縁辺との高低差を調整したものと思われる。

台石（図IV-35-232～234、図版IV-33）

39点出土した。砂岩製の232を除き、安山岩製である。両面あるいは片面に滑らかな面をもつ板状片がほとんどで、使用痕の不明瞭なものでも石質から台石としたものもある。232に明瞭な使用痕はみられない。平坦な面を利用したものと考えて、台石とした。234は使用痕は認められないが、方形に形を整えられているようである。H-1の東側、b 67-92区から出土し、北側にいくと土壌群がある。住居

外に置かれた作業台か、土壌群に係わる祭事的な置き石の可能性がある。

石核 (図IV-36-240・241、図版IV-34)

7点出土した。石材は頁岩4点、黒曜石3点である。残核的なものが多い。明確には区別しがたいが、厚みのある塊状のものを石核、それ以外はRフレイクとした。図示した2例(240、241)ともに、定まった技法は読み取れない。

加工痕のある礫 (図IV-36-235~239、図版IV-34)

22点出土した。蛇紋岩(7点)、砂岩(6点)、泥岩(4点)、アブライト(2点)の他に片麻岩やメノウ、珪化木が各1点ある。スリ痕はあるものの、整形されたような形状を成さないもの(235~238ほか16点)が多い。この他には石斧製作の際の擦り切り残片(239ほか2点)と一部に打ち欠きのもの(4点)がある。前者は蛇紋岩、後者は砂岩とチャートである。

238の網をかけた部分には煤状の付着物がある。

石製品・土製品 (図IV-36-243~247、図版IV-34)

石製品は異形石器といえるものである。剝片の両側にえぐりをいれたもの(243・244ほか3点)と下端が二又となるつまみ付きの石器(245・246)とがある。前者はI群b類土器を出土する遺跡にしばしば見られるもので、墓壇(P-37・38)からも出土している。アクセサリーであろうか。245と246は同じb67-84区内から1mほど離れて出土した。ともに白い斑点の入る黒曜石で、同一母岩の可能性はある。

247は土製円盤である。紐を交差して巻いた絡条体による圧痕がある。圧痕の中に節は見えない。I群b-2類土器の破片を利用したものと思われる。他に土器片同様の湾曲がみられるものの、胎土に砂粒を含まない焼き粘土が2点出土している。

剝片・礫

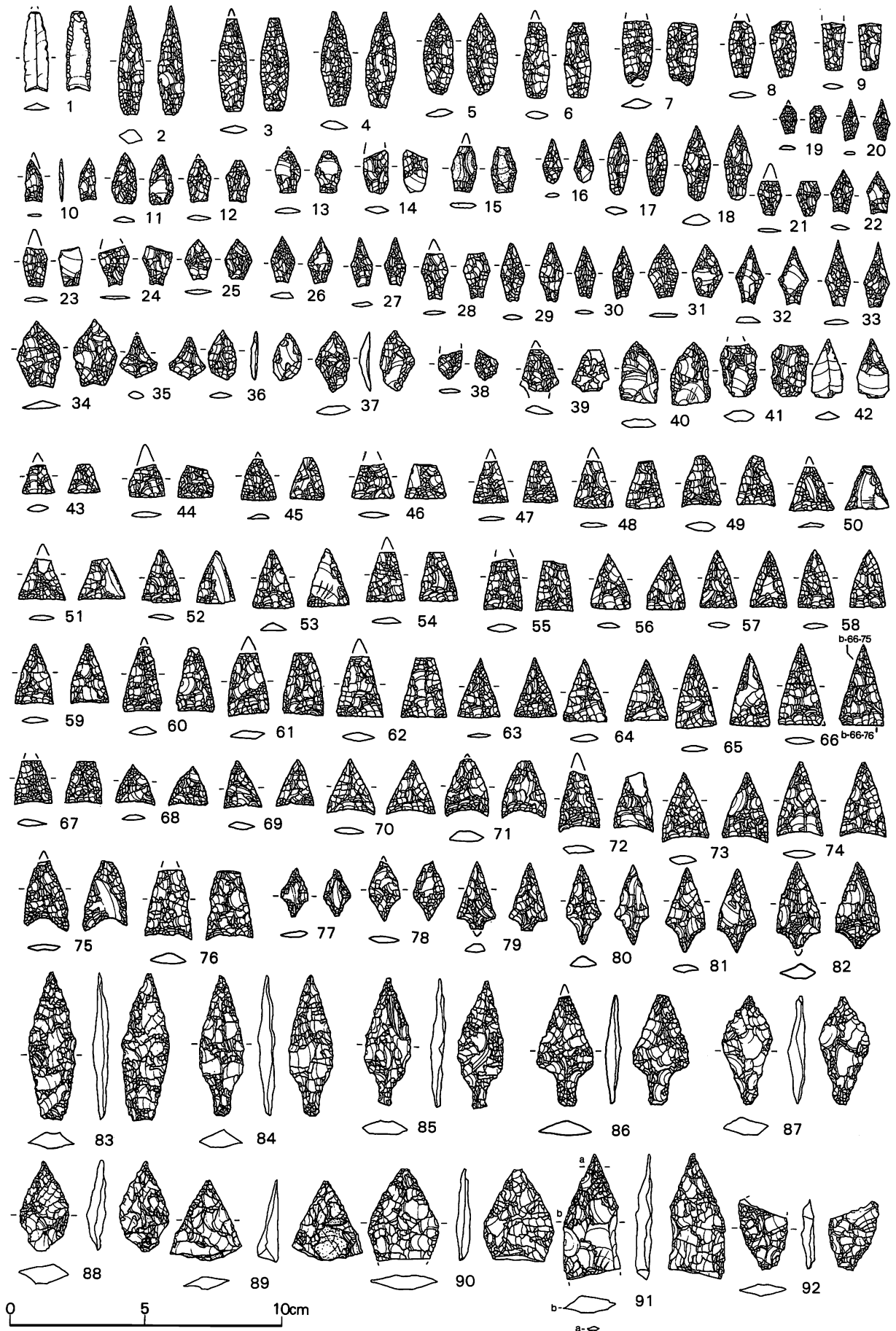
剝片は2,862点出土した。黒曜石(2,191点)、頁岩(582点)、チャートやメノウ(88点)の他に泥岩が1点ある。

礫は201点出土した。石材では、安山岩・砂岩・チャートが各40~70点、泥岩・溶結凝灰岩・アブライトが各10点前後、片麻岩・片岩・蛇紋岩と思われるものが数点ずつある。II黒層は礫を包含しない土層であることから石器素材として持ち込まれたものと考えられる。

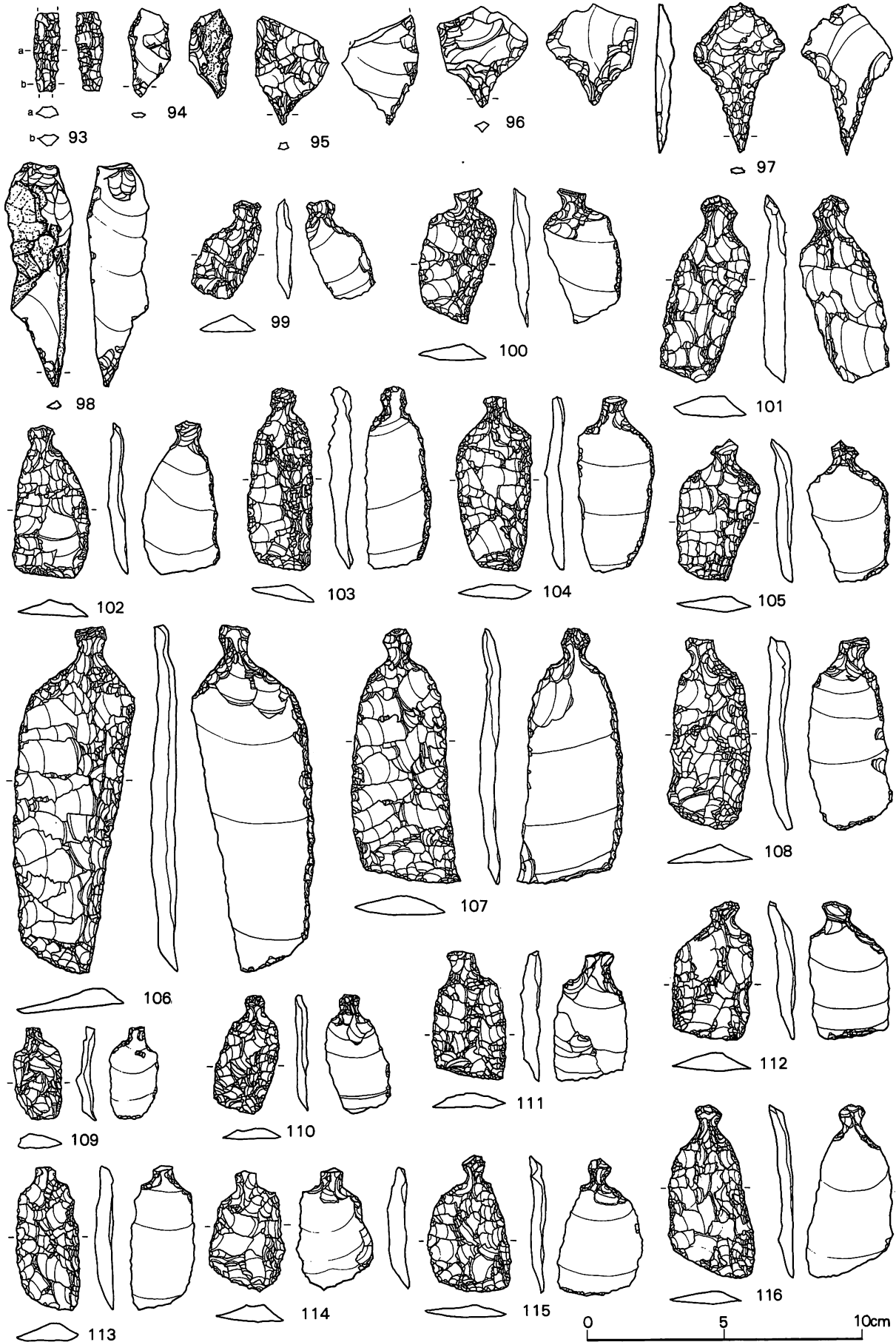
III黒層出土の石器 (図IV-36-242、図版IV-34)

美々8遺跡の平成元年度調査区に接する東斜面の切り面から242のスクレイパーが出土した。発掘区ではb66-45区にあたる。斜面であるため、II黒層からの転落とも考えたが、石器表面の光沢がII黒層出土の黒曜石製の石器とは異なっている。

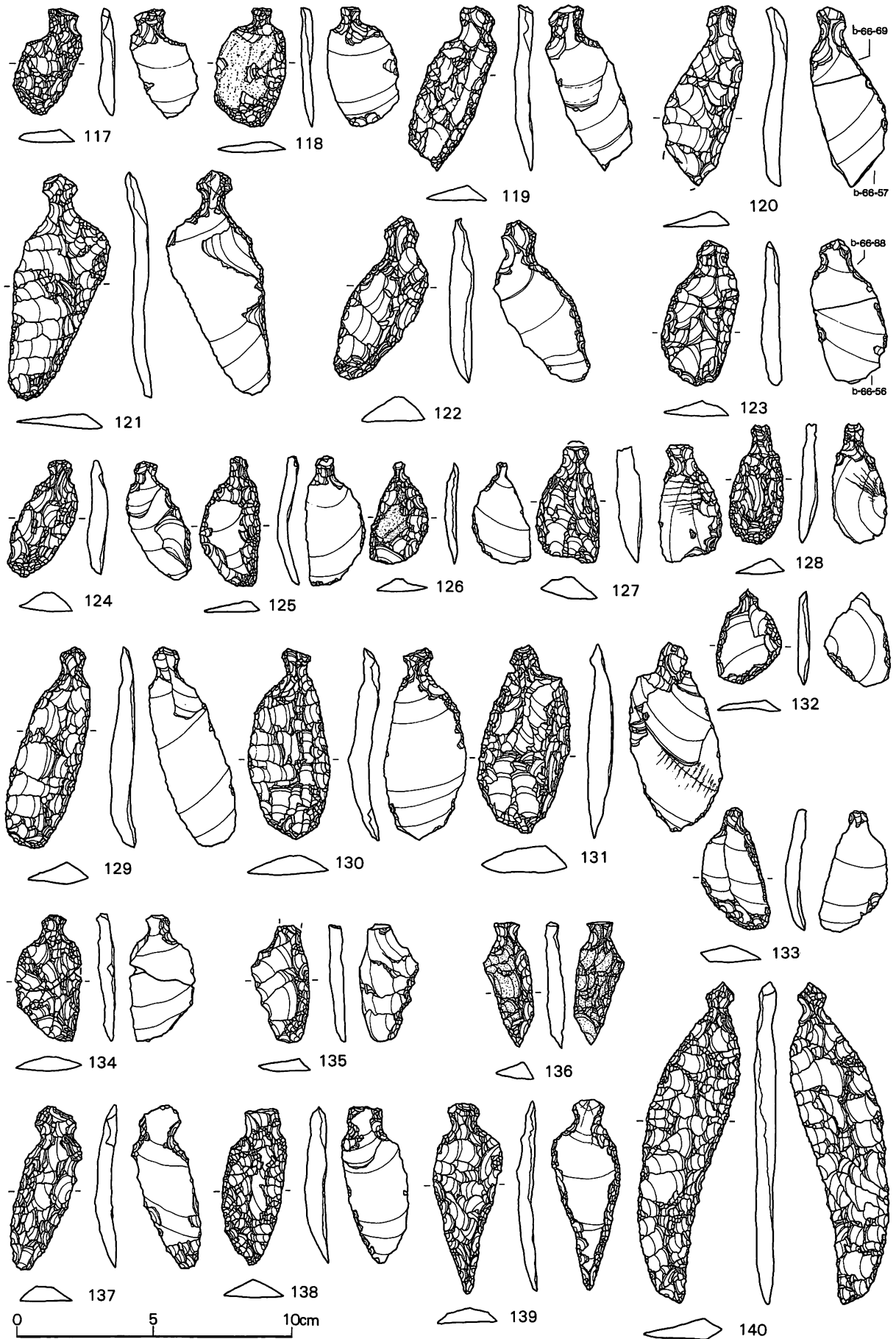
本層からの遺物出土は、一連の美沢川流域の調査では、美々4遺跡(昭和55・59年度)、美沢3遺跡(昭和63年度)に続くものである。美々4遺跡出土の黒曜石のチップでは11,900±500 y. B. P.、12,300±700 y. B. P.の水和層年代が示されている。(葛西智義)



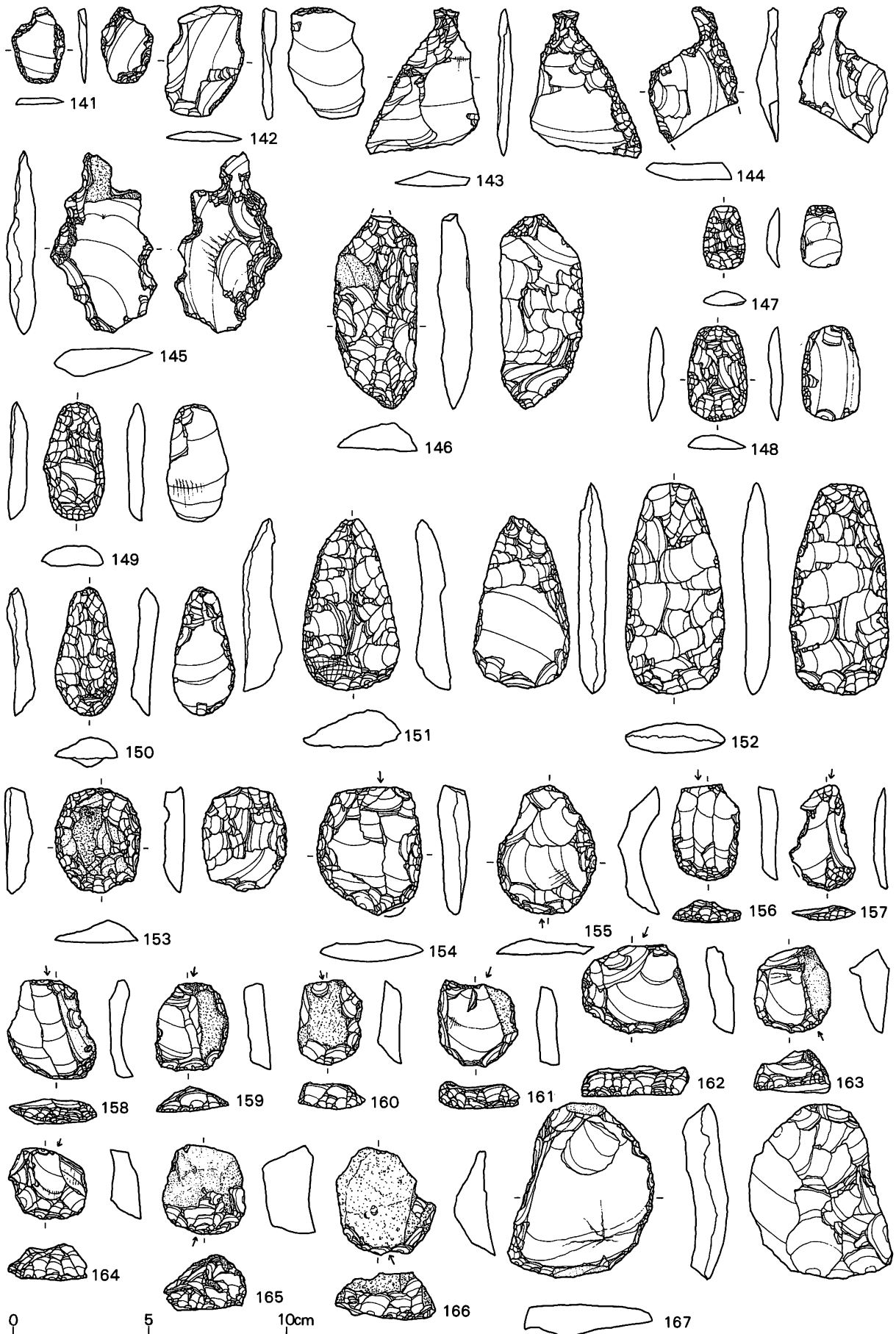
図IV—28 包含層出土の石器 (1) 石刃鏃・石鏃・石槍



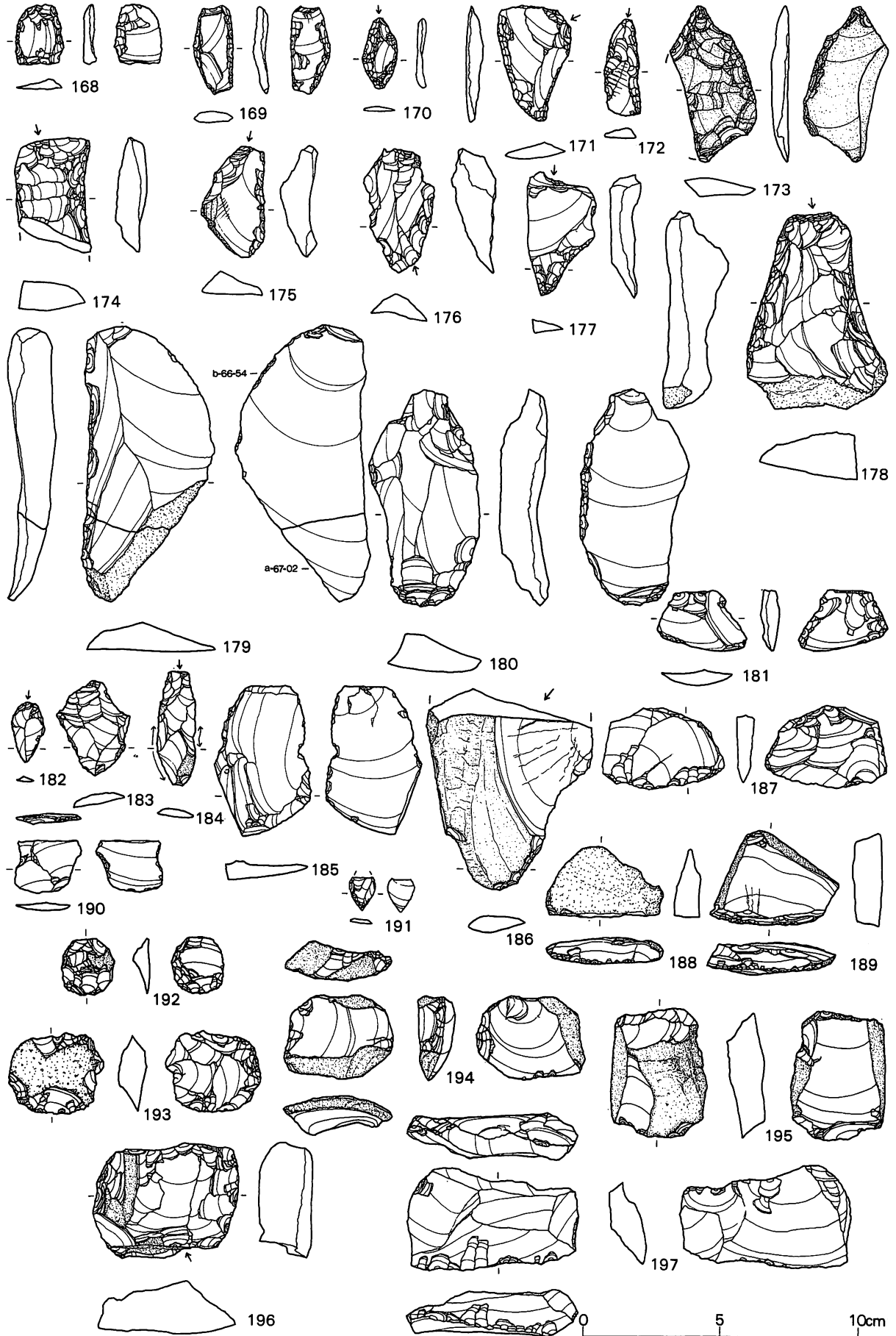
図IV-29 包含層出土の石器 (2) 石錐・つまみ付ナイフ



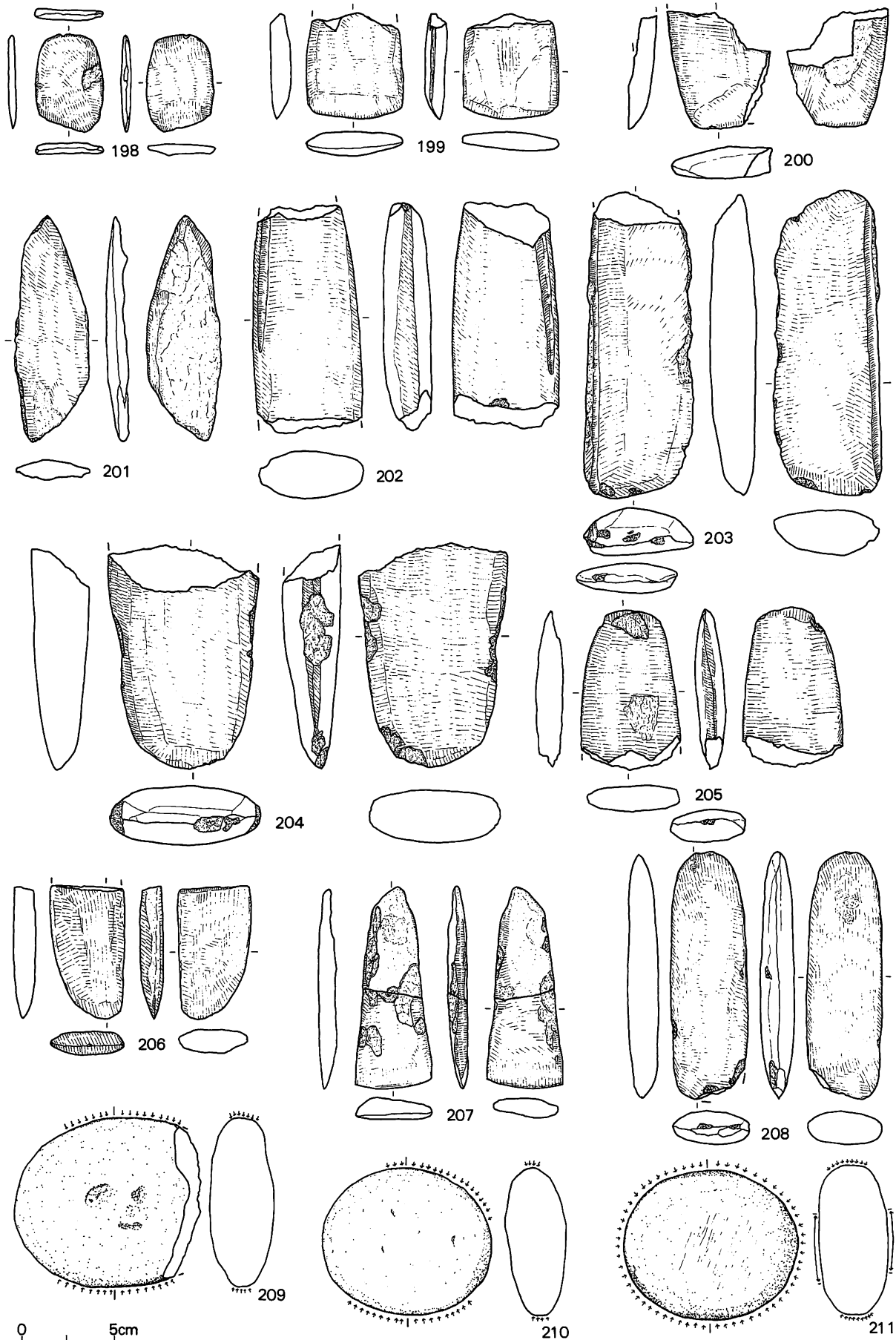
図IV-30 包含層出土の石器 (3) つまみ付ナイフ



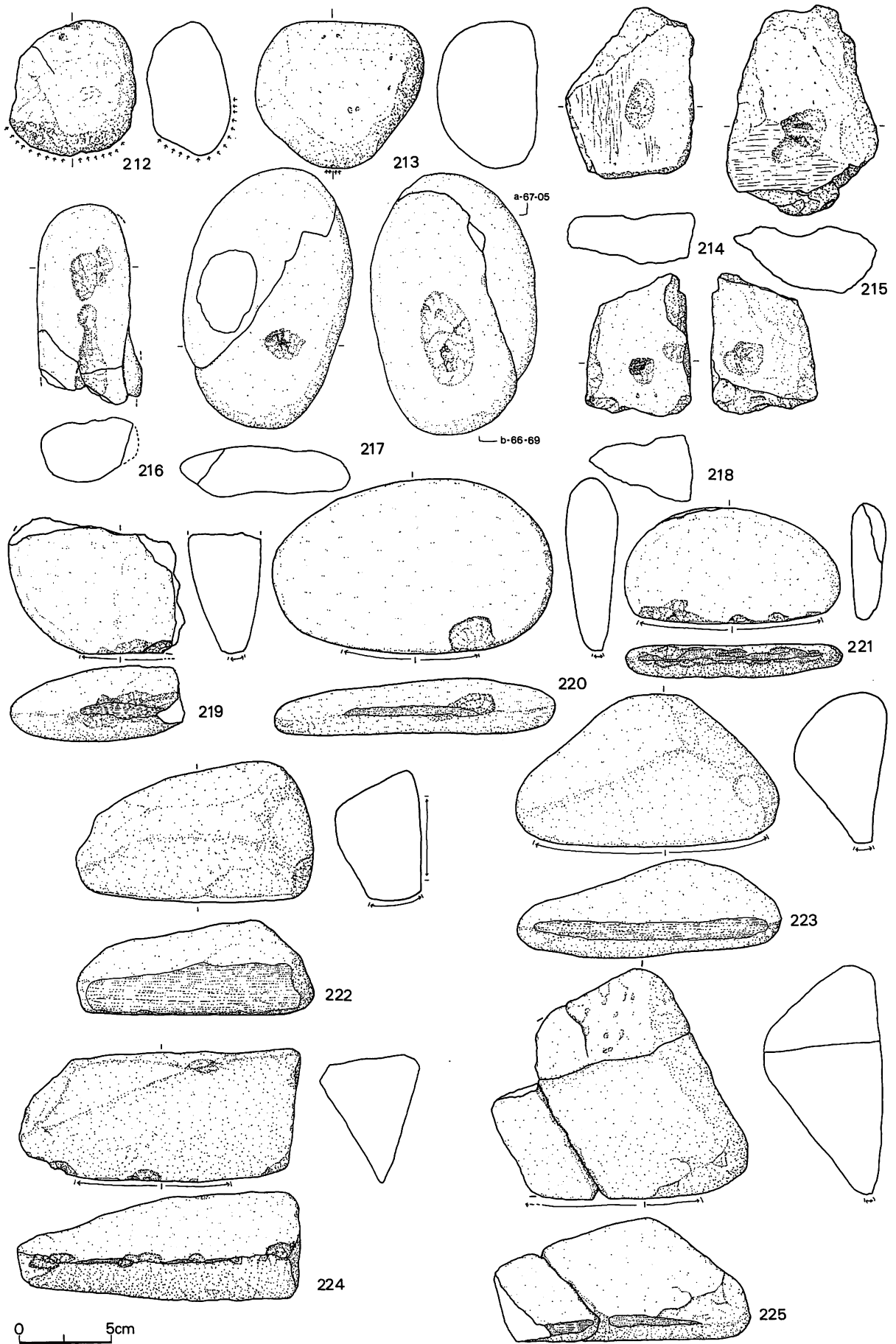
図IV-31 包含層出土の石器(4) つまみ付ナイフ・スクレイパー



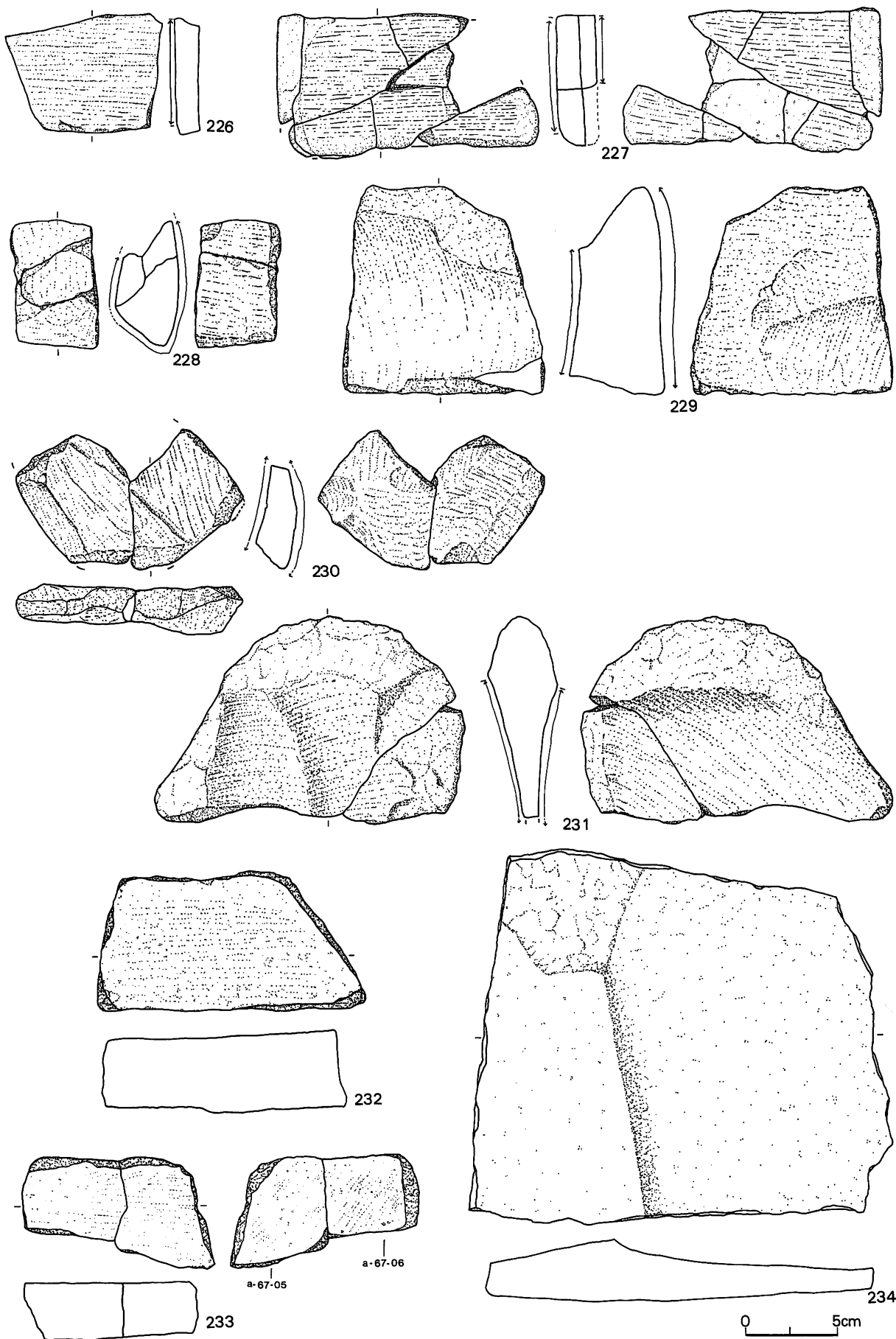
図IV-32 包含層出土の石器 (5) スクレイパー・使用痕、加工痕のある剝片



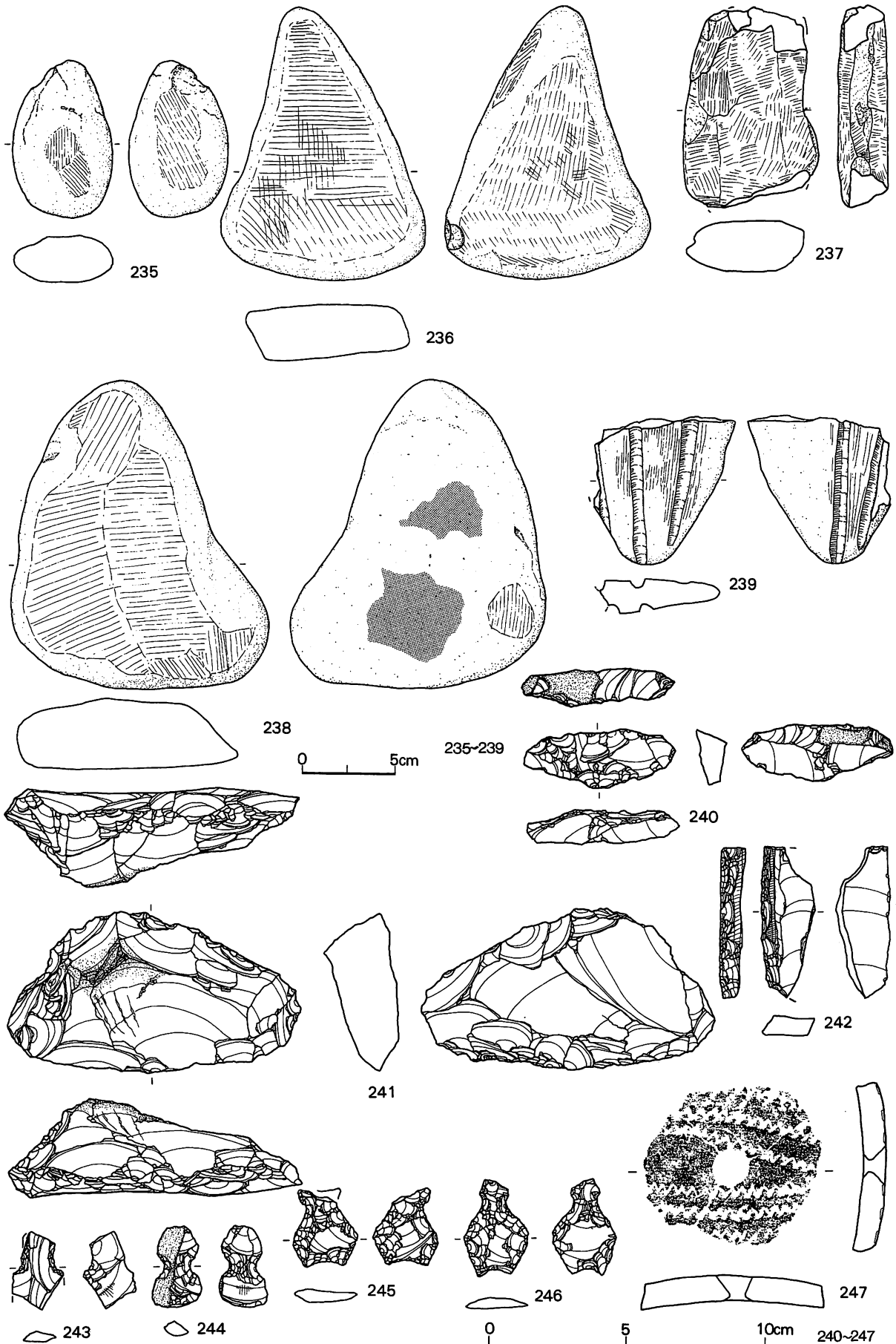
図IV-33 包含層出土の石器 (6) 石斧・たたき石



図IV-34 包含層出土の石器 (7) たたき石・くぼみ石・すり石



図IV-35 包含層出土の石器 (8) 砥石・台石



図IV-36 包含層出土の石器 (9) 加工痕礫・石核、Ⅲ黒層の石器、土・石製品

II 黒層遺物一覽表

表IV-6 出土遺物一覽

名 称	数 量			名 称	数 量			名 称	数 量		
	遺 構	遺構外	合 計		遺 構	遺構外	合 計		遺 構	遺構外	合 計
土器 (I群b-2類)	5	2014	2019	スクレイパー	5	71	76	加工痕 礫		22	22
(I群b-3類)		295	295	Uフレイク	5	53	58	異形石器	8	5	13
(I群b-4類)	124	5078	5202	Rフレイク	1	70	71	石器計	48	582	630
(III群)		10	10	石 斧		27	27	土製品	2	3	5
(IV群)	149		149	たたき石	1	11	12	剝片(黒曜石)	64	2191	2255
(V群)		42	42	たき石		7	7	(頁岩)	11	582	593
土器計	278	7439	7717	すり石	1	16	17	(チャート)		87	87
石 鏃	16	125	141	すり石	1	39	40	(メノウ)		1	1
石 槍		16	16	台砥石		14	14	(泥岩)		1	1
石 錐		6	6	石 錘	2		2	礫	4	201	205
つまみ付ナイフ	8	93	101	石 核		7	7	総出土遺物数	407	11087	11494

表IV-7 遺構出土遺物一覽

*この他にP21やP36周辺から出土したIV群土器(147点)、たたき石(1点)、すり石(1点)、石錘(2点)、礫(2点)がある。

遺 構 番 号	名 称	数 量			遺 構 番 号	名 称	数 量		
		覆	土	床 合計			覆	土	床 合計
H-1	I群b-2類土器	下位: 2	4	4	P-36	IV群a類土器		2	2
	I群b-4類土器	上位: 24, 下位: 15	57	1 58		剝片(黒曜石)		1	1
	石 鏃		2	2		剝片(頁岩)		1	1
	つまみ付ナイフ	上位: 1	4	1 5		遺物合計		4	4
	スクレイパー	上位: 2, 下位: 1	3	3	P-37	I群b-4類土器	2層: 2, 4層: 3	5	18 23
	Rフレイク		1	1		異形石器		3	3
	Uフレイク	上位: 3	3	3		足形付き土製品		2	2
剝片(黒曜石)	上位: 11, 下位: 26	37	4 41	剝片(黒曜石)		7層: 2	2	1 3	
剝片(頁岩)	上位: 1, 下位: 6	8	8		遺物合計		7	24 31	
遺物合計		116	7 125	P-38	I群b-4類土器		3	3	
H-2	I群b-4類土器		3		3	石		13	13
	剝片(黒曜石)		3		3	スクレイパー		2	2
遺物合計		6	6		つまみ付ナイフ		1	1	
P-23	I群b-4類土器		1	1	異形石器		5	5	
	遺物合計		1	1	剝片(黒曜石)		3	3	
P-24	I群b-4類土器		1	1	遺物合計		3	24 27	
	礫		1	1	P-39	つまみ付ナイフ		1	1
遺物合計		2	2	遺物合計			1	1	
P-27	剝片(黒曜石)		1	1	P-40	台 石		1	1
	遺物合計		1	1		礫		1	1
P-31	I群b-4類土器	4層: 1	1	1	遺物合計		2	2	
	剝片(黒曜石)	3層: 5	5	5	P-41	I群b-2類土器		1	1
	剝片(頁岩)		1	1		I群b-4類土器		3	3
遺物合計		6	1 7	遺物合計		4	4		
P-32	I群b-4類土器	攪乱: 1, 1層: 1	2	1 3	TP-1	I群b-4類土器		3	3
	つまみ付ナイフ		1	1		剝片(黒曜石)		1	1
	剝片(黒曜石)	攪乱: 1, 1層: 1	3	3	遺物合計		4	4	
	剝片(頁岩)	1層: 1	1	1	TP-2	Uフレイク		1	1
遺物合計		7	1 8	剝片(黒曜石)			1	1	
P-34	I群b-4類土器	3層: 24	24	24	遺物合計		2	2	
	石 鏃		1	1	TP-3	Uフレイク		1	1
遺物合計		24	1 25	遺物合計			1	1	
P-35	I群b-4類土器	底面直上: 1	1	1	P-42	遺物合計		1	1
	剝片(黒曜石)		2	2					
遺物合計		1	2 3						

表IV-8 遺構出土掲載石器一覽 (1)

*計測値の下線は現存値 *燧灰岩は溶結燧灰岩

図番号	発掘区	層	名 称	cm cm cm g				石 材	図番号	発掘区	層	名 称	cm cm cm g				石 材
				長さ	幅	厚さ	重さ						長さ	幅	厚さ	重さ	
10-9	H-1	床面	つまみ付ナイフ	6.0	3.0	1.0	11.8	黒曜石	13-3	P-32	覆土	つまみ付ナイフ	4.0	1.5	0.7	2.8	頁 岩
10-10	"	床面	Uフレイク	2.5	1.7	0.3	1.1	黒曜石	14-6	P-34	床上	石 鏃	2.0	0.9	0.2	0.3	メノウ
10-11	"	覆土	石 鏃	1.6	0.8	0.2	0.2	黒曜石	15-3	P-37	床面	異形石器	3.4	2.5	0.5	3.0	メノウ
10-12	"	覆土	石 鏃	1.8	1.1	0.4	0.6	黒曜石	15-4	"	床面	異形石器	3.5	2.4	0.7	5.4	メノウ
10-13	"	覆土	つまみ付ナイフ	5.0	3.3	0.9	8.8	黒曜石	15-5	"	床面	異形石器	3.9	2.3	0.4	3.4	メノウ
10-14	"	覆土	つまみ付ナイフ	5.4	3.1	0.9	15.0	チャート	17-2	P-38	床面	石 鏃	2.2	1.0	0.2	0.3	黒曜石
10-15	"	覆土	つまみ付ナイフ	8.8	3.1	0.9	14.8	頁 岩	17-3	"	床面	石 鏃	2.0	1.0	0.2	0.2	黒曜石
10-15	"	覆土	つまみ付ナイフ	-	-	-	-	-	17-4	"	床面	石 鏃	1.9	0.9	0.2	0.2	黒曜石
10-16	"	覆土	つまみ付ナイフ	9.7	2.5	1.0	23.6	頁 岩	17-5	"	床面	石 鏃	1.9	0.9	0.2	0.2	黒曜石
10-17	"	覆土	スクレイパー	5.1	2.2	0.5	7.1	頁 岩	17-6	"	床面	石 鏃	1.7	0.9	0.2	0.2	黒曜石
10-18	"	覆土	スクレイパー	3.6	2.6	1.8	16.4	黒曜石	17-7	"	床面	石 鏃	1.6	0.8	0.2	0.2	黒曜石
10-19	"	覆土	Uフレイク	4.8	2.8	0.9	7.0	頁 岩	17-8	"	床面	石 鏃	1.6	0.9	0.2	0.2	黒曜石
10-20	"	覆土	Uフレイク	4.9	1.8	0.7	5.9	黒曜石	17-9	"	床面	石 鏃	1.7	0.9	0.2	0.2	黒曜石
10-21	"	覆土	Rフレイク	2.0	2.0	0.4	1.6	頁 岩	17-10	"	床面	石 鏃	1.2	0.9	0.2	0.1	黒曜石
10-22	"	覆土	Uフレイク	1.9	1.4	0.4	0.7	黒曜石	17-11	"	床面	石 鏃	1.4	0.9	0.2	0.3	黒曜石

5 まとめ

ここでは注目された遺構や遺物、「4 第II黒色土層の遺物」で触れなかった遺物分布について述べることにする。

(1) アイヌ文化期の墓墳

b 66-57 区からアイヌ文化期の墓と考えられる遺構 P-10 が検出された。覆土の状況から 1667 年(Ta-b 降下) から 1739 年 (Ta-a 降下) までの間に構築されたものと判断された。遺構の形状は長楕円形で、千歳川流域の近世の墓墳をまとめた田村の分類 (1983) では I 型になる。深さは 40 cm である。頭位は Ta-a 層の落ち込みから南頭位と考えられ、遺構長軸は斜面の等高線にそっている。美々8 遺跡の I 黒面で検出された P-1 も南頭位といえるもので、これは遺構長軸が等高線に直交している。この 2 例からいえば、頭位の決定には地形よりも方位が重視されていたようである。P-10 のある斜面を下ると美々8 遺跡低湿部がある。ここでは、台地上の Ta-b 層上面に対比される 0 黒層から多量の遺物が出土し、現在の低湿地部に生活を営んでいた人々のいたことが明らかとなっている。アイヌ期の“墓地は昔は住宅の西南か西の方向に葬る”との記載 (更科 1969) もあり、美々8 遺跡低湿部にいた人々がそこを見下ろす美々7 遺跡の斜面を埋葬地として選んだようである。

人骨はすでに腐食していた。副葬品には山刀 (タシロ) とキセルがある。どちらも男女の差なくみられるとされている (田村 1983・平川 1984)。キセルは足元に置かれていた。田村は副葬位置から“大まかではあるが上半身側を男性副葬空間、下半身側を女性副葬空間とすることが可能”と指摘しているが、静川 22 遺跡 (工藤 1985) で脛のあたりにキセルが置かれた男性墓が検出されている。副葬品の位置にも地域差や時期差があるようで、P-10 に埋葬された人の性別は特定できなかった。平川 (1984) によれば、キセルの副葬された近世アイヌの墳墓は 9 例を数え、P-10 のように下半身側に置かれたものには、臼尻遺跡第 2 号アイヌ墳墓 (松岡ほか 1980) と末広遺跡 IP-125 (大谷・田村 1985) とがある。この他、ピリカタイ遺跡 (佐藤ほか 1964) の例がある。

キセルの雁首は鉄製、吸口は銅製であった。雁首に鉄が用いられており、きわめて珍しい例と思われる。また、この雁首にはラウとの接続部に亀裂あるいは割れ目があり、馬場の記載 (1942) の中にある“雁首そのものを破損さして所謂これも殺して送る”行為が行なわれたようである。類例としてウサクマイ B 地点第 3 号墓 (石附編 1974) から出土した、吸口に火皿をねじこんだ例が挙げられるかもしれない。なお、素材分析の試料として、ラウ側の一部を切り取った。このため、現在は割れ目がはっきりしないものになってしまった。試料の採取にあたって注意すべきであった。

キセルは小泉分類の雁首第 II 類 C と吸口第 II 類 B になるもので、両者をあわせた変遷では第 5 段階 (小泉 1985 b) にあたると思われる。時期は 18 世紀後半を中心とするとされている。また、道内のキセル出土例にふれた越田 (1988) によれば、雁首第 II 類 C は 18 世紀代とされ、ともに先の遺構年代とほぼ一致する。

このほか、Ta-b 面では平坦面を南北に走る道跡も見つかっているが、道跡が南斜面を下るところまで延びていることから、P-10 とのみ結びつけることはできない。

(2) I 黒層出土の土器

I 黒層では図 IV-8-18・19 に示した、オホーツク式との関連が考えられる土器が出土した。

18 の縦に並んで器体をめぐる刺突文は道央部の土器に類例を見出せず、道北部の亦稚貝塚 (岡田ほか 1978) や香深井 A 遺跡 (大場・大井編 1976・1981) などの刻文に同じものがある。全体からす

ると点数は少ないものの、亦稚では第1ブロックと第3ブロックに、香深井Aでは魚骨層II～IVまでにみられる。この中では魚骨層IVに多いが、円形文と複合施文される土器が普通のものである。施文される部位や縦に並ぶ刻文の数にも本遺跡例との差異が感じられる。施文部位と円形文の有無では魚骨層IIの土器（第134図-1）に近く、器形のくびれ具合からはそれよりは古いものと思われる。

19は櫛状工具による沈線（条痕）が器体をめぐっている。この文様は、菊池（1984）が江別式末期の縄文を置き換えたものとして発生し、さらに恵山式の伝統を受けて擦文土器の口頸部に多数めぐらされる平行沈線へ変化すると考えているものであろう。口唇にみられる凹線も「北大」とされるモヨロ貝塚例や初期擦文式に共通する特徴のようである（菊池 135 ページ）。この点では道央部に類例を求められるが、18同様に道北部での例を探すと、香深井A遺跡魚骨層III～IVやオンコロマナイ遺跡（大場・大井編 1973）などにみられる。これら道北部の例は突瘤文のない点で菊池論文にみられる道央や道東部の例よりも19に近く、器形や口唇の凹線がない点に差異もある。

このような18・19の土器は、文様からオホーツク式土器にきわめて近いものと言えるが、18のいくぶん張りだす底部や19の口唇凹線はオホーツク式土器の特徴ではない。香深井A報文の言葉を借りれば「接触様式」の土器としか言い得ないようで、オホーツク式土器の影響のある地域か人によって作られたものであろう。時期的には香深井A遺跡魚骨層III～IV層に対比されるものと考えられる。

これらの土器が道央部の「北大式」や擦文式とどのような関係にあったかは、類例に乏しい現状ではよくわからない。土器の出土地点から北東に歩いて数分で多量の擦文土器が出土した美々8遺跡である。そこでは時期的に近いあるいは同じと思われる北大式や古い段階の擦文式土器も多く得られている。こうした距離的にも時期的にも近い遺物があるにもかかわらず、それらから離れて2個体分のみが本遺跡から出土している。この点にもこれらの土器の性格が示されているようである。

I黒層では石鏃や礫も出土している。石鏃は縄文晩期末～続縄文時代とされる形態で、18・19の土器とは関連しないと思われる。双礫、集中礫などの礫はI黒層上面で出土しており、これらの土器に関連する可能性がある。

(3) II黒層の遺物分布

今回のII黒層の調査では

1. 高橋・越田によって予想されていた（高橋・越田 1984）縄文早期の土器の分布、特に弧状の分布を呈する可能性があるとして指摘された東釧路IV式のあり方を把握すること
2. 美沢3遺跡報文（北埋調報 62 1990）で示された東釧路IV式の変遷を出土状況から検討すること
3. 土器と石器の関連を把握すること

この3点を大きな目標として調査を進めた。

遺物の取り上げ：II黒層は層の傾斜にそって数cmごとに掘り下げていった。II黒層の厚さは30～40cmであり、これを数回繰り返すことになる。遺物はII黒の2回目、3回目といったようにその回数を記録して取り上げていった。ただ、層厚のあるところはもちろん、遺物の多いところでは一度に掘り下げる程度が薄く、6～7回の掘り下げが行なわれるのに対して、逆の場合は2～3回で掘り下げを終わることもある。このため、遺物の取り上げ回数は調査区全体に統一されていないものではない。それでもおおよそ1～2回目がII黒層上位から中位に、3～5回目がII黒層中位からTa-d₁層上面に、6～7回目がTa-d₁層からTa-d₂層上面にあたる。

弧状の分布：図IV-37は土器の分布である。I群b-2類とI群b-4類をみると、前者は斜面下方に、

後者は平坦部に近い斜面際から多く出土する。I群 b-3類はその中間あたりに2ヵ所の集中が見られる。

東釧路IV式は指摘されていたように、弧状の分布を呈する。これは標高20mラインにそっている。分布の希薄なところは南斜面をやや西寄りに下る方向にあり、標高18mラインが張り出す方向と一致している。このことから、今回の調査では弧状の分布は地形との関係が深いと考えられた。

東釧路IV式の出土状態：美沢3報文では東釧路IV式をa~gの7類に細分し、古いグループ、新しいグループ、その中間のグループの3者にまとめている。本遺跡の東釧路IV式土器は破片が多く、a~g類に当てはめた細分は難しい。このため、特徴的な文様の出現状態を見ることにした。それは比較的古いグループに見られる綾絡文と新しいグループに用いられるとされる2本並列する撚糸文である。後者には今回、自縄自巻縄文としたものを含んでいる。比較のため、これに縄端や絡条体の圧痕文を加えた3つについて調べてみた。取り上げ回数ごとに、それらの文様が見られた破片を全破片数で割った率が表IV-11である。取り上げ回数は同一類内での比較であることやこれらの文様をもつ破片の点数が少ないことから、表に付したように3段階にまとめた。

この結果では出土状態から3つの文様の新旧は示されなかった。といて、このことから美沢3で示された変遷が違うとするものではない。前後の土器から3つのグループの変遷は十分に考えられることである。ただ、発掘時にそれが確認されないことにはそれに対応した石器や遺跡の様相を捉えることはできない。他との関係が明らかなように土器も分ける、反対に土器をまず分ける、両者の考えがあろうが、まだ美沢3の分類が土器だけにとどまる段階と思われる点で、今後課題を残している。

なお、全破片を対象としたため、表IV-11ではいずれの段階でも多くの文様不明な剝落片や小片を含んでいる。I・II段階に多く(60~80%)、III段階では50%前後である。残りは自縄自巻縄文あるいは撚糸文のみの土器と考えてよい。

石刃鏃：図IV-38(上)は石刃鏃周辺の遺物である。出土区(b66-96区)は平坦面で遺物が少なく、広場や作業場といった性格も予想されたことから、遺物を残して掘り下げていった。このため、石刃鏃の出土面は3回目でもそれ以前の遺物が残っており、1~4回目までの全遺物を記録した。図示した土器以外は小破片や剝落片であり、それらもコッタロ式や東釧路IV式と思われるものである。図版IV-20-4は次年度調査区の土層とともに出土状況を写したものである。図では同じ取り上げ回数でも図示した土器より石刃鏃のレベルが低くなっているが、写真に示された出土面(Ta-d₁上面)はコッタロ式や東釧路IV式のそれと同じである。

美沢川流域の調査では、美沢3遺跡と美々8遺跡から石刃鏃が出土しており、現時点では本遺跡の近隣に限られている。出土地点はいずれも台地上であり、散点的である。周辺から多く出土している土器はI群 b-2~4類である。美沢川流域では石刃鏃がI群 b-2~4類土器に伴う可能性があるとともに、出土地点では低地部にも見られるこれらの土器とは別のあり方をしているとも考えられる。西側に次年度調査区が残されており、そこにより古い段階の土器が見られるかもしれない。

石器の出土状態：全体的な石器や剝片の分布は図IV-38(下)に、器種ごとの分布は図IV-39、取り上げ回数による出土点数は表IV-13に示した。

石鏃は図や表でB、b、Cおよびc、Dとした順に変遷が考えられている。Bとbでは後者が前者よりまとまった出土状態を示し、回数でもbのほうが上から出土するようである。Cおよびcは平坦面から斜面にかけて広く出土しており、東釧路IV式土器の分布に近い。ただ、同土器が100点以上出土する発掘区の隣から出土する例が多い。これを土器と異なる廃棄状況とするか、時期がずれるとするかの問題がある。取り上げ回数からいけば、やや新しいものがあると考えたい。Dの新しいことは取り上げ回数に示されている。

つまみ付ナイフはいくつかの形態に分けて図と表を作成したが、分布や取り上げ回数に明らかな違いは読み取れない。石鏃に比べると、集中するのがほぼ東斜面に限られてくる。石鏃よりも土器とともに廃棄されたものが多かったことを反映していると考えられる。

この他の石器では、スクレイパーのAは東釧路IV式土器の多いところから、Aは平坦面から多く出土している。礫石器では1グリッドから6点以上出土したところが4ヵ所にある。東斜面のb66区の2区にあるものは土器とともに廃棄された可能性が高い。a・b67区にまたがる2区ではたたき石や石核、Rフレイク、剝片が多くみられ、ここで石器製作が行われた様相を残している。b67-92・93区では並んだ状態で出土した礫石器も見られた(図版IV-20-6・7)。西隣のa67-02区にはH-1がある。覆土からはつまみ付ナイフが多く出土しており、礫石器や剝片は見られない。H-1あるいはH-1のくぼみは別な場として意識されていたようである。

剝片は黒曜石を100点以上出土した区、頁岩を50点以上出土した区とも、a67-53区を除いて、東斜面に限られている。剝片の出土回数では、黒曜石は1~2回目で多く出土している。これは調査中にも感じられたことである。土器・石器の廃棄→剝片の廃棄→作業場自体の放棄、の変遷が考えられる。出土した剝片の大きさでは3cm四方以上のもの(A)、3cm四方に納まるもの(B)、2cm四方に納まるもの(C)、2cm四方以下のもの(D)の4段階に分けて、出土率を調べた。b66・67区、a67区ともに黒曜石はA:2~5%、B:10~20%、C:50~60%、D:20~30%、頁岩はA:8~15%、B:25~35%、C:50~60%、D:2~8%である。

(4) 縄文時代早期の美々7遺跡

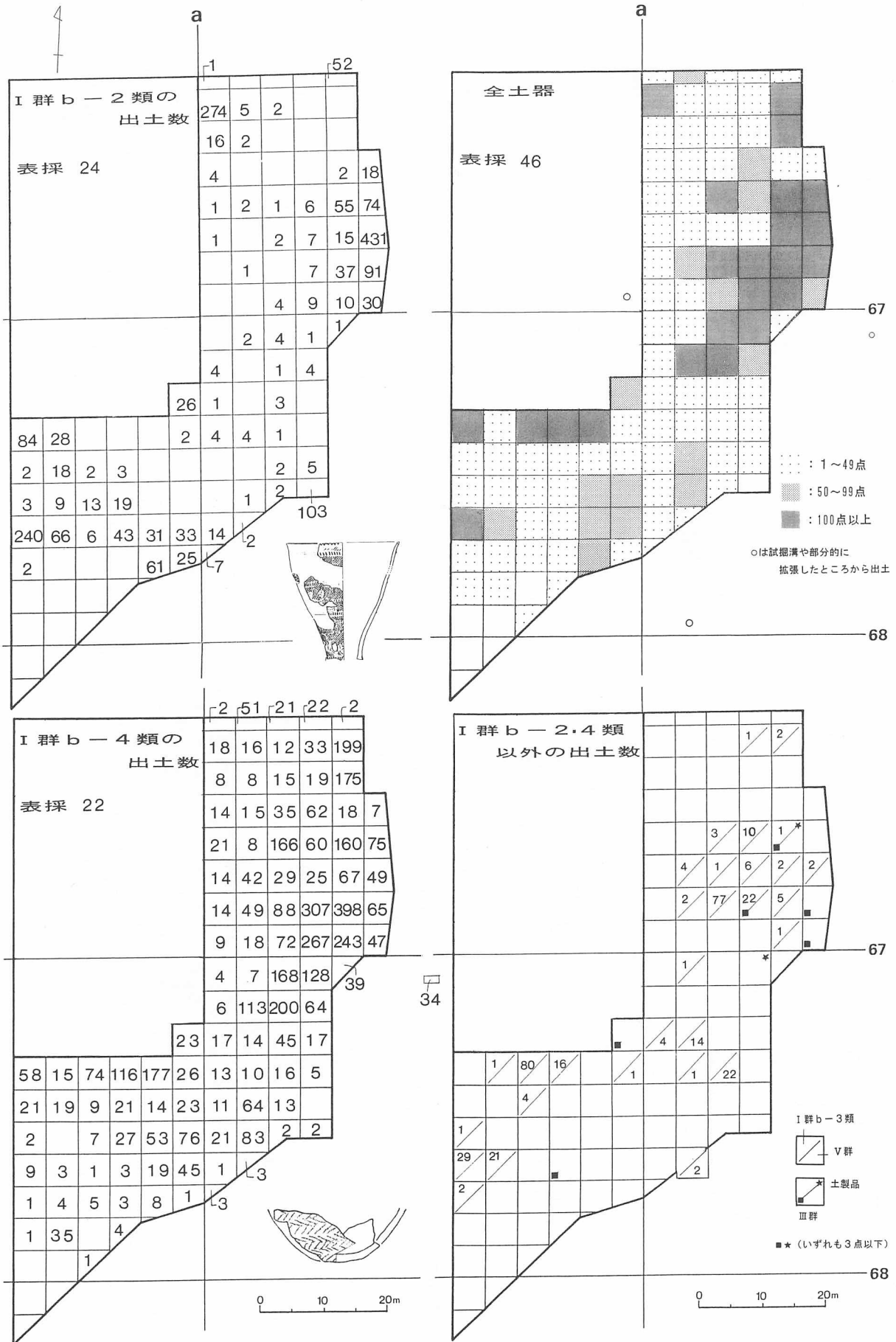
本遺跡では縄文時代早期の遺構や遺物が多く出土した。III黒層や縄文時代中期から晩期、縄文時代以降の遺物も見られるが、それらは一時的なものと考えられる出土状態であった。

縄文時代早期の様相は、本遺跡と同じ美沢川左岸台地上の美々5・6・8遺跡や対岸の美沢1~3遺跡を含めて検討しなくてはならないと考えるが、次年度調査区を残しており、それらは次回に委ねたい。ここでは本遺跡の調査された部分から気づいた点や課題を記しておきたい。

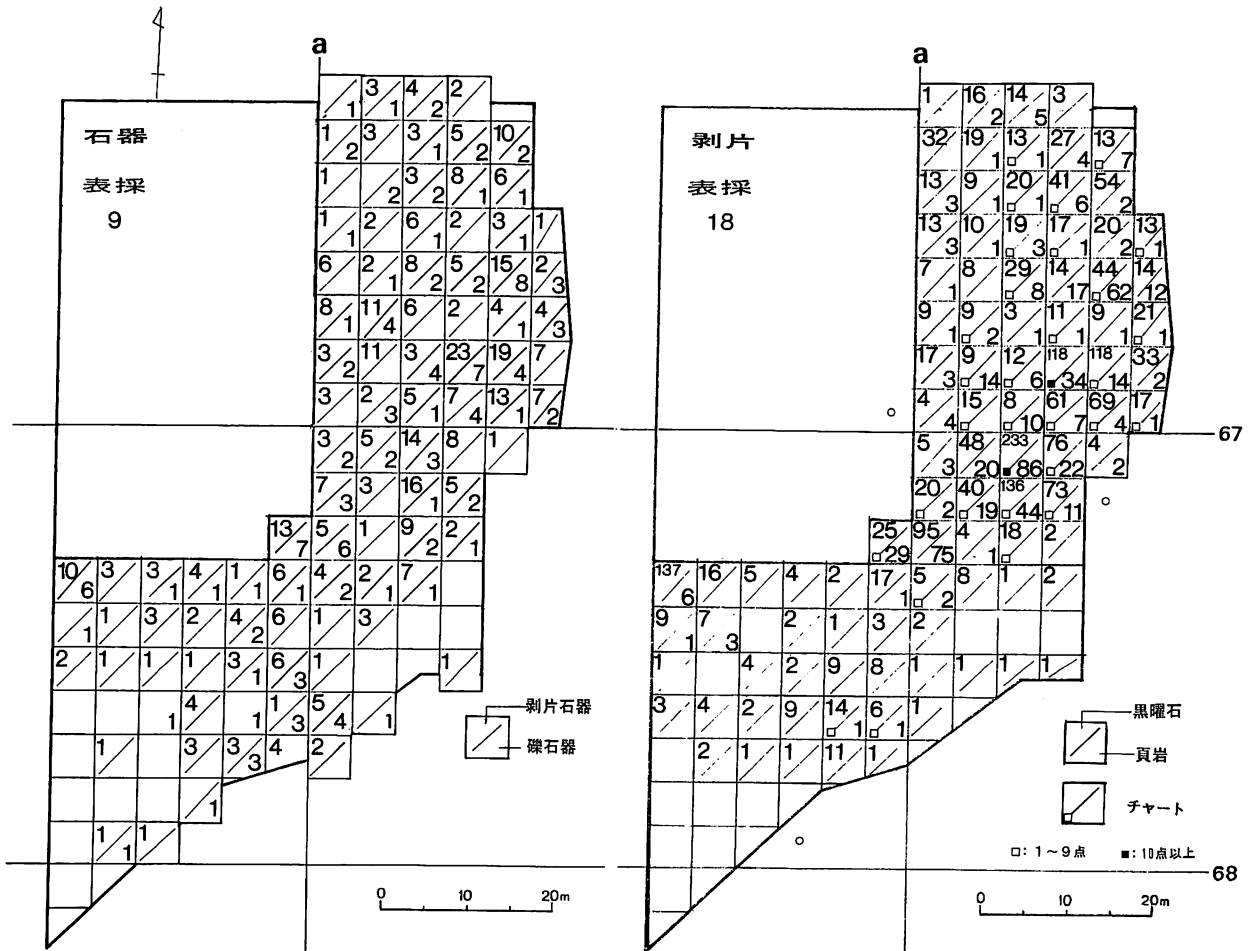
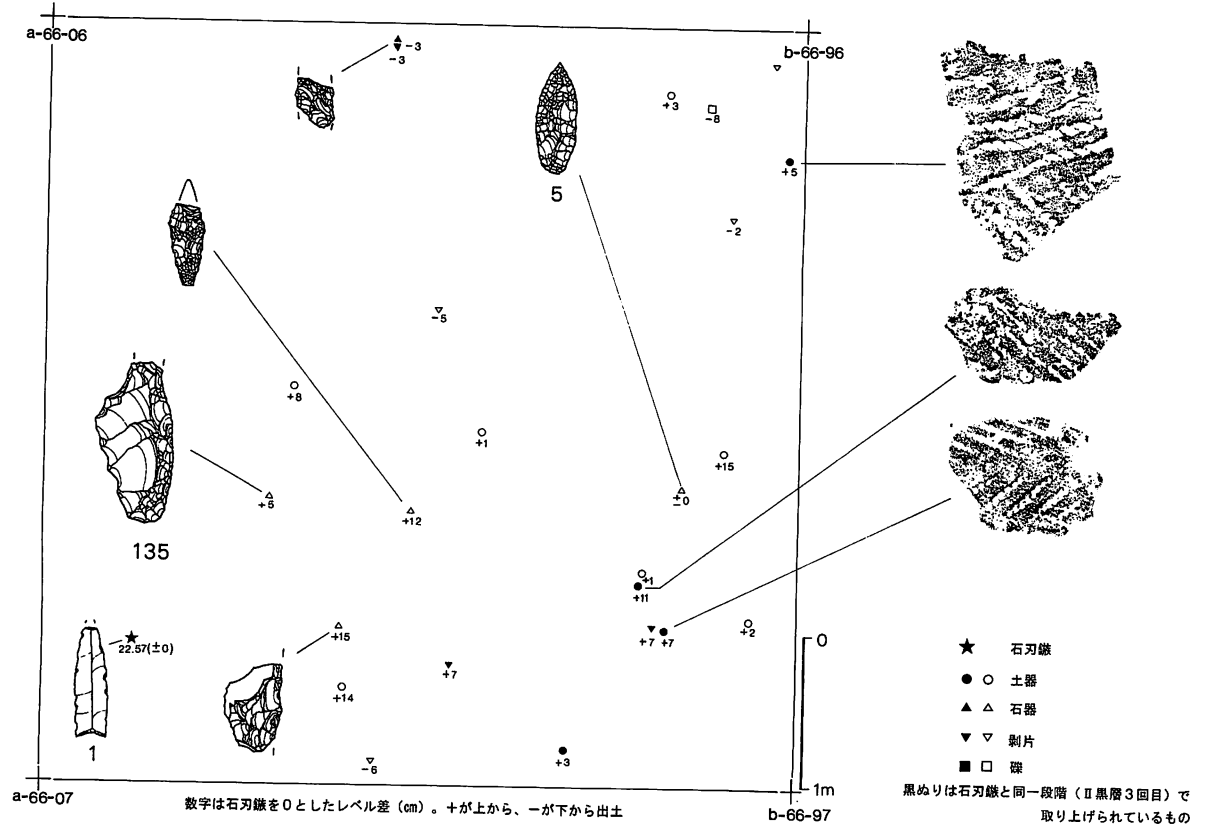
本遺跡では縄文時代早期後半のコッタロ式期からまとまった遺物が見られるようになる。中茶路式期には過年度調査区である斜面下部に住居跡が作られ、遺物もその周囲で多くなる。東釧路IV式期になると、斜面下部が集落となり、今回調査した斜面上部にもH-1・2が作られる。平坦面の南東端には土壙群とした、墓域といえる場が設けられている。土壙群には切り合いの認められることから、ある程度の期間を置いて形成されたものであろう。住居跡と土壙群との前後関係は明らかにならなかった。これらのある台地上平坦部がどのように利用されていたのかも次年度調査にかかるところが大きい。今回の結果からは広場のように一定期間、共通の目的に利用されたものではなく、地形や近隣の遺跡との関係(展望)によって居住地や埋葬地、作業場などを設けていたと考えている。また、斜面ではII黒層内に部分的に下部の黄褐色土やTa-d₂が見られたが、土砂を廃棄して平坦地を造成した様子は認められなかった。

斜面下部の過年度調査区と今回の斜面上調査区との関連を示す遺物に図IV-36-245・246の異形石器がある。245・246はb67-84区から出土し、斜面下部のA₁67-23区でも4点出土している。全例黒曜石であり、複数が同じ発掘区から出土した点に共通性が感じられる。1点のみの例では美沢川対岸の美沢2遺跡(道教委 1978)にも見られる。この時期の人々が対岸、斜面下部、台地上とそれぞれを広範に利用していたであろう事の一端がこの石器からも窺われる。

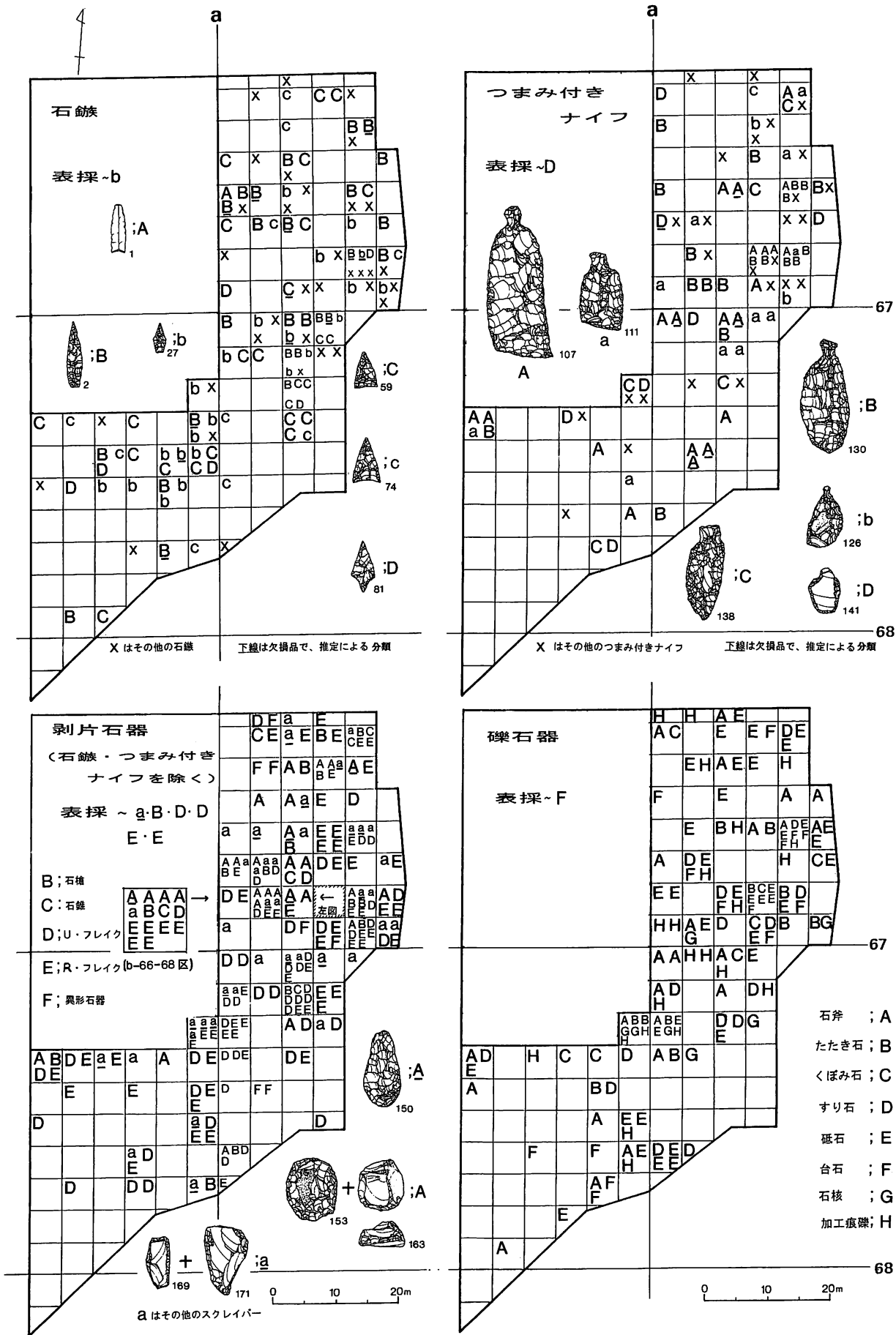
(葛西智義)



図IV-37 土器の分布



図IV-38 石刃鏃周辺の遺物、石器の分布 (1)



図IV-39 石器の分布 (2)

II 黒層の遺物分布に関連する一覧表

表IV-11の“取り上げ回数”は1回目・2回目あるいは1～3回目の時はそのままI・II・IIIとし、1～4回目の時は1回目をI、2回目・3回目をII、4回目をIIIとした。1～5回目の時は1・2回目をI、3・4回目をII、5回目をIIIとし、1～6・7回目の時は1・2回目をI、3～5回目をII、6・7回目をIIIとした。

表IV-13の石器細分記号は分布図と一致する。本文中の分類とは次のように対比される。

[石鏃] B→長身鏃とされているもので10～18。含む、b→五角形鏃、C→無茎平基鏃、c→無茎凹基鏃、D→有茎鏃
 [つまみ付ナイフ] A・a→つまみ部より下が方形や長方形を呈するもの、B・b→つまみ部より下が楕円形になるもの
 C → “ 逆三角形になるもの ※小文字は長さが幅の1.5倍以下のもの
 [スクレイパー] A→篋状石器、B・C→ラウンドあるいはエンド・スクレイパー、a→縦長剥片に刃部があるもの

表IV-11 東釧路IV式土器の取り上げ回数による文様出現率

文様	取り上げ回数			b-6			a-67		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III
綾 絡 文	0.6	0.3	0.5						
複 数 巻	7	8	5	9	13	11	2	5	
庄 痕 類	5	4	3	5	7	4	5	5	2

表IV-12-(1) 土器・剥片の取り上げ回数による出土率(b-66区)

遺物	回数							
	1	2	3	4	5	6	7	
土器 (コッタロ)	6.5	30.0	25.3	28.6	7.3	2.0	0.4	
土器 (中茶路)	29.0	42.0	16.0	7.2	5.8			
土器 (東釧路IV)	9.2	24.0	35.0	20.8	7.9	2.7	0.6	
剥片 (黒曜石)	29.9	26.1	20.0	13.7	7.7	2.4	0.2	
剥片 (頁 岩)	26.4	30.5	24.0	9.4	6.9	2.4	0.4	

表IV-12-(2) 土器・剥片の取り上げ回数による出土率(b-67区)

遺物	回数							
	1	2	3	4	5	6	7	
土器 (コッタロ)	9.0	23.3	58.7	7.8	1.2			
土器 (中茶路)	9.9	34.8	26.1	18.2	8.1	2.1	0.8	
土器 (東釧路IV)	72.1	25.6	2.3					
剥片 (黒曜石)	27.4	28.3	17.3	12.5	7.2	4.4	2.9	
剥片 (頁 岩)	28.6	36.4	14.3	6.8	8.9	3.9	1.1	

表IV-12-(3) 土器・剥片の取り上げ回数による出土率(I-67区)

遺物	回数							
	1	2	3	4	5	6	7	
土器 (コッタロ)	7.5	9.9	7.9	2.4	2.3	0.1		
土器 (中茶路)	28.7	61.4	5.0					
土器 (東釧路IV)	16.7	47.9	23.2	9.0	2.7	0.5		
剥片 (黒曜石)	49.5	21.6	19.8	6.6	2.6			
剥片 (頁 岩)	23.3	18.0	58.1					

表IV-13 石器の取り上げ回数による出土数

名称	回数	b66							b67							a67						
		1	2	3	4	5～	他	1	2	3	4	5～	他	1	2	3	4	5～	他			
石 鏃 B		1	3	3	3	3		1	1	2		1	1	1	1	1						
石 鏃 b		1	1	1	1	1		1	2		1	1	5	2			1	1				
石 鏃 C		3	1	2		1		2	4	2	1	1	3	1	2				1	1		
石 鏃 c			2	1	1			1		2			2		1							
石 鏃 D		2						1					2							1		
石 槍		1	3	2	3	2			1	1					1	1				1		
石 鏃		2		2		1			1						1	1						
つまみ付ナイフ A・a		4	5	4			1	4	4	2	1		1	1	3	2						
つまみ付ナイフ B・b		5	6	2	2	2		1	1						1							
つまみ付ナイフ C		1		1		1				1						1						
スクレイパー A		2	2	1	1					1				1		1						
スクレイパー B・C		8	4	5	2					1	1			2								
スクレイパー a		4	3					1	1			1		2	2	2						
石 斧		2	1	3	2		1	2	2	1			3	2	2	2						
石 斧		2	2	1	2			1	1					2	2	2						
石 斧		2	2	1	2			1	1					2	2	2				1		
石 斧		3	3					3		2		1	1	2	2	2				1		
石 斧		2	4	1				6	8	5	1	2	4	4		1	1					
石 斧		3	3	2	1									3	1	1						
石 斧		1	1		1			2	1					1	1	1						
石 斧		4	1	3		1	2	2	3					2	1	1				1		
石 斧		1	1		1			2						2	1	1						

引用文献

石附三男編 1974 『ウサクマイ遺跡—B地点発掘報告書—』 千歳市教育委員会
 大島直行 1976 『美沢川流域の遺跡群』 千歳市教育委員会
 大場利夫・大井晴男編 1973 『オノコロナイ貝塚』
 大場利夫・大井晴男編 1976・1981 『香深井遺跡』上・下 東京大学出版会
 大谷敏三・田村俊之 1985 『末広遺跡における考古学的調査』(続) 千歳市教育委員会
 岡田淳子編 1978 『亦稚貝塚』 利尻町教育委員会
 菊池徹夫 1984 『北方考古学の研究』
 工藤 隆 1985 『静川22』 『苫小牧市東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 VII 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
 古泉 弘 1985 a 『江戸—都立一橋高校地点発掘調査報告』 都立一橋高校内遺跡発掘調査団
 古泉 弘 1985 b 『江戸の街の出土遺物』 季刊『考古学』13
 越田賢一郎 1988 『北海道における中・近世考古学の現状と課題』 『物質文化』50
 佐藤忠雄ほか 1964 『稚内・宗谷の遺跡』 稚内市教育委員会
 更科源蔵 1969 『アイヌ文化』 『千歳市史』
 瀬川拓郎 1984 『擦文期の鉄斧について』 『北海道史研究』34
 高橋稀一・越田賢一郎 1984 『美沢川流域の遺跡群』 『北海道の研究』1
 田村俊之 1983 『北海道における近世の墓制—千歳川流域の考古学的調査から』 『北海道考古学』19
 羽賀憲二 1976 『道央部における縄文時代早期平底土器群の様相について』 『北海道考古学』12
 馬場 修 1942 『日本北端地域のアイヌと罌草』 『古代文化』13—11
 平川善祥 1984 『近世アイヌ墳墓の考古学的研究』 『北海道の研究』2
 北海道教育委員会 1978・1979 『美沢川流域の遺跡群』 II・III
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1980・1989・1990 『美沢川流域の遺跡群』 IV・Ⅴ・Ⅵ
 松岡幸子ほか 1980 『臼尻遺跡』 南茅部町教育委員会

V 美々8 遺跡の調査

1 調査の概要

遺跡は美沢川左岸の標高 22 m の台地上および南斜面に立地している。調査は昭和 56 年度から断続的に行われており、7 回にわたる調査面積は 38,000 m² 余である。今回の調査区域は、昭和 56 年度調査区の南側にあたる。

台地平坦部には空港建設用地になるまで自動車運転教習所があり、これの造成時に土地の切り盛りがなされ良好な遺物包含層の範囲が制約されていることは、以前から推測されていた。さらに、II 黒層には主として縄文時代早期、I 黒層には主として擦文時代、0 黒層には 1700 年前後の遺構、遺物が検出されるであろうことが、これまでの調査によって推定されていた。

調査は、自動車運転教習所の造成によってできた盛り土の除去から始めなければならなかった。南西斜面(d・c 66 区)には、地表の草木の下に 4~5 m の盛り土があり、その下には草木の形が良く残る腐植層があった。この腐植層よりも下には自然堆積の土層が良好に残っていた。

0 黒層の調査中に、現代の地表面と 0 黒層の間に道跡を 2 か所で検出した。時間的には 1739 年降下の樽前 a 軽石層堆積以後に形成されたことが明らかであり、とりあえずこれを「表土」の遺構と呼ぶことにした。「表土」が確認されたのはせまい範囲であり、相対的に窪んだ地形部分である。

道跡 1 と呼ぶものは幅 7 m ほどの規模であり、ゆるい傾斜で次年度の調査予定地の方に続いている。1800 年代の初期(文化年間)につくられた道と考えるとよい。道跡 2 と呼ぶものは、急傾斜部分に並列の細い 2 本があり、傾斜が緩くなったところで 1 本に合するものである。2 本は時期を異にして使われたもので、東側のものが古く西側のものが新しい。

0 黒層からは道跡 3 本が検出された。このうち 0 道跡 1 と呼ぶものは、樽前 b 降下軽石層の上に認められる尾根道である。この道の脇から、銀鍍金がなされた銅製刀装具が出土した。0 道跡 1 は樽前 b 降下軽石層を踏み締めているが、その下には I 道跡 1 がある。この重複は I 道跡 1 が使われていた時期に樽前 b 降下軽石層の堆積があり、引き続き同じ道筋が踏み分けられたことを示している。I 道跡 1 からは銅製キセルが出土した。

I 黒層の遺構は道跡 3 本、墓壇(アイヌ墓)1 か所、焼土 10 か所、集石 1 か所、双礫 3 か所、建物跡 1 か所である。墓壇は伸展葬を推定させる長さで、壇底北側に漆塗り椀、壇底南側に鉄針と小刀(マキリ)が検出された。墓壇の北側肩口には内耳鉄鍋が伏せてあった。「双礫」と記すのは、いくぶん扁平なほぼ同じような大きさの礫が 2 点对になって検出されるものである。

I 黒層の上面からはキセル、鉄斧、小刀(マキリ)などの金属製品が出土した。I 黒層には、それぞれまとまりをなす擦文土器が広い調査区内に散在し、ほかに縄文時代晩期の土器・石器が少量ある。

II 黒層の遺構は住居跡 6 軒、土壇 11 基、T ピット 16 基、焼土 5 か所である。時期を明らかにできるのは、縄文時代早期末葉(東釧路 IV 式土器の時期)の住居跡と土壇である。T ピットは平面形が細長いものと、小判形のものがある。これらがいくつかの列をなしている様子は、以前の調査結果と合わせて報告してある。

土器の大部分は縄文時代早期の東釧路 IV 式で、ほかには少量の縄文時代後期、晩期のものがある。石器は縄文時代早期に一般的な器種が揃っており、石鏃やつまみ付ナイフが多い。この他に石刃鏃が 1 点 e 67-61 区から出土した。

通常の縄文時代のものより表面の風化が進んでいる黒曜石製の石器があったので、水和層の測定を行なった。1 点 3 面の年代のうち 1 面は 17,000 年、他の 2 面は 10,000 年ほどの結果である。(西田)

2 表土層の遺構とその遺物 (図V-1)

表土層とは、Ta-a層(1739年、元文4年降灰)の上面に形成された腐植土層で、暗褐色の砂質土である。台地上における表土層は一枚の薄層で存在し細分は難しいが、斜面や台地の裾においては幾層かに分かれて堆積しているため細分が可能である。包含される遺物は江戸時代中期から近代までの時間幅を持っている。本遺跡の表土層は、昭和56年度と平成元年度の2回にわたって調査されており、昭和56年度には旧室蘭街道関係の遺物や近世末の竪穴状遺構が、平成元年度には近代の炭焼窯やビビ小休所と思われる近世の建物跡1軒などが確認されている。このようなことから今年度調査区においても同様の遺構や遺物の存在が予想された。

今年度調査区のうち、東北部では自動車運転教習所の造成による削平がTa-d₂層にまで及び、また南西の尾根部はTa-d₂層が露出して表土は存在していなかった。したがって、おもな調査対象となったのは表土層が厚く堆積していた南西斜面と南東斜面であった。

遺構は、焼土(2)・道跡(2)・土壇(6)があり、時期は焼土・道跡が近代以前、土壇はアメリカ軍関係のもので現代である。

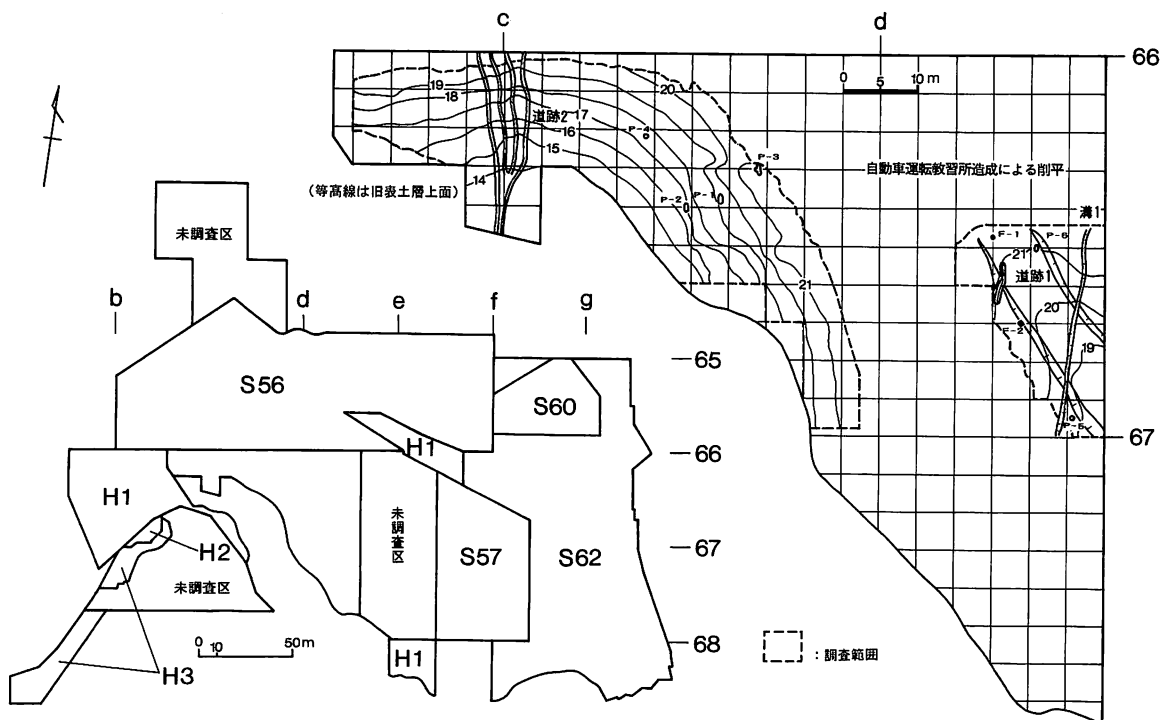
(1) 焼土

F-1 (図V-2、表V-2)

位置 d-66-64・74 道跡-1の中央部分 規模 1.24×0.96/1.0×0.84/0.12 m

調査 道跡-1の調査中に確認された。道跡中央部分に堆積している「表土1」(図V-3土層断面図)を掘り下げたところでプランを確認した。この焼土壇は道跡-1によって削平をうけており土壇の肩部分は欠失しているが、おそらく表土層2回目に相当する層準に構築面があったのであろう。

特徴 平面は楕円形。断面は直線的に外上方へ立ち上がる壁と平坦な壇底で構成される。また、壁と壇底は熱を受け暗赤褐色に変色していた。覆土はTa-a火山灰を多く含む砂質土で、細粒の炭化物を多量に含み黒色を呈していた。



図V-1 表土層の遺構位置図

時期 切り合いから道跡-1 構築以前である。

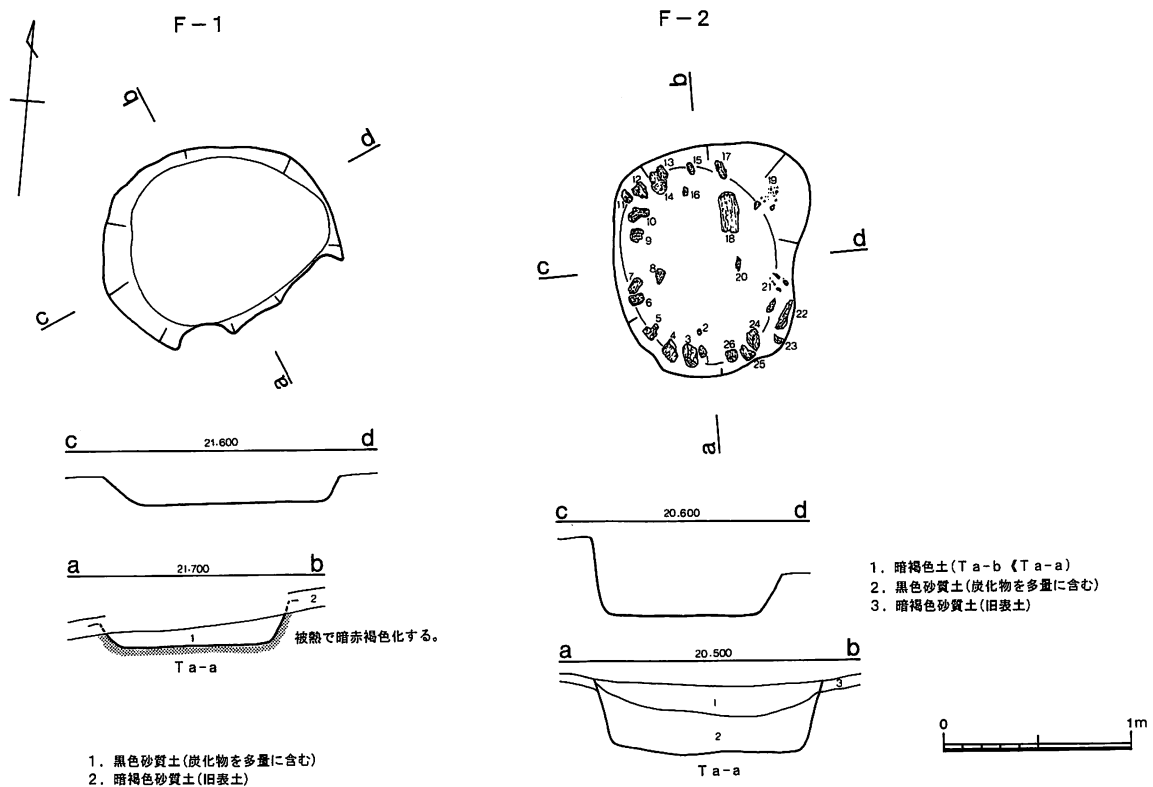
F-2 (図V-2、表V-1・2、図版V-2-1・2)

位置 e-66-64・74 道跡-1 の肩部分 規模 1.20×0.96/1.04×0.8/0.36 m

調査 道跡-1 の調査中に確認された。道跡肩部分に堆積している「表土1」の上面でプランを確認した。したがって表土層上面が構築面になる。

特徴 平面は楕円形。断面は直線的に外上方へ立ち上がる壁と平坦な壙底で構成される。覆土は流れ込んだ上層と炭化物を多量に含む下層とに分かれる。炭化材は土壙中央に向かって放射状に埋没していた。

時期 切り合いから道跡-1 構築以後。



図V-2 表土層のF-1・2

表V-1 表土層F-2 炭化材一覧

番号	大きさ (cm)			乾燥重量 (g)	木取り	備考	番号	大きさ (cm)			乾燥重量 (g)	木取り	備考
	長	幅	厚					長	幅	厚			
1	4.2	×2.3	×1.0	3.8	不明	一部未炭化	14	(16.51)	×7.12	×6.93	207.9	丸材	
2	3.2	×2.19	×1.3	5.4	割材		15	6.82	×2.56	×0.85	9.8	割板状	芯が未炭化
3	9.0	×8.44	×2.84	146.1	半割材		16	(2.95)	×2.05	×1.70	5.4	塊状	
4	9.0	×9.0	×1.2	37.2	割材		17	11.5	×5.0	×2.48	73.1	割材	
5	9.5	×8.5	×4.0	3.6	割材	一部未炭化	18	13.2	×10.6	×3.2	251.0	割材	
6	7.9	×4.2	×1.8	15.9	板材	一部未炭化	19	(5.8)	×3.2	×2.0	71.5	割材	
7	6.0	×4.0	×3.0	12.6	割材?		20				10.8	不明	
8	7.0	×3.8	×0.7	18.2	割板状		21	(9.16)	×2.95	×(2.0)	62.1	割材	
9				98.6	不明		22	16.1	×2.9	×1.9	38.2	割材	
10	(12.5)	×4.3	×4.2	41.7	割材		23	4.0	×3.1	×2.5	28.5	割材	
11	(6.42)	×3.22	×3.01	14.5	割材		24	11.2	×6.0	×2.5	108.3	割材	未炭化
12	(13.6)	×3.82	×2.56	42.5	割材		25	17.0	×6.5	×2.0	21.1	割材	
13	(5.0)	×3.0	×2.0	4.7	塊状		26	4.0	×3.0	×3.0	26.9	丸材	未炭化

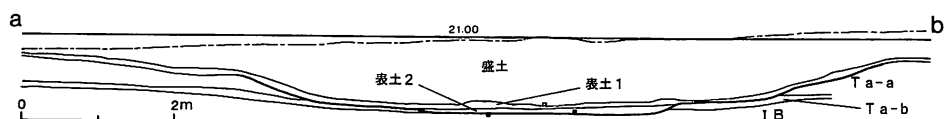
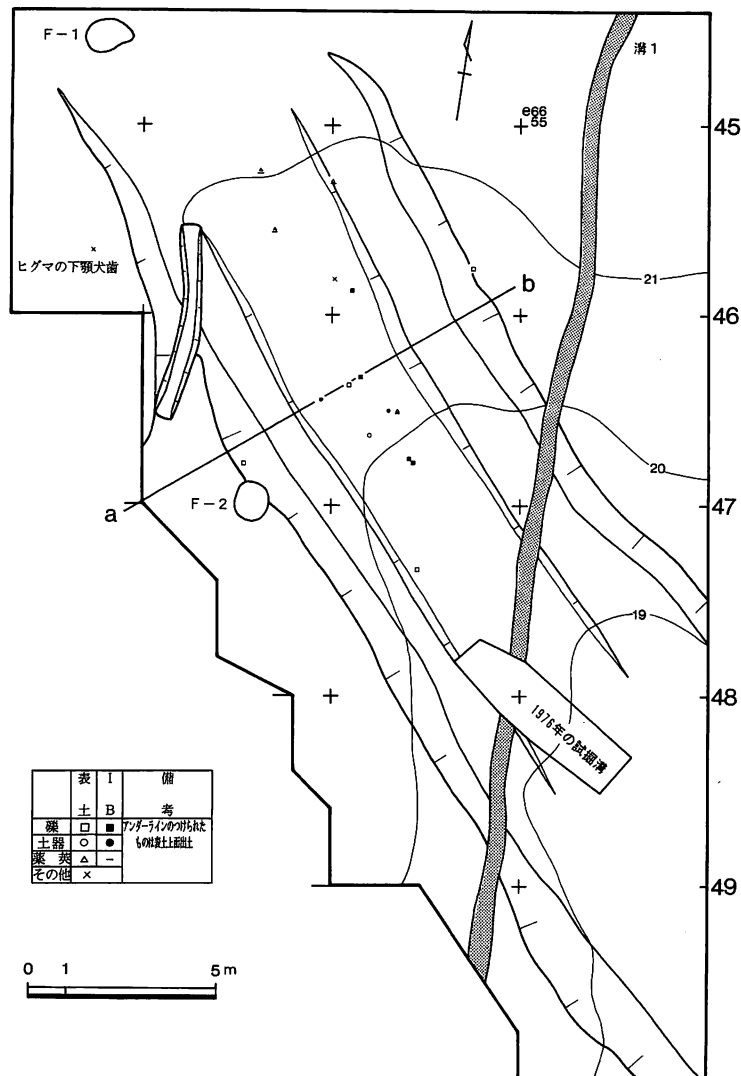
(2) 道跡

道跡-1 (図V-3・4、図版V-2-3・4)

位置 e-66-44~75

調査 重機によって草木を除去したところ、空港建設に関わる工事用道路の盛土が平成元年調査区のf68区にある涸れ沢に続くのが確認され、大きな凹みであることがわかったので直交方向にトレンチを設定した。この盛土を除去すると自然地形とは思われない急な法面と平坦な面が現れた。

特徴 この遺構の断面は2段の底面を持ち、中央部ではI黒層の-5cmまで削平が到達しており、その両脇の段ではTa-b層を2cm削平して作られている。壁はTa-a層を削り、ゆるやかに外上方へ立ち上がる。また、この道跡の北西部分からは南方へ伸びる枝道が検出された。



盛土: 空港建設時の工事用道路の造成に関する 表土1: 暗褐色土、表土より粘る 表土2: 褐色土

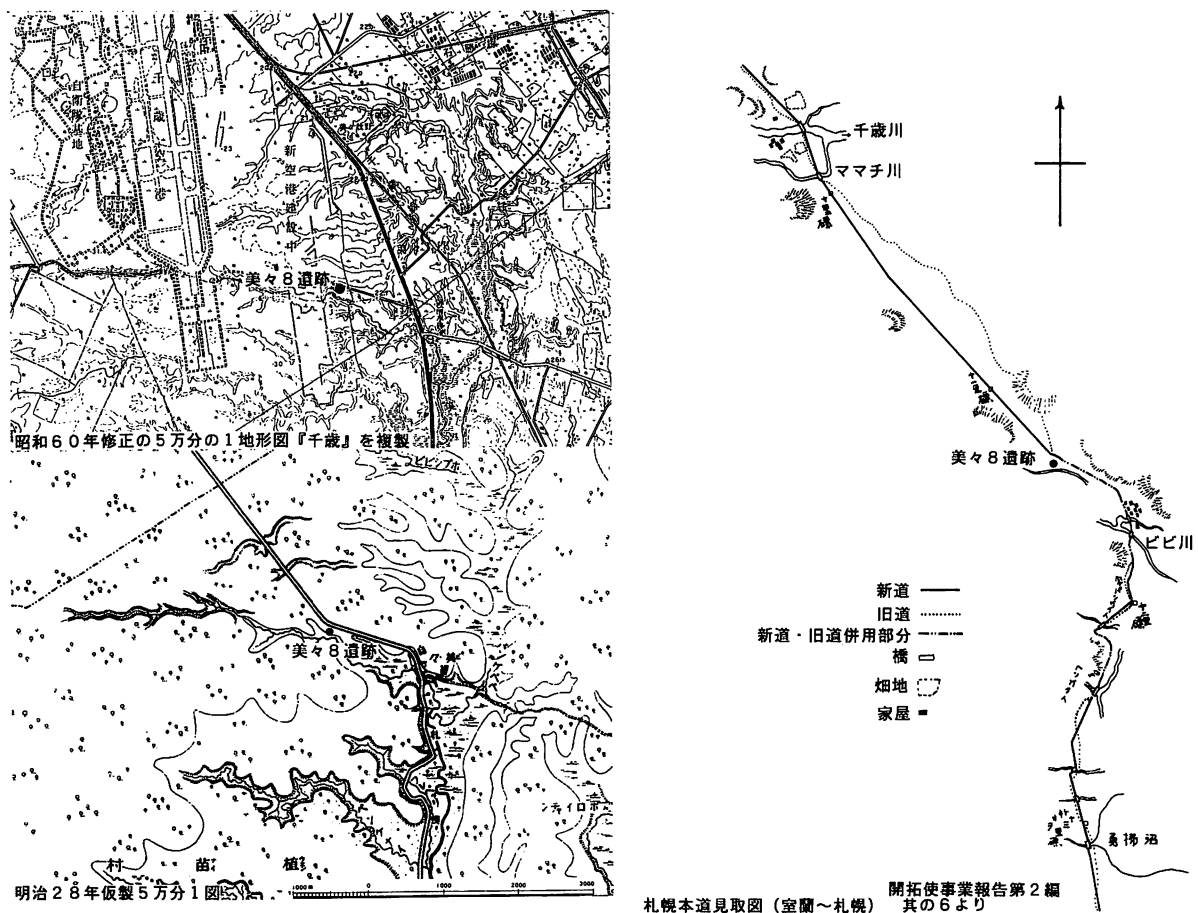
図V-3 表土層の道跡-1と溝-1

遺物 道跡-1の上には全体に「表土1」が堆積しており、この層の上面には朝鮮戦争時代に駐留米軍が演習に使ったライフル銃の薬莖があり、層中には礫が含まれていた。中央部分には「表土2」が堆積しており、この層には礫と擦文土器が含まれていた。これらの遺物は摩耗した細片であり、I黒層を削平して道跡-1を構築した際に混入したものと考えられる。また北西側道跡の肩部分の「表土1」中からはヒグマの下顎犬歯が出土している。この犬歯の付近には四肢骨が見当たらないことから歯根部は欠失しているが垂飾であった可能性もある。

時期 遺構はTa-a層を削平して構築されていること、「表土1」上面には薬莖があること、層中からは近現代の遺物が出土していないこと、そして「表土1」の下にはさらに厚さ5cmの「表土2」が堆積していることからTa-a火山灰が降下した1739年に近い構築年代が考えられる。道跡-1が開削年代 発掘調査では年代を決定できる良好な資料は得られなかった。しかし、文献史料によって年代が推定できたので以下で述べることにする。

美々8遺跡の中央を貫く旧室蘭街道は明治6年に開削された札幌本道の通称である。この道の千歳～美々間については、昭和63年の地図と明治28年仮製5万分の1図を比べると変化がみられない。また、開削当時の札幌本道に関しては『開拓使事業報告付図其六』¹⁾をみると、千歳川とビビ川の間には新道（明治6年・1872年開削）と旧道併用部分（明治6年以前から存在）との2種類に分かれており、また新道の北東側には旧道が併存している。

新旧道併用部分の始まり部分が今年度調査区（図V-4）に当る。しかし『開拓使事業報告付図其六』に道跡-1は描かれていない。ということは、新旧道併用部分の旧道が開通した時点で道跡-1は廃止さ



図V-4 美々8遺跡と札幌本道

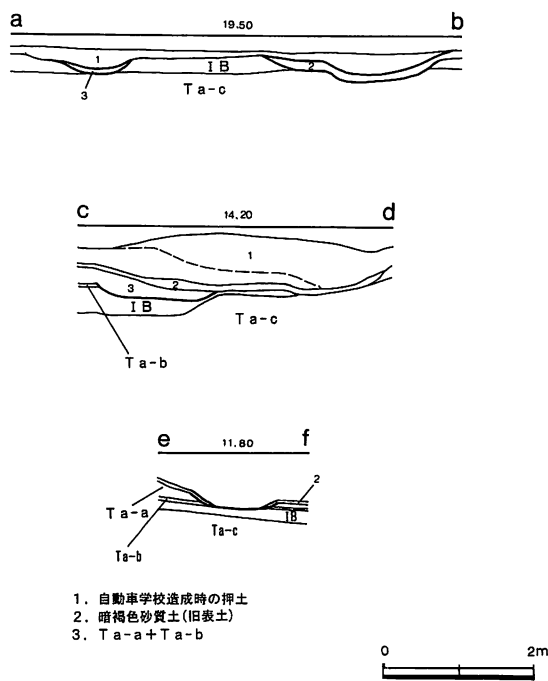
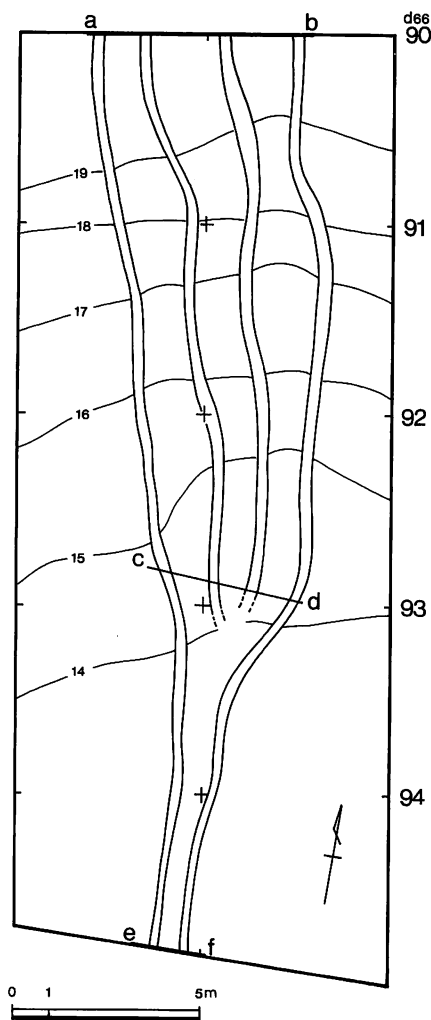
れていたのである。道跡-1の廃止年代を示唆する記述が2件ある。

ひとつは、『入北記』²⁾(玉虫左太夫)の安政4年(1857年)9月14日の記によると、「…(前略)追分アリ、右ハビビ道、左ハユフツ道ナリ。併シ近年ビビ川上浅瀬ニナリ舟通行ナリガタシ。此ニ依テバンケヒヒト云フ処ヨリ舟直行ス。(後略)…」である。

もうひとつは、『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌・新道日誌』³⁾(松浦武四郎)安政5年(1858年)6月20日の記によると「(前略)二股 扱此処より左の方陸道、近年本道になりたり。右の方より坂を七八丁下るや ビベンコ 本名ヘンケヒヒといへるよし。(中略)先年(安政4年)より此道無ししを山田文右衛門といへる者、此処を切開、馬・牛・車の三つの通路を付け、チトセ会所元の鮭を皆ユウフツ下げ致し候様に致せしもの也。此処より小船にて凡四里にてユウフツ会所着す。余先年(弘化3年・1846年)来りし時は、此処より舟にて下るなり。然し当時其川すじ干せしが故に舟通りがたくなり…(後略)。ヒホエカリ(前略)近年此処より川下げ鮭を舟積みするなりと」である。

『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌・新道日誌』にてでくる山田文右衛門とは16代清富であり、彼は安政4年に函館奉行より島松~千歳間の道路(標準の道幅2間)開削を請け負い、同5年に完成させている。また文中に「此道無ししを」とあることから、新たに美沢川と美々川の合流点付近までの工事も行っていたのであろう。以上より、下流に舟着場が移ったことによって道が移動したのであり、それによって安政5年頃には道跡-1も廃止されたのである。

一方、道跡-1と札幌本道に平行する旧道の開削年代はいつであろうか。『再航蝦夷日誌・巻七』⁴⁾(松浦武四郎)弘化3年(1846)8月22日によると「…(前略)此間秋味最中ニは皆車馬ともに往来すると。(中略)此道は六十年前山田屋文右衛門と申すものが初めて切墾し由也。其迄は僅かの山路と聞侍りけり。」とある。また、『西蝦夷日誌』⁵⁾(松浦武四郎)安政5年6月20日の記によれば「(前略)出立。是従りは文化度山



図V-5 表土層の道跡-2

田屋文右衛門なる者切開しと云街道なれば道幅も広く、秋過ぎる頃はイザリ・ムイザリの鮭を牛馬車の三品にてビビに下る道也。(後略)」とある。

『西蝦夷日誌』に登場する山田屋文右衛門とは14代有智のことである。道の開削年代は『再航蝦夷日誌』割註によると、それが記されたのが嘉永4年(1851年)で60年前は寛政3年(1791年)となり、千歳を訪れた弘化3年の60年前とすると天明6年(1786年)となる。また『西蝦夷日誌』によると文化年間(1804~1818年)に作られていたことになる。直接の記録がないので不詳であるが、ユウフツ越えに関する文書の中で道に関する言葉を拾ってみると文化4年を境にして変化がみられ開削年代もこの頃と推測できる。4年以前は「山越」⁶⁾とか「山道」⁷⁾という言葉を使っているが、4年以降は「道」⁸⁾「平道」⁹⁾「坦途」¹⁰⁾などと言っており「山」という語句が抜けている。これら記載の変化より道の状態が「平道」に変わったことをうかがわせる。

道跡-2 (図V-5、図版V-2-5・6)

位置 d-66-09~c-66-04

調査 重機によって自動車運転教習所造成時の押土や草木を除去したところ、d 66-09~92 にかけて溝状の凹みを確認した。当初1本の道跡と考えてc 66-03へ調査を広げていったところ、Ta-a火山灰とTa-b火山灰が混じった汚れた土が帯状に広がっていたので、トレンチを設けて掘り下げると底が平らで浅い溝状遺構が確認できた。この2本の道跡は南側の美々8低湿部に向かって行くので、現作業道路の手前まで約4グリッドの発掘区を拡張した。道跡は拡張区に入ると1本にまとまり、さらに下って行くようである。

特徴 この道跡の断面は平坦で、壁は外上方へ内弯しながら立ち上がる。底面は、I黒層まで達するくらいに深く抉られている。道幅は、従来発見されているものより非常に広い幅をもつ道跡である。以上のようにこの道跡は、深さ・道幅が通常の規模と異なる点に特徴がある。

時期 これらの前後関係はセクションa~dより、東側が古く、西側が新しいが、西側は動いたTa-a火山灰が入っているのでTa-a降灰後使われ、東側はその後表土が形成されるまで使われた。

(3) 溝跡 (図V-3のトーン部分)

位置 d-66-04~59

調査 表土上面からプランが確認できた。

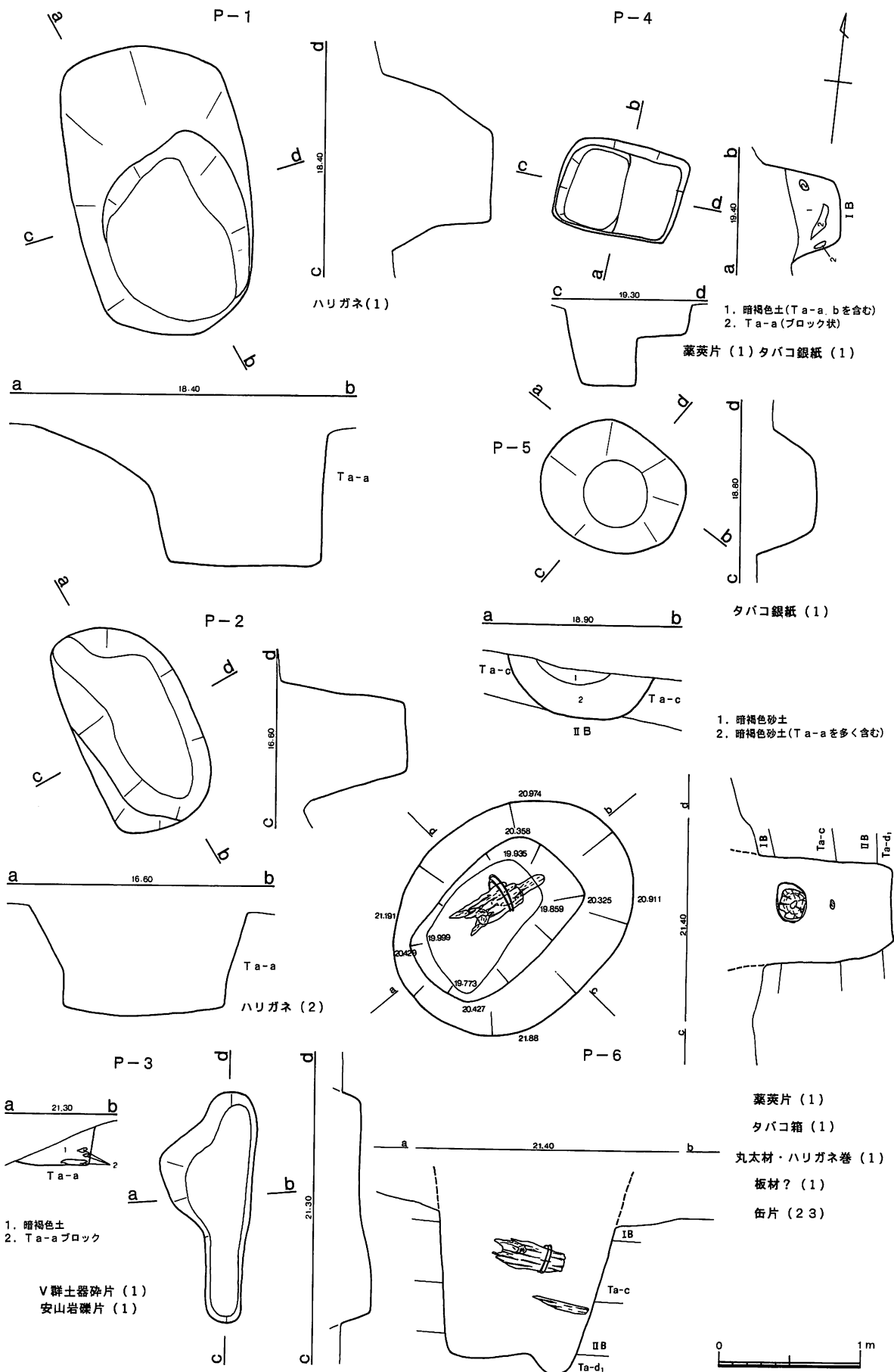
特徴 深さは25~35 cm、幅は50~70 cmの断面がU字形で、直線的に南へ伸びている。また、

表V-2 表土層遺構一覧

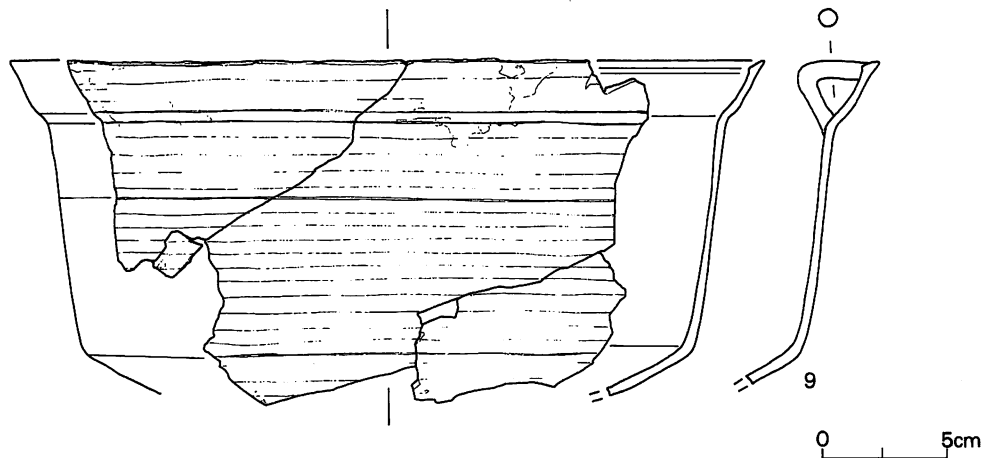
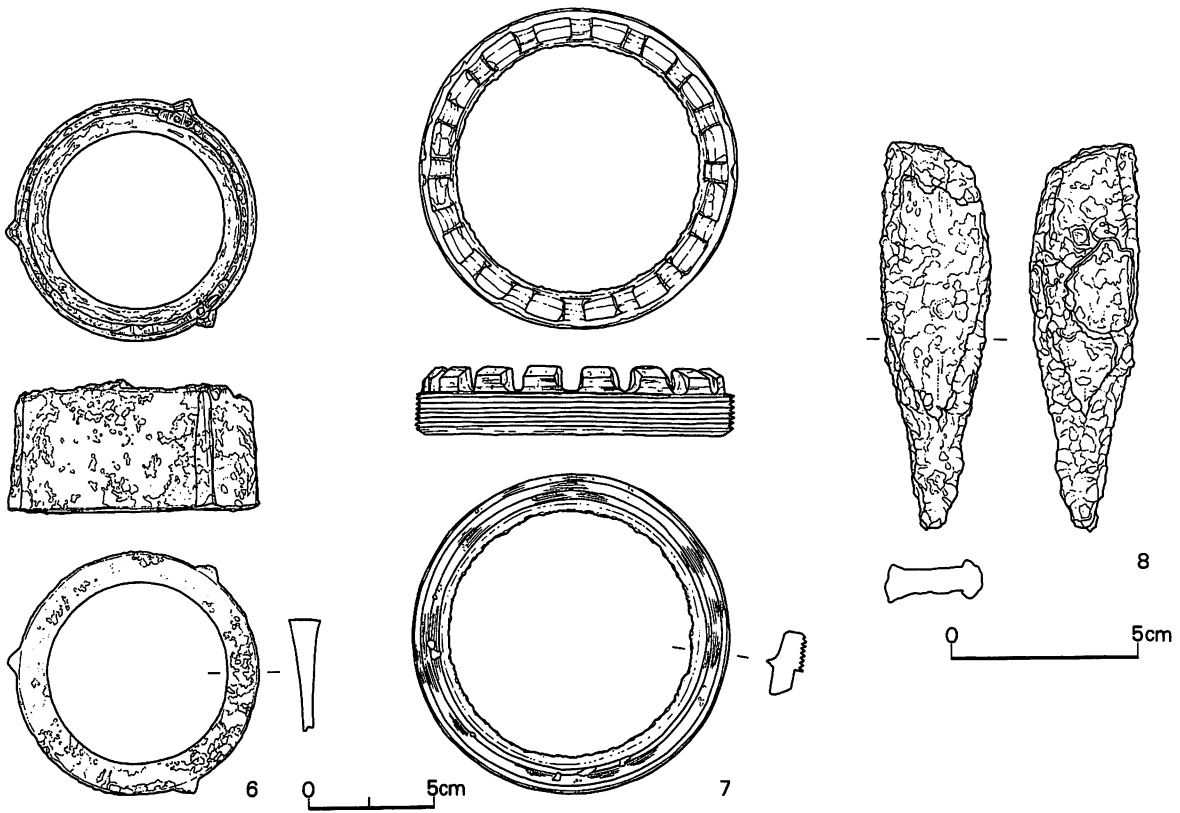
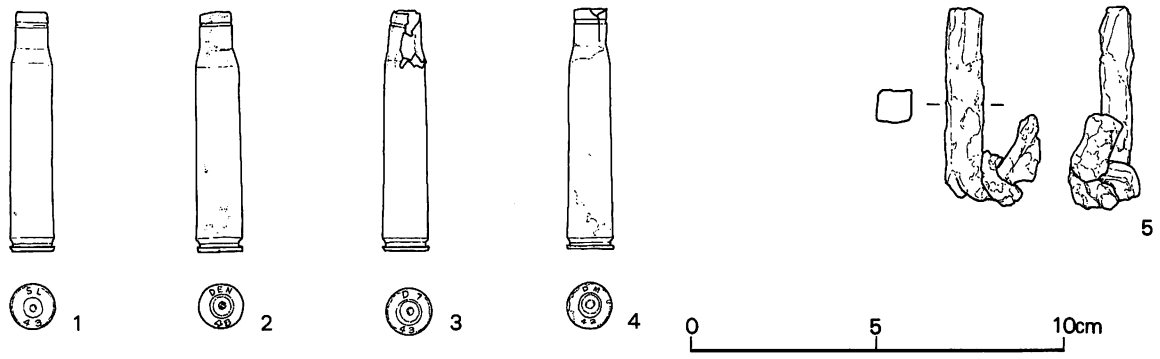
遺構番号	位置	確認面	平面形	規模(m)		
				確認面	底面	最大深
F-1	e-66-64・74	表土2回目	楕円形	1.24×0.96	1.0×0.85	0.12
F-2	e-66-66・67	表土上面	楕円形	1.2×0.96	1.04×0.8	0.36
P-1	d-66-43	Ta-a上面	長楕円形	2.04×1.24	1.12×0.8	0.92
P-2	e-66-53・54	Ta-a上面	長楕円形	1.52×0.84	1.12×0.44	0.93
P-3	d-66-32・33	Ta-a上面	長小判形	1.64×0.68	1.28×0.44	0.22
P-4	d-66-62	IB上面	方形	0.88×0.64	0.88×0.56	0.60
P-5	e-66-49	Ta-c上面	円形	1.04×0.84	0.46×0.44	0.40
P-6	e-66-54・55	IB上面	楕円形	1.84×1.39	0.39×0.51	0.92

表V-3 表土層掲載遺物一覧

図番号	名称	地区	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
V-1	葉莢	c-66-10	攪乱(押土)	6.3×1.2×1.2	12.5	真鍮	
-2	〃	d-66-no	攪乱(押土)	6.3×1.2×1.2	12.0	〃	
-3	〃	d-66-91	攪乱(押土)	6.3×1.2×1.2	12.3	〃	
-4	〃	d-66-71	攪乱(押土)	6.3×1.2×1.2	11.4	〃	
-5	?	e-66-65	IB上面	5.7×2.3×2.2	14.5	鉄	道跡-1上面
-6	砲弾莢?	d-66-44	攪乱(押土)	10.6×10.4×5.1	64.5	〃	
-7	〃	c-66-02	攪乱(押土)	12.8×12.7×3.7	60.5	〃	
-8	?	d-66-91	攪乱(押土)	10.6×5.2×2.2	118.4	〃	
-9	内耳鍋	d-66-nb	攪乱(押土)	(13.5)×(24.0)×0.6	(670.0)	〃	



図V-6 表土層の土壤



図V-7 表土層の遺物

c 66-45~55 ラインと溝が交わる地点には角形一斗缶が溝底に埋設されていた。同様な遺構は美々7遺跡に表土層からも出土している。遺物はなかった。

時期 この遺構は1976年の試掘堀に切れ、道跡-1を切っているなのでその間に作られた。

(4) 土壌 (図V-6、表V-2)

表土の土壌は、6ヶ所であった。いずれも表土上面に構築面を持つ。これらの土壌はすべて朝鮮戦争時代に駐留米軍が演習の際に掘った土壌である。これらの土壌はP-6を除けば美沢川を望む南向き斜面に位置し、等高線にたいして土壌の長軸が平行となるように構築されている。平面形と断面形は各土壌で異なっているが、出土遺物は針金、タバコ銀紙など共通するものがある。

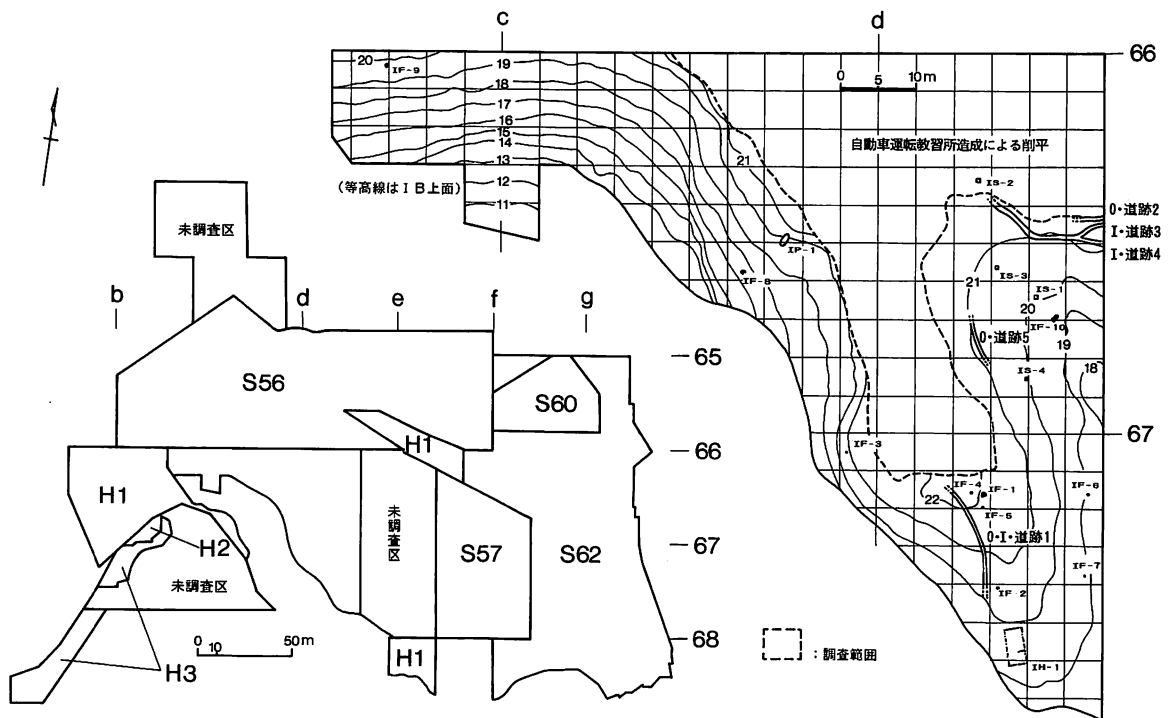
3 表土層出土の遺物 (図V-7、表V-3、図版V-5)

ここでは表土の遺物とともに自動車学校の造成で斜面に押し出された遺物も攪乱(押土)として掲載した。

1~4は小銃の薬莖。この他表土からは9個出土している。5は断面四角の棒上の先端をねじってある用途不明品である。6・7は砲弾薬莖と思われる鉄製品である。8は板状の鍛造鉄製品で用途は不明である。9は内耳鉄鍋である。口縁は内側に肥厚し、口縁端面は内斜している。体部はほぼ垂直に立ち上がり、外面には鋳型の凹凸が鋳出されたと思われる横位条痕がみられる。

4 第0・I黒色土層の遺構とその遺物 (図V-8)

第0黒層とは、Ta-a層(1739年、元文4年降灰)とTa-b層(1667年、寛文7年降灰)との間に形成された腐植土層であり、平成元年までは「褐色腐植土」と呼ばれていた。この層は台地上ではTa-b層に沈着する状態で存在しており、分層が困難な層である。しかしこの層は美々8低湿部で厚さが20~40cmになり、木製品等が多量に含まれている。調査はTa-b層上面で一回止めて遺構検出を行っ



図V-8 0・I黒層の遺構位置図

た。第I黒層とは、Ta-b層とTa-c層との間に形成された腐植土層である。

遺構は、焼土(10)・道跡(5)・双礫(3)・集石(1)・建物跡(1)・墓壇(1)が検出できた。

(1) 建物跡

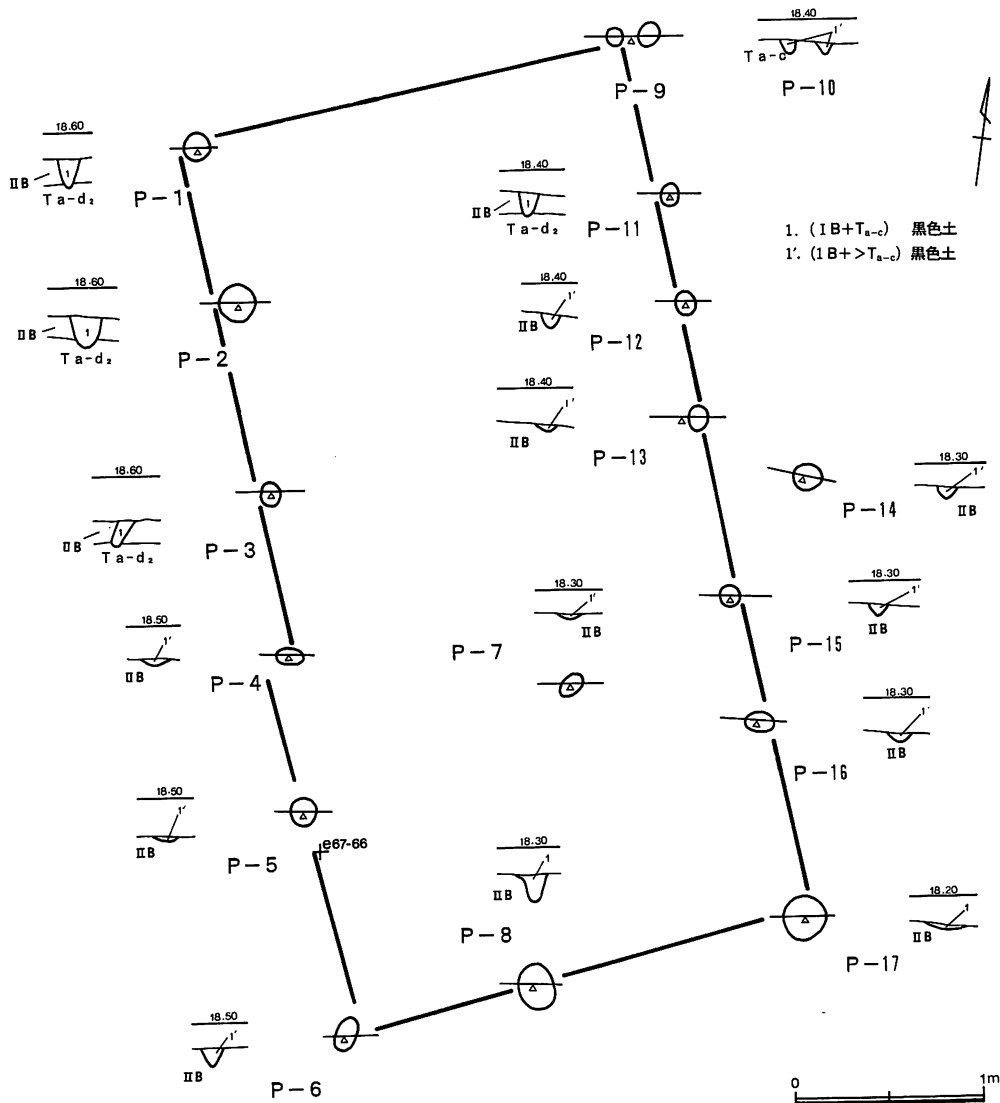
IH-1 (図V-9、図版V-3-1)

位置 e-67-65・6 南東部分の尾根の先端に位置する。

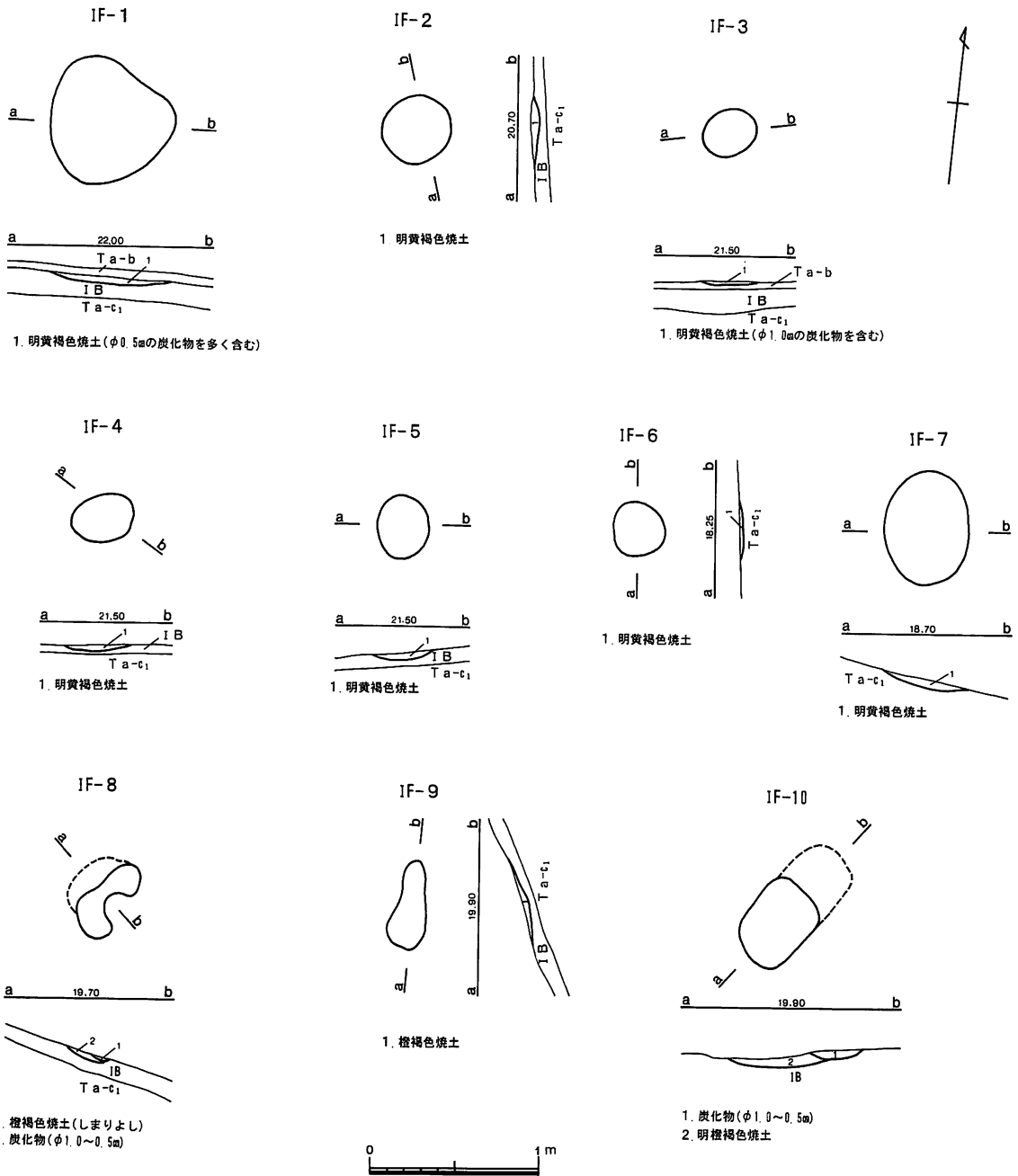
規模 面積 11.2 m、東側 6 間、柱間隔平均 77.6 cm。西側 5 間、柱間隔平均 93.8 cm。南側 2 間。

調査 南東部の尾根の先端はII黒層より上が流失しており、遺構はII黒層上面で確認した。

特徴 建物の長軸はこの尾根の軸に乗っており N-22-W°をむく。柱穴の断面は、P-4、5、7、13、17を除くと先端が尖り、P-3を除くとほぼ垂直に掘られている。柱穴の覆土はTa-a、Ta-b火山灰を含まず、第I黒色土、Ta-c火山灰で構成されている。また、柱穴列の軸が北半分と南半分で少しずれていることより、小規模な建物2軒に分かれる可能性がある。



図V-9 IH-1



図V-10 IF-1~10

表V-4 I 黒層焼土一覧

遺構番号	位置	確認面	平面形	規模(m)			備考
				長軸長	短軸長	最大深	
IF-1	e-67-71	IB 上面	不整形	0.76	0.72	0.04	断面は紡錘形 焼土中にシカ焼骨を含む 断面は皿状
IF-2	e-67-63	IB 1回目	円形	0.42	0.40	0.06	
IF-3	d-67-00	OB 中	楕円形	0.32	0.24	0.02	
IF-4	d-67-71	IB 上面	楕円形	0.38	0.28	0.05	
IF-5	d-67-71	IB 上面	楕円形	0.38	0.31	0.04	
IF-6	d-67-21	IB 3回目	円形	0.33	0.30	0.03	
IF-7	e-67-23	IB 3回目	楕円形	0.68	0.50	0.03	
IF-8	d-66-35	IB 上面	不整形	-	-	0.04	
IF-9	c-66-03	IB 上面	不整形	0.58	0.22	0.33	
IF-10	d-66-56・57	IB 1回目	隅丸方形	0.51	0.37	0.08	

時期 柱穴の覆土に Ta-a、Ta-b 火山灰を含まないことより Ta-b 火山灰降下以前に構築された遺構である。

(2) 焼土 (図V-10、図版V-3-2、表V-4)

位置 焼土は主に南西部分の尾根より東側に多く分布している。

規模 長軸：0.76～0.32×短軸：0.72～0.22×最大深：0.08～0.02 m

調査 確認は、浅いものでI黒層上面、深いものでI黒層上面～15 cm (3回目) で確認した。

特徴 平面形は楕円形が多い。断面形は、I F-2 が紡錘形、I F-10 が皿状の他はいずれも上面が平ら底面が凹形を呈している。I F-8、I F-10 には炭化物の集中が付帯していた。また、I F-9 からはシカの焼けた骨が見つかった。

時期 焼土からは時代を特定できる遺物が伴出していない、そこで焼土周囲の遺物の包含状況から推測すると、上面で検出された焼土は近世、1回目で検出された焼土は擦文時代、3回目に検出された焼土はそれよりも古い時期に構築されたものとなる。

(3) 集石・双磔

a) 集石

IS-1 (図V-11、表V-5・10)

位置 d-66-56

規模 磔 39 個

調査 IS-1 は表土道跡-1 によって削平を受けた I 黒層で確認できた、従って本来は I 黒層 1 回目に相当する面に構築された遺構である。

特徴 磔はやや疎らな状態で出土した。磔の円磨度は円磔がほとんどであり、石質は砂岩が多く、形態は扁平楕円磔がほとんどで棒状楕円磔と棒状扁平磔とが若干存在する。重量分布は 40～140 g にわたり、60～80 g の範囲が最も多く出土している。包含層出土の磔と IS-1 の磔の重量分布を比較すると、包含層の磔は 1～240 g に主な分布範囲を持ち、1～20 g にピークを持つのにたいして IS-1 のそれは分布範囲が狭く、より重いところにピークがある。(表V-12 参照)

時期 集石自体で時代を特定できないが、集石周囲の遺物包含層の状況と遺構のある層準から擦文時代と考えられる。

b) 双磔 (図V-11、表V-6・10、図版V-5-3)

集石よりも大きな磔が 2 個近接しておかれている遺構をいう。この遺構は美々7 遺跡や美々8 遺跡低湿地部分においても検出されている。また昭和 56 年の調査でも道跡の脇に 2 点磔が出土しているという記載も類例の一つと考えて良いだろう。

位置 主に南東部の谷部分に位置し、3 か所で検出できた。

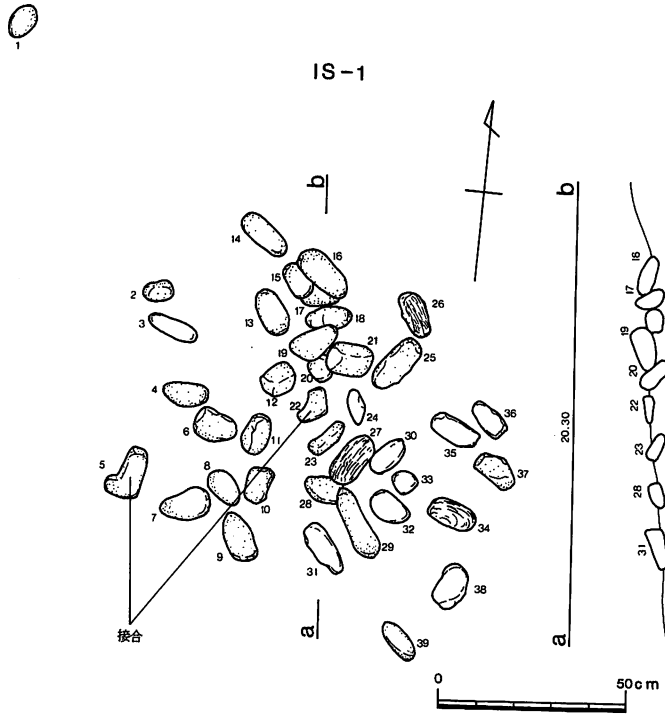
調査 これらの磔はすべて I 黒層 1 回目から検出されている。

特徴 磔の円磨度は円磔がほとんどであり、石質は砂岩が多く、形態は楕円扁平磔で、1 点円扁平磔が含まれる。6 点の重量は 548～4,700 g と幅を持っているが、対になる磔どうしの大きさ・重量は著しい差が出ない。このことより双磔は 2 個で 1 つの形態を持つ遺構と推測できる。

時期 双磔自体では時代を特定できないが、双磔周囲の遺物包含層の状況と遺構のある層準と、美々7 遺跡や美々8 遺跡低湿地で出土している双磔も I 黒層の中位から出土していることより擦文時代と考えられる。

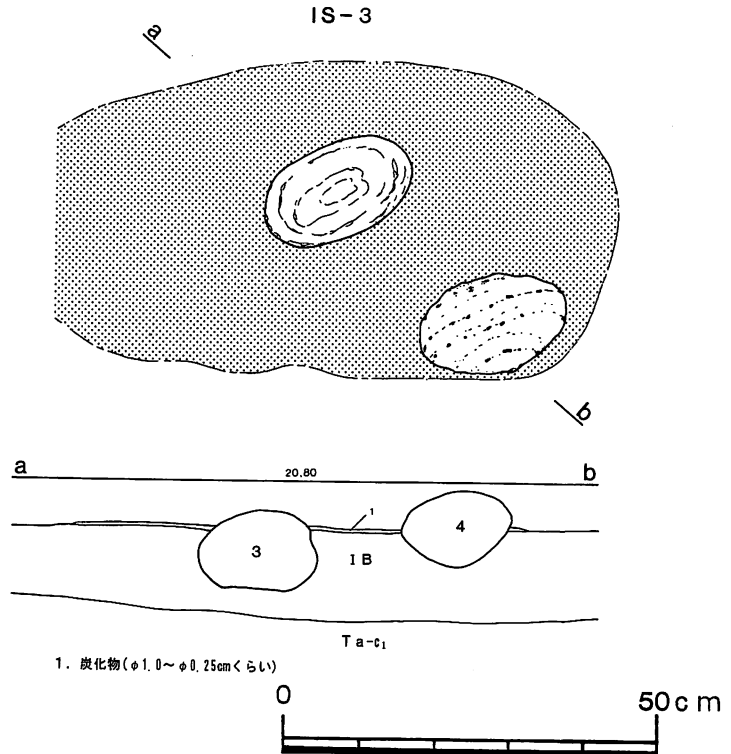
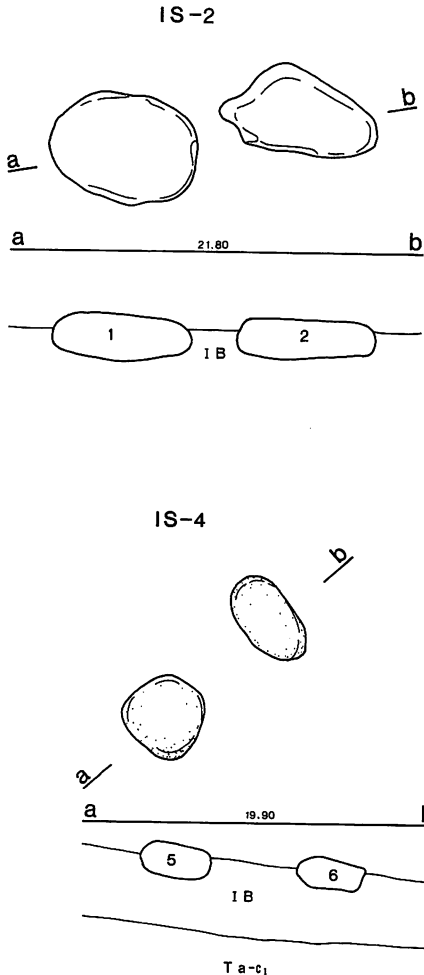
(4) 道跡

0・I道跡-1 (図V-12、図版V-3-5・6)



表V-5 IS-1の磔一覧

番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	形状	状
1	75.0	40.2	19.7	86.0	砂岩	円	磔
2	48.1	33.6	27.1	68.0	砂岩	円	磔
3	16.5	39.1	18.4	66.0	泥岩	円	磔
4	65.2	38.6	16.9	69.0	砂岩	円	磔
5	72.9	32.5	10.1	46.0	砂岩	垂角	磔
6	60.1	44.9	20.0	85.0	砂岩	円	磔
7	67.9	36.9	13.0	54.0	砂岩	垂角	磔
8	61.0	43.2	19.2	79.0	砂岩	円	磔
9	70.5	43.8	23.0	106.0	砂岩	円	磔
10	53.6	36.7	18.7	64.0	砂岩	垂角	磔
11	61.8	32.8	24.7	80.0	砂岩?	垂角	磔
12	59.7	34.8	26.3	72.0	珪岩?	垂角	磔
13	73.0	37.8	16.2	76.0	砂岩	円	磔
14	76.5	34.7	17.1	72.0	砂岩	円	磔
15	56.0	34.7	15.6	50.0	砂岩	円	磔
16	88.0	45.2	18.2	124.0	砂岩	円	磔
17	74.4	45.5	21.4	104.0	砂岩	円	磔
18	62.8	41.9	23.6	85.0	砂岩	円	磔
19	68.6	38.3	27.0	73.0	砂岩	円	磔
20	65.5	42.7	19.6	83.0	砂岩	山	磔
21	63.5	40.0	25.2	92.0	砂岩	円	磔
22	55.0	44.3	26.5	14.0	砂岩	山	磔
23	62.5	39.5	21.4	68.0	砂岩	円	磔
24	56.7	37.5	20.5	57.0	砂岩	垂角	磔
25	71.0	31.8	16.9	64.0	砂岩	円	磔
26	63.0	33.3	19.6	76.0	片麻岩	円	磔
27	76.1	36.6	13.0	79.0	片麻岩	円	磔
28	55.5	36.5	19.2	58.0	砂岩	円	磔
29	91.0	27.1	21.1	94.0	砂岩	円	磔
30	81.1	35.8	21.8	93.0	砂岩	円	磔
31	61.8	37.0	20.6	63.0	泥岩	垂角	磔
32	55.0	40.2	31.5	92.0	砂岩	円	磔
33	61.0	34.4	13.5	51.0	泥岩	垂角	磔
34	80.8	37.9	17.5	90.0	片麻岩	円	磔
35	75.1	19.6	26.3	62.0	珪岩	円	磔
36	58.6	36.2	23.4	78.0	珪岩	円	磔
37	59.7	38.6	26.5	84.0	砂岩	垂角	磔
38	65.9	35.9	20.5	81.0	泥岩	垂角	磔
39	64.5	32.2	20.1	64.0	砂岩	円	磔



図V-11 IS-1~4

表V-6 IS-2~4の磔一覧

番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	形状	状
1	224.4	158.2	88.6	4700.0	砂岩	円	磔
2	210.4	116.3	81.1	3146.0	砂岩	垂角	磔
3	211.4	141.0	89.7	3999.0	珪岩	円	磔
4	210.9	129.3	76.8	2817.0	磔岩	円	磔
5	113.9	106.7	38.0	807.0	砂岩	円	磔
6	126.6	85.9	28.0	548.0	砂岩	円	磔

位置 南東部尾根上に位置する。

規模 道幅約40cm

調査 Ta-b層上面を遺構精査中、その上面で帯状に広がる暗褐色土が現れたのでトレンチを入れたところI黒層上面にも道跡の断面がみられた。この道跡のつづきは北側部分では自動車学校の造成による削平で、南側部分はII黒層上面より上が流失しているために不明である。

特徴 道幅は36~40cm、断面はU字形、南北に伸びる。

時期 Ta-b層上面とI黒層上面の両面に遺構が構築されており、Ta-b火山灰降下後も同じ道筋が使われていたことがわかる。また、Ta-b層上面の道跡のへこみ部分には暗褐色土が堆積していることより、Ta-a火山灰が降下した頃には使用されなくなっていた可能性がある。

0道跡-2 (図V-12、図版V-3-4)

位置 東部谷頭付近に位置する。

規模 道幅約40cm

調査 Ta-b層上面を遺構精査中にTa-b火山灰の凹みが東西に伸びているのが確認できた。

特徴 道幅は36~40cm、断面はU字形、東西に伸びる。

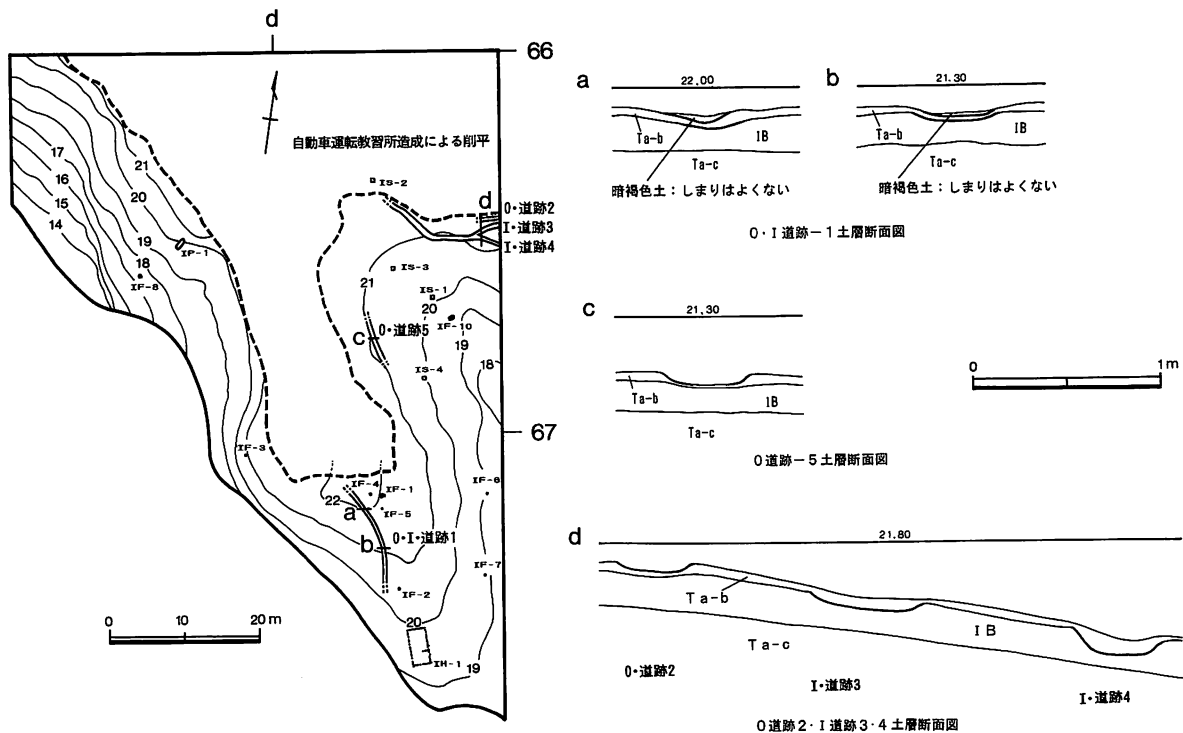
時期 Ta-b層上面が構築面であること、Ta-b火山灰の凹みに暗褐色土が堆積してしていないことより0・I道跡-1よりは若干新しい遺構である。

I道跡-3・4 (図V-12、図版V-3-4)

位置 東部谷頭付近に位置する。

規模 道幅約50~60cm

調査 I黒層上面を遺構精査中に凹みが東西に伸び、東側で2本に枝分かれしているのが確認できた。



図V-12 0・I黒層の道跡-1~5

特徴 道幅は約50~60cm、断面は底面が平坦、谷筋に沿って北西に伸びる。

時期 上面が構築面であること、覆いかぶさったTa-b火山灰上面に凹凸があることより、Ta-b火山灰降灰によって使われなくなったものと思われる。

(5) アイヌ文化期の墓墳

IP-1 (図V-13・14、図版V-4-1・2、図版V-6)

位置 d-66-24・25

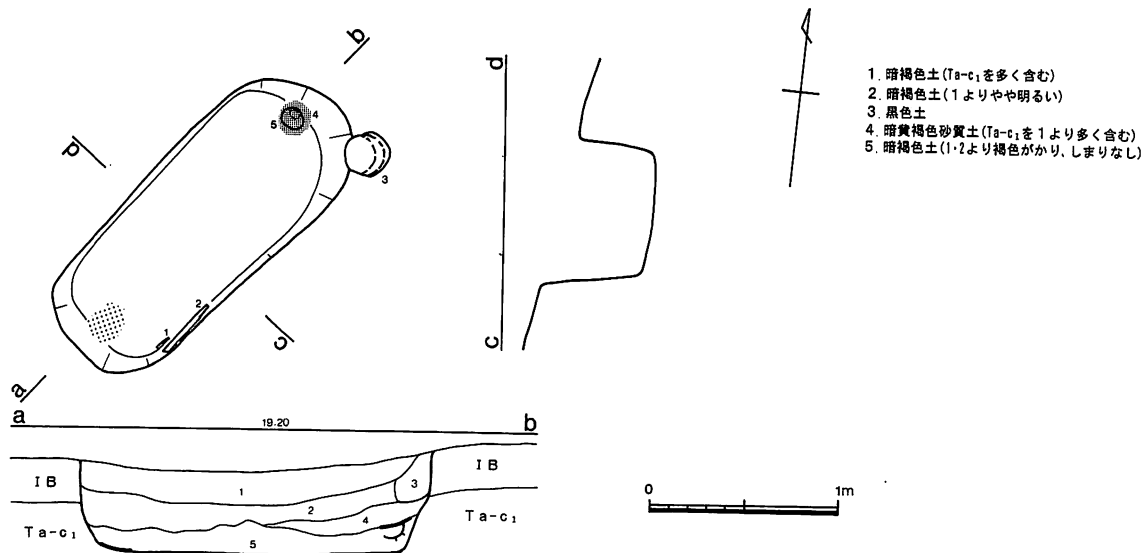
規模 1.84/1.56×0.75/0.66×0.44m

調査 Ta-b火山灰除去後I黒層上面にTa-c火山灰混じりの暗褐色土が長楕円形に広がっているのを確認し、d66-25でのI黒層調査中に墓墳南側の立上りを検出した。

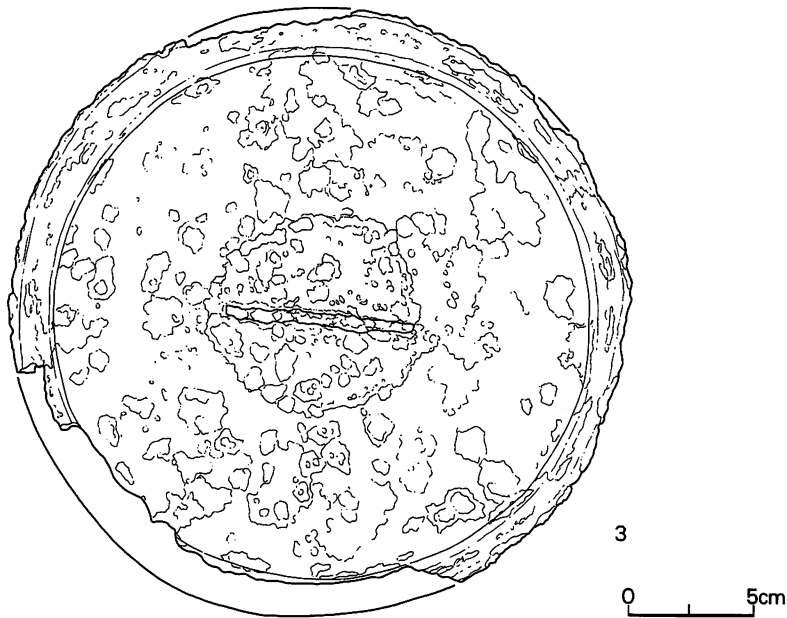
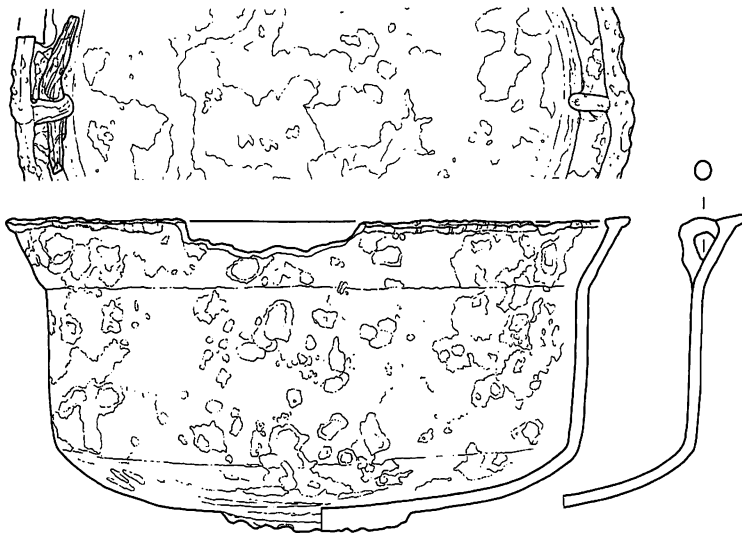
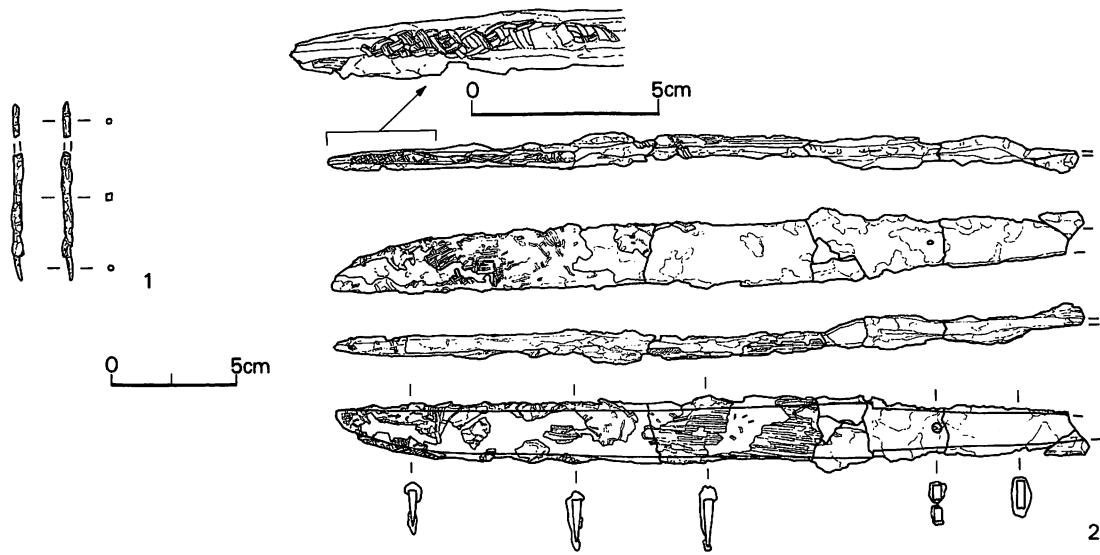
特徴 平面形は長楕円形で長軸はS-38-Wをむく。断面は、平坦な墳底から内弯気味に上方へ立ち上がる。覆土はTa-c火山灰とI黒層とが混った土が主である。北東側の墓口付近には、完形の内耳鉄鍋が半ば埋まった状態で倒置されていた。また北東側の墓墳底から8cm上の第5層上面には朱漆の破片が散らばっていて、その下には漆碗が置かれていた。また南東側の墳底には暗褐色の粘りのある土が楕円のプランを持って広がっており、おそらくこれがヒトの頭部と思われる。その脇に針と小刀が並んでおかれていた。副葬品の特徴からアイヌの墓である。

遺物 1は鉄針、糸通しの穴は確認できなかった。錆が針の芯部分まで及んでおり中空になっていた。2は小刀、茎の一部が欠損している。刀身には木質が付着しており、切先部分には更に繊維が付着していた。3は内耳鉄鍋、一文字湯口を持つ丸い底から上方へ直線的に立ち上がる体部を持つ。口縁部は直線的に外上方へ立ち上り、口縁端面はT字状に肥厚する。内耳部分の断面は円形で、鍋とはアーチを描いて接続する。なお、図では欠失しているが片口状に口縁部分がひずんでいた。また、内耳部分には吊り手部分とみられる木質が遺存していた。4は朱漆片、漆の塗膜片だけが残り本来の形態は不明である。漆碗の上部に散在していたことより碗の蓋の可能性も考えられる。5は漆碗、漆の塗膜のみが遺存しており木質部分は完全に失われていた。漆の色調は暗褐色を呈しており生漆の可能性はある。

時期 墓墳のプランがI黒層上面で検出されていることからTa-b火山灰降灰以前である。



図V-13 IP-1



図V-14 IP-1出土遺物

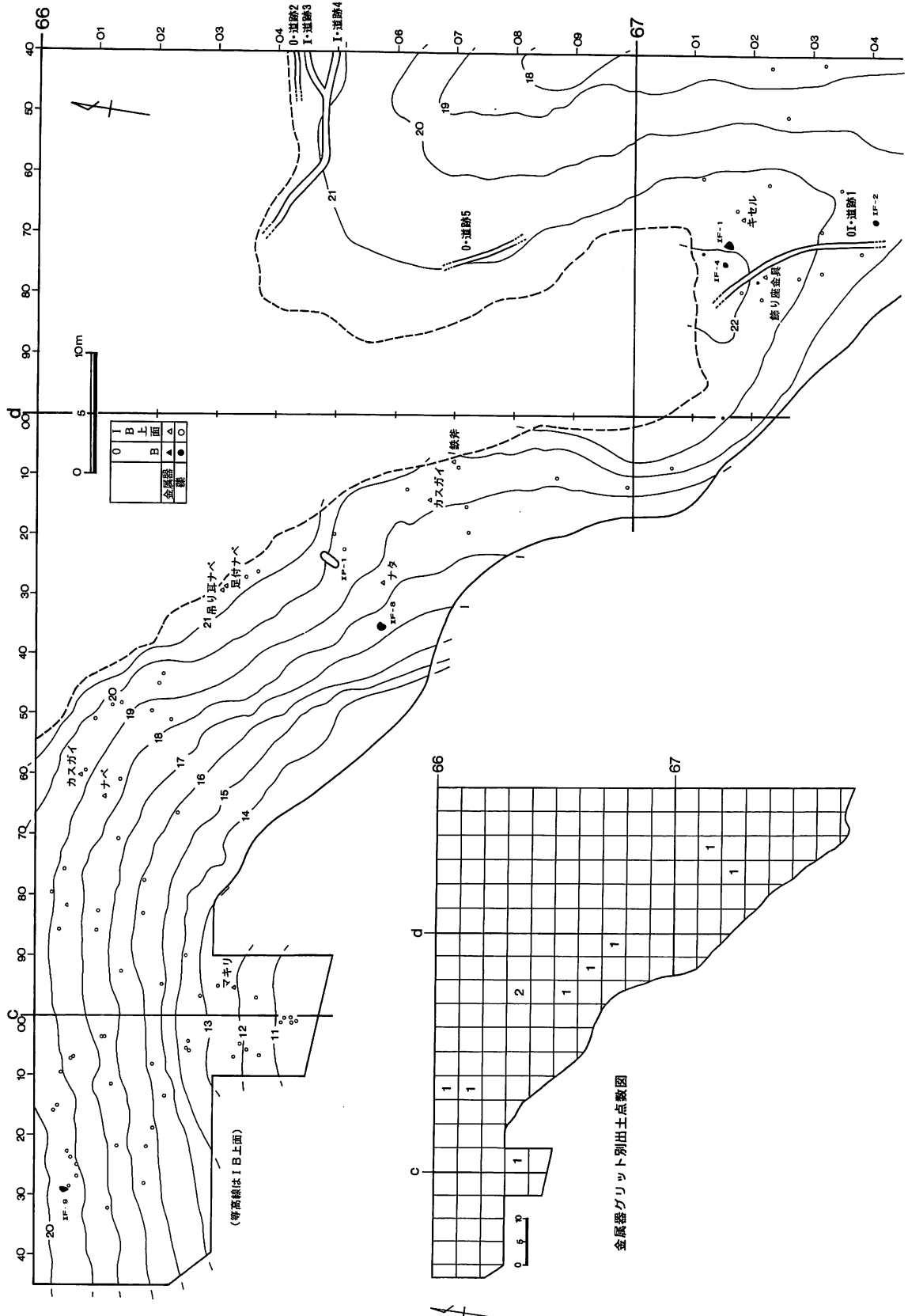
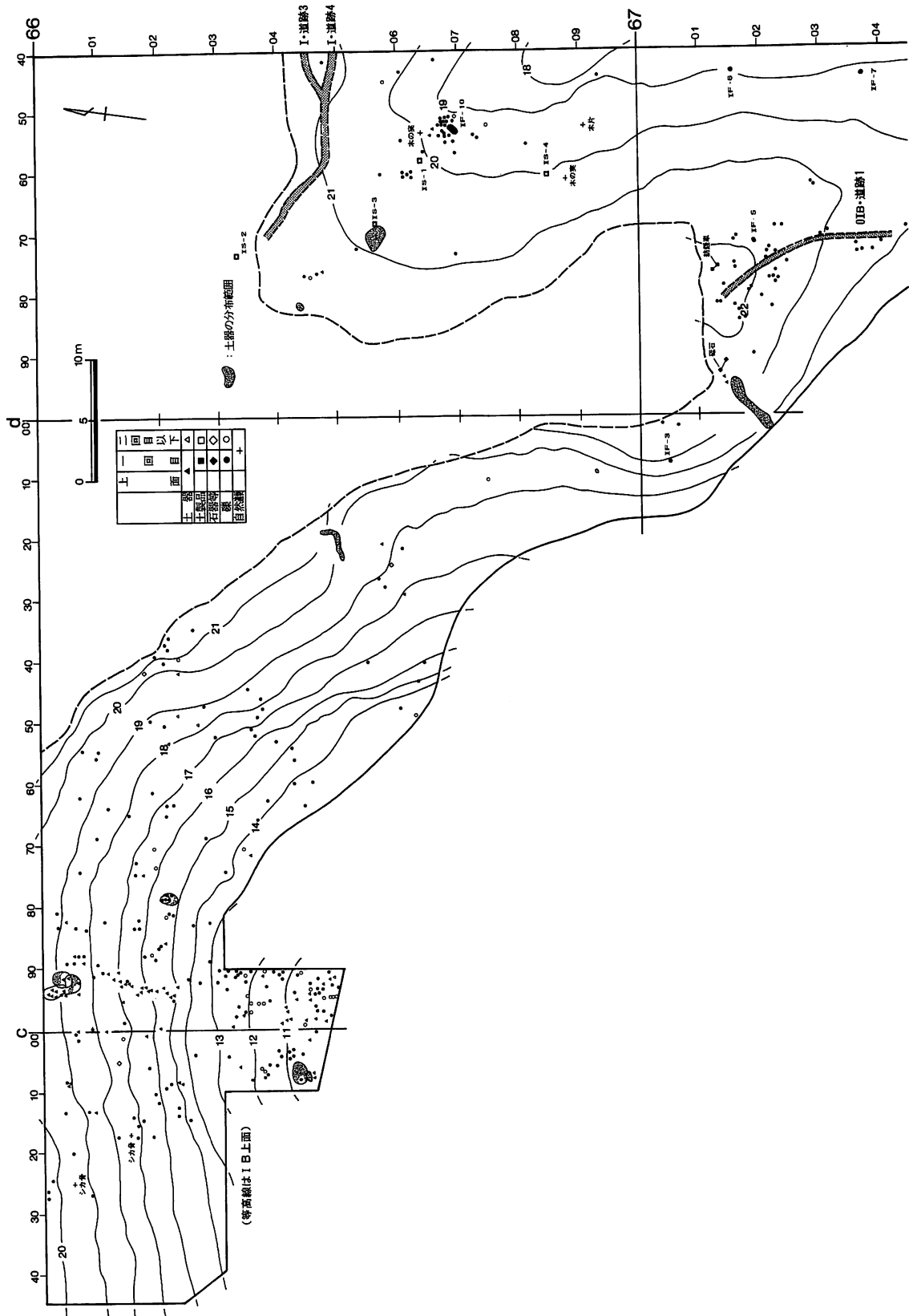
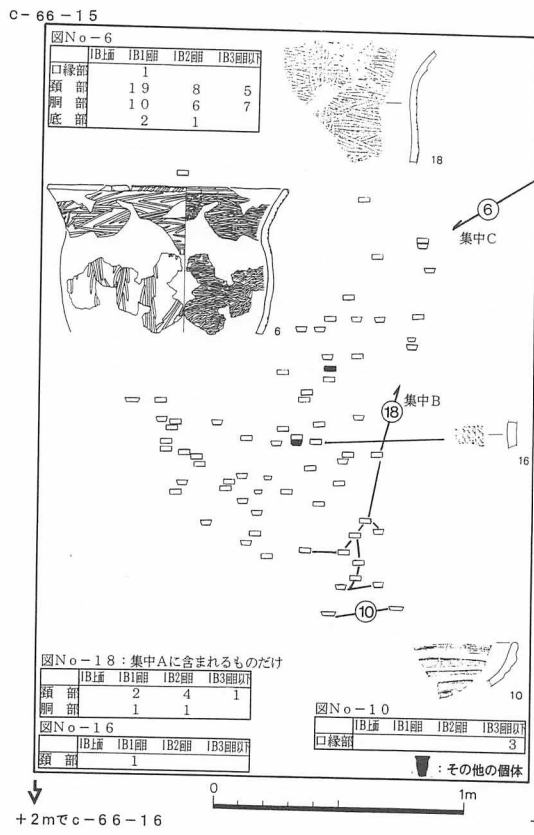


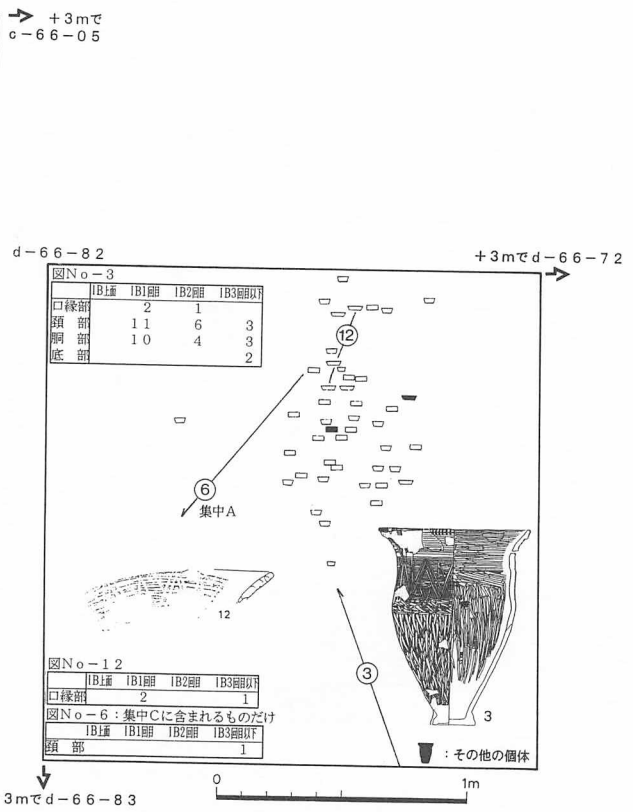
図 V-15 0 黒層と I 黒層上面の遺物分布



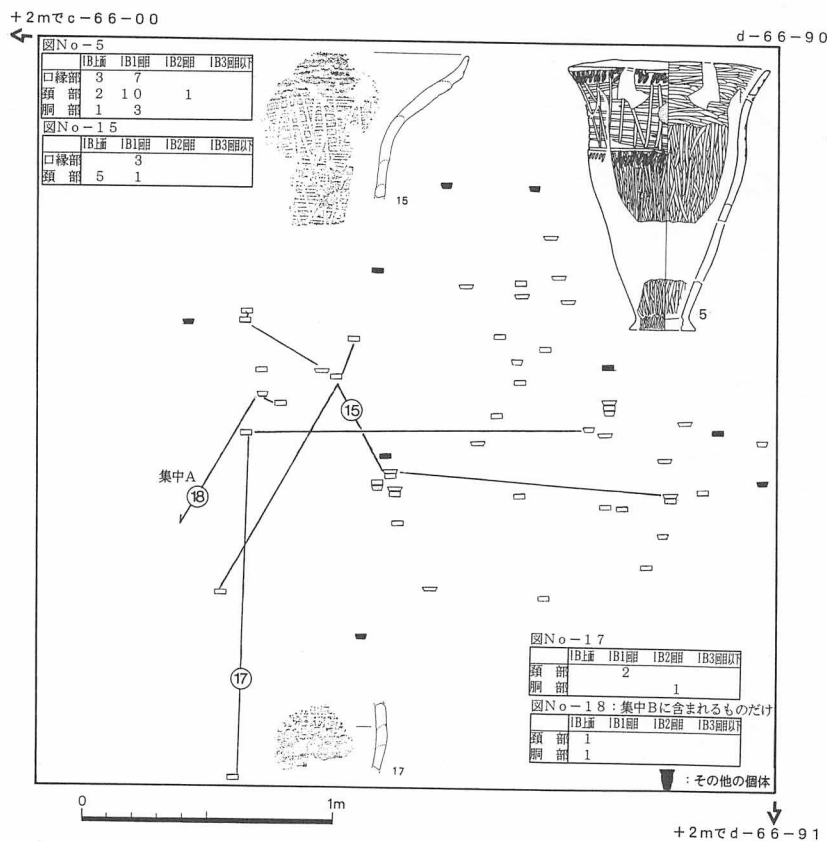
図V-16 I 黒層の遺物分布(上面の遺物は除く)



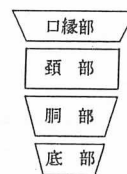
図V-17 土器集中-A

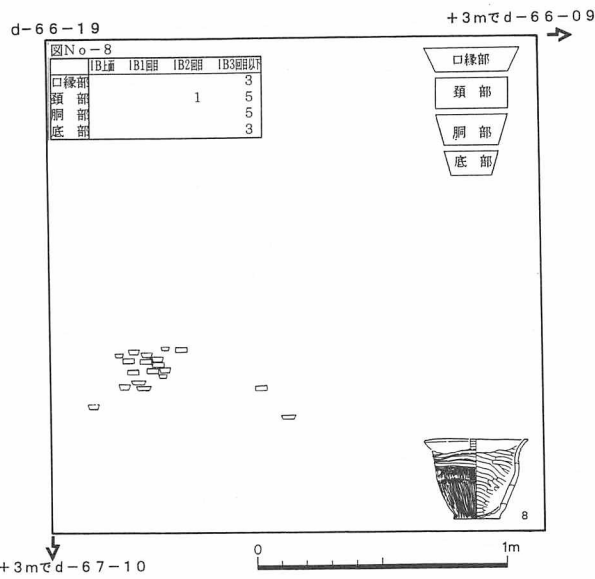


図V-19 土器集中-C

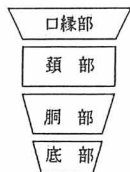


図V-18 土器集中-B





図V-21 土器集中-E



5 第0・I黒色土層出土の遺物

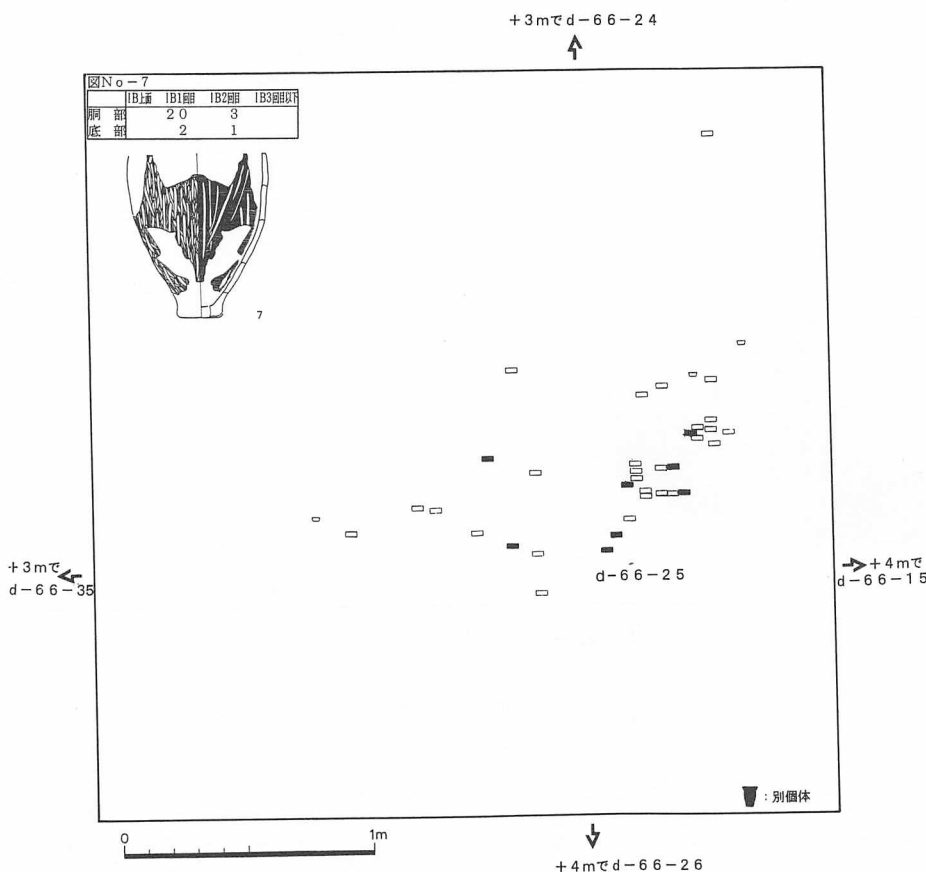
(1) 擦文土器集中 (図V-16~25)

擦文土器の時期区分については平成元年度報告の『美沢川流域の遺跡群 XIII、美々8 遺跡 第I黒色土層の調査、5 まとめ』のP 310・311に準拠し、土器が該当する群をローマ数字で示した。(表-7、8)

土器集中-A：3個体の接合資料 (No.6・10・18) と2片の破片資料を含むVIII~VI群の集中。No.6は主にI黒層1回目の層準にあり、最も多く接合して土器集中の中核をなす(接合線で結んでいないもの)。土器集中-Cとも接合関係を持つ。No.18は主にI黒層2回目の層準にあり、頸部と胴部が残存し、土器集中-Bとも接合関係を持つ。No.6・16はVIII群、No.10・18はVI群で古いものは下位の層準に新しいものは上位の層準に存在する。

土器集中-B：4個体の接合資料 (No.5・15・17・18) と9片の破片資料を含むVIII~VI群の集中。No.5は主にI黒層1回目の層準にあり、最も多く接合して土器集中の中核をなす(接合線で結んでいないもの)、土器集中-Bの中だけに接合関係を持つ。No.15は主にI黒層1回目の層準にあり、口縁部と頸部が残存する。No.18は土器集中-Aと接合関係を持つ。No.5・15・17は時期は異なっているが、主にI黒層1回目の層準に混在する。

土器集中-C：3

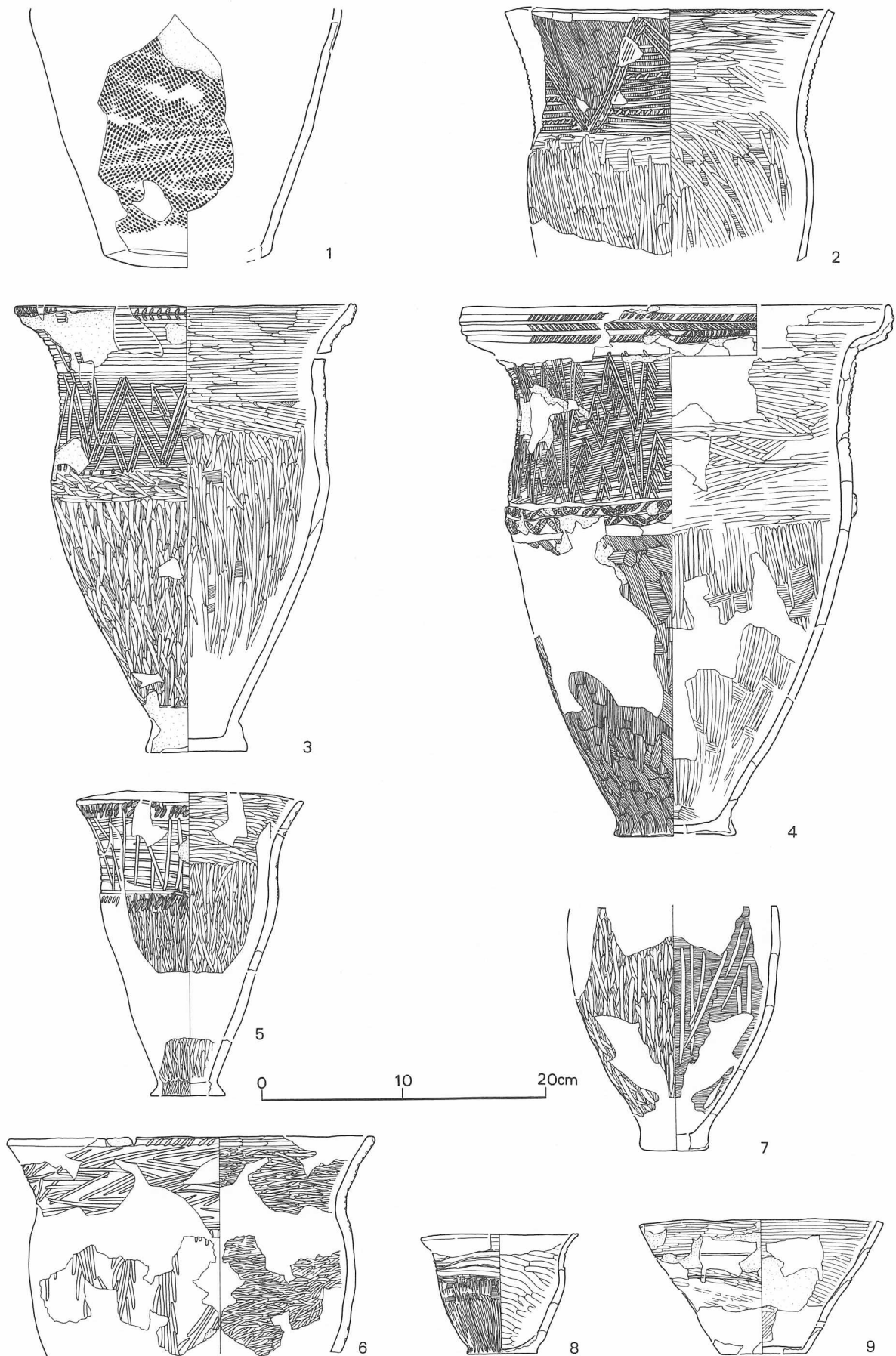


図V-22 土器集中-D

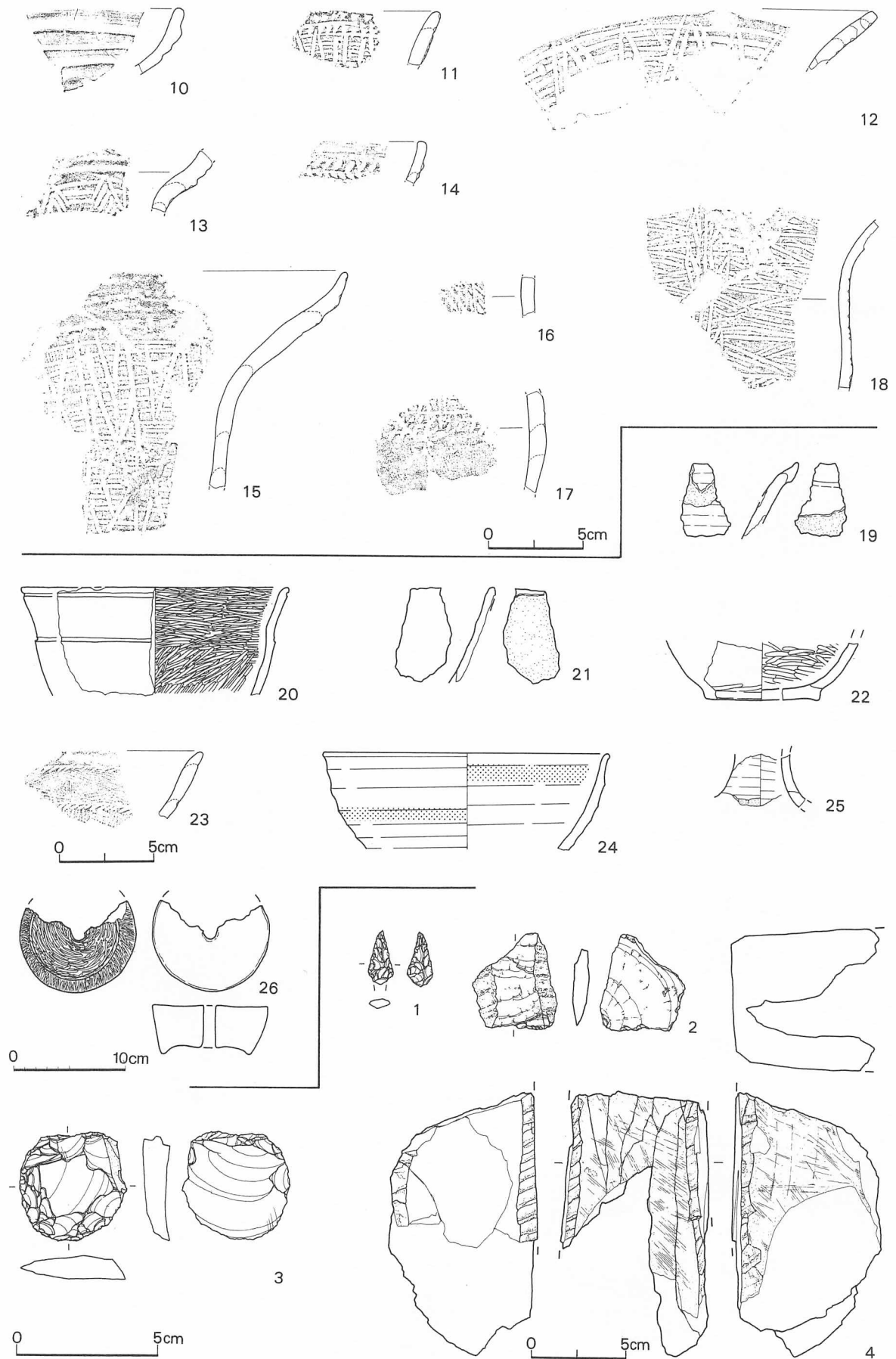


図V-23 土器集中一F

個体の接合資料 (No.3・6・12) と4片の破片資料を含むVIII~VI群の集中。No-3は主にI黒層1回目の層準にあり最も多く接合して土器集中の中核をなす(接合線で結んでいないもの)。また、d66-73のI黒層1回目にある1片と接合する他は土器集中-Bの中だけに接合関係を持つ。No.12主にI黒層1回目の層準にあり、口縁部が残存する。No.6は土器集中-Aと接合関係を持つ。またNo.6は下位から出土しており、他はいずれも主にI黒層1回目にあり混在している。



図V-24 I 黒層の土器



図V-25 I 黒層の土器・土製品・石器・石製品

土器集中-D：1個体の接合資料(No.7)と8片の破片資料を含む。No.7は主にI黒層1回目の層準にあり最も多く接合して土器集中の中核をなし(接合線で結んでいないもの)、土器集中-Dの中だけに接合関係を持つ。この集中は他の土器集中と接合関係を持つもたない。

土器集中-E：1個体の接合資料(No.8)のみで構成されている。No.8は主にI黒層3回目以下の層準にあり、1個体が割れて分散したものと思われるが、復元は完形にならなかった。

土器集中-F：1個体の接合資料(No.4)と5片の破片資料を含む。No.4は主にI黒層1回目の層準にあり、土器集中-Fの中だけに接合関係を持つ。1個体が割れて広範囲に分散したものと思われるが、復元した結果完形にならなかった。

各土器集中は、他の遺物の分布とは重複せず単独で存在する。また土器集中は、他の土器集中と接合関係を持つものと、持たないものとの2つに分かれる。接合関係を持たない土器集中-D・E・Fはその場で破砕している。しかし一部分を欠失しており、他の場所で機能を失って集中地点に廃棄されたものと考えられる。接合関係を持つ土器集中-A・B・Cは斜面の下と上とで接合している個体を多く含む。また土器集中-B・Cは順堆積を示しておらず、その近辺には同様に時期のことなる土器片が散在しているので単に土器が廃棄されたのではないことを示している。例えば、土ごと移動しているのか、後で土壌化するような有機質のものと一緒に廃棄されたのかなどが考えられる。

(2) 土器・土製品 (図V-16・20・24・25、図版V-7~9、表V-7・8)

今回の遺物で特筆すべきことは、紡錘車が初めて出土したことであろう。なお土器の時期区分の表表V-7 I黒層の土器・土製品観察表(1)

No-	胴部	底部	備考
1			
外調	?		趾版 e-66-65, 75
面整	縄文 L R		趾版 1B1脚
内調	ヨコナデ ?		深鉢
面整			縄文晩期後葉

No-	口縁部		頸部	胴部	底部	備考
	口唇					
2						
外調	タ	テ	ハ	ケ		趾版 e-66-84
面整	ヨコナデ				ヨコミガキ	趾版 1B1脚
面施文		沈線			タテミガキ	深鉢 捺文
内調	タテハケ	ヨ	コ	ハ	ケ	口径(23.1)cm
面整	ヨコハケ	ヨ	コ	ミガキ		口径(19.0)cm
					タテミガキ	類 I

No-	口縁部		頸部	胴部	底部	備考
	口唇					
3						
外調	?		タ	テ	ハ	ケ
面整	ヨコナデ		ヨ	コ	ハ	ケ
面施文	ヨコナデ	ヨ	コ	ハ	ケ	捺文
内調	?	?			タテハケ	口径24.0cm
面整	ヨコナデ	ヨ	コ	ミガキ		口径17.8cm
						口径31.0cm
						内黒
						集中C
						類 VI

No-	口縁部		頸部	胴部	底部	備考
	口唇					
4						
外調	?		タ	テ	ハ	ケ
面整	ヨコナデ		ヨ	コ	ハ	ケ
面施文	ヨコナデ	ヨ	コ	ハ	ケ	捺文
内調	?	?			タテハケ	口径29.0cm
面整	ヨコナデ	ヨ	コ	ミガキ		口径21.4cm
						口径36.9cm
						内黒
						集中F
						類 VII

No-	口縁部		頸部	胴部	底部	備考
	口唇					
5						
外調	?		?			趾版 d-66-90
面整	ヨミガキ		?			趾版 1B1脚
面施文	ヨコナデ	ヨ	コ	ハ	ケ	深鉢 捺文
内調	?	?			タテミガキ	口径15.9cm
面整	ヨコナデ	ヨ	コ	ミガキ		口径12.3cm
						口径21.1cm
						内黒
						集中B
						類 VII

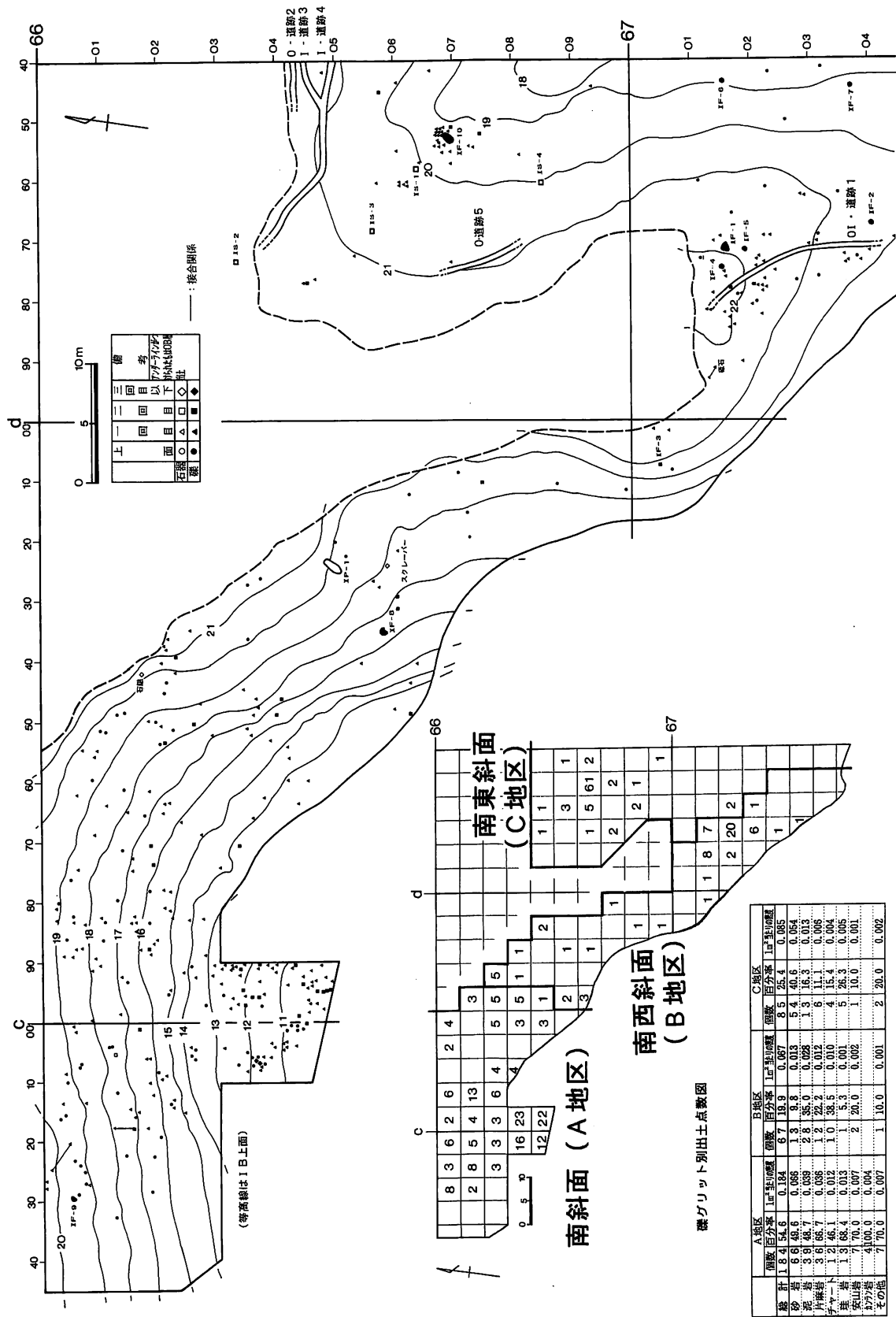
No-	口縁部		頸部	胴部	底部	備考
	口唇					
6						
外調	?		?			趾版 c-66-04,
面整	ヨコナデ		ヨ	コ	ハ	ケ
面施文	ヨコナデ	ヨ	コ	ハ	ケ	捺文
内調	?	?			タテミガキ	趾版 1B1脚
面整	ヨコナデ	ヨ	コ	ミガキ		深鉢 捺文
						口径(26.0)cm
						口径(21.8)cm
						内黒
						集中A・C
						類 VIII

表V-8 I 黒層の土器・土製品観察表 (2)

No-	口縁部	頸部	胴部	底部	備考
No-7	口唇 タテハケ タテミガキ	?	?	?	甗 d-66-14, 24 甗 IB1 深鉢 捺文 集中D
No-8	口唇 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-09 甗 IB3 深鉢 捺文 口径10.9cm 口径9.0cm 高さ8.3cm 集中E 甗 IV
No-9	口唇 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 e-66-56 甗 IB1 坏 捺文 口径17.2cm 口径6.0cm 口径9.4cm 甗 VI 内黒
No-10	口唇 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-95 甗 IB3 深鉢 捺文 内黒 集中A 甗 VI
No-11	口唇 タテハケ ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 c-66-01 甗 IB1 深鉢 捺文 内黒 甗 VII
No-12	口唇 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-72 甗 IB1 深鉢 捺文 集中C 甗 VII
No-13	頸部 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-72 甗 IB1 深鉢 捺文 集中C 甗 VII
No-14	口唇 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-80 甗 IB2 深鉢 捺文 内黒 ヨコミガキ
No-15	口唇 タテハケ ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-91, 2 甗 IB1 深鉢 捺文 集中B 甗 VIII
No-16	頸部 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 c-66-05 甗 IB1 深鉢 捺文 集中A 甗 VIII
No-17	頸部 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-90-45, 3 甗 IB1, 2 深鉢 捺文 集中B 甗 VII~VIII
No-18	頸部 タテハケ ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 c-66-05 甗 IB3 深鉢 捺文 集中A 甗 VI
No-19	口唇 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 c-66-05 甗 IB3 鉢? 捺文? 砂粒を非常に多く含む
No-20	口唇 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-71 甗 IB1 鉢 捺文 内黒 甗 V
No-21	口縁~体部 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-42 甗 IB3 坏 捺文 内黒
No-22	体部 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-91 甗 IB1 坏 捺文 内黒 ヨコミガキ
No-23	口縁~体部 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 c-66-00 甗 IB1 高坏? 捺文 内黒 甗 IX
No-24	口縁~体部 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-91, 5 c-66-05 甗 IB2 坏 土師質土器 重ね焼き痕 甗 VI?
No-25	頸部 ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 d-66-95 甗 IB1 瓶 須恵質陶器 角礫 能登産 内外面暗灰色 断面暗赤褐色
No-26	口唇 ナデ ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヨコミガキ	甗 e-67-71 甗 IB1 紡錘車 残存1/3 ミガキ

表V-9 I 黒層掲載石器一覧

図番号	名称	地区	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
V-1	石 鏃	d-66-41	IB 3回目	1.9×0.9×0.4	0.5	Obs	
-2	Uフレイク	e-66-83	IB 1回目	2.1×2.6×0.8	7.0	〃	
-3	スクレイパー	d-66-25	IB 1回目	3.7×3.7×0.8	14.9	〃	
-4	砥石	e-67-91	IB 1回目	(13.7)×7.3×7.4	(471.8)	Tu	



図V-26 0黒層・I黒層石器・礫の分布

示については「(1) 擦文土器集中」で述べたとおりである。

(3) 石器・石製品・礫

a) 石器・石製品 (図V-25・26、図版V-9、表V-9)

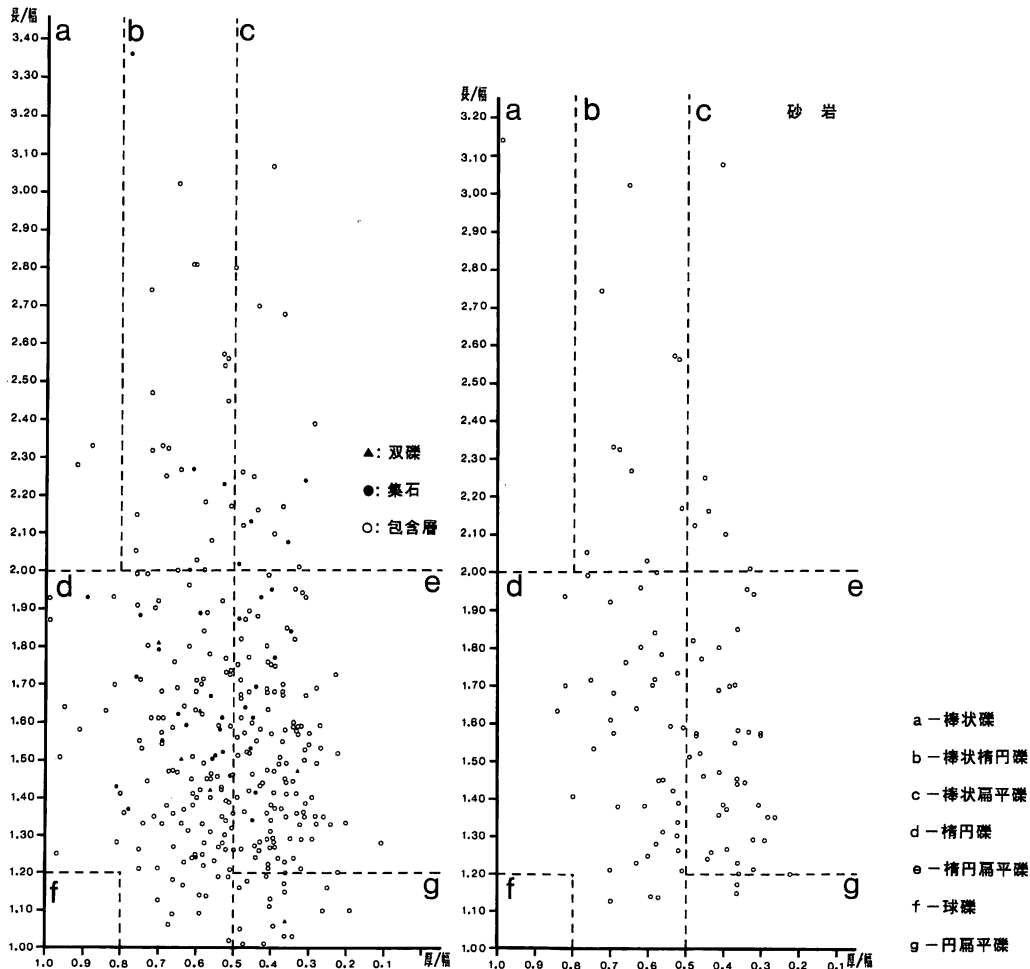
1は基部が欠損した石鏃、I黒層3回目の深いところから出土した。2は背面に礫皮をのこすUフレイク。3はスクレイパー、周縁の調整が丁寧に施され、平面形は円形を呈する。4は砥石、土器集中-Fの範囲内から出土し、かつ土器No.7と同じ層準にあった。

b) 礫 (図V-15・16・26、表V-10~13)

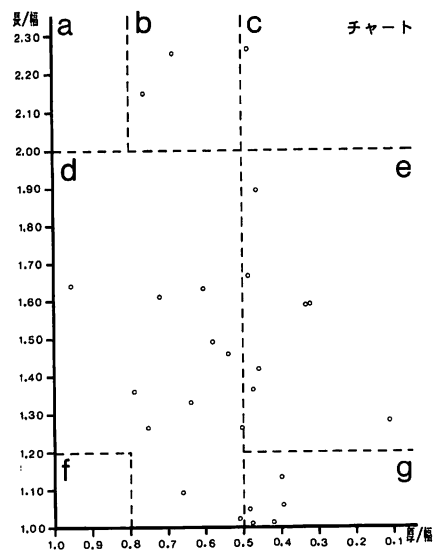
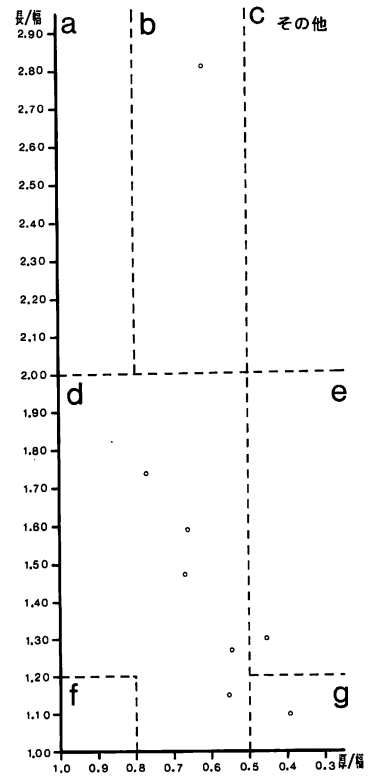
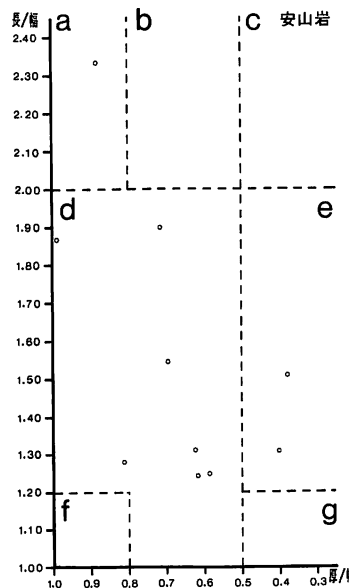
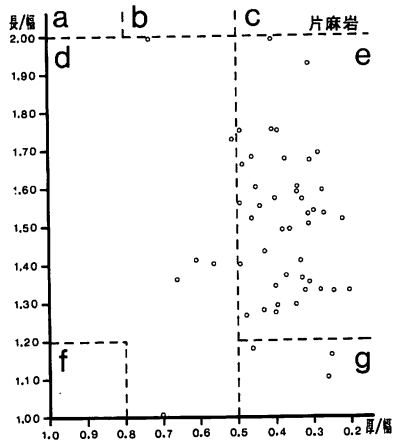
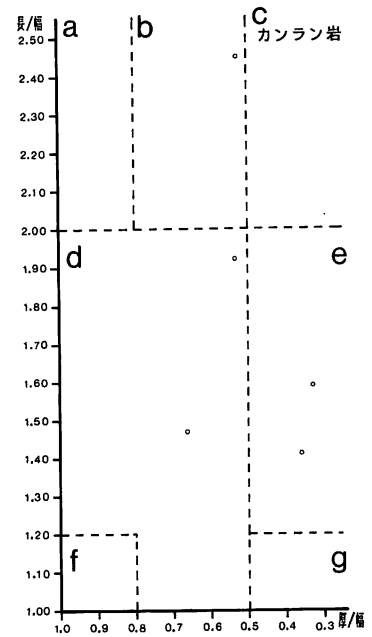
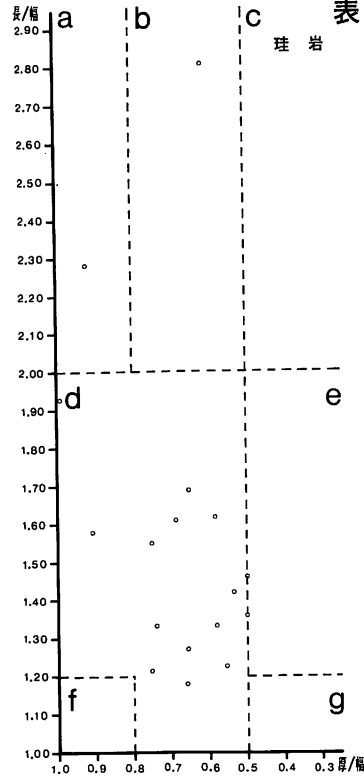
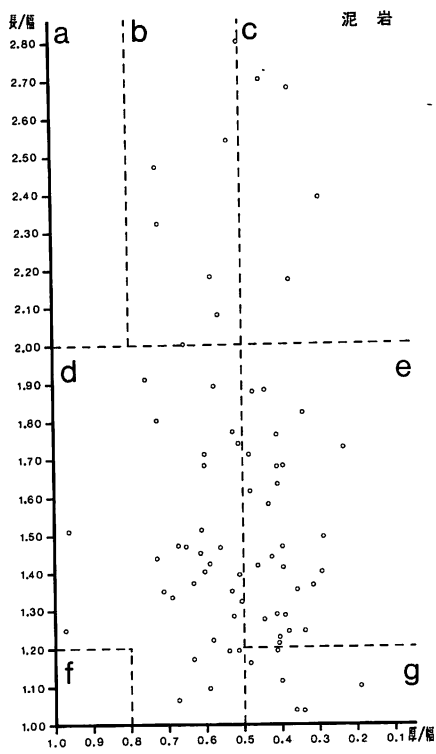
礫は0黒層出土の3点を除いて他はすべてI黒層出土の礫である。分布は主に南斜面Cラインの標高13m以下の4グリッドに偏る。次に地形ごとに礫の密度を見てみよう。遺跡は3つの斜面に立地する。南斜面(A地区)は1m²当たりの密度が0.184個、南西斜面(B地区)は0.067個、南東の斜面(C地区)は0.085個であり、A地区の密度が非常に高い。C地区の密度は2番目に高いがこれはIS-1の礫が加算されているためであってIS-1の礫を除くと極めて低い密度となる。各地区別の岩質構成を見てみると、B地区出土の砂岩が少ないほかは、いずれの地区も同じような構成である。

次に礫の形態を見てみよう(表V-10・11参照)。これらのグラフは縦軸が長さ/幅で平面形を表し、横軸は厚さ/幅で断面形を表す。よって、縦軸の値が大きくなると平面形が棒状に近くなり、横軸の値が小さくなると断面形が扁平になる。したがって、グラフ中の破線で区切られた領域は、礫の形態の違いを表している。形態の名称は初めに平面形の名、次に断面形の名をつけ、それらを組み合わせる

表V-10 礫の長/幅・厚/幅グラフ

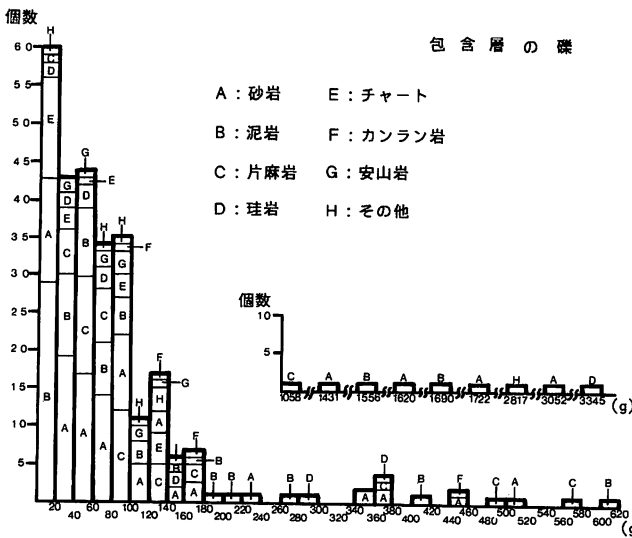
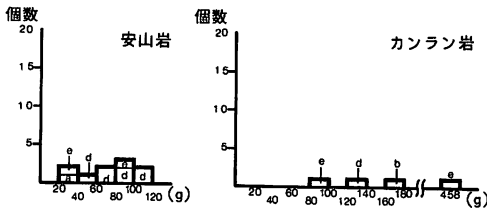
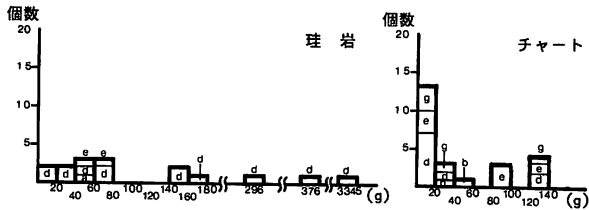
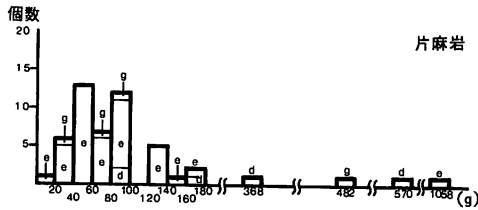
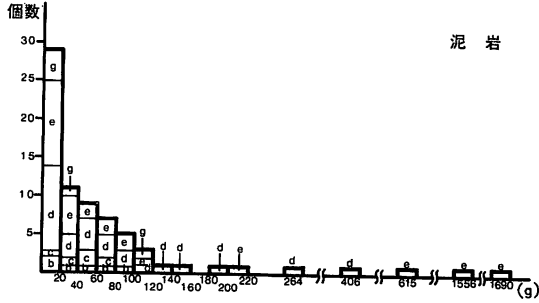
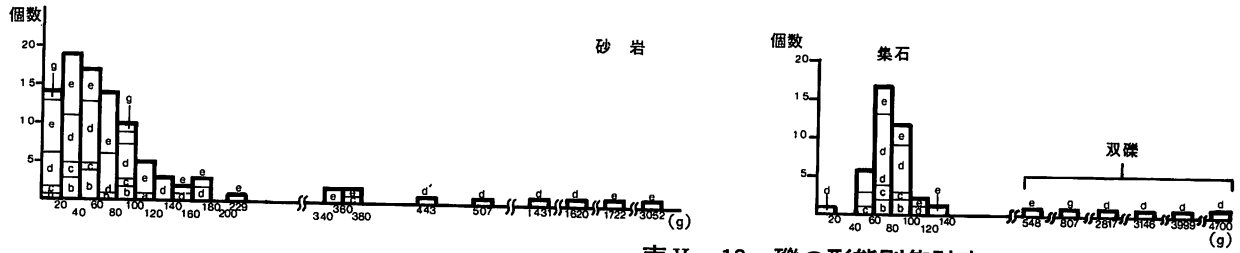


表V-11 礫の長/幅・厚/幅グラフ



- a - 棒状礫
- b - 棒状楕円礫
- c - 棒状扁平礫
- d - 楕円礫
- e - 楕円扁平礫
- f - 球礫
- g - 円扁平礫

表V-12 礫のヒストグラフ



表V-13 礫の形態別集計表

a-棒状礫 e-楕円扁平礫
b-棒状楕円礫 f-球礫
c-棒状扁平礫 g-円扁平礫
d-楕円礫

砂岩 97個(全の34.6%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円 4.6	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	8	10.5
	棒状扁平礫	5	6.6
	楕円礫	29	38.1
	楕円扁平礫	33	43.4
礫 7.5	% 円扁平礫	1	1.3
面 2.1	棒状礫	1	4.8
	棒状楕円礫	3	14.3
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	11	52.3
礫 2.5	楕円扁平礫	5	23.8
%	円扁平礫	1	4.8

泥岩 73個(全の26.1%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円 4.6	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	3	6.5
	棒状扁平礫	3	6.5
	楕円礫	19	41.3
礫 3.0	楕円扁平礫	17	37.0
%	円扁平礫	4	8.7
面 2.6	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	3	11.6
	棒状扁平礫	2	7.7
	楕円礫	10	38.4
礫 5.6	楕円扁平礫	9	34.6
%	円扁平礫	2	7.7
面 1.4	棒状礫	2	0
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	1	1.4
	楕円礫	1	1.4
礫 1.4	楕円扁平礫	0	
%	円扁平礫	0	

片麻岩 51個(全の18.2%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円 5.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	5	10.0
	楕円扁平礫	42	84.0
礫 38.0	% 円扁平礫	3	6.0
面 1.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	0	
	楕円扁平礫	1	100
礫 2.0	% 円扁平礫	0	

珪岩 16個(全の5.7%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円 7.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	7	100
	楕円扁平礫	0	
礫 44.0	% 円扁平礫	0	
面 9.0	棒状礫	1	11.1
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	6	66.7
	楕円扁平礫	2	22.2
礫 59.0	% 円扁平礫	0	

チャート 24個(全の8.6%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円 1.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	4	40.0
	楕円扁平礫	3	30.0
礫 41.7	% 円扁平礫	3	30.0
面 1.4	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	2	14.3
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	6	42.8
礫 58.3	楕円扁平礫	4	28.6
%	円扁平礫	2	14.3

カンラン岩 4個(全の1.4%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円 3.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	3	33.3
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	3	33.3
	楕円扁平礫	3	33.3
礫 75.0	% 円扁平礫	0	
面 1.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	0	
礫 25.0	楕円扁平礫	1	100
%	円扁平礫	0	

安山岩 10個(全の3.6%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円 6.0	棒状礫	1	16.7
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	4	66.8
	楕円扁平礫	1	16.7
礫 60.0	% 円扁平礫	0	
面 4.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	3	75.0
	楕円礫	0	
礫 40.0	楕円扁平礫	1	25.0
%	円扁平礫	0	

その他 5個(全の1.8%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円 3.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	1	33.3
	楕円扁平礫	1	33.3
礫 60.0	% 円扁平礫	1	33.3
面 2.0	棒状礫	0	
	棒状楕円礫	0	
	棒状扁平礫	0	
	楕円礫	2	100
礫 40.0	楕円扁平礫	0	
%	円扁平礫	0	

ことで礫の呼び名が立体的なものとなるようにし、アルファベットの略号を付した。

表V-10 右側のグラフはI黒層出土の完形礫について示したものである。礫は横軸値0.5付近を中心にして、d・eの領域に分布している。包含層に比べて双礫と集石はより一層d・eの領域に集中しており、双礫は縦軸値1.8以下に多く集まり平面形が丸い領域に集中して、かつ似ていることがわかる。

砂岩はfを除いた全ての形態が存在する。主にその中は横軸値0.8~0.2、縦軸値1.1~2.35に広がりを持つ楕円礫(41.2%)・楕円扁平礫(39.2%)で構成されている。泥岩はa・fを除いた全ての形態が存在する。主にその中は横軸値0.75~0.3、縦軸値1.05~2.2の楕円礫(41.1%)・楕円扁平礫(35.6%)で構成されている。珪岩はc・g・e・fを除いた全ての形態が存在する。主にその中は横軸値0.95~0.2、縦軸値1.2~1.7の楕円礫(81.3%)の形態を、片麻岩はa・b・c・fを除いた全ての形態が存在する。主にその中は横軸値0.7~0.2、縦軸値1.1~1.8の楕円扁平礫(84.3%)で構成されている。

砂岩と泥岩は楕円礫と楕円扁平礫が多く、珪岩は楕円礫が多く、片麻岩は楕円扁平礫が多い。4種以外の岩質については形態にばらつきがあり代表的形態は見出しがたい。

表V-12 左側の表は岩質ごとの形態別重量示している。砂岩は0~229gの範囲に全個数の88.8%があり、ピークは20~40gの範囲(全個数の19.6%)にある。泥岩は0~264gの範囲に全個数の94.5%があり、ピークは0~20gの範囲(39.7%)にある。片麻岩は0~180gの範囲に全個数の92.2%があり、ピークは40~60gの範囲(全個数の25.5%)にある。チャートのピークは0~20gの範囲(54.2%)にある。4種以外の岩質については明確なピークはみられなかった。

砂岩・泥岩・片麻岩・チャートは0~60gの範囲の重量が選択されている。とりわけ泥岩・チャートは著しく偏って選択されている。

以上より形態と重量の関係は、砂岩・泥岩・片麻岩・チャートのように、代表的な形態が全重量に分散しているにもかかわらず特定の重量が選択されているものについては、選択の基準が重量にあることを示している。珪岩は特定の形態がいろいろな重さを持っており、形態を選択の基準にしている可能性がある。

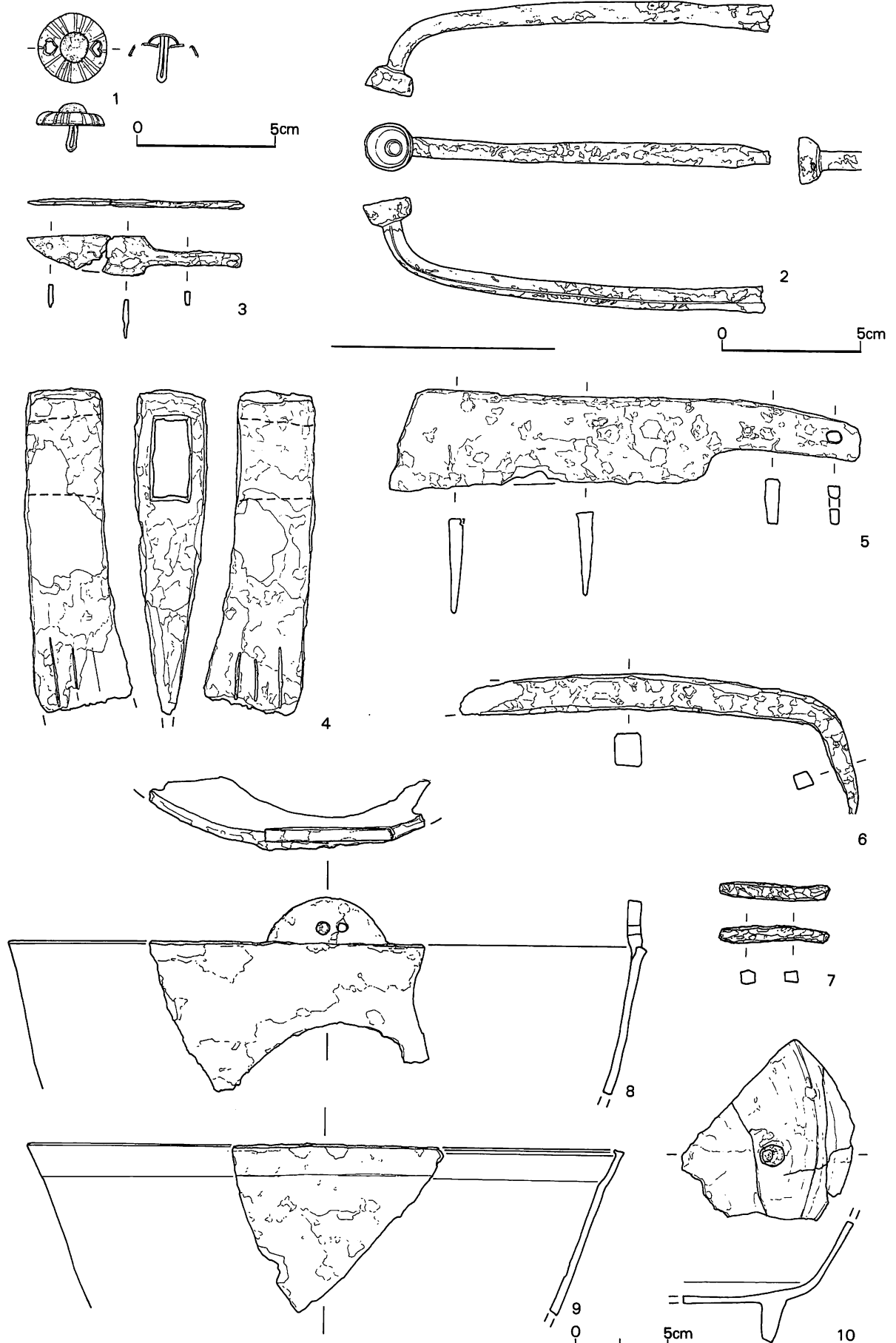
礫の円磨度は表V-13示している。砂岩全体の77.5%を円礫が占める。円礫と同形態の亜円礫も少数出土しており、円磨度の同異に関わらず形態は一樣である。泥岩も砂岩と同様な状況を示している。片麻岩は円礫が98%を占め、等しい円磨度で一定形態の礫が出土している。珪岩、チャート、カンラン岩、安山岩は円礫と亜円礫が約半数で、円礫と同じ形態の亜円礫がほぼ等しい割合で出土しており砂岩や泥岩と近い状況を示している。

円磨度相違は採取地点の相違でもある。砂岩・泥岩・珪岩のように異なる採取地点で一樣な形態が選択されるものや、片麻岩のように同じ採取地点で一樣な形態が選択されるものがある。

形態と重量と採取地点の関係をまとめるとつぎのとおりになる。片麻岩は40~60gの重量が主に必要であったため、同じ採取地点で一樣な形態が選択された。砂岩・泥岩は0~40gの重量が主に必要であったため、異なった採取地点で一樣な形態が選択された。砂岩・泥岩は形態が選択のさいに影響

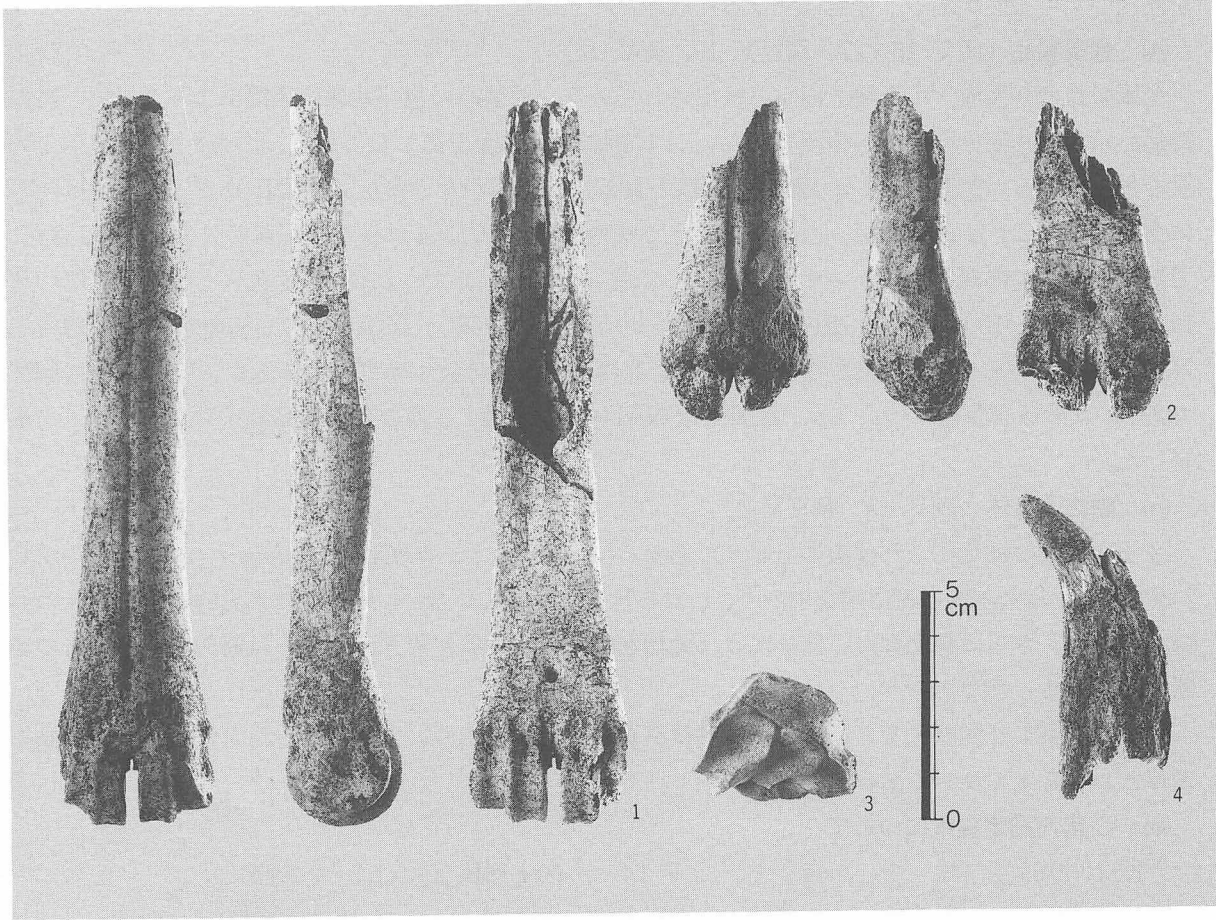
表V-14 0・I黒層掲載金属製品一覧

図番号	名称	地区	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
V-1	飾り座金具	e-67-72	OB	2.1×2.4×0.4	4.1	銅 鍍金	刀装具
	ビンの部分			1.7×1.0×1.0			
-2	キセル雁首	e-67-61	IB 上面	11.3×1.7×1.7	12.4	銅	
-3	小刀	d-66-94	IB 上面	11.3×2.2×0.4	12.2	鉄	
-4	鉄斧	d-66-07	IB 上面	13.7×5.5×3.9	950.0	〃	
-5	鉈	d-66-25	IB 上面	25.0×5.5×1.0	295.2	〃	
-6	鏝	d-66-61	IB 上面	(21.8)×1.8×1.5	(276.6)	〃	
-7	鏝?	e-66-56	IB 上面	(5.9)×0.8×0.8	(14.9)	〃	
-8	吊り耳鉄鍋	d-66-23	IB 上面	(15.2)×(11.0)×0.4	(218.2)	〃	耳の厚さ0.7cm
-9	内耳鉄鍋?	d-66-61	IB 上面	(11.9)×(9.5)×0.5	(123.8)	〃	
-10	鉄鍋	d-66-23	IB 上面	— ×0.4	(114.2)	〃	底部内側の復元径29.5cm



図V-27 0・I黒層の金製品

写真V-1 動物遺存体



表V-15 動物遺存体一覧

地区 遺構名	層位名	哺乳類			その他			図版No	
		種名・部位	数	重量g	種名・部位	数	重量g		
F-9	IB 上面	シカ腕骨L・遠位骨端骨	1	5.2	マイマイ類		0.2	3	
c-66-11	IB 1回目	シカ中手骨片 焦げる	3	2.6					
		シカ肋骨片 焦げる	3	2.2					
		シカ部位不明	6	2.1					
c-66-20	IB 2回目	シカ上腕骨L・近位端(骨端欠)	1	2.9					
		シカ上腕骨片	1	5.6					
e-66-75	表土1回目	シカ肢骨片(部位不明)	1	2.1				1	
		シカ中手骨L 遠位端, 後面遠位部に解体痕, 折割られている。	1	30.5					
		シカ中手骨L 遠位骨端片	1	11.3					2
		シカ大腿骨R・遠位部片	1	3.9					
		ヒグマ下顎犬歯R	1	7.7					4

表V-16 出土遺物一覧

種類	時期	器種	部位	遺構	表土	IB包含層		攪乱	種類	時期	器種	遺構	表土	IB包含層		攪乱	種類	遺構	包含層		攪乱
						上面+1回目	2回目以下							上面+1回目	2回目以下				表土	OB+IB上面	
土器 (土師器) (須恵器) 陶器 土製品	Ib-4 Vc	深鉢	胴部	4	464	4	272	8	土器	Vc	石			1	1		金属製品	鉄鍋	2	4	
			底			12	1				1			1	1				1		1
	VII	深鉢	口縁部	4	464	76	28	16	土器	?	スクレイパー			1			鉄斧	1	3		
			胴部			196	111				?			1	1			1		1	1
			底			160	5				?			4	4			2		1	1
	(土師器) (須恵器)	不明	坏	明部	4	464	9	10	16	?	砥石			16			座金具	1	1		
				口縁部			5	2			?			1	1			1		1	
				底			16	2			?			1	1			1		1	
				体			279	6			?			1	1			1		1	
	陶器	VII	不明	明部	4	464	42	199	3	?	すり石片			1			種子	1	1		
口縁部				1			3	?			1			1	1			1			
土製品	VII	紡錘車	不明			2			?	たつき石						針	1	1			
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
土製品	VII	紡錘車	不明			2			?	たつき石						針	1	1			
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		
			?			1	1			1			1	1			1		1		

を及ぼした可能性がある。珪岩は異なる採取地点で一様な形態が選択された。

(4) 金属製品 (図V-15・27、図版V-10、表V-14)

金属製品は0黒層・I黒層上面から検出されている。鉄製品の遺存状態は低湿度より良好で、特に鑄造品はメタル部分の溶脱が極めて少ない。1は銅に銀の鍍金を施した刀装具、銀の鍍金部分は若干光沢を失っている。2は銅製キセル雁首、火皿と首部に補強帯がない古泉弘分類II B類(小泉1985年)にあたる。3は小刀(マキリ)、出土した時点では完形であった。4は鉄斧、刃部が欠失する。5は鉞、刃部は損耗して内弯気味になっている。6・7は鏝(かすがい)で、7は両端を欠失している。8・9・10は鉄鍋。8と10は近接して出土した。8は吊り耳鉄鍋である。(図版V-10)右横の写真はX線透過写真で黒点はメタル部分の溶脱を示している。9は内耳鉄鍋の破片の可能性がある。10は鉄鍋の脚部である。なお保存処理については、鉄製品はNAD-10を含浸し、他の金属製品はインクラックを塗布した。

(5) 動物遺存体 (表V-15、写真V-1)

金子浩昌氏の鑑定によれば次のとおりである。「1・2はエゾシカ(*Cervus nippon yesoensis*)中手骨2点で、いずれも左側の遠位端部であり、これらは火を受けていない。骨体部は人為的なうち割りの痕跡がみられ、さらに骨端に近い部分には、骨体をめぐる細切痕が着き、それらは筋肉とその靭帯の切断のためであったであろう。」

鑑定の結果より判断するとシカの骨は解体痕が付くものがあり、また被熱したものもあるので食物残滓として考えて良いであろう。

(6) ¹⁴C年代測定結果について

(鈴木 信)

KSU-2169	木炭	表土	F-1	60±80B, P,	(p 2・3 参照)
KSU-2170	炭化物	I黒層	IS-3	現代	(p 12・13 参照)

引用文献

- 1) 『開拓使事業報告 第2編』大蔵省(明治18年)北海道出版企画センター 復刻
- 2) 『苫小牧市史 資料編第1巻』、p 247
- 3) 北海道出版企画センター発行、p 434~435
- 4) 吉川弘文館発行、p 55~56
- 5) (『苫小牧市史 資料編第1巻』所収、p 293~294)
- 6) 串原正峯『夷諺俗話』寛政4年(1792年)(『日本庶民生活史料集成・4』所収、p 516)
東寧元禾眞『東海参譚』文化3年(1806年)(『苫小牧市史 資料編第1巻』所収、p 314)
林子平『三国通覧図説』天明5年(1785年)(『苫小牧市史 上巻)
- 7) 磯谷則吉『蝦夷道中記』享和元年(1808年)(『苫小牧市史 資料編第1巻』所収、p 312)
- 8) 草川伝次郎『西蝦夷日記』(『苫小牧市史 資料編第1巻』所収、p 322)
- 9) 『西蝦夷地高島日記』(『苫小牧市史 資料編第1巻』所収、p 333)
- 10) 『協和私役』(『苫小牧市史 資料編第1巻』所収、p 366)

参考文献

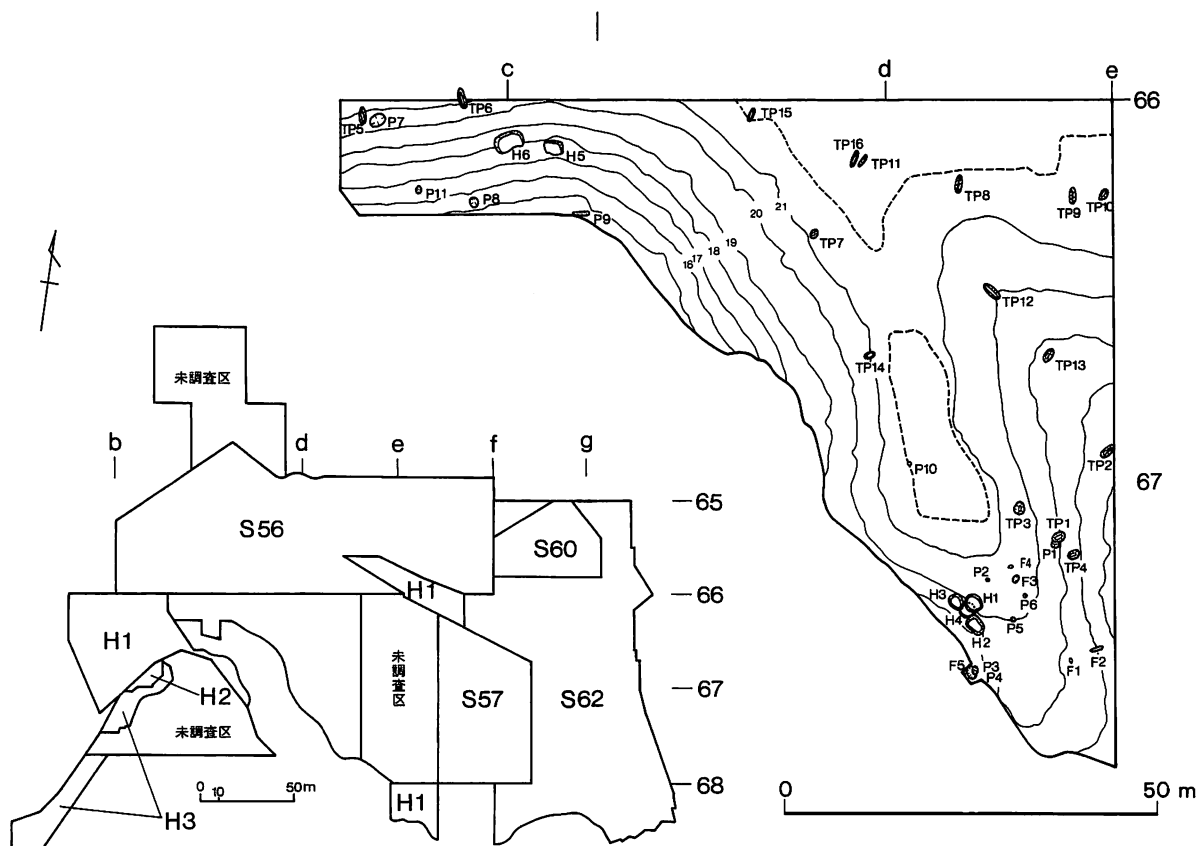
- 北海道埋蔵文化財センター (1981) 『美沢川流域の遺跡群』 V 北埋調報 7
 “ (1990) 『美沢川流域の遺跡群』 X III 北埋調報 62
 “ (1991) 『美沢川流域の遺跡群』 XIV 北埋調報 69
- 北海道(1937) 『新撰 北海道史 通説1』
 千歳市(1983) 『増補 千歳市史』
 恵庭市(1979) 『恵庭市史』
 北海道庁(1922) 『北海道道路誌』
 北海道新聞社(1979) 『北海道道路53話』
 古泉 弘(1985年) 『江戸-都立一橋高校地点発掘調査報告書』 都立一橋高校内発掘調査団

6 第II黒色土層の調査

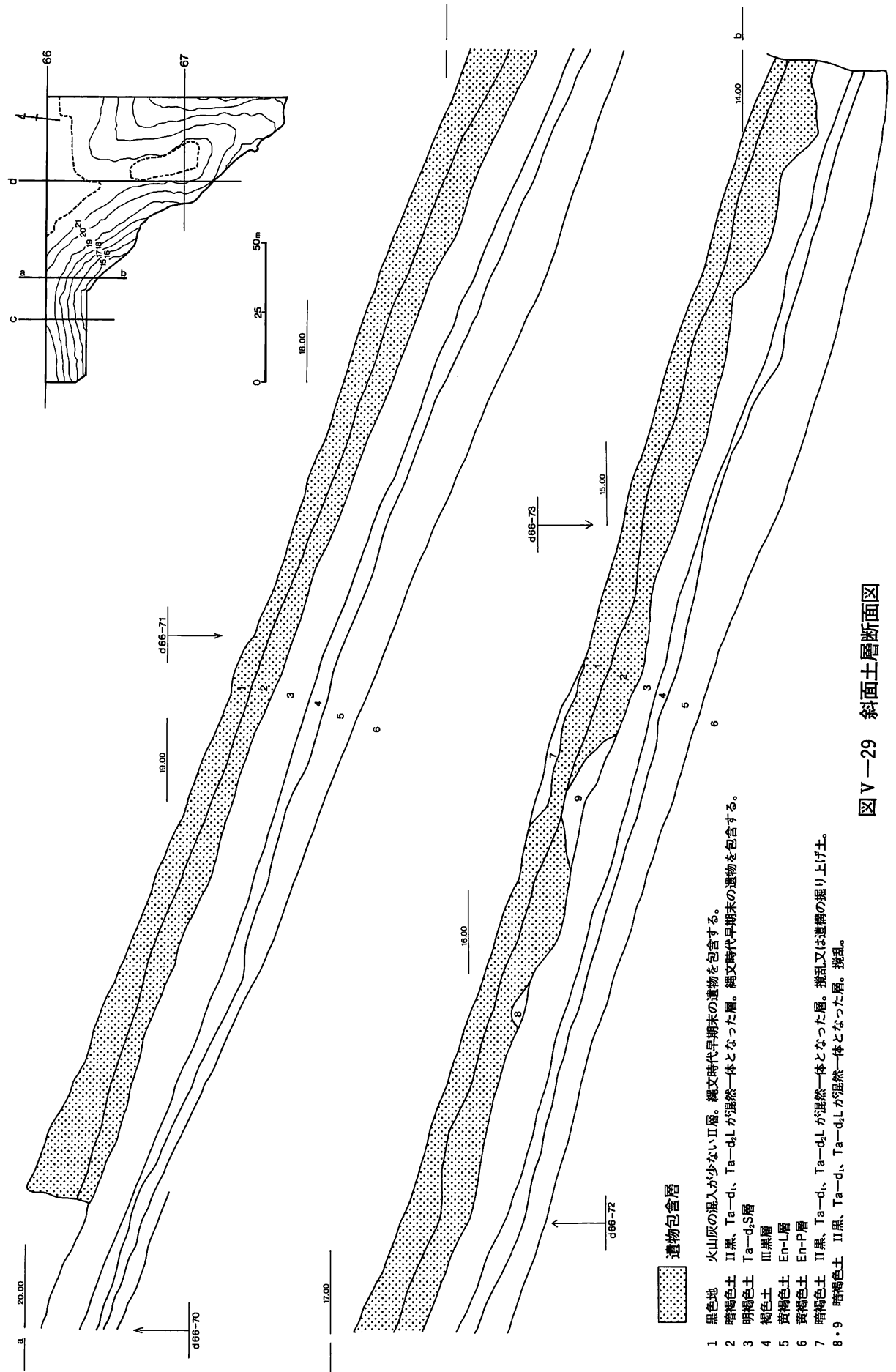
(1) 概要 (図V-28)

本年度の美々8遺跡II黒層は、調査面積4,000 m²である。確認された遺構は、住居跡6軒 (II H-1~6)、土壇11基 (II P-1~11)、Tピット16基 (II TP-1~16)、焼土5か所 (II F-1~5) で、II H-1~6 と II P-1~6・10 と II F-1~5 は縄文時代早期末の東釧路IV式土器 (I b-4) 期のものと考えられ、これ以外のものは時期不明である。Tピットは主に台地縁辺部から検出されている。遺物は総点数4,711点が出土した。土器2,936点のうちI群b-4類が2,881点、I群b-2類が1点、I群b-3類が49点、IV群c類が5点である。石器類は1,775点で、剝片石器は、石刃鏃、石鏃、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー類、楔形石器等が出土している。礫石器類は、石斧、たたき石、すり石、砥石、台石、石核、加工の施された礫片、石製品等が出土している。土器、石器とともに縄文時代早期末の東釧路IV式土器期のものが主体である。包含層出土の黒曜石製の石器について、水和層年代測定を行なった結果、B.P.9,700年 (±1,000) ~ B.P.17,600年 (±1,200) の年代が出ている (V章5-(4)参照)。

今年度の調査区の地形は、大きく平坦部分と斜面部分とに分けられ、II黒層の状態が異なる。前者は標準土層のII黒層で、後者は土質から次ぎの2枚の土層に分けられる。II黒層の上部に相当する火山灰をほとんど含まない微粒子の腐植土層 (1層) と、Ta-d₂の粒のはっきりしたスコリア (以下 Ta-d₂S)、Ta-d₂のローム状になったスコリア (以下 Ta-d₂L) Ta-d₁、II黒層相当の腐植土が混じりあった褐色土層 (2層) である (図V-29、図版V-11-2)。2層はTa-d₂層上に堆積し、これはTa-d₁層とII黒層の下部に相当する。2枚の土層の境界は、漸移的である。遺物は、1層からI群b-4類、IV群のもの、2層からはI群b-4類のものが斜面上方より流れ落ちた状態で出土する。遺物は2層中のも



図V-28 地形と遺構分布図



図V-29 斜面土層断面図

のが多い。このように台地平坦部分と異なる土層の形態は、縄文時代早期末の東釧路IV式期頃に地表面が安定せず、風、水、地滑りなどの営力で、土壌が下方に移動するような環境下で形成されたためと考えられる。1層は安定した環境下で形成された土層と考えられる。これらの土層堆積は、本遺跡の縄文時代早期から晩期にかけて、大きく二つの環境の変化を経ていることを示していると考えられ、似た現象は、美沢川流域の河川に面した他の斜面地形にも認められる（II-2-(1)参照）。

(2) II黒層の遺構とその遺物

①住居跡

II H-1～4 H は、縄文時代早期末の遺物や遺構が集中する調査区東側の舌状台地縁辺（標高 19～20 m）に近接して作られている。新旧関係は古い順にII H-4 → II H-1 である。II H-5・6 は調査区西側の急斜面中腹（標高 17.0～18.0 m）に隣接して作られている。II H-6 の床面からは東釧路IV式土器（I b-4）期が出土している。覆土の状態と位置関係から、ほぼ同じ時期と考えられる。

II H-1（図V-30、図版V-12）

位置 e-67-73 平面形 円形 長軸方向 N-56°-W

規模 2.39/2.07×2.20/1.86×0.19 m

特徴 II H-4 を切って掘り込んでいる小型の住居跡である。床面はII H-4 覆土と Ta-d₂層中に作られたフラットなもので、壁はそこから急に立ち上がっている。覆土は、Ta-d₁、Ta-d₂が混じったものが主体である。掘り込み面は、覆土にII黒腐植土が僅かに見られることから、Ta-d₁層上面にII黒が僅かに形成され始めた面と考えられる。床面に炉はなく、径5 mm 前後の炭化粒が散点的に見られる。径の小さな掘り込みが、壁際（HP-1）と中央（HP-2）に検出されている。

遺物 床面から黒曜石製のフレイク 6 点が出土している。

時期 縄文時代早期末の東釧路IV式土器（I b-4）期と考えられる。

II H-2（図V-30、図版V-12）

位置 e-67-73・74 平面形 隅丸長方形 長軸方向 N-50°-W

規模 2.65/2.16×1.86/1.36×0.31 m

特徴 II H-4 と重複する小型の住居跡である。II H-4 との新旧関係は不明である。床面は、Ta-d₂層中に作られたもので、凹凸が見られる。壁はそこから緩やかに立ち上がっている。覆土はII黒、Ta-d₁、Ta-d₂である。掘り込み面は覆土に混じるII黒腐植土の量が僅かであることから、Ta-d₁層上面にII黒が形成され始めた面と考えられる。床面には、炉、柱穴が認められず、径5 mm 前後の炭化粒が散点的に認められる。

遺物 出土していない。

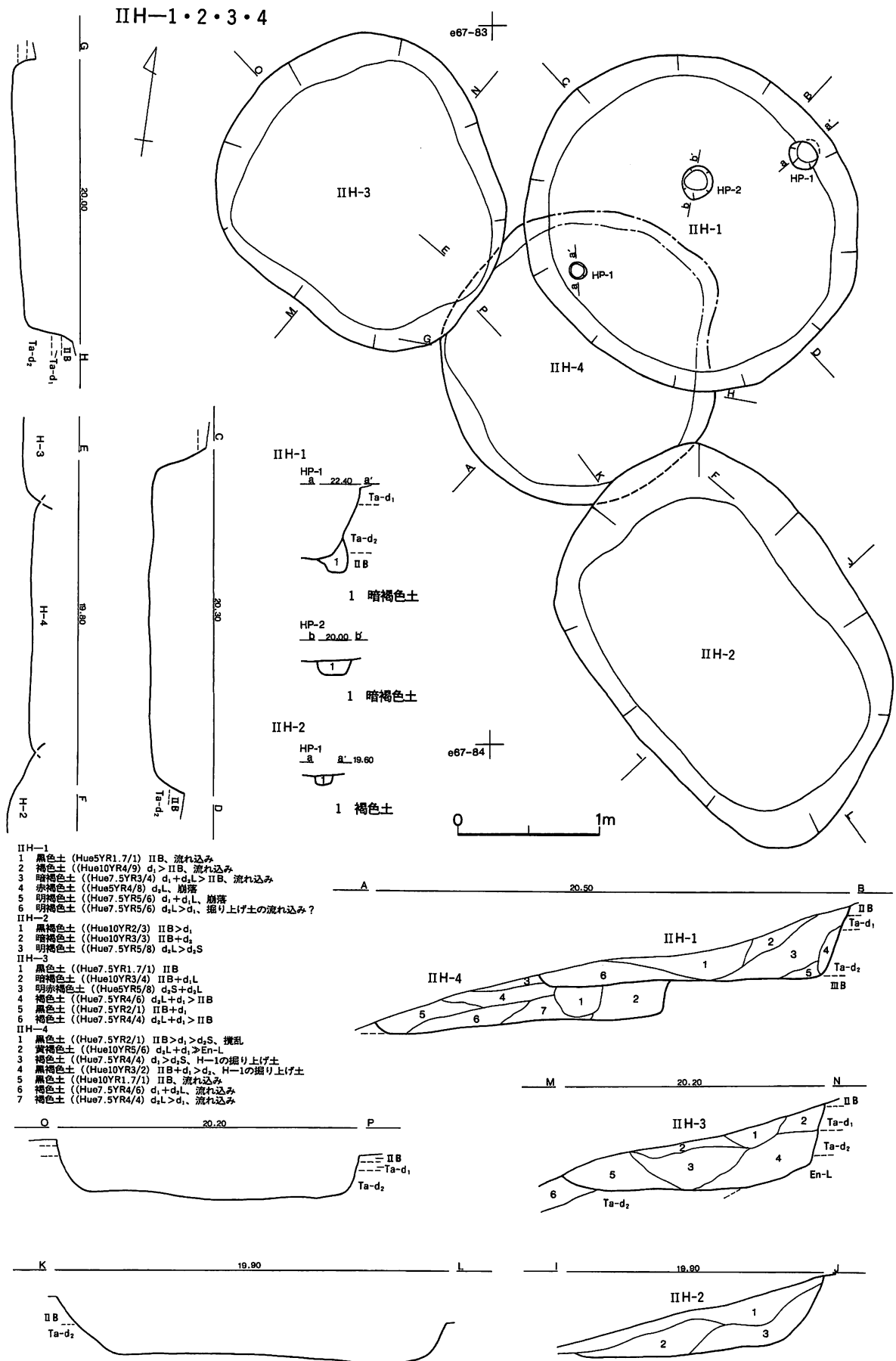
時期 縄文時代早期末の東釧路IV式土器（I b-4）期と考えられる。

II H-3（図V-30、図版V-12）

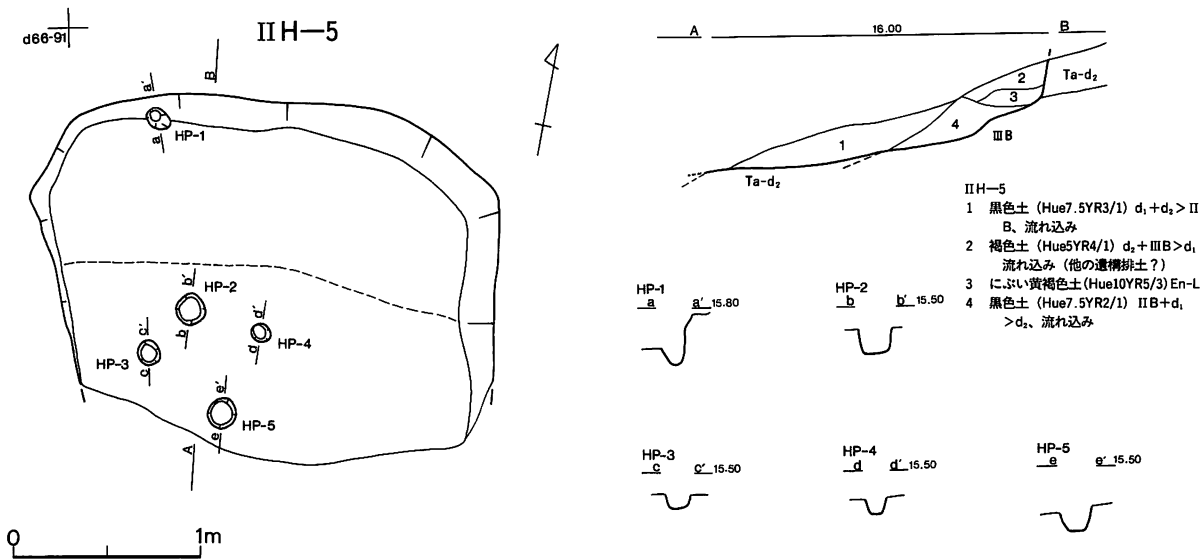
位置 e-67-73・83 平面形 不整円形 長軸方向 N-57°-W

規模 2.08/1.85×1.86/1.54×0.36 m

特徴 II H-4 と重複する小型の住居跡である。II H-4 との新旧関係は不明である。床面は、Ta-d₂層～EnL層中に深く掘り込んだもので、僅かに凹凸が見られる。壁はそこから急に立ち上がっている。覆土は、II黒、Ta-d₁、Ta-d₂が主体となるもので、掘り込み面は覆土中にII黒腐植土の量の少ないことから、Ta-d₁層上面にII黒が僅かに形成され始めた面と考えられる。床面には炉、柱穴が認められず、径5 mm 前後の炭化粒が散点的にみられる。



図V-30 IIH-1・2・3・4



図V-31 IIH-5

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末の東釧路IV式土器 (I b-4) 期と考えられる。

II H-4 (図V-30、図版V-12)

位置 e-67-73・83 平面形 円形 長軸方向 N-38°-E

規模 2.06/1.95 × (1.92/1.79) × 0.30 m

特徴 II H-1 に覆土と壁の上部を切られている小型の住居跡である。床面は、Ta-d₂層～En-L層中に作られた浅いもので、壁はそこから急に立ち上がっている。覆土はTa-d₁、Ta-d₂が主体となるもので、掘り込み面は覆土中にII黒腐植土の量がすくないことから、Ta-d₁層上面にII黒が僅かに形成された面と考える。床面には、炉が認められず、径5mm前後の炭化粒が散点的に見られる。壁よりの床面には径の小さな掘り込みがある (HP-1)。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末の東釧路IV式土器 (I b-4) 期と考えられる。

II H-5 (図V-31)

位置 d-66-81・91 平面形 不整隅丸長方形 長軸方向 N-88°-E

規模 2.36/2.15 × 1.89/1.75 × 0.17 m

特徴 調査区西側の急斜面中腹 (標高17.0~18.0m) で検出された小型の住居跡で、西側やや上方にはII H-6が隣接している。床面は、Ta-d₂層からIII黒層に作られており、斜面上側の壁は急に立ち上がる。覆土は、II黒、Ta-d₁、Ta-d₂、III黒、En-Lが混じるもので、II H-6の覆土と類似のものである。確認面はTa-d₂層上面で、掘り込み面は、斜面堆積土層の2層中と考えられる。床面には炉が認められず、炭化粒が散点的に認められる。また、径の小さな掘り込み5ヶ所を検出した (HP-1~5)。いずれも、III黒に似た褐色の腐植土が入っている。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末の東釧路IV式土器 (I b-4) 期と考えられる。

II H-6 (図V-32)

位置 d-66-90・91、c-66-00・01 平面形 半円形? 長軸方向 N-84°-E

規模 3.83/3.49 × 2.36/2.00 × 0.41 m

特徴 調査区西側の急斜面中腹（標高17.0～18.0 m）で検出された比較的大型の住居跡である。東側のやや下方には、II H-5が隣接して作られている。床面は、Ta-d₂層、III黒層、En-L層に深く掘り込まれたフラットなものである。壁は斜面上側で急に立ち上がるもので、下側の壁は認められなかった。覆土はII黒、Ta-d₁、Ta-d₂、III黒、En-Lが混じるもので、II H-5の覆土と類似のものである。確認面はTa-d₂層上面で、掘り込み面は斜面堆積土層の2層中と考えられる。炉はなかったが、床面には炭化物が点在している。柱穴は径の小さなものが計26本検出された。これらには、中央にむかって傾斜するものと垂直に入っているものがある。床面を薄く被う覆土10層はIII黒層類似の締めりのある腐植土層で、貼り床と考えられる。遺物と炭化物はこの層の上から出土する。

遺物 床面から1～6が、覆土から7が出土している。すべて縄文時代早期末の東釧路IV式土器（I b-4）期である。1と6、2と5、3と4はそれぞれ同一個体である。1は、口唇断面が薄く、先端が丸みを帯びた角形のもので、口縁の短縄文もしくは縄端圧痕文の間には、I群b-1類のなごりと考えられる微隆起線が認められる。胴部の器面には、条の細い原体による撚糸文風の縄文が施されている。6はその胴部で、同じ縄文が施されている。胎土中に橄欖石を含み、砂や礫は認められない。焼成は良好で、非常に硬質に焼き上げられている。2・5は器壁が薄く、5の器面には条の細い自縄自巻の原体による縄文が施されている。内面には炭化物の付着が見られる。焼成は良好で、非常に硬質に焼き上げられている。3・4は器壁が薄く、器面には短縄文もしくは上端圧痕文と撚糸文風の縄文が施されている。胎土は砂を多く含みひどく脆い。7は覆土上部から出土したもので、斜面上方の包含層のものと接合した。口唇断面は平坦で、器壁は比較的小さい。器面には条の太い原体による羽状縄文が施されている。胎土中には砂、礫が多く含まれており、石英や橄欖石等も多く認められる。胎土は硬質であるが、器面に剝落が見られる。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器（I b-4）期。

②土壌

縄文時代早期と時期不明のものに分けられる。前者は舌状台地に集中し、後者は調査区東側の急斜面に検出される。いずれも性格不明の土壌である。

1) 縄文時代早期の土壌

II P-1（図V-33）

位置 e-67-51 **平面形** 円形 **長軸方向** N-21°-E

規模 (1.05/0.88)×1.05/0.76×0.39 m

特徴 舌状台地の東側斜面中腹（標高約19.0 m）に検出された、II TP-1に切られる土壌である。壇底は斜面に沿って傾斜するものでEn-L層に作られており、壁はそこから急に立ち上がる。覆土はII黒、Ta-d₂、En-Lの混じたもので、埋め戻し土である。掘り込み面は、覆土に混じるII黒腐植土の量が少ないことから、II黒層が僅かに形成され始めた面と考えられる。

遺物 出土していない。

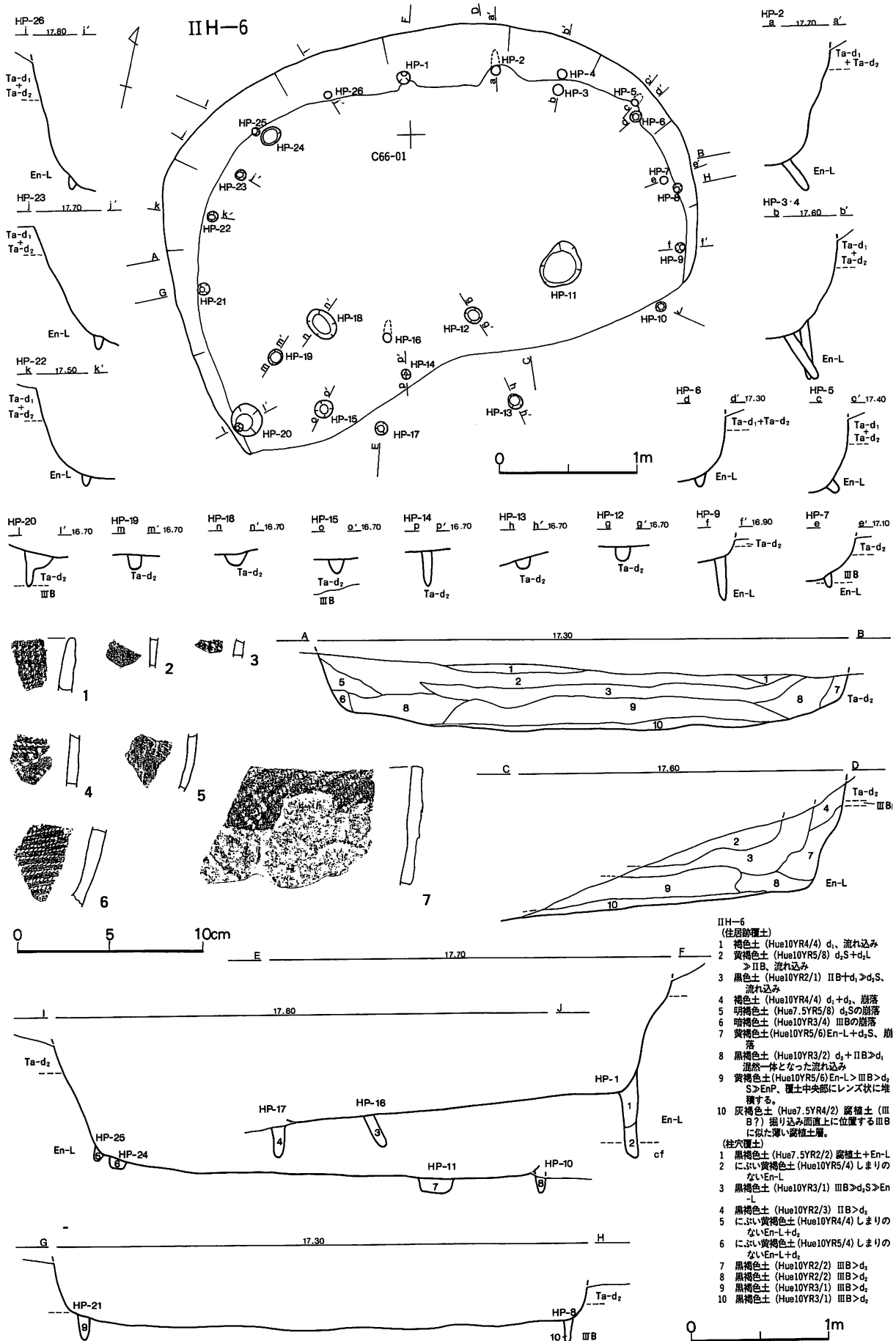
時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器（I b-4）期と考えられる。

II P-2（図V-33）

位置 e-67-72 **平面形** 不整楕円形 **長軸方向** N-83°-E

規模 0.63/0.35×0.54/0.35×0.26 m

特徴 舌状台地平坦部で検出された小型の土壌である。壇底はIII黒層に作られており、壁は急に立



図V-32 IIH-6

ち上がる。覆土はII黒、Ta-d₁、Ta-d₂の混じったもので、埋め戻し土である。掘り込み面は、覆土に混じるII黒腐植土の量が少ないことから、II黒層が僅かに形成され始めた面と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器（I b-4）期と考えられる。

II P-3（図V-33）

位置 e-67-74・75 平面形 楕円形？ 長軸方向 N-6°-W

規模 (1.29/1.06)×(0.82/0.55)×0.36 m

特徴 舌状台地縁辺の南西向き緩斜面（標高約19.0 m）で検出された、小型の土壇である。II P-4に切られている。壇底はIII黒層に作られており、壁は急に立ち上がる。覆土は、Ta-d₁、Ta-d₂が主体の流れ込みであるし。掘り込み面は、Ta-d₁層上面と思われる。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器（I b-4）期と考えられる。

II P-4（図V-33）

位置 e-67-74・75 平面形 楕円形 長軸方向 N-28°-W

規模 1.84/1.50×1.24/0.83×0.28 m

特徴 舌上台地縁辺の南西向き緩斜面（標高約19.0 m）で検出された土壇である。II P-3を切っている。壇底はIII黒層に作られており、壁は急に立ち上がる。覆土はTa-d₁、Ta-d₂が主体の流れ込みで、掘り込み面はTa-d₁層上面と思われる。覆土上面にはII F-5がある。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器（I b-4）期と考えられる。

II P-5（図V-33）

位置 e-67-63 平面形 円形 長軸方向 N-51°-E

規模 0.61/0.45×0.59/0.35×0.15 m

特徴 舌状台地の平坦部で検出された小型の土壇である。壇底はTa-d₂層中に作られたもので、壁は緩やかに立ち上がる。覆土はTa-d₁、Ta-d₂の流れ込みである。掘り込み面はTa-d₁層上面と考えられる。周囲の包含層からは東釧路IV式土器が多く出土している。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器（I b-4）期と考えられる。

II P-6（図V-33）

位置 e-67-63 平面形 円形 長軸方向 N-16°-W

規模 0.70/0.53×0.65/0.49×0.15 m

特徴 舌状台地の平坦部で検出された小型の土壇である。壇底はTa-d₂層中に作られた浅いもので、壁は緩やかに立ち上がる。覆土はII黒、Ta-d₁、Ta-d₂の流れ込みである。掘り込み面は、覆土に混じるII黒腐植土の量が少ないことから、II黒層が僅かに形成され始めた面と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器（I b-4）期と考えられる。

II P-10（図V-33）

位置 e-66-99 平面形 円形 長軸方向 N-42°-E

規模 0.63/0.51×0.57/0.44×0.09 m

特徴 舌状台地の平坦部で検出された小型の土壇である。壇底はTa-d₂層中に作られた浅いもので、

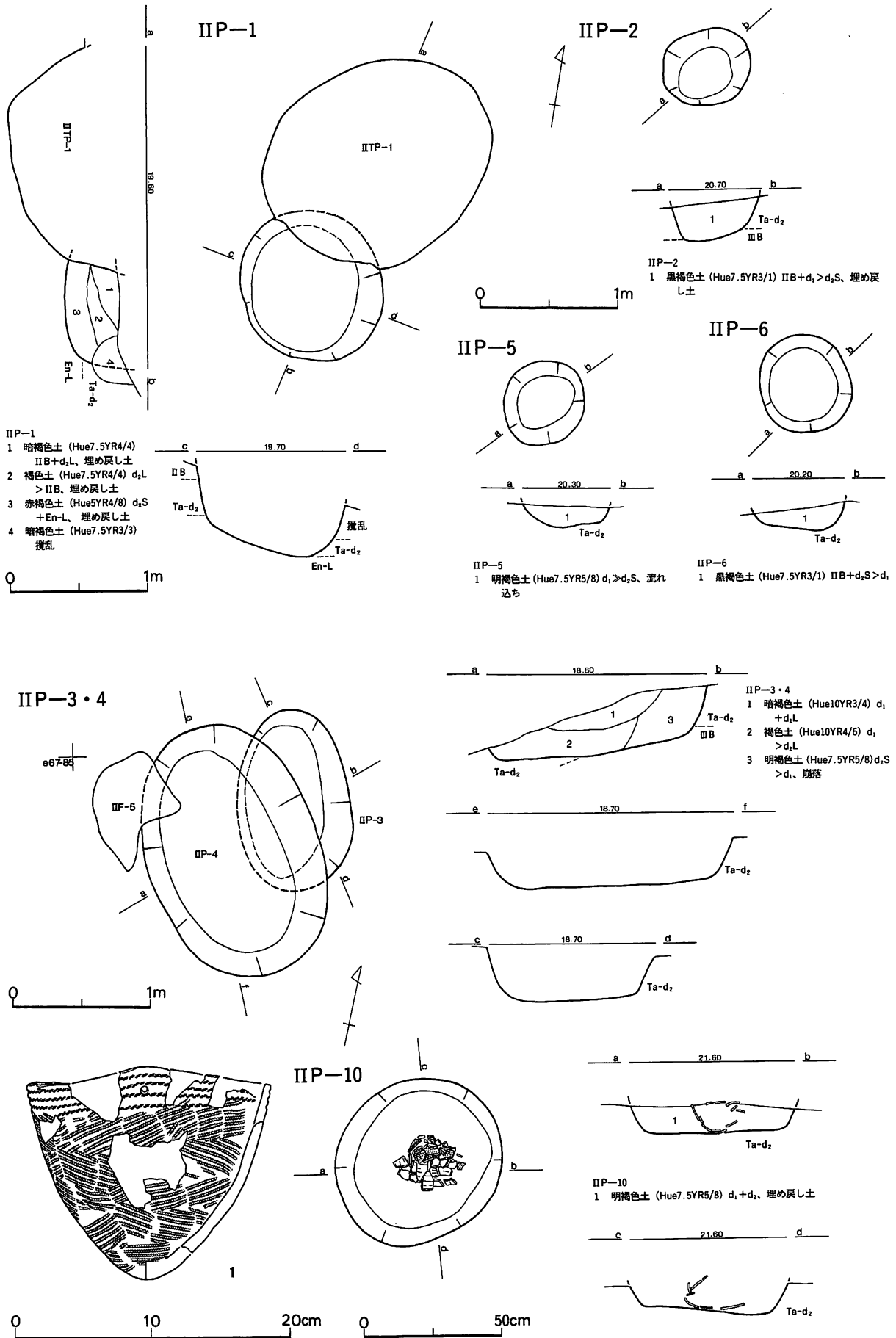


図 V-33 IIP-1~6・10

壁は急に立ち上がる。覆土はTa-d₁、Ta-d₂が混じったもので、埋め戻し土である。掘り込み面は、覆土にII黒腐植土が混じらないことからTa-d₁層上面と考えられる。

遺物 壙底からは縄文時代早期末の東釧路IV式土器(I b-4)期の完形土器(1)が、横になった状態で検出された。丸底の小型の鉢形土器である。口縁に三ヶ所の低い波頂部を持ち、その内の一つは他より高く(正面)、頂部より約1.5 cm下に径5 mmの貫通穴が穿たれている。口唇断面は角形で、口縁部には横環する3~4条の一段無節Rの原体による縄線文が施されている。胴部全面には、一段無節Lの原体を2本並列して軸に巻いた撚糸文で、菱型を構成する文様を施している。口縁部と内面の底には、炭化物が付着している。胎土中には長石が見られ、僅かに繊維が混入されている。

時期 縄文時代早期末東釧路IV式土器(I b-4)期。

2) 時期不明の土壙

II P-7 (図V-34)

位置 c-66-30 **平面形** 不整楕円形 **長軸方向** N-66°-E

規模 2.17/2.01×1.56/1.35×0.48 m

特徴 壙底はII黒層からEn-L層に作られ、壁は急に立ち上がる。覆土はII黒、Ta-d₁、Ta-d₂、III黒である。掘り込み面は斜面堆積土層の1層である。

遺物 出土していない。

II P-8 (図V-34)

位置 c-66-02・12 **平面形** 不整楕円形 **長軸方向** N-34°-W

規模 1.30/1.13×1.18/0.95×0.20 m

特徴 壙底はIII黒層からEn-L層にかけて作られ、壁は斜面上側で急に立ち上がり、下側で緩やかに立ち上がる。覆土はII黒、Ta-d₁、Ta-d₂、III黒、En-Lである。掘り込み面は斜面堆積土層の1層から2層と考えられる。

遺物 出土していない。

II P-9 (図V-34)

位置 d-66-72・73・82・83 **平面形** 溝形 **長軸方向** N-81°-E

規模 2.46/2.11×0.54/0.13×0.65 m

特徴 コンタに平行して作られた土壙である。壙底はIII黒層に作られ、壁は急に立ち上がる。覆土はII黒、Ta-d₁、Ta-d₂である。掘り込み面は斜面堆積土層の1層と考えられる。

遺物 出土していない。

II P-11 (図V-34)

位置 c-66-11 **平面形** 不整楕円形 **長軸方向** N-10°-W

規模 1.04/0.54×0.84/0.50×0.42 m

特徴 壙底は、Ta-d₂層に作られ、壁は斜面上側で緩やかに立ち上がり、下側で急に立ち上がる。覆土はII黒、Ta-d₁、Ta-d₂である。掘り込み面は斜面堆積土層の1層と考えられる。

遺物 出土していない。

(皆川 洋一)

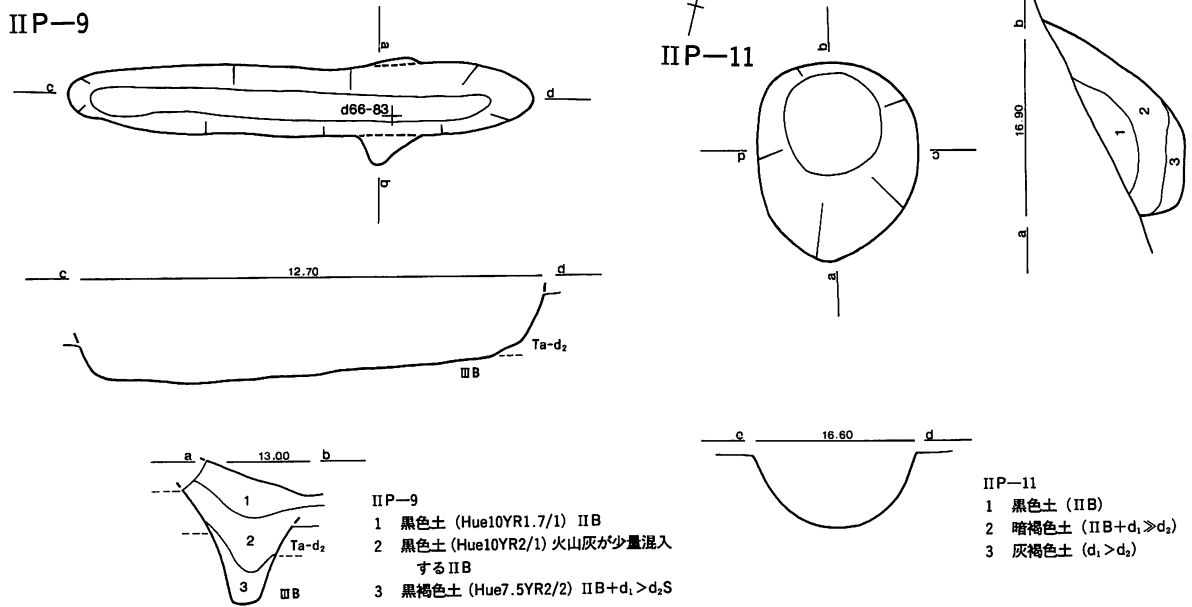
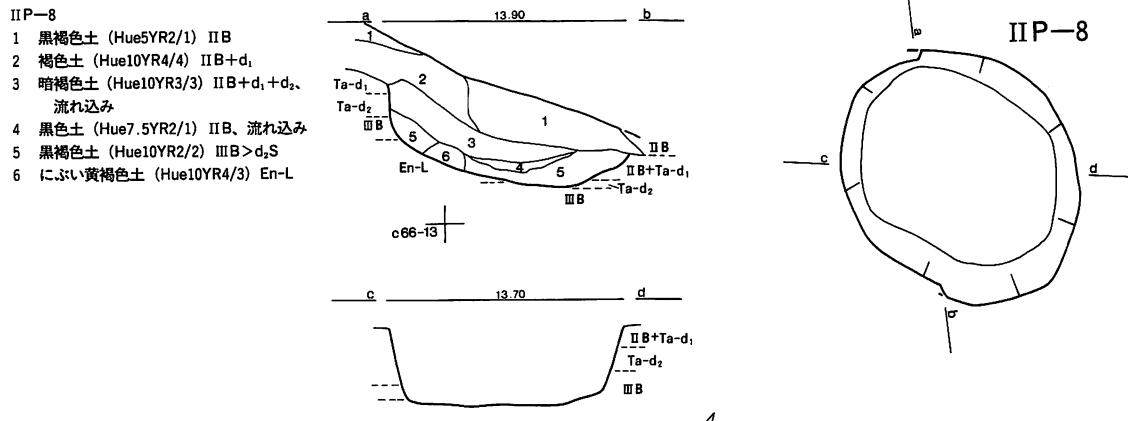
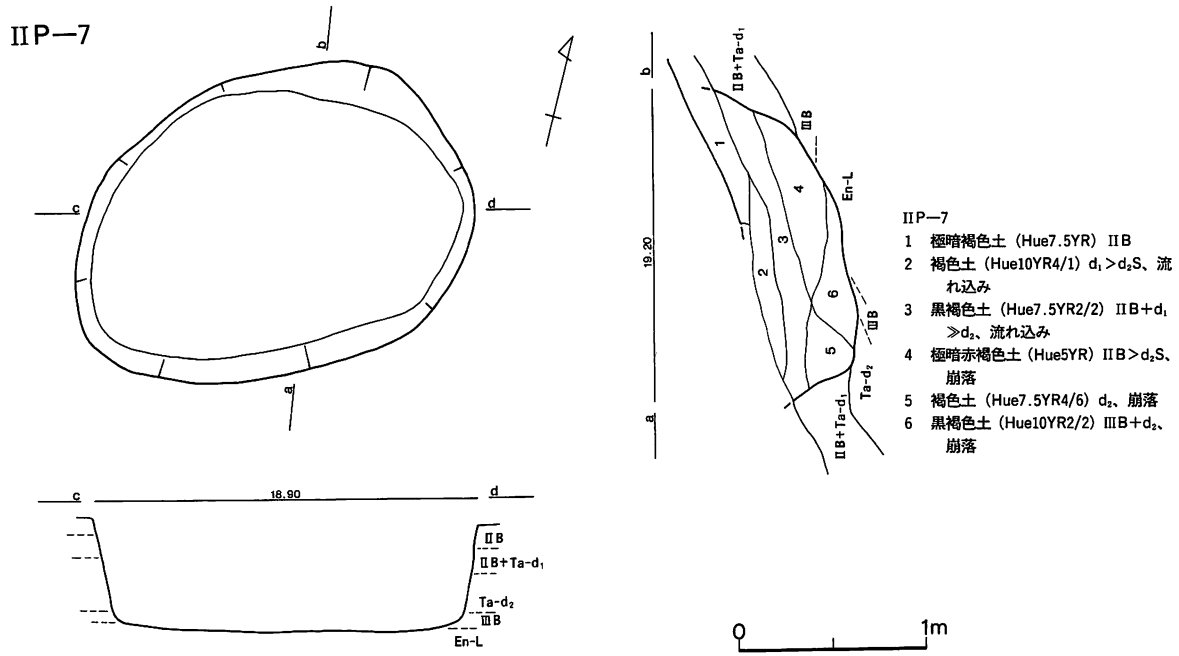


図 V-34 II P-7~9・11

③ Tピット

Tピットは16基が検出された。このうちII TP-6は昭和56年度のP-17と同一のもので、今年度は残っていた約2/3を調査した。

これらは平面形から、細長い溝状のもの11基と小判形のもの5基とに分けられる。底面の杭穴の有無についてみると、全社はすべて杭穴のないもので、後者はすべて杭穴を有し、1個もつものが4基で、2個もつものが1基である。

昭和56年度および平成元年度の調査結果とあわせて、その分布をみると大きく6つの列(A~F)と列に属さない2基とに分けられそうである(図V-35)。以下、列ごとに分けて記す。

A列(II TP-5・6・8・9・15・16)

台地縁辺部南斜面から台地上を横断する形で東西に列をなしているもの。形態は細い溝状の構造で、底面長軸の平均が1.98mで各列の平均では最も大型のものである。各遺構間の平均は10.7mではほぼ等間隔に並んでいる。

II TP-5(図V-36)

位置 c-66-30

規模 2.22/2.22×0.94/0.19×1.45m 長軸方向 N-10°-W

特徴 Ta-d₂層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。確認面の形状は整った長楕円形を呈し、遺構の長軸は等高線に直交する。壁は大きく崩れており短軸断面はV字に近い形を呈する。長軸方向の壁はオーバーハングしている。底面はEn-P層を約50cmほど掘り下げて作られており、底面はほぼ水平である。

II TP-6(図V-36)

位置 c-65-19・c-66-10

規模 2.78/2.24×0.85/0.32×1.27m 長軸方向 N-21°-W

特徴 昭和56年度の調査で北西部の約1/3が調査されている(P-17)。II TP-5との距離は13.0m離れている。長軸の谷側の壁がややオーバーハングする。床面の幅は約20cmと狭く、平坦で水平である。

II TP-8(図V-37)

位置 e-66-72・82

規模 2.13/1.77×0.84/0.47×1.21m 長軸方向 N-13°-E

特徴 Ta-d₂層上面で確認した。II TP-16とII TP-9との距離はそれぞれ14.1mと14.8mである。En-P層を約50cm掘り下げて底面としており、平坦でほぼ水平である。底面短軸の長さが1.77mでA列の中では最も短い。長軸方向の中央部の両壁がオーバーハングしている。

II TP-9(図V-37)

位置 e-66-42・52

規模 2.14/1.95×0.83/0.29×1.32m 長軸方向 N-7°-E

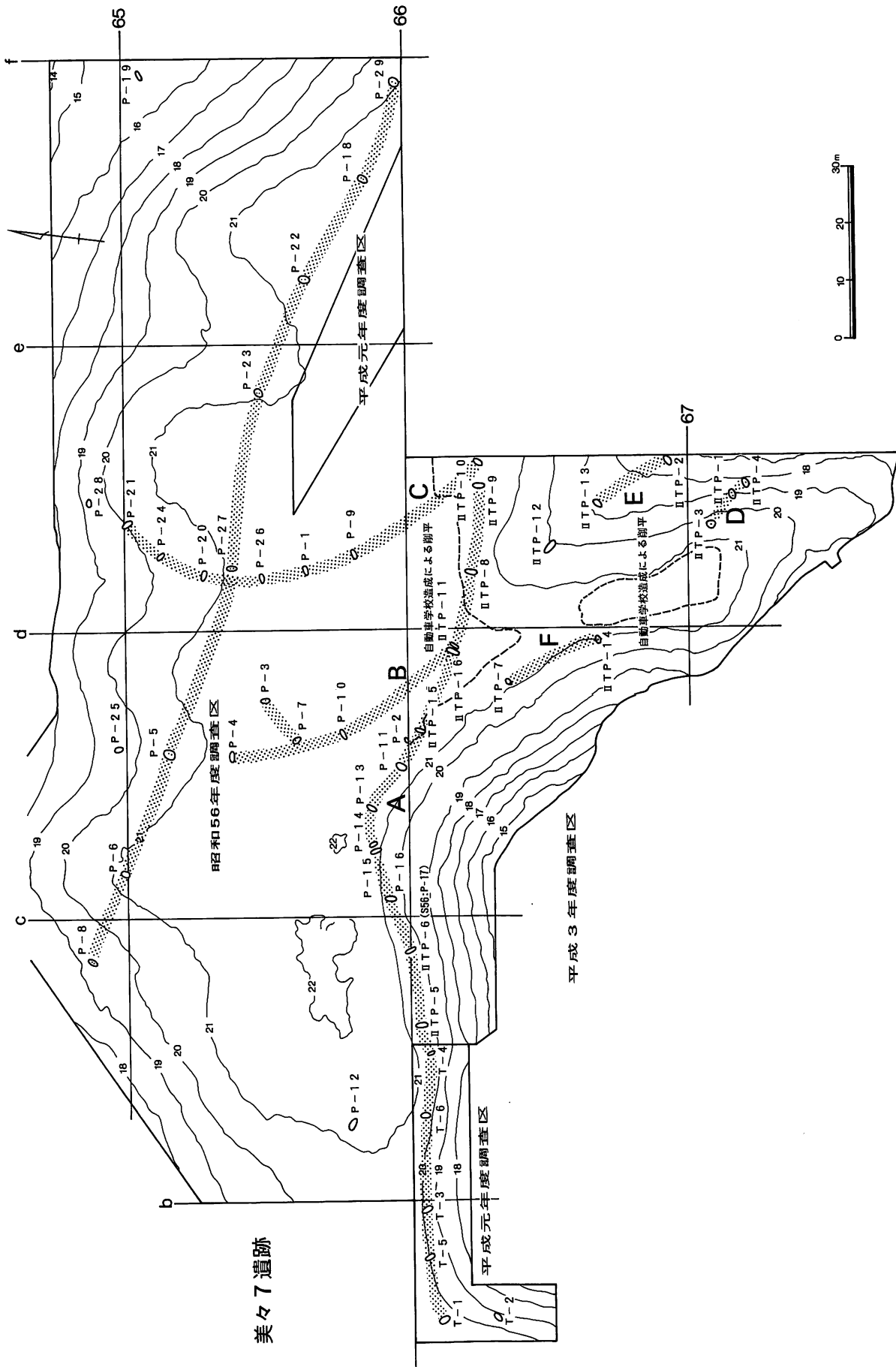
特徴 底面は75cmほどEn-P層を深く掘り込んでおり、やや起伏がある。壁はIII黒層までほぼ垂直に立ち上がる。遺構長軸に対して底面の長軸角が若干西側にずれている。

遺物は、器面に羽状縄文を施したI b-4類土器が1点(1)出土した(図V-37、図版V-16)。

II TP-15(図V-38)

位置 d-66-30

規模 (1.94)/1.90×(0.61)/0.22×(1.08)m 長軸方向 N-28°-E



図V-35 美々8遺跡Tピット配列図

特徴 調査区北側の台地縁辺部の平坦面に位置し、南へ続く尾根筋の付け根にあたる。En-L層上面により上の層は、自動車学校造成による削平で失われており、En-L層上面でII黒層およびTa-d₂層の落ち込みとして確認された。長軸方向南西側がややオーバーハングする。

II TP-16 (図V-38)

位置 d-66-01

規模 (2.04)/1.81×(0.58)/0.22×(1.10)m 長軸方向 N-29°-E

特徴 II TP-15と同様にEn-L層上面より上の層は自動車学校造成のために削平されている。II TP-15との距離は14.2mである。底面の幅は22cmで、かなり細い溝状のタイプである。

B列 (II TP-11)

昭和56年度調査区のP-4とP-10から続く列。調査区北側に広がる台地上の平坦面をやや湾曲する形で列をなしている。形態は細長い溝状で、A列と同じタイプであるが、規模はやや小さく、また、遺構間の平均距離は22.3mでA列のほぼ倍である。

II TP-11 (図V-38、図版V-16)

位置 d-66-01

規模 (1.66)/1.51×(0.46)/0.21×(0.97)m 長軸方向 N-44°-E

特徴 II TP-15・16と同様にEn-L層上面より上は削平されている。長軸方向の両壁がややオーバーハングする。

C列 (II TP-10)

調査区北側の台地上を弧状に連なる一群で、形態は細い溝上タイプ、規模はほぼB列と同様である。また、遺構長軸が等高線と直交する。

II TP-10 (図V-39)

位置 e-66-42

規模 1.84/1.55×0.94/0.29×1.26m 長軸方向 N-55°-E

特徴 Ta-d₁層上面で確認した。底面はEn-P層を50cmほど掘り込まれて作られており、短軸方向の壁はIII黒層までほぼ垂直に立ち上がる。上部は崩落により開いており、短軸断面はY字形を呈する。遺物はI b-4類の土器片3点(1・2・3)と、砂岩製のたき石(4)が1点出土している(図V-39、図版V-16)。

D列 (II TP-3・4)

調査区南端部尾根筋の東谷壁斜面に沿って並ぶ列。形態は小判形で底面に杭穴を1つ持つタイプ。II TP-3・4のほぼ中間に平面小判形のII TP-1が存在するが、底面に杭穴を2個もち、その深さもD列の約1/3程度のもので形態が違っていると判断し、単独扱いとした。

II TP-3 (図V-39、図版V-16)

位置 e-67-20

規模 1.71/0.94×1.30/0.36×1.27m 長軸方向 N-18°-E

特徴 II黒層上面で、浅い円形の凹みとして確認し、調査の結果Tピットであることが判明した。平面形は楕円形を呈するが、崩落により不整形になっている。底面の杭穴は1個で、径9cm深さ29cmである。

II TP-4 (図V-39)

位置 e-67-01・02・11・12

規模 1.69/1.11×1.24/0.52×1.04m 長軸方向 N-73°-E

特徴 II TP-3 との距離は9.6 m 離れており、規模・形態ともに非常に似通っている。長軸南西側の壁はややオーバーハングしており、底面には杭穴が1個あり、大きさは径11 cm 深さ28 cm である。

E 列 (II TP-2・13)

調査区東端の谷筋に沿う一群。遺構間の距離は14.2 m で、形態は細長い溝状タイプ。長軸は等高線とほぼ平行である。

II TP-2 (図V-40)

位置 e-66-49

規模 2.13/1.85×1.11/0.45×1.60 m 長軸方向 N-58°-E

特徴 Ta-d₂層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。確認面の形状は整った長楕円形を呈し、底面は平坦で長軸が遺構の南東側にやや偏っている。

遺物は珪質頁岩製のつまみ付きナイフ(1)が1点出土している(図V-40、図版V-16)。

II TP-13 (図V-40)

位置 e-66-56

規模 2.04/1.75×1.07/0.3×1.44 m 長軸方向 N-41°-E

特徴 壁はIII黒層付近まで垂直に立ち上がり、上部は崩落により開口している。底面はほぼ平坦で、平面形は中央部がややくびれる形である。

F 列 (II TP-7・14)

調査区南西側の台地縁辺部に列をなす。形態は小判で杭穴を1個もつ一群。標高21 m ラインに沿って位置しており、等高線は遺構長軸と直交する。

II TP-7 (図V-41)

位置 d-66-13

規模 1.37/0.82×0.99/0.54×1.28 m 長軸方向 N-66°-E

特徴 平面形は小判形で底面には杭穴が1個あり、その大きさは径7 cm 深さ18 cm である。

II TP-14 (図V-41)

位置 d-66-06

規模 1.20/1.16×0.95/0.51×1.02 m 長軸方向 N-71°-E

特徴 II TP-7 との距離は17.2 m。長軸両端の壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面には、杭穴が1個あり大きさは径6 cm 深さ18 cm である。

列に属さないもの (II TP-1・12)

II TP-1 (図V-41、図版V-14)

位置 e-66-11

規模 1.72/1.23×1.42/0.68×0.60 m 長軸方向 N-64°-E

特徴 II黒層上面で円形の凹地として確認し調査した。平面形はやや円形に近い小判形を呈し、底面軸線上に杭穴を2個もっている。杭穴の大きさは、北東側が4 cm 深さ8 cm、南東側が径4 cm 深さ8 cm の比較的小型のものである。底面は平坦だが、傾斜は斜面とほぼ等しく構築されている。また、II TP-1 は早期の土壌P-1を切っている。

II TP-12 (図V-42、図版V-15)

位置 e-66-74・75・76

規模 2.78/2.80×1.03/0.30×1.69 m 長軸方向 N-55°-W

特徴 II黒層上面で浅い凹みを認め、トレンチを入れてTa-d₁層上面で確認した。平面形は細い溝

状で長軸方向は等高線と直交する。底面の長軸の長さが2.80 mで今回調査したピットの中では最大である。底面は中央部は平坦で壁際でやや浅くなる。長軸断面で底面の先端が尖っているものが特徴的である。また、Tピット北側の、II TP-12のものと思われる掘り上げ土が確認された。範囲は4.0×4.0 mで、En-LにTa-d₂が少量混じる土である。

(村田 大)

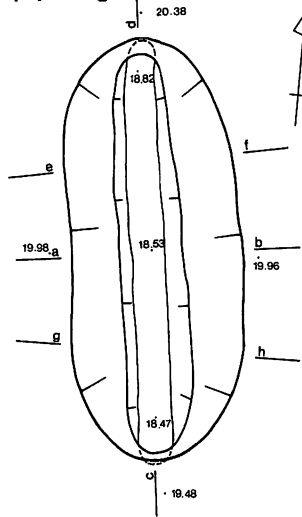
表V-17 Tピット一覧

遺構番号	位置	列	規模 (m)			底面 長幅比	長軸方向	備考 規模(cm)
			確認面	底面	深さ			
II TP-1	e-67-11	単独	1.72×1.42	1.23×0.68	0.60	1.81	N-64°-E	杭穴2(φ4×7・φ4×8)
II TP-2	e-66-49	E	2.13×1.11	1.85×0.45	1.60	4.11	N-58°-E	つまみ付ナイフ1点
II TP-3	e-67-20	D	1.71×1.30	0.94×0.36	1.27	2.61	N-18°-E	杭穴1(φ9×29)
II TP-4	e-67-01・02・11・12	D	1.69×1.24	1.11×0.52	1.04	2.13	N-73°-E	杭穴1(φ11×28)
II TP-5	c-66-30	A	2.22×0.94	2.22×0.19	1.45	11.36	N-10°-W	
II TP-6	c-65-19・c-66-10	A	2.78×0.85	2.24×0.32	1.27	7.00	N-21°-W	
II TP-7	d-66-13	F	1.37×0.99	0.82×0.54	1.28	1.52	N-66°-E	杭穴1(φ7×18)
II TP-8	e-66-72・82	A	2.13×0.84	1.77×0.47	1.21	3.77	N-13°-E	
II TP-9	e-66-42・52	A	2.14×0.83	1.95×0.29	1.32	6.72	N-7°-E	Ib-4類土器1点
II TP-10	e-66-42	C	1.84×0.94	1.55×0.29	1.26	5.34	N-55°-E	Ib-4類土器3点、たたき石1点
II TP-11	d-66-01	B	(1.66×0.46)	1.51×0.21	0.97	7.19	N-44°-E	
II TP-12	e-66-74・75・76	単独	2.78×1.03	2.80×0.30	1.69	9.33	N-55°-W	
II TP-13	e-66-56	E	2.04×1.07	1.75×0.31	1.44	5.65	N-41°-E	
II TP-14	d-66-06	F	1.20×0.95	1.16×0.51	1.02	2.27	N-71°-E	杭穴1(φ6×18)
II TP-15	d-66-30	A	(1.94×0.61)	1.90×0.22	1.08	8.64	N-28°-E	
II TP-16	d-66-01	A	(2.04×0.58)	1.81×0.22	1.10	8.23	N-29°-E	

表V-18 Tピット列一覧

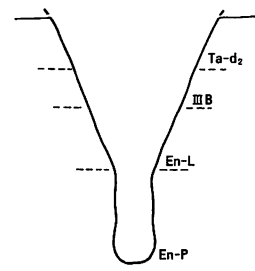
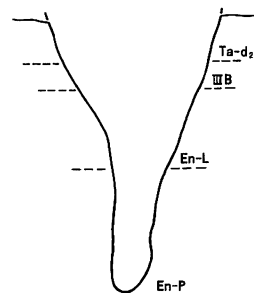
各列所属のTピット番号	確認面	底面	深さ	底面長幅比	備考
平成3年度調査区平均(単独のTP-1・12含む)	[1.98×1.04]	1.66×0.37	[1.27]	5.50	[]内、削平されたII TP-11・15・16を除く
A列(II TP-5・6・8・9・15・16)	[2.32×0.87]	1.98×0.29	[1.31]	7.67	[]内、削平されたII TP-15・16を除く
昭和56年度(P-11・13・14・15・16)	2.10×0.73	1.76×0.21	1.47	8.38	
平成元年度(T-1・3・4・5・6)	2.33×1.05	1.82×0.29	1.97	6.28	
A列総平均	2.24×0.89	1.86×0.26	1.60	7.15	
B列(II TP-11)	(1.66×0.46)	1.51×0.21	(0.97)	7.19	II TP-11は上部削平
昭和56年度(P-4・10)	1.96×0.77	1.78×0.21	1.34	8.48	
B列総平均	(1.86×0.66)	1.69×0.21	(1.22)	8.05	II TP-11は上部削平
C列(II TP-10)	1.84×0.94	1.55×0.29	1.27	5.34	
昭和56年度(P-1・9・20・21・24・26)	1.89×0.66	1.60×0.23	1.32	6.96	
C列総平均	1.88×0.70	1.59×0.24	1.31	6.63	
D列(II TP-3・4)	1.70×1.27	1.03×0.44	1.16	2.37	
E列(II TP-2・13)	2.09×1.09	1.80×0.38	1.52	4.88	
F列(II TP-7・14)	1.29×0.97	0.99×0.53	1.15	1.90	

II T P - 5



g 20.60 h

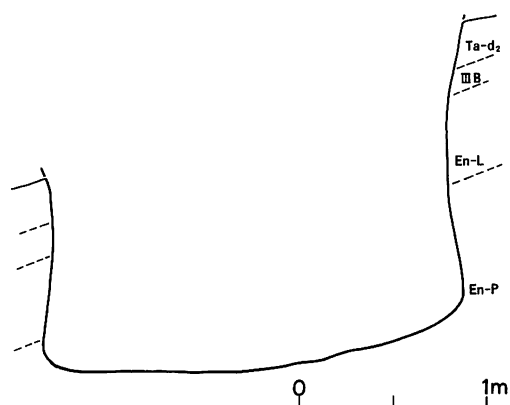
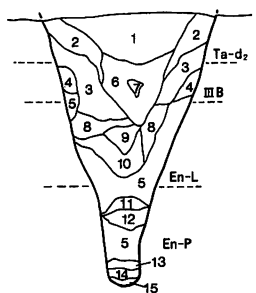
e 20.60 f



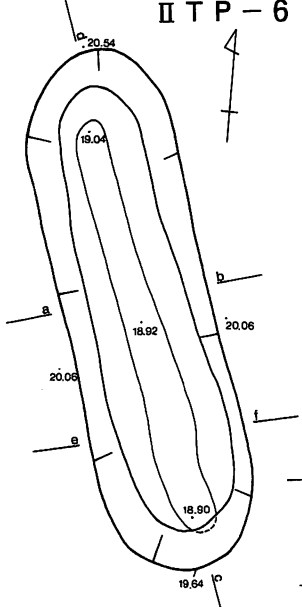
a 20.60 b

c 20.60 d

- II T P - 5
- 1 黒色土 (II B)
 - 2 暗褐色土 (II B>Ta-d₂>Ta-d₂)
 - 3 赤褐色土 (Ta-d₂>II B)
 - 4 灰褐色土 (II B)
 - 5 黄褐色土 (En-L>En-P)
 - 6 暗褐色土 (II B>Ta-d₂>En-P)
 - 7 暗黄褐色土 (II B>En-L: (f h 等))
 - 8 灰褐色土 (II B>En-L>Ta-d₂)
 - 9 暗黄褐色土 (En-L>II B>Ta-d₂)
 - 10 赤褐色土 (Ta-d₂>En-L: b 等 (f h 等))
 - 11 暗赤褐色土 (Ta-d₂+II B: 少量 (f h 等))
 - 12 黒色土 (II B: 少量 (f h 等))
 - 13 黒色土 (II B: 少量)
 - 14 赤褐色土 (Ta-d₂>En-L: 少量)



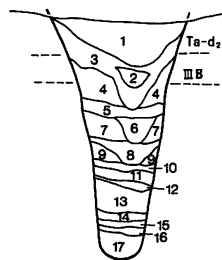
II T P - 6 (S56 : P - 17)



a 20.90 b

II T P - 6 (S56 : P - 17)

- 1 黒色土 (II B>Ta-d₁+Ta-d₂)
- 2 黒色土 (II B)
- 3 赤褐色土 (Ta-d₂>II B)
- 4 暗黄褐色土 (En-a>II B)
- 5 暗褐色土 (II B>En-a)
- 6 暗赤褐色土 (Ta-d₂+En-a+II B)
- 7 黄褐色土 (En-a)
- 8 暗褐色土 (II B>Ta-d₂)
- 9 黄褐色土 (En-a)
- 10 黒色土 (II B>Ta-d₂)
- 11 黄褐色土 (En-a)
- 12 黒色土 (II B>Ta-d₂)
- 13 暗赤褐色土 (II B>Ta-d₂)



e 20.90 f

c 20.90 d

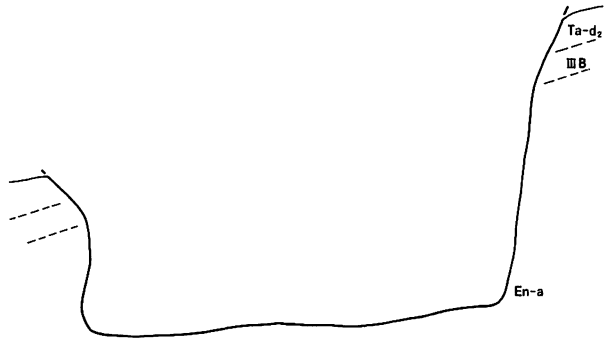
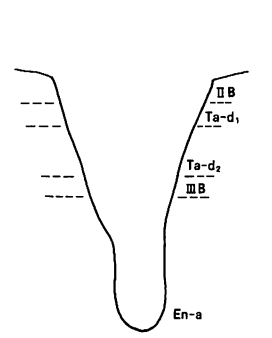
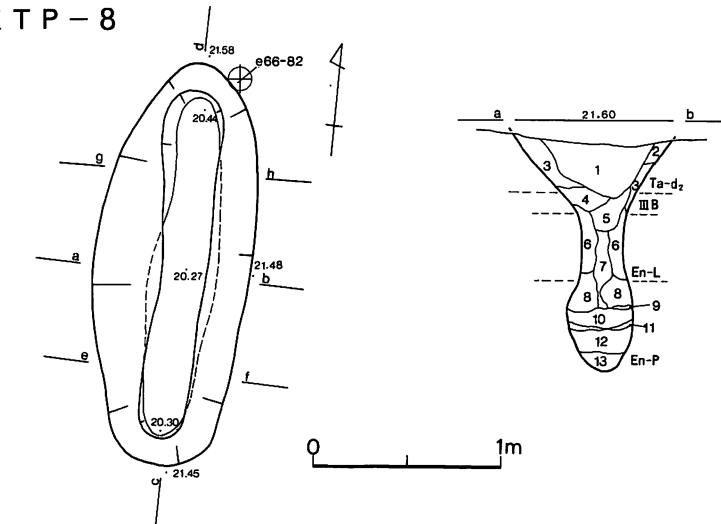


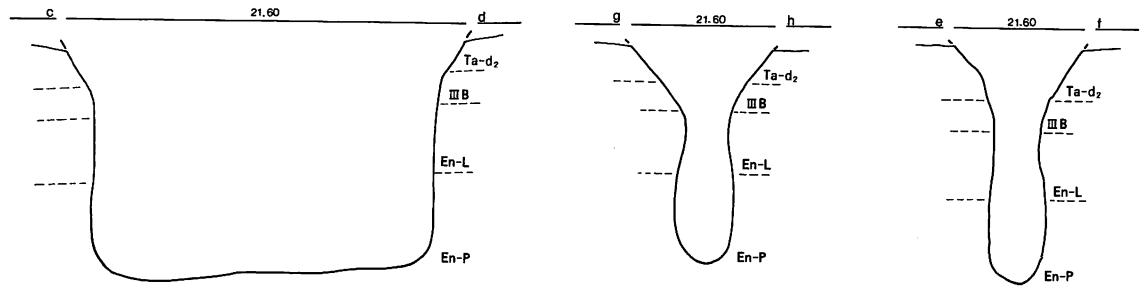
図 V - 36 II T P - 5・6

II TP-8

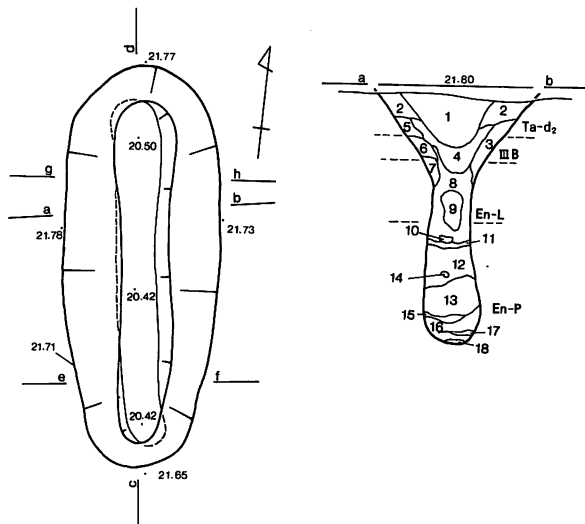


II TP-8

- 1 黒色土 (IB>Ta-d₁)
- 2 暗褐色土 (Ta-d₁>IB)
- 3 茶褐色土 (IB+Ta-d₂)
- 4 暗褐色土 (IB>Ta-d₂)
- 5 黒褐色土 (IB>Ta-d₂)
- 6 暗褐色土 (IB>Ta-d₁+Ta-d₂)
- 7 暗茶褐色土 (Ta-d₂>IB: ぼろ(フキイ))
- 8 暗褐色土 (IB>Ta-d₁>Ta-d₂: ぼろ(フキイ))
- 9 黄褐色土 (En-L: ぼろ?)
- 10 暗褐色土 (IB>Ta-d₁+Ta-d₂: ぼろ)
- 11 暗茶褐色土 (Ta-d₂>IB: ぼろ)
- 12 黄褐色土 (En-P>Ta-d₂)
- 13 黒色土 (IB: ぼろ)



II TP-9



II TP-9

- 1 黒色土 (IB>Ta-d₁+Ta-d₂)
- 2 暗褐色土 (IB+Ta-d₁)
- 3 暗黄褐色土 (IB>En-L)
- 4 黒色土 (IB>Ta-d₁+Ta-d₂: ぼろ)
- 5 暗褐色土 (IB+IB>Ta-d₂)
- 6 暗褐色土 (IB>Ta-d₂)
- 7 黄褐色土 (En-L>Ta-d₂)
- 8 黒褐色土 (IB>Ta-d₁+En-P: (フキイ))
- 9 黒褐色土 (IB>Ta-d₁+Ta-d₂+En-P)
- 10 黒褐色土 (IB+Ta-d₂)
- 11 黄褐色土 (IB+En-P: ぼろ)
- 12 黄褐色土 (En-L+En-P)
- 13 黒色土 (IB>Ta-d₂)
- 14 茶褐色土 (Ta-d₂)
- 15 茶褐色土 (Ta-d₂>IB)
- 16 黄褐色土 (En-P)
- 17 黒色土 (IB>En-P)
- 18 黒色土 (IB: ぼろ)

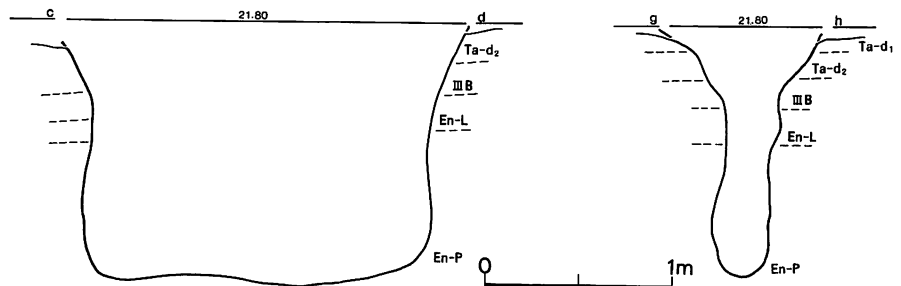
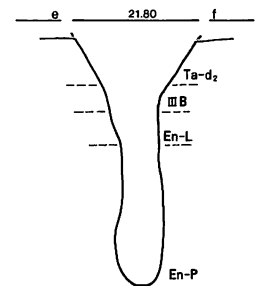
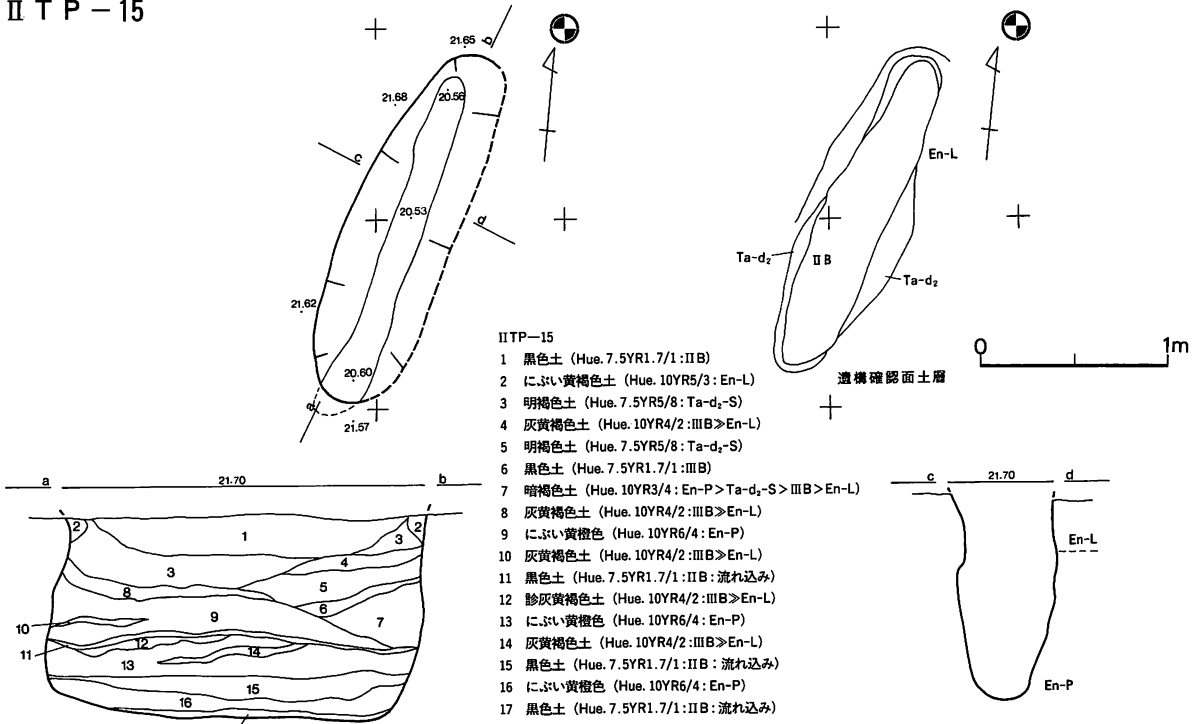
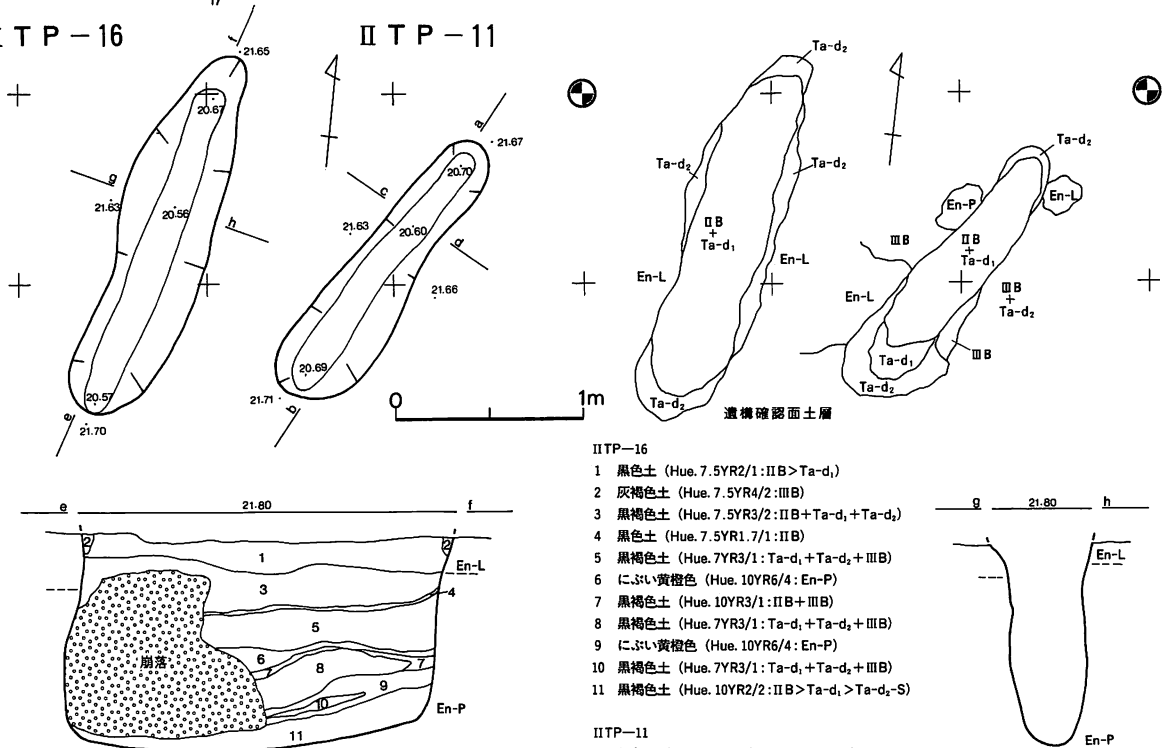


図 V-37 II TP-8・9

II T P - 15



II T P - 16



II T P - 11

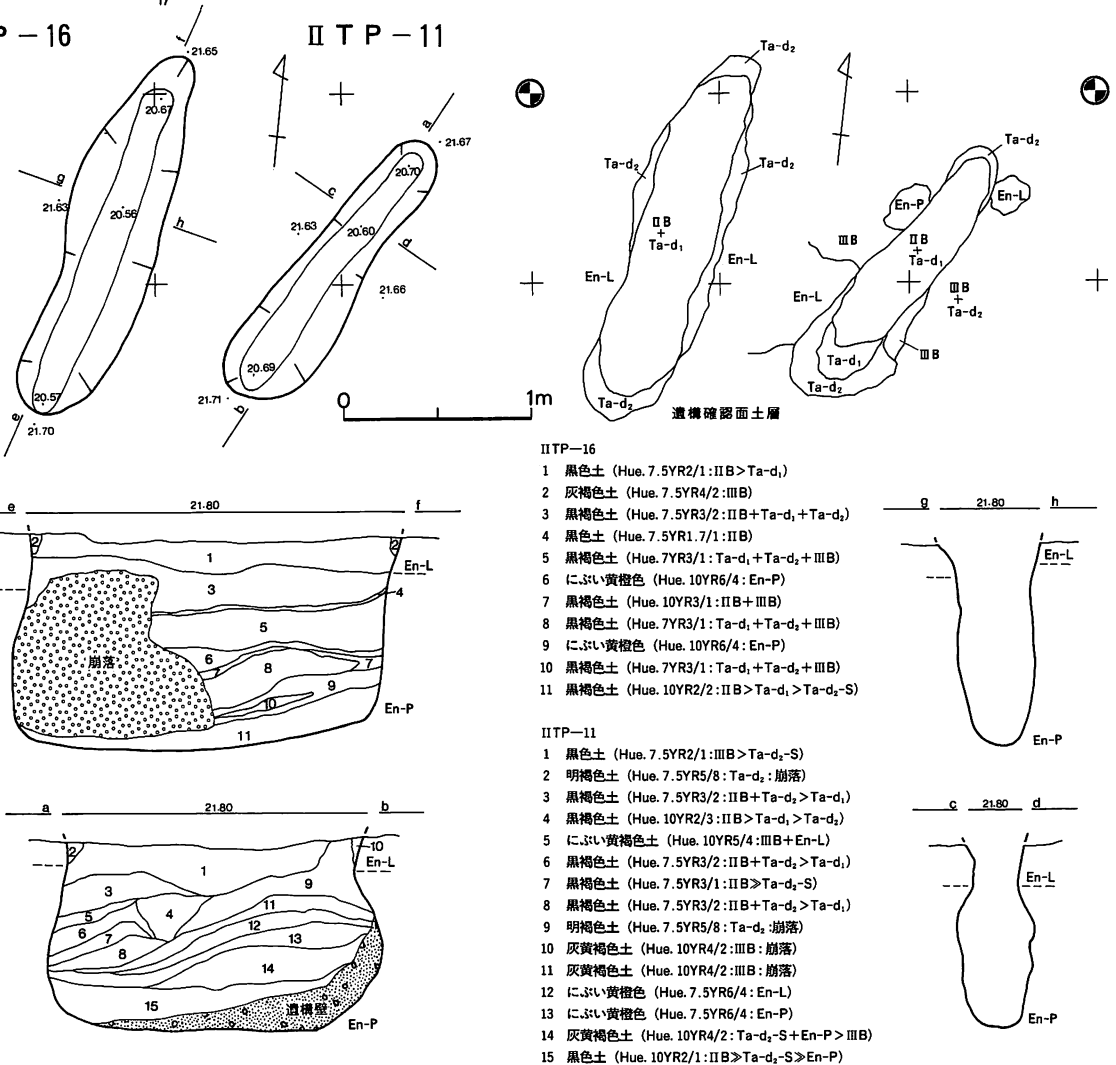
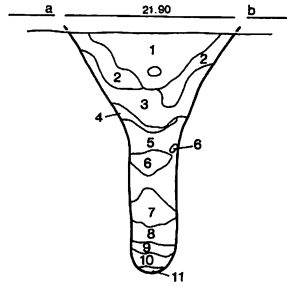
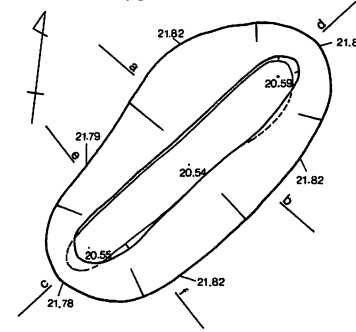
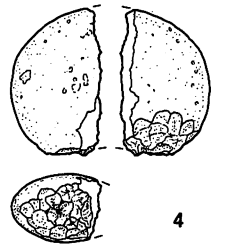
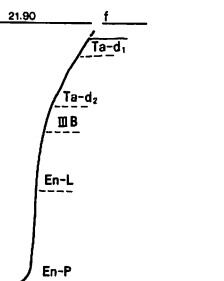
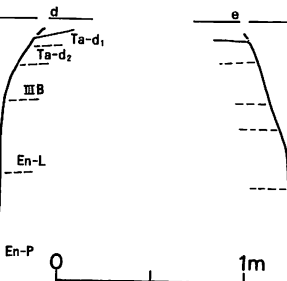
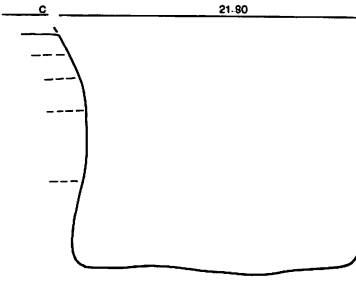
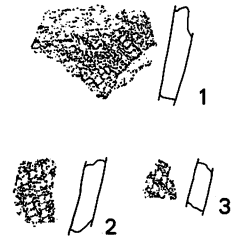


図 V - 38 II T P - 15 · 11 · 16

II T P - 10

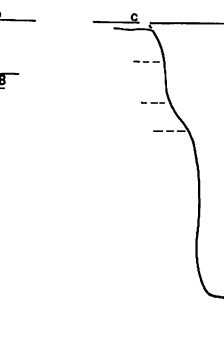
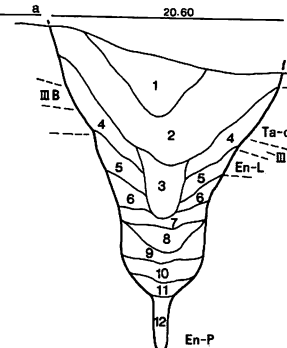
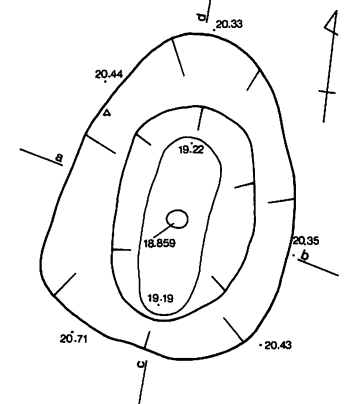


- II T P - 10
 1 黒色土 (II B)
 2 暗黒褐色土 (II B+Ta-d₁)
 3 茶褐色土 (Ta-d₂: φ 2mm 程度)
 4 暗褐色土 (III B)
 5 黄褐色土 (En-L>En-P)
 6 茶褐色土 (Ta-d₂: φ 3mm 程度)
 7 暗茶褐色土 (Ta-d₂>En-L+II B)
 8 黄褐色土 (En-P: (f) 程度)
 9 黒色土 (II B: (f) 程度)
 10 黄褐色土 (En-L>En-P)
 11 黒色土 (II B: (f) 程度)



0 5cm

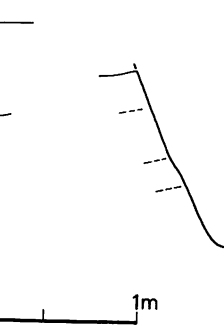
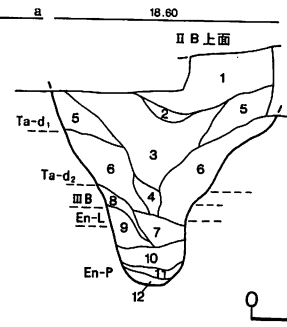
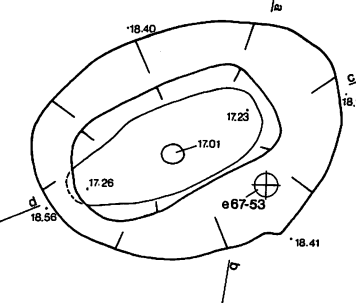
II T P - 3



- II T P - 3
 1 黒褐色土 (Hue. 10YR2/2: II B>En-P φ 5mm 程度)
 2 黒色土 (Hue. 10YR1.7/1: II B>Ta-d₁-S)
 3 黒褐色土 (Hue. 5YR3/1: II B+Ta-d₁+Ta-d₂)
 4 明褐色土 (Hue. 5YR5/8: Ta-d₁+Ta-d₂)
 5 褐色土 (Hue. 10YR4/6: III B+En-L>En-P: 崩落)
 6 褐色土 (Hue. 10YR4/4: En-L+En-P>II B: 崩落)
 7 黄褐色土 (Hue. 2.5YR5/6: En-P: 崩落)
 8 暗褐色土 (Hue. 10YR3/3: II B+Ta-d₂+En-P: 流れ込み)
 9 黄褐色土 (Hue. 2.5YR5/6: En-P: 崩落)
 10 黒色土 (Hue. 10YR2/1: II B: 流れ込み)
 11 黒褐色土 (Hue. 10YR2/1: II B+En-P: 流れ込み)
 12 黒褐色土 (Hue. 10YR2/3: II B>Ta-d₂)

0 1m

II T P - 4

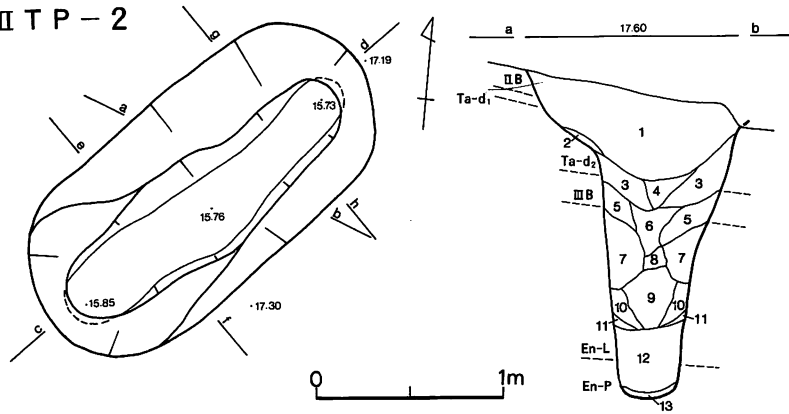


- II T P - 4
 1 黒色土 (Hue. 5YR1.7/1: II B 上面の黒土の流れ込み)
 2 黒褐色土 (Hue. 7.5YR2/2: Ta-d₂: φ 2-3cm の黒土の骨子)
 3 黒色土 (Hue. 7.5YR2/1: II B 下の黒土>Ta-c>Ta-d₁)
 4 黒褐色土 (Hue. 10YR3/2: II B+Ta-d₂>Ta-d₁: 流れ込み)
 5 黒褐色土 (Hue. 10YR2/2: II B+Ta-d₂>Ta-d₂: 崩落)
 6 明赤褐色土 (Hue. 5YR2/2: Ta-d₂: 崩落)
 7 褐色土 (Hue. 7.5YR4/3: III B+Ta-d₂>II B: 崩落)
 8 灰黄褐色土 (Hue. 10YR4/2: II B: 崩落)
 9 にぶい黄褐色土 (Hue. 10YR5/4: En-L: 崩落)
 10 黒色土 (Hue. 7.5YR2/1: II B+Ta-d₂>Ta-d₁: 流れ込み)
 11 にぶい黄褐色土 (Hue. 10YR5/4: En-P: 崩落)
 12 黒色土 (Hue. 7.5YR2/1: II B: 流れ込み)

0 1m

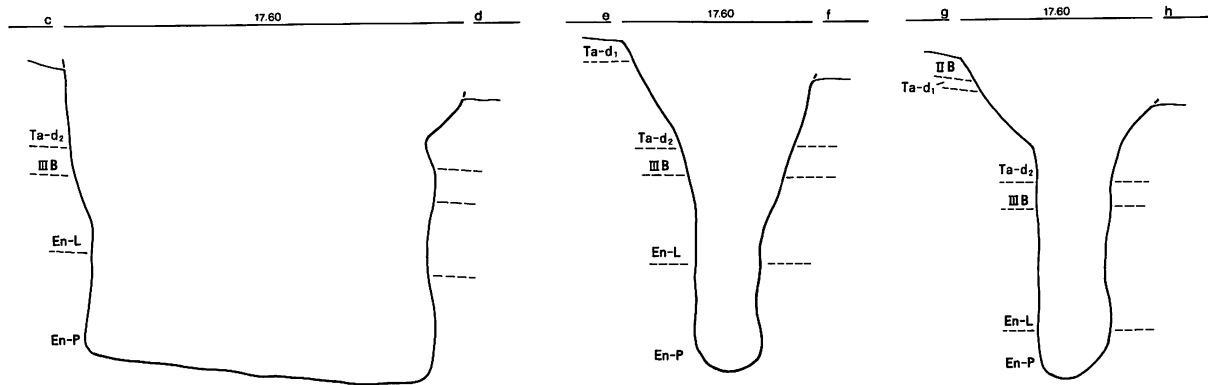
図 V-39 II T P - 10・3・4

II T P - 2

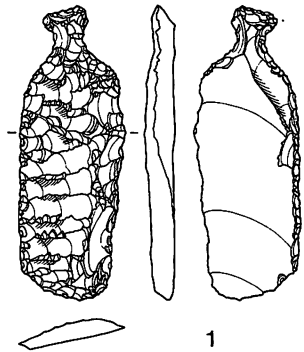
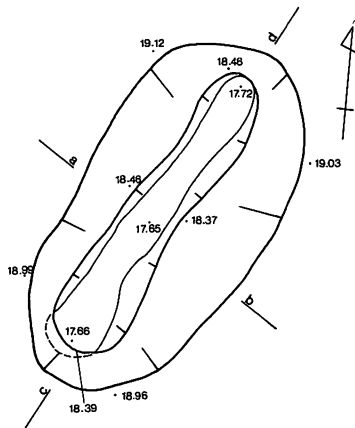


II T P - 2

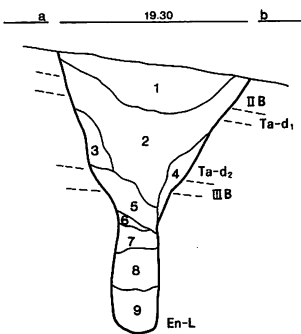
- 1 黑色土 (II B>Ta-d₂)
- 2 暗黄褐色土 (Ta-d₁>II B+Ta-d₂)
- 3 赤褐色土 (Ta-d₂)
- 4 褐色土 (II B+Ta-d₂)
- 5 灰褐色土 (II B)
- 6 暗褐色土 (Ta-d₁>II B+Ta-d₂: 多い)
- 7 黄褐色土 (En-L)
- 8 黄褐色土 (En-L>II B+Ta-d₂)
- 9 暗赤褐色土 (Ta-d₂>II B: 多い)
- 10 暗赤褐色土 (Ta-d₂>II B>En-L)
- 11 黄褐色土 (En-L>En-P)
- 12 暗赤褐色土 (II B>Ta-d₂+En-L+En-P>II B: 多い)
- 13 黑色土 (II B: 多い)



II T P - 13



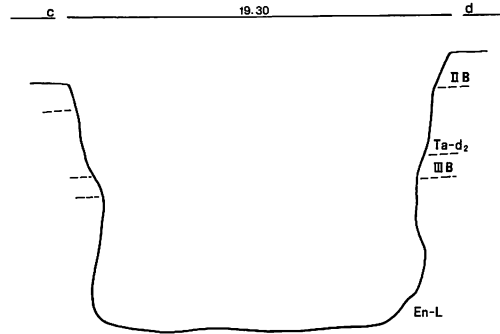
0 5cm



II T P - 13

- 1 黑色土 (Hue. 10YR1.7/1: II B: 多い)
- 2 黑色土 (Hue. 10YR1.7/1: II B+Ta-d₁)
- 3 明褐色土 (Hue. 7.5YR5/8: Ta-d₂: 多い)
- 4 明褐色土 (Hue. 7.5YR5/8: Ta-d₂: 多い)
- 5 暗褐色土 (Hue. 7.5YR3/4: II B+Ta-d₂: 多い)
- 6 灰褐色土 (Hue. 10YR4/2: II B: 多い)
- 7 明黄褐色土 (Hue. 2.5YR7/6: En-L: 多い)
- 8 灰褐色土 (Hue. 7.5YR4/2: Ta-d₂>II B: 多い)
- 9 黒褐色土 (Hue. 5YR2/1: II B+Ta-d₁: 多い)

0 1m



図V-40 II T P - 2・13

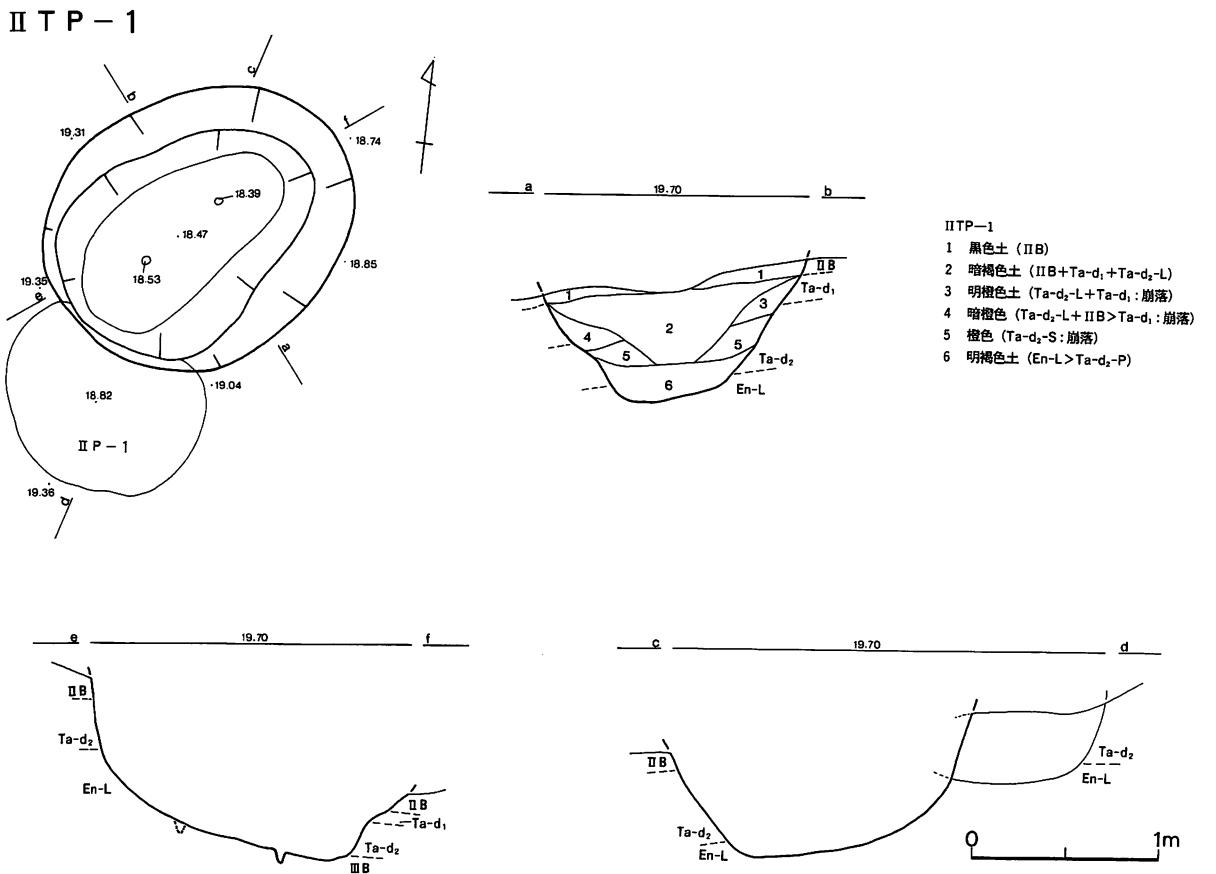
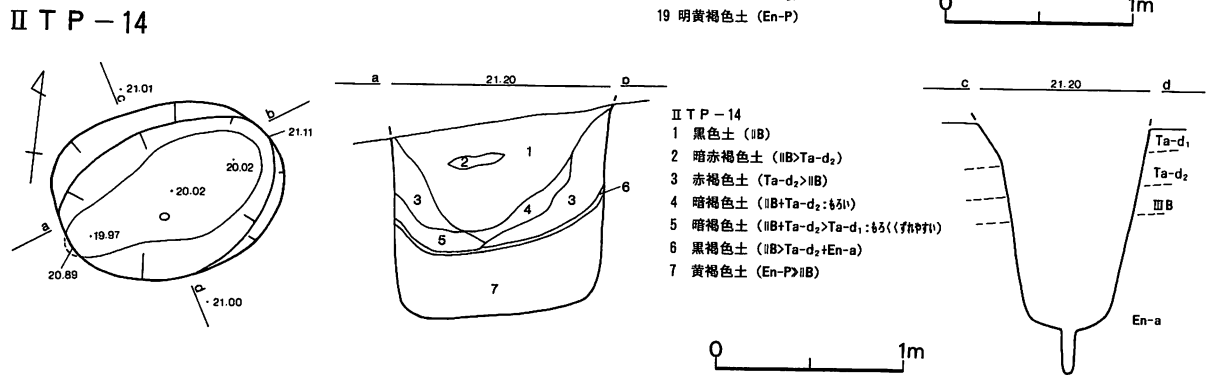
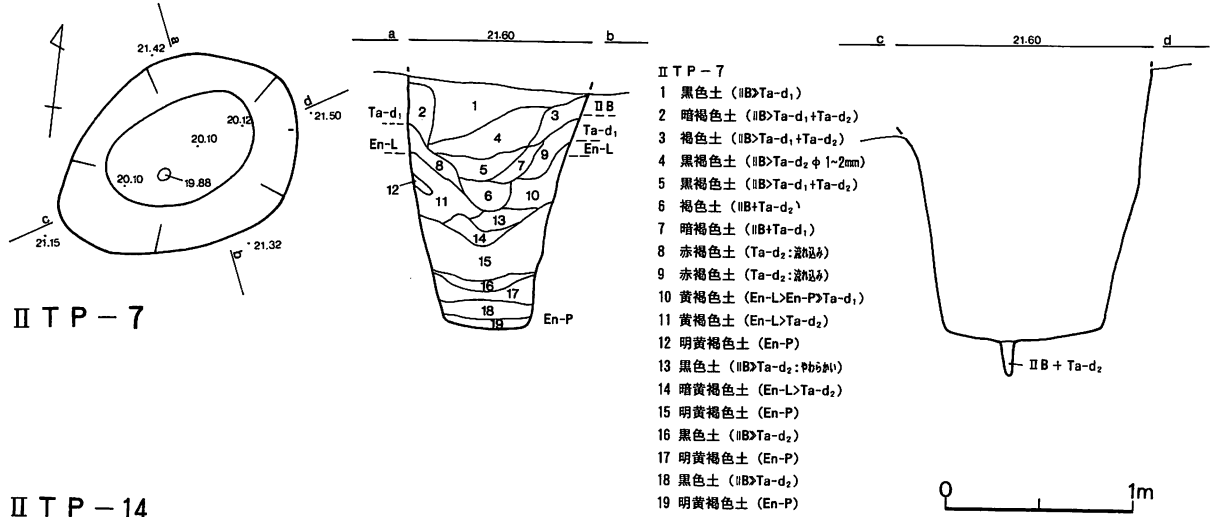


図 V-41 II T P - 7・14・1

II T P - 12

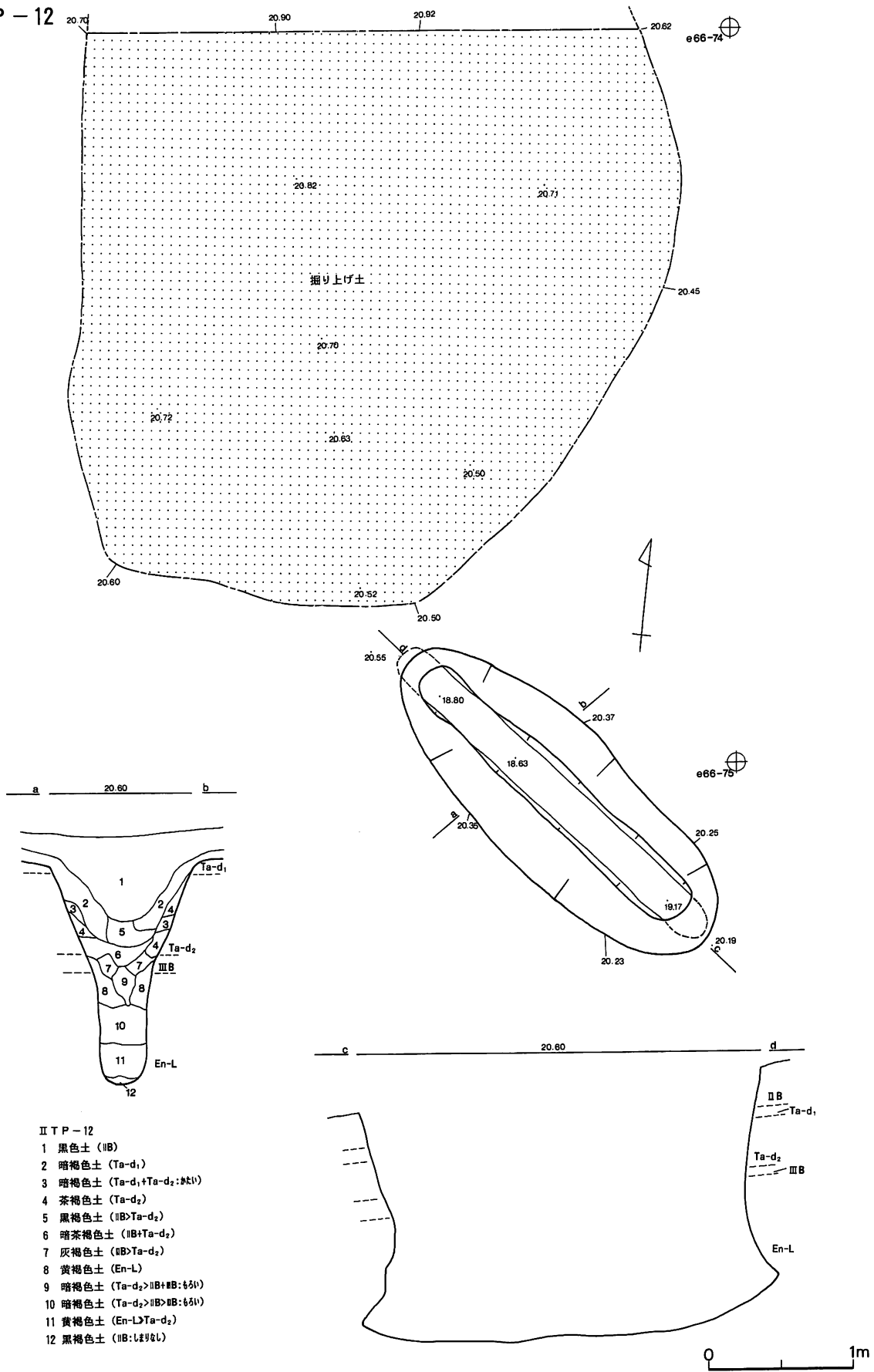
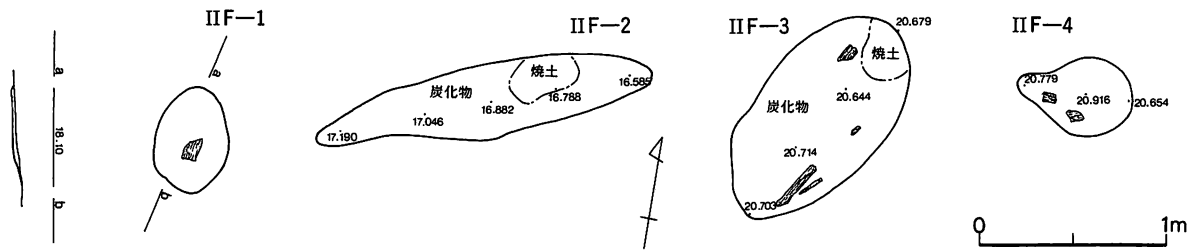


図 V-42 II T P - 12



図V-43 焼土IIF-1・2・3・4

④焼土 (図V-33・43)

II F-1~5は調査区東側の舌状台地で検出されている。いずれも、焼土と炭化物の集中が、斜面下に向かって流れ落ちたものである。これらは、この場所で生成されたものではなく、斜面上から投げ捨てられた二次堆積のものと考えられる。遺物は伴わない。

II F-1 (図V-43)	位置 e-67-54	規模 0.56 m×0.39 m
II F-2 (図V-43)	位置 e67-44	規模 1.81 m×0.39 m
II F-3 (図V-43)	位置 e67-62	規模 1.26 m×0.68 m
II F-4 (図V-43)	位置 e67-62	規模 0.62 m×0.41 m
II F-5 (図V-33)	位置 e67-74・75	規模 0.86 m×0.64 m

(皆川 洋一)

⑤動物の足跡 (図V-44、図版V-16)

調査区東側で、Ta-c層を除去し、II黒層上面で確認した。径15cm前後、深さ2cm~3cmの浅いくぼみで、20~30cmほどの間隔で続いている。これらは、美々8遺跡の過年度調査区でも確認されており、これまでの調査のものと同様に、足跡の大きさ、歩幅、並び方などからキツネおよびウサギのものと思われる。分布は3ヶ所で確認され、北側からA~Cと呼称する。以下順に記す。

A 北側の台地上から南東へ伸びる谷筋に沿って確認された2列と、1度後退した痕跡が認められる1列が東→西の方向へ蛇行しながら伸びている。進行方向は不明で、キツネのものと思われる。

B 調査区東側の台地上から伸びる尾根の東側で確認した。尾根の縁辺部に沿うようにほぼ北から南へ蛇行しながら進んでいる。ウサギのものと思われる。

C 台地上から続く尾根の端部に沿って確認された。進行方向は不明で、キツネのものと思われる。

(村田 大)

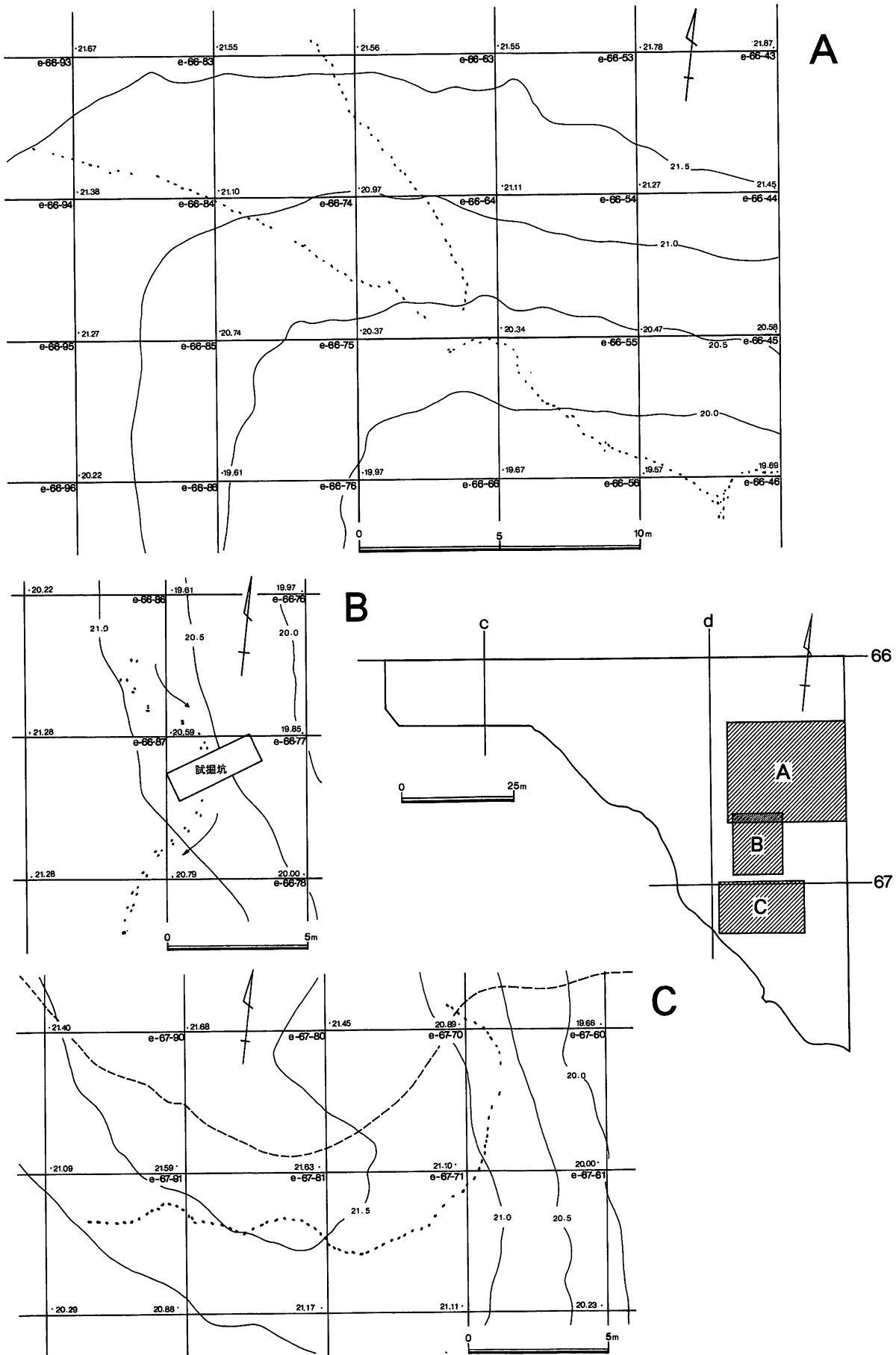


図 V-44 動物の足跡

(3) II黒層出土の遺物

①土器 (図V-45~48、図版V-17~21)

土器は縄文時代早期と後期のものが出土しており、前者が全体の99%を占める。

I群b-2類 (図V-46-1、図版V-18-1)

1は器面に三段の短縄文が施される胴部である。

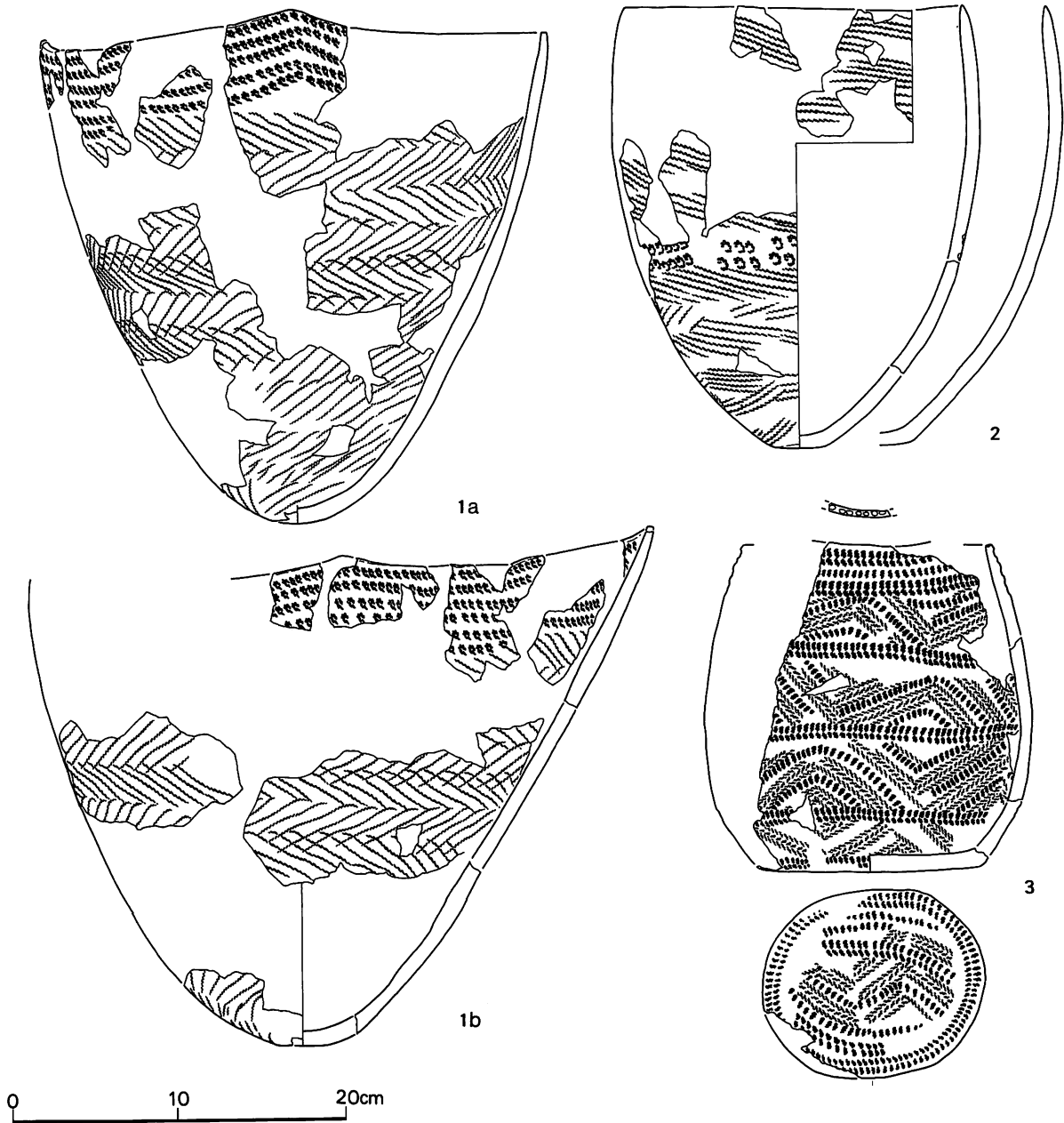
I群b-3類 (図V-46-2・3・4、図版V-18-2・3・4)

2は先端の丸い尖りぎみの口唇を有する口縁部である。口唇と隆線上には細かな刻みが施されており、器面には二本の隆線で区画された部分に撚糸文が施されている。隆線の両側縁は先端の丸い筧状の工具で撫で付けられている。3・4は数本の横走る微隆起線の間文様が施される胴部破片である。3は絡条体圧痕文が、4は撚糸文と短縄文が施されている。

I群b-4類 (1~3・5~78) (図V-45~48、図版V-17~21)

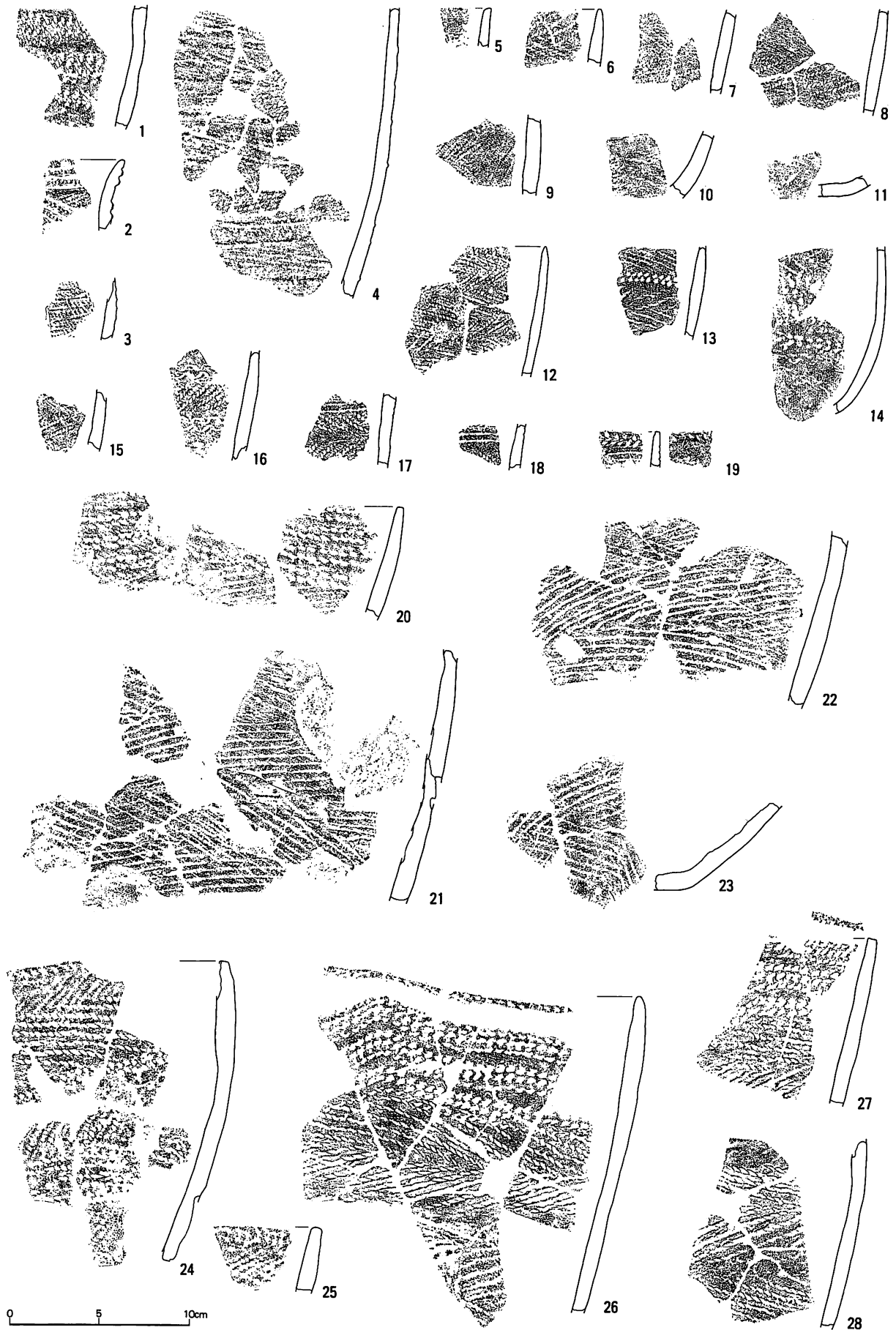
1・2は舌状台地の東側急斜面で出土したもので、一個体分の破片を、それぞれ斜面上から投げ捨てたと思われる(図V-45)。1は、径の小さな底部をもつ舟形の深鉢土器である。高さの異なる山形隆起部をもち、口唇断面は角形である。口縁部には自縄自巻の原体による縄端圧痕文の文様帯があり、その下には、自縄自巻LRとRLの2本の原体で羽状をなす撚糸文風の縄文が施されている。内面には炭化物の付着が見られ、胎土中には繊維を含む。2は径の小さな底部をもつ砲弾形の深鉢土器である。真上からみると、楕円形をなす器形である。口唇断面は先の丸い尖り気味のもので、器面には自縄自巻LRとRLの2本の原体で羽状をなす撚糸文風の縄文と、同じ原体による2段の縄端圧痕文が施されている。胎土中に僅かな繊維を含む。3は調査区中央部の急斜面中腹から出土した(図V-45)。広い楕円形の底部を持ち、胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾する器形である。文様は底部を含む全面に施される。断面が角形の口唇上には、縄の圧痕が施されている。口縁には、縄端圧痕と縄の先端の圧痕が交互に施される文様帯がみられる。胴部の器面には、縄端圧痕と撚りの異なる二段単節の原体を交互に押捺した3本の縄線文とで、菱形を構成する文様が施されている。胎土中には僅かな繊維と多数の石英が認められる。

5は切り出し形の口唇断面を持つもので、器面には短縄文と撚糸文風の縄文が施されている。6~11は器壁が薄く、細い条の原体による羽状をなす撚糸文風の縄文が施されている。1は先端が丸い尖り気味の口縁部で、2は底部である。12は尖った口唇断面の口縁部で、器壁は薄い。口唇下に短縄文、器面に羽状をなす撚糸文風の縄文が施されている。13・14は同一個体の胴部と丸い底部近くの胴部である。器壁は薄く、自縄自巻の原体による短縄文と羽状をなす撚糸文風の縄文が施されている。15・16には綾絡文、17~19にはニシンの腹椎骨による魚骨回転文が施されている。20~36は口縁部の文様帯に、縄端圧痕文が施されている。20~23は同一個体の深鉢である。底部は径の小さな平底で、口唇断面は尖り気味の角形である。口縁部には縄端圧痕文が4段施された幅広の文様帯が見られる。器面の文様は、羽状に施された撚糸文である。この土器の粘土の接合面には、撚糸文が施されている。胎土中には繊維が僅かに含まれている。24・25は同一個体である。口唇断面は丸みを帯びた角形で、器壁は厚い。器面には、自縄自巻の原体による羽状をなす撚糸文風の縄文と縄端圧痕が施されている。胎土中には繊維や白色の岩片を含む。26~28は、同一個体である。26は山形突起を有する口縁部である。口唇断面は丸みを帯びた角形のもので、口唇には縄の圧痕が施されている。口縁部の文様帯には、自縄自巻LRの原体による短縄文が3段施されている。胴部の器面には、条の太い自縄自巻LRとRLの原体による羽状をなす撚糸文風の縄文が施されている。胎土中には、砂が多く含まれている。29は、山形突起を有する口縁部である。口唇断面が丸いもので、口縁部の文様帯には自縄自巻にはLRの原体に

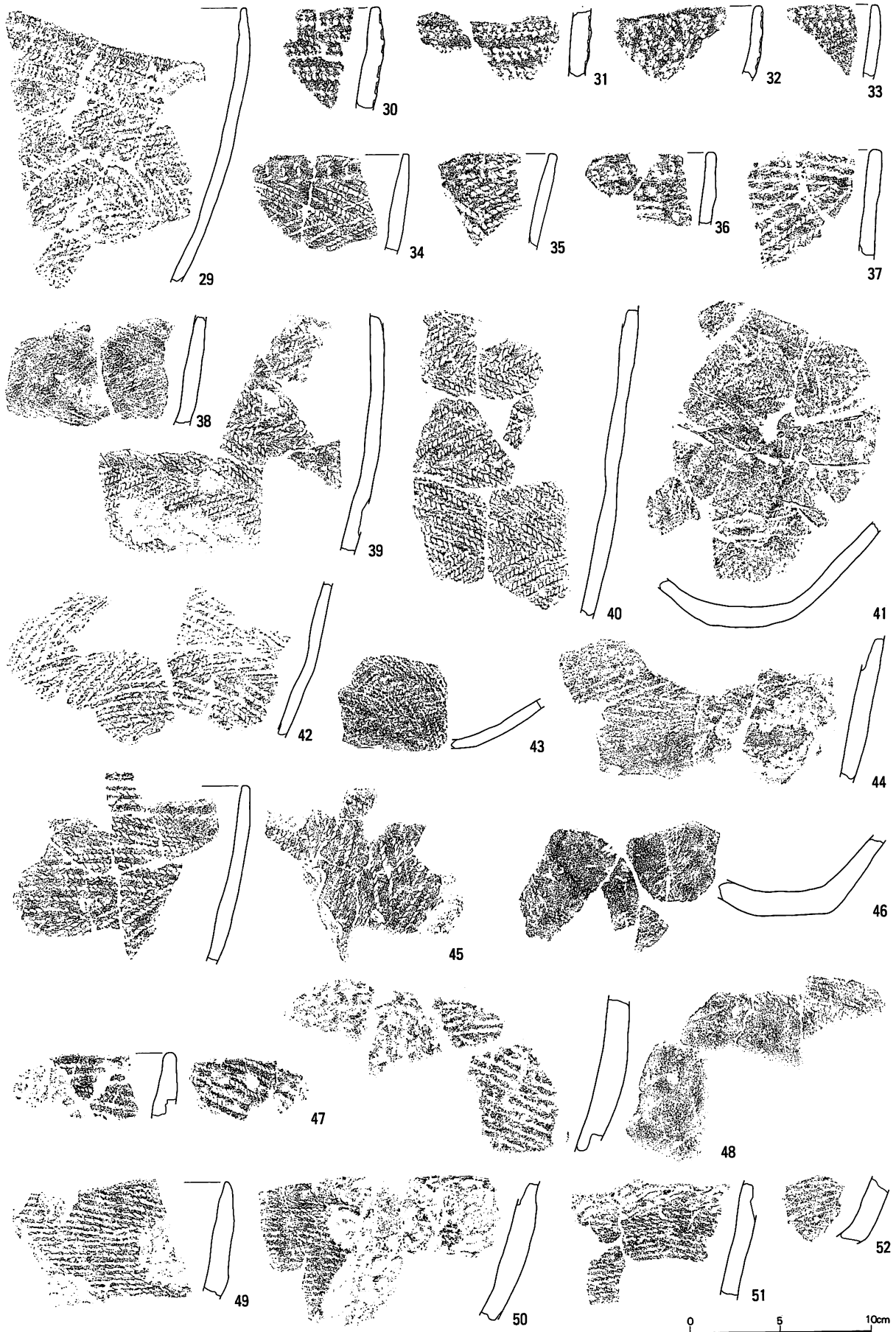


図V-45 土器(1) I群b-4類

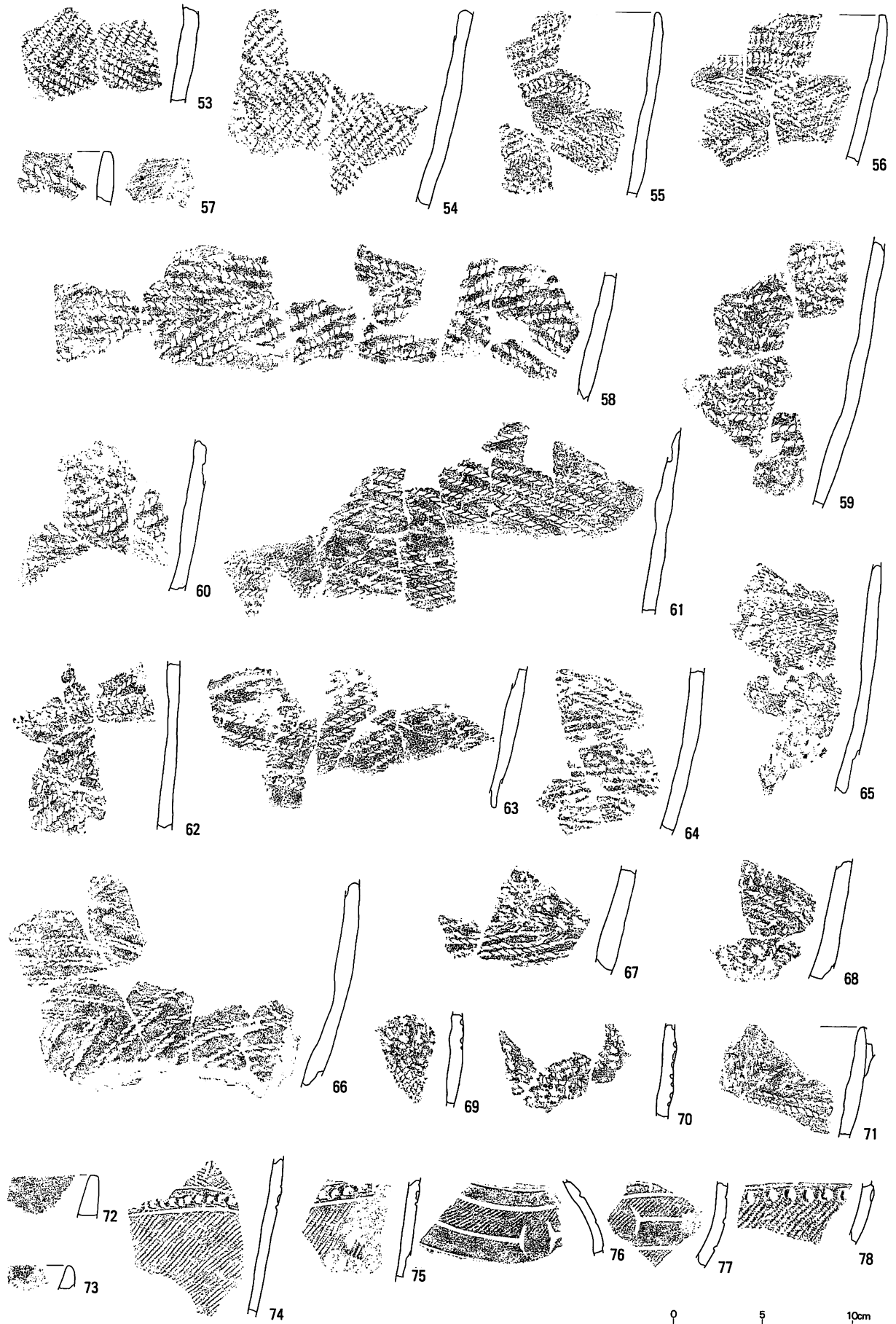
による縄端圧痕文が3段施されている。30は角形の口唇断面を持つもので器面には縄端圧痕文が施されている。31は、30と同一個体である。32は口唇断面が丸い。33~36は口唇断面が丸みを帯びた角形のもので、胎土中に繊維を含む。37~64は、器面に条の太い原体による縄文や撚糸文が施されるものである。37は口唇断面が丸く器壁が厚い。文様は撚糸が羽状に施されるものと思われる。胎土には、小礫と繊維が含まれている。38~40・42・44は胴部、41・43・46、は径の小さい底部である。41・43の底部内面には炭化物が付着している。45・47・48は内面に文様を施している。45は器面に二段単節RLの原体による3本の縄線文と羽状をなす撚糸文が施されたもので、内面には条が縦方向の撚糸文が施されている。口唇断面は角形で、口唇上に縄の圧痕が施される。胎土中には繊維が含まれている。47・48は同一個体の口縁と胴部である。口唇断面は丸く、器壁は非常に厚い。器面と内面に、撚糸と思われる原体が羽状に施されている。胎土中には砂が多量に含まれ、器面の剝落が著しい。49~52は、



図V-46 土器(2) I群b-3類・I群b-4類



図V-47 土器(3) I群b-4類



図V-48 土器(4) I群b-4類・IV群C類

器壁が厚く、胎土に繊維を含む同一個体である。器面には一段無節Lの原体による撚糸文が施されている。また、接合面に爪による刻みを連続して施し、粘土を接合しやすくしている。53・54は羽状縄文が施されている。55～64は縄文や撚糸文で菱形を構成する文様を施したものである。55・56は同一個体である。口縁部に自縄自巻の原体による3～4段の縄端圧痕文が施され、器面には2本の自縄自巻原体による縄文で菱形の文様を構成するものが施されている。58～64は太い原体の撚糸文で菱形を構成したものである。59・60には縄端圧痕文が施されている。65～67は、一段の同じ撚りの原体2本を並列して軸に巻付けた撚糸で羽状を構成する文様が施されている。65は胎土中に砂礫を多く含む。66・67は同一個体で、67には器面に施した撚糸の格条体圧痕文が施されている。器壁が厚く、胎土中に砂を含む。68は底部に近い胴部片で、器面には自縄自巻の原体による縄端圧痕文と撚糸文風の縄文が施されている。69・70は、器面に縄端圧痕文が施される幅広の文様帯を持つ。71は口縁部に縦の貼付帯を持つもので、器面には羽状をなす撚糸文が施されている。72・73は器壁が厚いもので、無文である。胎土中には砂や繊維が含まれている。

IV群c類 (74～78)

74・75と76～78はそれぞれ同一個体である。74・75は沈線と斜行縄文が施される深鉢片で、沈線で区画された無文部には、断面が長方形の棒状工具による斜の刺突が連続して施されている。76～78は壺もしくは注口土器の胴部片である。沈線で区画された所に斜行縄文と磨消縄文が施されている。78には横の沈線に沿って爪形の刺突が連続して施されている。

②石器 (図V-49～56)

石器類は、総計1,775点が出土している。石器は434点で、剥片石器は323点、礫石器は111点である。器種別の出土頻度は石鏃が最も多く、つまみ付ナイフ、スクレイパー等がそれにつづく。礫石器では、砥石類、石斧が多く、たたき石、すり石等がそれに続く。

石鏃類 (1～73)

石刃鏃、柳葉形、五角形、菱形、無茎、有茎等の石鏃が出土している。量的には、五角形と無茎のものが多く、1は石刃鏃で、表面に2本の稜があり端部には裏面からの抉り込みが施されている。2～11は柳葉形を呈するもので、2～5・11は幅の狭いもの、6～10は幅の広いものである。11は右側縁部が欠失した後に再度加工を施している。12は表裏面に主剝離面の残る未成品である。13～31・35は五角形を呈するものである。13～21は幅が狭く、基部にえぐりが施されている。22～26は幅が広く基部にえぐりの施されるもので、27・28は基部にえぐりが施されないものである。32～34は基部が尖り気味の菱形を呈するものである。これらは材料にした剥片や剝離の様子から五角形のものに属すると考えられる。36～61は無茎のものである。36～56は二等辺三角形を呈するもので、36～47が平基、48～50が僅かにえぐりが施されるもの、51～55が明瞭なえぐりが施されるものである。56は左右の側縁が緩やかな曲線を描いている。57～61は正三角形を呈するものである。57～60は基部に明瞭なえぐりを施している。61は未成品である。62～73は有茎のものである。

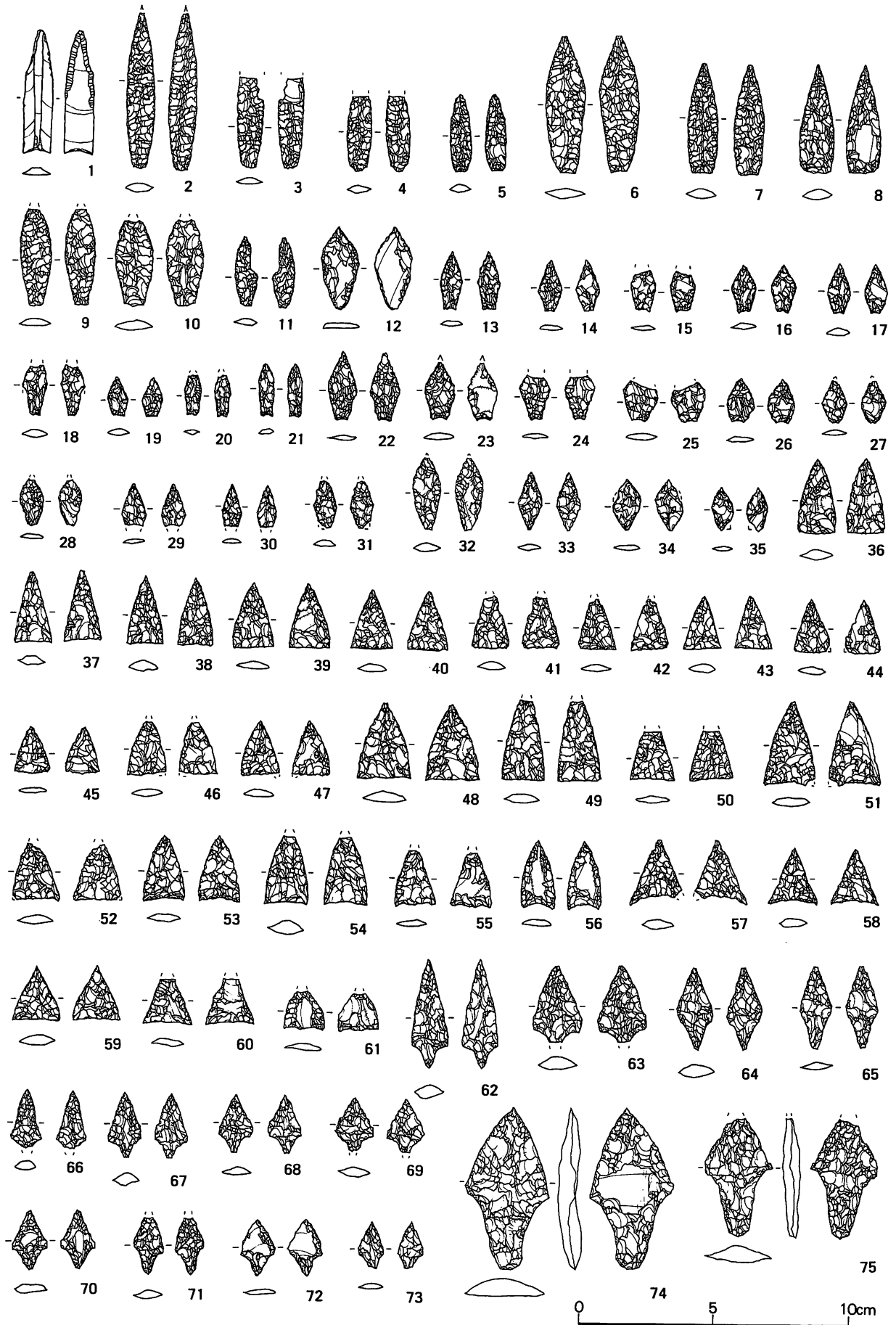
石槍またはナイフ (74～78)

74～76はかえしの明瞭なもの、77・78はかえしの不明瞭なものである。74は基部から胴部にかけてタール状のものが薄く附着している。

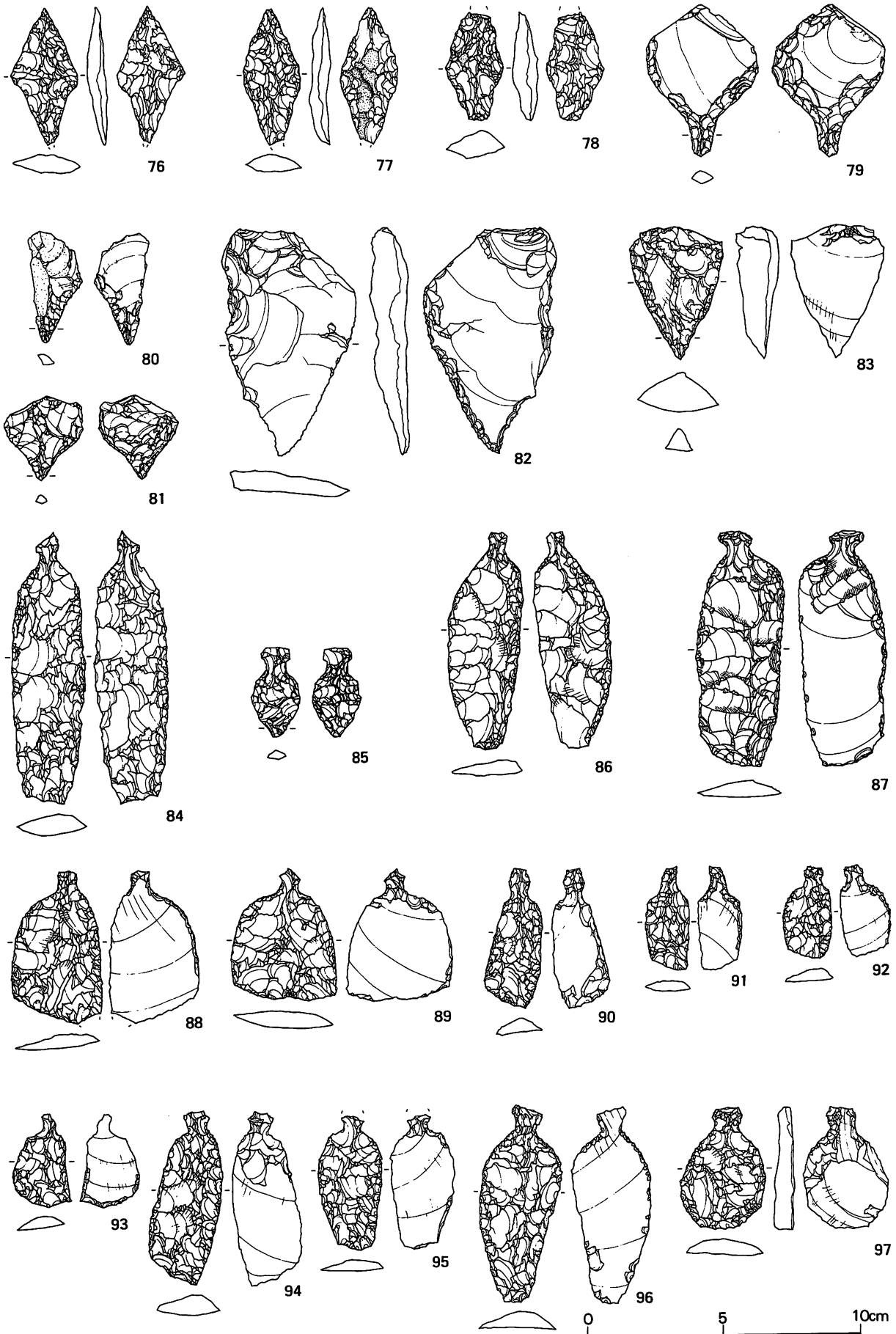
石錐 (79～81)

79は頁岩製、80・81は黒曜石製である。図示したものの以外は破損している。

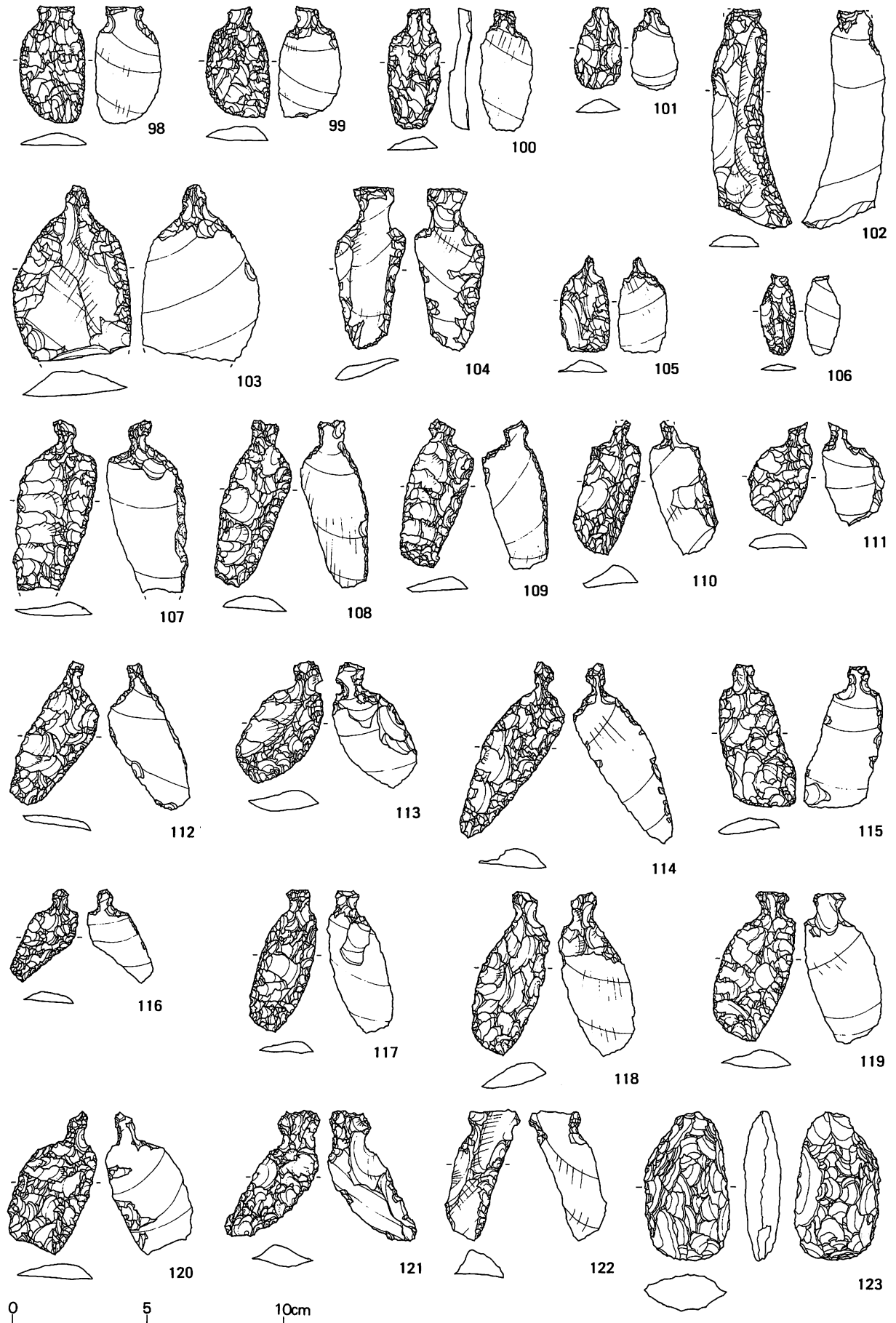
尖頭部をもつスクレイパー (82・83)



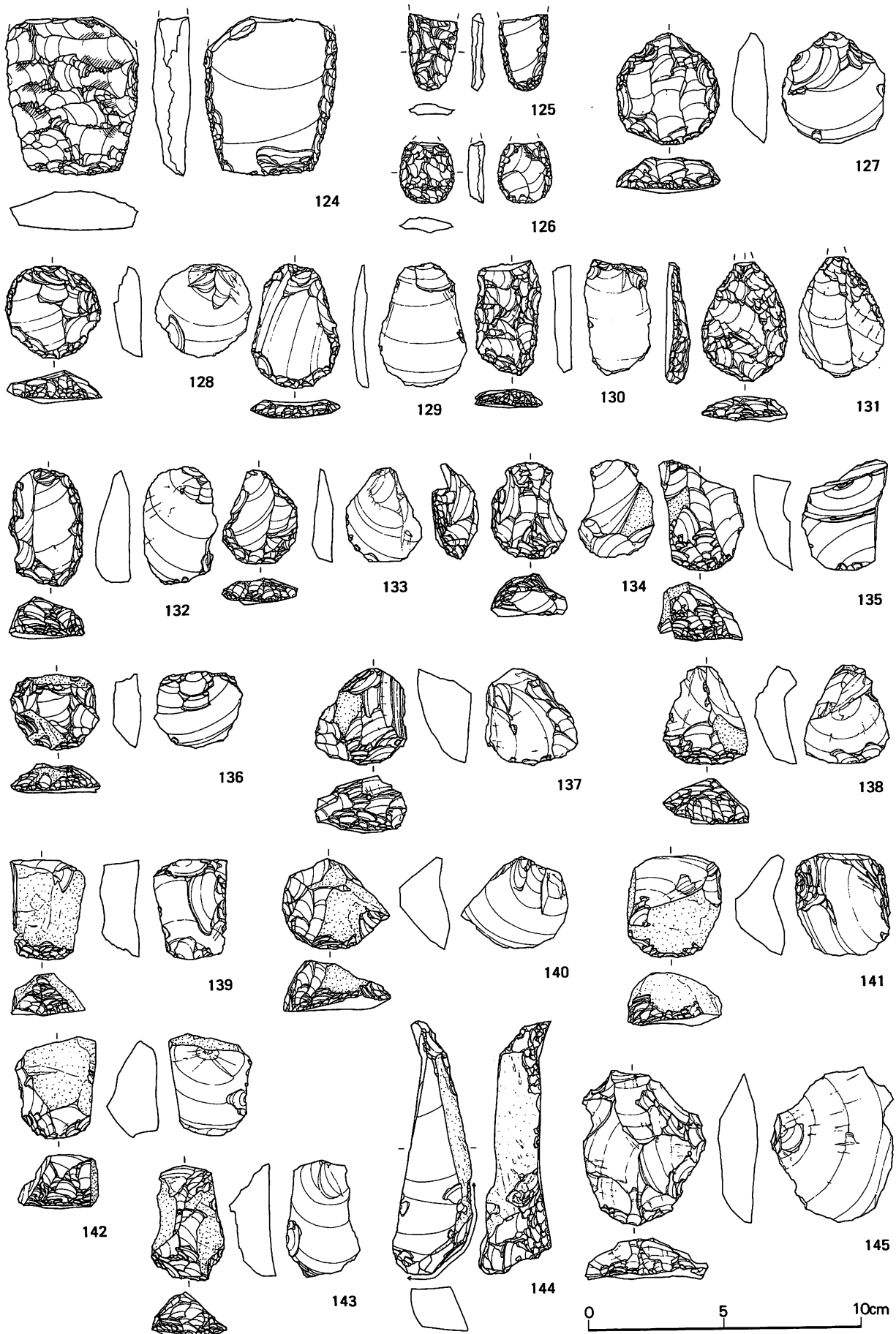
図V-49 包含層出土の石器 (1) 石刃鏃・石鏃類・石槍またはナイフ



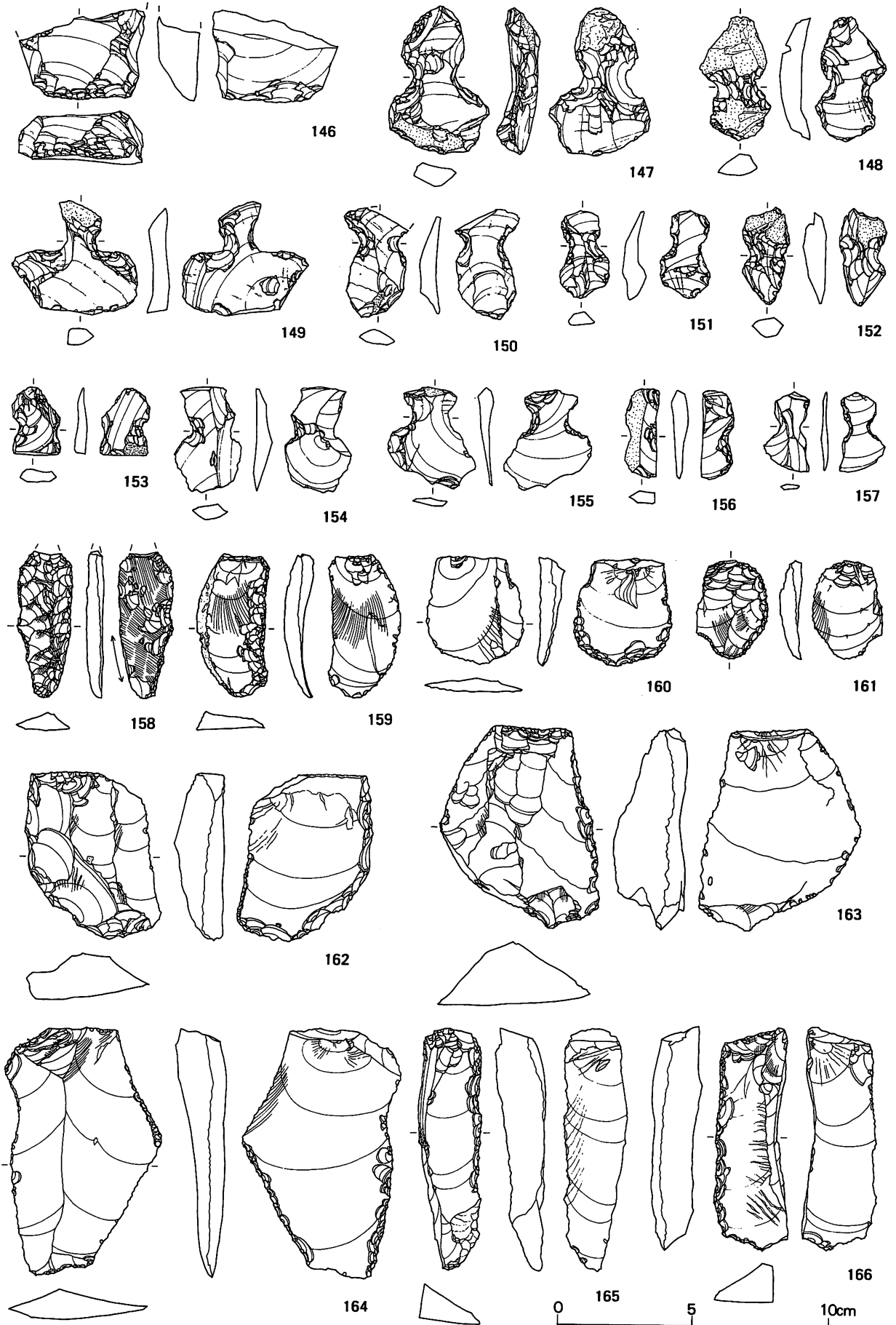
図V-50 包含層出土の石器 (2) 石槍またはナイフ・石錐・つまみ付ナイフ



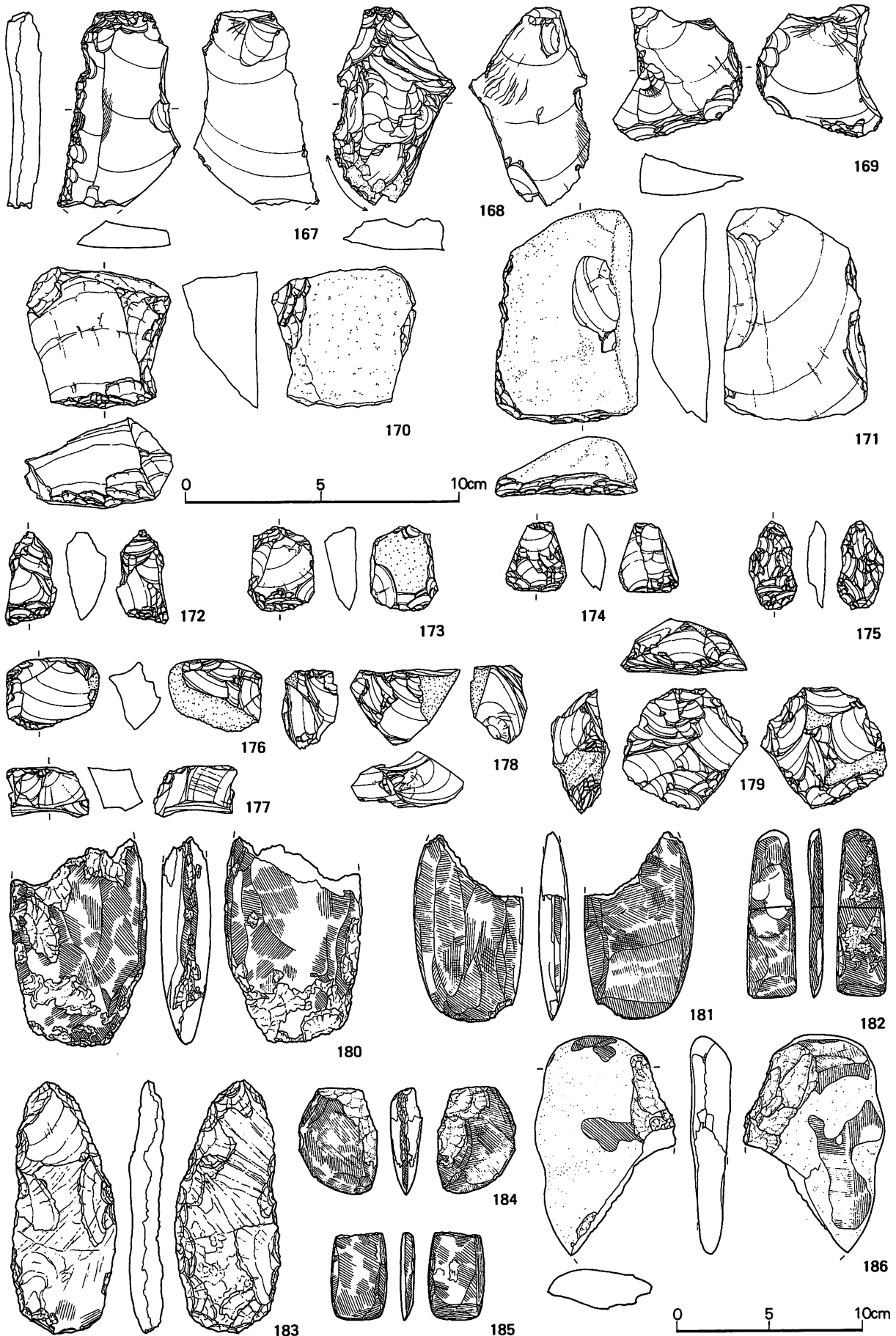
図V-51 包含層出土の石器(3) つまみ付ナイフ・スクレイパー類



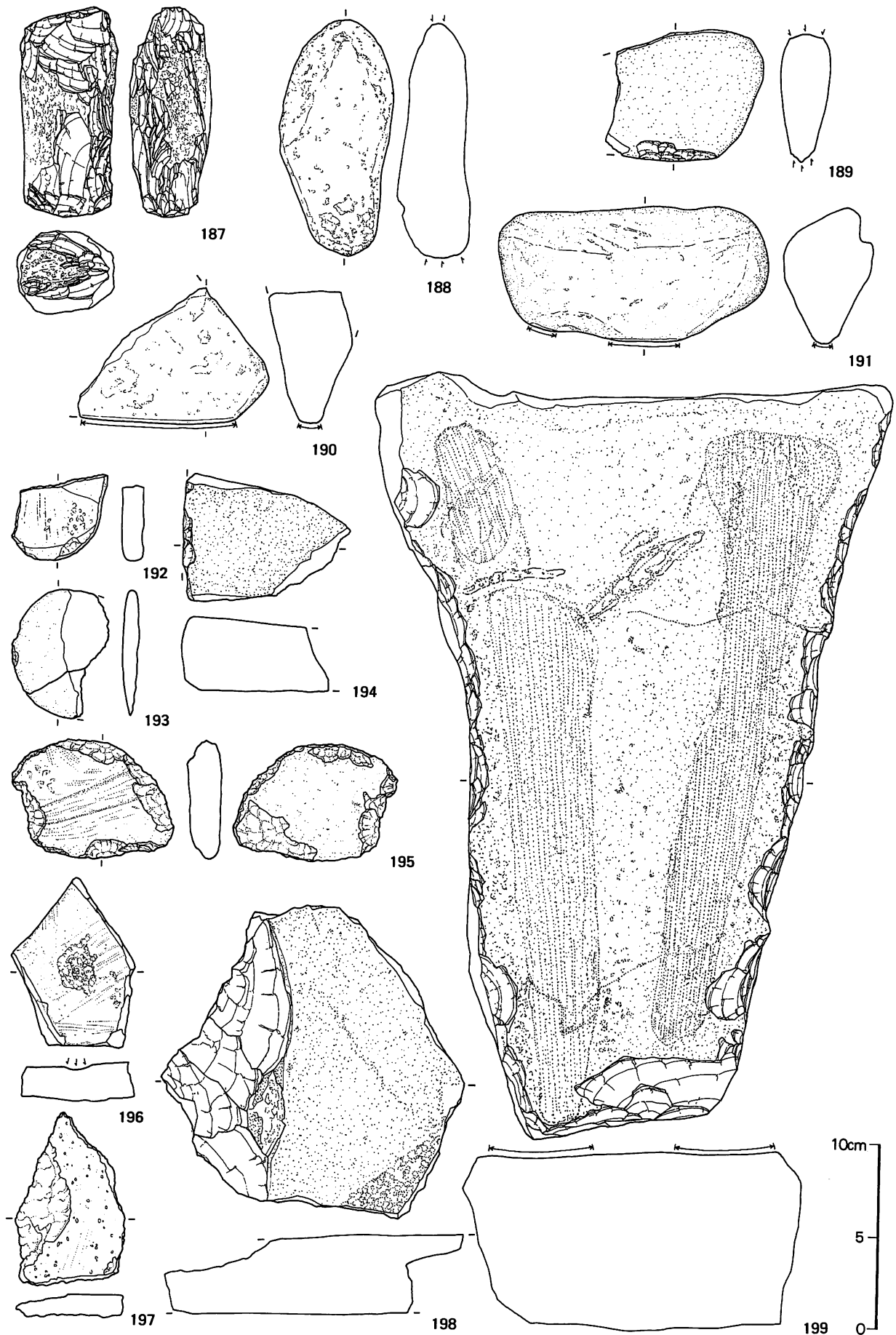
図V-52 包含層出土の石器 (4) スクレイパー類



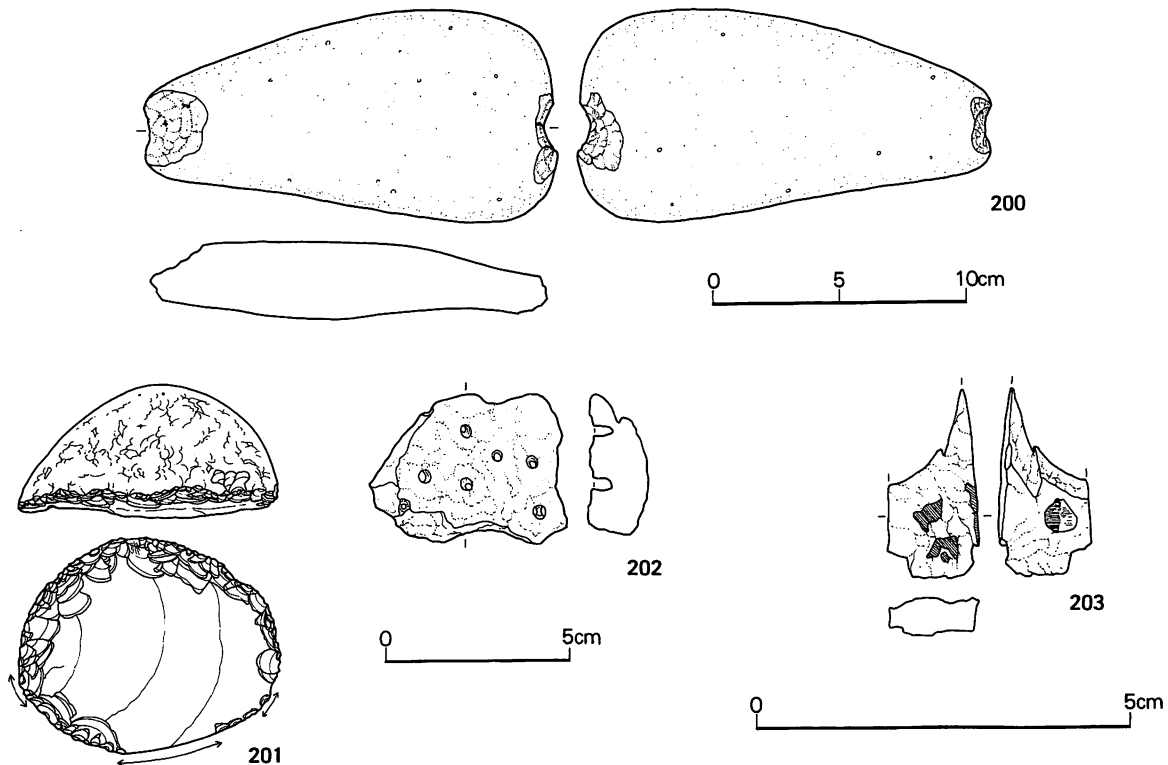
図V-53 包含層出土の石器 (5) スクレイパー類・異形石器



図V-54 包含層出土の石器 (6) スクレイパー類・楔形石器・石核・石斧



図V-55 包含層出土の石器 (7) たたき石・すり石・砥石・台石類



図V-56 包含層出土の石器(8) 石錘・礫器・石製品

82は裏面に剝離を施して尖頭部を作出したものである。珪質頁岩製で、裏面から見て左側縁の刃部先端に光沢が認められる。83は黒曜石製の厚い剝片を素材としたもので、表面だけに加工を施して尖頭部を作出している。

つまみ付ナイフ(84~122)

84~106は縦形のものである。84~86は両面加工、87~93は片面全面と裏面の周辺に一部加工を施すもの、94~101は片面全面に加工を施すもの、102~106は片面の周辺または一部に加工を施すものである。85は、黒曜石製の小型のもので下端部の尖り気味の部分に摩滅が見られることから、ドリルの可能性もある。106は頁岩の小さな剝片に、つまみ部と簡単な刃部への加工を施したものである。107~122は斜形のものである。107~116は片面全面と裏面の周辺に一部加工を施すもの、117~121は片面全面に加工を施すもの、122は片面の一部に加工を施したものである。87・90・94・98・107~110・113の刃部には光沢が認められる。このうち87~93・107~116はI群b-4類に伴うものである。

スクレイパー類(123~171)

黒曜石製のエンド・スクレイパーと頁岩、又は珪質頁岩製の周辺加工のスクレイパーが多い。

123は、両面加工のもので玄武岩製である。124~126は片面全面と裏面の側縁に加工を施すものである。所謂“石筥”である。127・128はラウンド・スクレイパー、129~146はエンド・スクレイパー、147~157は抉入の施される異形石器(抉入石器)、158は片面全面に加工が施されるもの、159~171は周辺加工のものである。130・131は黒曜石製のつまみ付ナイフの破損したものを使用している。132~143は、黒曜石の分厚い剝片に剝離を施して急角度の刃部を作出したものである。135~143には、原石面が残っている。これらの刃部は著しい刃潰れが認められ、裏面には鋭い光沢が見られる。144は黒曜石製で、打面再生剝片状のものをエンド・スクレイパーとして使用したものである。形態と発達した水和層から、旧石器時代の遺物の可能性が考えられたため、水和層年代測定 of 鑑定を依頼した。(V-(4))

参照)。145 は珪質頁岩、146 は頁岩製の剝片に急角度の刃部を作出したものである。147～157 は、縦長の剝片の左右両側縁に対になる抉り込みが施されるものである。抉り込まれた部分には潰れがみられる。158 は、つまみ付ナイフの破損したものをスクレイパーとしたもので、側縁と裏面に著しい摩滅が認められる。162・163 は、珪質頁岩製の剝片のどちらか一方の側縁が、弧を描く形態を呈すものである。168・169 は、剝片の一部に剝離を施したものである。170 は結晶質の岩石の剝片周辺に剝離を施したもので、刃部には著しい摩滅が認められる。171 は礫面の残る安山岩製の剝片で、周辺に剝離を施している。170・171 は、刃部の形態からエンド・スクレイパーの可能性はある。

楔形石器 (172～175)

黒曜石製の縦長を呈する傾向のものが多い。172～175 は相対する上下の縁辺もしくは一方に階段状の剝離痕が認められる。

石核 (176～179)

176 は左側縁に細かい階段状の剝離がなされていることから、縦長の楔形石器の可能性はある。

石斧 (180～186)

180・181 は、蛇文岩製のもので、縄文時代早期に伴うと考えられる。183 は、全面に施された粗い剝離で整形した後に、刃部周辺を研磨している。刃部には使用による細かい剝離が認められる。185 は、蛇文岩製の小型の石斧である。上部に破損の跡があり、そこに再度、研磨を施している。186 は泥岩製の石斧未成品である。角の取れた泥岩の表面に研磨を施し、粗い剝離による整形を試みている。図示したもの以外はすべて細片で、部位別には刃部の破片が多い。石材は、蛇文岩が多く、緑色泥岩や流文岩等もある。

たたき石 (187～189)

14 点が出土している。円礫に敲打痕が見られるものが多い。187 は緑色泥岩製で、剝離と敲打で棒状に整形したものである。上下にはたたいた痕が見られる。189 は、砂岩製の偏平礫を使用したもので、上下にたたいた痕が見られる。

すり石 (190・191・195)

13 点が出土した。190・191 は断面が三角を呈するすり石である。195 は、砂岩製の偏平礫の周囲を、打ち欠いて半円形に整形したものである。下端部にはすり面が認められる。表面は砥石として使用されており、浅い溝がみとめられる。

砥石・台石類 (192～194・196～199)

砂岩製のものが 44 点が出土している。196 はすり面中央に、叩いて作られた窪みがある。199 は斜面中腹で出土した大型のもので、表面には 2 本のすり面が認められる。

石製品 (200～203)

200 は偏平の楕円礫を用いたもので、長軸の両端を打ち欠いている。石錘、又は両端を打ち欠いた偏平のすり石と思われる。201 は、チャートの円礫の破片に加工を施した用途不明の石器である。丸い割れ面周辺に加工を施している。割れ面の凸部と図の矢印の部分は摩滅しており、光沢が生じている。202 は、砂岩片に 2～3 mm の人為的と思われる穴をあけたものである。203 は緑色泥岩の剝片を磨いたものである。

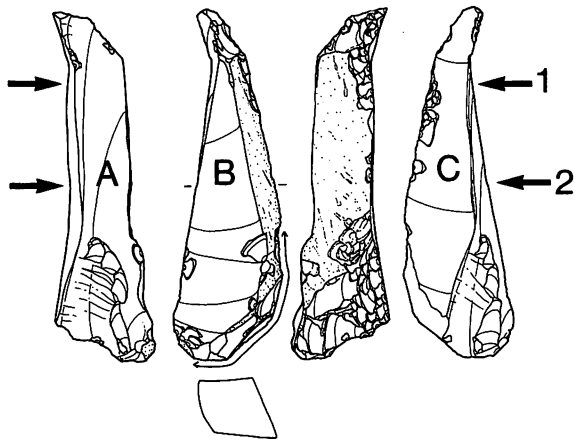
(4) 黒曜石製スクレイパーの自然科学的手法による分析 (図V-57・58)

美々8遺跡の第II黒色土層中から出土した黒曜石製のエンド・スクレイパー(図V-52-144、図V-57)について、帯広畜産大学の近藤祐弘氏に水和層年代の測定と原産地推定を依頼した。

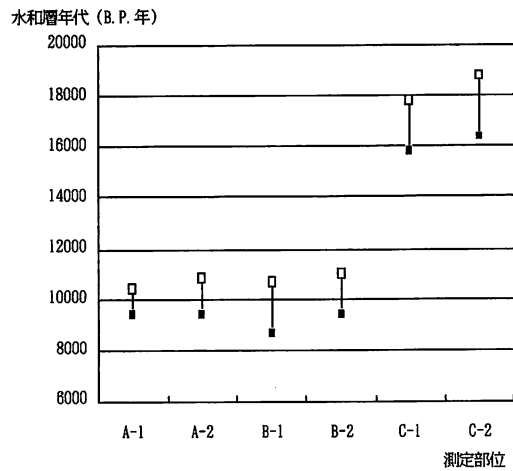
分析の対象になった試料は発掘区 d 66-23 の第II黒色土層中から出土したもので、周囲からは縄文時代早期末東釧路IV式土器(I b-4)と黒曜石製のスクレイパーが出土している。しかし、使われている黒曜石の剥片が細石刃技法に伴う打面再生剥片の形態に似ていることから、他から持ち込まれて加工されたことが推測されたため、先の分析を行なうこととした。

水和層年代は、図に示したように1点の試料のA~Cの3面を対象に、1と2の二ヶ所でカットし計6部位について水和層厚の測定を行なった(図V-57)。各測結果は表の通りである(表V-19)。3面の水和層年代値は、A、B面がほぼ同時期で、C面はこれよりも古い時期を示している(図V-58)。いずれの年代も、II黒層に含まれる遺物の年代(縄文時代早期~晩期)と格差があり、層位的にみて矛盾する。また、原産地推定は蛍光X線法で検討を行ない、置戸産黒曜石の化学組成、無機成分比に近似すると結果を得た(表V-20・21)。

以上のことから、本試料は旧石器時代に加工された置戸産と推定される黒曜石剥片を、縄文時代早期末の美々8遺跡で使用したものと推測される。



図V-57 水和層年代測定試料



図V-58 水和層年代グラフ

表V-19 黒曜石スクレイパーの水和層年代

No.	発掘区	遺物 No.	層位	黒曜石 原産地	測定 部位	測定数	水和層厚 $X \pm \sigma (\mu m)$	水和層年代 (B. P. 年)
14-1					A-1	6	3.97 ± 0.11	9,900 ± 500
					A-2	7	4.01 ± 0.14	10,100 ± 700
14-2	d66-23-9	8	II黒層	置戸	B-1	7	3.93 ± 0.21	9,700 ± 1,000
					B-2	6	4.03 ± 0.15	10,200 ± 800
14-3					C-1	9	5.19 ± 0.16	16,800 ± 1,000
					C-2	7	5.30 ± 0.18	17,600 ± 1,200

注) 水和層年代値は、完新世の札幌-苫小牧低地帯における効果温度を9.0℃、置戸産黒曜石の水和速度を1.60 (μm²/1,000年)として算出した。
No.8のスクレイパーは、薄片を2枚製作し、A、B、C各破面につき計6部位に発達した水和層厚を測定した。

表V-20 黒曜石の化学組成(%)

遺跡	千歳市 美々8	遺跡	千歳市 美々8
試料 No.	8	試料 No.	8
SiO ₂	77.10	K ₂ O/Al ₂ O ₃	31.3%
TiO ₂	0.16	CaO/K ₂ O	0.22
Al ₂ O ₃	12.78	TiO ₂ /K ₂ O	0.0400
Fe ₂ O ₃	1.09		
MnO	0.04		
MgO	0.11		
CaO	0.89		
Na ₂ O	3.74		
K ₂ O	4.00		
P ₂ O ₅	0.02		
Total	99.93		
原産地	置戸		

表V-21 黒曜石のK₂O/Al₂O₃(%)、CaO/K₂OおよびTiO₂/K₂O

※全鉄をFe₂O₃で示す。化学分析は蛍光X線法による。

(5) まとめ (図V-59・60)

今年度調査した美々8遺跡では縄文時代早期末東釧路IV式土器 (I b-4) 期の遺構や遺物が主体で、調査区内は縄文時代早期末を中心に展開されたと考えられる。これらの遺構や遺物はI群b-4類の時間幅のなかで分布や出土状況が異なり、ここではI群b-4類の推移とそれに伴う遺構や遺物の違いについて述べる。

今回出土したI群b-4類はその特徴から古い順にA~Cの三つの段階に分けられ、分布域はそれぞれ異なる (図V-59)。

A: I群b-4類の比較的古い段階と考えるもので、II H-5・6が検出されている調査区東側の急斜面から小さな破片が散点的に分布している。土器は口唇断面が尖り気味か角形で、器壁は薄い。器面には、細い条の原体による捺糸文もしくは捺糸文風の縄文が施される (図V-46-5~16)。AはII H-5・6に伴う遺物の分布と考えられる。

B: I群b-4類の比較的新しい段階のものと考えられるもので、調査区東側の舌状台地周辺に多量に出土する。土器は、口縁に幅広の文様帯を持ち底部の径が小さいもの (図V-45-1・2、図V-46・47-20~36) で、復元可能なものもある。同じ区域で同時期と考えられるII H-1~4、II P-1~6・10、II F-1~5が検出されている。この分布域の包含層では、石器がほとんど出土しない。BはII H-1~4に伴う遺物の分布と考えられる。周囲にはII P-1~6・10が作られ、このうちII P-1・10は墓墳の可能性がある。住居跡の反対側の斜面には土器と共に焼土 (II F-1~4) が捨てられている。

C: II群a類に移行する直前の最終末の段階のもので、舌状台地の根もとを中心とする台地縁辺に多量に出土している。土器は器壁が厚く、器面に太い条の原体による羽状をなす捺糸文風の縄文、2条並列する捺糸文などが施されるもので、文様で菱形を構成するものや内面にも施文するもの、胎土中に繊維を含むものもみられる (図V-45-3、図V-47・48-38~66)。これらは石器を伴っており、その分布が土器のものと良く重なることから、土器と共に捨てられていると思われる。Cは美沢川流域の縄文時代早期に認められる、台地縁辺から斜面上部にかけて遺構を伴わず多量の遺物だけが集中するタイプの遺物の分布と考えられる。

次ぎに石器について述べる。石鏃は無茎のものが最も多く、五角形、柳葉形と続く。破損率は柳葉形鏃、五角形鏃が高い。五角形鏃と三角鏃の分布はI群b-4類の最終末のもの (C) とほぼ重なっており、五角形鏃と無茎鏃はこの時期に伴う可能性が高い。また、肉厚の黒曜石の剝片を使用したエンド・スクレイパーと頁岩類 (珪質頁岩、チャートを含む) の剝片に加工を施したスクレイパーの分布もほぼ重なることから、これも伴うと考えられる。異形石器 (抉入石器) が調査区西側の急斜面でまとまって出土しており、I群b-4類に伴うと考える。石斧や石斧片は、調査区の中央部から西側の急斜面に、分布しており、他の石器類と分布が異なる。石斧を使用した空間の可能性もある。

剝片石器の石材は黒曜石と頁岩類 (珪質頁岩、チャートを含む) が使用されており、石鏃、石槍またはナイフ、ラウンド・スクレイパー、エンド・スクレイパー、異形石器 (抉入石器)、楔形石器は前者で、つまみ付ナイフ、石篋、スクレイパーが後者で、これらは使い分けがなされていると考えられる。

(皆川 洋一)

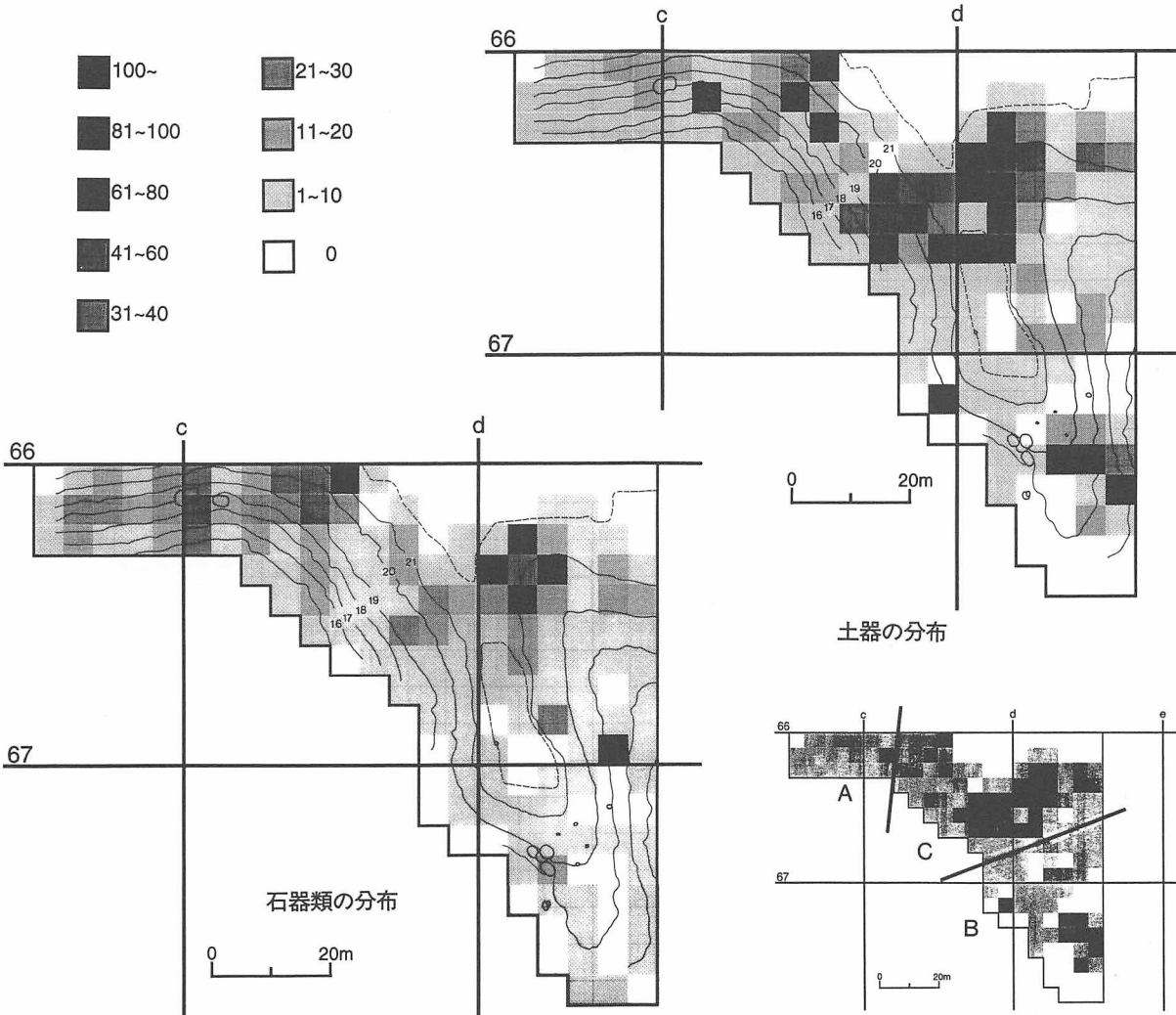
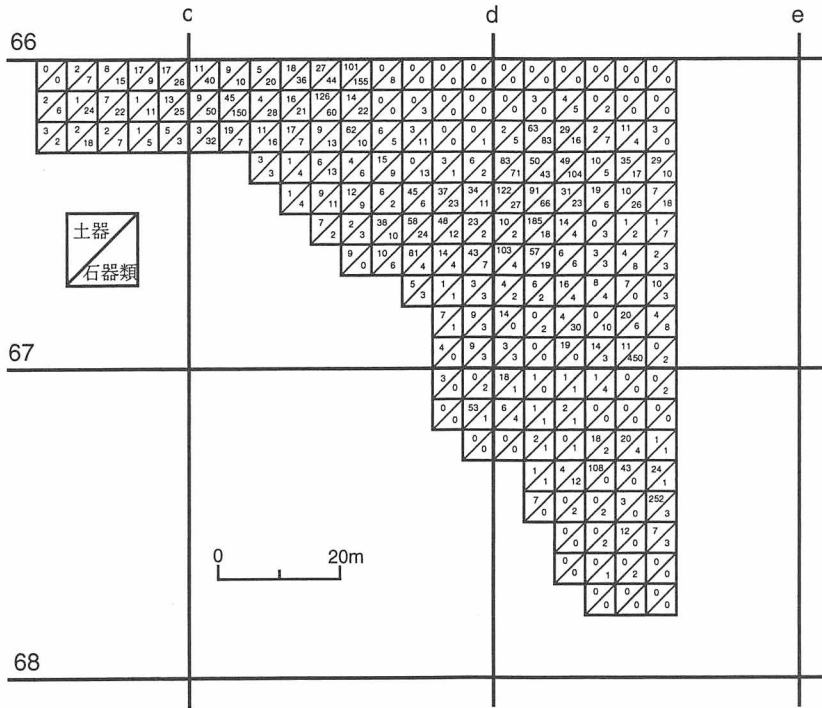
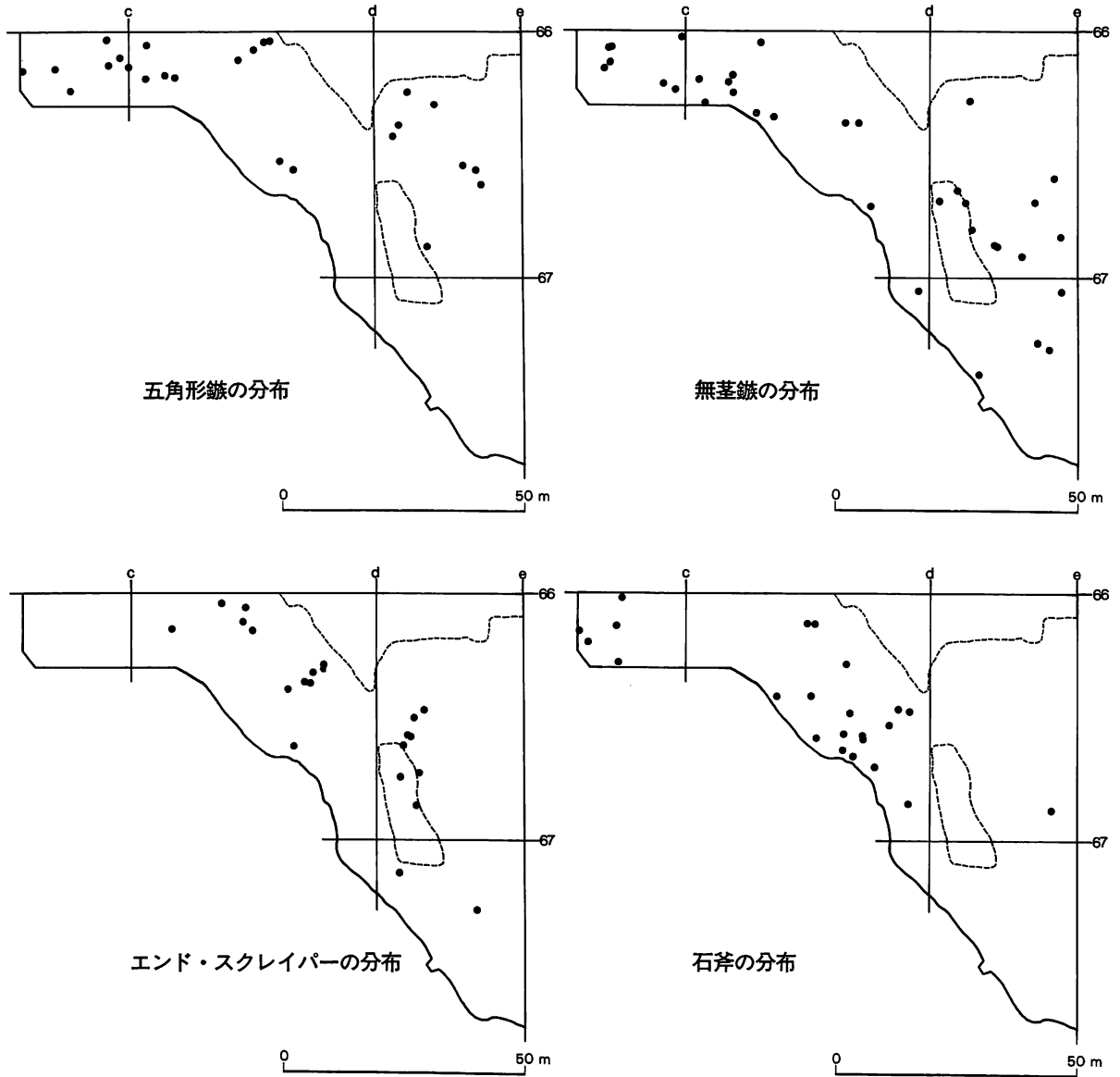


図 V-59 遺物分布図 (1)



図V-60 遺物分布図(2)

表V-22 II黒層出土遺物一覧

名称	数量	名称	数量
土器 Ib-2	1	楔形石器	8
Ib-3	49	フリイク・チップ (obs)	1,056
Ib-4	2,881	フリイク・チップ (頁岩類)	172
Ivc	5	石斧類	31
計	2,936	たたき石	14
石器 石鏃類	129	すり石	13
石槍またはナイフ	10	砥石・台石類	44
石錐	7	石核	6
つまみ付ナイフ	63	石製品	2
スクレイパー	38	礫類	114
エンドスクレイパー	23	計	1,775
URフリイク	34	総計	4,711
異形石器	11		

表V-23 遺構出土遺物一覧(1)

名称	分類	数量	
		覆土	城底
土器	Ib-4	91	5
計		91	5
石器	つまみ付ナイフ	1	0
	フリイク obs	0	5
	たたき石	1	0
	礫	1	0
計		3	5
総計		94	10

表V-24 遺構出土遺物一覧(2)

遺構番号	名称	分類	数量		遺構番号	名称	分類	数量	
			覆土	墳底				覆土	墳底
IIH-1	土器		0	0	IITP-2	石器	磔	1	0
	計		0	0		計		1	0
	石器	フレイク obs	0	5		土器		0	0
IIH-6	計		0	5	計		0	0	
	土器	Ib-4	1	5	石器	つまみ付ナイフ	1	0	
	計		1	5	計		1	0	
IIP-10	土器	Ib-4	86	0	IITP-9	土器	Ib-4	1	0
	計		86	0		計		1	0
	石器		0	0		石器		0	0
IITP-1	計		0	0	計		0	0	
	土器		0	0	IITP-10	土器	Ib-4	3	0
	計		0	0		計		3	0
石器		0	0	石器		たたき石	1	0	
計		0	0	計		1	0		

表V-25 II黒層出土掲載土器一覧

掲載番号	出土区	掲載番号	出土区	掲載番号	出土区	掲載番号	出土区	掲載番号	出土区
図V-45-1	e67-44	19	d66-62	図V-47-29	e66-86	45	e67-44		d66-25
2	e67-44	20	d66-09	30	e67-63	46	e66-84	63	d66-14
3	d66-42		e66-58	31	e67-63		e66-94	64	d66-40
図V-46-1	e66-94		e66-79	32	c66-00	47	d66-51	65	d66-40
2	e66-79	21	d66-09	33	e67-45	48	d66-51		d66-41
3	d66-51		e66-79	34	d66-40	49	d66-81	66	d66-05
4	e66-85	22	e67-90	35	d66-63	50	d66-81		d66-06
5	c66-01	23	d66-19	36	e66-94	51	d66-81		e66-85
6	c66-22		e67-81	37	e66-84	52	d66-81		e66-86
7	c66-20	24	e66-48	38	e67-44	図V-47-53	e66-42	67	d66-06
8	c66-20		e66-58	39	e66-66		e66-84	68	e66-84
	c66-22		e66-64		e66-84	54	e66-86	69	d66-15
9	c66-20	25	e66-64		e66-94	55	e66-85	70	d66-15
10	c66-02	26	d66-71	40	e66-84		e66-86	71	不明
11	c66-31		e66-74		e66-93	56	e66-86	72	d66-55
12	e66-94		e66-83		e66-94		e66-96	73	d66-54
13	d66-42		e66-93	41	e67-44	57	d66-26	74	d66-73
14	d66-42	27	d66-50	42	d67-01	58	d66-26	75	d66-62
15	c66-01		d66-51		e67-90	59	d66-26	76	e66-85
16	d66-15	28	d66-25		e67-91	60	d66-26	77	e66-54
17	d66-81		e66-92	43	e66-72	61	d66-14	78	e66-63
18	d66-73		e66-93	44	e67-63	62	d66-24		

表V-26 II黒層出土掲載石器一覧

掲載番号	遺物名	発掘区	石材	重さ(g)	掲載番号	遺物名	発掘区	石材	重さ(g)
図V-49-1	石 刃	e66-60	黒曜石	(1.6)	26	石 鏃	c66-01	黒曜石	0.2
2	石 鏃	e66-68	黒曜石	1.7	27	石 鏃	c66-01	黒曜石	0.2
3	石 鏃	e67-42	黒曜石	(0.7)	28	石 鏃	e66-56	黒曜石	0.3
4	石 鏃	e66-68	黒曜石	(0.7)	29	石 鏃	c66-00	黒曜石	(0.2)
5	石 鏃	e66-67	黒曜石	0.7	30	石 鏃	d66-81	黒曜石	(0.1)
6	石 鏃	e67-45	黒曜石	2.8	31	石 鏃	e66-94	黒曜石	0.4
7	石 鏃	c66-32	黒曜石	1.6	32	石 鏃	e66-65	黒曜石	0.9
8	石 鏃	e66-86	珪石	1.9	33	石 鏃	e66-55	黒曜石	0.3
9	石 鏃	d66-36	黒曜石	(1.0)	34	石 鏃	d66-90	黒曜石	(0.3)
10	石 鏃	e66-86	頁岩	(1.5)	35	石 鏃	c66-10	黒曜石	0.2
11	石 鏃	d66-22	黒曜石	(0.5)	36	石 鏃	d66-91	黒曜石	1.4
12	石 鏃	d66-30	黒曜石	0.9	37	石 鏃	d66-92	黒曜石	1.0
13	石 鏃	d66-35	黒曜石	0.3	38	石 鏃	d67-00	珪質頁岩	1.0
14	石 鏃	d66-51	黒曜石	0.2	39	石 鏃	e66-45	黒曜石	0.7
15	石 鏃	d66-40	黒曜石	(0.2)	40	石 鏃	e67-91	黒曜石	0.7
16	石 鏃	c66-01	黒曜石	0.3	41	石 鏃	c66-31	黒曜石	(0.6)
17	石 鏃	e66-72	黒曜石	0.4	42	石 鏃	d66-27	黒曜石	0.5
18	石 鏃	e66-22	黒曜石	(0.4)	43	石 鏃	e66-69	黒曜石	0.5
19	石 鏃	d66-81	黒曜石	0.2	44	石 鏃	d66-81	黒曜石	0.4
20	石 鏃	c66-41	黒曜石	(0.2)	45	石 鏃	e67-40	黒曜石	0.4
21	石 鏃	e66-82	黒曜石	0.2	46	石 鏃	c66-02	黒曜石	0.6
22	石 鏃	e66-41	黒曜石	0.5	47	石 鏃	d66-82	黒曜石	0.6
23	石 鏃	d66-91	黒曜石	(0.5)	48	石 鏃	d66-33	黒曜石	1.7
24	石 鏃	d66-35	黒曜石	(0.2)	49	石 鏃	c66-31	黒曜石	(1.5)
25	石 鏃	c66-31	黒曜石	(0.4)	50	石 鏃	d66-63	黒曜石	(0.7)

掲載番号	遺物名	発掘区	石材	重さ(g)	掲載番号	遺物名	発掘区	石材	重さ(g)	
51	石	鉄	e66-48	黒曜石	1.6	128	スクレイパー	d66-23	黒曜石	11.7
52	石	鉄	c66-30	黒曜石	1.0	129	スクレイパー	d66-23	黒曜石	8.4
53	石	鉄	d66-73	黒曜石	0.9	130	スクレイパー	d66-22	黒曜石	18.5
54	石	鉄	e66-88	黒曜石	(1.8)	131	スクレイパー	d66-23	黒曜石	10.7
55	石	鉄	d66-82	黒曜石	(0.7)	132	スクレイパー	d66-22	黒曜石	10.7
56	石	鉄	e66-56	黒曜石	0.7	133	スクレイパー	d66-23	黒曜石	6.8
57	石	鉄	d66-23	黒曜石	(0.9)	134	スクレイパー	e66-86	黒曜石	11.0
58	石	鉄	e67-73	黒曜石	0.7	135	スクレイパー	e66-87	黒曜石	15.1
59	石	鉄	e66-86	黒曜石	0.8	136	スクレイパー	d66-36	黒曜石	9.7
60	石	鉄	e67-52	黒曜石	(0.6)	137	スクレイパー	d66-50	黒曜石	18.5
61	石	鉄	d66-60	黒曜石	(0.6)	138	スクレイパー	e66-97	黒曜石	12.1
62	石	鉄	e67-82	珪質頁岩	1.8	139	スクレイパー	e66-85	黒曜石	13.6
63	石	鉄	c66-11	珪質頁岩	2.3	140	スクレイパー	e66-85	黒曜石	16.8
64	石	鉄	e67-40	黒曜石	1.2	141	スクレイパー	e67-52	黒曜石	19.6
65	石	鉄	d66-61	黒曜石	0.9	142	スクレイパー	d66-51	黒曜石	20.6
66	石	鉄	c66-32	黒曜石	(0.6)	143	スクレイパー	e66-86	黒曜石	—
67	石	鉄	d66-92	黒曜石	0.8	144	スクレイパー	d66-23	黒曜石	14.8
68	石	鉄	d66-80	黒曜石	0.5	145	スクレイパー	d66-60	珪質頁岩	—
69	石	鉄	d66-09	黒曜石	0.8	図V-53-146	スクレイパー	d66-51	珪質頁岩	34.5
70	石	鉄	c66-00	黒曜石	0.6	147	異形石器	c66-02	黒曜石	25.6
71	石	鉄	c66-31	黒曜石	(0.6)	148	異形石器	d66-91	黒曜石	17.5
72	石	鉄	e66-84	黒曜石	0.4	149	異形石器	d66-80	黒曜石	7.9
73	石	鉄	c66-20	黒曜石	0.3	150	異形石器	c66-01	黒曜石	12.0
74	石槍またはナイフ	鉄	e66-75	黒曜石	10.7	151	異形石器	d66-91	黒曜石	4.6
75	石槍またはナイフ	鉄	d66-92	黒曜石	(4.9)	152	異形石器	d66-90	黒曜石	3.2
図V-50-76	石槍またはナイフ	鉄	e66-47	黒曜石	(4.4)	153	異形石器	d66-91	黒曜石	4.1
77	石槍またはナイフ	鉄	e66-44	黒曜石	(5.9)	154	異形石器	c66-00	黒曜石	2.3
78	石槍またはナイフ	鉄	e66-47	黒曜石	(6.2)	155	異形石器	e67-64	黒曜石	4.4
79	石	錐	c66-10	頁岩	15.3	156	異形石器	d66-91	黒曜石	2.8
80	石	錐	c66-31	黒曜石	3.9	157	異形石器	e66-82	黒曜石	2.5
81	石	錐	d66-51	黒曜石	7.4	158	スクレイパー	d66-53	珪質頁岩	1.2
82	スクレイパー		e66-97	珪質頁岩	39.8	159	スクレイパー	d66-81	黒曜石	7.3
83	スクレイパー		e66-93	黒曜石	17.6	160	スクレイパー	e66-53	珪質頁岩	9.5
84	つまみ付ナイフ		d66-40	珪質頁岩	27.4	161	スクレイパー	d66-24	黒曜石	9.7
85	つまみ付ナイフ		e66-93	黒曜石	2.0	162	スクレイパー	e66-76	珪質頁岩	6.2
86	つまみ付ナイフ		d66-70	珪質頁岩	15.7	163	スクレイパー	e66-93	珪質頁岩	50.2
87	つまみ付ナイフ		e66-82	頁岩	22.0	164	スクレイパー	e66-86	頁岩	88.5
88	つまみ付ナイフ		d66-63	頁岩	11.2	165	スクレイパー	d66-60	頁岩	55.4
89	つまみ付ナイフ		d66-41	珪質頁岩	13.4	166	スクレイパー	d66-61	頁岩	29.6
90	つまみ付ナイフ		d66-06	不明	6.2	図V-54-167	スクレイパー	c66-32	珪質頁岩	36.3
91	つまみ付ナイフ		e66-48	珪質頁岩	2.6	168	スクレイパー	e66-53	珪質頁岩	34.8
92	つまみ付ナイフ		d66-50	頁岩	3.0	169	スクレイパー	d66-72	頁岩	36.3
93	つまみ付ナイフ		e66-53	頁岩	2.8	170	スクレイパー	e67-91	不明	28.3
94	つまみ付ナイフ		d66-71	珪質頁岩	12.1	171	スクレイパー	e66-85	泥岩	71.8
95	つまみ付ナイフ		d66-06	頁岩	6.2	172	楔形石器	c66-00	黒曜石	86.2
96	つまみ付ナイフ		c66-01	黒曜石	12.4	173	楔形石器	d66-03	黒曜石	8.0
97	つまみ付ナイフ		d66-23	黒曜石	9.4	174	楔形石器	e66-85	黒曜石	9.3
図V-51-98	つまみ付ナイフ		d66-51	頁岩	6.3	175	楔形石器	d66-40	黒曜石	5.0
99	つまみ付ナイフ		d66-50	頁岩	5.8	176	石器核	e66-73	黒曜石	3.7
100	つまみ付ナイフ		d66-33	黒曜石	6.3	177	石器核	d66-40	黒曜石	12.4
101	つまみ付ナイフ		d66-91	珪質頁岩	2.7	178	石器核	e66-78	黒曜石	8.8
102	つまみ付ナイフ		d66-92	珪質頁岩	14.6	179	石器核	e66-84	黒曜石	14.6
103	つまみ付ナイフ		e66-84	頁岩	24.6	180	石斧	c66-22	蛇紋岩	27.6
104	つまみ付ナイフ		d66-24	黒曜石	9.1	181	石斧	e66-58	蛇紋岩	(297.9)
105	つまみ付ナイフ		d66-23	頁岩	3.3	182	石斧	d66-25	緑色泥岩	(127.8)
106	つまみ付ナイフ		e66-53	頁岩	1.0	183	石斧	d66-34	流紋岩	31.8
107	つまみ付ナイフ		e66-43	珪質頁岩	(10.6)	184	石斧	c66-42	千枚岩	138.0
108	つまみ付ナイフ		c66-02	珪質頁岩	9.1	185	石斧	c66-41	蛇紋岩	49.2
109	つまみ付ナイフ		c66-32	珪質頁岩	6.6	186	石斧	c66-00	緑色泥岩	219.0
110	つまみ付ナイフ		e66-86	珪質頁岩	7.4	図V-55-187	たき石	d66-63	緑泥岩	380.5
111	つまみ付ナイフ		d66-51	珪質頁岩	4.9	188	たたき石	d66-59	輝石安山岩	415.0
112	つまみ付ナイフ		d66-26	珪質頁岩	6.2	189	たたき石	c66-31	砂岩	213.2
113	つまみ付ナイフ		e66-83	珪質頁岩	9.0	190	すり石	c66-02	砂岩	319.6
114	つまみ付ナイフ		e66-65	珪質頁岩	10.7	191	すり石	e66-59	砂岩	718.0
115	つまみ付ナイフ		d66-55	黒曜石	8.7	192	砥石	d66-70	砂岩	35.8
116	つまみ付ナイフ		e66-84	珪質頁岩	2.8	193	砥石	e66-94	砂岩	34.1
117	つまみ付ナイフ		d66-50	頁岩	6.6	194	砥石	d66-01	砂岩	315.4
118	つまみ付ナイフ		d66-51	頁岩	12.2	195	すり石	d66-60	砂岩	116.2
119	つまみ付ナイフ		d66-92	珪質頁岩	9.3	196	台石	d66-90	砂岩	137.2
120	つまみ付ナイフ		d66-25	黒曜石	7.3	197	台石	d66-90	砂岩	93.7
121	つまみ付ナイフ		d66-16	黒曜石	9.0	198	台石	c66-20	砂岩	1,488.0
122	つまみ付ナイフ		e66-54	珪質頁岩	7.9	199	台石	d66-45	砂岩	15,000.0
123	スクレイパー		d66-25	玄武岩	23.4	図V-56-200	石錘	e66-48	砂岩	568.0
図V-52-124	スクレイパー		d66-05	頁岩	43.6	201	礫器	d66-60	チャート	146.0
125	スクレイパー片		e66-53	珪質頁岩	(2.9)	202	石製品	c66-21	砂岩	39.5
126	スクレイパー		d66-91	珪質頁岩	3.2	203	石製品	d66-91	緑色泥岩	1.2
127	スクレイパー		e66-84	黒曜石	18.9					

付 千歳市美々3 遺跡出土人骨

百々 幸雄・大島 直行

札幌医科大学解剖学教室

美々3 遺跡の Pit-127 から1体、Pit-149 から2体の縄文晩期の人骨が発見された。保存状態はいずれも不良であるが、採取することのできた破片骨について、若干の記載を行ってみた。

P-127 人骨 (図版1)

頭蓋、歯、体幹体肢骨の一部が採取可能であった。

頭蓋は、左側頭骨から同側の後頭骨と蝶形骨にかけての部分と左下顎枝が比較的良好な状態で保存される。乳様突起の発達度からみて、本人骨は成人男性のものと考えてさしつかえない。左外耳道に骨腫はなく、左舌下神経管に骨性二分もない。左鼓室骨にフシケ孔はみられず、卵円孔にも異常はない。左側に顎管が存在する。下顎枝は、枝高 56 mm、枝幅 32 mm、幅高示数 57.1 で、北海道の縄文時代人としては狭い方である。顎舌骨筋神経管の形成はない。

歯は上顎左第1、第2大臼歯と下顎左第1大臼歯の歯冠が残存する。上顎第1大臼歯の近遠心径は9.6 mm、頬舌径は11.8 mm。同第2大臼歯の近遠心径は8.2 mm、頬舌径は11.0 mmである。下顎第1大臼歯の近遠心径は10.6 mm、頬舌径は10.5 mm。歯の大きさも北海道縄文人の男性平均値 (Matsumura, 1989) をやや下回っている。咬耗はII度と判定される。

頭蓋以外では、第1頸椎の左半部と左鎖骨の肩峰端が同定されるが、特記すべきことはない。

P-149 西人骨

頭蓋の破片のみが採取可能であった。年齢は成人と考えてさしつかえないが、性別は不明である。

左右の側頭骨の岩様部、後頭骨底部、後頭骨鱗部が同定される。その他は頭蓋冠の細片である。後頭骨で上矢状洞溝が右の横洞溝に連続する所見以外、特記すべきことはない。

P-149 東人骨

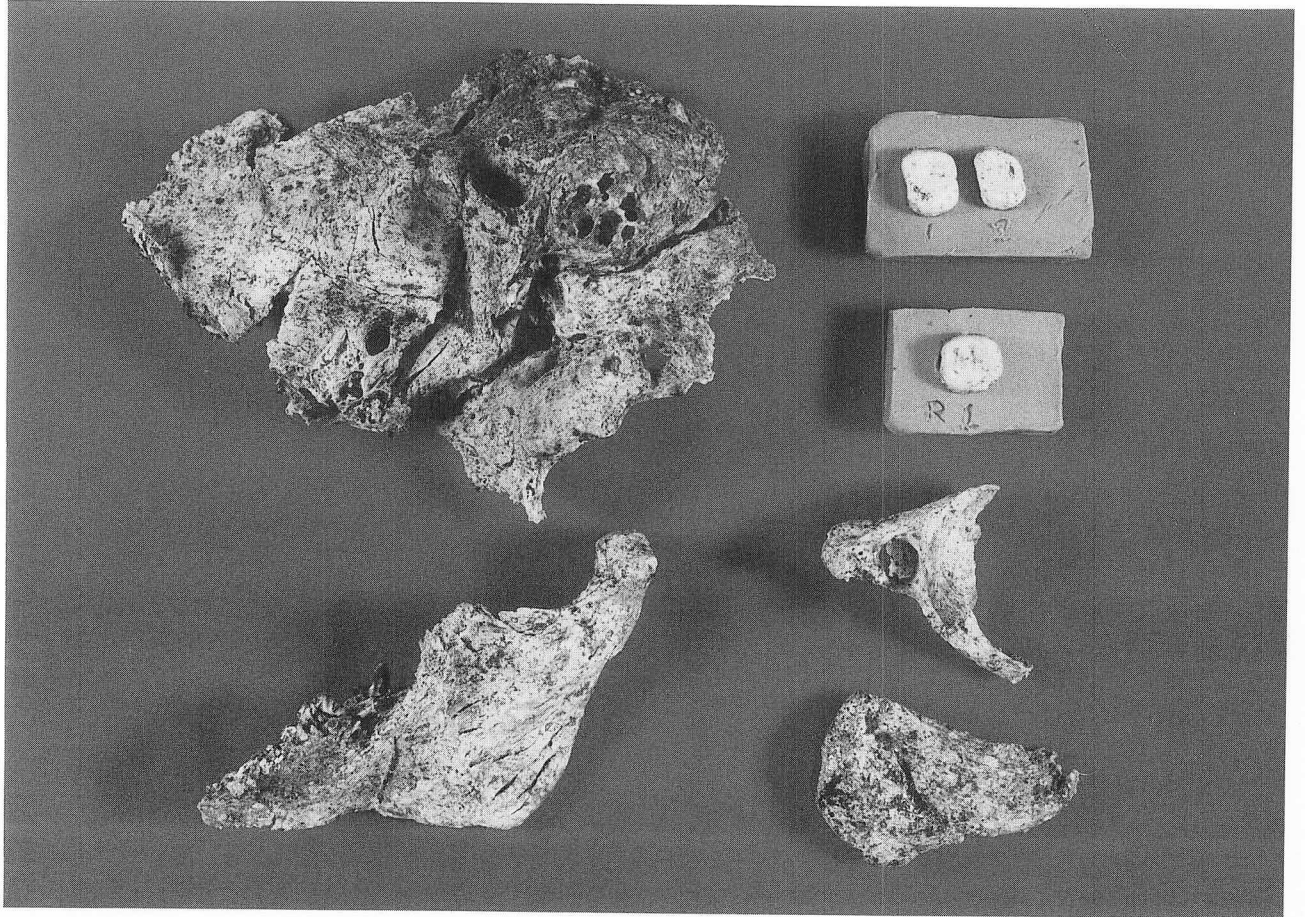
頭蓋冠の破片と左第2中手骨が保存される。左第2中手骨はほぼ完全な状態で保存され、中手骨長は67.6 mmである。これは、現代日本人平均よりはるかに長く、岩手県蝦島貝塚人の男性平均67.33 mm (Yamaguchi, 1990) に近い。

このことから、本人骨は成人男性であった可能性が高い。

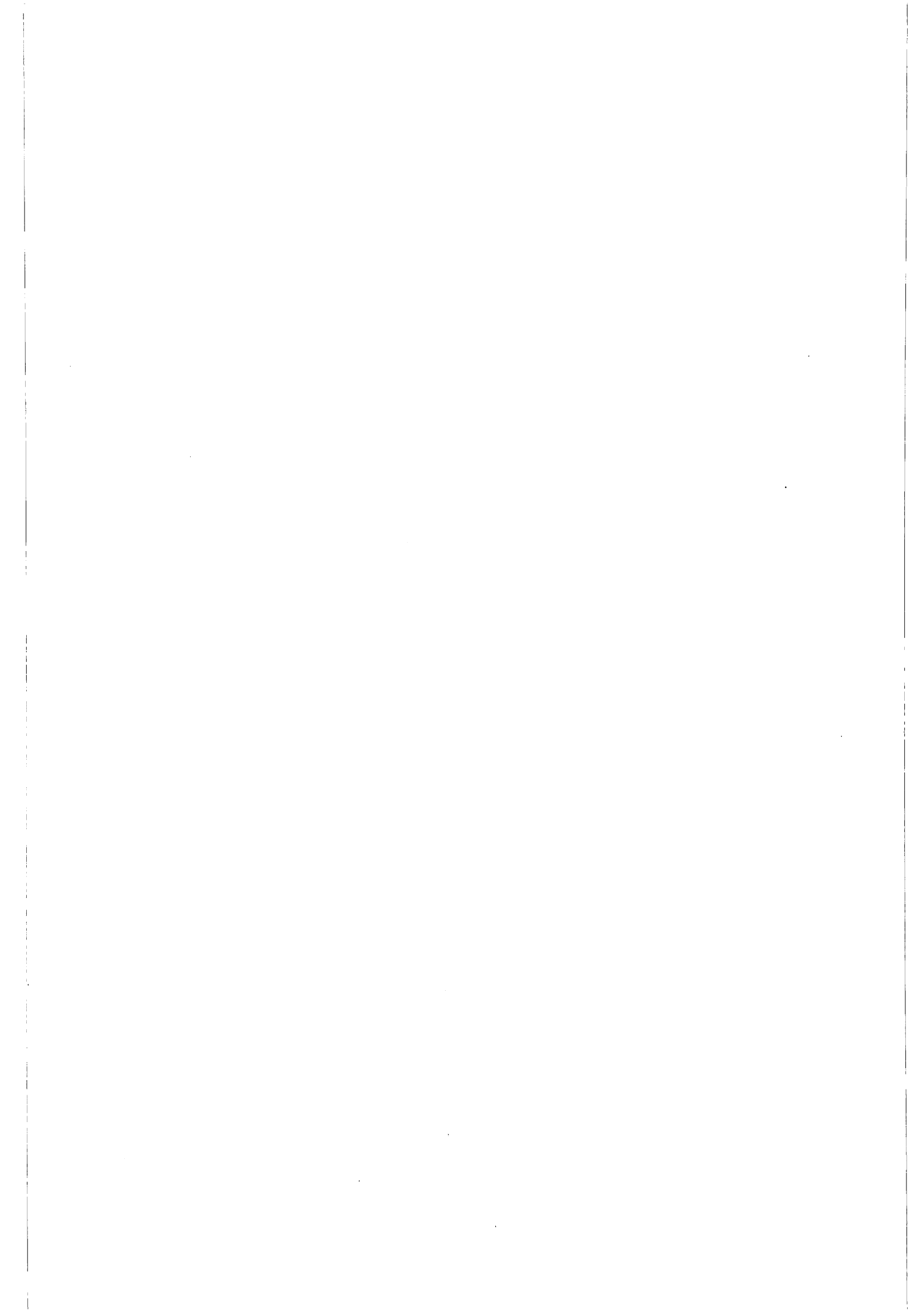
文 献

Matsumura, H., 1989: Geographical variation of dental measurements in the Jomon population. *J. Anthrop. Soc. Nippon*, 97: 493-512.

Yamaguchi, B., 1990: The hand bones of the Jomon remains from the Eblishima (Kaitori) shell mound in Hanaizumi, Iwate Prefecture. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. D*, 16: 31-38.



P-127 人骨



(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第77集

美沢川流域の遺跡群 XV

—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—
第1分冊

平成4年3月27日 発行

編集 財団法人北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
Tel (011)561-3131

印刷 興国印刷株式会社
〒063 札幌市西区西町南13丁目1番40号
Tel (011)665-4155

この報告書は札幌開発建設部のご了解を得て増刷したものです。

